KAIZO

改造

六月號

1928

豫約募集

マーシアル原著
大塚金之助譯
經濟學原理

全四册・一册一圓・全拂參圓九拾錢

（從來）十三圓七十錢のものが四圓足らずで買へます

東京・芝・愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二番

マーシアル教授の學界に對する貢献は實に偉大である。凡そ現今經濟學の通説なるものは悉く教授の所説に基由すると云ふも過言でない。殊に此『經濟學原理』は教授の人生に對する深き考察と近代現代の大經濟學者の學説が大なる諧調の下に盛られてゐる。これ世界各國の經濟學徒が本書を斯學研究の臺本とし、又我官私大學始め各國の大學で講義の臺本として普く採用しつつある所以。譯者はマーシアル研究の權威者、多年の刻苦と推敲により平易流暢正確の三要素を備え飜譯の模範と稱せらる。經濟學徒は勿論一般人生に關心する讀書子にとりて興味深く有益なる書である。

マルクス經濟學と對立して研究せよ

豫約略規

□體裁　四六判、總クロース美本一册約三百五十頁。九ポイント四十四字十五行組
□頒布方法　全四册。豫約者にのみ頒つ
□刊行期日　昭和三年六月第一册刊行。毎月一册。九月を以て完結。
□申込方法　申込金壹圓。（これは最終會費に充つ。全拂の方は不要）
□會費　（一）毎月拂金壹圓　（二）全拂（四册）三圓九十錢
□送料　一册十四錢　書留は十錢増（東京市内は送料六錢書留送料は六錢増）
□申込〆切　五月末日限

〆切五月末日

内容見本送呈

申込・各地書店へ

森永コーラス

乳酸飲料

美は点に起り
喜びは刹那に
終る……
されど健康の
美と喜びは
コーラスの愛
用に依り
永遠に續く……

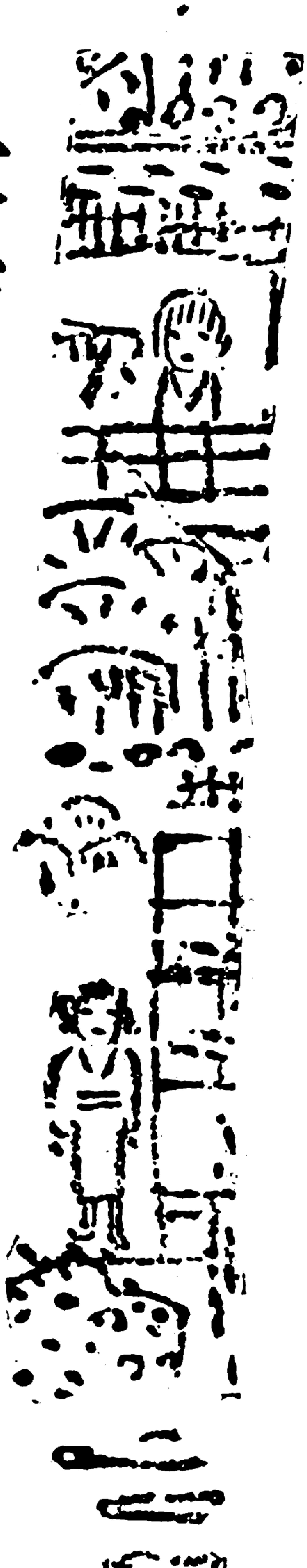




改造六月號目次

一人一業の說

近ごろ我國大衆はあまり興奮的であり、刹那的である。偏狹であり、向う見ずである。自己を批判する尺度の短かく、識閾の淺薄皮相をきはめ、第一流の文化國民として幾多の缺陷を曝露しつつある。たとへば今回の臨時議會に於て朝野大政黨のとれる醜惡なる場面に對し、我大衆のとれる態度はどうであつた。彼の纖詰議員や纖切領袖を選出したる自己の不明をひたすらにわびる氣はひもなく、そして哲人的態度を以つて嚴肅にそれにのぞむことも出來なかつた。まるで路傍の出來事のやうに嘲笑と冷罵とを以つて酬いつつあつたのは自分の面上に自分の吐唾が落ちかかつてきたものと何の選ぶところがある。とにかく我國は彼の大震災によつて多大の打擊を受けたとは云へ、列強の世界大戰における打擊のそれに比すれば物の數ではなかつた。列強の極度の疲弊を展望しつつ我國勢は洋々として幸福に打開されつつあつた。我々はこの內にみなぎる大衆の精氣を合流して鞏固なる、そして底力ある文明の再建に全力を傾くべきである。しかるにこのごろの我國には低劣なる風潮のみなぎりあふれ、暴力團跋扈し、言論の自由と研究の自由は國法によりて――充分とは云へぬまでも――保障されてゐるにかかはらず、社會の刺戟的壓迫はそれ等の自由を蹂躙しつくしてをる。我々は各自の是なりと信ずる進路を突進することによりてのみ眞に意義ある貢獻が人生の上に――社會、國家の上に遂げ得らるると信ずる。田中內閣はこの點に於て、歷代の內閣中尤も反動的政策をとつてゐる。そして暴力公行の如き現狀をさへ呈してゐる。この點の失政を三思して責任ある決斷に出でずんば重大なる禍根に自らをくくる惧れなしとは云へまい。また大臣、大官、勅選の選擇に金權進出の疑をさしはさましめて質實剛健なる我風尙を頽すが如きことあるのは政友會內閣の爲にとらざる所である。さなきだに我富豪がすべての事業を壟斷し、すべての生產機能を支配せんとするの狀勢は我國に於て日々に深まりつつある特殊的現象である。銀行家が企業に手を出し、甚しきは株式相場に手を出すが如き三井、三菱等の代表的富豪が銀行、信託、保險、鑛山、船舶、その他ありとあらゆる方面に進出するのが國家の健全なる發展にどう云ふ結果を將來するか、一人一業であつてこそそこに人格的事業が遂げられ、眞理の殿堂も開くことを得て意義ある貢獻が出來るものの、さうでない事業には何等の貢獻も、いい影響も持つことはできないのである。わけて金權と政權と結托する風潮の濃厚に色彩さるる我國の前途が果してどんなことになるであらうか。そこに階級の對立を激成せしめる最大の因素が根強く培はれて行くことを忘れてはならぬ。



大學々園に於る自由主義の使命を思ふ

河合榮治郎

（一）

その來るや疾風の如くにして、その去るや又疾風の如くであつた。これ共產黨事件に伴ふ左傾教授の罷免であつた。僅に半月の以前に於て學界を動かした事件は、今や何事もなかりしが如くに、世人の注意から逸し去らんとしてゐる。事件の後に於て直に特別議會の賑やかな幕が開かれ、次で對支出兵の報道に、世人は應接に忙殺されてゐる。

かくして大學にとつて重要なる此の問題は、充分に社會の批判を受くることなしに葬られるのであらうか。大學々園にとつて根本的の關心事たるべき今囘の事件は、何等學徒を反省せしむることなしに、何等の罰金を與ふることなしに、雲煙過眼視し去られるのであらうか。

私をして案ぜしめるのは、事が共產黨事件に引續いて起つたが爲に、罷免された教授の何人も共產黨事件に無關係なりしこと明なるに拘はらず、此の事件を論ずるが爲に共產黨事件に觸れるを好まざる傾向の

あることである。かくてその人の思想がマルクス主義に近きものは、世人の疑惑を憚つて之より遠ざからんとし、その人がマルクス主義に反對するものは、勿論のこととして之に觸れざらんとする。然し吾々の自身の抱く思想が共産主義たると否とに拘はらず、その思想内容の如何を問はず、すべての學徒にとつて看過しえざる問題が、今回の事件の内部に伏在してゐる。思想言論はいかなる點まで自由なるべきか、若し自由なりとすればその論據果して如何といふ問題之である。此の事件は唯昭和三年四月の事件として、徒に默過せらるゝには余りに重大である。そは常に學園の學徒が考慮し置くべき問題である。此の種の事件は、今後も幾度か繰返されるであらう。若し今度の事件によつて充分の反省と鍛錬とが與へられてないならば、更に新なる事件の起るに當つて、何等今と異る心の準備を持たぬであらう。たとへ結論としていかやうに決しやうとも、一度は眞劒に突きつめて考ふべき問題に吾々は直面してゐるのである。

（二）

抑々我が國に於て、自由主義といふものほど奇怪なる待遇を受けてゐるものはない。實際現實の世界に於て、或は言論の自由或は結社團結の自由の名に於て、自由獲得の運動が花々しく行はるゝに拘はらず、思想の世界に於て自由を要求する自由主義は、或はブルジョアーの思想なりと罵られ、或は時代錯誤の思想なるかの如くに貶されてゐる。思想界と實際界とに於ける此の奇怪なる矛盾は、いかに說明せらるべきであらうか。思想界に於て自由主義を攻撃するものは、果して自由主義なるものの眞諦を理解してゐるのであらうか。實際界に於て自由獲得の運動をなすものは、自由主義と全く無關心なのであらうか。若し無關心だとするならば、何故自由主義に反對しなければならないのか。此の渦中に於て、自由主義を採るものも、自由主義の立場を充分に理解せず、自由主義を攻撃するものも、充分に自由主義なるものを知らないのではなからうか。一方に自ら知らずして自由主義の上に立つものあり、他方によく知らずして自由主義を拒否するものがある。自由主義に對する無理解が、混亂と惑迷を醸成しつゝある。

自由主義に對する眞正の理解を欠くことは、我が社會改革の業績に樣々の損害を與へてゐる。即ち第一に自由の獲得に夙に奮起すべかりし自由主義者が、其の自己の立場に明白なる意識なきが爲に、自由の要求に燃ゆるが如き情熱が湧いてゐない。人はすべて結局に於て思想によつて動く、思想上の信念に立たざるものは、先づ戰に立つの氣魄に乏しく、次で戰を持續する耐久性を欠くものである。第二にマルクス主義者が自由に對する神聖なる尊重を欠き、此の自由の戰に徹底性

を欠き、或は却て無産者獨裁を唱へて、反對思想の自由を迫害せんとする脅威を與へてゐる。最後に此の事の故に、夙に自由の爲に奮起せねばならない志士は、自由の共同戰線にマルクス主義者の加はれる爲に、却て戰線に參加することを躊躇するものが尠くない。すべて之等の事情は、自由獲得の陣容に尠からざる混迷を生じ、自由の戰線に悲しむべき打撃を加へてゐる。

然らば此の悲劇はいかにして到來したか。思ふに根本的の原因として、吾々同胞の間には本來自由を求むる心が欠けてゐるのではないか。自由とは強制なき狀を云ふ。強制とは人と人との關係である。從つて自由を求むることは、自己に對する他人の強制を意識することに始まる。此のことは其の前提として自己と他人との對立を意識することであり、自己の存在を意識することである。自己が自己を客觀視して其の存在を意識することは、經驗的の自我の外に、普遍的の自我が自覺めた時に於てのみ、始てそれは可能である。言を換へれば自由の要求は、あられねばならぬ自我の意識が喚起された後に於て、始めて吾々の中に擡頭し得るである。然るに日本更に廣く云へば東洋に於ては、假令幾多の點に於て尊き精神的の産物を持つたに拘はらず、個人が其の點にあらねばならぬ自我を意識することは、遂に經驗されずして來たのではあるまいか。要するに自由を求むる念は、ある精神成長の階段に達したることを必要の要件とする。此の時期に達することなくして來たことが、吾々の間に自由の要求の深刻でない最大の原因であらう。

次には海の彼方に於ける思想界の變遷が、多大の影響を與へたことは疑ひない。自由主義の祖國たる英國に於てすら、千八百八十年代に於て既に自由主義に凋落の機は見えたと云はれ、千九百六年の自由黨内閣の綱領を見て、自由主義は英國に於て既に地を拂つたと云はれ、更に歐州大戰中に於ける自由黨の分裂は、愈々自由主義終焉の期至つたと感ぜしめた。英國に於て自由黨の沒落することは、自由主義の運命と必ずしも關係はない。又更に英國に於て自由主義は沒落しても、それは必ずしも自由主義夫れ自體の運命に關係あるとは云へない。然し英國に於てすら自由主義が凋落したと云ふ感じが、日本のみならず世界の各國に、社會思想の新轉向來ることを思はせるに預つた。のみならず自由主義の後に立てる社會主義殊にマルクス主義は、口を極めて自由主義を攻撃し、自由に對して輕侮と嘲笑とを集中した。さらぬだに自由の芽生えのない新日本に、漸く自由を求むる念が新人の間に擡頭すべかりし時に於て、直に怒濤の如くに殺倒したマルクス主義によつて、遂に自由の女神は永久に日本の新人を訪るゝことなくして去つた。

然し思想の輸入は自由であるが、社會制度の輸入はしかく簡單ではない。思想の變轉は自由であるが、一旦固定した制度の變轉は、しかし容易ではない。此に於て思想界に於て夙に時代遲れと宣告された自由は、實際界に於ては漸く始めて遲々として要求されて來た。然るに思想界は實際界を遙に後方に遺して進んでゐる爲に、實際に活動する自由の戰士は其のよつて立つべき思想上の信念を與へられてゐない。それでは思想界の進むが如くに、實際界は自由を拋棄して進み得るかと云ふに、それは求め得べからざることであり、又爲してはならぬことである。此に於て前に述べたやうに、實際に自由獲得の爲に戰ふものは戰の思想的根據を缺き、自由に關する思想的根據を持つものは實戰に加はらない。かくて自由の戰線は甚き混亂を呈してゐる。炯眼なるカール・マルクスは、靑年時代の作「ヘーゲル法律哲學の批判」に於て思想と實際との矛盾不調和が、後進國民のともすれば味ふべき悲劇であることを喝破した。マルクス所謂思想と實際との矛盾が、今正に日本に於ける「自由」の問題を中心に、吾等の眼前に展開してゐるのである。

（三）

自由とは强制なき狀態を云ひ、自由を可能の最大限度に要求する社會思想は、即ち自由主義である。自由主義は過去の發展史上に於て、二つの大きな課題を負はされて來た。一は自由主義の基調を何に置くべきかと云ふことであり、他は何に付て自由を主張し何に付て自由を讓歩すべきかの討究であつた。自由主義は曾ては其の思想上の基調を、或は自然法に置き、或は功利主義に置き、又或は理想主義に置いた。ジョン・ロック、ジエレミー・ベンサム及びトーマス・ヒル・グリーンは夫々の代辯人である。今私は此に此の問題を論ぜんとするのではない。既に別の機會に於て之を試みた。次に自由主義は決して强制を絕對に撤廢しやうと云ふのではない、此の點に於て自由主義は無政府主義に比べて、純理に於て徹底を缺くと云へやう。同時に事實の上に立つてゐると誇り得るであらう。既に强制を絕對に廢止しやうと云ふのでない以上は、どの程度に於て又どの事項に付て强制を認むべきかゞ、始よりして自由主義に負はされた課題であり、此に自由主義者の至難の任務があつた。

私の知る限りに於て、此の課題を充分に意識して、ともかくも一つの對案を提供したのは、ジョン・スチユアート・ミルであると思ふ。彼は其の著「自由論」に於て、思想言論と行爲とに分ち、前者に對しては自由を要求し、後者に對しては、行爲を更に二分して、單に自己のみに關する行爲と、他人にも關係する行爲とし、前者に對しては自由を主

張し、後者に對してはある場合には干渉を甘受すべしと說いた。ミルの行爲の分類が果して正當であるか否か、又彼れ自身が果して此の原理を以て一貫してゐたかどうかに付ては、私にも別に異論がある。然し尠くとも自由主義に對して、場合を分つてある事項に付ては自由主義を採り、他の事項に付ては之を捨てやうと云ふ態度を採つた最初の人である。

今は私の自由主義に對する全體の批判を此に企てるの時ではない。唯自由主義の現今の問題は其の妥當なるべき領域を明白に批判することであるとだけ云ひたい。私に依れば思想と言論の世界に於ては、強制は絶對に影を潛むべきである。此の領域に於ては自由の要求は今も尙正當であり、此の限りに於て自由主義は今も尙眞理たるのみならず、それは常に新なるべき永久の眞理である。吾々の內面生活と、我々相互の內面生活の交渉に付ては、強制は一歩だも足を踏み入れてはならない。此の範圍に強制を加ふることは結局に於て不可能であり、當面に於ては有害である。然し思想言論より以外の領域に於て自由主義は必ずしも妥當ではない。行爲の世界に於て、卽ち實在の現象に直に變化を生ずる世界に於ては、自由を要求することは絶對であつてはならない。此の領域に於て自由主義は今も尙昔日の命脈を保たんとするは正當ではない。此の域に於ては或は自由或は干渉或は共有が夫々に主張され得る。卽ち思想言論の世界に於て自由主義を採り、行爲の世界に於て或は社會主義を採ることは可能である。前者に於て自由主義を採らば、あらゆる場合に於て自由主義を主張せざるべからずと考へた所に、過去の自由主義の誤があり、後者に於て自由主義を排斥したるものは、前者に於ても亦自由主義を排せざるべからずとなしたるは、社會主義の誤であつた。夫々の領域に於て夫々の原理が妥當する。自由主義と社會主義とは、各々安住の地を見出して、此に謙遜に其の領域を守るべきである。

（四）

既に思想言論の世界に於て、自由主義が今も尙妥當なりとするならば、自由主義が最も妥當せらるべき場所は、眞理を究むる大學の學園である。思想と言論とを以て立つ大學は、正當に自由を要求し得る所であり、自由主義は大學に於て最も歡迎せらるべきである。今學園に於て思想上の相互交渉は、三つの場合に於て起り得る。一は學園に於ける教授學生相互の間に於てであり、二は學園の當局者と學園との間に於て起り、三は學園以外の權力機關と學園との間に於て起るであらう。

凡そ吾々の間には、必ず多數者の受け容れる一定の思想がある。

此の思想は多數者が疑はず怪しむことなしに、勿論のこととして當然の前提として、受け容れる思想である。例へば現代の日本に於て、國家主義又は資本主義の如きは、此の種の實例であらう。すべての人が悉く之等の思想を疑ひ究め、遂に其の眞なるを確めて、自己の信條としたのではない。既に生れた時に育てられたる時に、時代に漲れる空氣がそれであつた爲に、漫然として之を受け容れたのである。之等の思想も勿論曾つてはさうでなかつた。幾多の荊棘を開いて多數者の支配的思想となる前には、それは信ずるものの人格を動かせる力であつた。然し今は唯人の信ずるが故に之を信じ人に教へられたまゝに之を信ずると云ふに過ぎない位の一片の形骸である。

此の多數者の當然として怪しまざる思想に反對の思想が、突如として學園に現はれたとする。學友は此の少數の異端の思想に對して、始めは冷淡視し次に白眼視し、やがては多數者の力によつて强制を加へるであらう。學園の當局は好ましからざる思想の擡頭に對して警戒し、やがて其の團結を禁止し言論を拘束するかも知れない。更に又學園以外の權力機關例へば政府は、自らの思想に反する思想が教育機關に於て、教育の名に於て普及することを喜ばず、或は研究團體の解放を命じ、或は教授の進退に干渉し、以て反對思想の萌芽を根絶せんと努力する。前の學園當局の態度も、其の自發的なるは尠く、多くは政府當局の直接間接の强要によつて、動く場合が多いであらう。之等の場合に於て、異端の思想に對する迫害は、唯その多數者の支配的思想に反するの故を以て爲され、其奈邊に誤謬が伏在し、何故に之に强壓を加ふるかの理由が毫も明にされない場合が多い。唯平和な統制との名に於て爲され、而も其の從はざる場合には、或は疎外放逐或は刑罰の脅威を以てする。かくて異端の思想は少しも理論を以て理性に訴へて、說得し改宗せしめられない。唯その何故たるかを知らずして、强制を加へ改宗を余儀なくされるのである。

私はすべて之等の場合に於て、若し其の思想が單に研究であり信條であり發表たるに止まるならば、絕對に自由を許し毫も强制を加ふるなかれと主張するのである。固より發表を越えて行爲の限界に入りたる場合には、之に干渉を企てることは止むをえまい。此の場合にも尙自由をと云ふのではない。然し行爲に亙らない場合に於ては、若しそれが眞理に照らして誤であるならば、其の誤たることを思想の形に於て論爭し、若し又社會の平和と統一の爲に有害ならば、その何故に然るかを同じく言論の形に於て、言の有する眞理性によつて、相手方を首肯せしめ納得せしむべきである。之のみが眞に平和と統一とを庶幾する所以である。

此のことは啻に學園に付てのみではない、學園以外の一般社會に於

ても同様のことを主張し得る。然し特に學園に於て此のことを主張し得る根據がより強い。假令一般社會に於ては、其の成員の智識の程度が低く判別の能力が劣るからと云ふことで、思想に強制を加へることが肯定出來るとしても、學園に於ては此のことを主張するは困難である。

又一般社會は必ずしも思想言論の爲に存するものではないが、大學々園は學問の研究眞理の探究を以て立つものであり、之が其の存立の職能である。之なくして其の存立の意義の消滅する社會である。そうして學問の研究に必要なるは、其の研究の對象を選ぶに自由であり、發表討議が自由であり、反對思想の起るに自由であり、いつにても異る思想が互に接觸して練磨し得ることである。此の社會に於て自由は絶對無條件に必要であり、之なくしては學問の研究が進歩しないのである。學園は思想の自由を要求しうる特種的理由があるのである。

（五）

それでは如何なる論據に於て、思想言論に自由を主張するのか。其の第一の論據は、眞理の出現に自由が必要であると云ふことである。人類の思想史を顧るに、ある時に於て支配した思想は、常に他の時代に於て別の思想に代はられた。いかなる時代をも通じて支配した萬代不易の思想は、曾て現はれたことはなかつた。此のことを思ふとき吾々はよりよき思想に對して、常に謙遜に期待をなさねばならない。若し世に絶對不動の眞理が現存し、自己の思想がそれであるならば、暫らく之を問はない。然し過ぐる思想の消長を知るものは、自己の抱ける思想に對して、其の分を知り限度を甘んじなければならない。若し今自己の抱ける思想に照らして、異端の思想は一切之を排斥するとしたならば、其の時其の人の思想のみは殘つて、一切の異る思想は影を潜めるであらう。かくては如何にしてよりよき思想の出現を期待することが出來やうか。次代を支配すべき思想は萠芽を現はすべき術さへない。異端の思想の一切がすべて正しと云ふのではない。然し正しかるべき思想に出現の機會を閉づることは絶對に危險である。すべての思想は現はるゝに任せ、生存を自由に許さねばならない。そして自由の競爭によつて殘るものをして殘らしめ、亡びるものをして亡びしめなければならない。かくて眞理を含む思想は唯其の眞理なるの故を以て殘り、價値なき思想は價値なきに之を擁護することなき爲に遂に影を潜めるのである。

思想の歴史を繙くものは、後代に於て燦然と輝ける多くの思想が、異端として迫害された幾多の實例に接する。ソクラテスを迫害したものは決して自己の非なるを知つて爲したのではない。自己の立場の正しきを信じて、主義の名に於て之を爲したのである。又基督教徒を迫

害した人々は、決して無智非望のもののみではなかつた。マーカス・アウレリウスの如き賢人すら、其の迫害者の中に列するのである。すべて之等の異端の迫害は或は眞理の名に於て、或は國家の名に於て、昂然として遂げられたのである。然も後代より之を眺むる時に、思想の含む眞理性が何れにより多く有したか、何れがより多く人類の進歩に貢献したか、固より言を俟たない所である。若し之等異端の思想が不幸にして迫害により姿を沒したとしたならば、其の結果は、衷心に堪へないものがあつたであらう。之を見る時に、其の時代を支配した多數者の思想が、いかに相對的でありいかに果敢きものたるかを辨へねばならない。自己の思想に信念を置くは正しい。然し之のみが絶對にして一切の異端が誤なりとするは、事自ら別個の問題である。自己の信する所に今不動の信頼を置きつゝも、やがてよりよき思想を待望する謙遜と憧憬とがあつて然るべきである。反對思想の迫害はすべて良きものの現はるべき路を阻止する。良きものを反對思想より汲み、良きものを自己の思想より保ち、之を併せた辯證法的發展のみが正しき思想への唯一の路である。かくて異端の思想をして言はんとする所を充分に云はしめ、批判する所を遺憾なく批判せしめねばならない。思想言論に自由を與へよと云ふ第一の論據は此に在る。

（六）

私の第二の論據は、假令反對思想は誤であるにしても、然も尚正しき思想を反省せしむるに必要だと云ふに在る。若し反對思想が正しいと假定するならば、正しきものを求める爲に之を寛假すべきは嘗に說いた。然し反對思想のすべてが正しくはない、誤てる反對思想は固より多い。然も此の場合に於ても尚反對思想の出現は、正しき思想の爲に歡迎すべきである。凡て吾々の抱ける思想は、曾てはすべて生々とした信念であつた。之を始めて唱へた先驅者に於て、それは血と涙の結晶であつた。然しそれが時代の多數者に受け容れられた時に於て、それは既に先驅者の抱けるものとは趣を異にする。やがて時を經るに從つて愈々それは一片の形骸に堕する。それは既に信念に非ずして、唯口より口に傳はれる一片の空語である。それは人格を動かす力に非ずして、頭の一角に潜む單なる經文である。凡そ思想とは彼の人格の全部を動かすものであるならば、既に其の限りに於て、それは眞正の思想ではないのである。例へば今此に國家主義を奉するものがありとする、然し多くの場合に於て彼が國家主義者たることは、唯彼が個人主義の勃興に反對だと云ふ消極的な意味に於てのみ現はれることが多い。國家主義なる思想も、ある時代に於てそれが群議を排して主張さ

れた時に於ては、意氣と情熱とに滿ちてゐた。時代を支配せる反對思想を打破するに足る理論的體系を具へてゐた。此の時に於ては、それは眞正の意味に於て思想であつた。然るに國家主義が多數者を支配する思想となつた時に於て、彼の國家主義は、自らが研究し信仰し體得した思想ではない。人の多くが信ずるが故に之を信じ、搖籃の幼きより親の語り師の語り友の語るが故に、之を奉ずることが多い。彼の思想は積極的に非ずして消極的であり、意識的に非ずして無意識的であり、疑ふことなく、究むることなく、唯晏然として又漫然として、すべてを勿論のこととして受容する。既に然らば彼の國家主義は、當に眞正の思想として彼を支配せざるのではない、自ら知らざる裡に之と矛盾せる幾多の思想は、雜然として彼の中に混在してゐるかも知れない、其の限りに於て、彼の人格は分裂してゐるのである。

彼の思想がかゝる狀態に在る時に、彼の思想をして再び生きたる信念たらしむるものは、果して何であるか、それは唯反對思想の賜物である。反對思想が現はれて、多數者の思想を批判し攻擊し來る時に於て、**人は自ら抱ける思想を反省する。そうして自己が果して何れの陣**營に屬するかを自問する。若し彼が反對思想に與しないならば、何が故に自ら與し得ざるかを反省し、奈邊に反對思想の誤が伏在するかを究明する。比の心的經過を辿る時に於て、今まで唯漫然として信ぜられた彼の思想は、始めて質問と論議の對象となり、無意識の界より意識の界に齎らされる、そうして力強く然りと宣告される。此の時彼の思想は始めて一片の形骸を脱して、再び生きたる信念として復活するのである。かうした心的經過は、苟くも思想の成長を求むる學徒が常に試みてゐるのである。彼等が古人の書を讀み、各種の思想傾向を探るは、以上の經過を求むるに外ならない。然し怠慢な人間は、獨り放任される時に、ともすれば自己の抱ける思想の上に眠り勝である。反對說を假定して之を疑ひ之を究むることは、凡人に於て容易に爲し得ない。彼の爲し得ざることを彼に代つて之を果し、眠れる彼に警鐘を打つて之を覺醒せしむるは、之れ一に反對思想の存在である。

人若し自己を愛し、自己の成長を求むるならば、かくて反對說を歡迎すべきである。獨斷に陷り慢心に流れ易き自己をして、成長の課程に彼を鞭つものは反對思想である。人は自己のみの城廓に籠ることなしに、門戶を開放して反對說に傾聽した。而も反對說の採るべからざるを信じて、**自己の思想を持して來る時に、彼は始めて自己に對して自信を持つ。**自己を批判と攻擊とに曝して、毫も之より隱蔽せざりしこと、而も此の批判と攻擊を通じて彼は不動なりしと云ふ過去の追憶は、彼をして自ら立てる地盤に確信を與へるのである。此の時の彼のみが本當に強いのである。又若し人が國を愛し社會を愛するならば、

反對說を愛護しなければならない。目下の國家組織組合組織は、現在の多數者の賛成と承認の下に存在を續けてゐるのである。從つて國家と社會の命脈の確否は、一に之を擁護する思想が單に消極的であり無意識的であるならば、之等の制度の運命は誠に累卵の危殆に在る。若し俊敏にして剛毅なるもの、一度劒を把つて起たば忽焉として仆れるかも知れない。そうして實際に於て現存組織と云ふものは、ともすればかゝる薄弱な根柢の上に立つことが多い。若し人が現存組織の價値を確信し、之を擁護し得べき成算があるならば、寧ろ進んで之を反對と攻擊とに曝すべきである之れ單に反對說の爲ではない。多數者をして現在組織の價値を反省せしめ、其の擁護を確信せしむる所以である。かゝる多數者の承認と援助とあつてこそ、始めて少數の攻擊の爲に、制度は微動だもせずして持續し得るのである。若し現存秩序を愛し、自己の態度を信ずるならば、反對說の消滅を望まぬであらう。寧ろ進んで之を愛護し之を歡迎するであらう。

(七)

最後に私の論據は、內的生活に對する强制は人格の成長を害すると云ふに在る。今若し人がAなる思想を信ずるとする。彼が此の思想を信ずるは、決して偶然に信ずるのではない。彼の全心的狀態の必然か彼をしてAなる思想を採らしめたのである。彼の思想は彼れの全體と有機的の結合を爲すもので、之のみが機械的に他と獨立に存するものではない。若し彼をして何が故にAが誤れるかBが正しきかを、理性に訴へて納得せしめたならば、彼の全心的生活が此に一轉して、Aを離れてBに向ふ、此の場合に單にAを離れたるに非ずして、心的生活の全體が轉向した爲に、其の必然の結果としてAを離れてBに向ふのである。此に彼の心的生活には唯自然なる調和があつて、毫も混亂と動搖とがない。之に反して今彼を壓迫し强制して、AよりしてBに轉ぜしめんとする。此の場合には彼の心的生活は、何が故にAに向ふべからざるかBに向ふべきかを了得しない爲に、彼の心的生活は依然として、Aに向ふべき必然的課程に在るに拘はらず、余儀なく彼はBに向はしめられ、彼の心的生活は雜然として混亂する。此の心的不調和不統一が、既に彼の人格を分裂せしむるものであるが、更に此の後に於ける心的成長は此の狀態よりは、一歩も期待され得べくもない。力は唯調和と統一とより湧く、かゝる混亂と分裂とより、よりよき心的成長の現はれやう筈がない

更に不可なるは、AよりBに轉ぜしめんとする强制が、利害の脅威を背景とすることが多いことである。若し彼がBに轉ずれば卽ち可若し依然としてAに執着するならば、彼は或は刑罰の形に於て或は多

數者よりの疎外放逐の形に於て、彼の損害を意識せしめ、彼の利己心を刺戟することによつて、彼のBへの轉向を圖らんとするのである。彼のBを採るは、其のBの正しきを信ずるが故に非ずして、Bを採らざるより來る損害を回避せんが爲である。彼をしてBを採らしむるは其の信ずる所を抛つて、信ぜざる所に轉せよと云ふのである。彼をして所信に忠實に戰はしめんとせずして、利益の爲に不信の說を信ぜよと求むるのである。あることの善なるは、其の爲された結果に非ずして、爲さるゝ心的傾向に在る。我等は同胞に學友に、又學校當局は學園の成員に、更に國家は市民に、唯善なることのみを求むべきである。人に善なることを待望し、彼の人格の成長を祈りつゝ彼の利己心を刺戟して、不信の思想の傀儡たることを求むるは、凡そ人格者に對すべき態度ではない。

大學々園が其の學生に求むべきことは、彼等が人格者としての成長を進むることである。一方に人格の成長を求めつゝ、他方に自己の利害の爲めには思想を變へよと求むることは、矛盾を強いることである。利害の故に思想の採否を決するは人格の本旨に反する。朝に人格の成長を說きつゝ、夕に思想の强制を企つるは、教育の本旨に背き學園の存立に反するものである。國家の市民に求むべきことは、彼等が人格者としての自己を實現することである。國家の本質に關しては人各々說があらう。然し私は之が國家存在の理由であり、之が國家の倫理的目的であると信ずる。法律その他の制度は此の目的の爲に役立つものであり、之を目的とすればこそ、吾等は國家を存在せしめ、其の命令に服するのである。固より此の理念に照らして現存組織に改革すべき點は多い、然し其の改革自體の合法性も、唯此の國家の倫理的目的より來るのである。かゝる國家の市民に求むることは、信ずる所の爲めには飽く迄も戰へよと云ふことであり、富貴も淫する能はず威武も屈する能はざる偉丈夫たることである。而も他方に於て利害の爲に所信を捨てよと求むることは、國家は存立の理由に反し、市民に求むべき倫理的目的に反する。思想に對する國家の强制の不可なる、一に此の點より來るのである。

（八）

以上說けるが如き思想言論に關する自由主義は、いかなる立場を當然敵とすべきであるか。自由主義に反對するものは、いかなる立場に立つかを述ぶることは、更に反面よりして自由主義の論據を補足することになるであらう

自由主義の第一の敵は絕對主義である。反對思想の出現を阻止しや

うと云ふものは、暗默の裡に既に絕對の眞理が現存すると信ずるものである。然も自己の抱ける思想がそれだと信ずるものである。それなればこそ異端說を無用とし、反對思想を迫害せんとするのである。然し世に現存するのは、決して絕對に正しいものではない。唯相對的にのみ許されるものである。絕對なるものは反對思想との對立よりして、やがて實現さるべきもので、今現に實現されてゐるものではない。絕對や理想が今現に在るとする、見解は苟くも成長を望むことと夫れ自身に於て矛盾する。眞に成長を望むものは、絕對なるものを唯彼岸に求める、そうして己を省みて捨つべきものを捨てんとし、補ふべきものを、求めんとする。之よりして當然に、反對說に耳傾けんとする謙遜が湧き、かくて彼は、自由主義を採らざるを得ないのである。

自由主義の第二の敵は結果主義である。結果主義者は心情が何であらうとも現はれた結果にのみ着眼する。若し求むる結果がBであるならば、唯Bたる結果が實現さへすればよい、其のいかにしてBが實現したかの心情と徑路とは彼の關心事ではない。事の良きは結果のいかんに在りとする。其利己的動機によつて爲されたか否かは、事の良さに毫も交涉がないとする。かゝる徒は當然に思想の迫害を企つるであらう。然し若し事の良きは其の結果に非ずして心情に在りとするものにとつて、强制と否とは重大の關心事である。强制によつて求むる結果は實現するかも知れない。然し其の實現の代價として、當事者をして利己心の奴隸たらしめ、更に當事者の心的生活に攪亂を惹起する。强制された彼は不自然な歪める方面に發達する。之等の內面的方面に着眼するものは、强制の前に先づ躊躇を覺える。結果のみを打算するもののみが、唯々として强制を企てうるのである。

自由主義の第三の敵は暴力主義である。人は威脅により脅迫により動き得るものとし、强制された思想は、人を永續的に拘束し得るものとする、之が自由主義に反對するものの暗々裏に抱く人間觀である。然し果して之が正しき人間に對する見解であらうか。人は結局に於て理性により得心によつて動くものである。之のみが彼を潑溂として動かし得るものであり、彼を能動的に快活に働かしうるものである。若し强制を以て彼の思想を阻止しうるとするならば、其の人は强制を加ふるの必要なき程の凡庸の徒である。若し凡庸の徒に非ざるものは、强制が決して彼を支配し得る筈がない。從つて强制を加ふべき必要ある程の優秀の徒に對しては、强制は決して効果を奏せざることとなるのである。最も確實に人を動かしうるもの、彼の思想を確實に永續せしめうるものは、威嚇により强迫により企てられたものに非ずして唯思想の力を以て了得せしめ改宗せしめることだけである。

自由主義の第四の敵は團體主義である。 家族教會組合學校國家の如きすべて之等の團體を以て尊の對象とし、之等の維持と繁榮が目的にして、個人は唯其の爲の手段たりとする見解は、多くの我國人が無意識に受け容れた思想である。此の立場よりすれば平和は團體の圓滑の生活に最も重大であり、異論百出は平和を亂し統一を妨げる觀があるので、最も嫌はれることとなる。固より團體の存在は個人の爲に必要欠くべからざるものである。私も之を否定せんとするのではない。唯私は團體は個人の成長の爲に存し、其是非は之に屬する個人が成長するか否かによつて、決せられることと團體そのものの運用も存續も、究局に於ては個人の成長に俟つものだと云ふことを力說したいのである思想の迫害を爲すものは、團體の爲といふ背景を借ることが多い。然し團體は團體自身の爲に存するのではない。漠然として團體の爲と稱するものが、其の何の爲に存在するかを反省せざるものが多い。視點を個人の成長に轉ずるならば、自由か强制かの是非は自ら定まる。團體主義を固執するものは、個人の自由を敵視し、個人を去勢し活力を奪ひ、結局團體に精氣と緊張を欠かしめ、かくて自ら團體の運命をして奈落の底に陷りつゝある。

自由主義の最後の敵は安逸主義である。若し吾々にして現狀に安んじ成長を望まないならば、反對說は無用であり厄介である。少くとも既存の思想に安んずるものは、反對說の出現に際しては、一度は自己を反省し詮索し改めて肯定か否定かを決しなければならない。之は骨の折れることであり面倒なことである。無精であり怠慢であるもの、安易と逸樂に耽るものの忌み嫌ふ所である。此の故に安逸主義は異端の說に眉を顰める。更に又學徒や政治家は反對說に對して、自己の信ずる思想を擁護し自己の信ずる制度を防衞せねばならない。之には反對說を其の都度玩味し、消化し之を擊破するに足る論理を整へねばならない。若し之に失敗するならば、自由競爭の敗者として、背景に退かなくてはならない。之を欲せざるものの最も便利な方法は、反對說の一切を禁止することである。そうすれば平和に自己の現狀に眠り得る。安逸主義はかくて思想の迫害に傾くのである。

然し吾々は安逸主義の誘惑に敗れてはならない。自己の成長を望むものは反對說を歡迎しなくてはならない。之あることによつて自己は一歩昂揚するのである。若し反對說によつて敗るゝを恐るゝならばそれは大なる誤である。自己を敗るものは敵に非ずして、唯自己である。自己が自己を敗れる時に、彼は勝利を得たのである。人と人とを對立せしめ、鬪爭と勝敗とに着眼するものは、自由主義の敵である。吾々は平面を見ずして立體を見、人を相手とせずしてより高き自己を諦視すべきである。己が敗れ彼が勝つに非ずして、眞理が勝ち正論が

支配するのである。之を待望するものが勝ち、然らざるものが敗れるのである。學徒も政治家も自己に敵なきことを誇つてはならない。敵を寛假し包擁したることを誇るべきである。敵の刄に仆るゝことを誇りとすべきである。敵なき時に人は戰場に眠り勝である。敵の存在を阻止せんとする時に、自己の立場に對する自信の欠乏があり、不知なるものに對する恐怖があり、自己の評價の下るを憂へる卑屈がある。すべて之等の心情は學徒として爲政家として、人を救へ世を導くものの持つべからざるものである。

要するに自由主義の敵は一言にして云へば、理想主義の敵である。人の善とすべきものは彼の人格の成長に在りとする理想主義の倫理觀は當然に自由主義に到達する。自由主義に反對するものは、此の倫理觀に反對するものである。自由主義に反對する心理的背景が、何たるかを吾々は反省しなければならない。自由主義に反對するものの潛める心理を、白日の下に曝し、之等の心理が吾々の採るべからざるものたることを知るものは、思想言論に自由を認むべきである。

（九）

自由主義の論據が此に在るならば、自由主義によつて擁護せらるべき思想は、内容の如何を問はず、思想のあらゆる種類のものである。國家主義も無政府主義も、將又資本主義も共産主義も共に、自由主義を戰友として强制に抗爭し得るのである。同時に之等のすべての思想が又若し、反對思想に强制を加へんとする場合には、直に自由主義の敵として、吾々の抗爭の相手とならねばならない。凡そ思想はともすれば當初の清新潑溂たる活氣を失つてやがて固定し化石し易い。不思議にも一つの思想が反對思想を迫害せんとする時は、其の思想に内的活力の溢れた時に非ずして、既に固定し化石した時である。之れ一見不思議のやうで實は之が自然なのである。何故なれば曩に述べたやうに、反對思想の迫害は、當事者に自信が欠乏し思想の力による戰鬪心の銷磨した時だからである。自己の立場に不動の自信を抱くと共に、成長の憧憬に滿ちたる時に於て、決して反對思想の迫害を企つるものではない。從つて思想の强制の始まる時は、思想界の多數者に安逸と頽廢の漲れる時である。其の時少數の者が異端の說を唱へ出す、多數のものは之を迫害しやうとする。此の時一方に於て反對思想の存在を擁護して、言はんとする所を忌憚なく言はしめ、他方に於て之に對する論爭を餘儀なくせしめて、多數者の思想をして睡眠と沈滯とより覺醒せしめ、再び往年の活力を復活せしめ、更によりよき思想への昂揚に役割を演ずるものは、實に自由主義の責務である。思想界に清新なる活力を齎す泉源は實に自由主義に在る、自由主義者は此の貴き使命を

自覺し、之が爲に遺憾なきを期すべきである。

　自由主義によつて擁護せらるべき思想は、其の内容の如何を問はず保守たると急進たるとを問はないと述べた。傾向の左右を問はず、自由主義はいかなる主義をも提携し得る、此に自由主義の主義としての特異性がある。自由主義とは私が本文の始めに述べたやうに、思想言論の世界に限局した場合に於ては、強制に反對すると云ふ形式的の立場を採る主義であつて、一定の内容を持つ思想ではない、此の無内容であり形式的である點が、自由主義の凡そあらゆる主義の中に於て特種の地位を占むる所以である。いかなる内容の思想をも強制より擁護しうる所に自由主義の立場があり、此に自由主義のみが演じ得べき役割があり其の意味に於て尊き價値が、自由主義に與へられるのである。從つて自由主義者の立場より見る時に、現今の學園に於て、反對思想に強制を加へんとするもの、尠くとも反對思想に寛容を欠くものは、決して保守主義のみではない、保守主義に抗爭して自由を叫ぶ急進主義が、却て偏狹に流れ寛容を欠くことが尠くない。強制は保守主義の獨專なるかのやうに聯想せられるが、必ずしもさうではない。保守主義者と同じやうに自由主義者をして眉を顰めしむる傾向は、現今のマルクス主義者にないと云ひ切れない。其の絶對主義であることに於て、結果主義であることに於て、暴力主義であることに於て、團體主義であることに於て、吾等が自由主義の敵として述べた心理が、決してマルクス主義者に於て完全に脱却してはゐない。自己の思想のみが絶對的に正しとして、あらゆる他の思想を一括的に貶し去り、其の唯我獨尊的の高慢な思ひ上つた點は、保守主義者に比して、無邪氣であり愛嬌があるにしても、尚やがて強制と壓迫とに變り易い心理的傾向が、遺憾なくマルクス主義者のあるものに具つてゐる。此の點に於て保守主義とマルクス主義とは同一の範疇に屬するものである。

　此のことは確に事實である。而も尚學園に於ける自由主義は、事態を公平に觀取する冷靜を保たねばならない。マルクス主義は少數者の反對思想である爲に、活動的であり積極的である爲に、保守主義の陰性なるに比して、我等の印象に刺戟を與ふることが尠くない。然し依然として現今の學園に於て、思想に強制を加へんとする危險性は、彼等に非ずしてより多く保守主義者に在る。其勢力の巨大なることに於て、其の多數者を支配することに於て、其の心理の強制に流れ易いことに於て、自由の敵は依然として保守主義である。成程マルクス主義者のあるものは、其の不必要の程度に他派の思想に對して戰鬪的たることに於て、其の主張の誇張過度たることに於て、吾等の同意し難い所は尠くない。然し彼等をして此の如き態度に出でしめたることも、一半の責任は、彼等に對する白眼迫害に在つたと云ひ得る。既に迫害が

ある爲に異端の思想は、稀少價値を持つ、此の價値と評判とを樂しまんが爲に、異端の思想に傾くものがないではない。其の本來の傾向がマルクス主義に合致せざるものが、かゝる好ましからざる徑路によつて主義者たることあり、之等の徒の輕卒なる言動が、マルクス主義に高價なる損失を與へつゝあることもあるであらう。又迫害のある爲に異端の思想は、本意ならずも不必然に鬪爭的であり、自ら求めずして過度の急進に陷り易い。かくて急進を驅つて愈々急進ならしめ、更に之が爲に保守をして愈々保守たるべく餘儀なくせしめる。之れ一に異端の思想に對する迫害の弊害である。若し冷靜に自由が與へられるならば、不自然な無用の刺戟を爲すことなしに、自然な圓滿な思想の成長を爲し得べかりしであつた。自由主義が奮起すべき所以は此に在る。保守と急進と其の傾向を問はず、等しく自由を與ふることによつて、不當の興奮と刺戟とを加へざらしめんとするにある。現今のマルクス主義にして、若し上述のやうな好ましからざる傾向があるとするならば、其の責任の一半は自由主義者に在る。自由主義が怠慢にして無力たりしこと、信ずる所に敢然として戰はざりしことにある。孤立無援の中に在つたマルクス主義者が求めずして、好ましからざる傾向に流れしは、一は自由主義の負はざるべからざる刑罰である。

本文の筆者は思想內容に關しては、過去に於て常にマルクス主義に反對して來た。今後に於て亦其の反對を以て終始するであらう。然し其の內容に關する異論は暫らく別として、マルクス主義が現今の學園に一抹の活氣を鼓吹したことは疑へない。彼等は從來の學徒が稍もすれば忽にした歷史哲學の方面に、倫理學社會哲學の方面に、着眼を促して研究の眼界を擴げた功績は隱すべくもない。又從來の學徒が問題にしてはゐたとしても、經濟價値論の方面に經濟社會推移の傾向の方面に、刺戟を與へて百花一時に開くの觀あらしめた。若し彼等の擡頭することなかりせば、現今の社會學徒の視野は、倫理や歷史の根本問題にまで及ばなかつたであらう。社會組織の根本に鋭き批判を投ずることなしに過ぎたであらう。之等の方面に學徒の着眼の及ぶことは苟くも自己の成長を希ひ社會の發達を望むものの、すべての思想家の待望すべきことであつた。吾々も亦當然に之を望み之に努力すべきであつた。幸にして其の先鞭はマルクス主義者によつて付けられた。假令彼等の所說に同意し難い節あるにしても、其の論爭は後に開かるべきである。先づ彼等によつて開かれた路は、あらゆるものが均霑しうる所である。マルクス主義は之の意味に於て、學問の進歩と社會の進化を望むものにとつて、決して敵に非ずして好個の僚友である。假令彼等の態度に於て自由主義の求むる寛容を欠くにしても、又彼等が過去口を極めて自由主義を攻撃したとしても、自由主義者は靜に戰局を

達觀して、奈邊に敵と友とがあるかを決せねばならない。今は自由主義が其の使命を自覺して、敢然として嚮背を決すべき時である。今自由主義の採るべき動向は、學園に於ける最も重大の樞機である。進歩を望む者自由を求むるものにとつて敵は依然として、保守主義である。吾等は共同の戰線を張つて、マルクス主義者を保守派の強制より護らねばならない。之が進歩の爲であり、自由の爲である

(十)

唯此に自由主義にとつて一考すべき點は、マルクス主義者中の共產主義者の抱く無產者獨裁の見解である。打明けて云へば筆者は其の所謂無產者獨裁なるものに就て、充分に典據を探索して研究したことはない。從つて詳細に其の內容を解しないが、假に次の如く想像するとする。即ち資本主義社會が崩壞して、共產主義の社會が出現した時に、完全に新社會の地盤が確立する迄、一時過渡時代の政策として、其の崩壞の役割者たりし無產者に獨裁的の權力を認め、反對思想を迫害することを許さんとするものであると。此の假定の形で表現された無產者獨裁なる觀念は、果して自由主義の認め得べきものなるか否か、若し認め得べからずとするならば、自由を無視する政策を內容とする共產主義は當然に自由主義の敵であり、之を擁護するは自由主義本來の立場に反せざるか否か、之れ確に一度は考慮の俎上に上すべき重要の題目である。問題の第一は、迫害せんとする反對思想なるものの思想の範圍如何である。若し思想なるものを廣く解して、特定の時と所とに於て特定の行爲を爲さしめんとする煽動的の言論をも、所謂思想言論の中に含ましめて、之を迫害せんとするならば、私も必ずしも反對ではない。私が上に述べ來つた思想言論とは、かゝる種類のものをまで含めたのではない、之は當然に行爲の部に入るべきものと認めてゐるのである。此の意味の思想を迫害すると云ふに止るならば、現に目下の社會に於ても之を罰することを私は認めるのであるから、固より無產者獨裁に反對はしない。然し恐らくさうではなからう、迫害せんとする思想の範圍はもつと廣汎で、恐らく自己と異る大概のものは、いかなる程度でも之を革命政府の維持に害ありと認めて、迫害しやうと云ふのであらうと思ふ。此に於てかゝる異端の迫害が、果していかなる論據に於て合法と認められるかゞ根本の問題である。其の論據の一は強制なき自由の社會を實現する爲に、強制も止むを得ないと云ひ、目的が自由にある故自由の爲の強制は止むをえないとするのであらう。更にそれも永久ではない、革命政府の動搖せざるまでの過渡時代だけと云ふに、第二の是認の論據を求めるのであらう。若し果してさうであるならば、自由主義と共產主義とは、根本的に相容るべからざ

る對立であることを覺悟しなければならない。思想に對して何故強制を爲しては惡いかの理由は、前に述べたやうに、或は眞理の出現の爲であり、或は現存思想を生きたる信念たらしむる爲であり、更に人格の成長に不自然なる混亂を避けんとするに在る。之等の終局の理由によつて、強制は否定せられ自由は主張されるのである。自由を認むるは絶對的である爲ならばと云ふ條件で左右されるのではない。此の意味に於て自由は、人格價値に對する缺くべからざる條件である。自由の爲に強制を認むるは、自由を認むる根本價値に反するもので、吾々の斷じて排すべき所である。若し自由を理想として之に赴く課程として思想の強制を認むるとしたならば、現今の保守主義と何等選ぶ所がないであらう。保守主義者も亦決して永久に強制自體を以て能事了れりとするのではあるまい。窮局の理想に至る課程として、思想の取締を爲さんとするに止まるであらう。之を攻撃するものは目的によつて手段を肯定するものであつてはならない。眞に保守主義に正面より抗爭し得るものは、自由主義のみである。共產主義の立場は結局に於て保守主義と同工異曲である。其の何によつて保守派の強制に反對するかの理由が薄弱である。若し目的が無產者の解放に在る點が異ると云ふならば、此の目的が善か否かが既に別の論爭題目に流れるのみでなく假に之を目的としても、漸進的に急激思想の取締をすると云ふ保守派の立場と根本的には異らない。要は唯時期と程度との差に止まつて、迫害を認めるに於て同じである。保守派の強制に反對する立場は要するに徹底的ではない。又更に所謂過渡時代なるものも、いつ迄が過渡時代かは明白でない。人は反對思想を迫害する生來の誘惑を持つものである。一度迫害を許すならば、その迫害を斷念して自由に返るときは實に至難である。恐らく過渡は底止する所を知らずして永久に過渡時代と目される虞はないか。尚此の問題に付て更に委曲を盡したいが、之を他日に期するであらう。

實は此の一點が從來も自由の共同戰線に躓の石であつたのである　そうして此の點の差は決して單に此の點のみに偶然に現はれたのではない。より根本的の差異より來る表象たるに過ぎない。それは共產主義の根柢に橫はる唯物史觀を採る限り、自由主義とは結局に於て相容れない。前に述べた自由主義の敵とも云ふべき各種の心理は、人が單に自然物としてある限りに於て、何人も當然に免れない心理なのである。唯彼が中途に於て理性者として別個の人間觀に改宗しない限り、人は反對思想に寛容でありえないのである。換言すれば自然の人間觀を續ける間、異端の迫害に陷るのが當然である。唯彼が理想主義の人間觀の洗禮を受けたる後に於てのみ、あらゆる思想に對しあらゆる思想の爲に自由を認め得るのである。人が自由を求むること既に一定の

階段に達した後なること始に述べた。自己の爲に自由を求むることは未だ容易である。然し敵の爲に自由を認めることは、當然には爲し難いことである。之を爲す所に自由主義の使命があり、此に自由主義者の負はされた課題がある。凡そ理想主義的人間觀を採らざるものは、遂に自由と緣なき衆生である。唯物史觀が理想主義と矛盾する限度に於て、共產主義が自由の價値を認むるに吝なるは、極めて當然の歸結と云ふべきである。かくて共產主義者に自由侵害の可能性は決してないではない。例へば學園に於て一派の同志が糾合して、同志の爲に學園を占領し、學園を化して共產主義の策源地たらしめんとするが如き陰謀がないと云へない。之れ共產主義の爲に圖つて忠實なるものと強辯しうるかも知れない。然し此の程度に及んだ時にそれは思想の領域を越えて行爲の限界に及べるものであり、自由主義者は敢然として起つて、共產主義者と闘爭を開かねばならない。

然し若し共產主義が以上の如き行爲に及ぶことなしに唯思想內容として無產者獨裁を唱ふるに止まる場合には、それは思想として存在を確保されねばならない。假令將來に於て自由を侵害すると公言しつゝあり、又其の人間觀よりして多分に强制の傾向を含むにしても、そのことは**一の異端思想として吾等が自由を擁護することに**毫も妨あるものではない。思想の內容から來る反對は强制によらず迫害によらず、思想を以て闘爭し、了解せしめ得心せしめ改宗せしめねばならない。

實行行爲として思想の迫害の虞あるものは、學園に於て依然として保守主義である。而も學友相互の間に於て或は學園の當局と學友との間に於てよりも、學園以外の權力機關が學園に對して、保守主義の立場よりして、急進主義の抑壓の命令し來ることである。此の危險は過去に於て既に存し、將來に於て更に增大するであらう。恐らく今後十數年此の種の壓迫は、間斷なく政府當局よりして學園に企てられるであらう。眞理の殿堂思想の學府が、其の鼎の輕重を問はるゝの時は、今後幾度か頻發するであらう。

學園にあるすべてのものは、此の時に處する進退を今よりして決意せねばならない。マルクス主義者の平常の言動と、無產者獨裁に關する見解とに迷はされて、無用の反感を彼等に抱いて、此の重大の時機に進退を誤つてはならない。吾等はマルクス學徒が他日自由を侵害する危險性あることを看破する聰明を持ち、之に對する不斷の論爭と監視とを怠つてはならないにしても、然も尙吾等の今先づ戰ふべき敵は現實に權力を以て威嚇し强制せんとする强大なる保守主義である。右に保守主義と爭つてマルクス主義を擁護し、左にマルクス主義を擁護しつゝ其の思想と爭ふ吾等の立場は、右よりはマルクス主義と同一視

され、左よりは保守主義と混淆され、かくて左右兩翼より挾撃されるかも知れない。之れ實際に於て過去の吾々の先人の味つた悲劇であつた。而も此の恐怖の爲に吾等は保守主義と爭つて、マルクス學徒を擁護せざるべきか。又マルクス學徒と雷同して、其の思想と爭はざるべきか。否之れ自由主義の名に背くものである。此の悲壯なる挾撃の中に在つて、右と鬪ひマルクス學徒を擁護し、左と鬪つて唯物論を克服する所に、自由主義のみの爲すべき使命があり、此に自由主義の負ふべき貴重なる課題がある。

今は自由主義が至重の役割を演ずべき時である。强大なる保守主義の勢力は、學園に於ける思想言論の自由に脅威を加へんとしつゝある。急進思想が同情すべき受難の苦に際會しつゝある。自由主義が使命を果すべきはかゝる難局の時に於てである。吾々は双手を廣げて、此の脅威よりしてマルクス主義を擁護せねばならない。殊に自由主義は過去永くマルクス主義に反對し、又之よりしてあらゆる罵倒を受けて來た。それなればこそ更に此の場合に於て反對思想の爲に擁護の大任を果すべきである。今まで大學の自治の爲に學問の自由の爲に、戰ひ來れる多くの勇士が、マルクス主義を擁護する場合に於て、躊躇を感ずるものが尠くない。然しそは自由主義の眞諦を解せざるが爲である。若し吾々にして此の難局に於て躊躇逡巡するならば、そは理想主義の邪道であり、自由主義の墮落である。

大學の没落

大森義太郎

いつたい大學とは如何なるものであらうか？　わたしは一見わかりきつたこの問題をまづ提出して見たい。おそらく讀者諸君は最高の學府といふ言葉を直ぐと想ひ泛べられるにちがひなからう。大學は、なによりも、いろんな俗世間的な拘束や煩しさから遠く離れて、たゞ眞理を眞理として究めるために『學術』がもつとも深く研究される場所である。眞理の聖なる殿堂でなければならぬ。其處にをる教授達は、その研究がいかなる階級を利益するかなどは顧みることなく、專念に眞理探求にいそしむところの、またそれを公けに許されたところの人達である。おそらく、こんなふうに讀者諸君は考へられることでもあらう。だが、ほんとうに大學はさういふものであらうか？

大學といへども決して空幻的な存在ではない。現存社會の一制度として存するものである。それゆゑ、もし大學とは如何なるものであるかとの間に正しく答へようとするならば、この世ならぬさまざまな神々しい或は美はしい幻想を捨てゝ、社會的な存在物としての大學の解剖を試みねばならぬ。

今日の社會が、資本主義的と呼ばるべきところのものであることは、讀者諸君のすでに十二分に知悉せられるところであらう。では、この資本主義社會の機構のもつとも根本的なるものはどこに存するか？　いふまでもなく、有產者の無產者に對する階級支配にである。經濟關係における資本と勞働との對立にである。こゝで一言の說明をさしはさむならば、自分の勞働力以外には何物も所有しない無產者は、生きんがために、彼等のこのたつたひとつの財產を有產者に賣ることを餘儀なくされる。有產者はかうした勞働者を傭ふことによつて利潤を獲てゆく。この見たところ簡單な、始源的な關係こそが今日の社會の成立＝存續の全條件である。ところで、いま、資本主義社會の基礎が、かうした有產者の支配的な地位、經濟上の搾取關係といふことにあるかぎり、同じやうな有產者の支配的な地位は、社會の他のもろもろの側面においてもまた確立されてある筈だ。法律・政治の領域においてはもとより然りである。進んでは學問・宗教・藝術といつたふうの、いはゆるイデオロギーの領域においてもそれがなければならぬ。なぜなら、社

會が一個の有機的な結合をもつた全體である以上、經濟における基本的な關係は、また、全體を貫くものでなければならないから。經濟上における支配者が、イデオロギーの領域にあつては被支配者であるなどゝいふことは考へえられないから。さらに一歩を進めて云ふことができる。資本主義社會においては經濟における支配關係に對應して、他のあらゆる領域に同樣な支配關係が、單に事實として存在してゐるといふばかりでない。支配階級は彼等の存續のいはゞ基底である經濟上の搾取關係を確保するために、社會の他の凡百の側面における彼等の支配を樹立すべく努力する。この意味においては現在社會の法律・政治や學問・宗教・藝術などは有產者の根本的支配を擁るための手段たるものである。他のことはしばらくおくとして、讀者諸君は學問が今日の社會にあつてはこのやうな意義をもつべく社會的に定められてあることをこゝで注意していたゞきたい。

大學なるものは、いま述べたごとき社會におけるひとつの制度である。そして、わたしから云ふまでもなく、形はともあれ、有產者によつて營まれつゝあるところの組織である。そのことだけですでに大學が支配階級のあれやこれやの意圖に背きえないものであらうことは推論される。

其處では學問が研究されるといふ。しかも！その學問の社會的——とでも云はうか——の意義はいま見たごとくではないか！　こゝまでくるならば、大學が支配階級の利益のために學問を研究するところの支配階級の機關であることは、我々にとつてすでにあまりにも見易い理である。

このことは大學の他のこれもまた重要な機能である教育といふことを考へるとき、ますます明瞭である。普通、教育は人を作ることであると云はれてゐる。しかしながら、抽象的な『人』は考へられない。資本主義社會において有產者の行ふ教育が、資本主義に適しないところの、有產者にとつて好ましくないところの人を作り出すに向けられる筈はない。その教育は資本主義のために頌詩を書く人達を作らうとするものでなければならぬ。さうした教育の機關であるべきことが大學の任務であるとするなら、大學そのものが有產者的であるべきことは、また自明ではないか！

これらは資本主義社會における大學の存立の當初からしてそれに豫定された性質である。しかし、それは直ちに現實となるものではない。有產者の支配が搖ぎなきものであつたときにおいては、支配階級は大學にかうした性質を嚴格に守るべく求めることを必ずしも要しなかつた。そこに多少のゆとりを置いておくだけの餘裕があつた。けれども資本主義の展開は階級鬪爭の尖銳化を呼び起してきた。無產階級は有產階級に對立するものとして自己自身に目醒めてくる。イデオロギーの領域について見るならば、無產階級は有產階級とは全く違つた世界觀の持主として、彼等のマルクシズムをもつて、有產者の一切の學問に對立してくる。そこから有產階級の支配を激しく脅かし始める。こゝ

にいたるならば、有產階級は彼等の支配を守るべくありとあらゆる機關を動員して必死の戰ひを試みねばならぬ。そのとき大學は彼等にとつてもつとも賴みとする堡壘でないか！ かうして大學は、ひとたび階級鬪爭が灼熱化してくるとき、イデオロギーにおける有產者の階級支配の機關であるといふその本來の性質を曝露し始めるのである。

現代日本の階級鬪爭はそこまで進んでゐる。それゆゑにまた、現代日本の大學は、ひとへに有產者の階級支配の手段として在る。大學とは何ものであるかの問ひに對して、今日我々は正しくはかう答へねばならぬのである。

讀者諸君は怪しみ問はれることであらう、しかし大學はついさきごろまでいはゆる左傾教授の存在を許してゐたではないかと。そしてわたしに抗言されるにちがひない、してみれば大學は必ずしも有產者の道具だとばかりは云へないではないかと。はたしてさうであらうか？ わたしはまづ讀者諸君に考へていたゞきたい。官立大學だけをとつて見ても全體の教授の數は數百にのぼる。そのなかでマルクシズムを奉ずるいはゆる赤色教授は十人に足りないくらゐではないか？ この少數の赤色教授の存在が、わたしの上で明かにした大學の性質を少しでも變へるであらうか？ もし大學が眞に學問の府であるならば、有產階級を利すると否とを問はず眞に正しい理論を究める者を置く場所であるならば、いはゆる赤色教授の數は少くとも全體の半分に近くてよい筈である。

それのみではない。マルクシストの教授はその數が極めて僅かであるといふのに加へて、さらに非常な制限を置かれてゐる。研究の範圍の外に一步も出ることを許されないといふことである。實際的な活動をすることを堅く禁じられてゐる。このことは大學の階級性を物語るためにまことに興味深い事實である。研究と實行との區別がどこに存するかは、しばらく問ふことをやめよう。いはゆる左傾教授以外の教授には極めて廣汎な實行の領域が許されてゐる。選擧の際彼等が政友會や民政黨の候補者の應援に出掛けて大いに運動するなどはもちろんのことである。官廳の仕事をすることは彼等によつて大きな名譽と考へられてゐる。それどころか地主の團體の役員となつて、地主の利益のために對議會運動を試みることすらが公然と行はれてゐる。《わたしはこれらの人々の名前を擧げることを特に差控へて置かう》それがマルクシズムを採る者になると、無產政黨の議員候補者を應援することはおろか、合法的に許された演說會に出ることすらが問題にされる。嘗つてこゝでわたしの場合について云ふことを許していたゞきたい。わたしが日本農民組合の夏期大學に招かれて講演を試みたことが大きな問題とされた。《讀者諸君！ 彼等のほとんど全部は日本銀行であるとか、または何々俱樂部といつたふうの資本家の團體に招かれて常に講演を試みてゐる。しかも、いかにいかゞはしいものであつても彼等においては未だ問題の起つたことがないのだ！》また以前わたしは『政治研究會』の一會員であつたために當局の忌諱に觸れたことがあ

る。(ブルジョア教授のいかに多くが資本家のいろんな會員や役員であるかは讀者諸君もよく知つてをられるところではないか!)

これほどまでに、大學におけるマルクシストの存在は、他の白色教授に比して、制限されてゐる。日本の大學がマルクシストに席を與へる、その與へ方はかういふ具合である。これを、公平な、眞理以外には顧慮しない最高の學府だと呼ぶことを誰れが敢てしよう!

それでもなほ讀者諸君は云はれるであらうか、そこにはなほ研究の自由があつたではないかと。確かに嘗つては制限されてはゐたが研究の自由があつた。よろしい、わたしはそれを認めよう。そして、そのかぎりでは、ほとんど全く外飾にすぎなかつたとはいへ、なほ大學は學問の府らしさをもつてゐた。しかし、いまは? 大學はこれをすら完全に拋つにいたつた。それがこんどの事件である。

わたしはこゝで、しばらくこんどの事件を來らしめたところの客觀的な情勢に筆を向けたい。それは單にこんどの事件の意義をより明瞭ならしめるばかりでなく、なほまた、こんどの事件が決して當局の氣まぐれから出たもの、偶然的なものなどでは決してないことを示すであらうから。

我國の現下の一般的な社會=政治情勢から始めねばならない。現在の我國は帝國主義の時代にあるといふことによつていちばんよくその特質を云ひ表すことができよう。これは、日本が世界資本主義の一成員として以外には考へることができず、そしてその世界資本主義が疑もなく帝國主義の段階にあるといふだけではない。日本自體が歐洲大戰以後、最近においてますます強く、この段階に突入してきた。讀者諸君は我國におけるすばらしい資本の集積・集中を見られるがいゝ。今日、多少の誇張をもつて云ふならば、日本の經濟は三井、三菱の二つの大財閥によつて左右されてゐる。これに加ふるに世界稀に見る膨大な國家資本があつて日本經濟をば獨占の色をもつて強く染めてゐる。この勢は日増しに高まる。讀者諸君は、銀行合同にいちばん簡明に表れてゐるところの、昨春來の集中過程を一顧されるならば、このことを容易に理解されるであらう。

かうした日本經濟の推轉に對應するものは我國におけるブルジョアジーの政治支配確立である。我國のブルジョアジーは必ずしも早くから政治上における支配を樹立することができなかつた。いはゆる絶對主義的な諸勢力——藩閥、官僚、軍閥といふやうな誰れの耳にも相當に親しい言葉の意味するものはこれだ——に壓せられてゐた。しかるに、最近にいたつて日本のブルジョアジーは、上に述べた我邦資本主義の展開によつて獲られた經濟上の完全な優位を基として、政治上においても覇權を打ち建てることに成功した。今日では、それは、帝國主義ブルジョアジーとして、殘存しつゝある絶對主義的の諸勢力をその下に從へて、我國の政治を全く支配しつゝある。

これと對して、一方、上の資本主義の發展によつて必然的にその量を增大し、その階級意識を鋭くされた我國プロレタリアートは、その

戰列を擴大し、强化し、政治の舞臺にまで躍りあがり來つた。いまやそれは、步一步、ブルジョアジーに迫りつゝある。

かくのごとくである。現代日本において階級闘爭は、實に日を追うて、その激烈さを加へつゝある。この場合ブルジョアジーがその努力を主として向けるところは何んであらうか？　彼等の正面に大きく立ち現れ來つたプロレタリアートを打ち破るために、これを孤立させることである。かうした意味でブルジョアジーは、いま、他のあらゆる階級・社會層を自分の味方に引き入れるべく、そして强固なる反動の戰陣を整へるべくありとあらゆる手段と方法とを盡してゐる。こゝで法律・政治の領域においてそれらの努力がなされることはもとよりであるが、いはゆるイデオロギーの分野における努力も彼等にとつてこれに劣らず大である。なぜなら、思想的に民衆に背かれることは彼等の支配が覆されることの重要なる第一步を意味するからである。今日、我國の一般情勢はかうしたところにあると云ふことができよう。けれども我々は、さらに進んで、こんどの事件の直前の特殊な情勢をも充分に見なければならぬ。これがないならば、こんどの事件の意味は具體的には明かにならないであらう。

誰れでもが云ふやうに、現今の著しい現象はいはゆる政局の不安定といふことである。政友會と民政黨とがほとんど相等しい力をもつて政權を爭ひつゝあることである。わたしはさきに日本經濟が三井財閥と三菱財閥とによつて動かされつゝあることを云つた。政友會と民政黨とはこの二つの財閥の政治上における表現たるものである。これから了解されるであらうやうに、この二つの政黨の對立は別に根本的な意義をもつものでない。もちろん僅かな差としては政友會が農村に、民政黨が都市に地盤をもつといふやうなことを擧げうるが、それとても今日ではむしろ從來の傳統の惰性ぐらゐの意味をもつにすぎない。我々は政友會と民政黨の差異に眼を向けるよりも、この二つを合せたものの無產階級勢力に對する對立にこそもつとも多くの注意を拂はねばならぬ。政友會と民政黨と、二つのブルジョア政黨の對立はたゞ過渡的な意義をもつと云ひえよう。それはしばらくおいて、二政黨の政權爭奪に戾らう。この政爭に勝利をうべき方法はどういふ方向に存するであらうか？　それは、さきにわたしが述べた日本の一般的な社會＝政治情勢の必然的な方向にかなふものでなければならぬ。無產階級を孤立せしめて、廣汎な反動軍を形成するに適するものでなければならない。かうしたものであつた場合には民政黨はそれに向つて戰ふことができない。なぜなら、いま明かにしたごとく、民政黨もまたブルジョア政黨として無產階級諸勢力に對する對抗にその存在の第一の意義を見出すものだから。これを具體的に見るならば、勝利は絕對主義的勢力の殘滓——それは、、、、、、に現はれてゐる——ならびに都市の小ブルジョア層、農民層、さらには勞働階級の意識の低い層をできうるかぎり多く、味方に引き入れるときに、獲られるであらう。

こゝにひとつ我々の決して見落してならない事實がある。それは日

本においては、封建的なイデオロギーがなほ色濃く殘つてゐるといふことである。封建的なイデオロギーが、、、地主、官僚に、從つて、、、や、、、を强く支配してゐることは當然であるが、農村においてもなほはなはだ强い。都市の小ブルジョアすらもこれを少からず殘してゐる。それどころか、勞働階級の一部——遲れた、意識の低い層——までがこのイデオロギーに多少の程度においてなほ染められてゐることを我々は認めざるをえない。さうだとすれば、この封建的イデオロギーに强く訴へることは、上の否を味方にする極めて有力な方法でなければならぬ。そして、上に云つたやうな意味で、勝利を確實ならしめるひとつの途である筈だ。

——政友會の政策——鈴木內相の議會否認論、日本共產黨の檢擧、無產團體の解散はかうした意義を考へて、もつともよく了解されるものではないだらうか？　なんと彼等は『惡逆無道言語に絕したる不詳事であります』（田中首相、施政方針演說）ことを大聲叱呼してゐることか！

この政友會の遣り口は相當な成果を收めてゐる。貴族院、樞密院は、ために政府に有利に傾いてきたと云はれる。民政黨はどうにも仕樣がなくて手を拱いてゐる。例へば、勞農黨の解散に對して、十一月の諸新聞の傳へるところによれば安達總務は禁止が當然であることを云つてゐる。小ブルジョア層を代表する比較的自由主義的な新聞も、總選擧のときに强く政府を攻擊したのに引きかへて、こんどは決して反對の意志を表明しない。政府の處置はまさに、、、つたではないか！

（いふまでもないことだが、わたしが上で述べたことは、例へば、現議會において政友會が勝つだらうといふことを必ずしも結論するものではない。この問題を決するにはさらに複雜な多くの要素を考慮に入れて見なければならない。たゞ、わたしは政友會の最近の政策が我國ブルジョアーが向ふべき一般的な必然的方向にかなつてゐることを云つたのみだ。）

讀者諸君、かうした客觀的情勢において、政府が大學におけるいはゆる赤色教授の存在を誇張し、その放逐を喧しく叫びたてることは、そして實際に放逐することは、まことに必然ではないか！　すでに述べたごとく、我國の支配階級はイデオロギーの分野における無產階級の擡頭に恐怖し、こゝにおけるみづからの支配の支持にあせり拔いてゐる。彼等の大學をば彼等の手をもつてマルクシズム——この無產階級のイデオロギー！——から擁らうとする焦慮に燃えてゐる。しかも、その封建的イデオロギーに火をともされた社會の諸層は、まさにこのことに好適に反動的である。これこそ事を決行すべき機會でなければならぬ。いな、そればかりであるまい。政府をもつてすれば、大學における國賊の存在をわめき立て、これを處分して見せることは、前に云つた反動的イデオロギーにもつともよく投じるの路であらう。

かうしたところから今回の我々に對する壓迫はきたのである。それだからこそ、日本共產黨に別になんらの關係もない左傾教授の處分を

その檢擧に結びつけたのである。また、また大學内において少しも問題となつてゐないときに、こゝ、みづから左傾教授の氏名を新聞に發表して氣勢を煽るといふ陋劣極りない方法をとつたのである。

わたしはこれまで支配階級の大學内におけるマルクシストの彈壓の意圖、その奥に横る客觀的情勢を述べてきた。さらに大學そのもの〻うちにおける形勢を見なければならない。

大學がその自由のために政府と激しく抗爭したといふことは、華々しい昔語りとして傳へられてゐる。だが、はたしてそれはそんなに華々しいものであつたであらうか？　わたしは疑ふ。傳へられるところの抗爭は全く形式的な、別に思想的内容をもたないものである。そしてしかも、新興ブルジョアジーの强大な勢力を背後に擁うて、絕對主義の殘滓に弱い一擊を加へたといふほどのものではないか？　しかしそのことはおくとしよう。我々はこゝで次のことを注意すべきだ。大學がともあれ闘ふ意志をもつたことには、そのうちにいかにしても相容れないといふやうな矛盾物を含んでゐなかつたといふことが、あづかつて大いに力あつた事實である。云ひかへるなら、自分と本質的には異らないものであるから、それへの壓迫に抗したのであり、從つてまたそのかぎりで大學の自由を擁護したといふにすぎない點である。決して、その内容がいかなるものであれ眞理の探求に對しての壓迫はこれを斥りぞけるといふ意味をもつたものだとばかりは云ひえない。

今日の大學は全く事情を異にしてゐる。そこにはブルジョア科學と根本的に、本質的に對立するマルクシズムを奉ずる教授がある。また學生についても同樣である。ブルジョア教授が、彼等とはいかなる意味においても立場を異にしたマルクシズムの研究者を、信奉者を擁護するにあまり熱心でないであらうとは、およそ了解できる。それはかりでない資本主義の矛盾の曝露、資本主義の衰滅の過程への轉移に從つて、ブルジョア科學は全く理論的破産を遂げた。いまわたしはわたしに親しい經濟學に例を求めよう。最近のブルジョア經濟理論はなんらの進歩も示してゐない。たゞ極めて小部分の研究が、歷史的な研究が僅かにあるのみである。そしてたゞ舊來のものを衣を更へ、裝を新にして人々の前に示すにすぎない。でなければ、救ふべからざる支離滅裂の堆積があるのみである。珍妙な新説——新名稱——が唱へられることがこのことを物語つてゐる。曰く『、、經濟學』曰く何、等々と。彼等はかうしたたわいのない理論がとうていマルクシズムに敵し難いことをよく知つてゐる。そこでマルクシズムを憎むのである。殊に彼等は學生がマルクシズムに赴くことを嫌忌する。學生はマルクシズムに對して、正しい理論として、敬意と興味とをもつてゐる。頭のいゝ學生がマルクシズムに興味をもつといふのは、わたしが、マルクシストでない同僚からしばしば聞いたことである。わたしはさらにこのことについて、東京帝國大學内の事實を讀者諸君に物語つておきたい。學生で普通の講義に出席するものは在學生の割り合からいへば非常に少い。それは、講義に出席しないといふことが落第といふ學生に對する何よ

りの刑罰を招き易いことを考へ、殊に試驗の不成績といふ就職難の原因を間違なく負はされることを思へば、實に驚くべきほどに少い學生はかうした威嚇や恐怖をもつてしてもなほ講義に出席しないのである。それには學生の怠惰といふことも多分にあらう。しかし、同時に、講義の內容がいかに學生にとつて興味ないものであるかを物語つてゐるではないか！　ところが一方マルクシストの團體である新人會に行くと、まるで違ふ。會員が數人づゝ集つて、それぞれほとんど每日マルクシズムの理論の研究に從つてゐることは云はないとしても、新人會が主催となつて開かれる公開的ないろいろな研究會を見るがいゝ。そこでは、學校が終つて後に開かれ、マルクシズムの進んだ難解な理論が研究されるにもかゝはらず、多くの一般學生が、しかも驚嘆に値する熱心さをもつて集つてゐる。正直な學生はマルクシズムのみが唯一の理論だといふことをよく知つてゐるのである。

これらのことはブルジョア教授にとつて恐るべき脅威ではないか！ブルジョア教授がマルクシズムに對する彈壓に對して大學の自由のために戰はうとしないのは、むしろ當然と云へよう。マルクシズムが大學內にひろく行はれることは、ブルジョア教授にとつて決して快いことではない。だから、戰はうとしないどころか、マルクシズムに對する脅威と憎惡とは、彼等をして却つて彈壓を喜び迎へしめるまでもするのである。

もとより、大學においていはゆる大學の自主のために、學問の自由のために、戰ふ意志をもつ自由主義者が絕無なわけではない。「しきりに自由主義を口にするものが常に必ずしも眞正な自由主義者であるとはかぎらないことを、こゝで我々は忘れてはならないが。」けれども、それらの自由主義者は、自由主義が色褪せた童話となつてゐる帝國主義時代の今日、眞に鬪ふ力をもたない。彼等の多くは、たかだか、大學の自主、學問の自由の亡骸を抱いて滿足するにとゞまつてゐる。こんどの事件においても、文部省が直接に手を下さないで、大學が自己の發意で――だが、文部省の名指した教授をだ！　――處分したといふことをもつて大學の自主はなほ保たれてゐると云ひ、形式上本人が辭表を出したがゆゑにそこにはなんらの壓迫もなかつたと云つて、みづから慰めてゐる人があるではないか！

かうした大學である。讀者諸君は政府の彈壓のあつたことを、その彈壓に大學が脆くも屈したことを、もはや怪しまないであらう。繰りかへしていへば、むしろ大學が、よし全部ではないにせよ、彈壓を迎へたのである。

その結果はなんであらうか！　さきに述べた僅かばかりの研究の自由の完全なる剝奪である。讀者諸君もすでに氣づかれたところであらうが、文部省はいはゆる左傾教授の處分の必要を云ふに際して、こんどは實際運動に涉つてゐるといふことを理由として叫はなかつた。たゞ『左傾の甚しき者』と云つてゐる。『左傾の甚しき者』すなはちマルクシズムを熱心に研究し、その研究の結果を大膽に、率直に發表する

ものではないか！　さらに最近貴族院において一議員が『大學あたりでは危險思想の書物を國費で買つてゐるがこれは不都合とは思はぬか』といふ質問に對して、水野文相は『國費で危險思想の書物は買つてゐるが同時に健全な方も買つてゐるから差支へない』旨を答へてゐる。(四月廿八日、東日紙）今日全世界において無視することのできないマルクシズム——彼等の『危險思想』——を研究するためにこれに關する書物を買ふことは、それ自身で是非必要だとしては許されない。たゞ、ほかのもので埋め合せることによつてやつと許されるのである。どこに研究の自由が認められてゐよう！

讀者諸君は河上博士の辭職聲明書を讀まれたであらう。そして、京都大學が博士に退職を迫つた理由がどのやうなものであるかを知られたであらう。それは常識では考へ得ない馬鹿げ切つたものである。またわたし自身について問題とされたものは、さきにあげた二つのほかに、わたしが軍事教育に對して反對意見を公開の場所で表明したこと、ある無產階級雜誌の同人であつたことの類である。これらのことは、云ふまでもなく、一市民として自由に享受しうる事柄である。それゆゑ、今回の彈壓は、マルクシストが大學にあるためには一般市民のもつ權利をも拋棄せねばならないことを要求するものである。大學におけるマルクシストに對しては研究の自由がなく、一般市民としての權利もない。それはすなはちマルクシストがマルクシストとして大學內に在ることを許さないと云ふことである。マルクシスト入るべからず、から黑々と書かれた高札を大學の門に打ち立てたものではないか！　これが最高の學府か？　讀者諸君、大學は完全に沒落した

もちろん、このことはいま彈壓あつて突如として起つたものではない。こゝで再びわたしの個人的な經驗について語ることを許していたゞくならば、大學における反動的傾向は最近、殊に二三ヶ月來いちじるしく强まつてきた。研究の自由ははなはだしく狹められてきた。わたしは二三の事實を擧げようと思ふ。東大經濟學部においては久しい以前から教授、助教授、助手からなる『談話會』なるものがあつた。そこでは各自が研究を發表して、相互に討論することが行はれた。しかるに、最近、學部の首腦教授は、この會における討論が相互に不愉快な感情を釀す恐れがあるとだけの理由をもつて、有力なる反對意見があるにもかゝはらず、この重要な理論攻究の機關を多數の力を藉りて解散した。讀者諸君はいかに大學內において自由なる研究が嫌はれるか、いかに理論に對する熱意がなく不快な感情といふがごとき些細なことの前に理論が犧牲とされるかを見られるであらう。また、一、二ヶ月以前、『資本論』をドイツ語經濟學の教科書として用ゐるといふ要求が出されたことがある。『資本論』は今日廉價版も出されてすでに數十萬の人々に讀まれつゝあることは周知の事實である。これを大學において教科書とし、その內容がいかなるものであるかを學生に知らしめることは、なんらの差支へもないことである。いな、最高の學府としての大學は進んでこれをなすべきものであらう。しかるに多數は、教科書の選擇については擔任教授の要求を否決したといふ前例がないにもかゝはらず、時にこれに反對して葬り去つた。その理由とすると

ころは、例へば、『資本論』の内容の學的價値をでも云ふのならまだしも、たゞ世間の一部に物議を起すことを恐れるといふにあつた。しかもその際の世間の一部として、ある老教授は、『、、新聞』の記事を引合ひに出してゐた。讀者はこゝにもまた、いかに大學における理論研究の範圍が限られてゐるか、『、、新聞』のごときにおける俗論に抗して研究を進めやうとする理論に對する誠意がいかに缺けてゐるかの有力な證左を、必ずや見られることであらう。いまひとつ。近年において、大學が、助手、助教授等の職員を採用する場合の第一の條件が、その人の學識や才幹ではなくて、たゞ、マルクシストでないこと、マルクシズムに好意をもたないことであるといふのは隱れもない事實であるとされてゐる。

わたしはこれ以上のことを語るまい。たゞ上に擧げたことだけからしても、大學が最近において理論研究の場所たる性質を完全に喪失しつゝあつたことは明瞭であらう。大學は沒落しつゝあつた。たゞこんどの事件はそのことを全民衆の前に公宣したのである。大學が學問の府ではなくして、有產者の權力維持の機關たることを、有產者のイデオロギーの分野における階級支配の堡壘以外の何物でもないことを、聲高々と告げ知らせたのである。

もちろん個人について見れば、大學にはなほ極く僅かの數ではあるが、理論に對する眞實なる尊敬をもち、それゆゑに、ブルジョアジーのために靴の紐を結ぶことをもつてみづからの職分とは、斷じて考へない人がある。わたしはそれをよく知つてゐる。けれどもそれらの人々は、すでに今日においては思ふまゝの活動をすることを決して許されないであらう。わたしはそれらの人々の名を讀者諸君に知らすべき必要を感じるのであるが、このことすらが、それらの人々に迷惑を及ぼすであらうことを恐れて、敢てしないほどである。だから、それらの人々も大學の上に述べたやうな全體の性質を變へえないであらう。

大學は沒落した！

× × ×

一八八八年、フリードリヒ・エンゲルスは當時のドイツの情勢を述べて、『教養あるドイツ』から、『研究の結果が實際上に金儲けの役に立たうと立つまいと、、、の氣に入らうと入るまいと、さういふことには氣をかけぬ純學問的な研究に對する愛着が消えて行つた』ことを書いてゐる。『そして勞働階級にあつてのみ、ドイツの理論的性向が害はれずに存續してゐる。こゝでは、この性向は剿滅することはできぬ。勞働階級の間には、地位、貨殖、、、からの庇護などに對する顧慮は少しも存在しない。反對に、學問が、何物にも顧慮するところなく、何物にも囚はれずに進めば進むほど、勞働者の利益と要求とに一致するやうになるのである。』かうもエンゲルスは記してゐる。

現下の日本はまたこれと同じものを思はせないであらうか？ 大學はなほその壯麗なる建物と威儀を正した教授とをもつて、儼然と立つてゐる。しかし讀者諸君は、其處に『金儲けの役に立たうと、立つまいと、、の氣に入らうと入るまいと、さういふことには氣をかけぬ』ところの、『純學問的な研究』を求めることをもはや斷念されるがいゝ。讀者諸君！ いまや、眞の『理論的性向』はたゞ『勞働階級』の間にのみ見出されよう。

生存競爭と相互扶助

松村松年

世の中には生存競爭と相互扶助とを同格のものである樣に思ひ居るものもあるが、夫れは大なる誤りである。生物には二つの缺くべからざるものがある。即ち一は食物を得ること、他は子孫を蕃殖することである。食物は空氣や水の樣に無價にて吾々の口に入つては來ない。假令武陵桃源の昔時にありても其獲得に對して、相當の競爭の起つた事は疑はれない。又生物の性慾は最も强發の本能であつて、其獸道に對しても、誰れもが能く勝ち得ないのである。故に世には戀愛は死よりも猶强しと云ふ樣な諺がある。己れの會心の好配を得んと欲せば、必ずや相當の努力を要する。

其二つの緊要缺くべからざるものあるが爲めに、生物には常に競爭が起るのである。即ち生物の生存には、此二つのものが絶對の要件である。其食物を得る爲めに、個體の同盟する事があるが、此場合には相互扶助が其目的を達するに最も有力なる手段である。會心の妻を娶るにも友の扶けを得れば、更に一層其目的を達し易い。野蠻人が其食物を奪はるゝ時にも、其妻を掠めらるゝ際にも、多數のものが同盟し居れば、容易に侵害せらるゝ事がない。故に相互扶助は生存競爭の一手段であつて、蓋し攻守同盟に外ならないのである。而して生存競爭は生物界に有意識にも無意識にも行はれてゐる。余はこれより、人體內の生存競爭、同種間の生存競爭、異種間の生存競爭及び團體間の生存競爭を述べ、併せて其相互扶助の關係を詳說して見る。

一　體內の生存競爭

生物の體內には赤血球と白血球との二種が存在してゐて、前者は專ら滋養分を運搬し、酸化作用を起し、老廢物を取り除いて與れる。後者は單細胞の集團であつて、體內の巡警を主り、戰鬪士と云つた樣な防禦的の役目を勤めて與れる。即ち血液中にバクテリアや其他の病原體が侵入し來れば、白血球は直ちに其局部に到り、それを食つて仕舞ふ。若しバクテリアや原形動物の蕃殖が强く、白血球が之れと戰つて倒れた場合には生物の死が起る。體の一部に此戰鬪の行はれある時に熱が生ずる。此時が白血球が急を聞いて其戰場にはせ集まるの時である。

若し敵軍が優勢の場合には、白血球の死骸が累々として橫はり、そこに化膿の現象が起る。併しながら一度病原體を食つた白血球は、更に一層の力を養ひ來るが故に、其後强力の病原體が侵入し來つても、容易に之れを捕食する。免疫性とは則ち此事實を云ふのである。吾々の體內には絕えず色々のバクテリアや原形動物が口や鼻を通して侵入し來る。之れを防禦攻擊するの役目は則ち白血球にあるのであるが、然れども吾々は夫れを毫も自覺しない。例へば牛の疱瘡を人に移植すると、其白血球は此弱い病原體を食つて、益々强くなる。次ぎに强性の病原體が侵入し來つても、白血球は容易に之れを食ひ盡すが爲めに、毫も病氣に罹ることはない。血淸療法とは此理由に基き應用せられたものである。バクテリアや其他の病原體を食つた經驗のある强き白血球を病人の血液中に注射して、治療するのが卽ち夫れである。之れは恰も援軍の力によりて勝利を得るのと同じ理である。

元來白血球は同種屬の赤血球に對しては沈澱を生じないが、異種屬の赤血球に對しては一種の沈澱を生ずる。子供の病氣を救ふ爲めに、親の血液を取つて、遠心分法によつて白血球を分離し、之れを注射すれば、重患者も全治することがある。

斯くの如く生物の體內では、常に白血球が戰鬪士となりて、侵入し來る病原體を防禦し、之れと爭鬪し、敗れたものが死滅する。此戰は無意識のものであつて、白血球が病原體に對して戰はざれば生物は倒されるのである。卽ち人が銃劍を以て狼や虎と戰ふと何等異なる所はない。人が衰弱して無抵抗になれば、猛獸に殺さるゝが如く、白血球も亦衰弱すれば病原體を食ひ得ないで、其食餌となつて仕舞ふ。こんな無意識の生存競爭は人類の社會にも種々ある。眼前の敵を倒す丈が、生存への競爭ではない。クエーカ宗や印度敎の樣に無抵抗の敎義を有するものもあるが、これは蚊や蚤に向つても無抵抗と云ふのではあるまい。

二　同種間の生存競爭

生物は同種間の生存競爭によつて進步し、異種間の夫れによりて其興廢が定まる。同種類の動物が一定の場所で、同樣の生殖をなし、同樣の住居をなし、同樣の食物を求めるならば、必ずそこに爭鬪の起る事は當然である。鼠一匹の住へる場所に、十匹もの鼠が住すれば、無論九匹のものが死に絕えて、一匹の强きものゝみが生き殘る事になる。其內で少したりとも優秀の機關を具へ、好適せる環境に生れたものが他を壓して優勝者の地位に立つ事になる。下等動物にありては、總ての行動が先づ本能生活であるから、左程の經驗や敎育を要しないが、人間になると多くは腦力の競爭であるから、經驗を積み、敎育を受け奮鬪せざれば、直ちに落伍者となつて仕舞ふ。今日の社會は個人の安寧を法律的に保障して呉れてゐるが故に、下等動物にある樣な、他の食物を掠めたり、財產を奪ふ樣な事は、無論犯罪である。腕力的の暴行は野蠻時代の遺物であつて、之れを行ふものは、今や法律や社

會の制裁を受ける事になる。低腦者や病者や其他缺陷のある人間は、到底今日の競爭場裡に立つ事が出來ない。下等動物にありては「力は正義」であり、强者は之れを食ひ、弱者は食はるゝことになる。此場合には權利も義務もあつたものではなく、殺されたものが殺され損だ。故に動物は食はれない樣に、殺されない樣に、常に注意し、苦き經驗を積まざるを得ない。今日人間の社會にそんな恐怖は薄らいで來たが、祖先の蒙昧時代には、其競爭は恰も今日の下等動物に見る樣なものがあつたに違ひない。彼等は其生命を保全する爲めに、非常なる注意を拂つたのであらう。これが爲めに、其體力は極度に鍛へられ、腕力は大いに錬られた。此體力や腕力の萬能なる封建時代には、腕力的の豪傑が續出した。今日の現代に斯くの如き豪傑の現はれないのは、一は社會が其必要を認めない故であらう。今日の社會は假令體力を犧牲にしても、腦力を發達せしめんとするの傾向がある。これが爲めに過度の勉强によりて神經衰弱に陷る者が少なくない。これが爲めに今日は體育にも亦重きを置く樣になつて來た。即ち如何に頭腦明晰のものでも人間は動物の一であるが爲めに、動物性の體格の必要なる事が知れて來た。今日の文明は机上の空論では駄目だ、之れを應用して始めて價値がある。吾人は之れを實行する爲めに頭腦の努力を要する。今日の勞働者も腦力に正比例して、其能率を擧げる樣になつて來た。即ち現今の勞働は大に分業化し、機械を使用する樣になつたが爲めに馬車馬の夫れでは何等の意義がなくなつた。今日の文明はスピードの夫れである。即ち陸には自動車があり、海にはモーターボートがあり、空には飛行機がある。之れは腦力の發明である。而して之れを運轉するには相當の體力を要するが故に、體力と腦力とが相伴つて、今日の文明を築き上げたと云へる。

ネゲリーの自進說の如く、大凡生物は各自完全に到着せんが爲めに進化する內在力を有してゐる。然れど此生存競爭あるが爲めに、どれ丈此社會が進步したであらうか。之れが生物を驅つて益々進步發達すべき拍車となり、刺戟ともなるのだ。此生存競爭を嫌忌し、無抵抗の社會に隱遁せんと欲するものは則ち落伍者である。人類はアミーバの時代より、今日迄連綿として此生存競爭を繼續し來り、現代に文明を招來したのである。若し夫れ生存競爭を嫌忌するものがあれば、更にアミーバの昔に立ち歸り、其進化をやり直す外はない。而して刺戟なき競爭なき社會の生物は、條虫や蛔虫の如く眼も鼻も脚もなき動物に退化することを忘れてはならない。

吾人は今日社會を其有りの儘に繼續するには、男女二人の子供にて充分である。然るに人は其實、數人以上の子供を產出するの能力を有してゐる。條虫は約一億の卵子を産下するが、夫れも唯だ一匹の子供があれば、今日の均衡が保てる。菌の內でも狐の茶袋は數十億の胞子を産出するが、夫れでも其一胞子があれば、其均衡が保たれて行く。然るに生物界に何故に斯くも必要以上の胞子や卵子が産出せらるゝのであらうか。若し此等のものが完全に成育して行けば、夫れこそ地球

上は文字通りに直ちに立錐の餘地がなくなつて仕舞ふ。所が生物界には如上の事實や證跡が毫も認められてゐない。寧ろ今日の社會は生物の減少するのを見るのである。文明の大都會に近き山野には、何れの動物も荒凉寂寞を告げんとして居る。河海の魚介は大に其數を減じて來た今日にありては寧ろ親同數の子供でさへ成長し能はぬ世智辛き世の中となつた。子供二匹は先づ別として、殘餘の子供等は多く死滅する様である。若し生れた子供が寸分變らぬ形態と能力とを有してゐれば、其生れる子供の生死は先づ偶然であらねばならぬ。其生れて來たものに少したりとも强弱の差異があれば、强者は他の弱者を出し拔いて成長し、進んで優秀の地位を占むる事になる。吾々は犬の子供に於て見るが如く、他の同胞を押し除けて親の乳房に吸ひ付く子供が、益々肥滿して成長し、親の乳房に吸ひ付けないものが益々衰弱して遂に死滅するのを見るのである。運動競技に於て、時に優秀者の偶然にも轉んだり負傷したりする場合のある様に、自然界にも亦强健なるもの丶倒れたり、負傷したりすることがある。早く飛び出した小鳥が鷹に攫まれ、翼脚の負傷して飛べなかつた同類のものが、其襲擊を免れたと云ふ様な例外もある。然れど生物界では、强者は稍々絶對の能力を發揮してゐる。走るに拙なき兎は狐の爲めに捕はれ、飛ぶに拙なる虫は、雀の爲めに食はれて仕舞ふ。斯くの如く同類間にありても、個體に同一なるものなきが爲めに、弱者が死滅し、其內强きものが生き殘る。畢竟其處に生存競爭の面白き意義がある。之れは敵に食はれない爲めの競爭に於ても、亦敵を食ふ爲めの競爭に於ても同一である。生物に總て變化性あるが爲めに、益々優秀なるものへと變化して行く。之れが卽ちダーウヰンの自然淘汰の現象であつて、これを說明するものが卽ち此生存競爭である。

同種間の競爭に於て最も重要なるものは其環境である。古人は英雄の起る所地形良しと曰うて居るが、之れも亦此意味に於てゞある。如何に優秀なる體格や腦力を有して居つても、北極の寒國にありては充分夫れを發揮する事が出來ない。如何に文明が發達して居つても、如何に人類が進步して居つても、常に天災を被る樣な地域には到底充分なる驥足を伸ばし得ない。古來雄大なる自然の風光を背景とする秀地に大人物が現はれて居る。然れど又時運に際會せざれば、如何に英雄も豪傑も其大業をなし得ない。武陵桃源の樂園や、甘露の滴たるエデンの園には何等の刺戟がない。過度の寒暑は人類の行動を阻害するが、さりとて南方の伊太利や地中海の沿岸に住する人間には、大なる刺戟がない。蓋し人類の進化には四季の變化が必要であるからだ。南洋の如き年百年中夏季なれば、そこには到底優秀なる人間を造り得ない。

今日の最も進步せる文明人は、何れも朔風凛烈たる冬季を有する國土に住居してゐる。此自然と惡戰苦鬪する所に、此自然を征服する所に進步發達がある。一二月の冬季を經過すれば、南風駘蕩の春を迎へ花笑ひ鳥歌ふの天地に、人類の向上發展がある。クロポトキンの云ふ樣な、五月頃に雪の降るツランスバイカルの平野には、推化の餘地が

ないのだ。春夏秋冬の四季を有する國土の人間こそ、正に自然の寵愛兒である。彼等に獨り文明の先驅者となり指導者となり得るのである。最も競爭の劇甚なる所に、最も大なる進歩發達がある。鳥なき里の蝙蝠には餘り進歩發達がない。これが生物の今日迄進歩し來つた唯一の過程でありとすれば、吾人は此競爭を嫌忌してはならない。此競爭に直面することによりて、吾人は益々進化發達する。之れを避くる者は落伍者であり、此競爭場裡に立つ能はざる者が、無能者である。此意味に於て人類の成功者は競爭場裡の成功者であり、而して寄生的の生活者が多く現はれ來れば來る程民族の滅亡ともなるのである。

同種間に相互扶助の行はるゝ場合は、利益の交換の行はるゝ場合で、これは多く一夫一婦の動物間に於て行はれてゐる。然れど其相互扶助の行動は依然として生存競爭の爲めの夫れであつて、決して生存競爭の現象と同格のものではない。濠洲にフイアと稱する椋鳥に似た鳥が居る。其雄の嘴は尖つてはゐるが、短かくして九官鳥の夫れに能く似て居る。所が雌の方の嘴は其倍長もありて細く弓狀に彎曲してゐる。元來何れの動物も雌雄の性質が異なり居りて、それが恰も歯車の如く互に食ひ合つて滑車の如く運轉するのである。所が此鳥にありては其性質のみならず、嘴迄が互に相助け相扶けられる樣になつてゐるから、其共同生活の必要なる事は爰に説明する迄もない。何れの場合に於ても相互扶助は能力の交換を意味するもので、理論的には其能力の同等を前提とする。弱きものや、無能なるものには、純然たる相互扶助の能力がないのである。官業より何れの形式に於ての恩惠を受くることも、一種の寄生的行爲である。故なくして他人より物を貰ふの觀念はホッテントットの樣な野蠻人にはない。物を交換する事は、金にせよ、物品にせよ、利益の交換であるが爲め、夫れは所謂相互扶助の行動である。故なくして他人より物を貰ふ事は、寄生の現象であつて乞食の他人より物を貰ふのと何等異なる所がない。

二個體が相扶け合つて利益を受くる場合に、第三者は損をして居る。蓋し相互扶助の對象は、何れも己れの利益や幸福であつて、第三者は之れが爲めに不利益を被る理になる。

人間には他人はどうでも良い、自分さへ良ければ良いと云ふ本能を有してゐる。他人に迷惑を掛けても、何とも思はないのが人間性である。生物は子孫を永遠に存續せんとする本能を有し、之れが爲めに自身に生くるの必要がある。而して其生きるには、必ず食物を要する。而して此食物は今日にありては、競爭にあらざれば得られない。自己の暖衣飽食は、他人の寒に泣き、饑に叫ぶ事になる。自己の蓄財は他人の貧乏する事になる。自己の享樂は他人の困憊する事になる。自己の名譽や出世は他人の嫉妬になり、自己の利益は他人の損害となるのが、人間の社會である。一定の財産を有する社會に、自己にも好く他人にも好いと云ふ理由のある筈はない。一方に大廈高樓が出來れば、又一方には弊屋が現はれて來る。蓋し總ての人間の共存共榮は何れの社會に於てもあり得べからざるものである。

富者が益々富を得れば貧者は益々其貧の度を增して行く。之れを要するに相互扶助はお互に利益のある場合に起るもので、不利益なる場合に起るの理由はない。若し夫れ夫婦間の相互扶助となれば、それは純然たる相互扶助ではなく、寧ろ消極と積極の一體となれる共通の夫れである。所謂エレンケイの一個人が二個人となりたるの感じを抱かしむるものが夫婦の夫れであらう。

三　異種間の生存競爭

異種にも類似のものと、非常の差異のあるものとがある。而して後者の場合には、假令同地にありても餘り競爭は行はれないが、之れに反して前者のものになると、同種間の夫れの樣に、其競爭は仲々烈しく遂には强者が弱者を賤する事になる。彼の貧乏草が農作物の種子に混じて一度吾が國に輸入せらるゝや、數年ならずして大蕃殖をなし、今では如何なる寒村僻地にもそれを見ることが出來る。卽ち此雜草の蕃殖力の强きが爲めに、他の雜草の生存が出來なくなつたのである。嘗て米國より苜蓿が輸入せらるゝや、日本在來の紫雲英の影が大に薄らいで來た。彼の樺は日陰で成長しない植物であるが、之れに反して樅は日陰でも日向でも能く成長するが故に、同地にある樺を凌駕して益々其枝葉を繁茂せしめる。そこで樺は益々日光を得んが爲めに、上へ上へと高くなり遂には枯死することになる。密林に於て樹木の上に細く延び行くことは、畢竟日光を得んが爲めの競爭に外ならない。河畔の雜草の多き所に柳を植うれば、時ならずして柳は廣く枝葉を繁茂さすが爲めに、獨り日光を受け、下の雜草には日光を與へない。又地中には廣く根を張りて其養分を吸收するが爲めに、雜草の生活が困難になり、遂には枯れて仕舞ふ。此柳と雜草とは餘程種類の遠き植物であり、其間に何等生存競爭の起りさうにも見えないが、夫れは蓋し其生態が個々一致せるが爲めに外ならぬ。

吾々は酸素を得んが爲めに、常にバクテリアと競爭してゐる。更に吾々は新鮮なる空氣を吸收せんが爲めの競爭に接面する樣になつて來た。文明が進むに隨ひ、都市が大なるに伴ひ、益々其競爭の度が高まり行くに違ひない。紐育の如き八百萬の人口を有する大都會になると日光を得んが爲めに今や大なる競爭が起つてゐる。無論家屋も之れを建設せる土地も、之れに要する材料も、何れもが競爭にあらざれば得られない。吾々の食物は他人種や他動物の要する蛋白質や、澱粉質や脂肪質と同樣であるから、競爭の起るのは理の當然である。故に異種間の競爭によりて、各種族の榮枯盛衰が分かれて來る。畢竟食物の豐饒なるものが何等の不安なしに生活し、其豐饒ならざるものが困憊して、餓死する事になる。民族と民族と相對峙する時に、どうしても肉彈の頭數が必要なのである。夫れに食物が充實すれば、必ず優勝する事になる。勝つたものが榮え、敗けたものが衰へるのは理の當然である。加ふるに最も好適せる氣候や、耕作に適せる沃土や、其他交通に便ある地形を具備するに於ては、鬼に金棒である。斯くなれば人は常

に文明の頂點に立ちて、富國強兵の實を擧ぐる事が出來る。若し夫れ敗者の地位に立てば、不利なる環境に沈淪せざるを得ない。彼の臺灣に住する生蕃は、生存競爭の敗者であるが爲めに、今や山間僻地に栖て籠り、總ゆる方面に消極的の生活をなしてゐる。生存競爭の劇烈でない北極に行けば、劣等人種のエスキモーが居住してゐる。彼等は他民族と競爭し得ざるが爲めに、そこに止むなく居住して居る。然しながら、山間僻地や北極や南極にありては、人生の意義ある生活は出來ない。其天地は蓋し劣敗者の天地でもある。而して彼等は爰では自然と戰つて別途の生存競爭をなして居る。生物の住所には山もあれば川もある。森もあれば、野原もある。砂地もあれば泥地もある。其他日蔭もあれば日向もある。或は沃土と云ひ、瘠地と云ひ、或は水中と云ひ、空中と云ひ、其生物の住所は決して狹くはない。優勝者が假令山に勝つても、必ずしも海で勝つとは限らない。河童も陸上に上がれば無能なるが如く、狼も水中にありては何等優秀の技能を現はし得ない。之れが抑も動物分布の異なる所以で、これ又自然の面白き配劑である。彼の生蕃は臺東の山間にありてこそ恐るべき獰猛の人種であるが、平地にありては何等恐るべきものでない。

　生物界に生存競爭の起る所以のものは、蓋し食物や其他必要品の同一なるが爲めであるから、其食物を異にせる植物と動物との間に競爭の起る理由はないのである。植物は太陽の光線によりて、澱粉や、蛋白質や、砂糖や、脂肪や、其の他の炭水化物を造つて與れる。之れに反して動物は其製造物を食つて成長し、死しては植物の肥料となり、又復其輪環の過程を繰り返してゐる。畢竟動植物は相利の共棲をなし居るもので、生物界に於ける大なる意味の相互扶助でもある。鳩は穀物を食ひ郭公は蛄蟖（けむし）を食ふが爲めに、競爭を起し得ない。斯く動物には食草性と食肉性とがあるが爲めに、互に相犯することなく、長時一ヶ所に棲息することが出來る。馬と兎との間に生存競爭のなきが如く鶏と目白との間に其地位を爭ふの喧嘩のなきが如く、大小餘り差異のあるものにありては、全く相撲にはならないと見えて、假令其食物が同一であつても、其間に直接の競爭が起らない。故に幾ら雀が居つても、鳥の存在には何等の不都合はない。如何に鹿が居つても、鼠の存在には何等の不便がない。況んや求食上異なつた生物を混じて置けば自然界では一定の區域内に多數の生物が居られる事になる。これ恰も一升の桝の中に芋を一杯容れても、豆なればまだ幾らも容れるの餘地はあるが如く、更に其中に粟粒なれば、一層多くの數を容れ得るのと同じ理である。

　近來歐洲より伊太利種の蜜蜂が我が日本に輸入せられた。其蜜蜂は多くの蜜を花間より採集するの性能を有し、其蕃殖力も亦一層強いので、到る所に蕃殖せらるゝ樣になつた。之れが爲めに伊太利種が今では日本在來の蜜蜂を壓倒して、大に其數を減少せしめた。これは恰も濠洲にて歐洲産の蜜蜂を輸入せしめた爲めに、在來種の年々減じ行くのと同樣である。著者の子供の時代には褐色の大なる蜚蠊（ごきぶり）が中々多か

つた。處が、今日では小形のチヤバネゴキブリが歐洲より移動し來り、大蕃殖をなして大形のゴキブリを追放したと見え甚だ稀となつた。昔時歐洲に居つた鼠は全部黑鼠であつたが、今では亞細亞産の鳶色鼠が移動し來り、遂に其黑鼠は甚だ稀になつた。鳶色鼠は餘程强きものと見え、今では何れの地方でも蕃殖してゐる。彼のニユージーランドの如きはそれが爲めに、在來種の鼠を全く驅逐して仕舞つたと曰はれてゐる。又明治十四五年の頃、吾が日本犬の全部が耳の尖つた、今日のアイヌ犬と同樣のものであつた。處が外國より輸入せられた犬の爲めに、今では在來の日本犬が何處にも見られなくなつた。これは雜混の結果優性なる混血犬となり、遂に其地位を奪つたものと見える。今日吾が國に純粹の日本犬の見られないのは、恰もメキシコの住人が全部混血兒であつて、純粹の土人のタイプの見られないのと同樣である。

異種間の相互扶助になると、中々面白きものがある。相互扶助は、異種の動物が共同して共通の食物を得るの場合と、敵の近接を警戒する場合とに起るの現象であつて、之れも亦生存競爭の一手段に過ぎない。狼と狐とは平時食物の競爭をなしてゐるが、夫れでも獲物を狩する時には合同することがある。即ち兎や其他の小動物の平時通行する道に狐が待ち伏せてゐて、狼が其獲物を追ひ込んで來る。平時泥まない仲の惡しき人でも、利益の爲めには相共同して他人を陥れ、其財産を掠奪せんが爲めに、共謀することがある。狐は狼の爲めに、徒勞の働をなす樣な馬鹿なものではないし、狼も亦然りである。而して其共同の行動は必ず相互に利益のある場合に限られてゐる。他人に利益なき場合の行動に向つては、相互扶助の言語は當て嵌らない。故に狼と狐と相共同して其獲物を狩する時に於てのみ異種間の相互扶助が行はれるのである。

彼の四十雀の群中に柄長や山雀等の小鳥を混じて居る。これは食物や習性の一致するより起つた偶然の共同生活であるが、之れは相方の求食に大たる便利があるに違ひない。彼の印度に産する研鮮鶯に近きオリオールは尾長鳥の群に混じてゐる。これは相似たる羽色を有し、前者は後者を模倣してゐるが爲めに同棲し居る方が有利であるが、後者の方には何等の利益がない樣である。これなれば無論片利の共棲であつて、相互扶助の現象にはならない。濠洲には有名の三眼の蜥蜴が居つて、其巢穴に海燕やカイツブリの樣な鳥が同棲してゐる。此蜥蜴が穴を掘りて、其內部を擴げる場合には、宿主は常に右方の室に居を占め同居者を左の室に住まはしてゐる。不思議なことには、其鳥自身と其子供とは己れの巢に同棲を許してやるが、他の同族の鳥が來れば、直ちに追ひ拂らて仕舞ふ。時に其頭を以て其穴を閉塞し毫も他動物の侵入を許さない。

北米にプレリードツク(モルモツトの一種)と稱する穴居の動物がゐるが、これは一種穴居性の梟を同居せしめてゐる。此穴には時に猛毒を有するガラガラ蛇を同居さす事もある。又時には鼠の宿をなす事もある。南米のプレリードツクになると犰狳や大形の蜥蜴を同棲せしめて

居る。ガラ〳〵蛇は宿主に對しては平和の客であるが、時には其子供を食ふので、有害なる場合がある。彼等の生活は、利益を交換し居る相互扶助の關係にあるかも知れないが、それは未だ能く知れてゐない。然しながらガラ〳〵蛇の宿主の子供を食する樣な事は確に寄生であり、殺兒罪でもある。

北米にパンテオンと稱する一種の海鷲が居つて、其巣の内に色々の雀科の鳥に巣を造らしてゐる。時には鷺にも亦其巣を造らす事がある。又食蛇鷹の一種で、色々の小鳥に巣を造らしてやるものもある。これ等の小鳥は鷲や鷹に保護せられて、親舟に乘つた積で、同棲し居るとは又面白いではないか。鷲でも鷹でも食肉性の鳥であるに係らず、之れを捕食しないで、反つて之れを保護して居るの本能は、實に不可解である。鳥でも鷲や鷹の樣な強大なるものとなると、弱きを助ける樣な性能があるのではあるまいか。所謂窮鳥懐に入れば獵夫も之れを捕へないと云ふ樣な、義俠的の本能がありやしないか。之れは片利共棲であるや或は相互扶助の關係にあるや、未だ判然しない。夫れとも鷲や鷹はこれ等の小鳥を囮となし、之れを漁らんが爲めに來る他鳥を捕食するのではあるまいか。これは蟻が其巣中に蟋蟀の一種を養ひ居る樣に、或は吾々が玩弄的に小猫や小犬を飼つてゐる樣に、一種道樂の爲めの共同生活であるかも知れない。

鳥と獸との相互扶助になると更に一層面白きものがある。兎の居る所には多く鳧(千鳥の一種)が同棲し居つて、其襲撃せんと潛み來る狐の存在を知らしめる。彼れは狐の到る處に追ひ行き、ピー〳〵と高聲を發して其存在を裏切る。狐に如何なる隱術があつても、如何なる智袋があつても、夜間交代に不寢番をしてゐる鳧に對しては、何等の術を施す事が出來ない。兎は常に鳧と共棲して居れば、狐の恐ろしき爪牙より脫する事が出來るのである。濠洲には多數の水牛が放牧してあつて、之れには多くの鵲が伴うてゐる。即ち鳥はこれ等動物の背上に棲止して、吸血性の蛇や蝿を捕食して與れる、之れが爲めに鵲が共背上に棲まり居りても、彼れは平氣である。本邦でも往々烏や鶺鴒が牛の背上に棲り、蝿を食うてゐるのを見ることがある。鳥は元來鋭敏であつて、其五官の内でも、殊に眼の如きは、他動物に冠たるものである。濠洲の生蕃が鳥の鳴際によりて、其去就を決して居るのも亦大に曰くがある。鳥には暴風や其他の天變地異を前知するの本能があると曰はれてゐる位である。獸類が此銳敏なる小鳥と相共棲し居ることは其危險の切迫せる際に、大なる利益がある。これなれば蓋し相互扶助の行動であり、相利の共棲でもある。それもお互を保護する爲めの外敵に對する共同の行動であつて、畢竟生存競爭の一手たるに過ぎない。これと同樣に阿弗利加では犀鳥(椋鳥の一種)は犀の背上に棲止して、之れに寄生する蜱や其他の害虫を捕食してゐる。所が近來になつて、此鳥は家畜の傷口より吸血する樣になつて來たと曰はれてゐる。此鳥は象の背上にも棲り、其蜱を捕食する事もある。倘東阿にメロプブスと稱する喰蜂鳥があるが、之れは一種の野雁と共棲してゐる。此

鳥は澄まし込んで、野雁の背後に乘りて其飛び來る蠅を捕食して居る。之れは時に羊や山羊や其他羚鹿の背上にも棲りて蝨を捕食してゐる。

埃及に産する一種の鳧が鰐の開きある口の所に行き、其歯の間に挾まりある食物の殘物や蛭の樣な害虫を採つてゐる。これは其大なる口を開いて其鳥を入れてやり、又時には其儘之れを閉塞する事がある。而してこれは恰も己れの子供を取り扱ふ樣に愛撫してゐるらしい。小鳥は鰐の口を掃除する都度其食物を得るのである。其鰐に利益のある掃除に對して、彼れも亦小鳥を愛し、保護し、爰に相利的に共棲してゐる樣である。これも亦相互扶助の行動たるに違ひない。

如上の事實は、動物界には敢て稀ではない。而して其相互扶助の行爲は何れも利益の交換であつて、漫然宿を借したり、食物を供給すべきものではない。人間でも漫然と慈善行爲を施し、無償にて衣食住を提供するものがあればそれこそ共倒れだ。一人の無能者を養ふには、一人の有能者を犠牲にすることになる。否な慈善の行爲は徒に浮浪の人間を助長するのみならず、奮闘努力の精神を消耗することにもなる。伊太利の如き浮浪の人間の多きは、蓋し其宗教が然らしめたのであり、印度の今も猶獨立し得ざるは、其無抵抗の宗教が禍をなしてゐる。乞食的や慈善的の行爲には、毫も相互扶助の表現がないのである。

四　團體間の生存競爭

生物は本質的に自己本位である。自己滿足を以て奮闘の對象となしてゐる。然れど蜜蜂の社會や白蟻の社會になると、其團體が本位であるから、夫れが個體と同樣に生存競爭をなすのである。總て團體内にある蟻や蜂は、夫れ〳〵分業的に活動してゐるが、若し一匹の怠惰者や不具者があれば、他の健全なる一匹の蟻や蜂の勞働を犠牲にすることになる。故に共産的の社會に於て、最も重要なる前提は、勞働者の能力の均等し居ることである。少したりとも能力に不均等がありては、則ち共産制度が成立しない。彼等の内には或は遠く野外に出でゝ食物を捜索するものがある。或は女王の子供の爲めに巣房を造るものがある。或は之れに食物を與へ、寒冷の候には地下に深く携へ行き溫暖の候には、日光の照り輝く上層に運び行く等、夫れ〳〵分業的の活動をなしてゐる。其活動は何れも合理的の樣に見えるが、夫れは稍々嚴格なる本能の軌道に縛り付けられてゐる。故に此社會には先づ怠業的のサボタージュを見ることはない。

蜂の巣でも蟻の巣でも、女王の一匹に對して數百の雄が生れる。元來雄は彼等の社會に怠惰者と呼ばれ居るもので、毫も食物を捜索したり、造巣の任務に當つたり、姆母の役目を遂行したりしない。然れど他の同類が採集し來れる蜜液は、働蜂と同樣に貪食する。彼等には巣房を造るの能力なく、巣を保護するの毒刺がない。故に性交後は此團體に對して何等の利益がない。夫れも一女王に對して唯だ一匹の雄蜂があれば足れりである。故に彼等は女王の性交後は働蜂や職蟻によりて、條件なしに巣外に放逐せらる。彼等は其社會に無益なるのみな

らず、徒に食物を貪食するが爲めに其一匹の存在も有害である。之れは共同生活の資格なきもので、畢竟寄生的のものである。恰も吾々の體軀に於て、手や脚や眼が夫れ〲分業的に働かないで、其の機能を失する時に、それ等の存在が遂それ自身に有害であるが如く、勞働せざる、而かも毒剌を有せざる雌蜂や雄蜂の增加は、其社會を亡ぼすことになる。數百億の細胞より構成せらるゝ人體に於ても、數萬の同類を有する蜜蜂の社會に於ても、協力一致の行動の行はれざる時に、其社會の破滅となり又人體の死滅ともなる。

彼の有名なるクロポトキンは、動物界の相互扶助は動物の生死に大なる關係があるが如く、人間社會の文明の進歩にも亦大關係があると云うてゐる。然れど相互扶助の動物間に行はるゝの範圍は甚だ狹く、夫れも自身の屬する團體生活や、民族生活の內に限られてゐて、其團員の多くなればなる程、今日の道德の如く益々廢退し行くのである。利益を交換せざる他の民族に對しては、夫れは到底行はるべき性質のものでない。最高の動物、最高文明の第一線に立てる人間でも、他人を愛し、同情の涙に咽ぶと云ふものがあれは、夫れは自らの屬するの團體か、それとも親族關係の何れかであらねばならぬ。それとて多くは物質的の援助にあらずして、同情や憐憫の念に止まるだけで、其物質的の同情も亦恒產ある場合に於てのみ行はるゝのである。彼の孔子の謂つた樣な、身を殺して仁をなす的の道德は、今や舊式となつた。今回の關東に於ける大地震の如きは、即ち其然るを知らしめた。彼等は同じく日本人であるが、身を殺して仁をなす的の行動は到底見ることが出來なかつた。人は安全第一であるが故に、他人の爲めに自己を犧牲にすることは、國家としても亦大なる損失である。然れど人を扶けて自ら愉快を貪るの觀念は、假令利己主義であつても、夫れは進化したる利己主義である。而して其行爲は大に獎勵すべきである。然れど現代の社會に色々の民族の相對峙しある時に、而して爰に民族と民族との戰端を開き、干戈に訴へる時に、自國民族の協力一致、相互扶助は大なる一種の武具である。此場合若し他國民を扶助する者がありとすれば、それこそ裏切者で、國賊である。此場合、世界同胞主義や、博愛主義を宣傳し居れば、遂には協力一致せる民族に滅されて仕舞ふ。

人體に胃なり、肺なり、其他心臟の諸器官が夫れ〲聯絡せる行動を取らず、謀叛を企つる樣では、直ちに體の死滅となるが如く、一民族の間に不具者や白痴や浮浪者や、其他寄生的のものがあれは、ある程、其民族は危殆に瀕して居るといへる。何れの場合に於ても、協力一致せる國民が、分業的に活動すれば、必ず優勝する事になる。國家の爲めに協力一致して、分業的に夫れ〲活動する所に、擧國皆兵の實がある。其覺悟さへあれば、民族は正に强いものだ。然るにクエーカ宗の如く、何れもが無抵抗になれば、其屬するの民族は亡んで仕舞ふ。汝は戰鬪士たれ、吾れは之れを嫌忌すと云ふ樣な、不和の人間が多く現はれ來り、甲が右せんと欲する時に、乙が左する樣では、夫れ

こそ國家の滅亡だ。

彼の我利〳〵の狼も牛馬を攻擊する時は、數十匹ものものが相同盟して一團となり、遂に彼等を倒して仕舞ふ。人間も强敵が現はれ來れば、平時仲の惡き團體も、相和して其强敵に當る。今回の歐洲戰爭に際し、獨逸の强敵に對抗する爲めに、平時餘り親まざる世界各國の民族が互に相同盟して、遂に獨逸を倒したのである。狼が共同して牛馬を倒した場合に、元の喧嘩好きな我利〳〵に還るが如く、世界の强國も亦獨逸を倒せば、其同盟を解散し、自國本位の我利に還元したのである。彼のダーウヰンと同時に進化論を唱導せるウオレースもクロポトキンと同樣に、相互扶助を力說してゐる。彼れは人間社會には相互扶助の必要あることは無論であるが、夫れは共產的でなくてはならぬと言うてゐる。彼れは熱心なる天主敎の信者で、其死する前の論說は何れも舊式な宗敎的の觀念に捉はれてゐた。然り宗敎家には往々斯くの如き考へを抱いて居るものがある。これは蓋し人類同胞主義とか博愛主義の信條を遵奉する宗敎上の觀念より誘發せられたものであつて、夫れは國家を形成する民族にとりて、正に大なる危險思想である。吾々敎育あるものは、宜しく大なる注意を以てこの思想に臨まざるを得ない。種々樣々なる單位より成立する個體、連生體、群體、家族、種族若しくは國家民族に於て、其之れを構成する單位が何れも權利、義務、財產等を平等に持たすべきものであると主張することは、勞働せざる怠惰者にも亦之れを平等に保有せしむる事になる。

動物の體も社會の體も、何れもが一種の聯體機關である。動物體に於て或る器官が勝手に餘計の食物を攝ると、體の生理作用が破壞せられて病氣となり、遂に個體が倒れることになる。又或る機關が餘分の分泌物を製造しても、全體に禍をなすのである。人間の社會にあつても、個人の孜々兀々として貯蓄せる財產が、朝より酒色に耽溺せる人間に分與せらるゝ事になると、夫れこそ人間の奮鬪の刺戟を消失せしめることになる。否な體力に於ても腦力に於ても、人間の技量は蟻や蜜蜂の夫れの樣に平等なるものではない。其無能者と有能者との差別は、殆んど無限で、爰に霄壤の差別がある。其差別は蓋し生存競爭を基調とせる奮鬪努力によりて定まるもので、若し生產主義の下に競爭なくして、衣食住が得らるゝものとすれば、それこそ生物界の原則は破壞せらるゝ事になる。此原則に逆行するものが滅び、之れに順應するものが進步發達する。この事は生物學が明瞭に吾々に敎へて吳れる。今日の世界は民族や國家を以て單位となしてゐるが故に、恰も個人間に生存競爭の行はるゝ樣に、團體を單位とする競爭の、團體間に起るのは理の當然である。即ち生存競爭に有利なる性質を帶びたる團體が勝ちて榮え、不利の性質を帶びたものが破れて亡ぶ。然れど一方吾々は世界共通の利益や文明の爲めを考へざるを得ないのである。我利〳〵の爲めに文明を破壞する國民は、今や社會より葬られんとしてゐる。故に守錢奴となり、世界の文明に何等貢獻せざる一部の猶太人は今や世界の嫉忌の的となつてゐる。獨逸は曾てミリタリズムの張本で

自耳義との條約を反古同樣に破棄したことは、人道の無視であると看破せられ、世界共通の敵と明破せられた。是れ、恰も烏が近隣の烏の巢の材料を泥棒せる時に、夥多の烏團によりて懲戒せらるゝと同樣に、世界共通の道德の破棄に對しては、其制裁を受けるのは理の當然である。如斯不道德や不合理極まる、然かも傍若無人的の行爲をなす者は、他の民族の制裁を受くる事になる。

鶴や燕が氣候を追ひ、大海を横ぎつて大陸より大陸に移動するが、翌春になりて一陽來復して故鄕に歸り來れば、必ず先年の巢のある所に巢を造る。雀は年中他國に移動しないで、常に同じ家の軒に巢を造つてゐる。若し一羽の横着者が同僚の造つた巢を奪つたり、否な其一筋の藁を奪つても、其仲間は必ず之れに制裁を加へる。團體的の社會をなしてゐる動物間にも亦多かれ少なかれ、共通の正義の觀念がある樣である。自己の團體の一致協力を計る爲めには、社會の制裁が必要である。横着者が多くして、他人が己れの奮闘より贏ち得たる財産を横掠する樣な人間が、社會に蔓延すれば、それこそ其社會の滅亡である。然れど甲乙の團體間にありて食物が缺乏したり、住所の狹隘を告ぐる樣になれば、お互に死を賭しても戰端を開き、之れを爭奪するのは理の當然である。之れは最も合理的の相互扶助の行はれて居ると曰はれてゐる蟻の社會にも、普通なるを見るのである。此場合には、お互に正義の觀念も亦道德の觀念もないのである。彼等は戰はざれば食ふに糧なく住むに家がないのである。これは個體であらうか、團體であらうか、必ず起り得べき生物界の歸結であつて、夫れは唯た時の問題に過ぎない。甲乙兩團體の間の戰爭になると、自己の立場が各異なりあるので往々孰れに正義のあるや、第三者にあらざれば判然せざる場合が少なくない。己れの不正を知つて戰端を開くの民族は、先づあり得ないのである。故に今日では國際聯盟とか國際裁判なるものが設備せられて第三者によりて中立裁判が行はれる樣になつて來た。これが爲めに戰爭の度數が減じ、勃發すべき戰端の阻止せらるゝ事は往々あるに違ひない。然れどいざ己れの民族の滅亡すると云ふ樣な、危き瀨戸際に立ち到れば、何等左右を顧慮するの暇はない。彼等は危險を犯しても猶戰はざるを得ないのである。假令國際聯盟の機關はあつても、いざ自國に不利であれば、夫れを脫會すると云ふ樣な國のある間は餘り賴りにならないのである。

或る强國は一回ならず二回迄も國際聯盟に軍縮會議を提出してゐる。嘗て羅馬はカルタゴに對して勝算なきを知るや、軍備縮少案を提出して之に應ぜしめ、遂にカルタゴを亡ぼした。家康は冬の陣で大阪城の濠を埋めしめ、夏の陣で豐臣を亡ぼしてゐる。歷史は常に同じ事を繰り返してゐるのである。抑も一國が他國に對して、絶對優秀の地歩を占むる事は、斷じて平和を確保するの道ではない。恰も空中氣壓に均衡の破れた場合に暴風の起るが如く、世界の兵備に均衡の破れた場合に、戰爭の起る事は過去の歷史が證明してゐる。絶對優秀の兵備を有する國家は、常に優秀の地位にあるが爲めに、自ら進んで戰端を

開くの危險性を帶びてゐる。人類には爭鬪の本能があるが爲めに、何にか機會があれば好んで爭鬪する。何も人を殺したり、傷けたりする意志なき時に、村正や正宗の銘刀を手にすれば、其野蠻的の本能を喚起する。己れに絕對優秀の兵備のあるを自覺せる場合には、必ず戰爭して見たくなるのが人間性であり、而かも夫れが民族の自負心でもある。國際聯盟に依る軍備制限の會議は、英國の支障に出遇ひ、今日實現せられないが、國際聯盟に關與せぬ米國の主唱によりて、第二回の軍縮會議の行はれた事は、如何にも皮肉ではないか。一國が強ければ、國際聯盟も仲裁裁判も何にもあつたものでない。生殺餘奪の權は、今日の文明の社會にも猶依然として強者の手裡にある。世界の共通の正義人道に立脚しない國民は、獨逸の如く國際的の制裁によりて懲戒的に攻め亡ぼさるゝと云ふ。夫れでも絕對優秀の兵備を存して居る強國には、夫れが除外例ではないか。獨逸は不幸にしてヴェルダンの要塞を拔く事が出來なかつた。然れど前獨逸皇子は、當時三日間の强雨がなかつたならば必ずやヴェルダンは陷落したと云うてゐる。若しヴェルダンが陷落して居れば、定めし巴里も陷落して居つたであらう。此場合にも亦吾人は「力は正義なり」を追想せざるを得ない。彼の南阿ッランスバールのボア人は、彼等に正義があつたのみか、然かも世界の同情を受けながらも、英國に攻め亡ぼされて仕舞つた。日清戰爭に於て我が贏ち得たる戰利品は、正義人道にお構ひなしに、露佛獨の三國同盟に奪はれて仕舞つた。即ち日本の戰利品を掠奪せんが爲めに、三國の扶助が行はれたのである。若し夫れ吾が民族が其當時英米の如き強國であつたならば、誰れもが何事もなし得なかつたであらう。

兵備のなき民族は實に氣の毒なもので、恰も赤子の如く手を捻られても泣き寢入りする許りだ。如何に侮辱せられても、之れに反抗するの能力はない。露佛獨の三國同盟に對して、日本は其當時恰も其地位にあつたのだ。若し世界各國が擧げて兵備を全廢するの時が來れば、夫れは別問題であるが、今日絕對優秀の兵備を有する國家の他に存在する以上は、傍若無人的の勝手のことをせられるの憂ひがある。吾人は之に對して活眼を開き、鋭耳を立てゝ注意し居らなければならない。眞實國家の利益を計り、國を愛し、其前途を心配するものは、蓋し其國家を組織する民族の外にはあるまい。今日民族を基準として、獨立せる國家の重きをなせるは、一は其國民の頭數である。和蘭や丁抹や白耳義の如き少數の國民を有する國家の將來は、到底大活動の出來るものではない。いざ戰爭と云ふ場合に、肉彈は何れよりも必要なのだ。第二は富源であつて、富は則ち力である。貧乏では無論勝算のある大戰爭の出來るものでない。蓋し富國は強兵であるのだ。第三は其國民夫れ自身の能力である。假令國に數千萬の人口を有し、他國の羨む巨萬の富貴があつても、其人間夫れ自身が人間性を脫する以上は、萬事窮すで、問題にはならない。此三者が併存せらるゝ時に、實に國家は泰山の安きにある。彼の歷史大系の著者ウェルスが謂つた様な「世界の政府」、トーマスペーンの謂つた様な「世界の祖國」、之れは一場

の夢想であつて、世界同胞主義や、共產主義の社會の發現は、蓋し生物進化の道程を研究すれば研究する程、あり得べからざるのを知るのである。

吾人大和民族は、他民族の主唱や宣傳に誤られないで、國家安寧の爲めに、最善の努力を盡さゞるを得ない。之れと同時に國家に有害なる分子を除き、人間性を脫する危險思想や、宗教や、人間發達の刺戟を消失する無抵抗主義を削除せざるを得ない。曩に賀川豐彦氏は「生存競爭の哲學」を著し、人類の進化はダーウヰンの所謂生存競爭に據るものでない。寧ろ生存競爭は生物を退化せしむるの傾きがある、故に階級爭鬪も世界の戰爭も嫌忌すると云うてゐる。無論生物の進化は全部生存競爭によるものでない。然れど吾人は急流に棹さして居ると同樣に、其流れに反抗して奮鬪せざれば、直ちに押し流されて仕舞ふことを眼前に見るのである。恰も競技場に於て奮鬪せざるものゝ慘敗するが如く、人生の競爭場裡に最善の努力をなさゞるものが、落伍するのを眼の當り見るのである。これは吾人の日常の生活に於て目擊する赤裸々の事實である。タゴールやガンジーの樣な、無抵抗主義に去就する人士が多くなればなる程、印度は能く獨立し得ないであらう。

吾人は生れながらに競爭すべく創造せられてゐる。人は故なくして赤子の如く護謨管によりて牛乳を飮ましては呉れない。人間の食物は下等動物の夫れと異なりて料理しないでは食ふ譯には行かない。人間は複食性であるが爲めに、蔬菜許りでも肉類ばかりでも不適當である。其上に下等動物よりも更に一層不幸なるは、衣服を要する事であり、住宅を要する事である。これが爲めに人には更に一層の努力が入用である。又病氣に侵さるゝ事が決して稀ではない。時には饑渴に襲はるゝ事もある。之れが爲めには貯蓄を要する。人には翌日を保障するの財産が必要である。今日の生活は昔時キリストが言つた樣な、明日のことを思ひ煩ふ勿れ的の暢氣の夫れではない。

吾人は何れもが國家を双肩に擔ひ得る有力者とならんが爲めに、各人の奮鬪努力を冀うて止まない。之れが爲めに吾人は教育を要する。教育に於ても智育のみが其全部ではない。或は體育と云ひ、或は德育と云ひ、其他民族の他の民族に對して優秀なる地位を占むるに必要なる條項は他に幾らもある。然れど民族として世界的孤獨の地位に立つ事は、最も危險なるが故に、お互に同盟したり、共同の行動を執る事が必要である。此意味に於て民族と民族との相互扶助が必要になつて來る。遮莫百尺竿頭更に一步を進めて、吾人は東洋の一大同盟を圖り、人種的にも宗教的にも、壓迫し來る銳鋒に對して應戰せざるを得ない。時代の進步と共に、今や國と國との戰爭は終結を告げ、人種的の戰爭に移らんとしてゐる。之れが爲めに嘗てカイゼルは黃禍論を發表した。吾人は之れに對して、白禍論を唱導すべきである。無抵抗で行けば、人體機關の退化すると同樣に、民族や團體は退化する。大羅馬は敵を失つて亡びた。此意味に於て假定の大敵を有する事も、亦民族の進步發達に大なる刺戟となる。

クロポトキンの唱導せる相互扶助には、根柢に於て矛盾がある。蓋し彼れの唱導は食物や住家の充分にある場合を前提としてゐる。更に其大なる矛盾は、生存競爭を狹義に解釋した所にある。彼れは氣候や環境に對するの生存競爭を餘り認めてゐない。而して彼れは更に人類の祖先と想像せらるゝアミーバや、其他單獨なる生物に相互扶助の現象を認めてゐない。夫れではアミーバより人間に進化し來つた道程が相互扶助でないことが知れる。彼れは進化の過程として生存競爭を認めない譯ではないが、夫れを相互扶助と同格、若しくは夫れ以下のものと見てゐる。又側面より彼れの相互扶助論を考察すれば、彼れは共產主義の高調の爲めに此辯論を草した樣にも思へる。其論法は所謂オントロギーで、何物か爲めにせんとする所があつた樣である。蓋し夫れは敵本主義であつて、其目的は共產主義の夫れにあつたのであらう。彼れの相互扶助の例證は何れも團結して敵に當る事であるから、夫れは生存競爭の現象に外ならない。恰も蟻が共同して大蛇を屠るが如く、鼠が團結して猛獸を倒すが如く、弱者も相協力すれば、强者を倒し得るのである。蓋し團體的の競爭は現代に於ける進化したる夫れであるからだ。クロポトキンは鷲の狩獵の相互扶助に關して、シエウエルストフの左の面白き記事を述べてゐる。卽ち或る日の事、一羽の鷲が空中高く昇つて往つたのを見た。三十分ばかりの間は唯だ靜かな大空に圈を描いてゐたが、一聲高く刺し通す樣な銳い叫び聲が聞えたと思ふと、これに應ずる一聲と共に、何處からか又一羽の鷲が現はれた。第三、第四、第五と見る間に九羽か十羽の鷲が現はれて、一圈を造つてやがて彼方を指して飛び去つた。其日の午後シエウエルストフは先きの一團の鷲が事ありげに飛び去つた方向を指して辿つて往つたが、果せる哉、小陵となつた場所に、先きの十羽の鷲が一頭の馬の死骸を取り卷いてゐるのを發見した。彼等は何時でも獲物があれば、先づ其中の一番の年長者から始めて、順次に年若い仲間が食ふのであるが、此時は早や年老つた一羽は食事を濟ませて、程遠からぬ乾草の積重ねた上に座つて、若者等の食事の間四邊を見張つてゐた。そして數群の鳥が周圍を取卷いて、空しく彼等の盛宴を眺めてゐたと。此事實は團體の求食法としては最も有利なるもので、恰も蟻の一匹が食物を發見した時に、之れを同僚に注進せんが爲めに歸り來り、後其大群が列をなして其地に進行すると同一である。此場合他族の蟻が侵入し來れば爰に爭鬪を起すに違ひない。鷲の場合に於ても五匹や十匹のものなれば良いが、百匹も二百匹も集まり來れば、其處に爭奪の行はるゝことは想像に拍車を當てる迄もない。若し烏や鳶が集まり來つた場合には、鷲は全部これを追ひ行るに違ひない。札幌地方に鳶が居らないが、夫れは烏の集團が其繩張りを侵かさしめないらしい。鷹が飛び來つても盛に烏群が之れを驅擊する。又クロポトキンはペリカン鳥の例を擧げてゐる。元來ペリカン鳥は協同して漁獵に出掛けるのであるが、此處ぞと思ふ濱邊を見定めて、多數の同勢が水中に入りて海岸に向つて陣列を作る。そして波のまに〳〵漂ひながら、岸に向つて一齊に進軍し、半圓形を段々に狹めて其內に圍まれたる魚を捕へる。若し狹き川なれば、彼等は二手に分れて丁度吾々が網でやる樣に、上手と下手とから各半圓形の列を作つて寄せて行く。此間に挾まれた魚は一匹も殘らず彼等の餌となつて仕舞ふのであると。これも亦餌を捕へる

爲めの同盟であつて、食物の多き場合にはお互に爭鬪戰が行はれないが、其食物の少なき場合に、而して彼等が互に饑渴に迫りある時には必ず爰に爭鬪の行はるゝは理の當然である。一方魚の方では鳥に食はれない樣に、鰭や鱗や臭氣や、其他自衞の武器を以て之れに當らなければ忽ち食はれて仕舞ふ。クロポトキンの記載する所は、多く斯くの如き例であるが、何れもが求食の爲めの共同生活であつて、其協力一致は團體の盛衰に大なる關係のある事は理の當然である。

余はこれで生存競爭の種類として人體內の生存競爭、同種間の生存競爭、異種間の生存競爭及び團體間の生存競爭を稍々詳細に說明した積である。而して動物間の相互扶助は、生存競爭の一半であつて、專ら共同の敵を有する團體間に於て行はるゝことを述べた。假令同種間にありても、他を倒すが爲めに好都合とあれば、相共同して相互扶助的の行動を執る。異種間に於ても、團體間に於ても亦然りである。即ち相互扶助の目的の對象は食物の獲得か、夫れとも敵を倒すかの孰れかにある。民族と民族間との相互扶助は、蓋し强力の民族に對する攻守同盟に外ならない。相互扶助は畢竟單に敵と爭ふ場合の策略として、同志間に行はるゝ二次的の手段たるに過ぎない。世には甲の民族の困難して居る時に、これを救ふの乙民族のない事はない。他人の困難して居るのを見て、これを助くるの慈善家のない事もない。然れど夫れはお互に衣食足つて、而して後の事である。己れの身を殺して、他人を救ふ樣な人間は、蓋し人間性を脫せるものである。宗敎に捉はれあるものゝ內には、獨逸の一富豪の樣な、漫然百萬マークの寄附をして、逐に乞食になつたものもある。夫れは富者の天國に入るは駱駝の針の孔を通るよりも困難なりとの敎義が、禍なしたのであらう。銀行の破產する時に、それを救濟するの銀行も亦破產する。他人の貧を救はんが爲めに、己れも亦貧するが如きは、生物界の成立を知らないものである。一定の富を有する社會に、共存共榮の現象は決してあり得べからざるものである。而して相互扶助の精神は道德的の行爲には違ひないが、人間の増加と共に、恰も今日の人道や道德的の行爲と共に、益々薄らぎ行くのは火を見るよりも瞭である。生存競爭を加味しない相互扶助の行はるゝ前提は、先づ人類の利己の本能を征服することである。然れど利己心なき生活は、恰も吹かぬ風の如く、燃えない炎の如く、全く無意味のものである。如何に平和を標榜する鳩でも、其生活の樣式は、徹頭徹尾競爭である。競爭によつて斯くも進化し來つた人類より、競爭の本能を脫却することは、恰も彼れに死を宣言する樣なものだ。人間の奮鬪努力の精神、換言すれば競爭の精神の消滅した時は則ち彼れの墓場に行くの時である。吾々が競馬場に於て見るが如く、馬にも亦競爭の本能がある。夫れは犬にも、鳥にも、魚にも、否な蜂や蝶の如き昆蟲にもある。而して團體間に於ける競爭の一手段として相互扶助の行はれてゐる事も亦否定が出來ない。若し夫れ奮鬪努力によりて世に贏ち得られないものがありとすれば、夫れこそ社會の制度の何處かに缺陷があると見て良い。今日相互扶助の問題の相當に八ケ釜敷くなり居るのも、蓋し社會の組織の何處かに欠陷のある事を暗示するものではあるまいか。(終)

田中首相の超精神主義

森戸辰男

一

所謂『日本共産黨』事件の一部解禁によつて同黨の「一大陰謀」に關する大がかりな、、、暴露がなされ、續いて勞農黨外二團體の解散といふ、、敢てされた翌日、田中總理大臣は「自ら警むるとともに嚴肅に國民の省察を求むる」趣旨を以て、共産黨事件に關する聲明書を發表した。かかる重大事件に出喰はした國民は、むろん首相の聲明を待つまでもなく、それぞれの立場からいろいろ省察するところがあつたに違ひない。だが、首相の國民に要望するものは、漠然とした單なる省察ではない。それは一定のものの觀方に立ち、一定の內容を持つところの省察なのだ。それ故に、吾々國民は事の順序として、首相の註文にはまつた省察をやる前に、先づ首相の『聲明書』其者の省察から始めなければならぬのである。『聲明書』に從へば、首相は「今回の不祥事」に直面して「痛恨骨に徹して熱淚の滂沱たるを禁じ得ず」「畏れ多きに氣も心も打戰きて九腸寸斷の思ひに堪へ」ず、又、「この

子弟を持つ父兄の心が如何に惱ましく、郷黨の人々が如何に殘念に思ふかを推察」し、「一念此に至れば感慨無量」であつた、といふ。無量な感慨に充ちたかやうな心持ちで書かれたせいでもあらうか。聲明書中には師範學校の作文の先生とでも云つた感傷的な字句が思切つて羅列されてゐる。と同時に、「幾百の兇徒の組織的大陰謀」、「天人とともに容さざる暴虐なる主張」、「不逞狼藉言語道斷」、「輕佻浮薄の惡思想」、「甘言美辭の誘惑」等等、まるで赤新聞の見出しみたいな挑發的な表現がまた隨所に見出される。しかし、條理に訴えるといふよりもむしろ、、、、、、、、、、、、しようとするこれらのセンチメンタルな、そしてまたセンセーショナルな文字と含蓄とを取除けると、この聲明書の風袋ぬきの內容は案外單純である。

聲明書の趣旨をつづめて云へば、日本共產黨は「國體を根本的に變革せんとする」ものだ。由來、「我國體の精華は立國の初めより確乎不拔の基礎に立つて」ゐたのに、「晚近外國思想の流傳に逢うて」かかる事件が出來したことはまことに遺憾千萬である。「苟くも國體皇室に

闘する」以上、かかる能事に對する處刑は「臣子として假藉するを許さない」。他方、善後の策としては、「この際一般國民は」こんな思想に感染することのないやうに努めて貰はねばならぬし、また斯様な「思想に對しては徹底的に矯正を期さなければならない。」政府としては「今回の事件を機とし、各方面にわたり、更に最善の舉措を施し、殊に文教の振興を謀り、青年學生を善導して、拔本塞源の道を講じたい」と思うてゐるが、「同時に宗教家、經世家もこの際奮起して國民思想の涵養と精神の作興とに努力貢獻せられたい」。又「資本家に對しては一段の考慮を促がすの要を認めるはいふまでもなく……進んで勞資の調和をはかり、常に穩健なる社會政策の施設に資することをつとめられたい」といふのである。聲明書の内容が以上の如きものに過ぎないとすれば、それはただに單純であるのみならず、吾々が絶えず繰返し聞かされ來つたといふ意味において極めて陳腐である。

聲明書は之をそれ自身として見れば、しかく單純であり、しかも陳腐でさへある。して見れば、わざわざそれをとり上げて我等の批評の俎上にのぼせる値打すらないとも思はれる。しかし、吾々がこの聲明書をそれ自身として、その政治的、社會的時局から切離さずに、それと結びつけて、むしろその一表章として考へる時に、此の單純にして陳腐なる聲明において、我國現在の政局と階級闘爭の情勢と之に處せんとする、、、、政黨の職術とが最もよく象徴化されてゐるかに見える。

二

立國の初めより確乎不動の基礎に立ち來つた我が國體が、突如、動搖を感ずるかの如き現状に至つたのは何が故であるか。此處にも亦聲明書は獨特の見解を開陳してゐる。ほかでもない、それはこの不祥事の根本原因を輓近における「外國思想の流傳」に求めてゐるのである。「立國の初めより確乎不動の基礎に立ち來つた」と讚美せられてゐる國體の精華、「この精神によつて鍛錬陶冶され來つて、萬古不易」と賞揚されてゐる國民性この無比の耐久力と強靱性とを保證された我が國體と國民性とが恰かも室咲きの花でもあるかのやうに、「外國思想の流傳」といふいば外氣の一觸によつて、かほどの脅威と衝撃とを感ずるといふことは、吾々凡人の常識にはどうも納得できない節がある。若し首相の聲明さるゝが如く、果してそれが外國思想の一吹きでゆらゆら動き始めるやうなものであるなら、そんな便りないものに萬古不易とか確乎不動とかいふ仰山な形容は何としても似つかはしくない。そに反して、聲明書にかかれた確乎不動、萬古不易を事實として承認すればそれに對する一大衝撃の根本因を「外國思想の流傳」に求めるのは、云つて見れば大磐石の動搖の原因をそれの立つ地殼の變動(地震)にではなくて、空模様や風具合に求めるのと同じやうな見當違ひであるやうだ。しかも田中首相はこれら相容れ難く思はるゝ二者を兩立せしめて少しも異としない。否、ここにそれを高唱してさへゐる。それ

は如何なる思想的手品によつてか。いふまでもなく、我國支配階級の金科玉條であるところのかの唯心史觀、精神主義によつてである。

聲明書の全篇はこの精神主義によつて貫流されてゐる。吾々の萬邦に誇示すべきものは、「義は君臣にして情は父子の如き我が國柄」であり「確乎不動の基礎に立つ我國體の精華」であり、「この根本精神によつて鍛錬せられたる萬古不易の國民性」であり、之を危うせんとするものは「外國思想の流傳」であり「輕佻浮薄の惡思想」であり、「甘言美辭の誘惑」であり、從つて之が對策も亦、「險惡の思想の徹底的矯正」であり、「文教の振興」であり、「國民思想の涵養と精神の作興」であり、「上下「心」を一にして國體を護るの覺悟」である。擁護せらるべきものも精神、排撃せらるべきものも精神、善後の對象も亦精神、何も精神、かも精神、吾々はまことに、、、、心靈の國、精神の國の唯中に住んでゐるが如くだ。嘗てスチルナアといふ「輕佻浮薄」な男はこんな心靈のみの世界を「化物屋敷」だといふたことがあるが、それはもちろん「惡思想」である。

ところで、吾々の最も奇異に感ずるのは、この超精神主義を宣明する田中氏の統率せらるる政友會が我國の政黨中その實踐においては最も、、、、、、、、、、、であり、最も露骨な實利の追求者である、との世評を屢ゝ耳にすることである。これはどう説明されるか。兩極端は一致すると、突放されては、餘りにあつけな過ぎる。或は、精神主義はまさかの場合のよそ行きの禮服で、平常、内ではそんな勿體なくて不自由なものは簞笥の中に仕舞つて置いて、もつと着心地のよい卑俗な實利主義のフダン着をきてゐるのであるかも知れぬ。それは寔に尤もな、御自分たちには至極好都合な生活法であるに違ひない。が、そんな勿體ないしかも窮屈な禮服を常住坐臥着て居れと要望される一般國民こそ迷惑千萬な話である。御佛の御功德を涙ながらに說き立てて、善男善女の菩提心をそそり、その献げる供養で腹鼓を打つ生臭さ坊主もゐなくはない。この場合に善男善女における理想主義の高さは生臭坊主における慾の深さと比例する。何ぜなら理想への、御佛への、供養は機密の間に、生臭坊主の口腹の資に轉化し得るから。田中首相の超精神主義が斷じてかかる生臭坊主の精神講話でないことは國民と共に私の堅く信じたく思つてゐるところである。

精神主義の提唱者における精神主義の實踐的否認はそれとして、これは果して問題の事態を十分に解明し得るか。確乎不動の國體や萬古不易の國民性がかりそめにも單なる「外國思想の流傳」や「甘言美辭の誘惑」によつてふらふら搖ぎ出すものとは思はれぬ。若しそれらのものが、聲明書の意味するやうに、未曾有の衝撃を感じたとすれば、それは思想の流傳や甘言の誘惑以上のもつと根本的事態の發生でなければならぬ。では、左様なものがあるか。勿論ある。といふのは、政治的觀念的上構が其上に立つてゐる我國の社會生活の土台は不斷に、そして最近においては急激に、變革しつつある。我國の經濟が資本主義化し、今やそれが帝國主義の段階に踏入りつつあるとは多くの評論家が

事實によつて實證し來つたところだ。さうして吾々の目前に進展しつつあるこの生産關係の變革は、社會的には大資本家大地主とプロレタリアとの截然たる階級的對立と、そして小民諸階級の不斷の窮乏化として表はれる。かくて帝國主義ブルジョワジーの社會的支配階級が將に確立されんとしてゐるのである。聲明書流に云へば、輓近我國資本主義の劃期的發展に遭うて、我國民の生活の、從つてまた精神生活の、基礎條件たる經濟的社會的基礎其者が動搖し始めたのだ。從つてこの實體の上に立つところの制度的、思想的觀念體の動搖を見るのはむしろ當然のことである。故に、根本原因は外國思想の流傳や甘言美辭の誘惑ではなくて、まさに吾々の足下の現實社會體にある。それらのものが支配階級者に惡夢をゆめみしめる怪物となるに至つたのは、これに先立つて我國社會の現實體に組織的變調の疾患が起り、ために支配階級の足腰がふらつきその神經系統に異常を來した結果ではないか。

然るに、理想主義者は先づこの實生活に目を注がないで、何よりも先づ精神を見入るのだ。諸君は陣頭に馬を進める威風颯爽たる將軍を諸君の眼前に見る。と、突然彼の足下に大地が搖らいだ。もちろん地震である。將軍は驚いて駒を留めた。彼は俯して彼の足許を見る代りに、風の吹き來る天の一角を睨め、捲き起る砂塵を指さしつつ、三軍に叱咤して曰ふ、「敵は彼方！　打てー」と。これはアマンチヤの勇士の龜鑑ではない。國難に面して立つ超精神主義者の悲壯なる雄姿である。

三

事變の原因を思想に求める聲明書の善後策がひたすら思想を對象とするのはむろんのことだ。即ち對策の根本趣旨は「國家の基礎を危うせんとする險惡の思想に對しては徹底的に矯正を期さなければならない」といふのである。まことに精神主義は首尾一貫されてゐる。だが、たつた一つこの精神主義に見落された部面がある、しかもそれは被壓民衆にとつて重大な利害關係を含むものである。なぜならば、所謂惡思想の矯正に方つて採られる手段においては、思想には思想を以て、精神には精神を以てする精神主義が一貫されずに、不調和にも、、、、、とが飛び出すからである。

聲明書に從へば、惡思想の抱懷者に對しては「斷乎として假藉するを許さない」さうである。この趣旨から政府は、、、、定評ある治維法の、、を議會に提案し、國體の變革に對する刑を「死刑または無期若しくは五年以上の懲役」に高め、之が適用を結社の組織者及知情加入者以外に、「結社の役員その他の指導者および結社事務を擔當したるもの」にまで擴張しようとしてゐる。更に、政府は全國に「思想警察網」を張るがために、二百餘萬圓の追加豫算を要求するとか。この思想警察は先頃特設せられた司法部の思想課と相呼應して思想、、の機能を發揮する筈である。それと共に言論、出版の自由に關する國民の權利を縮少し、それらの徹底的取締をなさんことを企て、「應急策と

しては現行法令の範圍内において中央、地方ともに言論の取締を嚴重にし出版物の檢閲を嚴重に行ふこと」及「永久策については新たにこれに對する當該機關を設けず現在の警保委員會において審議し言論出版物に對する徹底的取締策を考究すること」を決定したことが傳へられてゐる。其他、政府が、、、、、、、、、、、、、、、、、、薄弱なる理由の下に、、、に勞働農民黨ほか二團體の解散を命じたことも周知の事實だ。さうしてこれらの諸方策が說得と感化による精神主義的方法でないばかりか、最も、、、、手段であるといふことは、殆んど何等の說明をも必要としないであらう。

四

だが、これらの諸策は單に所謂對症療法に過ぎないもので、それによつてはまだ病源は根治されない。そこで政府は聲明書の言明に從へば、この惡思想を根絶するために「拔本塞源の道を講」ぜんとしてゐる。そこで吾々も亦此「拔本塞源の道」なるものを檢覈しなければならぬ。

國難の原因を「外國思想の流傳」に求めた以上、「拔本塞源」の方途は自ら明かである。先づ、「當路者の憎惡する險惡なる思想の本源は地理的に何處にあるか。それが外國にあるのはむろんであるが、更にそれをもつと突きつめれば、どうやら、、、、であるらしい。問題の外國思想が、、、から出てゐるのみならず、その宣傳費までが、、、から出たものと考へられてゐる。なんらかの政治行動に出る場合には、いつでも銅臭を嗅いで來た見識は、自己年來の經驗にかんがみて、、、、、、についても同じ銅臭をかぎ出さねば承知できぬものと見える。それはともかく、惡思想の本源がこのロシヤにありとすれば、塞源の早道は、先づロシヤの國交を斷絶することである。ラヂオや飛行機の世の中、、、、、が世界的現象となつてゐる今日、それがどれだけ有効な手段であるかは疑はしいが、ともかく我國官邊の一部にロシヤと國交斷絶說が蒸返してゐることはたしかだ。唯、それが實現し得ないのは、我國の資本主義的利益が首相の精神主義の徹底を妨げてゐるからに過ぎない。無產階級に對しては勇敢な、餘りに勇敢な、首相の精神主義も資本家階級に對してまことに遠慮深いものの如くである。

そこで、殘るのは內國における惡思想の本源地だ。それは一體何處であるか。先頃、樞密院の臨時本會議の席上において、共產黨事件に關し「政府に病源根絶の確信ありや」の强硬なる質問の後「病源の發生は實に左傾教授等の活動によるものだから、政府としては大學の自治とか學問の獨立とか研究の自由とかいふ美名に惑はさるることなく、斷然たる處置に出でられたい、」との希望的意見の開陳があり、政府は「病源の根本的治療問題に對しては一大決心を以てこれに臨む旨をはつきり言明した」と傳へられてゐる。これによれば社會的疾患の病源地は明かに我國の大學であり、その保菌者は所謂左傾教授である。從つて、、、、、の責任のために第一に引責すべきものは、我國の帝國主義ブルジョワジーでもなく、首相でもなく、內相でもなく、實にこれ無

力なる數人の左傾教授である、といふとても變挺な結論が引き出され得るわけである。事實の發展もその通り、事件發表と共に左傾教授の免黜が世上に喧傳せられた。さうして政府は左傾教授に對しては文部當局と帝大側との協議の上辭職なさしむるか休職を命ずること」及「社會科學研究團體に對しては帝大側の希望により帝大總長の意思によつて存廢を決するヿ」に態度を決定した旨を公表した。嘗て反動文相を以て呼ばれた岡田良平氏でさへ、大學教授の行動が學術研究の範圍を越えて國法にふれるかさなくとも不都合なものでない限り、彼等の思想や研究は之を彈壓しないと言うた。然るに今や大學教授は彼の思想が左傾的であるといふ單なる事實によつて彈劾されなければならぬ時となつた。なぜなら、問題の左傾教授は文部當局の明言してゐるやうに、共産黨事件には全然無關係である。それのみか特に實際運動に關係したといふ點が問題にされたのでもない。唯、彼等の抱持する所謂左傾思想が惡かつたのだ。しかもその左傾の程度たるや、何等學問的標準に準據することなく、單なる世間の判斷に基づくものであり、且つ、その際世間とは新聞『、、』や、、、や、それらから入れ知惠された、、や、、、やの頑迷連のことであるらしい。それはともあれ所謂、拔本塞源の第一歩はマルキシズムの遵奉者を、そしてまたその研究者を放逐して大學を廓淸することであるらしい。少しく橫道にそれるが「大學の自治とか學問の獨立とか研究の自由とかの美名に惑はさるることなき」政府のこの彈壓政策に對して、我國の最高學府は如何に戰ひ、大學の自治と研究の自由を如何に防衞したか。それはまた教授諸先生獨特の方法によつてである。即ち、彈壓をはね返す代りに、その暴力を學内に導入して左傾教授の引責をよぎなくするが如き雰圍氣を學内に造り、或は教授會の決議を通し、或は四圍の事情の壓迫によつて、その意志に反して彼等を辭職せしめることによつて、更には學内における、社會科學研究所其他之に類似する研究團體の解散を斷行することによつて、大學は政府の干渉に對してその自治と研究の自由とを防衞したのである。先月十七日、京都大學の當局は事件關係の學生七名を放學處分に附し、研究會に解散命令を發したが、右につき本部書記官は「放學も解散も斷じて文部省の彈壓に辟易して行つたのではない、大學自治の精神によつて大學が自發的に處分したものである」と言明されてゐる。越えて十九日、東大經濟學部は大森助教授の辭表を受理したる後、經濟學部長はステートメントを發表して次の如く曰うて居られる、「自分の知れる限りにおいて文部省から東京帝國大學に對して彈壓をなしたといふ事實は全然ないのだし、また總長や學長から大森氏に對して彈壓をしたヿは全然ない。したがつていはゆる大學の自治といふものは犯されてゐないと思ふ、また學内において研究の自由は今後とも大いに縮められたやうに思はれぬ云々」と。東西兩大學の當局者ともひどく文部當局の彈壓を氣に病まれてゐるやうではあるが、幸にもそれは事實でなく、大學の自治は完全に保持せられてゐるさうである。誠に御同慶の至りである。或處に强盜が押し入り凶器

を振り廻して主人から財布を強奪した、と新聞が傳へた。その時、學殖豐なる被害者がステートメントを發表して、「私は何も盗人の凶器に辟易して財布を強奪されたのではない、自主の觀念に基づき財布を取り出して、それが欲しさにわざわざ夜中に私を訪問した客人に與れてやつたまでである、強盗が闖入した事實はなく、私の人格の自主と行動の自由とも亦傷けられはしない」と言うたなら、吾人どもたしかにその高邁なる識見に敬歎したことであらう。また、「經濟學部長は學内において研究の自由は今後とも大いに縮められたやうには思はれぬ」と云はれてゐる。多くの教授諸先生の研究されてゐるブルジョア科學についてはまさにその通りであらう。しかし、問題はブルジョア社會科學の研究の自由ではなくプロレタリア社會科學の研究の自由に關する。それ故、餘事は知らず少くともこの一事については、經濟學部長よりもより多くの發言の權利を持つてゐる大森助教授の言を聞く必要がある。彼は何と言つてゐるか。「吾々はその退職聲明書において、元來大學は學問の府として、マルキシズムの研究や發表の自由を有するところと稱せられたが、こんどの事實によつていはゆる大學の自由、學問の獨立の實質が明瞭となつた。最高の學府なるものがブルジョアジーの支配の下にあることは暴露せられるに至つた。……今回の暴壓によつて大學における研究の自由の領域は極度に狹められた……私はこれ以上そこに留まることができない云々」と讀む。又、同じ運命を擔うた九大の佐々、石濱、向阪の三教授も亦辭職に臨んで、「大學存立の意義は一に研究の自由にある。しかしてその擴充は吾々のひそかに期してゐたところであつた。然るに今やその自由は不當に縮少され終るを見る。吾々はこれ以上かかる學域に止まるを無意義と信じ云々」と聲明した。しかも大多數の殘留教授諸先生の高邁なる識見に從へば、大學の自治は犯されず、研究の自由は今後とも大いに縮められたとは思はれぬさうである。だが、この教授諸先生の觀方と違つて、東西兩大學の學生は政府の露骨なる、、、、手段と大學當局の腑甲斐なき屈伏とにより、大學の自治學問の自由が根本的に蹂躪せられたとを認識した。學殖に富む諸教授先生の見解と淺學未熟な學生諸君の見解と事態の客觀的認識として果していづれが正しいか。その判斷は讀者に委ねるとして、この手近な一例が、はつきり之を證明するやうに同一社會事象についても立場の相違によつて色々な、而も正反對な見方が成り立ち、しかもその場合教授諸先生の見方が常に正しいとは限らないのだ。そこにこそ諸先生の官許的立場と異る立場に立つ、、、、、、、、、となり、そこにこそ學生社會科學研究會の存在理由が存するのである。しかも、學問研究を使命とする最高學府たる大學は大學自治の名においてこの研究機關と異説の抱懷者に彈壓を加へ、そして「學問研究の自由は今後とも大に縮められたとは思はぬ」と得々として揚言するのである。

　要するに、當局はその彈壓政策によつて左傾教授の放逐、研究團體の解散、不良學生の處分を實現することができた。さうして客觀的に

見れば、大學當局はこの彈壓政策のお先棒を務めた。だがそれは大學の自治研究の自由に關する教授諸先生の主觀的矜持を傷けることなしに。資本、、の社會における形式的デモクラシー形式的自治の變質の如き些々たる問題は、もちろん諸先生の一顧にも價しなかつたものと見える。かくて田中首相の拔本塞源の方途はその第一歩において望外な成功をかち得たものと云はなければならぬ。

拔本塞源の道はまたその積極的方面を持つ。聲明書に從へば、それは「文敎の振興を謀り靑年學生を善導し」、「國民思想の涵養と精神の作興」を計ることにある。さうしてこの目的を促進するために、この際敎育家はもちろん廣く「宗敎家經世家」の奮起協力が要望されてゐる。この趣旨た基づいて、水野文相は地方長官、文部省直轄學校及公私立大學、專門學校に對して國體觀念の涵養に關する訓令を發し、その中において、就中、學生生徒の間より「極端なる偏倚の思想を根絶し懷疑不安の流弊を一掃するにおいて遺憾なき方途を講じ、殊に學生々徒をしてこれに感染するとなからしめんがために特に心力を傾注してわが建國の本義を體得せしめ國體觀念を明徵ならしめ以て堅實なる思想を涵養するに勉むるは眞に現下喫緊の急務」である「抑も光輝あるわが國體に由來せる國民道德を涵養し國民精神を作興するはわが國家文敎の根幹たり、これをもつて學校の種類如何とその程度の高低如何とに論なくまた固より學校の內外を問はずわが國民の敎養及び學術の研究は一にわが國體の精華を發揚し國運の隆昌に貢獻するを以てその基本となさゞるべから」ざる旨を力說した。更に、各地方長官はこの訓令の意を體して文敎振興思想善導の具體的細目を定め、他方では過激思想撲滅思想善導の全國的超黨派的大機關の設立が有力なる方面に提唱されつつあるといふ。かくて拔本塞源の思想政策はピンからキリまで整備するわけである。全國に率先して作製されたといふ大阪府の具體案は次の如くだ。

一、官公吏名譽は身を以て範を示すこと（細目略）

二、國體觀念を一般に普及せしめ敬神崇祖の道義心を深からしむるため左記方法を講ずること

（1）敎育者の活動を促すこと——文部省訓令の主旨に基いてこの際學校長職員に對し國民精神作興、敎育刷新、思想善導に關する訓令を發すること、校長會等の機會を利用し、主旨の徹底を計ること、國體に關する講演會開催、社會各方面の意見を聽取し生徒敎養上の參考に資するやう學校側に勸めること

（2）神職の活動を促すこと——敬神崇祖の大義を振興發揚せしむること（神德に關する講演會の開催、靑年、處女、在鄕軍人各團、各學校などの團體參拜の奬勵、各種奉告祭の勵行、神社祭祀の意義を印刷物等の方法で氏子に周知せしむること、氏子內各種團體との連絡を保つこと、郡市單位の神職團體をして神祇講座、神德講演會を開催せしむること、各種團體工場などに講師を無料で派遣すること）先賢偉人の功績を顯彰し報本反始の至誠を捧げしむること（先賢堂の

五、先賢偉人の功績を調査、印刷して頒布すること）愛郷心の涵養（愛郷週間の開催）史跡名勝天然記念物の保存（右の紹介、指導見學）

(3)宗教家の活動を促すこと――佛教各宗派寺院住職をして左記事項を實行せしむること（國民精神作興に關する詔書の御趣旨を奉じ一層布教に努むること、日曜學校の開設、青少年少女團の普及）神佛道教會所擔任教師をして左記事項を實行せしむ（同前）大阪佛教團による實行方法（佛教講座の擴張、佛教少年團の普及）大阪神道各教聯合會による實行方法（擔任教師の素質向上をはかるため講習會開催臨時大會の講演會の開催）

(4)教化團體の活動を促すこと――助成金の増加、修養教化團體の獎勵助成、優秀團體の加盟勸誘、會員の增加募集中心人物養成の講習會開催

(5)國旗掲揚を普及せしむること（學校、町村、各官署に通牒を發し主旨徹底に努めること、官公吏名譽職は率先國旗を掲揚すること、各學校の國旗掲揚式擧行一定祝祭日における府下の掲揚率を調査すること、兒童をして掲揚の習慣を作らしむること、各新聞社に祝祭日の前日記事掲載を交渉すること

三、隣保團結の舊慣を尊重し相互扶助の美風を進め兼ねて經濟的發達を圖り物神兩面の融合を期するため左記方法を講ずること（細目略）

四、團體的修養に努め思想不健全なる分子の發生の餘地なからしむるため左記方法を講ずること（細目略）

五、青少年の不良化を豫防するため左記方法を講ずること（細目略）

それはお伊勢參宮の奬勵や氏子團體の連絡や神職團體による神祇講座の設置や史跡名勝天然紀念物の保存や、招魂祭の勵行や、消防組の精神的訓練や、浪花節の利用や、國旗掲揚の普及や、青少年の不良化の防止や、若し之れに、、、、、、、、、、、、、、などをでもつけ足したら、凡そ吾々凡愚の頭に學ぶ精神的手段は悉く網羅し盡されたであらう。若し、、、、、、が精神の中空に巣喰ふ顯盛ででもあつたら、この水も洩さぬ包圍攻擊によつて恐らくは拔本塞源されて、早晩この、、からその跡を絶つに違ひない。

五

ところが、不幸にして險惡なる共產主義は精神の中空に巣喰うてゐない。もちろん左傾教授の頭腦がその貯水池でもない。その溫床はプロレタリアを生成せしめ、それを解放運動の擔當者として運命づけるところの現代の、、、、、にある。吾々の眼前に不可抗の勢を以て進展しつつある經濟的、社會的變革、その必然の結果として現はれる階級對立階級鬪爭の激化、そこにこそ「不穩過激なる思想」の淵源はある。では、この點に關して聲明書は何と言うてゐるか。

いかな精神主義者でもさすがに この問題を全然看過することはできないものと見え、最後に、附けたり的に、「資本家に對して一般の考慮

を促かす必要を認め」「進んで勞資の協調をはかり穩健なる社會政策の施設に資」せんことを希望してゐる。假想上の責任者たる左傾教授に對しては脱兎の如く、「斷乎たる處置」を採るに勇猛なる政府は、、、、、の責任者たる資本家に對しては温從たることまことに處女の如く、僅かに「一般の考慮を促かす必要を認める」にとどまるのである。しかし安心されるがよい、資本家諸君は首相の勸告を待たずとも、過激思想撲滅のためには、そして右翼的否恐らくは、それが黄色でない限り、一切の生産階級運動の彈壓抑止のためには、二段も三段もの考慮を巡らし來つたし又、現に巡らしつつあるのだから。

聲明書は資本家に一般の考慮を求めた後、更に彼等に一定の希望を開陳してゐる。勿論それは單なる希望であつて、、、でもなければ、、、たる要求でもない。そしてその内容は、何時のブルジョワ政府にもお定まりの「勞資の調和」と「穩健なる社會政策」とだ。そこで、吾々は先づ「勞資の協調」から始めるとして、聲明書はここでは全階の調子と稍はづれて、「勞資の調和」の理論づけをやつてゐる。が、それは何も新説ではなく、「資本と勞働とは等しく必須の生産條件で兩々相まつてはじめて社會生活の完全を期し得るから」といふ、、、、、、、、理論だ。同じく勞働と資本といふ文字に表はされてはゐるが、社會生活一般の生産條件としての勞資と、その社會的調和が望まれる勞資とは、全然別物である。といふのは、第一の場合の勞資はそれぞれ勞働力と生産手段を意味するが、第二の場合には賃勞働とその搾取手段、從つてまた、それによつて代表せられる賃勞働者階級と資本家階級とを意味するのだ。なるほど、勞働力と生産手段との意味における勞資は均しく必須の社會的生産條件であり、兩々相まつべきものである。が、之に反して賃勞働とその搾取手段とを意味する勞資は前者が資本主義社會において採るところの出現形態であり、そしてこの資本家社會における勞資關係の特質は、本來兩々相待つべき兩者の調和が歪められて、對立矛盾の關係に置かれるといふことに存する。生産における勞働力と生産手段との自然的關係から、賃勞働と資本との社會的關係を結論するのは、とんでもない方法論上の間違ひである。

しかし、勞資調和のこの理論を論破することは、直ちにその社會的存在を否定することではない。それはその理論づけの當否如何に拘らず、資本主義社會の或る段階においては、有力なる一イデオロギーとしてその存在を主張するものだ。といふのは、この思想の社會的役割は資本家階級の、、、、、、、、、、、にブレーキをかけ、勞働者階級の、、、、、することにあるから。從つて、所謂、勞資の調和は資本主義の現制に何らか重要なる改革を齎さないばかりか、勞働者の鬪爭的陣營を、、せしめることによつて、却つて資本主義の強化に資するものといふことができる。それ故に、勞資の調和をはかることについては多くの資本家は「進んで」そして喜んで、首相のこの希望に添ふに違ひない。

聲明書は次ぎに資本家から「穩健なる社會政策」への援助を希望し

てゐる。社會政策とは普通、資本家制度の埒內においてする下層階級の地位の向上に資する政策であり、それ自身極めて穩健なものである。然るに、資本家に對する要求においては極めて控へめな首相は、御叮嚀にもその上にまた「穩健」といふ形容詞を加へて、自分の希望がほんのチョッピリに過ぎないといふことを資本家に申譯してゐる。ところで、假りにいくらチョッピリにしろ、資本家は首相の希望を容れて進んで社會政策の施設に資するであらうか。吾々の知る限り、資本家は自己の打算からか、國家の强制によるか、、、、、、、、、、、によるかでなければ、單なる希望や勸告などによつては中々之を實行するものではない。我國工場法の成立史や國際勞働條約實施の情況は明かに之を實證してゐる。もちろん、社會的、經濟的情勢の如何によつては、資本家も亦「穩健なる社會政策の施設」に協力することがあるかも知れぬ。だが、この所謂「穩健なる社會政策」によつて、果して滔々たる資本主義發展の大勢を、そしてその必然の結果たる階級鬪爭の、、、を、阻止し得るであらうか。これまた歐米諸國の實例がその否らざる所以を證明してゐる。

要するに、精神主義に憑かれたる田中首相は共產黨事件の本源を我々の、、、、の中に求めることができない。從つてまた資本主義の根本的、、において、かの拔本塞源の道を見出さうとしない。唯、月並みの勞資協調と穩健なる社會政策を云爲して、お茶を濁してゐるのみである。精神主義の最惡の禍害は人をして精神に見入らせることによつて社會生活の現實的土臺から眼を放さしめることにある。人々は「外國思想の流傳」や「險惡なる思想を嫌視」せしめられて、我國資本主義の、、、、するところの階級對立とその鬪爭とを見落す。このさかしらな精神主義的、、によつてブルジョワジーはたしかに一時の安きを偸むことができよう。だが、、、、、、、、、、、、、、、、、」、、、、、、、、、、。、、、。

六

以上吾々は稍々長々と田中首相の聲明書の內容とその誤謬、矛盾、及び曖昧を指摘し來つた。之に對して或は反問する人があるかも知れぬ。田中首相は一武辨であり、政治家であつて、學者でも理論家でもない。その片々たる聲明書を捉へてかれこれ理論的分析をするなどは見當違ひであり、少くとも大人げないではないか。それは本人にとつて心外の沙汰であるのみならず、社會一般にとつても無益な業である。政治家の言動は理論の精緻透徹によつて測定せらるべきではなく政治的目標の達成の可能性によつて測定さるべきである、と。誠に同感である。それだと問題はかうなる。田中首相の聲明書に掲げた政治的目標は果して彼がその中で提唱してゐる方策によつて達成し得るものであらうか。

聲明書に表はれた田中首相の政治的目標は明瞭である。それは無產

階級運動の一翼たる共產主義に對して「萬邦に卓越したる我國體」を擁護せんとするにある。さうして、その提唱する所謂「拔本塞源の道」も亦同樣に明瞭である。それは、彼の超精神主義に照應して、大學を廓清し、文敎の振興を謀り、靑年學生を善導し、國民思想の涵養と精神の作興を努めるにある。と同時に、我國現在の資本主義制度については、その根柢を崩すことなく、否それを强化して益〻その發展を謀り、それから必然に生じ來る階級對立と階級鬪爭とに對しては、一方では協調理論と社會政策とによつて之を糊塗し、他方では極めて、、、、、、、とによつて之を彈壓窒死せしめようといふのだ。而もその場合左翼的無產階級運動を彈壓するに方つて揭げられる旗印は、ブルジョワ、、、、、、ではなくて、、、、、、、である。此の如き政治的目標は果して此の如き政治的手段によつて達成され得るか。

吾々の繰返し說明し來つたやうに、無產階級の解放運動——共產主義はその一翼であるに過ぎぬ——の根源は外國にあるのでも、個々の學者や思想家の頭腦にあるのでもない。それは吾々、、、、、、、、、、の胎中にある。左翼的無產階級運動の根源は益々尖銳化する階級對立を持つところの、、、、、の現段階、卽ち、、、、である。だとすれば、所謂共產主義運動に對する拔本塞源の道はこの益々尖銳化する階級、對立の克服從つて、、、、の克服以外にはあり得ない筈だ。しかし、精神主義によつて目かくしされた人々はこの病たる事實を認めることができない。彼は眼を天空に馳せて觀念の世界を統御せんとし、强力と威嚇と、、と誘惑とによつてひたすら觀念的、制度的諸形態の確立强化に腐心する。だがその間にも經濟的變革は不可抗的に進展し、プロレタリアと彼等の政治的、經濟的解放を必然ならしめるその社會的地位は不斷に再生產せられる。にも拘らず、資本主義の不斷の壓力によつて產み出されるこれらのプロレタリア諸運動はもはや何等の合法的、、、を見出し得ない。なぜなら、、、によつて極度に硬化された思想的、制度的包皮にはもはや之を許すべき彈力性が失はれてをるから。此の如き場合に、、、、、、、、、、、、、、か、さもなくば個人的テロリストの出現である。そしてそれは謂はば歷史上の物理的法則とも云はるべきもので、多くの、、の事例がその、、、、、、、、、。

而も、この場合、不可抗的に進展する無產階級運動の牆壁たる思想的制度的包皮の硬化が、ブルジョワ、、、とブルジョワジーの名において行はれずに、、、、、、、、の名において行はれたとしたらどうであるか。それこそ、、と無產階級運動との正面衝突を、單に思想上のみならず、現實の運動の上に招來することにはならないか。ブルジョアジーが自己に對するプロレタリアの突進から自らを衞るがために、、の盾に身を匿すのは、なるほど、彼等にとつては小賢しい戰術であるかも知れぬ。併し、、其者とそれに對して盾をかくる多くの國民にとつてはこれほど心外千萬なことはあるまい。何となれば、かくすることによつて、、は階級鬪爭の渦中に引きずり込まれるこ

とになるから。資本主義の必然的進展の壓力と支配階級の周到にして酷烈なる彈壓とによつて板挾みにされては、文字通り、、、、、、、、、、、、、、、、、、の盾をかざして追ひ詰めることは、果して如何なる結果を惹起することになるか。

田中首相は眞摯なる愛國者であり、熱切なる國體信奉者である。さうして彼はいま斷乎たる決意と熾烈なる感激を以て、危うされたる我國體を擁護し之を磐石の泰きに置かんとして蹶起した。だが、彼れの持する、、、、、とそれに基づく、、、、、とのために、彼の誠意と熱情とにも拘らず、我國體は擁護される、、、、、、、、、、、、、、、、、されんとしてゐるのだ。首相の聲明書を熟讀したる吾々は首相が吾々國民に省察を求められる前に、今一度自ら省察されんことを切に望むものである。(完)

大衆講座

「家族、私有財産、及び國家の起原」

堺利彦

一（大衆講座）一

一、先史時代の文明階段（蒙昧、野蠻、文明）
二、家族制度（無制限性交、群婚、偶婚、一夫一婦）
三、氏族制度の自由社會（國家以前）
四、ギリシヤの氏族制と國家の發生
五、ローマの氏族と國家
六、ドイツ人の氏族と國家（野蠻人の强味）
七、野蠻と文明（國家の本質）
八、文明の精神（貪慾と僞善）

前がき

フリードリヒ・エンゲルスの名著『家族、私有財産、及び國家の起原』の話をせよと云ふ事です。私は久しぶりに極めて親しい舊友と出會つた樣な喜びを以て此の任務に當ります。

此の著作は、マルクスの遺言の執行の樣なものだとエンゲルスが云つて居る。それは、マルクスが生前に果し得なかつた所のものを、彼れの殘した書拔や書入に依つて、エンゲルスが代作したに過ぎないといふ意味である。此の書の内容を一口に云へば、アメリカ人、リユイス・モルガンの大著『古代社會』が殆んど全く學問から葬られて居たのを、マルクスとエンゲルスが新たに掘りだして來て、その全貌を明かにしたものなのである。モルガンはマルクス・エンゲルスから獨立して、四十年間の研究の後、右二人と同じく、唯物史觀の考へ方に到達したものだと認められて居る。モルガンの著は一八七七年、エンゲルスの著は一八八四年の發行である。

此の書には二種の日本譯がある。即ち内藤吉之助氏譯、有斐閣發

行。西雅雄氏譯、白揚社發行。共に省略缺字等のない全譯である。私自身も曾てその反譯に着手した事があり、今も又新譯を勸められて居る。私の此の『話』は、出來るだけ分り易い樣にと勉めた、原著の梗概です。

一　先史時代の文化階段

先史時代、即ち歴史以前の時代を、蒙昧、野蠻、文明の三時期に別つ。蒙昧の下期は動物から人間への過渡期である。言語が初めて形成される。その中期は火の使用を以て始まる。上期には弓矢の發明がある。野蠻の下期には土器が生じ、中期には動物の飼養と、植物の栽培が起り、上期には鐵の使用、田野の耕作、文字の發明等がある。

要するに、生産の技術が人間の自然界征服の程度を決定するので、蒙昧は天然物採取時代であり、野蠻は牧畜及び耕作時代であり、そして文明はそれ以上の産業及び技術時代である。斯樣な區分を試みたのはモルガンが最初であつて、今日猶それが一般に行はれて居る。

二　家族制度

扨、モルガンは先づ右の時代別に伴なふ、家族制度の變遷を考へついた。彼はアメリカのニユウヨーク州の印度人イロクオイ種族の間に生活して、その男女關係を研究した。イロクオイ種族の間には、自由に離別し得る一時的の夫婦關係が存在して居たが、不思議な事には、その現實の家族關係と、習慣上の親族制度とが一致して居なかつた。

即ちイロクオイの男子は、自分の子供をも、兄弟の子供をも、皆同じくムスコと呼びムスメと呼び、そして其の子供等からは一樣に父と呼ばれて居るが、之に反し、姉妹の子供をばオイ、メイと呼び、そして其の子供等からはオヂと呼ばれて居る。然るに又、イロクオイの婦人は、自分の子供をも、姉妹の子供をも、同じくムスコ、ムスメと呼び、そして其の子供等からは一樣に母と呼ばれて居るが、之に反し、兄弟の子供をばオイ、メイと呼び、そして其の子供等からは、オバと呼ばれて居る。それから又、子供同志の間でも、右に相應した呼方をして居る。即ち兄の子供と弟の子供とは互ひに兄弟姉妹と呼ぶ。姉の子供とも同じく兄弟姉妹と呼ぶ。然し兄の子供と妹の子供、或は姉の子供と弟の子供とは、互にイトコと呼ぶ。

一體、なぜ此樣な、實際の關係と異なる親族制度が生じたのか。其の理由が遂に發見された。ハワイには十九世紀の中頃まで、丁度右の親族制度に相應する實際の家族關係があつた。所が、こゝに又不思議な事は、このハワイの家族間では、その相互の呼方が矢張り實際の關係に伴つて居ない。即ちこゝでは、兄の子も、弟の子も、姉の子も、妹の子も、皆一樣に我子と見なされて居り、その子供等も皆互ひに兄弟姉妹と見なされて居る。そこで結局、かういふ結論が生じた。イロクオイ種の間に、實際の關係と違つた親族制度のあるのは、昔し曾て其の制度どほりの實際關係があつた事を示すもので、その關係が現にハワイには近頃まで殘つて居たのである。そしてハワイの制度に又、更に一層の昔に、その制度どほりの實際關係があつた事を示すもので

ある。要するに男女間の實際關係は固定したものでなく、社會の發達に伴なつて變遷するのだが、親族制度はその變遷に後れて久しく舊態を保ち、その結果、しば〳〵制度と實際の不一致を生ずるのである。

この考へ方からすれば、古代の男女關係は今日の一夫一婦とは餘ほど違つたもので、數人の兄弟が共通の妻を有し、數人の姉妹が共通の夫を有し、更に逆登れば、一群の兄弟姉妹が自然に一群の夫婦となつて居たわけである。所が、この考へ方に依つて更に逆登つて考へる時には、或る一種族の間に於いて、總ての男子が總ての女子に屬し、總ての女子が總ての男子に屬するといふ、性交無制限の時代があつた事を想像せねばならぬ事になる。

こうした研究の結果、モルガンは遂に、次の樣な男女關係の進化を發見した。第一は血族群婚の家族。こゝでは同一世代の男女の間にのみ性交が許される。親の代と、子の代と、孫の代との間には、性的關係が禁止される。そして多數の兄弟姉妹が自然に一群の夫婦關係を結ぶ。前記のハワイの親族制度は卽ちそれに相應したものである。

第二は半血族群婚。これは筆者の假りに附けた名前で、モルガンは之をプナルア家族と呼んで居る。性交の制限を世代別にした第一段に對し、第二段では同腹の兄弟姉妹間に其の制限を附した。例へば甲の母の腹に生れた數人の兄弟を、乙の母の腹に生れた數人の姉妹に配するとか、或は數人の同腹の姉妹を中心として、それに兄弟でない數人の男子を配するとか云ふのである。現にハワイでは、數人の姉妹、從姉妹、再從姉妹間が一團となつて、數人の男子を共通の夫として居るが、只だ直接の兄弟のみは除外されて居る。そして其の共通の夫達は、互ひに兄弟と呼ばないで、プナルア（親しき友）と呼んで居る。故にそれをプナルア家族といふ。この半血族群婚が卽ち前記イロクオイ種族の親族制度と一致して居るのである。

一體、何故に近親間の性交が禁止される事になつたかは充分明瞭でないが、恐らくそれは、その結果の良好から生ずる自然淘汰の作用であり、或は無意識的、の半意識的努力であらう。そこで性交の制限が、猶ほ次第に押しひろめられて、同母の兄弟姉妹の間ばかりでなく、更に祖母を同じくし、曾祖母を同じくする、兄弟姉妹、從兄弟從姉妹、再從兄弟再從姉妹の間も亦た禁止される事になり、遂には一母系に屬する一家族全體の間に於いて、一切性交が禁止される事になれば、それが上古の社會に於ける氏の制度（或は氏族制度）である。

斯樣にして群婚が半群婚になり、更にそれも次第に困難になると、次にはそれが第三の家族形體、卽ち一男一女の配偶婚（略して偶婚）の家族になる。群婚の間にも一時的には一女一男が他の男女から離れて住む場合もあり、又夫婦群の間に於いて自然に本夫本妻と云つた樣な關係も生じた筈で、それが卽ち偶婚に移る傾向である。前記のイロクオイ族は卽ち此の偶婚時代に在つたもので、云はゞ一時的の自由な一夫一婦である。

こゝまでの進化に於いて、最も注目すべき事は女權の優勝である。

群婚時代には父子の關係がまだ明瞭でないので、社會は母系制度となるより外はない。前記の氏の制度は卽ち母系制度であつて、氏族の頭は常に必ず女子である。次に群婚が偶婚に移つて、父子の關係が明瞭になつてからでも、猶ほ總ての子は母に屬し、夫たる者は只だ一時的の、他氏からの入婿の身分に過ぎなかつた。だから野蠻時代の氏族制に在つては、女子の地位が非常に高まつた事がある。歷史上の傳說に女酋長の事跡が多いのも、之に依つて初めて充分に說明する事が出來る。

斯くて偶婚は蒙昧時代と野蠻時代との境に發生して居る。大體から云へば、蒙昧時代の典型的家族制が群婚、野蠻時代のそれが偶婚、そして最後の文明時代が一夫一婦といふわけである。然し偶婚から一夫一婦を發展させるについては、從來の、近親結婚を避ける所の自然淘汰以外、別に新らしい社會的原動力の必要があつた。群婚が既に其の最小の部たる一女一男の偶婚まで縮小した以上、何か他の動力が無くては、更にそれ以後の變遷を生ずる原因が無い筈である。

その新らしい原動力は卽ち富であつた。富の蓄積は牧畜に始まつた。そしてそれが初は云ふまでもなく氏の共有であつたが、次第にそれが氏內の各戶に分配され、段々に私有財產の形を持つ事になつて來た。

同時に奴隷なる者が發生した。人間の勞力が自分の生活を支へる以上の衣食を產み出し得る事になれば、捕虜は殺すよりも活かして置いて働かせる方が利益である。奴隷は人間を家畜にした樣なもので、家畜以上の財產になつた。

所が、これらの財產に對する男女の關係が重大な結果をもたらした。元來、狩獵が男子の仕事であつたのだから、牧畜も男子の仕事になつた。戰鬪が主として男子の任務だつたから、その戰鬪から生じた奴隷、そして牧畜に必要な奴隷も亦た男子の所有であつた。斯くて男女間の分業と所有との上に大變な輕重が生じた。從つて家族內に於ける男子の地位が段々に高まつた。從來、男子なる者は、幼にしては子として母の下に在り、少年としては弟として姉の下に在り、既に長じては、他の氏に行いて、夫として妻の下に在り、一生涯、女の前に頭の上らぬわけであつた。然るに其の哀れなる男子が、財產を貯へ、經濟力を備へて來たので、いつまで女權の下に屈服して居る筈がない。

殊に男子として最も不快に感ぜられたのは、其の子に對する關係であつた。母系制の家族である以上、男子は只だ女子の家に入りこむので、其の家は他の氏に屬し、自分の子も同じく其の家に屬し、其の氏に屬するのである。そこで折角丹精して增殖させた家畜も奴隷も、自分の子に讓る事は出來ない。當時の氏の法としては、財產は總て氏內に殘さねばならないので、家畜や奴隷の所有者が死ぬと、その財產は總て兄弟、姉妹、姪甥、從兄弟などの近親に分配された。此に於いて男子の地位勢力が高まると同時に、男子の心中に相續法變更の希望が生じた。そうして其の希望が次第に實現されて、遂に古き習慣が破

ちれ、子は父に從つて父の氏に屬し、同時に女子が男子の氏に入る習慣となつて來た。斯くて母系制が亡びて父系制となり、女權が顚覆して男權優勝の一夫一婦制が確立した。そしてそれが私有財産制の文明時代なのである。

故に一夫一婦制は、決して男女和合の最高形態として歷史上に出現したのでも何でもない。實は其の正反對で、男子の私有財産的觀念が、次第に增長して、家畜を私有し奴隷を私有する其心を以て、更に女子と子供を私有するに至つたのである。從つて一夫一婦制は只だ女子の一夫制であつて、決して男子の、公然或は隱然の、多妻制を妨げるものではない。そして今日の資本制社會の家族内に在つては、大多數の場合、夫はブルジョアを代表し、妻はプロレタリヤを代表して居る。從つて結婚の完全な自由は、資本主義生産と、それから生じた財産關係が廢絕され、從つて今日猶、配偶者の選擇を左右して居る所の、總ての經濟的顧慮が除去された時にのみ、初めて一般に實現され得るのである。

三　氏族制度の自由社會

我々は次に、モルガンの研究に從つて、イロクオイ人（セネカ族）の生活狀態を槪觀する。

この種族は狼、熊、龜などの動物名を有する八つの氏から成り立つて居る。（一）各氏は平時の酋長と戰時の軍長とを選擧する。選擧は男女全員の投票に依る。此の酋長の息子は決して酋長に選擧されない。その息子は母系制に依り、他の氏に屬して居るからである。軍長は氏外から選出してもよい。酋長の權力は單に家長的、道德的のものである。軍長は戰爭に關してのみ若干の命令權を有する。（二）氏は酋長および軍長を隨意に罷免する。一旦罷免された者は單なる私人、單なる兵士である。（三）何人も氏内で結婚する事は出來ない。それが氏の根本原則で、氏人間に於ける血族の消極的表現である。（四）男子が死ぬれば、その遺した財物は、その兄弟姉妹および母の兄弟が分配相續する。女子が死ぬれば、その子供と姉妹とが相續する。夫婦は相互に相續せず。又子は父から相續せぬ。（五）氏員は他の侵害に對し、相互に復讐の義務を負ふ。（六）氏は共同墓地を持つ。（七）氏は異族者を養子とする事が出來る。（八）氏は評議會を持つ。評議會は氏の最高權力で、成年男女全員の民主的集會である。要するに彼等の氏制度は自由、平等、友愛の兄弟關係である。印度人の初めて發見された時、北米の全部に母系制の氏族制が行はれて居り、只二三の種族に氏族制がすたり、父系制が行はれて居た。

次に數個の氏を結合した大氏があり、又數個の大氏を結合した種族がある。印度人種族としては、獨自の領域と、特殊の方言とを持ち、平均人口は二千人以下で、チエロキー族は二萬六千人の多數である。種族の評議會は各氏の酋長と軍長とから構成され、他の種族員に取りまかれて公開された。決定權は評議會にあるが、總ての出席者にも發言權があり、女子もその選出した辯士を通じて其の意見を述べる事が

出來た。或る種族には一人の最高頭領がある。然しその權能は甚だ微弱で、只だ酋長の一人が臨時に急速た行動を取り得るに過ぎない。これが執行權を有する官吏の萌芽には相違ないが、彼等の間ではそこまで發展しないで終つた。それから更に數個の種族を連結した同盟があり、同盟評議會があつた。

以上が、まだ國家といふものを知らない、氏族制度の社會組織であつた。この制度は、その幼稚と單純とに拘はらず、誠に驚くべき組織であつて、軍隊も警察もなく、國王も貴族もなく、裁判所も監獄もなくて、それで萬事が秩序よく進行して居る。この共産社會には貧者と窮乏者があり得ない。又奴隷があり得ない。彼等野蠻人はこの組織と制度の下に於いて、極めて公正なる、極めて威嚴ある、極めて勇敢なる人格を發現させた。

然しこの氏族制度の社會も沒落の運命にあつた。そして其の後に新らしい文明の階級社會が發生した。

四　ギリシヤの氏族制と國家

以上はアメリカ印度人の社會に關する研究であつて、これから以下はギリシヤ、ローマ、ドイツ等に關する研究に入る。

ギリシヤ人はアメリカ印度人と同じく、氏族制度の社會を作つて居たが、それが歴史上に現はれた時には、正に文明時代の入口に立つて居た。群婚の痕跡は既に稍や消されて居た。母系制は既に父系制に移つて居た。勃興しつつある私有財産は既に第一の制目を氏族制度に與へて居た。第二の制目が自然とそれに續いた。今は既に父系制であるから、富みたる獨娘の財産は、結婚と共に其の夫の手に歸する筈である。それでは氏の財産を他氏へ移す事になるのだから、それを避ける爲に氏の根本法が破壞された。卽ち左樣な場合、娘は氏內結婚を許されたばかりでなく、それを強制された程であつた。

斯くの如く、當時のギリシヤには、まだ古い氏族制が行はれて居たが、同時に又崩壞の端緒をも示して居た。財産が家族に集積されて、家族が氏から獨立した力になつた。貧富の差が憲法に影響して、世襲貴族と王政との萌芽を生じて居た。奴隷は初め戰爭の捕虜ばかりであつたが、今は既に同じ氏族員の奴隷化が行はれはじめて居た。富が最高の賞物として尊重され、氏族間の不和が財貨掠奪の爲に濫用された。只一つ缺けたものは、氏の共産的傳統に對して私有財産の神聖を確保し、所有階級に無所有階級を搾取し支配する權利を與ふる所の制度であつた。その制度が遂に發見された。國家が起つて來た。

ギリシヤのアテネ人は初め四つの種族と、十二の大氏とから成り、それが別々の地域に住居して居たのだが、商業、貿易、航海等の業が盛んになるに連れて、氏族員の大混交が起つて來た。同時に奴隷の數も甚だしく増加し、異種族の人口も大いに増加した。氏族制度では最早やそれを統制する事が出來なくなつた。そこで先づアテネに中央行政機關が設立された。アメリカ蠻人の間に於ける種族同盟が更に一歩を進めて、一國民に融合した。そして全國民が貴族、農民、職人の三

階級に區分され、その中で貴族だけが官職を獨占した。氏族制度は段々に破壞された。

この貴族支配の下に於いて、商品、貨幣、高利等の發達と共に、國家がおもむろに發達した。若き國家は何よりも先づ自己の武力を必要とした。國家の本質的特徴は國民の大衆から分離した公けの强制力にある。その强制力がアテネでは先づ警察力として現はれた。(但し當時の警察官はまだ奴隷から成り立つて居た。)

アテネの國家は新らしい社會狀態に善く適合した。商工業は急速に發達した。階級別はもはや貴族と平民との間でなく、奴隷と自由民、異族民と市民の對立となつた。人口は自由民が約九萬、奴隷が約三十六萬、異族民が約四萬であつた。そして富が少數者の手に集中されて、一般自由民が窮乏した。窮乏した自由民は奴隷と競爭するに堪へずして滅亡した。

斯くの如く、アテネ國家は氏族制度のくづれ跡の上に建設されたが、國家の發生としては、其の最も純粹な、最も古典的な形態である。こゝでは國家が、氏族社會の內部に生じた階級對立から、直接に發達して居る。

五　ローマの氏族と國家

ローマの氏族制は大體、ギリシヤと同じものとして省略する。然しローマの人口が征服や移住民に依つて著るしく增大した時、そこに困難が生じた。それらの新來者はローマの氏族員でないけれども、矢張り自由民として土地を持ち、租稅を拂ひ、軍事的の義務をも負ふ者であつた。而も彼等は何ら公けの權利を與へられて居なかつた。そこで彼等の數の增大が、本來の氏族員に對する脅威となつた。ローマの氏族制が如何にして亡びたかは明瞭でないが、本來のローマ貴族と、外來の平民との鬪爭に依る事だけは知られて居る。

この氏族制滅亡後の新憲法は、本來人と外來人との區別なく、總て國民を財產所有額に依つて六階級に區分し、富者が容易に過半數を制し得る民會を作つた。斯くてローマの國家が明白に成立した。新國家は全く從來の氏族別を無視し、地域別と財產別に依つて國民を組織した。古い氏族的貴族は新らしい大地主と大金持の階級に溶けこんだ。そして最後に、奴隷制の大農業が經濟的に不可能となつた時、ローマ國家が遂に滅亡した。

六　ドイツの氏族と國家

ドイツ人はローマ滅亡の後を受けてヨーロッパに勃興した。彼等は當時漸く初めて父系制に入つたばかりの野蠻人であつた。母系制の痕跡がまた頗る濃厚であつた。女性はまだ一般に尊敬されて居た。(今日、ヨーロッパに於いて婦人尊重の風があるのも、矢張りその名殘である。)婚姻の形態は、一夫一婦に近づきつゝある偶婚であつた。

ドイツ人がローマを占領した時、その沒收した土地は先づ氏族的に分配された。然しドイツ人とローマ人とが次第々々に混和の度を加へた時、ドイツの氏族制が段々に血緣的性質を失つて、地域的性質を帶

びて來た。ドイツ人は自分達の征服した廣大なローマ諸洲に組織を與へねばならなかつた。然し多數のローマ人をドイツの氏族内に包容する事は不可能であつた。從つて又氏族制を以てローマ人を支配する事も不可能であつた。そこでローマ人の國家に代る、ドイツ人の新國家を設ける必要に迫られた。ドイツの氏族組織の諸機關が急激に國家機關に變化させられた。氏族の首長が國王に變化した。

斯樣にして、ドイツ人は死に瀕したヨーロッパに新たな生活力を吹込んだと云はれて居る。愛國的歴史家はその生活力を目して、ドイツ民族に固有な魔力（即ち國民的特質）だとして居る。然しそうではない。當時のドイツ人は只だ野蠻性の強味を持つて居たのである。

七　野蠻と文明（國家の本質）

我々は既に光輝ある野蠻人の野蠻性を見た。我々は更に文明國家の香ばしからぬ眞意義を探る。

『だから國家は決して外部から社會に無理押しつけをした權力ではない。又決してヘーゲルが主張する樣な、「道義觀念の實現」でもなく、「理性の影像及び現實」でもない。それは單に、社會發達の或る階段に於ける一の產物である。それは實に、其の社會が解き難き矛盾の中にはまりこんだ事、即ち其の社會が調和すべからざる對立關係に分裂して、それから脱却する力を失つた事の告白である。そこで此の對立關係、即ち反對の經濟的利害を有する諸階級が、その無駄な鬪爭の爲に、自らを亡ぼし、又社會その者を亡ぼす事を防ぐには、外觀上、社會の上に立つ所の或力があつて、それが諸階級の衝突を緩和し、それを「秩序」の範圍内に押しとめる事が必要になる。此の力、即ち社會から發生して、社會以上に立ち、そして段々に社會から分離する所の此の力が、即ち國家なのである。』

國家の特徴は（氏族制度と違つて）第一、その所屬員を（血族的に區分せず）地域的に區分する點にある。この區分の仕方は頗る自然なものの樣に今日の我々には考へられるが、實は前に見る通り、ギリシヤ、ローマに於ける永い烈しい鬪爭の後に生じたものである。『特徴の第二は公權力（公けの强制力）の設定である。この權力は最早や、昔の自ら武力として結成した全民衆と同一のものではない。社會に階級の分裂が生じた以後、自發的に活動する全民衆の武裝が不可能になつたので、そこで此の特殊な公權力が必要となつて來た。（今度）奴隷も社會に屬して居る。九萬のアテネ市民は、三十六萬の奴隷に對して、特權階級たるに過ぎない。アテネ民主國の國民軍は奴隷を鎭壓する爲の貴族的公權力であつた。然し又、市民を鎭壓する爲には、前記の通り別に警察力が必要であつた。斯樣な公權力は有らゆる國家に存在して居る。それは武裝した人間ばかりでなく、更にその物的附屬として、氏族制度の社會に全く知られなかつた所の、牢獄その他、各種の强制機關から成り立つて居る。』斯樣な公權力は事情に依り極めて微弱な場合もあるが、近代のヨーロッパの如く、階級鬪爭と征服戰爭とが激烈な處では、それが全社會を呑み、國家その者をも呑まうと威嚇して居

る。

次にかゝる公權力を維持する爲には、國民の租税負擔が必要となる。そして斯樣な公權力と課税權とを掌握して、國家の官吏が社會の上に立つて居る。社會から分離した權力の代表として、彼等は國民に尊敬を强要する。文明國家の最下級の警察官でも、氏族制度の全機關を合せたより以上の權威を持つて居る。然し文明國家の大臣大將でも、最小氏族の酋長が受ける所の、あの自然的な、純眞無類の敬愛を羨まないでは居られないだらう。

『國家は階級對立を抑壓する必要から生じたものであるけれども、同時にそれは又、階級軋轢の間に生じたものであるから、大抵それは何時でも最も有力な經濟階級の國家である。かくて古代の國家は奴隷所有者の國家であり、中世の封建國家は貴族の國家であり、近代の、、、、、、、、たる資本家の、、である。但し例外的には、互ひに鬪爭する諸階級が均衡を保ち、それが爲、外觀上、國家が仲裁を、若しくは調停者として、何程かの獨立性を示す場合もある。

『又、歷史上の大抵の國家に在つては、國民の權利が其の財産所有額に依つて差別されてある。それが卽ち、國家なる者が、無所有階級に對して所有階級を擁護する爲の組織たる證據である。』近代の代議制國家に於ける制限選擧も矢張りその現はれである。然し財産差別を政治上に公認する事は必ずしも重要でない。それは寧ろ國家發達の低い段階を示すものである。最高の國家形態は、形式上、少しも財産差別を認めない。然しこゝでは、財力が間接に、而も一層安全に、その威力を振ふ。最後に所有階級は普通選擧に依つて直接の支配を行ふ。勞働階級がまだ其の經濟的解放の爲に成熟して居ない間は、彼等の多數は現制度を唯一可能のものと考へ、資本階級の尻尾となり、その最大翼となつて居るのだから、その間は資本階級の普通選擧支配が行はれる。普通選擧は勞働階級成熟の測度器である。それ以上の者ではあり得ない。然しそれで構はない。今にいよ〳〵普通選擧の寒暖計が沸騰點に達する時、その時、勞働者も資本家も共に、、、、、、であらう。

『斯くて、國家は永劫の昔から存在して居るものではない。國家、或は公權力といふものを少しも知らなかつた社會がある。經濟發達の或る段階に於いて、社會が必然的に數階級に分裂した時、國家も亦た其の分裂の必然的結果として生じた。然るに我々は今、急速に、階級の存在が必要でなくなつたばかりでなく、更に生産上の邪魔物になつたといふ、進化階段に近づきつゝある。だから階級なる者は、曾て不可避的に發生したと同じ樣に、今は不可避的に滅亡せねばならぬ。從つて、、もそれと共に滅亡せねばならぬ。(その時)、生産者の自由な平等な協力を基礎として新たに生産組織をやり直す所の社會は、、、、、、、、を擧げて、その當然屬すべき處、卽ち古代博物館へ移すであらう、―糸車や青銅の斧と並べて。』

八　文明の精神(貪慾と僞善)

人間の勞働力が自分の生活を維持するより以上の物を産出し得るに

至ると間もなく、そして又、勞働の分業や商品の交換が行はれる事になると間もなく、人間自身が商品となり得る事、即ち人間を奴隷にすれば、その勞働力を交換して利益を搾取し得る事の大眞理が發見された。

そこで奴隷制度といふものが起り、それが文明時代に於いて最高の發達を示した。社會が初めて搾取する階級と搾取される階級とに別れた。奴隷制度は即ち搾取の第一形態であつて、古代世界の特色である。次は中世の農奴制度、(即ち封建制度)最後は近世の賃金勞働制度、(即資本制度)これが文明の三大時期に於ける、屈從隷屬の三大形態である。露骨と假裝との別こそあれ、皆な同じく奴隷制度である。

『この文明社會を總括するものは即ち國家である。そして國家は常に、、、、、、であり、又その本質上、常に被搾取階級を統御する、、である。斯くて文明社會は、昔の野蠻人の氏族社會が到底堪へ得なかつた事共を成し遂げた。而もそれは、人間の最も汚ない本能と情慾を活動させ、他の總ての美質を犧牲にして、成し遂げたのである。文明の主動精神は、昔から今日まで、實に只だ露骨な貪慾である。一も富、二も富、三も富である。その富、社會の富でなく、、、、、、、、、が、即ち文明の唯一最終の目的であつた。』

一階級が他階級を搾取する事が文明の根本であるのだから、幾多の矛盾がそこから生じて來る。生產の進步が人間の大多數の退步となる。一階級の利益が必然に他階級の害惡となる。野蠻人の社會では、總人の間に權利と義務の區別が殆んど無かつたのに、文明社會では、一階級が殆んど總ての權利を持ち、他階級が殆んど總ての義務を持つ。

然るに其の事實が承認されて居ない。支配階級の爲の善が、社會全體の爲の善だと主張されて居る。文明が進むに從つて僞善の外被がいよ〳〵厚くなる。壓迫は被壓迫者の幸福の爲に行はれ、搾取は被搾取者の利益の爲に行はれるのであるさうだ。

最後に結論として、モルガンの文明評を抄錄する。『文明の來降以來、富は人間の支配し得ざる力となつた。人間は自分の作りだした物の前に茫然として立つて居る。然しいつかは必ず人智が富を支配し得る時が來る。社會の利益は個人の利益より重要である。その兩者が正しい、調和した關係に置かれなければならない。單なる財富の追求が人間の最終の運命ではない。今や財富を唯一の目的とする歷史道程の終末として、社會の解體が我々の眼前に迫つて居る。そして政治に於ける民主々義、社會に於ける友愛心、權利の平等、敎育の普及等が、次のヨリ高い社會段階を指し示して居る。それは即ち昔の氏の制度の自由、平等、友愛の、——ヨリ高い形に於ける——復活である。』

——(大衆講座)——

アルフレッド・マーシャルの話

土方成美

一

J・M・ケーンズはアルフレッド・マーシャルをば「最近一世紀間に於ける世界最大の學者であり、現代英國經濟學の父である」と呼んでゐる。(1) マーシャルの門弟であるケーンズに限らず、今比較的に彼を重要視しないやうに思はれる獨逸經濟學界に於ても、例へばモムペルトの如き學史家は、「彼(マーシャル)は古典派經濟學を重要な諸點に於て更に一層展開せしめた者であり、又現代思想の最も重要なものを同化吸收することによつて、古典派經濟學を完璧の域に達せしめた經濟學者である」と看做してゐる。(2) かくの如き人々の言葉を引用するまでもなく、マーシャルが最近、即ち一九二四年七月、八十二歲の高齡を以て逝去するまで、事實上英國の所謂劍橋學派の中心であり、其の首長であつたこと、而して劍橋學派なるものが英國現代の經濟學を代表するものであることは恐らく何人も異議のない所であらうから、畢竟彼が現代に於ける英國經濟學の代表者であつたことは何人も疑はないと信ずる。

そこで、いつたいマーシャルはどれだけの貢献を經濟學の發達に對してなしたか、殊に彼によつて所謂古典派經濟學は幾何を附け加へられたか、彼の經濟學說の特殊性は何所に存するかを考へやう。果してケーンズの云ふ如く、彼が過去一世紀間に於ける世界最大の經濟學者であるか否か、又モムペルトの「現代思想の最も重要なものを同化吸收することによつて古典派經濟學を完璧の域に達せしめた」といふのが如何なる意味であるか。尤も古典派經濟學と云はれる主として英國の經濟學を、資本家の利益を擁護する所の資本家の代辯であつて、之を建設した乃至之を奉ずる學者、殊にリカードを始め其後の經濟學者を資本家の走狗であるといふ如く解する人々もあり、かくの如き見地よりすれば、「古典派經濟學を完璧の域に達せしめた」といふマーシャルは世界最大の經濟學者であるどころか、極惡非道の人間といふことになるが、かゝる見地が正しいか否かを論ずることは此處にはしないで古典派經濟學に對する普通の見地に從つて論を進めやう。

マーシャルの功績、其の學說の特殊性如何といふ問題に甚だ難問であつて、生前常に親しくマーシャルの謦咳に接し、又彼の「經濟學原理」で育くまれたといふ弟子等でさへ其の困難を告白し、その斷定をいさゝか躊躇する風があるように見受けられる程[3]であるが、以下に於て私は精々この問題を重點としつゝ「アルフレッド・マーシャルの話」をしやう。

1) J. M. Keynes: "Alfred Marshall, 1842–1924;" Economic Journal, September, 1924; or in "Memorials of Alfred Marshall," edited by A. C. Pigou, 1925.

2) Paul Mombert: Geschichte der Nationalökonomie, 1927, S. 493.

3) J. M. Keynes: Ibid, in "Memorials" p. 41.

二

マーシャルは屢々折衷主義者と云はれる。まことに彼の眞骨頭は、其の研究方法に於ても、研究成果に就ても、稀に見る偉大なる綜合家たる點にあつたと云ふことが出來るであらう。彼の著書に對して、徒らに外見のみ絢爛たる奇矯の文字や、尖銳を賣物にした一面觀の強調や、乃至理義の正否に關らず、ひたすらに效果の大小のみを眼目とした煽動的宣傳をもとめても失望するのみであらう。勿論綜合と獨創とは決して相排斥するものでないことは云ふまでもない。相抗爭する一面的見解の單なる技術的折衷ではなく其の眞の綜合は、偉大なる獨創でなければならない。從つてマーシャルの眞骨頭が偉大なる綜合家たる點にあつたと云ふのは、決して彼の獨創性（オリヂナリティー）が大であつたといふことを否定せんとするものではなく、又彼の著書が單なる「糊と鋏」の仕事であるといふのでもない。唯綜合の獨創性（オリヂナリティー）は決して派手（はで）であることを得ない。故にやゝもすれば地味なる其の獨創さは性急な讀者の注意から逸せられる恐れがある。文字通り珍奇な學說にあつてはそれが表はす獨創は其の剝き出しな、強烈な刺戟によつて容易に人を捕へるが、宏壯なる綜合に潛められた獨創性は之を把捉する者に對しても一部の獨創を要求するものの如く思はれる。

マーシャルの著書、殊に彼の「經濟學原理」が一見甚だ平易な、云はゞ「生まぬるい」本であるといふ樣な印象を讀む人に與へるが、事實決して其の外見や文章が示す如く平明な、又は新しみのない本ではないといふことを強調しなければならない。

此の點「經濟學原理」に就てケーンズが云ふところは甚だ這般の事情を明瞭に傳へてゐると思はれる。即ちマーシャルの「『經濟學原理』の書き方はつとめて非煽動的であり非強調的で、又其の修辭法は最も簡素である。堅實な、滑らかな調子で書き續けられ、假令經濟學の初學者たりと雖も聰明な讀者を停滯させ困惑せしめる章句は稀である。而して著者自ら新奇獨創を主張することは全くなく、他人の誤謬を指摘する場合も稀である……。然し乍ら「此の方法にも重大な不利益があ

つた。強調、明暗の變化を缺き、丹念に圭角や突起や隆起が隠滅し去られてゐることは、讀者をして餘りにも容易に同書を讀過することを得しめて、其の極、彼の最も嶄新な點まで陳腐と看做される程であつた。水から出た家鴨のやうに、讀者は其の潛水によつて殆ど濡れないですむ。又同書には難解の點が表面に現はされずに、內部に隱されてをり、最も慎重を要する問題が脚註に於て解明せられてあり、含蓄多き獨創的判斷が平凡な衣を被せられてゐる。著者は彼の思想を提供するに當つて、誇大の貼札（レッテル）を張らず、之等の思想を釣り上げる鉤は僅かしか附せられてゐない。學生は『原理』を讀んで其の背き魅力に魅せられ、それを理解し得たと考へる、しかも一週間後には彼は同書に就て極めて僅かしか知つてゐないのである。『原理』によつて育くまれた人々にとつてさへ、新な問題、新たな解答を得たと思つて『原理』を讀み直して見ると、結局其の問題と、而も其のよりよき解答とが既にそこに存在し、唯全く氣付かれずにあつたのだといふ場合が如何に屢々であつたらう。[4]」と。

右に擧げたケーンズの言葉は專らマーシャルの書き振りに就てであるが、私は之を彼の學説及び思想に就ても適用し得ると思ふ。マーシャルの後繼者たるA・C・ピグーも略々同様の言を以てマーシャルの讀者を警告し、之に附加して「マーシャルが言はねばならなかつたことは全て、彼から聞く迄は實際何も知られてゐなかつたのだといふことが判つた時に其の時こそ始めて、其の人は經濟學者となる方向に向つて一歩を踏み出したのである」[5]とまで云つてゐる。

かくの如きマーシャルの著書に對する門弟等の高き評價と、殊に其の讀者に對する警告とは、決して必ずしも單なる誇張や過賞ではない。既に一言した如く、獨逸の經濟學界はマーシャルを遇することいさゝか冷かに過ぎる感があると思はれるが、（獨逸人の書いた經濟原論が一般に如何にマーシャルに開説すること尠きか！）その原因の主なるものの少くとも一が右に縷述した點にあると考へても恐らく誤ではなからう。現にマーシャルの「產業と貿易」の飜譯權を有つてゐる、從つてマーシャルと因緣淺からぬアルツール・ザルツは、「ケーンズ及び他の弟子等がマーシャルに與へてゐる高い地位は、彼の著作のみからは無雑作に明であるとは云へない、彼も亦恐らく、經濟學に於ける他の偉大なる先驅者等と共に、人は其の作品よりも明により偉大であり其の作品は彼の全態貌の充分なる鏡ではないと稱せらるべき不遇をば等しく頒つものであらう。學問上の著述家として彼は明に一個の不遇兒であつたと斷ずるに於て何の躊躇もない」[6]と斷言してゐるが、かくの如きは明に彼がマーシャルの作品の有つ學的意義に對する正當なる認識を缺いてゐることを自ら表明してゐるものであつて、偶々獨逸學界のマーシャル觀の一斑と其の基く所とを併せて表白したものであると思ふ。

4) J. M. Keynes: ibid, in "Memorials," pp. 47—8.

5) A. C. Pigou: In Memoriam, in "Memorials", p. 86.

6) Arthur Salz, Memorials of Alfred Marshall, Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, 57 Bd. I Heft.

三

然らばマーシャルの綜合は如何なる點に存するかといふことになるが、私は便宜上これを二つに分けて、研究方法上に於ける綜合と、經濟學說上に於ける綜合——殊に專ら價値論上に於ける綜合との二つの見地から之を述べやう。

先づ第一に研究方法上の綜合でありますが、これは一言にして云へば正統學派と歷史學派との綜合である。いつたい獨逸歷史學派なるものの起源は寧ろ實際政策上の問題を動機として、即ち自由貿易論に反對し保護貿易を主張することを緣由として起つたものであるが、ウイルヘルム・ロツシエルに至つて形成せられた同學派の標的は、自由放任の旗幟を普遍的絕對的法則として掲げたマンチエスター・スクールに對する方法論上の反抗でもあつて、經濟現象の歷史性、從つて歷史的歸納的研究方法の主張と、最後にかくて得た經濟法則の相對性、換言すれば其の妥當性の時間空間による制限の識認であつた。しかして彼等は正統學派の亞流に對する排擊をいつか擴充して演繹的研究方法をとる學派一般に向け、しかも自らは出發點の主張を忘却して徒らに事實の蒐集考證に凝り、理論の建設を等閑に附するに及んで、自らまた猛烈なる攻擊を蒙り有名なカール・メンガー對グスターフ・シユモラーの方法論爭となつた。

マーシャルは、勿論マンチエスター・スクールの如き絕對的法則觀に極力反對すると共に、歷史學派の極端論者の爲す所にも到底滿足することを得なかつた。即ち彼は一八八五年フオーセツト教授の後を受けて劍橋大學の教授となつた際、其の就任演說中に於て、經濟學は「具體的眞理の一體ではなく、例へば力學にも對比すべき、具體的眞理の發見の爲めの機關(エンヂン)である」[7]と云ひ、以て、經濟理論の個々的具體的場合への妥當性が事情によつて決定せられることを覺らず、或る具體的場合に於ける經濟理論の不妥當から、一切の普遍的思考法を拒まうとする歷史學派の極端論者を斥けてゐる。

尤も此の點に於けるマーシャルの業績を演繹的研究方法と歸納的研究方法との綜合乃至併用といふ點で把捉することは當を得てゐないであらう。彼と歷史學派本來の主張とは實は、甚だ距離の近いものであつて、一八六八年、カントの「純粹理性批判」を原著に就て讀まうとの意圖を以て渡獨した後、更に再度一八七〇年より七一年にかけて彼が送つた伯林滯在期間中、歷史學派の眞の創始者たるロツシエルと親しく會談した[8]彼は、畢竟創始者たるロツシエルが主張したのみで實行しなかつた歷史學派の根本主義をば[9]、躬を以て眞實に實行した者であるとも云ふことが出來るであらう。事實マーシャル自ら、歷史學派が、古典學派の抽象的偏演繹的研究方法に對して加へた非難に對し、之を辯護して次の如くに言つてゐる。「現代人により經濟學に對して加へられた

變化は、演繹法を補足し且之を指導するに歸納法を以てすることの重要性を發見した點ではない。かくの如き重要性の認識は既に以前より充分に存してゐたことである。それは人間自身が大いに環境の動物であつて、環境と共に變化することを發見した點である。」「十九世紀の初頭に當り英國經濟思想の基調を形成した人々が事實の研究を等閑に附した理論家であつて、之は特に英國人の缺點であるといふ様なことをよく耳にするが、かゝる攻擊は私には根據なきものに思はれる。彼等先人等の多くは實際界の事柄に就て廣い、また直接の體驗を有つた實際家であつた。而して彼等の書いた經濟史は、それなりに、少くとも其後書かれた如何なる經濟史にも匹敵し得るものである。彼等は公私の手によつて統計の蒐集を行ひ、又議會の質問に基く多くの貴重なる報告を作り上げてゐる。之等の結果は全て外國にとつて御手本となつたものであり、又其の最も優秀な多くの思想は、現代獨逸歷史學派を刺戟したものに他ならない。故に十九世紀の初頭英國經濟學者が陷つた主たる誤謬は、彼等が歷史や統計を知らなかつたことではなくて、……彼等が人間を云はゞ『不變量』と看做し、其の變化を研究する勞を餘り執らなかつた點である。」「……彼等の誤謬の最も重大なるものは、產業上に於ける人間の習慣や制度が、如何に變化し易いものであつたかを認知し得なかつた點にある。」[10]と。

此處に長々と引用した彼自らの言葉に重きを置くならば、此の點に關するマーシャルの立場の特殊性は、寧ろ「經濟理論の相對性の強調」といふ點にあると云ふのが最も適當であらうと思ひます。更に「各時代及び各地は夫々獨自の問題を有つ。而して社會關係の如何なる變化[11]も恐らく經濟學說の新なる形成を要求するであらう。」との彼の言葉の如きに至つては、人をして、正に歷史學派の主張をそのまゝ聞くの思いを禁せしめないであらう。然し、既に述べた如く、これは歷史學派の主張ではあつても決して其のまゝ歷史學派の實績を意味するものではない。歷史學派の主張を現實に其の著作に於て實現したマーシャルは、歷史學派ではなくしてそれと正統學派との綜合であるといふ奇異なる結果となるわけであらう。

7) Alfred Marshall: The Present Position of Economics; Inaugural Lecture at Cambridge, 1885; or ibid, in "Memorials", pp. 159–60.

8) J. M. Keynes: ibid, p. 11.

9) Wilhelm Roscher: Grundriss zu Vorlesungen über die Staatswirtschaft nach geschichtlicher Methode, 1843.

10) Alfred Marshall: ibid, pp. 153–5

11) Paul Mombert: ibid, S. 195 を暫く借用する。

四

此の關係を一層明瞭にするものは、歷史學派の現實に對する彼の非難と、彼自らと歷史學派との區別を明確にした彼の言葉である。即ち

彼は「事實から事實へ直接推理を試むべく、其の間形式的學說の介在を要せず」との論を排斥して、「歷史學派が經濟學に與へた貢獻は眞に偉大であるが、彼等の研究は直接現時の經濟問題の各個に光を投ずるものではない。それ等の研究は決して吾人をして經濟的論理（economic reasoning）の使用を廢せしめんとするものではなく、却つてそれ等の研究は各階段に於て其れが協力を要求するものである。……事實はそれ自身沈默である、觀察は決して直接諸原因の作用を明にするものではなく、單に時間に於ける繼起を示すのみである。……而も歷史は繰り返さない。……經濟問題乃至其他の社會問題に於ては、如何なる事象も正確に他の事象の先件たりしものなく、人間生活の諸條件は種々雜多であつて、一の事象はしかく多くの原因の複合であり、しかく相互密接に交錯してゐて過去は決して、將來に對し單純且直接の光明を點ずるものではないのである。[12]」と云つてゐる。

之を以て見れば、マーシャルは決して單なる事實の蒐集を念とする者ではなく其の豐富なる歷史的研究と丹念なる事實の詮索とは、正に彼が目標とする經濟理論構成の手段であり經路であるに過ぎないことが明であらう。かくの如きを現實に示したものは實に彼の「經濟學原理」一卷である。されば彼が示す抽象的理論の背後に、尨大微細なる事實の檢證が藏されてゐることを思ふとき、彼の成果を目して正統學派と歷史學派との綜合と云ふも決して不當ではなからう。

「……かくの如き諸々の論爭に於ける經驗は、事實が理性によつて檢證せられ觀察せられざる限り、吾人はそれから何物も學び得ないことを明にした。[13]」と彼は語り、又「彼は曾て次の如く記してゐる。「事實は、それを以て理性が知識の建物を建設するところの煉瓦である。[14]」とピグーが云つてゐますが、かくの如きマーシャルの立脚點こそはとりもなほさず、私が、これこそ經驗科學たる經濟學の唯一の正しき研究方法であるとして、多年實證主義の名の下に主張し來り、最近又拙著「日本經濟研究」に於ていさゝか其の主張を具體化した私の立場と、其の根本義を等しくするものであります。故に私はマーシャルを目して「實證主義の偉大なる創始者」とも呼び得ると考へてゐる。

12) Alfred Marshall: ibid., p. 166.

13) Alfred Marshall: ibid., p. 167–8.

14) A. C. Pigou: ibid., p. 86.

五

以上は、研究方法上に於ける綜合——正統學派と歷史學派との綜合——といふ觀點から見たマーシャルの業績であるが、次にいさゝか、學說の內容に立ち入つて彼の綜合を述べやうと思ふ。而して玆に述べんとするのは、價値學說上に於けるそれである。

價値學說上に於けるマーシャルの立場は、一言を以て之を蔽へば、正統學派の傳統的思潮たる生產費說と、之に對抗して起つた墺太利學派の限界效用說との綜合である。尤も正統學派の生產費說と云ふも、

マーシヤルが特に直接論評の對象としてゐるのは、リカードのそれであり、又墺太利學派の限界效用說と云つても、マーシヤルの論題となつたのは殆と全く英吉利のヂエボンスの學說であるから、寧ろリカードとヂエボンスの價値學說を融合せしめたと云つた方が適當であらう。又これを知悉した上であれば、正統學派と墺太利學派との綜合と云つても大なる誤はなからう。

　リカードの價値學說が果して純粹の意味で勞働價値說と呼ばるべきものであるか、或は其後に於ける正統學派の價値學說として益々明確な形を採つて行つた生產費說に吸引して、彼の眞意を生產費說にあつたと解釋すべきであるかに關しては爭の存する所であつて、一八九〇年代にコンラツド年鑑誌上に於て交はされたるデイーツエル對ベーム・バヴエルクの論爭、[15] 及びエコノミツク・ジヤーナル第一卷第一號誌上に於けるマーシヤルに對するアツシユレーの攻擊[16]はその現れの主なるものであります。何れの見解も夫々一應の理由を有つものと思はれるが、此處には假にデイーツエル、マーシヤル等の見解に基き、リカードは嚴密に勞働價値說を貫かなかつたのみならず、其の眞意は生產費說にあつたものと看做して論述することにする。

　次に今日墺太利學派の名によつて呼ばれる價値學說は、普く人の知る如く、リカード並びに其の後繼者等の價値學說と正反對の立場に立つものとして主張せられ、後者が勞働量乃至費用といふ客觀的要素に價値決定の要因をもとめんとするに對し、前者は限界效用乃至最終利用なる主觀的要素に之を求めんとするものとされて居ります。今英國に於てリカード價値論に眞向から反對することを一の動機として最終利用說を創唱したヂエボンスをとれば、彼はリカードを罵倒して、「價値の經濟學の諸系が終に樹立せられる日には、彼の有能ではあるが頑迷なダヴイツド・リカードが經濟學の車輪を誤れる軌道に引込んだことが明となるであらう[17]」と云ひ、又「余は思索考察を重ねた結果、價値は全く利用に基くものであるといふいさゝか嶄新なる學說に到達した。今日一般に流布してゐる學說は、價値の起因を利用よりも寧ろ勞働にありとなし、或學者の如きは勞働を以て價値の原因であると斷定してゐる程である。然し乍ら余は之と反對に、完全なる交換理論に到達する爲めには、所有財貨數量に基く利用變動の自然法則を注意深く探究すればよい、需要供給なる日常の法則はこれが必然的歸結であるといふことを明にする[18]」と云つてゐる。かくの如き言葉によつて考へると、リカード並びに其の學派の生產費說とヂエボンス並びに墺太利學派の限界效用說とは云はゞ全く兩極端に立つ學說の如くであつて、これが綜合といふ如きことは到底想像も出來ないことの如く思はれる。

　これに關聯して最もよく人に知られてゐるのは、マーシヤルの「鋏の兩刃」の喩であります。即ち彼は次のやうに說明してゐる、「かくの如くして、利用と生產費とが兩つながら價値の決定に參與してゐることがわかる。而して、價値を決定するものが利用であるか、生產費で

あるかを論定し得ないのは一丁の鋏を以て紙を切つた場合に、紙を切つたのが上の刃であるか下の刃であるかを論定し得ないのと同樣である。成程、一方の刃を固定して置いて、他方の刃を動かして切つた場合に、我々は不注意に約說して、第二の刃が切つたのであると言ふかも知れない。しかし此の云ひ方は嚴密に見て正確であるとは云ふことが出來ない。唯それが、現實に起つたことの單に通俗的な卽ち嚴密に科學的でない說明であることを主張する限りに於てのみそれは許容せられるに過ぎない」[19]と。又リカードの價値學說を辯護した彼の論文に於ても『生產費』の原則と『最終利用』の原則とは、疑ひもなく、需要供給なる最高法則の構成要素であつて、二者の各々は宛かも一丁の鋏に於ける片方の刃の如きものである。……」[21]と述べてゐる。

　右の如き比喩に現はされたマーシャルの綜合的見解は如何にして形成せられたかと云ふに、今引用した「リカードの價値學說」なる論文によつて最もよく窺ふことが出來る。

　先づマーシャルは、リカードの「原論」自體が、本來友人等の切實な勸告に基いて公刊されたもので、彼が執筆に際し豫期した讀者が、主として自ら交つてゐた政治家實業家であつたから、其の行論は故さら省略せられてゐること、及び、彼がマルサスに告白してゐる如く、文才に乏しかつたため、彼の思想の深遠なのに比例して「彼の說明が混亂してゐることを理由として彼を正當に理解する爲めには、彼自らアダム・スミスを解釋した際に於ける以上に寬大に彼を解釋せねばならぬ」[20]と云ふ。而してかゝる見地を以てリカードの學說を分析し、「彼の『價値と富』の差異に關する、甚だ不完全ではあるが、深遠な論議に於て、リカードは限界利用と全部利用との區別を立てやうとしたものと思はれる……其の議論の全體を通じて、（微分學の簡潔な術語を知らなかつた爲めに）手際よく云ひ現はす適當な言葉を發見することが出來なかつたとは云へ、結局供給の制限によつて限界利用は高められ、全部利用が減少せしめられると云はうと努めてゐる」[22]と解してゐる。而してマーシャルはリカードが一マルサス氏は費用と一物の價値とが同一たらざるを得ないといふことが、余の學說の一部をなすと考へてゐるように見えるが、若しも氏が費用を解して、利潤をも含んだ『生產費』となすならば、その通りであるが、上揭の文章に於て氏はさう解してゐないから、氏は明かに余を理解してゐない」と云つてゐるのを採用して、彼を以て生產費說を奉ずる者であることを主張致します。[23]

　更に轉じて、マーシャルはヂエボンスの價値學說に批評を加へ、ヂエボンスの「價値は全く利用に基く」との斷定を以て、價値と生產費との關係に關するリカードの不注意な略言に劣らず一方に偏した考へであると看做し、又ヂエボンスが『勞働は屢々價値を決定するやうに見えるが、それは唯間接的方法、卽ち供給の增加乃至其の制限を通じて財貨の利用の度を變動せしめることによつてである』となすのに對しては、これ既にリカードによつて殆ど同一形式の下に述べられた所

であると論じ、更にヂエボンスが「生産費は供給を決定し、供給は最終利用を決定し、最終利用は價値を決定する」と云ふに對しては、此の因果關係が眞なる限り、其の中間の過程を省略して「生産費は價値を定める」と云つても差支あるまいと應酬してゐる。[20] かくて彼は先に揭げた『生産費』の原則と『最終利用』の原則とは、疑ひもなく需要供給なる最高法則の構成要素であつて、二者の各々は宛かも一丁の鋏に於ける片方の刃の如きものである。」との結論に到着してゐるのである。

右に述べた如きマーシャルの價値論は勿論萬人を承服せしめることは出來ないであらう。それが多くの難點を包藏することは疑なきところである。然し此の二個の一見絶對に相容れないかの如き學説をば、悠然自己の中に包攝し、綜合し去らうとする彼の大なる意圖と努力とを壯とすると共に、リカードを倒くまで生かし切らうとの彼の態度によかれ惡しかれ畢竟彼が現代に於て正統學派を最もよく代表する者である所以を認めるのである。

15) Heinrich Dietzel: Die klassische Werttheorie und die Theorie vom Grenznutzen, in Conrad Jahrbücher, 1890; Zur Klassische Wert- und Preistheorie, in Conrad Jahrb., 1891.

Böhm-Bawerk: Ein Zwischenwort zur Werttheorie, in Conrad Jahrb., 1890; Wert, Kosten und Grenznutzen, in Conrad Jahrb., 1892.

16) William Ashley: The Rehabilitation of Ricardo, in Economic Journal, Vol. I.

17) Stanley Jevons: The Theory of Political Economy, 2nd Ed., Preface.

18) S. Jevons: 4th Ed. pp. 1—2.

19) Alfred Marshall: Economics of Industry, p. 200.

20) Alfred Marshall: Ricardo's Theory of Value, Principles of Economics, Appendix I, p. 820.

21) Alfred Marshall: ibid., p. 813.

22) Alfred Marshall: ibid., p. 814.

23) Alfred Marshall: ibid., p. 816.

24) Alfred Marshall: ibid., p. 817.

六

以上、研究方法及び學説の二方面に於ける綜合といふ見地から、マーシャルの俤を傳へることを努めたのであるが更にマーシャル經濟學説の特殊性を形成する重要なる諸點を擧げると、彼は價値が需要供給の平衡點に於て決定せられるとの命題の基礎となつてゐる觀念を擴充して、全ゆる「經濟的要素の相互依存關係」の觀念を確認し而して經濟的平衡の說明に當つては「限界(マーヂン)」及び「代位(サブスティチューション)」なる有力な補助概念を導入したこと、經濟的分析の要因として「時(タイム)」の要素を導入

し、「長期」及び「短期」の區別によつて「正常價値」の意義を明にしたこと、「準地代」、「代表的商社」の概念の助けによつて正常利潤の學説を展開したこと、ヂエボンスの思想の當然の發展として「消費者餘剰」なる獨特の觀念を創造したこと、價値竝びに分配の説明に當つて「彈力性」の觀念を巧みに導入したこと、等決して尠くはない。又經濟問題の解明に數學を利用した點も確かにマーシャルの一特色であつて、殊に「圖表的方法」の導入に就てはマーシャルの貢献は到底無視し得ぬものである。然し之等の細かな點に就ては説明を省略する。

最後に、以上の如きマーシャルの學問的方面に於ける勞作と切つても切れぬ關係に立つてゐる、彼の社會改良家的理想に就て一言しなければならない。ケーンズはマーシャルをば「最初の偉大なる生粋の經濟學者」と呼んでゐるのであるが、彼を數學物理學哲學形而上學の迂路から經濟學に導いた最初にして最後の動機は、後經濟的動機、即ち倫理的、人道的動機であつた。彼は晩年、自分が經濟學の研究に入つた機縁を次の如く語つてゐる。「形而上學から私は倫理學に轉じ社會の現狀が容易くヂヤスティファイし得ないことを考へた。然るに現今道德科學と呼ばれる所に造詣淺からぬ一友人が絶えず私にかう云つた。『嗚呼、君が若し經濟學を理解したら、そんなことは云はないであらうに!』と。そこで私はミルの經濟學を讀んで大いに刺戟せられた。私は物質的慰安の不平等よりも機會の不平等の正當性に疑を有つてゐた。そこで休暇を利用して、數多の都市の貧民窟を訪れ、極貧者の顏をながめて街から街へと歩き廻つた。さうして次に私の決心したことは全力を盡して經濟學を研究しやうといふことであつた。」[2]と。

實にマーシャルに於ける經濟學研究の最根本問題即ち最終の關心は終始社會に於ける高上の機會を缺いた貧困の存在といふ大なる矛盾でありまして、經濟學研究の終極目的は此の點よりする社會改良への協力にあつたのである。最初に數學を學び、又カントの「純粹理性批判」を携へて毎夏單身アルプスを逍遥ひ、或は伯林にヘーゲル「歴史哲學」の講筵に列り、「經濟學原理」の執筆に當つても先づ最初に脫稿せられたのは「需要、供給と價値の關係」(第五編)なる最も抽象的理論的部分であつた等、抽象的純理の研究にこそ其の本來の興味が存した彼をして、其の自ら赴く處に耽ることを禁めたものは彼の人道主義的良心であり、社會の「殘滓階級」に對する顧慮であつた。玆に私共はマーシャルの偉大なる他の一側面を見るのである。勞働階級の福祉の爲めにはマーシャルをして喜んで其の「經濟原理」第二卷(彼の「原理」は最初第一卷と銘を打つて發行せられたもので、途中から現在の如く改められたものである)たるべきものの續刊を多年に亙つて遲延せしめたものである。(即ち彼は「原理」出版の翌年一八九一年から九四年まで、自らの研究材料に親しく接觸する機會を得ることを喜んで、勅命勞働委員會の一員となつたが、これが彼の計畫であつた第二卷刊行の最も主要な障害となつたとは、ケーンズが記してゐ

る所である。」[25]

然しマーシャルは其の理想の實現に對して性急な一部の論者と異り、一方に於て社會の「進歩」に對する確信としかし乍ら "natura non facit saltum"（自然は飛躍せず）との認識とによつて導かれてゐたことを注意しなければならない。彼の人道的社會主義者を評した言葉は此の點注目すべきものである。「彼等は勞働階級の狀態が大いに改善し得るの可能性を信ずることがなかつた。人間の完成の可能性は實際オウエン其他初期社會主義者等によつて肯定せられたが、彼等の見解は歷史的科學的研究に基くこと少く、且無鐵砲に主張せられたことが、當時の實際家的經濟學者を反撥したのである。」[27]と。これを以て見れば彼が飽くまで現實に立脚して社會改良の理想の實現を期したことが明であつて、彼に於ける綿密なる事實の檢證はマーシャルに於ては理想からる理想實現の爲めの必須條件たりしもので、玆に私共は理想主義者たると共に實證主義者たる彼の全態貌を概觀し得るのである。

「現代諸國の學者によつて疑もなく明なりとせられた點は、經濟學の歸納的研究は事實の下に横はる、或ものは一時的地方的、又或ものは普遍的永久的なる、理想を發見せんとの企圖を以て、事實を探究し又之を整理することであるといふ點。――換言すれば、經濟學の眞の分析的研究は、歷史家及び現代生活の觀察者によつて蒐集せられた事實の中に潜在する理想を發見することである。といふ點である。」[28]となしてゐるのは又以て彼自身の生涯に於ける理論的竝びに實踐的全生活の指導原理を表現したものであると思はれるのである。其の最後の日に至るまで社會の進歩の可能性に關する信念を失はず、「進歩、其の經濟的諸條件」と題せらるべかりし著書の刊行を期しつゝ終に其のことなくして逝かれたアルフレッド・マーシャルの業績は確乎として我々經濟學徒の進むべき道を照らしてゐるのである。

25) J. M. Keynes: ibid. in "Memorials", p. 10.

26) J. M. Keynes: ibid. p. 52.

27) Alfred Marshall: The Present Position of Economics 1884, in "Memorials" p. 155.

28) Alfred Marshall: The Old Generation of Economics and The New, 1895, in "Memorials" p. 203.

臨時議會の批判・田中內閣の前途

內相の辭職と政局の將來

緒方竹虎

第五十五議會は、政府からいへば、相撲に敗けて勝負に勝つた形である。野黨聯盟に追ひ詰められて內相を罷めさせたのは、たしかに相撲敗けに相違ないが、同時に野黨側の目的が、內相よりも、それを罷めさせることによつて內閣を崩壞させるにあつたところから見て、勝負は、野黨の敗、政府の勝利といふことになるのである。

一體、政府が總選擧の結果過半數を得なかつた場合には、議會で友黨の援助を得ればよし、さもなくば、國民の審判を尊重して素直に政府を明渡すのが、いはゆる憲政の常道なのである。野黨としても、一黨でもつて過半數を占むるものがない以上、議會の劈頭に、先づ野黨の政策を中心とする聯盟が過半數を得るか否かを試し、もしそれがいけなければ、これまた素直に引下つて、しばらく政府の爲すところを見るのが當然であると思ふ。一九二三年末のイギリスの總選擧で、保守黨も勞働黨も自由黨も、すべて過半數を得なかつた時、勞働黨から議會の劈頭、勅語奉答文に對し、「陛下の現在の輔弼者は此院（下院）の信任を有せず」云々といふ修正案を出し、採決の結果自由黨が十名を除く全部これに贊成したので、政府は立どころに總辭職し、勞働黨內閣が代つて政權を握るに至つた。この時の保守黨は、過半數こそ得てゐなかつたが、下院の第一黨、しかも第二黨たる勞働黨との間には八十票の開きがあつた。それにも拘らずボールドウイン首相は、選擧の結果を尊重して、何等反對黨に對する切崩しも、自由黨に對する誘惑も試みず、議會の票決に從つて、堂々と進退をしたのである。日本の議會では、勅語奉答文の意味も違ひ、これを修正して政府の不信任を示すといふ慣行もないが、形式は違つても、今度のやうな場合には、劈頭まづ民政黨から政府不信任案を出し、政府が果して過半數の支持

を得るか否かを見るのが本筋であると思ふ。然らずして、政府黨も反對黨も共に過半數に滿たぬといふので、年から年中、買收切崩しをやつてゐるのでは、政爭の醜惡は勿論、國務は少しも行へない。今の政府は不評判ではあるが、假りに外の政府が現はれても、いはゆる三大政黨は共に過半數に滿たず、少數の第三黨がキヤスチング・ボートを握るといふ政情は、今後もしば〳〵起り得ると見なければならぬ。その都度、今度のやうな切崩しや詭詐や、、が繰返されては、議會の信用は減るばかりである。一々イギリス議會の例を學ぶ要もないが、政爭だけは堂々とあつて欲しい。この意味から、第五十五議會における野黨の態度は、徹頭徹尾直截明快にやつて退けた無産黨を除いては、その廻りくどくて陰謀がゝつたところに、大に遺憾がある。

それかといつて、徹頭徹尾、切崩しで野黨の挑戰に對した政府の態度も、もとより辯解の餘地はない。そも〳〵國民の投票によつて出て來た議員が、切崩しによつて平氣で黨籍を替へるといふのも言語同斷の話であるが、政府が白晝公然これをやるに至つては、投票の神聖は何處にあるのやら、立憲政治を何と心得てゐるのやら、ほとんど開いた口が塞がらない。これでは、成程選擧干涉も大ッぴらにやつたらうと思はしむるのみである。ことに、彈劾案が内相不信任の形で出て來たのを幸ひ、散々ッぱら、切崩しを行ひ、二度まで停會を奏請しながら、いよ〳〵いかぬとなると、内相だけを犧牲にして、平氣で居据るといふに至つては、政黨内閣も責任内閣もあつたものでない。國務大臣の行爲はもちろんすべてが内閣の連帶責任といふわけではない。政治國難決議案（内相彈劾案）の說明者尾崎氏は、選擧干涉は閣議を經て施行されたものでないから、内相の單獨責任で内閣が連帶で責任を負擔すべきものでないと、事もなげに述べた。しかしながら、議會政治の下において、ことに、昨年の組閣以來、口を開けば選擧第一主義を唱へて來た現政府の下において、總選擧對策以上の大きな政務はない。あれほどの大袈裟な組織的干涉が、閣議の承認または默認なしに行へるものか、どうか。これは筆者の臆測ばかりではない。現に政府自身對議會策の根本方針をきめた四月二十二日の臨時閣議において、『内相彈劾案に對しては全然總括的内閣不信任案と同一視し、飽くまで一蓮託生をもつて進むこと』といふ申合せをなし、それを新聞紙に發表してゐる。のみならず、これを通過せしめざらんがための停會、切崩し買收、、、等々。それらがすべて一蓮託生の陣立でなかつたとは、尾崎氏以外何人も首肯しないのである。

内相彈劾を含む政治國難決議案は、尾崎氏がこれを發意し、明政會の名によつて提出されたものである。尾崎氏が何故にかゝる迂餘曲折した決議案を提出したか。それには、武藤山治氏を通じて政府との間に默契があつたとか、その他いろ〳〵の臆說がある。が、一切の臆說がゝつたものはこの場合これを措くとして、これだけは想像し得る。すなはち、政界の大先生をもつて自ら任ずる尾崎氏、自己の存在を示すためには決して機會を見逃さぬ尾崎氏、しかして、武藤氏の事あつ

て以來政友會には三分の好意を寄せ、普選論による分裂以來、三分の憲政會嫌ひの今なほ拔け切らぬ尾崎氏が、中立數名の去就をもつて如何やうにも議會を引廻し得る現政局に面し、むら〳〵と名譽心やいたづら氣や謀叛心を擡頭させたことである。のみならず、これを內相彈劾案に限つて內閣全體に及ぼさぬことは、尾崎氏としては、かつて大隈內閣の際、大浦內相の單獨責任を主張した立場をも裏書することになる。この邊が尾崎氏の政治國難兼內相彈劾を主張し來つた所以であらう。明政會が尾崎氏の提案に贊成し、その提案者にまでなつたのは、自己の存在を示さうとする希望がたま〳〵尾崎氏と同じいものであつたのと、これならば自己の存在を示すと共に解散はこれを避け得ると考へたからであらう。明政會が後に總括的內閣不信任案に反對するに至つて、その變節を責めるものもあつたが、それは責める方が酷で、明政會の目的は、はじめから內相彈劾以上に出でなかつたのである。たゞ明政會にして、これをもつてキヤスチング・ボートを行使したと思つてゐるのであつたら、それは大きな間違であらう。キヤスチング・ボートとは、大政黨の間に介在した第三黨が、自分等の主張に合致する政策のみを支持してゆくことで、尾崎一流の單獨責任論の信奉者たることを甘んぜざる限り、內相彈劾案に贊成し、內閣不信任案に反對したといふことは、意味をなさないのである。若しそれ民政黨が、二百十餘の頭數を率ゐながら、總括的不信任案を先にせず、內相彈劾案の尻にくつついて行つたのは、內相の引責卽內閣の崩壞を意味すると考へたからであらうか、この他力本願は、結局總括的不信任案のあの慘めな最後となつたこと、これは民政黨みづから招くところといふの外はないであらう。

斯ういふ事情の下に、第五十五議會は、結果から見れば、鈴木內相追出しのための議會となり了つたのである。しかしてそれには政友會の態度も內から與つてゐるかに見える。內相彈劾案が阻止できなかつたのは、これだけでは再解散はやれまいといふ腹が野黨側にあり、それに新聞に煽られて初陣の明政會が意想外に固くなつた結果もあるが第一回の停會の蓋を開けるまで、政府はたしかに二十票近い差で切拔け得ると、田中首相が平然として樂觀してゐたといふ話があるほど、政府および政友會は何らも眞劍でなかつたのである。今度の政府の議會に對するやり方は、こと〴〵く辯解のできないことばかりである。しかし最後の土壇場になつて、奏上までして再解散を嚇かすのであつたら、元來野黨聯盟の腹も餘り强いものでなかつたゞけに、何とかもう少し方法はなかつたらうかと思はれる。鈴木內相は、やつた事の善惡は別とし、昨年の金融恐慌に際し、一部の樞府顧問官と策應して、この內閣を作つた殊勳者であり、內閣としては、ほとんど唯一の大黑柱であつたのだ。それを尾崎氏の說明が單獨責任論からといふて、彈劾案の表面が內相だけだからといふて、平然としてこれを犧牲にして內閣自體は居据りを策するといふのは、昔から自慢の自由黨の精神でないことはもちろん、すべての臆說はこの場合も措くとして、何となし

に政府部内にも、鈴木を追出して一介拂ひをしたい、もしくは、その跡釜を狙はんとした者のあつたことを、思はせるのである。

× × × × ×

この鈴木内相の詰腹は、たしかに今後の政府の結束に影響を與へる。この稿を書くまで内相の跡釜が容易に決しそうになかつたのは、内閣の大勢が内相見殺しに決した時の複雜した事情から、迂濶に手を下してはたちまち禍機を早めるからであらう。しかしながら、それかといつて、この内閣のヒヾが結局致命傷になつて内閣の壽命を縮めるかといへば、さうは考へられない。また、不信任案で潰れなかつた以上、次の總選擧まで、斷じて議會の票決以外の理由では罷めないことが、立憲の大道であると考へろのである。問題は改造にあるが、もしその難關をさへ脱すれば、特別議會を二回も停會して大ッぴらに反對黨の切崩しをやるほどの政府であれば、今後も内閣の壽命を維ぐためには恐らくあらゆる手段を擇ばないであらう。共産黨を撲滅するために是非共必要だと稱して提出した治安維持法の改正案を、出し放しで平氣でゐる無責任な態度に見ても、今後何をやり出すか分らぬ。噂に上つた床次氏の政友會引入れ説なども、本人がこれを一笑に附してゐる以上、もちろん臆測をさしはさむことはゆるされない。しかしながら、政友會としては、ボールドウインが反對黨のチヤーチルを拔いて來て藏相の椅子に据ゑたごとく、斷してやらぬとはいへない。また、政友會と民政黨の性質を較べて見ても、これまでの政黨の離合集散の跡を顧みても、薩摩と長州との反目といふもの以外、床次氏が政友會に歸ることを妨げる何の理由もない。假りに、それは民政黨の結束を傷けるための政友會の宣傳であつたにしても、今後の半年間に、政友會はあらゆる方法で反對黨の切崩し、中立の抱込みにつとめ、事實においても、次の總選擧までは、何とかして政權に嚙付く途を講ずるであらう。濱口民政黨總裁を官邸によび付けた田中首相が、議會閉會匆々、しかも濱口氏よりは前に、わざく尾崎氏を訪問して懇談二時間に及んだなどいふのも、それ、その第一着手ではないか。

「腕」をもがれた政友内閣

山川　均

その昔、羅生門の鬼は、片腕を身の代において、辛らくも一命を取りとめたといふことである。一本の腕を失ふことは、五體を失ふにまさつてゐる。羅生門の鬼は、この『大所高所』に立つて、『一路邁進』したものであらう。

臨時議會における田中大將總裁の戰術は、この兵法にならつたものだといふ説もある。鈴木前内相は、『腕の喜三郎』の資格をもつて内相となつた。田中政友會内閣は、ひとへに國家の『大局』に着眼し、區々たる一本の腕を置き去りにして、内閣の命脈を全うしたのである。

鈴木前内相の有名な『腕』は、數次に亘る地方官の更迭、議會政治否認の聲明、前後二回の怪文書、前代未聞の言論抑壓などによつて、遺憾なく現はれた。右のうち、僅かに切れたと認めて何人にも異論のないのは、來るべき總選擧を控へての、地方官の更迭であつた。たゞしその切れ味は別問題として、よし鈍刀の滅多斬り、たゝき斬りであらうとも、ともかく何十人かの地方官の首が落ちたといふことが、疑ひのなき事實であるから、鈴木前内相の『腕』は、この場合、觸れこみどほり、たしかに切れたにはちがひない。

議會政治否認の怪聲明は、政治上の根本思想の問題として考へれば極めて重大なものを含んでゐる。けれども恐らくは何人も、この怪聲明を、かゝる面倒な意味で相手にした者はない。言ひかへれば、世間はこれを頭の問題として見ないで、地方官の首斬りと本質を同じくするところの『腕』の問題として見たのである。政權維持の必要に迫られゝば、鈴木氏とか政友會とか、議會政治擁護の聲明書を出さぬことを何人が保證し得るだらうか。ちようど『議會中心政治』の聲明によつて登場した政友會内閣が、回り舞臺が一回轉すると、議會政治を否認する大忠臣に扮裝してゐたように。

そこで怪聲明書の目的は、議會中心政治の主張が國賊的主張であることを、昭和三年二月に政友會が發見したことを、國民に告げ知らせることではなくて、國民をして(國民は彼らの眼には常に衆愚である)かくの如く信ぜしめる(恐らくは二十四時間の間)ことであつた。しかし國民は、日本歴史によつて、、、、を振りかざして來るものが、悉く楠正成ではないことを教へられてゐた。足利尊氏も、政權を維持するためには、、、、を振りかざした。鈴木前内相の『腕』だめしとして見た怪文書が、滿點に値ひしたか零點をつけられたかは、選擧の結果が物語つてゐる。本人は、取つておきの切札を出したつもりでこの怪聲明を出したものらしいが、これによつて政友會の得票が、何票ふえたかは疑問であつて、從つて有名なこの『腕』の切れ味も、すこぶる疑問とならざるを得ぬ。要するに、反對黨に恐れられたこの『腕』も、いよ〳〵當り構はず振り廻はさしてみると、案外切れ味の宜しくないものだつたといふことになる。

しかしながら何づれにせよ、切れようと切れまいと、この『腕』は吾々が羅生門に見たような赤い腕ではなくて、黒い腕であつたことだけは慥かである。

○

鈴木前内相が無暗と振り廻はした腕が、よし民政黨までは相かなかつたにしても、少なくとも、政友會自身に觸はつたことは爭はれぬ。それが意外な鈍刀であればあるほど、痛みは甚だしい。時節柄、化膿のおそれがある。

歷代の政府、いづれも政權にかぢり附かなかつたものはないといふ意味では、田中政友會内閣、かならずしも赤面することはない。政友會内閣は、かう云つて自ら慰めてゐるもの丶如くに見える。とは云へこの内閣ほどに、醜くいかぢり附き方をした内閣も罕である。内相の辭職は、選擧干涉、言論暴壓、暴力團の利用等々の事實を承認したものにほかならぬが、干涉に失敗し、威嚇に失敗し、買收と誘拐にまで失敗した政友會内閣は、この代償をさへも支拂つて、不信任案握り潰ぶしのために、議員數名の明政會と取引きせざるを得なかつた。これは政府が、いかに窮地に陷入つてゐたかといふこと、この窮地を脫するためには、あらゆる無理が仕盡されたことを物語つてゐる。あらゆる無理を仕盡したゝめに、内閣自ら蒙つた手傷は、勢ひ深からざるを得なかつた。現に差し迫つて着手せられようとしてゐる内閣改造のために、内閣の自壞を豫想するものさへもある。しかし政友會内閣は、恐らくはこの難關を切り拔けて、少なくとも通常議會までは、命脈を保つものと思はれる。民政黨は、議會の鬪爭を、「議會外で決する」ために、「國民的大運動を起して内閣倒壞に直進」するといふことである。議會においてさへも決定的に鬪ひ得なかつた民政黨が、議會外の鬪爭によつて内閣を倒ほすと云ふにいたつては、寧ろ滑稽であつて、民政黨の攻擊力をもつてしては、いはゆる満身創痍の政友會内閣さへも、あまりに有力な敵である。この民政黨の「國民的運動」の掛け聲で、國民がどれだけ踊るかは疑問である。疑問といふよりも、寧ろ疑問の外にある。ことにこの點では、政友會内閣は、さきには共產黨事件で惠まれたやうに、今度は、支那問題の重大化によつて惠まれてゐる。この、、、、の政友會が、重ねがさね、「國家の不詳事」によつて、或は「國家の不詳事」によつてのみ、惠まれてゐることも、一つの皮肉でもあるが、同時にまた、極めて暗示的であるともいふことができる。

そこで政友會が臨時議會で受けた手傷が、いよ〱ほんとに化膿してくるのは、寧ろ政權を失墜して、在野黨となる瞬間からであるかも知れぬ。

政友會内閣が、幸ひに差し迫つた内閣改造の難關を切拔けたなら、その次には、いかにして來るべき通常議會を切り拔けるかといふ、もつと重大な難問題が待つてゐる。しかしこの答は、極めて簡單明瞭である。いふまでもなく、民政黨の切り崩しと、中立議員の誘惑とのほかには、何らの手段もあり得ない。そこで早くも、民政黨内の舊本黨系の誘惑と動搖とが傳へられてゐる。かうして政友會と内閣側からは、議員の買收誘拐の鬪爭を、一そう本質的に、議會後に決しようとする

ことになる。政友會とその政府とが、議會外で決しようとするこの勝負は、民政黨が議會外で決するといふその勝負よりも、遙かに現實的であつて、恐らくは、民政黨は、その被害を免れない。

○

かうしてわが國の政界は、なほ當分の間、ブルジョア二大政黨の間の、いろ〳〵の形によつて行はれる議員爭奪戰──種々なる格好とレッテルを貼つた『罐詰め』と、新案の『罐切り』との鬪爭に終始するだらう。この鬪爭において、或は政友會が勝ち、或は民政黨が勝つ。これによつて或は政友會内閣か、或は民政黨内閣が現れて、政治的形勢の表皮には變化を惹き起こすが、この政治上の形勢の本質にいたつては、もとより何らの變化もない。今後の議會においても、二大政黨外の少數中間議員が、臨時議會に見たやうに、依然としてキャスチングヴォートを握つてゐられるかどうかは、すこぶる疑問であつて、二大政黨の勢力の間には、今日以上の懸隔ができ、或る一方が議會の過半數を占めることは、もとより豫想し得ることではあるが、本質において何等の相異のない二大ブルジョア政黨の勢力が、ほゞ伯仲した勢力として對峙する現狀には、依然として、根本的には變化がない。この政治上の形勢は、第三黨──それは無產階級の政黨であらうとも、又は、小ブルジョア的『新自由主義』の政黨であらうとも──が、今日よりもはるかに有力になるまでは、本質的には變化のないものと見做してよい。

○

かやうな政治上の形勢を打破する第三の政黨となるものは、無產政黨であらうか、それとも、小ブルジョア黨であらうか。これに極めて興味がある。

ブルジョア第三黨は、今日まで、しば〳〵試みられて何時でも失敗した。少なくとも今日までは、吾々は第三のブルジョア黨が幾らかの生長發達をした事實よりも、第三黨が例外なく、凋落した事實のみを知つてゐる。明政會もまた、この實例に、さらにいま一つの實例を加へるにすぎないものであるかも知れぬ。明政會はたゞ萌芽的な結合であつて、この結合から、謂ゆる「新自由主義」の政黨が必ずしも發達するわけではない。たゞ明政會が、第三黨の計畫として興味のあることは、從來のすべての第三黨計畫にくらべて、その謂ゆる『新自由主義』なるものによつて、階級的の立場が一そう明白なといふことである。これは慥かに、第三黨計畫の一進步と云つてよい。

「新自由主義」の提唱者の註釋によると、「新自由主義」は、一切のものを產業の能率の犧牲とする大資本とその制覇に反對すると同時に、一切のものを、公正な分配の犧牲とする勞働者の要求に反對する。世界に今やこの二つの要求と、この二つの勢力の正面衝突であつて、この二大勢力のいづれにも屬しない『多數國民』の地位は、これがために次第に安定を失つてゐる。この多數國民を、これらの二大勢力から防衛すること、これが謂ゆる「新自由主義」の任務である。大資本で

はない、勞働階級ではない、大資本家でも勞働階級でもないところの「多數國民」――これが新自由主義とその政治運動とが代表しようとする社會的階級なのである。普選による最初の議會において、それはよし極めて萌芽的なものであるにもせよ、かような明白な、意識的な一定の社會階級に立脚しようとする小ブルジョア第三黨運動が、わが國の政治史の上に、初めてはつきりとした姿で現はれたことは決して無意味といふことはできぬ。

それと同時に、臨時議會における明政會の行動は、かゝる社會階級の特質を、(代表したとは云へないにせよ)遺憾なく象徴したものだと云ふことができる。大資本にあらず、勞働階級にあらざる小ブルジョア社會層は、この二大階級勢力の間に立つて、政治的に如何に行動し如何に取引するものであるかは、いま吾々の前に、縮圖的にではあるが、實物的に示されたといつてよい。

これはまた、ブルジョアジーの政治的支配の下において、無産階級の政黨のみが、唯一の反對黨であることをも示したものである。

○

臨時議會を支配したものは、明政會のキヤスチングヴオートであつたと云はれてゐる。すべての人々の批評は、二大政黨がこの一握の少數黨のために引ずり廻はされて、醜態のかぎりを盡したといふことに一致する。たしかに、その通りである。明政會のキヤスチングヴオートは、二大ブルジョア政黨を引き廻はした。けれどもこのキヤスチングヴオートを、最後に引きづり廻はしたものは、誰れだつたか? それは新自由主義が「多數國民」を防衛してくれる筈だつたところの、大資本政黨の金力と權力ではなかつたか。

この大資本閥に反對する中間勢力が、來るべき通常議會においては大資本閥のためにどのやうな扮裝の下に、どのやうな役割を演ずるかも、すこぶる興味がある。

今日の政局と明政會

鶴見祐輔

朝野兩黨は對峙のまゝ特別議會を終つた。

この議會中に於ける勢力は、文字通りに伯仲してゐて勝敗ともにその差は二三票であつた。ゆえに無關心なる第三者として之を見物すれば、頗る興味ある角力であつたらふけれど、實際この大渦紋中に翻弄せられてゐた我々に取つては、冗談ではなかつた。ことに僅々七名の明政會の向背によつて、勝敗が岐れるといふ瀬戸際まで押しつけられて見ると、初めて政界に出た自分達に取つては可成り眞劒な重荷であつた。

しかるに特別議會は終了したけれども、この兩黨對峙の形勢は依然として存續してゐる。二大政黨に分解作用が起つて政界の分野に一大變化を生ずれば兎に角、然らざる限りに於ては、この形勢は、次の總選擧までは續くものと見なければならない。この時に當り、政局の現實を凝視して、その將來の方向を批判することは、無用の業でもあるまい。たゞ私自身が、その渦中の人間である爲めに、つとめて客觀的描寫を試みるつもりであつても、讀者には或は主觀的敍述と映ずることはあるかも知れない。

二

私は今非常に乏しい且つ斷片的な時間を以て、この稿を記してゐる爲めに、敍して委曲なることを得ない。この議會の特色は何であつたかといふことを考へて見ると、大要左の四點に要約せられると思ふ。

一、二大政黨の勢力の伯仲せること。二、その爲めに兩黨の中間に介在せる少數黨の勢力の法外に增大せること。三、政爭の露骨なりしこと。四、初めて議會へ入りし無所屬代議士に對して院外の國民が非常なる興味を抱きたること。

この二大政黨の伯仲といふことは、日本に於て珍らしい現象であつたゝめ、その中間に介在する少數黨派の勢力が俄然として擡頭したことが、著しく世間の耳目を聳動した。斯のごときことは、外國に於ては必しも珍らしいことではない。十九世紀末英國の愛蘭土黨が、少數黨を以つてして自由黨を縱橫無盡に引き廻したる如き、最近には六年前に米國上院のラ・フォレット派が、共和民主兩黨を思ひのまゝに操縱したるがごとき、その例に乏しくもない。

たゞ此等外國の事例と、我國現下の狀勢との相違は、政權爭奪の露骨さ加減の相違である。ことに政友會内閣が一切を政局の切拔けに供して手段を擇まず狂奔したる爲めに、深刻苛辣なる政戰が展開せられたのである。

私は日本の社會が、穿き違へたる功利觀に支配せられて、現實の結果のみを重んずる思想に動かさるゝことを深く憾みとする。ことに政治が、フェアー・プレーの精神を全然沒却して、勝利第一主義に隨する現狀を痛嘆する。その最も露骨なる事例を、我々は此度の特別議會内の政戰に見たのである。

乍併、私は今日の政黨墮落の責任を、擧げて政治家の双肩に冠かんとする議論に贊成し兼ねる。私は日本の政治を非合理的ならしめてゐるものに、選擧の腐敗にあると思ふ。金力と因襲情實と干渉とによ

黨から若干の人が出て、別に新黨を作るのであるといふのである。乍併、その新黨と明政會の目的とする新黨が同一のものであり得るや否やを、私は疑ふ。

私は進んで、明政會の政策を論じて、その新黨樹立の方向を示すべきであるが、既に岡山に出發する汽車の時間が迫つたから茲に擱筆してそれは他日の機會に讓ることゝする。（三、五、一〇）

無產階級の視野から見た第五十五議會の正體

大山郁夫

一

『普選議會』だといつても、第五十五議會は、依然として――今後も當分はさうであらう通りに――ブルジョア議員がその內に於て壓倒的勢力を擁してゐた議會であつた。從つて、それは例に依つて例の如く大體は舊來の型通りの行事を繰り返した議會にすぎなかつた。若しかりそめにも『普選議會』といふ名に魅せられて、そこから何等かの奇蹟變化の出現を待ち設けてゐたものであつたとしたら、それは氣の毒にも初めから慘ましき失望に運命づけられてゐた餘りにも善良なる樂天家たちであらねばならなかつた。

見よ！ 政府および與黨による露骨なる醜怪手段を通して反對黨の切り崩し、それに對する反對黨の必然的防禦、――さうした議員爭奪戰の間に見られた一種の情景に關聯して『罐詰め』とか『罐切り』とかいつた新議會用語が、いつとなく發明され流布されるに至つた。そのほか、近年來每會期の吉例となつてゐる議場の猥雜なる混亂、低劣なる彌次の濫發、無制限的喧噪による議事の妨害、等、等、等。――あたら最初の普選議會も、かうした如何はしい景物には事を缺かなかつた。

更らにブルジョア新聞紙上の議會關係の記事の上に眼を落せば、何よりも殊に、政友會と民政黨との勢力伯仲の結果、中間に介在する少數派諸黨が、そのキヤスチング・ヴオートの小刀細工式利用によつて圖らず各局面の主人公となつたかのやうに見えた事實が、さも價値顚倒的一大特異現象であつたかのやうな口吻を以て傳へられた。そして、

いはゆる『大政黨の面目丸潰れ』を表現する諸事實——たとへば、政府および政友會が掛聲だけの『議會解散』で野黨を威嚇して、しかもそれを斷行し得ず、僅かに二度の停會で當面を糊塗したやうなこと。また政府がその日常愛誦の『一羅新生主義』の題目を輕々と裏切つて難局を脱出したやうなこと。また民政黨がその一枚看板であつた總括的不信任案を審議未了の運命に終らせて、却てホッと安心の息をついたやうなこと。等、々、々、——は、皆ひとしくそれらの少數派諸黨の勢力の不當優越に基因したものとして說明された。かくて、『少數派の專制』に對する排擊的言辭が頻りに並べられ、大政黨の腑甲斐なさに對する愛想づかしが盛に放たれた。（そこにこそ却て、ブル新聞の意識の奧底に潜む『大政黨』——特に無產黨に對立するものとして觀念されての——政治的機能の將來に對する期待と信賴とが暗示されてゐるものがあつたが、それは茲では別問題だ。）

二

だが、二大政黨の中間に於て活躍したそれらの少數派諸黨の出處進退は、實際それほども堂々たるものであつたか？　どうして、どうして！　少くとも、『獨自の階級的立場』の鮮明の下に內相彈劾案や總括的不信任案への合流の態度を鮮明にした無產諸黨を除いた以外の少數派諸黨の、あらゆる中腰フラ〲腰の步み方は、正視に堪へざる醜態以外の何物でもなかつた。そのうち、議會開會前に既に早くも『政策協定』の名の下に於て政友會と野合的取引をした實業同志會の態度の卑屈さは、よし相手の政友會のそれ以上でなくとも、決してそれ以下ではなかつた。また、例のこけ威しにもならない三つの非難決議案から總括的不信任案までの間を小器用に泳ぎ廻はり、その一擧一動によつて政友會と民政黨とを交互に一喜一憂せしめた明政會にしても、いくらその『新自由主義』の看板を麗々しく飾り立てたところで、結局は二大政黨のいづれかに隷從することなくしては、その危ぶなかしい小ブルジョア的生存をすら維持することが出來ない運命を自ら證據立てたにすぎなかつた。

ブル新聞が鹿爪らしく指摘した『少數派專制』は、畢竟或る瞬間々々に見られた幻影的事象にすぎなかつた。大局の上から總勘定して見れば、結局大政黨が小政黨に引摺られたのではなく、小政黨が大政黨に引摺られたのだつた。この關係は、少くとも大政黨に引摺られることを意識的に拒んだ無產黨議員團を除外しての、爾餘の少數派諸黨のすべてについて、無條件的に言ひ得られる。多數決主義の上に立つ議會內だけのこととして見れば、『少數派專制』などといふことは、考へるだけでさへ馬鹿げた話だ。それは、大政黨が議會內で自己の我儘が何等の故障もなく押し通しきれない時に發する不平の聲にすぎないものだ。

三

會期二週間餘の特別議會——第五十五議會——に於ても、大政黨は大政黨だけのことをして退けた。だが、彼等がして退けたのに何でもあ

つたか？　それは、あらゆる表面上の外被物を拂ひ退けて端的にその核心に就いて見れば、單純にブルジョアジーの階級政治そのものにすぎなかつたのだ。政友會にしても民政黨にしても、彼等の議會に於ける存在の理由は、究極に於ては、そこで資本家地主の代表者としての任務を遂行することの上に繋がつてゐるのだ。そして、無産黨議員團以外の少數派諸黨の活動の中心點もまた、同樣にその上におかれてゐるのだ。なるほど、それらの少數派諸黨は、綱領とか政策とか個々の行動とかに就いて、時には大政黨に對して異を樹てたり、楯をついたりなどすることはある。だが、階級政治の大きな流れの上では、彼等は結局、大政黨の行動の渦中に卷き込まれて行くのが落ちだ。第五十五議會に於ては、さうではなかつたか？　おそらく、次の議會に於ても、次の次の議會に於ても、さうであることに變はりはないであらう。

そして階級政治といふ一點に來ると、そこには不思議にも――否、當然にも――政友會とか民政黨とかの區別が掻き消されて、彼等は一樣に、資本家地主の代表者の地金を現はして來る。のみならず、自由主義とか新自由主義とかを看板にして立つてゐる少數派諸黨も、結局はそれに追隨して來る。そしてすべてが一團塊となつて、無産階級に正面から對立するやうになる。殊に、時にはブルジョアジーの味方となり、時にはプロレタリアートの道伴れとなるといふ調子で、その時その時の風の吹はしでフラ〳〵と方向を轉換する習はしのある典型的な小ブルジョア的立場を代表する革新黨の如きが、殆んど見る影もなく零落した殘骸を議會に晒らしてゐるにすぎない今日に於ては、その點が一層顯著に眼につく。しかもそれは、無産階級的立場の上に立つて戰ひつゝ、彼等の階級政治の強壓を直接に身に受けてゐる我々にとつては、最早議論の問題ではなくて、切實なる體驗のうちに織り込まれてゐる問題なのだ。

いかにも、ブルジョア議會内に於ても、或る限界内に於ては、既成諸政黨間に――特に政友會、民政黨の如き大政黨間の――對立が現實に深刻なものとして我々の眼に映ずることがある。そして、さういふ狀態の下に於てこそ、少數派諸黨のキャスチング・ヴォートが最も多く奇功を奏する機會を持つことも事實だ。だが、かうした現象は、嚴重にブルジョアジーの諸部分相互間の對内關係の限界内に於てのみ起るものだといふこともまた、同時に記憶されなければならぬ。更らにまた、さうした既成諸政黨間の對立は、彼等の共同行動によつて行はれる階級政治の本質を或る程度に隱蔽こそするが、しかし決してそれを毫末も除却するものでないことも無論である。

また時としては、或る場合に既成諸政黨間の對立を利用する無産黨の戰術から割り出された行動が、階級政治の存在を或る程度にぼかすやうなことすらある。たとへば、第五十五議會に於て、無産黨議員團が、よし「獨自の階級的立場から」といふ保留的聲明の下に於てとにもせよ、野黨聯合の内相彈劾案や、民政黨の總括的不信任案に合流して行つたことなどは、恰かも彼等と關係在野諸黨との間に或る利害の

一致點が存してゐることを想像せしめる根據を與へたかの觀があつた。だが、實際に於ては、縱しその場合或る利害の一致點が存してゐたものとしても、それはしかし、單に表面上、形式上の問題に止まつたものであつて、毫も事柄の實質に觸れた問題ではなかつたのだ。

四

それは無論のことだ。

だが、もし疑ふものがあるならば、假りに内相彈劾案や、總的括不信任案やのうちに含まれてゐたところの、言論自由の抑壓とか選擧干渉とか、暴力看過とかへの抗爭の問題の如きものから一例を取つて、少しく考へて見よ。

まづ第一に言論自由の問題について言はう。この方面に於て、民政黨のやうな大ブルジョアジーの政黨と、眞に無産大衆の利害を代表する無産黨との間に、實質上の共同の立場があらうなどいふことは、考へるだけさへ馬鹿臭い話だ。我々勞働農民黨員は、民政黨の前身であつた憲政會によつて支持されてゐた若槻内閣の下に於ても、單に言論の自由といはず、その他集會、結社、出版、等々の自由に關しても無限に多くの苦い經驗を嘗めた記憶の持主である。それもその筈だ。憲政會の政府は、普選法を欺瞞的のものにしたり、無産階級抑壓諸法令——特に治安維持法や暴力行爲取締法の如き——を制定したりした政府だ。また舊勞働農民黨の前身であつた農民勞働黨を結黨後三時間以内に厭殺したのも、更らにまた我々の陣營内の極めて合法的な諸運動——たとへば議會解散請願運動や對支非干渉運動やの如き——の上に血の出るやうな彈壓を加へたのも、實に憲政會の政府だつたのだ。我々は、だから、將來民政黨の政府が再現したことろで、言論の自由を始め、集會、結社、出版、等々の自由の獲得のため吾々の必死的闘爭の手を少しも緩めずに戰ひつゞける必要を意識して居りこそすれ、我々と民政黨との間に、この方面に實質上の共同利害が存してゐようなどゝは、夢にも考へてゐないのだ。

次に、選擧干渉の問題に關しても、また同樣のことが言へる。成る程、過ぐる總選擧の形見として民政黨によつて取り出された第一および第二怪文書事件が暗示してゐる通りに、民政黨も可なりの程度に政友會政府の手によつて行はれた選擧干渉に苦しめられた形跡があるにはあるが、しかしそれにしたところで、無産諸黨——特に舊勞働農民黨——が受けた選擧干渉に比較すれば、到底問題にはならないのだ。それに關聯しては、私自身も一つの生々しき經驗を持ち寄ることが出來る。すぐる總選擧に際して、私たちが香川縣で受けた組織的大彈壓大干渉の如きは、眞に、、、、、、、、、を偲はしめるものがあつた。それ故に我々は、第五十五議會が欺瞞的な普選法をすら極力現政府及び與黨の利益のために惡用して作りあげられたものとして、その即時解散を絶叫して已まなかつたのだ。ところが民政黨は、一方に於て現政府の選擧干渉を糺彈しながら、他方に於ては、議會再解散を絶對に否認するといふが如き矛盾を犯して憚らなかつたのだ。ところ

で、かゝる矛盾は、一方に於ては無論、彼等の政權獲得中心主義から來たものではあるが、他方に於ては同時にまた、彼等が受けた選擧干涉が、彼等をして議會解散の必要を叫ばしめるほどの本質的のものではなかつたといふ事實を反映してゐるものでなくて何であらう！のみならず、我々はまた、民政黨の政府の下に於ても、本質および程度に於てさして相異のなかるべき選擧干涉が我々の上に加へられるであらうことを豫想して、今からそれに對して戰ふ決心を固めてゐる。いづれにしても我々は、この方面に於てもまた、我々と民政黨との間に何等の共同の立場の存してゐないことを知り拔いてゐるのだ。

次に暴力看過の問題に關して言つても、さうだ。如何にも現政府の下に於て、暴力團の橫行が急激に甚だしくなつて、そのために反動時代の色彩を異常に深めて來たものがあることは事實だ。そしてこの方面に於てもまた、私は私が直接に經て來た幾多の體驗を以て、それを實證することが出來る。だが、玆ではそれらを持ち出す必要すらないであらう。殊に第五十五議會開會中に、本所公會堂での無產諸黨の共同主催の演說會の夕に起つた警官暴行事件の如きは、受難者が新聞記者たちであつただけに問題が擴大して、從來は無產階級運動者以外には餘りに知られてゐなかつた慣行を、暗やみから明るみへ引ッ張り出した。あれなどは、若し野黨聯合に心からの憤激と、それに相應した鬪志さへあつたならば、田中反動政府の致命傷ともなるべき性質のものであつた。だが、事實上、野黨聯合には、さうした憤激も鬪志もなかつた。それは彼等が、その事件を捉らへて徹底的に政府と戰はうとしなかつた事實そのものによつて、遺憾なく證明された。それだけのことから考へても、我々は暴力看過への抗爭の一點に關してもまた、近き將來に於て政權にありつく夢を見てゐる民政黨や、その利益分配の可能を空想してゐるやうに見える明政會などゝ、些かでも共同の立場を持つてゐようなどゝは、絕對的に思ひも及ばないのである。

五

我々新勞働農民黨員は從來、『勞働者に仕事と食を與へよ』、『働く農民に土地を保證せよ』『すべての人民に自由を與へよ』等々を中心スローガンとして、勞働者、農民、無產市民が生活と自由とのために戰つて來た。しかも我々は、我々のすべての鬪爭を政治的自由獲得鬪爭に統一集中して、そこに我々の當面の行動の目標をおいた。そして、このことの正しさは、第五十五議會の經過によつても、また新たに、しかも益々有力に、然り決定的に證明された。

この政治的自由獲得鬪爭に於て、我々は既成諸政黨のすべてを敵として、彼等の手から我々の要求を戰ひ取るべく決心を固めて來た。それも當然のことであつた。資本主義發達の現段階に於て勞働者、農民、無產市民が生產過程の上に占めてゐる地位から必然的に湧き起つて來たその生活と自由との要求を戰ひ取らうとしてゐる我々と、さうした生活と自由との要求を、、することによつてのみ資本主義の最後の沒落の運命を喰ひ止めようと必死に努力してゐる彼等との間に、絕對的に

の餘地のないことは自明である。

だが、今それに關する理論的究明を離れて、單に事實問題の進行だけを跡づけるにしても、若し民政黨を中心とする野黨聯合が、彼等が表面上高らかに聲明した通りに、田中反動政府による自由抑壓への抗議の必要を、眞に衷心から感じてゐたものと假定するならば、——明かに無理な假定ではあるが、——彼等は第五十五議會に於て、同政府による日本共産黨事件の、、、、の形跡に對して一應は突き込んだ質問を提出しなければならなかつた筈であつたし、殊に舊勞働農民黨および外二團體に對する、、解散に對しては、徹底的抗議を突きつけるべき筈であつた。ところが、野黨聯合は、前者に對しては、政府および與黨と共に、それに關して執られた處置を無條件的に肯定するが如き擧に出で、更らに後者に對しても何等抗議らしき質問をさへも發しなかつたのだ。舊勞働農民黨および外二團體が非合法的な政策を掲げもしなければ、實行もしなかつたことは、當局さへも言明して居ることであり、特に鈴木内相は、新聞の議會記事によれば、それについて左の如く述べてゐる。

『それら諸團體〔舊勞働農民黨および外二團體〕の主義綱領は大して弊害はないのであつたけれども、それが次第に共産黨の主張に靡いて來たから解散を命じたのである。勿論それらの團體は明らさまに私有財産制度の否認をいつてはゐなかつたけれども、漸次それに靡いて來た筋があるのである。即ち抑壓法令を全部撤廢せよとか、團結權や罷業權の主張をする如きは、共産黨に靡いたことを語るものである。』（四月二十九日の『時事新報』から。）

これは三團體に對する解散命令の妥當性の説明として言はれたものだが、しかし結果に於てはその反對になつてゐる。即ち單に『共産黨に靡いて來た』といふが如き、、、、、、、によつてそれら三團體を解散するが如きは餘りにも無法な處置だが、しかも『共産黨に靡いて來た』ことの證據として擧げられてゐる材料は、單にそれら三團體が抑壓法令の撤廢とか、團結權や農業權の確立とかを叫んだ事實にすぎないのだ(!)。抑壓法令の撤廢とか、團結權や罷業權の確立とかの主張さへ容れられないとは、いはゆる、、、、、、の觀念に於て認められ得ることだらうか？

しかも、田中反動政府に對して極力自由抑壓に對する抗議の聲をあげた野黨聯合は、さうした點をも全然看過したのだ。ブルジョア諸政黨が如何に高聲に自由を叫ばうとも、または麗々しく新自由主義の看板を見せびらかさうとも、資本主義發達の現段階に於ては、少くとも無産階級に對して、その間に多少の程度の差異こそはあるが、究極に於て一樣に反動的存在以外の何物でもないことは、この一事によつても明瞭に實證されてゐるではないか？

六

最初の『普選議會』からは、奇蹟的變化は一切出て來なかつた。のみならず、それによつて、そこで壓倒的勢力を擁してゐるブルジョア

政黨の階級性が層一層と鮮明にされさへした。

　ブルジョアジーの諸部分相互間の對內關係の限界內に於ける既成諸政黨間の深刻なる對立も、彼等が無產階級の生活と自由との蹂躙のための共同戰線を張ることの容易さを毫も妨げなかつた。

　かくて彼等は、政府が日本共產黨事件に關して執つた一切の處置の如きものをも無條件的に肯定し、また舊勞働農民黨および外二團體に對する、、解散の如きものをも、羊の如き順さを以て承認盲從した。

　更らに彼等は、思想國難決議に於て彼等自身の思想傾向の反動的本質を暴露し、政治國難決議に於てブルジョア政治の一層圓滑なる運用を促進する工夫を講じ、經濟國難決議に於て無產大衆に魅惑的な社會政策の魔酒を侑めながら、その間に資本家地主の利益のために產業合理化の方向に益々深く步みを進めて行かうとする意圖を表明した。

　かうした狀況の下に、あれほど騷がれた野黨聯合の政府に對する突擊も、脫兎の如く始まり、處女の如く終つて、その結果は單に鈴木內相一人の辭職を將來したに止まり、當然連帶責任を負ふべき內閣は結局無事平穩に議會を切り拔けた。

　その內閣は、肝腎の『重要政策』だと稱してゐるものを一つも議會にかけなかつたが、しかし治安維持法の改惡案を提出することを忘れなかつたし、また對支出兵費や思想取締のための警察費を追加豫算のうちに組み込むことに、その拔け目なさを充分に示した。

治安維持法の改惡案はさすがに握り潰ぶされたが、しかし他方、對支出兵費や思想取締のための警察費を含む追加豫算は、難なく議會の關門を通過した。

　彼等はブルジョアジーの代表者としての任務の遂行に於て、當面實施しなければならないと感じたことは、片端から易々と實施し了ふせた。しかも彼等があれほど易々とさうすることが出來たのは、一つには、無產黨議員團の豫想外に無力であつたことから來てゐることも、我々が遺憾ながらも、腹藏なく認めなければならない一事實た。

　無產黨議員團がさほども無力であつたことの第一の原因が、總選擧の際に於ける空前の組織的大彈壓大干涉のために、選出された議員の頭數が餘りにも過少であつた事實から來てゐることは疑ひもないことだ。次に、選出されただけの議員に就いて見れば、彼等が初めての議會進出の當然の結果として、そこでの勝手に萬端不慣であつたことも、また、彼等の活動の敏活を妨げたに違ひない。だが我々から見れば、少くとも彼等の一部が、議會萬能主義や階級協調主義の無條件的肯定を含む社會民主主義に對する意識的もしくは無意識的信賴から離れ切ることが出來なかつた事實が、彼等をして一般無產大衆から期待されたほどに自由に手腕を揮ふとを得ざらしめた結果に寄與したことは、決して僅少の程度に止まらなかつたのである。

　だが、無產大衆は、それによつて少しも失望する必要はない。社會民主主義の克服は、今後に於ける大衆鬪爭の展開によつて、やがて實踐的に可能となるであらう。その上、無產階級の將來に於ける勢力增

進は、必然不可抗の趨勢だ。更らにまた、無産階級の眼ざめの進むだけづゝ政府の彈壓や干渉の效果が次第に減少するに決まつてゐる。現に、第五十五議會が今にも解散になりさうで、遂に解散にならなかつたのは一つには支配階級が、解散後の總選擧に於ける無産黨の當選率の飛躍的增進の豫想の下に、異常の恐怖に襲はれたとからも來てゐるのだ。そのために、田中反動政府が差し迫つた倒潰の危惧から免れて胸をなで下したとか出來たことなどは、一場の運命のアイロニーだといはと言へる。だが、現在田中反動政府の命脈を一日永からしめた原因となつたそのことが、近き將來に於て既成諸政黨全部の脅威となるまいものとは、誰れが大膽に保證し得よう。無産階級はこの際少しも失望せずに、第五十五議會の教訓を無益に終らせないために、闘爭のための正しき合同を目指しつゝ、この上勇敢に旗を進めなければならぬ。(完)

議會政治の病根

清瀬一郎

第五十五議會は終了した。而して失望の聲は天下に滿ちて居る。或は變節したる四五の代議士を責め、或は態度不鮮明であつたある少數團體を漫罵して居る。『こんなはづではなかつたのに』といふのが日本人共通の感情である。一たい此失望の原因は何處に在るのか。變節者も惡からう。態度不明の團體にも責任はあらう。しかし、古來、人間の本性は吾人の熟知して居る通りである。數百人の議員が悉く、正直なもの、硬骨なものばかりであらう筈がない。人間の本性を古來のまゝとして安全に運行し得るものでなければ完全なる政治組織といふことが出來ない。議會政治は、專制政治よりは勝れたものには相違ないが、議會政治にもなほ幾多の病氣がある。之を取除かなければ安全なる政治組織といふことが出來ない。日本の議會政治は今や疾病狀態に在る。今にして之が病源を研究し、果斷以て、此病根を取り去つてしまふに非ざれば、議會の信用は全く地に落ち、議會否定の論議が國民の輿論となつてしまふかも判らぬ。これ私が急速に筆を執つて世に訴ふる所以である。

一、變節の防止　今回の政戰の成績を調査するに、變節した者が五名ある。民政黨から四名と革新黨から一名とである。これが爲め票數計算に於て十票の差異を生じた。十票の差異は大局を支配するに足り

た。人間性を現在のまゝとして冷淡に觀察すれば、代議士候補者が選擧場裡に於ては、當選を希望するの餘り、心にもなき政見を發表することもあり得ることである。當選後は解散回避の爲め曩日の公約に背いた行動を執ることも亦あり得ることである。其間、利益の授受、利權の供與があることが立證せらるれば固より刑法の瀆職罪を以て論ずることも出來やうが、此立證が出來ない限り、瀆職を以て論ずることも出來ない。また、單純に解散回避といふ事であつたならば、必ずしも瀆職と論ずることも出來なからう。こゝに我國議會政治の病患の一つが伏在する。今日の法制に於ては變節勝手次第といふことになつて居る。これが爲め議會は國民の縮圖ではなくなつたのである。國民の意思は議會に反映しなかつたのである。國民の失望はまづこゝから起つて居る。然らば、此の『變節妨止』の方法は發明せられて居ないのかといふに、そうではない。それは發明せられて居るのである。彼の『議員召還』（リコール）の制度がそれである。重要なる問題につき選擧區に誓つた所と反對の行動を執る議員は選擧區より召還し、辭任せしめ得るの途を開かなければならぬ。今回の如きは、まさに其場合である。第五十四議會は『政友會内閣を信任するや否や』の問題を決する爲めに解散せられた。それ故、解散後の總選擧に於ては、各候補者は、政友會内閣に對する贊否を明言して選擧に臨んだ筈である。政友會内閣に反對すると聲明して、投票を獲た者が、議場に出でゝ、卒然之に贊成の態度を執つて、それで選擧區民が何等の抗議を爲すことが出來ないといふのは明に不合理である。外國にも例のあることである。『リコール』の制は、我國にても急速に採用されなければならぬ。

二、**警察の改造**　我國の警察制度は、議會政治や、政黨内閣といふことを豫期しない制度である。このたびの經驗に徵するも、日本の警察は隨分憲政を毒した。選擧中には干渉のあるだけをやつた。議會中には、院外の演說會をぶち壞した。議會終了するや否や、また、、、、をつとめ、反對派の三代議士を召喚した。かゝる世態に鑑み、政黨内閣制度と警察組織の問題はやうやく世間の視聽をひくやうになつて來た。現に今期議會で決議せられた、内相彈劾決議中にもこのことが引用せられてゐる。元來政黨内閣では、黨人中の黨人を拔擢して内相の地位に立たしめる。内相は全國八萬の警察を手足の如くに驅使する。而して、此警察官が司法警察の權を握つて居る。違警罪即決の權をも握つてゐる。此制度上の危險は、時に選擧の際に於て著しい。實に恐ろしい事である。内相（從つて内相の屬する政黨）に迎合する警察官は、其權力の濫用に日もまた足らぬ。反對黨の事務長又は幹部數名を警察署に呼び出し、一晩留め置いたならば選擧の氣勢は忽ち頹れる。反對黨を破るに斯の位有力な戰略はない。今日の制度がつゞく限り、而して、政黨内閣制が認めらるゝ限り選擧は公正に行はるゝ氣づかひは斷じてない。前にも言つた通り我國の警察制度は政黨内閣といふものを識らぬ時代の產物である。我國で今日の警察制度を全國的に布いたのは言ふまでもなく、明治八年のことであつた。同年發布せら

れたる「行政警察規則」が今日に至るまで我國警察の根本法であるが同規則第一條には『行政警察ノ趣意タル人民ノ凶害ヲ豫防シ、安寧ヲ保全スルニ在リ』と說いて居る。これは議會制度を信じなかつた、普國の法制より承繼したものである。同國法には『警察ノ職務ハ公ノ靜謐、安寧及ヒ秩序ヲ維持シ及ヒ社會又ハ社會ノ各員ニ對して存スル危害ヲ除クカ爲メニ必要ナル措置ヲ爲スコトニ在リ』との文を存して居る。其の後、明治政府は普國の警察大尉ヘーンなる者を聘し、警官の練習を爲さしめたこと世人の知る所である。大體に於て、我國の警察は舊普魯西王國の制を模したと言つても良からう。しかるに、此當時の普國といふものは、未だ政黨内閣などといふものを經驗しない國であつたのである。議會は、あるにはあつたが言はば諮問機關的のものであつて、今日の日本の議會のやうなものではなかつた。況んや議會内の多數黨が内閣を組織し、黨人が内相となり、警察の總長官となるなどといふことは毫も豫想せられて居らぬ。當時豫想せられて居らぬ事柄が今日起つて來たのである。

以上は選擧について言を立てたのであるが、實はこの事は今日總ての警察行政について言はれる。殊に公平無私でなければならぬ所の司法警察について言ひ得られる。社會の現象について常に一隻眼を具へて居らるゝ長老辯護士、今村力三郎君は曾て、「我國の諸法律は勵行せられて居る。しかしそれは二分の一の勵行である」と唱へられた。暴力行爲に關する法律でも、治安維持に關する法律でも、國民中或る半分の者には適用せられず、他の半分の者には頗る苛察に適用せられつゝあるを諷刺せられたものである。世人、英國の政治を羨む。而して多くこれを其國民性に歸して居る。しかし乍ら英國の憲政が平滑、圓滑に進むわけは其行政組織に職由する所の多いことを看過してはならぬ。そのうちにも、英國の警察が全然、政黨に關係なき中性的のものであることに眼を濺がなければならぬ。彼の國に於ては州會と四季裁判所との共同管理の下に在る。我國に於て、憲政の運用を圓滑にし、行政の偏頗なからしめようと思へば、警察の内、少くとも司法警察權と違警罪即決權とを、内相配下の地方官系統より奪ひ去り、之を檢事の系統に屬せしめ、而して檢事の長官、即ち檢事總長を司法大臣より切り離し、ちやうど會計檢査院長と同じく獨立の地位に置かねばならぬ。右の行政改革をやらねば、幾度内閣を更へても我國の政治は前進するものではない。

三、**選擧費と黨費**　世人、代議士の變節と少數團體の解散回避を笑ふ。しかし乍ら、今日のやうに、選擧運動の費用が候補者の個人負擔といふことであつたならば、其負擔は、餘りに過大である。先般無産各派の代議士諸君が選擧法の改正案を提出せられた。その内にも選擧運動費の制度を提唱して居られる。それは只今の選擧法が、有權者數を議員定數にて除した數に四十錢を乘ずといふのを　これにて平均一萬二千圓)、二十錢を乘ずといふことにせよといふに在る。この案にすれば選擧　用の制限は平均一人分六千圓といふことになる。しかし、六千

國といふ金は、實に少々の金ではない。それを個人負擔にせよといふことは、餘ほど無理なことのやうに思はれる。これを改革するの法なきか。

今日の選擧法では、政府より宣言書の無料配達をして居る。選擧演說のため、公立學校を實費支辨で貸與して居る。此やり方に今一歩を進め、選擧區內の公共團體(市町村等)をして、選擧會場の設備を爲さしめ(小學校を使へば可なり)、且、選擧演說の開かるゝ事を村內に周知するの方法を執らしめ、候補者を同時に此會場に招き、連續して各其政見を發表せしむるを可なりと考へる。なほ此外に村內の揭示板等に各候補者の政見を揭示せしむれば一層可なり。なほ今日、政見書の無料配達をして居るが、なほ進んで、政見書の無料印刷を爲さば一層可なり。斯の如くして機會均等の選擧を行はしめたならば、それで初めてミラボーの言つたやうな、國民の縮圖たる議會が成り立つであらう。以上の考案は曾て建部遯吾君が選擧公營案として提唱せられたものと同樣の考である。

斯の如くして選擧運動の費用を最少額に制限し得たならば政黨の費用も、今日の如く多額なるを要しないやうになるであらう。それでも、黨費の出所が不公明では正當なる政治が出來やう筈がない。黨費の公表の原則も亦今日の急務である。(四、五、九)

支那に於ける共産主義運動の發展過程と其現勢

横田實

一　再臺への總退却

中國共産黨は、一九二七年七月を以て全局的總退却の狀態に這入つた。一九二〇年民國九年勞農露國第一次代表ユーリンの北京入りにより、極東迂廻政策の口火が切られて以來、ヨッフエ、カラハン、ボロデインの一流人物が相踵いで派遣され、支那極左運動の統帥に當つて茲に丸六ヶ年を經過し、黨の結成から國民黨との合體による政權把握と、それの迅速な發展に基く黨其ものの小兒化と、目まぐろしき展開の跡を殘して一齊に其陣營を撤した。當初僅かに三四十人に過ぎぬマルクス主義研究の一學術團體から五ヶ年にして黨員五萬餘に達し、國際的政府を樹立して日本の全版圖に比敵すべき統治地帶に臨んだ中國共産黨の發達過程は、正しく世界に於ける一驚異である。退却は軈て進むべき準備である。全國的に風靡した國民黨右派と反革命的軍閥の所謂清黨運動——南方に於ける國民黨内共産派排除と北方に於ける左派掃滅——が必然的に武漢に於ける七月事變となつたものであるが、之を以て支那の共産主義運動が絶滅したと觀るのは、恰かもレニンの新經濟政策を以て露國革命の墮落となした一部偏見者の觀測が今日に於ては全然一顧されない狀態にあるのと同じく、それは大なる錯誤である。恐らくはここ一年を出でずして、或は半ヶ年足らずして第二次活動の陣線に起つべく豫期し得らるる充分の理由を持つ。

最近自殺したヨッフエの報道に當り、北方軍閥下の一新聞は、一九二二年——民國十一年——三月より翌年一月迄の間にヨッフエは支那の青年に自殺政策——共産主義宣傳——を教へて或程度の成功を收めた。即ち支那自體は彼らの赤化政策により危ふく自滅せんとしたが辛うじて彼ら一派を驅逐する事が出來た。自殺教唆者たるヨッフエが自ら死んだ事は寔に天意の妙である。と皮肉に論じて居る。事實支那に於けるヨッフエの事績はカラハン、ボロデイン程華かでは無かつたが、ユーリンの後を繼いで共産主義の種子を培ひ國民黨との結合に成功した點に

於て、支那左傾史上沒すべからざるものがある。果していふが如く自殺主義の宣傳であつたか否か、果して其危險から支那が脫却したか否か。而して其關與する所如何、これが東洋への波動如何を以下少しく筆を進めて見やう。

二　革命運動の發展過程

中國共產黨の總師陳獨秀は、支那の國民革命運動は『日淸戰爭の戰敗後康有爲、梁啓超らの戊戌變法運動、排外封建の義和團事變、共和創成の辛亥革命、學生の第一次參加を見たる民國八年の五四運動』の四期に亘る小資產階級的運動を經て、始めて無產階級運動の段階に達した『失敗はしたが然し妥協は無かつた』これが今日の革命階級の唯一の優點である。と論じた。這は實に妥當な分解で本論に入る前提として、少しく其說明を加へる必要がある。

近世支那の國民運動はそれが極端な官僚階級に局限されたものであるが李鴻章の日淸和議反對より、立憲派の所謂變法自强運動となり、孔子教義の改革非改革兩派の分野を生じて、思想的に一轉機を劃せるのみならず、西洋文化の輸入が延いて支那四千年の迷夢を醒まし、一般行政及教育制度の改革を促がした所の戊戌變法運動に黎明を發して居る。其所に何ら革命的要素を含まず、國民運動の名を以てする事の稍不穩當なるやに見えるが、微く共淸朝三百年の專政末期に際して、當然來るべき民衆の自覺に第一石を投じたるものとして、この官僚乃至は智識階級の眞劍な改革運動を記憶せねばならぬ。のみならず今日支那の民衆が双手を擧げて疾呼する所の、血の樣な叫びを擧げて居る所の、侵略主義反對、帝國主義打倒、不平等條約撤廢等の其の主なる發因は此前後期に於て列國の魔手が伸びたものである事を識らねばならぬ。倒滿興漢の聲が南支に揚り、孫文の創始した興中會國民黨の最前身―が廣東に兵を起さんとして事前に破れ孫文の光輝ある革命運動の第一次失敗の歷史を印したのも此時である。

外力の侵入と、淸朝の反動政策は遂に無知の民衆を驅つて團結せしめ、外國人と外國貨物と基督教、一切の外力を排除せんとする義和團の發生を見るに至つた。系統的組織を有せず單なる暴動に終つたのは、行動の中心信念と指導精神の缺如にあるが、民衆の團結力を以て强大な列國の合成勢力に對抗した事は、今日高唱する所の反帝國主義運動の事實上の初大陣營をなすものとして、思想上重大な關聯を持つものである。而も其後に於て翕然として全國的に利權回收運動の勃興を見、特に鐵道利權に喰ひ込める外力拒否の大運動が、直接淸朝倒壞の主動力に轉向し來れる事は最も注意すべき點である。

即ち辛亥革命、武漢に打ち揚げられし第一次革命の烽火は此空氣の裡に冲天し、民國元年か孫文によつて中外に宣明され國民黨の青天白日旗が始めて支那の大空に飜つた。然し乍ら排外空氣に生れた倒滿興漢の革命は淸朝の退位と改元と中華民國を殘して、袁世凱との妥協に依り須臾にして方向を右轉し、惜しむべき退却を餘儀無くするに至つ

た。革命黨を國民黨に改組して今日の礎石を築いたのは此第一次革命の失敗が、緣をなしたものであるが、其失敗が軈て國內軍閥の發生となり、近來の極左運動の二ツの標的『反帝國主義と反軍閥、』となつて彼らの二大指導原理の一基因となつたのである。辛亥革命は革命當事者の運動方針が單なる、淸朝倒壞、即ち排滿興漢の國內的一民族意識を多分に盛つたものに過ぎなかつたから、民衆それ自身の解放に關しては何等の顧慮を與へず、社會人の實生活には毫末も影響する所無かつたのは甚だ遺憾であつた。軍閥の發生と必然な其抗爭による民衆の蒙つた迫害と損失とが寧ろ其罪惡をさへ思はすものがある。

斯くて、陳獨秀の指摘せる第四期運動『五四運動』が自覺せる民衆の團體的運動となつて、支那の思想界にエポックを劃らしたのである。第一革命後八年、列强の帝國主義的侵略と國內軍閥に對する反感は燎原の火の如く全國青年學生の頭を風靡して、民國八年五月四日北京學生團約三千人は當時親日派の巨頭たりし曹汝霖、陸宗輿、章宗祥三人を襲擊して冠するに帝國主義の走狗賣國奴を以てし、當時の錢能訓內閣を倒壞して、集團の合成力を初めて自得した。何等政治的策動に因らざる純然たる民衆の直接行動の第一聲を擧げた事に於て、殊にそれが文化運動乃至は社會運動の急激なる發展を促がせる點に於て、最も重要なる影響を與へたものである。

以上の歷史と環境を持つ學生の自覺が文化運動の最低段より、順次社會運動の段階を上つて、やがて社會革命の殿堂に額づくに至るべき事は、それが支那である事に於て、可なりの妥當性を見出す事が出來る。中國共產黨が其翌年、民國九年に成立し、勞農露國との結合が茲に萌芽を發した事は、强ち偶然でない。

三　中國共產黨の發生

集團の威力は五四運動によつて現實に支那民衆を刺戟し自覺せしめた。極めて大まかな團體組織ではあつたが、計畫的に動いた若き學徒の合成力は單に北京政府を瓦解せしめたのみでなく、全國的に學生會の組織となり遂に學生を中心とせる黎明運動に進展し、學校も工場も農村の思想的連繫を見るに至つたのである。

帝國主義打倒と國內軍閥排除を目標とせる國民運動が漸やく國內靑年學生の信念化せんとする頃、即ち民國九年秋勞農露國代表ユーリンが第三國際の密命を帶びて而も表面名乘りを擧げて北京に乘込んだのである。組織の絕對化は彼らの宣傳と行動の全部であると共に、あらゆる方面を通じての最大の前提とせねばならぬ。ユーリンが此時殆んど完成せる學生聯合會に手を着けたのは極めて自然であつた。そして靑年運動の中心を物色して陳獨秀、李大釗の二者を摑んだのも何らの不思議は無い。然し乍ら露國の極東迂廻政策決定後、陳李二者を通じて支那の同色化を企圖したのは必ずしもユーリンが最初では無かつた。九年の夏、第三國際極東部の秘書某夫妻が密かに北京上海に派遣されて陳李らマルクス研究者に會見し、露國の意志を傳へて中心機關

の組織を慫慂したのは事實である。可なりの資金を供給して第三國際支那支部設置方を要望した結果、陳獨秀の社會主義機關誌「新青年」一派を以て中國共產黨組織の準備が進められて居たのである。一九二一年(民國十年)七月、上海の陳獨秀の下に中國共產黨第一次全國代表大會が開かれ、第三國際代表として、已に廣東に於て孫文に會見し、共產露國の現狀と理想の最初の意志表示をなしたユーリンが出席し最も困難な黨部組織の嚴密な訓練を與へた。

翌十一年春、ヨッフエの北京入りとなつたのである。彼の殘した重大な功績は國民黨と共產黨の結合を斡旋決定せしめた點にある。上海に於て孫文と會見して彼は、帝國主義排除と不平等條約撤廢と、軍閥打倒等の國民革命の共同目的のために、共產黨員の國民黨入黨を許容し勢力を擴大して同一戰線に起つべく極力說く所あつた。孫文の意は動いた。ヨッフエが後藤新平氏に招かれて熱海に病を養ふや、孫文は逸才廖仲愷を代表として熱海に赴かしめ、更に國共結合の善後辦法に關し打合せをなさしめ之が準備を進めた。國民黨極右派の反對を斥けて愈々結合の正式準備に着手したのは十二年夏である。この秋カラハンとボロデインは、前者は北京に後者は廣東に、相前後して到着した。恰かも眞打が晴れの高座に上つたが如くに、勞農大使として交民巷の舊露國公使館に入つたカラハンに對する學生聯合會其他民衆團體と列强公使團の感情は全く正反對し、北京の學生界は救世主を迎ふる如き熱烈な歡迎を表したが、外交團は支那に於ける第一次大使として外交團の首班に立たるる事を嫌つて同列する事を拒否した。それは却つてカラハンの共產宣傳と其組織的進行に迅速に有効に役立たするのみであつた事は寔に皮肉な現象であつた。北京の學生聯合會は漸次最左翼に進展し上海の全國學生聯合會を抱擁して、中國共產黨は遙かに全國的に膨脹すると同時に、其豫備機關たる中國社會主義青年團(後に中國共產主義青年團)の發展は目覺ましい限りであつた。一方廣東に入つたボロデインは間もなく孫文の最高顧問となり國民黨改組大會の指導に當り、所謂孫文の容共政策が生れて、聯露、容共、勞工の根本主張を生み、今日國共兩黨分裂迄の約三ケ年半の聯合戰線を形成する端を拓いたのである。

斯くて民國十三年一月、廣東に於ける國民黨第一次全國代表大會となり、中國共產黨最高幹部たる李大釗、譚平山初め、林祖涵、陳公博、于樹德、毛澤東、韓麟符、張國燾ら錚々たる闘士が中央執行委員若くは候補委員として、國民黨の中央部に出づるに及んだ。而も其中樞部たる組織部長に譚平山を据ゑ、李大釗は北京政治分會を主持し、總帥陳獨秀は表面に立たずして上海に在つて最高指揮を執るべく、カラハン、ボロデインより出づる露國の意志は、完全に國民黨の勢力圈内に徹底さるるに至つた。從つて「宣傳は戰鬪なり」の法則による黨勢擴張の巧妙な宣傳は、先づ學校と工場に全力を集中して、全國學生聯合會と全國勞働大會が併立すると共に一面街頭への進出に國共二黨それぞれ異つた意識を以て各々の分野を信じて譲らなかつたのである。即

ち孫文の容共政策が共同戰線の自覺から來た國民黨の共產黨抱擁にあつたか、共產黨員の國民黨入黨か、其同色化を企圖した大謀を抱いたものであつたか否かは當時甚だ不明瞭で、いづれ共判斷する事が出來なかつたものである。然し乍ら國民黨の支部設置は同時に共產黨の支部若くは區分部の增設であつて、委員の任命と國民黨々綱及章程の印刷物が支部に送らるる時は、同時に共產黨支部執行委員の任命さるる時であつた事に於て、彼らの意圖は漸次明白になつた。殊に十五年一月の國民黨第二次全國代表大會を經て、蔣介石の長江進出後、武漢政府樹立され、漢口に於て第三次中央執行委員全體會議が開かるるに及んで、中國共產黨は無謀な突進を敢へてし、最高幹部からして既に有頂天となり、甚だしく冷靜を失して勞農建國の到來を妄信せしめた事が、第一章の支那を自殺から引戻したといふ國家主義論者の議論となつたものかも知れない。兎もあれ長江各地に於ける極左派の行動は無計畫に而も系統と組織を缺き、徒らに勞農專制を振舞つただけに、彼らに對する民衆の反感は到る所に爆發し殊に湖南、湖北、江西等に於ては殆んど前例無き暴戾を極めたものであつた。

玆に當然反共產運動が南北期せずして遽然として彼らの陣營に迫つた。蔣介石の上海總工會並に糾察隊解散、唐生智の兩湖極左派の掃蕩と武漢政府壓迫、李濟琛の廣東共產派一掃、張作霖の勞農大使館搜査と其一味の徹底的逮捕等が相前後して全國的に捲き起つたのである。殊に武漢に於て唐生智の採つた共產政府暴壓は、所謂七月事變として共產運動史上に刻さるべきもので、中國共產黨の總退却は同事變を起點として、すべての方面の現實行動を停止するに至つたのである。

以下先づ共產黨其ものの外容を檢出して其現勢と進んで將來の豫測に資したいと思ふ。

四　中國共產主義青年團

然しながら吾人は、中國共產黨の實質的內容について之を詳報するの自由を持たぬ。要は第三國際支那支部が中國共產黨であり、國際共產黨の直接指示を受くるもので、國際少年共產黨の支那支部が中國共產主義青年團であつて、中國共產黨と中國共產主義青年團は、二にして一、一にして二、組織上に於てのみ明瞭に區別されてあるが、黨員の訓練も行動も悉く同一體をなすものである事を主點とする。從つて共產主義青年團は何等特定的に働きかくる事無く、單なる豫備訓練機關であるから其一切を擧げて共產黨としての存在となるものである。順序として先づ青年團の外形を摘示して見る。

五四運動と、胡適教授の文學革命運動が、當時の思想界に劃時代的變化－所謂新文化運動を激成せる時、僅かな上海の勞働團體を基礎として上海社會主義青年團が組織された。勿論陳獨秀らの創設したものであるが、之が軈て北京、廣東其他の要地に支部が設けられ、前述の如く中國共產黨の足場となり礎石となつて、直接露國との關係が結ばれると共に、社會主義青年團も其まま存留して一九二二年、民國十一

年五月廣東に於て第一次全國大會を召集した。同時に廣東には第一次全國勞働大會が開催された。中國共產黨の成立大會より約一ヶ年後であるが、兩大會を通じて支那に於ける無產階級運動史上最も重要な結果が齎らされ、組織的階級戰への第一歩を踏んだものといふ事が出來る。

該大會は上海に於ける臨時中央局の召集により五月一日のメーデーに開會式を擧げ、上海、北京、天津、保定、唐山、武昌、漢口、長沙、杭州、南京、廣東及其附近の十五支部を代表せる執行委員二十五名が團員約五千名を代表して討議五日間に亘つたもので、議事日程は左の諸項であつた。

一　國際帝國主義と中國及中國社會主義青年團の問題
二　中國社會主義青年團の綱領と章程
三　中國青年勞働者と農民の生活狀況及其改良問題
四　政治宣傳問題
五　敎育改良問題
六　中國社會主義青年團と各團體の關係
七　臨時中央局の報告
八　各地代表報告
九　中央執行委員會選擧

綱領の大要は、國際資本主義が支那侵略の競爭心裡を相互に露骨にして各軍閥間に自己の勢力を扶植しつつ、遂に支那をして四分五裂の狀態に陷らしめ、必然的產物として帝國主義の走狗が賣國奴の養生を來し、幾多の利權が剝奪された。支那の一切の經濟的生命は近き將來に於てすべて外國資本家に吸收されんとして居る。即ち種々なる利權の割讓、原料の廉價輸出、最廉價なる勞力の強制供給等之れである、國際資本と國內軍閥の二重壓迫の下に民衆は益々崩壞作用を續けて來たが、玆に吾等無產階級は敢然起つて革命的爭鬪を以て、吾等の巨實なる勢力の築成に着手したのである。革命の目的は勞農制度の採用にあつて政權を無產階級の手に移さんとするものである。社會主義青年團は支那青年無產階級の完全なる解放のために奮鬪すべく組織されたものである。換言すれば一切の生產具を公有とし「不勞而食」を禁じ、初期共產主義社會の建設を期するものである——と態度を明白にして居る。而して政治經濟、敎育に對する根本方針として次の如く決議した。

政治方面　(一)武人政治及國際資本帝國主義の壓迫より離脫す。(二)勞働者並に農民は無制限選擧權を獲得す。(三)言論出版集會結社罷工は絕對自由權を有す。

經濟方面　(一)十八歲以下の勞働者は六時間勞働とし十八歲以上は八時間勤務とす。十二歲以下の勞働を禁ず。(二)一週に連續三十六時間(一日半)休息停工しすべての祭日は休工す。(三)工場主と使用人間の私的契約を禁じ見習工保護條例を制定すべし。(四)十六歲以下の者は健康に有害な勞働に從事すべからず。(五)男女工の待遇を平

等とし女工分娩期は二ケ月間休工して共同賃銀を供給すべし。

教育方面　社會教育と政治教育に努力し集會演説機關誌發行其他の方法により無産階級の社會的自覺を促進す、一方學校教育より初步科學智識を普及す。

而して其章程は、團員、組織、紀律、會議、報告、機關、經費、機關報、附則の九章三十四條より成り中央執行委員會は全國代表大會より五名を選出し候補委員三名と共に、最高機務を執り其下に、各區各地方各小支部があり各々執行委員會及幹事會を組織し上級機關の命令に完全に服從せねばならぬ、小團體は毎週一回、地方青年團は毎月一回各區及全國大會は毎年一回開催する事に規定されてある。次いで青年工人農人生活狀況改良議決案、政治宣傳運動議決案、教育に關する議決案等を可決し、更に、中國社會主義青年團と中國各團體との關係議決案に於て、基督教青年會は帝國主義の先鋒であるから、あらゆる手段を以て彼らの罪惡を摘發し、非基督教團體に對しては指導的地位の獲得に努め、學生聯合會は吾らの主義宣傳の最も格好なる機關であるから、各學校に吾等の小團體を組織せしめ漸次指導權を握るべし、と指摘して居る。

翌十二年八月上海に第二次大會を召集したが、恰かも京漢鐵道從業員の全線大罷工に對し、洛陽にありし吳佩孚は罷工者の強制復工を命じ、多數の共産派首領を逮捕し二月七日の大彈壓—所謂二七事件—により中部支那極左運動が一頓挫を來せる直後なりしを以て一向に氣勢揚らず、唯だ中國共産黨か第三次大會に於て國民黨との合作問題を討議決定し之が訓令を接受せるため、特に青年團と共産黨の關係を明瞭に宣言し、更に青年工人運動、學生運動、農民運動、教育宣傳、青年婦女運動等の諸議決案を通過した。

國民黨改組大會を開ける十三年には青年團大會を召集せず、十四年二月十七ケ月振りにて第三次全國大會を開き、經濟鬪爭決議案、一般被壓青年運動決議案、帝國主義と軍閥戰爭反對決議案、基督教反對運動決議案、組織問題決議案等の重要議題を可決したが、這は社會主義青年團の進路を一層科學的に理論的指導を爲さんとしたものである。而して、それの目的のために社會主義青年團の名稱を中國共産主義青年團と改め、一層其立場を明かにして、其宣言中には「一切の被壓迫青年は中國共産主義青年團の下に團結し高く共産主義運動の旗幟を擧げて世界の帝國主義に向ひ中國民族の獨立と自由のために奮鬪しやう」と激勵してある。更に同大會を通過せる「世界青年無産階級及各被壓迫民族青年に與ふる書」の中には次の如く述べて居る。「中國共産主義青年團はレニン主義の旗幟下にある國際少年共産黨の中國支部であつて中國の一切の被壓迫青年工人を代表し其利益のために奮鬪する共産主義的青年の組織であり同時に中國青年のレニン主義を學ぶべき唯一の實際教育機關である。」

五　中國共産黨の內容

然らば中國共産黨は如何。

一九二一年、民國十一年七月上海に於て陳獨秀主持の下に第一次全國代表大會を擧行してから、今日迄已に五回大會を開いた。逐次大會の狀勢は他日に譲り、少しく同黨組織の片鱗に觸れて其一斑を窺ふ事としやう。

中國共産主義青年團に於て一ヶ年以上の訓練を經たもので無ければ、共産黨に入黨する事は出來ない。モスコウの國際共産本部より特別の指令を與へたもの——例へば武漢に活躍した徐謙の如き——以外は例外無しに一應は豫備機關の訓練を受けねばならぬ。黨員が黨綱と黨規に絶對的である事は、支那の概念觀からして甚だ意外とする嚴密さを持つて居る。秘密結社の遺傳的巧緻秘密と暗さを多分に愛好する支那人間に、彼ら以外には徹頭徹尾秘密の結晶であるべきそれが、固く覆はれつつ而も異常な擴大を見たのは偶然でない。

全國大會を最高機關とし、其職權を代行するものが中央執行委員會で、其下級機關として、各區、各地方、特別支部、小組の順を以て系統づけられてある。而して黨の基本は「支部」であつて、小組は黨員五名以上を以て成り、二小組以上にて支部を組織し、所謂基礎的細胞組織の役目を持つ。即ち支部組織の內容如何が直接最高機關たる中央執行委員會の實質を左右し、黨其ものの結束と發展に重大影響を與ふるものである。黨員に對する訓練と教育は其一切を擧げて支部に委ねられ、彼らの思想と行動は悉く支部に於て發生し支部を通じて行爲の表示となる。更に又黨員の生活中心が支部に置かれ、社會への意志の發露も亦支部から糸を引いて居る。要するに黨の組織單位として、有機的活動の中心をなすものであるから、共産黨それ自身の發展は取も直さず支部の增設を指す。然し乍ら支部組織の質的檢出が甚だ困難であるだけに單にそれのみを以て堅實なる黨勢進展の基礎證左とする事は出來ない。此點に關しては流石に共産黨首腦部に於ても尠からず苦慮したところあるものと見えて後に說くが如く「兒童化」問題として十五年度大會に一の決議案が提起さるるに至つた。入黨入團の嚴重な關が多少でも弛緩すると忽ち斯かる問題が起る。其後の共産黨並に青年團の門戸が一層峻嚴に歸つたのはいふ迄もない。

各支部は毎週一回開會して、前週成績の批評と今週の事業を決定し、上級機關の訓令を黨員に傳達して、常に其發展策について討議する事となつて居る。中央執行委員會の指令によると支部會議の主席たるべき委員に對し懇切丁寧に黨員の誘導に關する教育訓練の方法が詳記してある。例へば、委員は勞働者の出席した場合は第一に問題の了解と興味を失はしめざる樣、先づ言語に注意し簡明に說示すべし、と敎へて居る。黨員及團員の最低限度の責任として規定されて居るのは、一ヶ月一名以上の團員の紹介、機關誌の購讀方紹介、一ヶ月二名以上の國民黨入黨紹介等其他で、國民黨との合作後は斯くて、黨團員各一名により一ヶ月に國民黨二、團員一の割合を以て級數的增加を來たしたのであつた。

殊に其組織問題に關しては、黨幹部は實に精細極る訓令を與へて、系統と計畫を基本とする黨の組織化に全力を傾倒せるかに見えた。即ち「黨の群衆化」を第一標語として、黨員の紹介より先づ學生の黨化に努力し、黨員の紀律を嚴守しつつ、各種團體及群衆中への奮闘的進出をなし、黨員一切の行動は個人的觀念を離れて總べて黨の觀點に立ち、反動的團體の破壞と反革命分子の排除に努力すべしと命じて居る。黨團體と黨員の思想及行動の調査は、黨員の活動能力、政治的能力の分析、會合に對する興趣、上級機關に對する批評、學生の學課及教職員に對する態度、更に最近の生活狀態等に至るまで、微に入り細にわたつて居る。進んで最高幹部は、全國を四區に分ち、長江流域諸省―江蘇、浙江、安徽、江西、湖南、湖北、四川省等―。黄河流域諸省―山東、河南、山西、陝西省等―。珠江流域諸省、廣東廣西省―。東三省―奉天吉林黑龍江省等に於ける各地方黨員の思想傾向、環境の差による精神的變化等が詳細に統計的に調査されて居るのは一驚に値する。且つ又學校に對しては學校其ものの思想傾向と、學校當局の黨に對する態度、校長及教員の思想と行動迄が檢出されて居り、比々斯の如く黨組織の整備のために多方面の努力が重ねられて居るのである。

最近修正された黨章によると、黨員は性別と國籍別なく入黨半年以上の黨員二名の紹介により小組會議を通過し、地方委員會の審査を經て候補黨員となり、其期間は勞働者は三ヶ月、非勞働者は六ヶ月を要する。各農村工場鐵道鑛山兵營學校等に於ては黨員五名乃至十名を以て小組を成立せしめ、毎組に組長一名を選任し、黨員十名以上に達せる地方は三名の執行委員を選出し地方委員會を組織する、二個以上の地方委員會は區委員會を組織し、中央機關に直屬する中央執行委員の任期は一ヶ年で全國代表大會より九名を選任する。

民國十五年迄は、以上の如き內容を持つ中國共産黨の宣傳網は、上海、廣東、北京の三區執行委員會により全國支部を統制し來つたのであるが、國民黨軍の長江席捲の結果、更に漢口區及長沙區が增設され全國を五區に分つて廣東區は勞働者、學生、農民、海員に、上海區は學生、勞働者、海員に、北京區は全力を學生に注ぎ、新設の漢口及長沙區は農民、勞働者に、それ〴〵の地方的環境に從つて黨の進展が縱斷的に行はれた。

六　共産黨の黃金期

一九二七年、民國十六年三月漢口に於て國民黨中央執行委員會並に監察委員會の第三次全體會議が開催され汪兆銘、徐謙、譚平山、陳友仁、鄧演達、其他錚々たる若手共産派が大勢を支配して、蔣介石一派を驅逐し、恰かも勞農政府樹立への最終段階に達したるが如き觀を存したのは、中國共産黨が總退却への最後の閃きであつた。

會議は三月十日から十七日まで、武漢兩市が青天白日滿地紅旗と勞農赤旗に埋まり、鮮かな色彩の裡に開かれたが、其中心點は蔣介石の軍政最高權を剝奪して、勞農制度の實現に明瞭な步調を進めたもので

あつた。中央執行委員會と、國民政府委員との黨部中樞機關に共産派が壓倒的に占據して、正に中國共産黨最初の黃金期を現出した。背後にあるボロデイン、ガロン其他の大小多數の勞農顧問は政治方面に軍事方面に縱橫手腕を揮つて、彼等の胸裡、恐らくはソウエート支那の第一聲を擧げて、東洋迂廻政策の第一步を確實に踏んだものとの、限り無い快感に浸つたであらう事を充分に想像する事が出來た。殊に又同會議と相前後して全國勞働大會があり、更に太平洋勞働會議が開かれて、日本、印度、朝鮮の各勞働團體代表が潜行し來る等、日本と英國の驚異の眼が慌ただしく光つた時である。然しそれは會後一ケ月ならずして、湖南湖北兩省に勞農暴虐の慘跡を殘して早くも退却の已む無きに至つた事が、第三國をしてホツと胸撫で下ろさせた事である。やがてボロデイン夫人は張宗昌軍に捕はれ、ボロデイン自身は河南陝西甘肅の長路を經て外蒙庫倫より、僅かに身を以て逃れ、モスコウに於て幹部非幹部派間に、支那革命の失敗が論難さるるに至つた。餘りに脆い結果であつたが、該會議決議案中最高黨部の新政策實施に當つて、著しく勞農色彩化したものは「農民問題案」である。「第三次大會は國民政府に對して農政部を設立し土地制限の改良と農民の要求する政治的經濟的改造及其建設を要求し次の十項を議決した」と前提し大要次の如き方針を明示した。

一　政府は即時、區鄉村自治機關を設立して其地一切の行政經濟を管理し、農民協會は本黨指導の下に此自治機關の中心となる。

二　區自治機關內に土地委員會を設け、政府の命により土地整理に土地使用の各辦法を行ふ。

三　鄉村の武裝團體は總て自治機關に隸屬し武器は政府より補給す。

四　本年中に百分の二十五の小作減租を實行し爾後土地契約は自治機關に農民協會の承認を要し、小作農は永久に土地使用權を有す。

五　鄉村の公有地其他は一切自治機關の管理に歸せしむ。

六　貪官汚吏土豪劣紳及反革命者の土地財産を沒收し鄉村の公有とす。

七　舊地稅法を改革し現在農民の强制されつつある總ての課稅を廢止し劃一地稅を規定して自治機關之を徵收する。

八　農民の金利率は年二分、月二厘以下たるべく農民の舊債は國民政府農政部より或辦法を講じて其苦痛を解除せしむ。

九　自治機關は食糧を管理し若くは保存する特權を有す。

十　以上各問題の實現を促進するため民主制度の縣政府及獨立的民主的の司法制度を組織する。これは中國農民解放闘爭の第一步である。

之に加ふるに更に長文の農民擁護宣言を以てし、新農政部長鄧演達により各支部各農民協會に通達されたがため、さなきだに極左地方を刺戟して玆に長江沿岸各地に於ける左派農民の空前の暴動となり、就中湖南に於ては産業を奪はれ家を燒かれ、剩へ土豪劣紳の名の下に虐殺されしもの數千名に及ぶ暴擧の端を爲したのである。武裝團體の公認と反革命者の土地財産沒收を命じたのであるから、未訓練の、恰かも盜賊と一步を隔つるに過ぎぬ速製共産黨員、農民協會員が此訓令を

標として、農村を暴れ廻つたがために、赤禍の慘、實に觀るに堪へざるものがあつた。こは彼ら自ら破滅に導いたもので、武漢勞農政府樹立の歡喜が最高黨部の冷靜なる統制を缺かしめ、有頂天な訓令を下級機關に續發した結果、最も警戒すべき農村荒しの愚を重ぬるに至つたのである。流石に日和見の大將唐生智が、武漢政府擁護の立場を棄てて共産派壓迫の態度に急轉した程、彼らの行動は慘酷を極めたのであつた。唐生智は自己の勢力保存策から打算して、最初共産派政府を支持する事が有利であつたのだが、共産派の暴状は内外から當然の非難を受くるに及んで、討共を聲明して彼ら暴徒を兎も角自己の勢力圏内から一掃して仕舞つた。

勞農政策の實現に一歩を進めた第三次執監全體會議の決議は、農民階級の、暴戻な地主若しくは郷村反革命運動者に對する團結抗爭によつて民衆の利益を獲得する所に主點を置いたのであつたが、多數の未訓練黨員の無省慮な行動により暴虐なる農村破壞となつて、中國共産黨の最惡の歷史を止むるに至つた。彼等が若し蔣介石一派との聯合戰線に尙暫らくの忍耐をなし、唐生智操縱に更に多少の政治的念慮を加へたならば、武漢政府は初次勞農政府としての存在基礎を鞏固にする事が出來たであらう。尠く共斯かる脆さの爲を見せずに濟んだであらう事を容易に觀測される。

七　兒童化問題

共産黨及共産主義青年團は、武漢政府樹立前後の疾風の如き黨勢進展に有頂天となり、黨員の激增に何等の思慮を與へずして、徒らにゴム風船の如く膨脹せしめたがために、遂に風船の自爆となつたものであるが、此點について最高部間に曾つて一應警戒する所はあつた。

前述の如く、共産黨と青年團は、同身一體であり、唯だ後者が前者への豫備訓練機關で、いふ所の黨勢擴張は共産主義青年團の入團者增加を指して居る。蔣介石軍が破竹の勢ひにて長江を風靡するや、同時に其所に彼らの宣傳網が張られ勞農階級への徒らな勸誘が行はれ、從つて黨團の急激な發展となつたのである。それは國民革命軍の戰勝率に寧ろ倍加して、砲彈と銃劍と同時に躍進して行つた。

勢ひ其所に黨員の詮衡と、最も重要な黨勢黨則の訓練が缺けたのは無理はなかつた。彼らの依つて以て立つ所の根本は所謂鐵則の嚴守に外ならぬ。即ち「系統あり計畫あり而して組織的な」内容に紀律の絕對を强制して之に完全に服從する所に生命があるのである。彼らが一度び節制を缺かば、それは單なる暴動團體と何等擇む所はない。一九二六年末の中央執行委員會は斯かる傾向を認めたるを以て、共産主義青年團の兒童化問題を決議案として各支部に通達戒愼せしむる所あつた。それには次の如き點が力說されてある。

近來青年團同志の年齡漸次低下して十八歲以下となり、同時に共産黨も十七歲からの青年工人を含むに至つた。この結果黨團は必然的に兒童化して組織の不健全と責任負擔の完全なる同志を求め難く自ら破產

を招くに均しき狀態となつた。殊に同志の紹介に際し個人的感情より相計つて上級機關の許可を得たる例尠からず。之らの責任は共產黨青年團兩者共に負はねばならぬ。爾後此欠點を糾正すべく努力し、青年工人の教育を一層嚴重にせねばならぬ。

それにも拘らず、長き因襲的なる下層生活者が、突如として有產階級に對する支配的地位に躍り上れるため、一面には戰勝と征服の異常な歡喜に浸つた黨幹部が「吾等の世界」の到來を妄信したがために、支部組織の整備を缺き、統制を失して、自ら破滅への舵を取つたのである。唐生智軍の彼ら一派に對する大壓迫が間もなく兩湖全省に行はれて、見事に叩き潰されて仕舞つた。

恰かも時を同じうして、蔣介石一派の共產派掃滅運動が開始され、上海本部の搜索と首領連搜查に逢ひ、上海總工會長汪壽華は斬首され、陳獨秀は纔に勞農領事館に逃れて、更に何れにか身を匿した。廣東に於ては著名の黨員劉爾松、李森、蕭楚女らが斬罪に處せられ一時は約二千人の逮捕者を出した程である。北京の勞農大使館が張作霖の手兵に襲はれて、李大釗を喪つた事は單に共產黨のみならず、學界からも痛惜されたが、結局北方區執行委員會は之がため殆んど完全に潰滅した。

八　最後の一閃光

斯くして、一九二七年を了らんとする時、共產黨の一味は廣東に於て最後の一閃光を投げた。十二月十一日より十三日まで三日間、實質は二日間の廣東ソヴエット政府を組織し支那近代史上空前の大慘殺事件を發生して電光の如く總退却の幕を閉ぢた。

事件の大要はこうである。武漢を逐はれた葉挺、賀龍らの率ゆる共產軍は七月下旬江西省南昌に入り革命委員會を組織して、譚平山、惲代英、林祖涵、澎湃ら共產黨首腦連と共に南昌を以て第二の武漢たらしめんと期したが、南京政府軍の追擊急なるため、八月福建省に逃れ廣東省の東北部汕頭の根據地を目指して進んだ。九月下旬遂に汕頭の一切の機關を占領し、直ちに汕頭ソヴエット政府の名稱を用ひて、極めて局部的ではあるが事實上の赤色恐怖を見るに至つた。それも僅か一週間にして福建廣東の蔣介石派軍隊に挾擊され脆くも江西省境に遁走し泡沫の如く消え去つたかに見られたが、此間廣東方面に於ては極左派により重大な陰謀が進められて居たのである。葉挺軍の一部は農民に變裝して廣東省城附近に蝟集し地方農民軍、工團軍と連絡を圖り廣東市內の左派勞働組合は勞農領事館を中心として、反革命者への反擊の機會を窺つて居たが恰かも十二月に入つて廣東西方部の防備に大部分の軍隊出動して市內の警備が甚だしく手薄となつて來た。

十二月十一日拂曉、地方農民軍を基本として全國總工會、全國鐵路工會、廣東香港罷工委員會其他の勞働團體に、第四軍張發奎部下の教導團が參加して突如廣東全市の占領を企圖し留守警備隊、公安局等に攻擊を開始した。目抜きの市街の燒打ちと疾風迅雷の如き出足に流石

に經驗の深いロシア人の指揮に從つただけに同日午後四時には早くも全市に赤旗翻えり、無産者の天下が實現された。彼らの掠奪と殺戮が白晝公然と行はれ資本家のすべてに加へられた迫害は全く前例無き程度のものであつた。而して即日第一公園に民衆大會が開かれて「ソヴエツト革命政府」の樹立を決議し次の如き革命政府委員か決定された。

革命政府主席委員	蘇兆徵
人民内務兼外交委員	黃平
人民粛清反革命委員	楊殷
人民勞働委員	周文雍
人民司法委員	陳郁
人民經濟委員	何來
人民海陸軍委員	張太雷
秘書長	惲代英
工農紅軍總司令	葉挺
工農紅軍總參謀	徐光英

然し乍ら、這は夢疑一瞬にして去つたのである。翌十二日より十三日に掛けての李福林ら蔣介石派軍隊のために、もと／＼軍事的基礎を有せぬ彼らは一たまりもなく潰滅して十三日午後には、已に完全に恢復されて居た。其後無産派に對する右派反感の激加は充分想像し得らるるところ、逮捕した共産黨員勞働者達は二百人三百人を一束にして遂日銃殺し、發見されたそれらしき者悉く即座に打ち殺され三日間にして其數二千餘に達したといはれる。女士共産黨員に加へた侮辱の如き到底筆に上し得るものでない。

事態其ものは廣東コンミユーンの形式を備へて居り若し之が進んで或程度迄の成功を收めたなら、支那革命運動の一大エポツクをなし、彼らの唯一の目標ともなり旗幟ともなつて、頗る意義深き成果を殘したであらうが、彼らは第三國際が憂慮した如く依然として「兒童化」の範圍を出て居なかつた。左翼小兒病的暴擧はさなきだに暗き黃昏れを全く闇黑たらしめたのである。事件前後の狀勢と黨の最高幹部が直接之に携はらなかつた點から見ると之等の行動は恐らく露國の發意で無かろう事を想はれる。廣東の露國代表者は「兒童化」的群衆の盲進行動を制し切れず、已むを得ず其先頭に立つたものであらう。すべての點から推して失敗の累加であつた。

廣東事件は一九二七年度迄の支那共産黨の發達を一括して、自ら泥濘に陷沒した如きもので、行動に移した組織力の最惡の場面を見せたものである。之がため更に全國的に各地軍閥の共産黨彈壓が加重されて、それらの一切を刈り盡さんず勢ひにある。

九　現在情勢と其將來

彼らの有らゆる機關に加へられた全國的の彈壓は、當分組織的機能を全然停止せざるを得ざらしめた。勞農制度確立の幻影に醉つたのは、

一九二七年三月。虹の如く華麗であつたが、早くも四月より消えかかつて、七月に黄昏れ十二月に其幕を閉ぢた。九月の國民黨南京特別委員會は、三月漢口の執監大會の逆を行つて共產派の徹底的排除を斷行し、彼ら一味の一名をも殘留せしめなかつた。

一九二八年の中國共產黨は、果して如何なる形態に出でんとするであらうか。ボロディン顧問去りガロン將軍又モスコウに歸つて後の彼らは、實に蕭條を極めて居る。偉大なる指導人物を失つて、今や其進路をさへ滿足に見出し得ない狀態にあるやに見える。廣東、上海、南京、長沙、武昌、漢口北京の重要地に於ける黨機關は文字通り徹底的に消滅し、黨員の主だてる者は殆んど犧牲の部類に加へられた。極秘とされた幾多の文獻が續々と押收され、黨の內容が白日の下にドシドシ曝け出された。表面からする時、中國共產黨は宛ら消えて失くなれるが如き觀を存して居る。果して然るか、否か。

單なる思想的影響でなく、彼らは行動の上に充分の意識を働かした。よしそれが未熟なる階級意識に驅られた、無節制な行動ではあつたが、勞農階級の團結した威力を十二分に體得する事が出來たのである。有產階級に對して果てしなき滿足を以て報復する事が出來た。軍隊が味方してあらゆる土地を我らの土地とし、すべての財產を我らの所有とする事が出來た。長い桎梏の殼を破つて、奔放自在の境地に飛び出た喜悅感はそれを味つた者の恐らくは絕對に忘れ去る事の出來ぬ、寧ろここに性格づけらるべき事と想像される。這は彼らの縣の場面の推想であるが一歩を進めて、其用意深き宣傳と教育とが、若き頭腦に一分の隙も見せず詰め込んで「無產階級の解放と利益」に精進し反帝國主義運動と反軍閥運動を標的として、一路邁進し來り、マルクス主義の殿堂に額づいた青年學生勞働者農民の主義的結合が、表面からの壓迫で雲散霧消すべしとは思はれない。あり得べからざる事である。即ち行動の跡から推しても、思想的着色の實際から看ても、支那に於ける共產主義運動は此まま滅亡すべきものでない事は餘りにも明瞭である。而も又支那それ自身の生活が、國際的搾取の的となり、國內軍閥の不斷の爭鬪から國民、殊に無產階級の利益は極度に摧殘されて居り一通りの存在の條件は備はつて居る。但し「果して支那に共產主義が行はるべきか否か」の問題は本論の範圍外であるから玆に言及するを避けるが唯だ國際資本主義の競爭場としての支那、寧ろ資本階級の搾取が現今軍閥の強制徵發に比し甚だ輕易であるべき支那の現狀に於て、國際共產黨の喰い込む餘地と特殊の理由を多分に持つものである事を知れば足りる。

陳獨秀は「失敗はしたが妥協はしない」と云つた。現在の共產黨は勿論妥協の餘地もなく陷沒したのであるけれ共、其モットウには勇敢な再起の際が潜まれて居る。現に各地支部の幹部はいづれも四散して、一寸再召集に困難な實狀にあるが、彼らの識つた組織力は復舊に左までの時日を要すまい。唯だ小兒病的盲動を續けて徒らに破壞行爲にのみ出るならば、到底充實した發達は望まれない。國民黨の狀態が目下

の如く支離滅裂、全然統制を欠いて居る時、靜かに內部の整理に努めて再起の日のために準備するならば、彼らの將來は一層有利に展開し得らるる可能性を持つて居る。要は再起の礎石を固むる事である。露國が支那共產革命の失敗に重大な自覺をなした事は當然で恐らくは今後の指導方針は急進から漸進主義に轉ずるものと思はれる。

中國共產黨は今や戰線から總退却して、再起準備の潛行期に入つて居る。いづれの方面に、如何なる機會を掴んで擡頭するか、何らの豫知的材料を見せて居らぬが、近き將來に於て必ず再起すべき事は疑はれぬ事實である。自分の觀る所を以てすれば、中國共產黨は、ここ半ケ年にして往年孫文の容共政策以前の姿に還つて單獨戰線に起つべく豫期される。自分は密かに彼らの半ケ年後の姿に着目する。

支那政局と我が出兵

長野朗

第一次北伐の失敗以來久しく中止されて居た第二次北伐が決行され殆んど戰はずして濟南を陷れ將に張作霖の牙城に迫り支那の政局に一大變化を見んとした時、端なくも濟南に於て日支兵の大衝突が起り、時局は意外の方面に展開せんとしつゝある。

南方派は表面統一された形になつて居るけれども、實際は南京、武漢、廣東相對立し、南京部內でさへ不統一を暴露して居る。共產黨と分離した後の國民黨は、單獨で國民革命を遂行するために黨の聯合統一を行ふ必要が起つたので、昨年夏以來西山派、右派、中間派、左派の聯合が策せられ、昨年末には國民黨中央執行委員及監察委員の會議が開かれ、本年初頭まで引續いて統一に骨折つたため、元來共產黨との提携問題で分裂した各派のことであるから、形だけはどうやら出來上り、蔣介石が再び總司令に返り咲いたが、實際は依然たる分裂狀態にある。それは何故かといふに、國民革命軍が起つた初めには、國民黨が能く軍隊を抑へて居たが、其後地盤の擴大と軍隊の增加につれ抑へが緩んだ所に共產黨員が軍隊から撤退したため、黨の軍隊に對する威力は一層衰へ、軍隊は急速に以前の軍閥に還元した。そうなると支那では文官は軍閥に左右さるゝことになるから、各地の實勢力は軍閥の手に歸し、國民黨と軍隊とが主客顚倒したことになる。ところで南方軍閥內には蔣介石の浙江派、白崇禧、李宗仁等の廣西派、李濟琛等の廣東派があり、蔣一派は南京に據り、廣西派は武漢に、廣東派は廣東を本據とする有樣で、互に相對立して隙を窺ふて居る。從て蔣介石が北伐を實行するにも武漢の廣西派から後釜を覘はれないやうに、張發奎軍を安徽に呼んで之に備へた位だから、國民黨だけが如何に統一を議しても、それは机上の統一に過ぎない。今日南北の爭ひは國民革命軍と北方軍閥との戰ひでなく、南方軍閥と北方軍閥との戰ひに過ぎない。名は同じだが實質は昨年と全く異つて居るのである。

蔣介石は總司令就職後一意北伐の準備にかゝつた。總司令なる職は北伐あつて始めて用をなすので、彼れは絕えず北伐を叫んで居なければならなかつた。又相對立して居る南方各派を表面だけでも纏めるには、北伐より外には好題目はなかつたのである。然し一方には內部の

不統一があり、軍費と武器に甚だしく缺乏して居るのと、人民が一般に極度に戰爭を嫌つて平和を欲して居るために、平和統一の運動が進められ、其間に南北双方を奔走する一派もあり、奉天派内の新派とも或る程度までの諒解は出來たやうだが、それには二つの障碍があつた。一つは南方派内に態度曖昧な馮玉祥といふ異分子が存在して居ることであり、一つは北方の張作霖が沐猴冠して大元帥府に納まり返つて居ることである。かくて北伐完成のためには勿論のこと、南北和平統一のためにも北伐を決行して少くとも張作霖を北京から追出す必要が起つて來た。然るに北伐が愚圖ついて居た原因といふのは、軍費と彈藥の補充が付かなかつたのと、内部の不統一、それに蔣介石と馮玉祥との關係である。北伐の戰線を擔任して居る蔣介石、馮玉祥、閻錫山三人の中で、蔣と閻との關係は巧く行つて居るやうだが、蔣閻と馮との關係は圓滿でない。馮の態度は豹變常なく、下手にやれば張作霖を追ふて其跡に馮を入れることになり、蔣としては馬鹿を見るし、又閻にして見れば、馮は張作霖の大東北主義に對し大西北主義を採り、西北一帶を地盤とするため山西を覘つて居るから、蔣も閻も張作霖は倒したいが馮に北京を取らせたくはなし、そこに種々の經緯もあつて、裏面にかなり策動が行はれたやうであつた。それと北伐決行に就いて彼等が心配したのは日本の山東出兵である。日本の山東出兵は居留民保護にあつて、勿論嚴正なる中立を守るのであるが、其結果は必ずしもそうでない。第一次出兵の際でも日本の山東出兵により山東軍は安心して全力を擧げ南下し得たこと、奉天派内部の結束が亂れなかつたことは確かである。從て今回の北伐に於ても日本軍の山東出兵を懼れ、日本が臨時議會を前に控へて外を顧みる遑なきに乘じて決行したやうにも思へる。然るに意外にも日本は第二次山東出兵を斷行し、遂に日支兵の衝突交戰を見るに至つた。

日支兵の衝突は支那兵の掠奪を日本兵が制止したことから端を發して居るが、其素因は早くから充分に備はつて居たのである。其主なるものを擧げて見れば、

一、日本が孤軍遠く山東の奧地へ微弱なる兵力を派遣したため支那兵に乘ずべき機會を與へたこと、

二、從來日本が日支親善策を採り、支那の凡ゆる侮辱に對し隱忍を續けて來たために、支那人をして日本人與し易しの念を起さしめ、支那南北を通じて日本人を馬鹿にする風が著しくために傍若無人の横行を敢てしたこと、

三、支那兵の素質劣惡なることは北軍も革命軍と同じで、土匪や浮浪人の集めものであるから、國民革命軍と稱するも單なるレッテルの相違に過ぎない。從て彼等が掠奪暴行を行ふことは當然である。

四、現在の北伐軍は雜多な軍隊の集合であつて、節制と統一を缺ぎ、反蔣介石派の軍隊も少くないから、蔣の威令は全軍に行はれず、假令總司令部が如何に日本軍との衝突を避けやうとしても其意圖は部下に徹しない。

五、共産黨は今日國民革命軍内部から逐はれたとは云へ、彼等は時意の潜入法により各軍に入込み、日本軍との衝突を惹起するに努むることは彼等の作戰上有り得べきことである。今日共産黨が生きる手段としては日支兵の衝突を起し、蔣介石をして共指揮權を失はしめ、之れを機會に全國的に排日の大風潮を煽り、その氣勢を利用して五卅事件と同じやうな形勢に導くことが出來れば、共産黨の活動に好機會を與へ、其復活の機會を造ることが出來る。

六、濟南には馮軍の一部が居るが、蔣と馮とは既に述べたやうに奉天派を倒した後には競爭的立場にあるので、馮玉祥としては蔣介石が日本と接近しあるため、日支兵の衝突により蔣介石の立場を不利に導かんとすることは考へそうなことである。

七、國民革命軍が從來日本を帝國主義と呼び、打倒日本帝國主義を軍隊内に長い間絶えず宣傳して來たために、そうした思想が軍隊内に浸潤し、又山東出兵を以て奉天派を援助するものであるとの誤解から革命軍將卒の間には日本に對する敵がい心が相當強く養はれて居た。

以上のやうな素因が備つて居るため、北伐軍と日本軍とが顔を合はすれば、そこに衝突が起る必然性は甚だ多かつたのである。濟南に於ける問題は今後大したことにはなるまいが、問題になるのは之れを機會として中南支那及滿洲に於ける事件突發の虞れである。中南支那では共産黨活躍の機會が來そうに思はれる。共産黨の作戰としては、濟南問題を種子に中南支那に大々的排日運動を起せば、國民が激して居る時であるから、國民政府としても之を抑へることは甚だ困難である。現在上海では極力官憲の手で排日運動を抑へて居るやうだけれども、之れが何時まで壓へ得るものであるか疑問である。もし中南支那全般に亘つて大排日の風潮が起れば、共産黨は之を利用して親日的な蔣介石一派を倒すことに努め、次で各地に共産黨の大暴動を起して一擧に政權を取ることに努むるであらう。共産黨の組織は依然として各地に嚴存し、其勢力は決して侮るべからざるものがある。且つ共産黨の態度も益々徹底して來た。昨年國民黨と分離した後の共産黨は、無産階級の民主主義革命を實行するためには、國民の大部を占むる農民を動かす必要があり、そのために土地革命の必要がありとして、土地革命を目標として到る處に農民暴動を起し、又土地革命の根據地を造るために都市革命を企圖した。廣東の共産黨事變は其一例である。然し當時彼等が稱へた土地革命では、大中地主の土地は沒收するが、小地主即ち我が六町歩以下の土地を所有する地主の土地は其まゝとし、小地主をして中立的態度を採らしめやうとしたが、最近では全地主の土地は悉く之を無償沒收し、人民の共有とする政策を掲げて居る。又以前には彼等は先づ無産者の民主主義革命を實行し、引續いて成るべく速に社會主義革命に移ることになつて居たが、今日では之の二段計畫を省略し、最初から共産革命を實行せんとして居る。そのために彼等が先づ覘ふのは上海、南京及武漢であらう。蔣介石としては此の際成るべく事を荒だたすることなく、一方では排日を抑へ、一方北伐を決行

せんとするだらうが、彼れの指揮統制が次第に亂れつゝある今日、果して能く彼れの企圖が實行され得るかどうか、蔣介石勝つか共産黨の作戰功を奏するか、それは將來に俟たなければならぬ。

一方事件は東三省にも飛火するかも知れない情態にある。東三省内は現在平穩に見えて居るが、日支間の關係は最近著しく險惡となり、内面にはかなり面白からぬ空氣が動いて居るし、ロシアは最近支那に虐められ、東支鐵道も將に回收されんとして居るから、此の窮狀を脱するためには、日支の衝突を起さしむるを得策と考へて居るから、此の方面にも如何なる事件が起るか分らないし、それに戰線が北に動いて張作霖の運命を決するやうになれば、山東と異つて滿洲問題は日本の國内問題としても重大であるから、こゝに一層大きな問題が發生するに至るであらう。今後吾人の注目すべき地點は寧ろ中南支那と滿洲ではあるまいか。（五月八日）

新刊紹介

◇**プロレタリア文學論**（ロシヤに於けるプロレタリア文學の趨勢を示す本書は、ロシヤの勞働階級が如何に偉大なる精神的能力を藏してゐるかを最もよく證明してゐる。コーガン著・昇曙夢譯・定價一圓五拾錢・東京市神田區美土代町二ノ一・白揚社）

◇**無産階級運動の戰術と宣傳について**（コミンターン編・稻村順三譯・定價四拾錢・東京市牛込區若宮町一二南宋書院）

◇詩集 **審影集**（河原直一郎著・定價一圓二拾錢・東京市神田區今川小路一ノ四金星堂）

◇長篇 **薄明**（秋山六郎兵衛著 定價一圓・東京市神田區錦町三丁目考へ方研究社）

◇**藝術論**（科學的見地に立つて綜合的藝術觀を打立てんとした試みは味讀すべき獨創性を持つてゐる。江原小彌太著 定價三圓・東京市麻布區龍土町六三黎明書院）

支那大陸に對する我が軍事行動

濟南事件に對する反省

長谷川如是閑

一

日本人に遺傳的な、支那大陸に對する軍事的衝動に基く政策に、根本的反省を加へねばならぬ時が愈到達したのである。否、その時期はとうに到達してゐたのであるが、現在及近き將來の歷史的事實によつて、その反省を拒み得ない時が來たのである

濟南に於ける日本軍と國民軍との衝突は、その法律的判斷に於ては決して日本側の不法に原因したものとはいはれないであらう。然し、歷史的事實に對する人間的判斷としては、法律的の判斷ほど、役に立たぬものはなく、又錯誤に導くものはない。日本人が一定の條約によつて居住の權利を有する、外國の領土に戰亂が行はれ、日本人の生命財產が危險に陷る虞がある時は日本の國家は條約の履行を中斷することを承認せずして、强制的に條約面の權利を確保する行動をとるべき法律上の理由をもつであらう。その正當な法律上の權利を、軍隊をもつて確保する行動をとつた場合に、その國の軍隊が、日本の權利の行使を妨げる行動に出た時には、恐らく暴行掠奪等の行爲はなくとも、その妨害に對して軍事的行動をとるべき法律上の理由は充分であらう。がさういふ法律的の是非曲直などは、少くとも今回の濟南事件に關しては全く無用の詮議立である。無論、日支の双方は互に法律上の道理を主張して、その『權利』の保障とそれの侵害に對する代償とを要求することは當然であるが、この歷史的事實に對する人間的判斷としては、全くさういふ法律的判斷以外の根柢に立たねばならぬ。

國家的乃至民族的對立から生じた此種の殃に對する根本的判斷としては、第一に問題とさるべきは、國家的意識の對立そのことであり、民族的意識そのものである。人類進化の齎らす社會的交通、生活の混淆といふ現象の平和的進行を妨げるものは、國家的意識による對立であり、民族的排他である。故に人類の進化、社會の發達に伴つて、國家乃至民族といふ意識が次第に、抽象的な範疇と化しつゝあるのは事實である。

然し、若も、さういふ對立の下に、又さういふ對立に必然な制限を條件として、社會的交通が行はれ、生活の混和が行はれてゐるといふ現實を如何ともする事の出來ない狀態の下に於ては、その對立に於ける事實と意識とを無視して、此種の問題に處することは出來ない。それは丁度、多數の人間が宗教的迷信に支配されてゐる社會に於ては、その統制から全く宗教を廢除し、寺院を燒き經文を禁ずることが出來ないのと同じである。

すべて近代的國家は、傳來の國家の軍國的行動による掠奪組織を廢滅に歸せしめ、商業主義に基づく搾取の制度にその經濟的根柢を置くことゝなつたが、傳來の國家的範疇はそれがために消滅したかといふに、決して然らず。一方に商業の國際主義が、國家的範疇を無視した、商人社會の萬國的性質を作り上げ、國境を超越した交通の自由、商業の自由が、主張されてはゐるが、それは商業的利害の共通によつて協同の要求されてゐる集團と然らざる集團との間に於ける競爭に於て、在來の國家的範疇を利用することを妨げるものではない。商業的に共通の利害をもつ國家同士は、互にその國家的範疇の取り除けらるべきことを感じるが、その反對に、商業的利害の相反關係にある間柄に於ては、却つてより强く國家的範疇が更生され、そこに帝國主義的大國家が作り上げられる。世界戰爭は卽ちさういふ過程に必然な對立關係の發展であつた。

この對立は、之を要するに、資本主義を働きかける國と働きかけられる國との對立に分かれるのが資本國にとつて最有利で、資本主義國相互の間の競爭による對立は、甚だ不利である。これ最近頻に『非戰』同盟の唱導される所以である。近代商業の自由競爭がトラスト化し、カルテル化する過程に應じて、國家間に於ても、トラスト的、カルテル的に、力の競り合ひから力の合同へと進まうとするのは當然である。それは、かくして合同した力によつて、被搾取國に對することが、資本國にとつて一番有利で且つ有力だからである。

二

支那に對する列强の競爭は昔ならば列國の間に屢々日露戰爭的の小競り合ひ乃至戰爭を惹き起すべき筈であつたが、その間に形勢は轉化して、列國は、支那に於ける資本國の共通の利害のために合力する必要に迫られることゝなつた。

がこの新たな形勢は、支那自身、自國の上に進展しつゝある列國の勢力が、右のやうに、舊國家的領土慾ではなく、資本主義的帝國主義であることを認識して、それに對抗する方法として、社會主義的又は共產主義的大衆運動を摑み取つたまでは、はつきりと、列國にも自覺されなかつた。

淸朝時代の支那は、丁度、維新前の日本のやうに、列國の侵入を全く舊軍國國家的領土擴張主義と理解すべき理由をもつてゐた。蓋しその頃は、列國の南洋、東洋等に對する植民主義の時代で、舊式の領土主義が未だ全く新式の資本主義に地歩を讓り切らなかつた時代だつ

たからである。孫文時代の支那に至つて、漸く日本の維新後に於ける如く、列國の侵入が主として商業主義的侵略であることを理解するに及び、これに對抗するには、支那の市民政治化の必要であることを自覺するに至り、つひに市民革命が舊支那國家の形態を變化せしむるに至つたのである。支那自身未だ充分市民政治化せず、支那に於ける市民國家は、たゞ外國關係の地域における自治的狀態に於て成立してゐる狀態であるに拘らず、支那の資本主義化、即ち支那市民と外國資本家の勢力との結合による商業主義化は、實質的に、支那そのものを市民國家化し、少くとも資本主義國家のある段階にまで、支那の政治的中心地域を押し進めたのであつた。

從つて資本主義國家の一般的行詰まりは、支那における、支那人及び外國人から成る市民國家的形態を動搖せしめる運動に動機を與へ、市民革命は急激に共產主義革命の色彩を帶びるに至つた。北方の封建的軍閥政治を打ち倒すべく起つた南方の革命政府はこの共產主義的革命運動と結びつくに及んで、それは啻に軍閥と稱する軍國國家のみならず、支那一般の市民的新政治に對する革命として現はれるに至つた。

然し、かゝる形勢は、元來、その市民的國家形態が自治的にのみ成立してゐる目下の支那に於て、そのまゝ進展し得べき望はなかつたのである。支那に成立してゐる市民國家や資本主義國家は、決して國家形態をとらずに、商人自體のギルド的形態に於て發展し來り、又現存してゐるものであつて、その性質は、國家のやうな外部構造的のものではなく、それより一層根柢的の、潜在的のものである。一時成立した南方政府の如きは、この潜在的の資本國家即ち市民團體の勢力に比ぶれば寧ろ表面的のもので、その實質は、潜在する市民的社會集團の方向によつて決定さるべきものでさへあつた。南方政府といふ外部國家と、市民團體の潜在國家とは屢戰爭までして爭ひ、その結果は、表面上市民團體の敗北の形となつたが、外部國家の財產的基礎は、どこまでも潜在的市民國家の協同を要するものである性質上、實際の勝敗は、表面上のそれとは別のものであつた。

かういふ形勢を急激に變化せしめたものは、ロシヤの勢力と戰術と組織とによつた共產主義的革命運動であつたが、これも亦一時的の形勢に終るべき理由があつた。その一時の旺盛は、古來、支那の歷史に通有の、政治階級の組織が、新運動の主義精神を受け入れ、それを新らたな組織に於て政治的勢力化する便宜を持つてゐたことと、やはり傳統的に支那の大衆が、在來の國家的支配──軍國的乃至宗族的──の殘虐無道に對して、本能的の反抗力をもち、有力な刺戟をうければ直ちにそれを勃發せしめるものであるといふやうな衝動的性質の存在することとによつたもので、共產主義は、恰も、在來の各種の秘密結社の信條がつとめたやうな作用をつとめたのである。それが大規模に成立すれば、恐らく新國家の成立を見ないとは限らないのであつたが、現代の政治的機構はより複雜な經濟的條件にかゝつてゐるので、さういふ革命が新國家を成立せしめる場合にも、古來の軍閥國家が成立す

るやうな比較的簡單な社會的條件によつて決定されることは困難である。中途まで成長した共産主義は、支那の政治的中心を決定する資本主義的地域に進出するに及んで、やはりその資本主義歷史の段階によつて決定され、市民的潜在國家の勝利となり、外部形態としての國家も、實質上その潜在的市民國家と撞着しない程度の性質に落ちつく外はないことゝなつた。

三

かゝる現形勢の成立については、支那自身にある市民的潜在國家のみならず、外國の顯在的資本主義國家も亦當然責任あるものであらねばならぬ。支那商人の純ギルド的存在が、資本主義的段階に發展したのは外國々家の勢力下に置かれた地域に始まり、それを中心として擴大されて行つたのである。外國は、支那の內地に獨立國家を作り、そこから支那の政治的統制を排除することによつて、その地域の近代的進化を可能ならしめたのであるが、そこで刺戟された政治的發展が、支那に市民國家的政治要求を醞釀せしめ、近代革命の成功となつたので、この過程に於て、列國及びその資本家的勢力は、いつも支那を未開國として壓迫し、搾取すべき根本の意向を持ちながらも、近代的商業主義の本來の性質による市民的自由主義の移植に努力した結果となつたのであつた。

かくして支那の本土に移植された市民國家的生活とその意識とは、支那が資本主義的に發展するに從つて、やはり列國の場合と同じく、殊に日本の場合と同じく、新國家的意識の發達を持ち來し、すべての近代國家がその初期に經驗した民族主義勃興の時代を支那にも齎らしたのであつた。日本が支那と戰ひロシヤと戰つたのも近代國家の資本主義的發展への途上であつたが、支那はさういふ戰を彼れ自身の本土に於ける外國勢力に對して戰ふべき時期に到達したのであつた。

けれども、此近代的戰爭が、日清、日露の戰爭のやうな形で戰はるるには、支那の國家は餘りに非近代的であつた。自國の領土內に外國の植民地を持ち、然もその植民地だけが近代國家化してゐるといふやうな封建的の舊國家が、新時代の戰爭に乘出すべき技術上の資格も財政上の資格もないことは餘りに明瞭である。やゝ近代化した南方政府もその點では彼れが對立してゐる北方の舊國家と變りなく、寧ろ掠奪組織の多少改廢されただけ財政的に貧弱たることを免れなかつた。けれども同時に、列國も、世界戰爭といふフールス・パラダイスの夢が破れた今日、四億の大衆を擁する此極東の大陸に向つて遠征事業を起す希望を持ち得るものは一つもなかつた。されば支那は、この戰ひを國內的革命運動の連續として、階級戰と結びつけて、帝國主義打倒の形に於てし、決して日本がしたやうに民族國家建設の形に於てしなかつた。然し、それは實質的に、現在の支那の形勢に於ては、決して共産主義的効果をもつ運動ではなく、國內の資本主義的結成に役立つものであつた。されば外國的資本主義に代ふるに支那的資本主義を以てしやうとする運動と効果を同じうするものであつた。租借地の回復でも關稅

自主でも、日本が嘗つて戰つた資本主義化の過程を支那も戰つてゐるのである。

四

支那の政治的段階と經濟的段階とは右のやうな結びつきに於て目下の形勢を馴致したものであるとすると、日本の支那に對する政策は、いろ／＼の點で、、、、、ないものであつた。が、それはすべて、、、、、、、から出てゐたといつていゝ。今回の濟南の出兵の如きはその新たな一例であるが、願くは最後のものであつて欲しい。

資本主義が民族主義化することは、各國自身覺えのあることであるから、列強は、支那を日清、日露當時の清國と同視する誤りに陷らない以上、さういふ段階に達した支那に對して、最早わが滿洲占領當時のや　な企圖をもち得ないことは明瞭である。支那に對し、領土主義の代りに自由主義によつて新國家の建設を誘導した列國は、支那を見ること、よろしくアメリカを見るが如く、それに對する侵略は、全然商業主義以上に出ないことが一番常識的であり有利であることを知るに至つた筈である。あれほどの侮辱を蒙つた大英帝國さへ、最早國威とか國權とかを彼れ自身の生命の最高頂に揭げることをしないで、實益の計算に基く資本主義的領域に於ける運動に止まつてゐる。

然るに日本は、遺傳的に支那大陸に對する一種の心的態度を持し、わが國家主義的見地をも、全然、對大陸的のさういふ、、に基けて構成してゐるかにさへ見える。この傳統は日淸戰爭の勃發によつて、、、、を感じた結果大分緩和されたには相違ないが、然し今日なほ、支那といへば、そこに一種の地域的根據をもたねば承知しないやうな心理狀態に在ることを免れない。それは『、、』の慾望といふ稚拙式な心狀ではないが、潛在的にはそれを含んでゐる——それが近代的にリファインされた——舊國家主義的心理であることは疑ひない。それはヨーロッパ人一般が東洋に對してもつ植民的精神よりも固定な民族的意識を含み、新國家新文明の創造への意慾でなしに、舊國家のコッピイに終始するやうな心狀である。

日本人が自國と支那大陸との關係を、太古の昔から單なる、、、關係に止つてゐたやうに理解するのも右のやうな心理と關連してゐるのである。日本は決して支那大陸に於ける、、、、に徹底的に成功した例のなかつたことは、イギリスのヨーロッパ大陸に於ける關係以上であつた。然し、イギリスのやうにヨーロッパ大陸からの勢力に征服された歷史を持つてゐないために、日本人は支那大陸に對して、、、、、に於ては、外國に對して本能的に抱くところの優越的の意識を失ふことはなかつた。

事實に於ては、日本と支那大陸との關係は、軍國的のそれよりは社會的のそれが重要であつたので、しかもその社會的關係に於ては、日本は始終支那大陸の支配をうけ、大陸文化の影響から阻止された中世の末期に於ては、日本の文化は停頓を免れなかつた位であつた。

此社會的關係を日本人が現實に理解するならば、日本の支那に對す

る政策の、、、、、は充分自省される筈であるが、日本の國家は、古來國民のさういふ現實的認識を防止することを努め、現代に至つて、近代國家的發達がアジヤ大陸に對して、古來の憧憬であつた、、、、、をある程度まで實現せしめることを得たゝめ、薪に油は注がれ、舊式の民族國家的意識は、新式の商業主義の衣服の裏に、淸盛の法衣の下の鎧のやうに隱現するのであつた。

五

わが歷代の政府の支那大陸への、、、も畢竟、以上の心理の外發に過ぎない。他國の領土に、、するといふことは、國家同士が近代國家的實質と意識とを備へた場合には、全く、、、、、である。列國と共に、支那を近代國家への途上にまで導いた日本は、その意味から、、、、、、、、、、、、はない筈である。

無論『輕々しく』といふ點に於ては、支那への出兵は、サイベリアに於ける反革命軍援助の出兵ほど甚しい程度のものでないに相違ない。然し、、、、、、、なサイベリア出兵を敢てした日本は、その通りを繰り返さないまでも、同じ傾向をもつことを全く免れてゐるとは考へられない。

近代國家同士の間では、その一國に內亂が起れば當然、この國にある外國の人民は中立の地位を守り、その戰亂に對して全然回避的態度をとるのが普通である。『避難』の外にその場合外國人のとるべき態度はない。その場合は外國人が條約上の權利を楯として一定の地域を固守して、その生命、財產の安全の保障を內亂國に求めるが如き態度をとるのは、それを、、、、何等かの、、、、、を達せんとする場合の外――たとへばアメリカ合衆國の、メキシコ、中米等に對する場合の如く――あり得べからざることであり、もしそれを敢てする場合は、危險を犯して、自己の特權を主張するもので、非中立的態度、場合によつて、、、、、、、、、られることは已むを得ない

日本政府がいつも、支那大陸に於ける條約上の特權を楯として、內亂に際して、居住、交通、商業、事業等の自由の保障を求めて、、、、、、、その特權支持のためには、、、、、、、、ないといふやうなことを聲言し且つ、、、、、、、、するのは、支那に於ける群小軍閥國家の示してゐる舊形態だけに目をとめて、前にいつた如き支那そのものゝ社會進化の段階に目を開くことを敢てしないといふ根本の錯誤に原因してゐるのである。

二千の日本人が小規模の商業に從事する、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、を實行して、その個人の損害を何等かの方法で塡補せしめる方法をとる事が、常識的に捷徑の道である事は議論の餘地も必要もない位のものである。邦人五六百戶に對して一戶の損害を五千圓としても、その總額は二三百萬圓を出でない。これを、やゝもすれば、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、そのたゞに貨幣經濟に於てのみならず、人命、努力、生活の經濟に於て如何ばかり節約的であるか所謂智者を待つて知らざることであるのに、

動亂の地域に於ける特權の名目上の頭守のために、、、、、、、、ことは全く不思議な事態である。、、、、、、、、、、、、、、、つひに常識家の錯誤がもたらす普通の不幸以上の不幸を持ち來す結果となつたは誠に悲むべきことであつた。宣傳と大衆的運動の世界に於ては、今回の結果は、忽ち眞正の事實と沒交渉な、宣傳のための宣傳に作りかへられ、軍閥、政治家煽動家——支那のそれは世界に有數の効果的のものである——商人等は、それを各自の利益に從つて利用することに於て決して最善の努力を怠るものではない。かくして支那全土に瀰漫する排日的心理は、丁度、古來の支那農民の心理に植えつけられた歷代の軍國々家に對する反感と同じやうな性質と根強さとで、現代支那人の心を支配するに至るであらう。

かゝる心理的傳染及びそれを利用する政治家、商人等の政策の効果に對しては、、、、、、、、、、、、、、外務省の發表する辯護的辭令の如きは、歷代の支那朝廷の宣言した軍國道德が支那の農民に對して石塊に說法であつたのと同じやうな効力をもつに過ぎないことはいふ迄もない。列國の支那に對して懸念するところは、自己の行動を肯定する論理の成立するしないにあるのではなく、それこれに拘らず、支那四億の市民や大衆が盲目的に對抗的地位に立つか何うかといふことにある。、、、、、、日本の國家道德によつて如何に肯定され得たにしろ、支那の市民や大衆やが、日本の資本主義的、、、、、せんとするやうな熱意を固守するに至つたならば、それは殆んど何の意味をも實益をも持たぬことである。

近代國家的接觸は、どこまでも市民的協同に根柢せねばならぬ。市民の商業的利益のために、國際的反感が利用されることは、更らに他方に封建國家的軍閥及びその政治家の內亂的闘爭を常習的に持つてゐる支那に於ては殊に、その政治的反映が、一層の殃を與へる可能性をもつ。

資本主義國家の態度としては、、、、、、、著しい不幸であつた。當分わが資本主義者はその酬ゐをうける覺悟をもたねばならぬ。

六

かやうな、、から解放されるためには、わが政治家及び國民は、今少し軍事的行動の歷史的性質を理解する必要がある

日本が臺灣、朝鮮を併合した後、その役人や教員をして悉く帶劍せしめた。これは、、、、、、の歷史的價値を盲信して、それの現代的効果、殊に現代の植民地に於けるさゝいふ、、の効果を理解しなかつた、時代錯誤、場所錯誤であつた。

日本の支那に對する、、、も亦それと同じ性質の錯誤に動機してゐるのである

世界を通じて、支配階級の悉くが帶びてゐた刀劍の、今日世界を通じて廢止されたのは、たゞに一武器の使用についての進化を物語る事實たるに止らず、さらに一般軍事的手段の行使についての進化を物語

るものである。軍事行動は、その舊式の發動に於ては、必ず近代國家の現實の利益と撞着する性質のものである。

國家の軍事的勢力の發生過程を觀察すれば、元來、それが決して消極的、、、作用から起つたものでなく、必ず、、、の動機によるものであつたことが明かにされる。

すべて種族的集團は、その膨脹の過程に於て、內部的のそれと外部的のそれとの二つの過程をとるが、內部的膨脹は、如何に進展しても、決して軍事的勢力の組織を產み出すことはない。種族の內部的膨脹から軍事的勢力の產れないのは、この場合には、種族は如何に膨脹しても、それ自體の統制に組織的の暴力を必要とする事情がないからである。

反之、種族が外的に膨脹する場合は、ある種族が自已の統制內に、平和に組み入れることの出來ない外族を包容する場合であるから、そこに必ず暴力の必要が存する。軍事的勢力なしには、種族の外的膨脹は不可能であつた。種族の外的發展は、所謂種族鬪爭を起すのであるが、この場合でも、外族との接觸がたゞ接觸に止まり、統制が別々に獨立する場合には必ずしも軍事的行動は起らない、從つてさういふ關係だけでは、軍事的勢力は組織立てられず、所謂軍國々家組織の發展を見ない。

今は、さういふ根本の事情を悉しく考察する餘地も必要もないが、とにかく、さういふ事情によつて、軍事行動は、必ず外部的種族の征服といふ潜在動機を含み、その故に、それを働きかけられる相手方も、當然、軍事行動者の、その潜在意識を推定する本能力をもつてゐるのである。

近代國家が、戰爭の必要を屢ゝ痛感してゐるに拘らず努めて軍事行動を避け、頻に軍備の撤廢又は縮少を口にするのは、卽ち近代國家的接觸に於ては、舊國家的性質の外族收容の目的のための行動が不必要に歸したからである。

事實もまた戰爭が、外族收容の目的を失つた後には、國家間の戰爭は大抵双方の損害といふことに止まり、數十年前に於けるやうに、それが必然國家的膨脹を持ち來すといふことはなくなつてしまつたのである。

外族收容の戰爭は、無論同時に領土獲得の戰爭であつて、それは必然に、防禦戰ではなく、領土的侵略の戰爭である。軍事行動は、その根本動機が、さういふ積極的企圖であつたことの性質上、それに對する受け身の側からは、丁度、賢しこい獸類が、鐵砲をかついだ獵師を見れば、自已の生命と領域とを脅かす行動者たることを推定する本能をもつやうに、軍事行動を得意とする國家の動機について、本能的の恐怖と反感とを抱くことは已むを得ないのである。

、、、、、、、、　、、、、、、、、、、、、、、、、、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、然し、それは昔のある武士が、自分だけは決して切捨御免を實行しない武士で

あることを百姓町人に信用せしめんとするやうなもので、、、、、の心理的價値を自から無視するものである。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、せしめることが目的なので、如何なる場合に於ての、行動者自身、實は、、、、、、、、、、、、を利用してゐる譯である。、、、、、、利用しながら、それに伴ふ反感を起さしめまいとするのは無理な註文である。

日本が對岸の大陸に對する、、、、、、、、、、、、日支の近代國家的接觸は決して成功の域に達することは出來ない。

日本が支那に對して、近代國家としての親密な關係を結ばうとするならば、云ひ換れば、資本主義的關係に於て成功しやうとするならば、支那の內亂に對して日本のとる態度は、アメリカの內亂に際して日本のとるであらう態度と全く同一のものであることを要する。

日本人は、支那大陸に對して、、、、、、、、、、、、、から解放されねばならぬ。一九二八、五、八。

（福本和夫著）

經濟學批判のために

唯物史觀のために

四六判三九〇頁
定價金壹圓
送料拾八錢

四六判三六五頁
定價金壹圓
送料拾八錢

燦として輝く鬪爭の二大記錄

最廉價版として刊行

著者の名はすでに大衆のものである。有產者經濟學の批判のために、無產者階級の歷史觀のために、敢然として戰へる著者の功績は偉大にして其の鬪爭の投じたる波紋は今やまことにはかるべからざるものがある。今日まで哲學者は世界を色々に解釋したにすぎなかつた。だが肝要な問題は世界を變革することでなければならぬ。この世界變革のための、輝かしい鬪爭の二つの記錄を、玆に、切實なる江湖の需に應じ最大の廉價をもつて、普く大衆に提供しえたることをよろこぶ。前書は嘗て、「經濟學批判の方法論」として、後書は「社會の構成＝並に變革の過程」及び「唯物史觀と中間派史觀」其の他として刊行されたるものであるが、此の廉價版においては、鬪爭實踐の教訓に基く幾多の內容上並に構成序列上の新なる訂正加除によつて、其の面目を全く新にしてゐる。

東京・芝・愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝 自一一二一 至一一三四

世界大衆文學全集

一册五十錢

事件の異常な、場面の劇しい變轉は映畫的な鮮かさに、性格描寫の確實な、叙述の清新は英文豪スチヴンスンの磨きをかけた妙什。「寶島他三篇」は目下配本中、續々御申込下さい。

寶島 他三篇

第三回配本開始

寶島（秘密の海圖を抱き港の宿に死ぬ老海賊、其圖を手にした少年、それを奪取せんと探險船にまぎれ込む海賊團、隻脚の首領は愈々獰猛なる冒險小說。

チエキル博士（聰明にして德高き醫師チエキル博士が惡に對する興味は、粉藥により性格と相好とを變へ、惡の巷に出沒し悲慘の最期を遂げる人間二重性格の悲劇

新アラビヤ夜話

「自殺俱樂部」（スペイトの一を引いた會員は死鬭、クラブの一に當つた會員は殺す役。此俱樂部の深夜の集會!?

「カシユガル王のダイヤモンド」（王家に傳る呪ひの金剛石をめぐる犯罪、陰謀、革命等々の大渦卷に終始するロマンス。

改造社　振替東京八四〇二

最近のゴーリキイ

昇　曙　夢

一

今年三月二十九日は革命文豪ゴーリキイの誕生六十歳と、彼が文壇生活の三十五年に當るので、ロシヤでは此の日から一週間に亘つて、盛んな祝賀會が全國的に開催され、空前の盛況を呈した。これより先、各方面の代表者を網羅した祝賀委員會が組織され、ソウエート聯邦人民委員會議長ルイコフは特に人民委員會の名を以つて訓令を發し、ゴーリキイが勞働階級、プロレタリア革命及びソウエート聯邦のために盡した偉大なる功績を揚げて、この祝賀會の意義を全國民に宣布した。祝賀會當日は聯邦内で發行されてゐる限りの總ての新聞雜誌は、全紙を擧げてゴーリキイに獻げ、或ひは特別記念號を發行してゴーリキイに關する記事を滿載してゐる。又、モスクウアを初め、全國の公會堂、勞働者俱樂部、圖書館等に於てはゴーリキイに關する諸名士の講演があり、夜間は各劇場でゴーリキイの戲曲が上演された。凡そ文學者がその生前に於て、國家からこれ程の盛儀を以つて祝賀された例は、未だ嘗て見ない所である。たゞ殘念なことには、祝賀會の主人公たる當のゴーリキイは五年前病氣の故を以つて國を出た以來一度も歸國せず、今猶イタリーのソレントで靜養中なので、折角の祝賀會に顏を出すことが出來なかつたことである。その代り、各人民委員長を初め、文壇及び各種團體からの祝電は祖國に於ける熱誠溢るゝばかりの祝意を寄して、この日ソレントの書齋を山のやうに飾り、又一方ヨーロッパ文壇の代表者等の情意を盡した挨拶も、この日内外の諸新聞紙に掲載されて、イタリーに於ける新しいヤースナヤ・ポリヤーナの主人公を驚かした。その中にはロマン・ローラン、ステファン・ツワイグ、アルトゥール・シュニッツレル、ヤコフ・ワッシエルマン、アルホンス・パケー、アンドレー・ジード、レオナルド・フランク、ヘンリック・マン、アルトゥール・ゴリチエル、アルノルド・ウリッツ、エルウイン・キッシュ等の名が見える。ゴーリキイの名聲が國際的であるだけに、その祝賀會も國際的であつた。けれども、最も熱狂的な祝意を見せたのは、言ふまでもなくこの革命文豪がその六十年に亘る苦鬪

な生涯と三十巻一萬頁以上の作品とを、自由解放のために献げた勞働の國ロシヤに於てゞあつた。

二

ロシヤ文學の一時代は確かにゴーリキイの名と繋がれて居り、彼の藝術はその時代の偉大なる社會的意義を明かに反映してゐる。ゴーリキイが文壇に出たのは、丁度ロシヤに於ける經濟的轉換の時代で、資本主義的要素が封建地主的社會制度に打ち勝つて、新しい階級、プロレタリアートが初めて社會歷史的舞臺に進出した時であつた。この時からゴーリキイの炎の如き革命的呼號は、嵐の如く增大し行く革命運動の時代を通じて高らかに響き、帝政の斷末魔の反動時代にも嘗て沈默することがなかつた。帝國主義戰爭の時代にも、彼は愛國的熱狂に反對して、非戰論を主張することを忘れなかつた。その後ロシヤのプロレタリアートが資本家と地主の政權を顚覆して、新生活を建設し始めた時には、彼にも多少の動搖はあつたが、結局その進路を勞農民衆と結合した。今は宿阿靜養の故を以つてファシストの國に住んではゐるが、然し彼は何等憚るところなく公然と全世界に向つてブルジョアジイの罪を鳴らし、又ソウエート聯邦に於けるプロレタリアートの勝利と成功とに對して、衷心よりの滿足と歡喜とを表明しながら、プロレタリア獨裁の革命的建設的事業と協同提携すべき必要を說いてやまない。

ゴーリキイは革命前のロシヤに於て、革命作家として世界的名聲を博した唯一の文豪で、その一生を通じてプロレタリア革命の深刻なる體驗を嘗めてゐる。勿論、過去に於ける革命運動と多少關係を有する天才的藝術家はこれまでも尠からずあつた。例へばアンドレーフ、クープリン、チリコフ等はそれであるが、しかし彼等は今何處に居るか？彼等は空しく外國に在つて、祖國に於ける革命の成功を呪ひながら、その日陰者の如き亡命生活の中に自己の時代を將に葬り去らんとしてゐるではないか。唯一人ゴーリキイのみは革命の炎の中にあつて、その試練に堪えることが出來た。

三

ゴーリキイの過去六十年の生涯中、三十五年間は文學的活動に献げられてゐる。思ふに、數多い文學者の中でゴーリキイの生涯ほど、色彩と事件とに富んだものはない。彼の多くの作品が自敍傳的なのも、又その創作の多くの頁が深く讀者の心を惹きつけるのも、決して偶然ではない。ゴーリキイの藝術を通じて流れてゐる社會的現象の多樣さと複雜さとは、常に彼の作品と彼の生涯とに於てその生ける反映を見出した。ゴーリキイの文學と傳記とは我々に彼の個性と創造力との絕え間なき成長を示してゐる。彼はその文學的經歷を浮浪漢（ルンペン・プロレタリアート）の作者として、又社會的罪惡と資本家の權力とに荒々しく反抗してゐる強い個性の讃美者として始め、その後[illegible]

程に於て勞働運動と結合しながら、絶えず個人主義からプロレタリア集團主義に轉じようと努力してゐる。彼は啻に藝術上の偉大なる巨匠であるばかりでなく、更に勞働運動史上の偉大なる闘士である。我々はロシヤ及び外國に於けるゴーリキイの革命的活動に就いて何人にも知れ渡つた事實を反復することを止めて、寧ろゴーリキイの舊友であり、又彼を非常に高く評價してゐた故人レーニンの言葉を茲に引用しよう。嘗て一九〇九年にブルジョア新聞が、社會民主黨よりゴーリキイが除名されて革命運動と關係を斷つたと云ふ虚傳を放つた時、レーニンは『プロレタリア』紙上に於て次の如く書いてゐる。

『ブルジョア新聞紙は徒らに雑言悪口を放つてゐるが、同志ゴーリキイは恰も彼等を侮蔑するかのやうに、その偉大なる藝術品によつて、ロシヤ及び全世界の勞働運動と餘りに強く結合し過ぎてゐる。』レーニンは斯樣に藝術の武器を以つて、一般革命的事業のために戰つてゐる力強い共同者をゴーリキイに於て見たのである。

長い間のゴーリキイの生活道程には、勿論動揺と疑惑の時代もあつた。又過つて傍路へ逸れた瞬間もあつた。しかし、それは彼が革命の理論家でなく、指導者でもなく、生活を感情で受容れるところの最も敏感な藝術家であつたからである。



最近のゴーリキイ

かゝる瞬間にゴーリキイは黨の根本運動から離れ、その樣々な思想や事件を了解するに苦しんだ。かゝる過誤があつたにも拘らず、レーニンはゴーリキイと革命勞働運動との有機的結合を毫も疑はなかつた。又ソウエート聯邦の勞働階級も今ではこの偉大なる文豪の過去に於けるかゝる疑惑の瞬間に少しも意を留めてゐない。それどころか、寧ろ今度の記念祭にはプロレタリアートの革命事業に對するゴーリキイの偉大なる援助を記憶して、彼に滿心の感謝を表してゐる程である。

四

今回の祝賀會はゴーリキイの過去の功績と勝利とを記念するばかりにとどまらない。彼には過去に於ける輝かしい革命的事業の外に、偉大なる現在と未來とが約束されてゐるからである。ゴーリキイの最近の作品は彼の新しい創造的達成とその藝術的技巧の偉大なる完成とを示してゐる。彼は今、その晩年の大作たる三部作『四十年』の完成に沒頭してゐるが、その第一部たる『クリム・サムギンの生活』は最近異常な期待の下に出版されたばかりである。この作品は非常に廣汎なる範圍に亘つて、革命前より革命後レーニンが入露するまでの近代ロシヤの複雜なる姿を描いてゐる。が、更に彼は近く、新ロシヤに關する創作に着手しようとして、その準備中である。この事に就いて彼は、最近の手紙の一つにかう書いてゐる。

『私は五月初旬にはロシヤに歸つて、この夏一杯は以前私が足跡を留めた地方を旅行して見たいと思ふ。これは最早や決定的の事である。旅行の目的は私の生涯中のこの五年間に、それ等の地方に於てなされた一切の事を見んがためである。私は新しいロシヤに就いて叙述をして見たいと思つてゐる。それがために私は最早や多くの興味ある材料を集めた。が、更に私は（微行で）工場、倶樂部、農村、ビヤ・ホール、建物、青年共産黨員、專門學校生徒、小學校の授業、不良少年植民地、勞働通信員、農村通信員、婦人代表委員、回教徒婦人、其他方々へ行つて見なければならぬ。これは極めて重要な仕事である。この事を考へる度毎に、私の頭の毛は動搖のために震へる。それに全國の遼遠な地方から、新生活の建設にたづさはつてゐる樣々な小さな人達が、極めて感動すべき、驚くべく興味ある手紙を澤山書いてよこしてゐるから。』

遠いイタリーに住みながらも、ゴーリキイは絶えず祖國に對する燃ゆるが如き興味に生きてゐる。そして絶えず發達し、復興しつゝあるソウエート・ロシヤで何が起つてゐるかといふことに並ならぬ關心を持つてゐる。

五

十月革命の十週年記念祭に發表された『私の祝詞』といふ文章の中に彼は書いてゐる。

『ソウエート政權は確立した。又事實、ソウエート聯邦では新世界建

設のための基礎が出來上つた。其の基礎と云ふのは、私の考へに依れば、奴隷化されてゐた意志を新生活に向つて解放したことである。卽ち、行動に對する意志の解放である。何故なら、生活は行動であるからだ。今まで人間の自由な勞働は到る處に於て資本家の馬鹿馬鹿しい無意味な搾取によつて穢され、暴壓されてゐた。そして國家の資本主義的制度は事物を創造することの快樂を減じ、人間の創造力の自由な表現である勞働を呪ふべきものにして了つた。これは何人にも明かなことである。しかるにソウエート聯邦では人々は勞働の國家的意義を意識しつゝ、又勞働が自由と文化への直接の捷徑であることを自覺しつゝ勞働して居るやうに思はれる。斯樣にして、ロシヤの勞働者は以前のやうな憐れむべき貧しい飼糧を働き取つてゐるのではなく、自己のために國家を働き取つてゐるのである。』又云ふ、『ロシヤの勞働者は指導者レーニンの遺言を記憶しながら、自己の國家を統治することを學んでゐる。これは敢へて誇張する必要のない明かな事實である。』

ゴーリキイは更に『十年』といふ別な論文を次のやうな言葉で結んでゐる。『これは誇張した讃美である、と人々は私に云つてゐる。然り、これは讃美に違ひない。私は自分の一生を通じて、愛し得る人々、働き得る人々、そして又、創造のため、地上を美化するため、地上に人間の名に値する生活形式を建設するために人間のすべての力を解放することを目的としてゐる人々を、眞の英雄と見做した。しかしてボリシエウイキーは總ての正直な人々にとつて疑ふ餘地のない成功と驚くべきエネルギーとをもつて、この目的に邁進してゐる。既に全世界の勞働階級はこの仕事の價値を理解するやうになつた。』

六

現代ソウエート文學とその若い作家達に對するゴーリキイの關係と興味も亦熾烈なものがある。我々は此の點に關して、彼がロマン・ローランに送つた手紙の全文を茲に引用する餘裕を持たないが、彼はその中に『今日ロシヤに於ては、優れた美しい文學が發達し、且つ榮へてゐる。』と云ひ、又その最近の論文の一つに於ては『若き文學者に對する大なる注意と彼等に關する深い理解とが必要である』といふ語で結んでゐる。

昨年の夏、ソウエート國立美術院長、コーガン教授がイタリーのソレントにゴーリキイを訪問した時、彼は長い間ソウエート・ロシヤの事に就いて教授と親しく談話を交へた。が、コーガン教授は『ソレントにゴーリキイの客となつて』といふ印象記の中にこのことを次のやうに傳へてゐる。

『ゴーリキイはロシヤで行はれてゐる一切のことを注意深く研究してゐる。彼は今、三卷に亘る大きな小說(前揭三部曲『四十年』のこと)を書いてゐるが、これは少くともロシヤ生活の四十年間を網羅する雄篇である。彼は決して白派の云ふが如きロシヤの敵ではない。ソウエート・ロシヤに就いて、その達成に就いて、その科學に就いて、そ

の文藝に就いて、多くの事を私と話した。長い間、異常な興味をもつて話した。『此處は退屈だが、ロシヤには生活と動きがある』とも言つた。彼は錦繪を手にしながら、ソウエート・ロシヤで出版されたばかりの本を色々と讀んでゐる。彼はソウエート文學に異常な喜びを感じながら、それをヨーロッパ文學以上に置いてゐる。第一流の作家は勿論、第二流の作家といへども彼がその作品に目を通してゐない作家は一人もない……私はソレントを出發しようとして別れを告げるために、ゴーリキイの所に立寄つた。その時、彼の顏色が青ざめて、いつもより無愛想に思はれた。『今日は私は普通でない、喘息だ。この病氣は心臟系統の病氣ぢやないから、案じることはない。直ぐに癒るだらう』と、彼は云つた。彼は今息子夫婦と二才になる孫娘と、これだけの家族で暮してゐる。彼がその可愛い孫娘に對する優しい愛情は、いつか彼が言つた『子供は地上の花である』といふ詩的な言葉を思ひ出させる。』

最近モスクワアでは文學者の間に『ゴーリキイは我々と共にあるか』といふ論題の下に討論會が開かれたが、私は不幸にして、その時ゴーリキイに反對した作家達の演説を讀む機會を持たなかつた。私が讀んだのは單にセラフイモーウイチの説だけであるが、彼はかう云がてゐる。

『反動の暗黑時代にゴーリキイはロシヤ國民を戰闘に呼んだ。彼は革命に先立つた時代に我が作家達を下層社會から進出せしめたことに於て、偉大なる役割を演じた。彼は今イタリーに住んで居るが、しかし常に貪るやうな興味を以つてソウエート聯邦に起つてゐる一切の事柄を把握してゐる。彼はソウエートの新聞紙を隅から隅まで殘らず眼を通し、若い作家達と長い音信を取り交はし、又彼等の原稿を受取つては親しくその創作を指導し、兼ねてソウエート青年の生活にも非常な興味を持つてゐる。それのみか、彼は外國に於て、ソウエート聯邦に對するブルジョア新聞紙の誹謗を大膽に斥けてゐる。かくして彼は常に我々と共にある。』

七

現代ソウエート文學にとつて、ゴーリキイの偉大なる價値を計ることは容易でない。先づ第一に彼はプロレタリア藝術の開祖であり、その最も偉大なる代表者である。故人レーニンは、ゴーリキイのためにこの光榮ある稱號を確認して『ゴーリキイは絶對にプロレタリア藝術の最も偉大なる代表者である。彼はこの藝術のために既に多くの事を爲し遂げたが、更にもつと大きなことを仕遂げることが出來る。』と、云つた。又、セラフイモーウイチも云つて居る通り、ゴーリキイは長い年月の間、書き始めたばかりの作家や、大衆出身の文學者等と長い音信を交はしながら、未だ嘗て彼等の手紙に答へなかつたことはない。いつでも彼等の相談に應じて適當な助言を與へて居る。かうした廣汎な觀察と深厚な配慮から、プロレタリア藝術の將來の勝利に對する彼の確信が生れたのである。』

ゴーリキイ自身の證明するところに依れば、獨學の作家の手になつた原稿が四百篇以上も、一九〇六年から十年に至る間に彼によつて讀まれてゐる。「これ等の原稿の大多數は――と『チエルカツシユ』の作者は云ふ――辛ふじて文學を解する者によつて書かれてゐた。それ等の原稿は永久に印刷されないであらうが、その中には生きた人間の魂が銘記され、大衆の聲が直接響いて居り、六ケ月に亘る多くの長い夜に怖えたるロシヤ人が何を考へてゐるかを知ることが出來る」。「廣大な土地の表面にバラ撒かれてゐる樣々な人間の考へがしばしば暗合してゐる」ことに、ゴーリキイは興味を感じてゐる。ゴーリキイの集めた統計的材料は恐らく未來の文學史的研究の爲に道を示すものであらう。傳統的な科學が、天才の奇蹟的出現の中に、又は何處から取つたとも分らない前代天才の影響の中に、説明を求めてゐる詩の傾向は、これ等大衆の思想の暗合から、幾多の試練を經て生れて來るのではないか。ゴーリキイのこの統計は大衆的現象としての詩の本質を理解するために貴重なる材料を提供するものであり、その優秀たる作品の中に全階級の集團的創造力の生産を見る可能性を與へるものである。これ等の無學乃至淺學なる詩人達(その名をレギオンと云ふ)は現代ロシヤの優れたるプロレタリア作家達と共に自分達の詩や物語の創造に參加した。プロレタリア詩は、藝術に對して新しい問題を指示すると共に、藝術批評の前に新しい目標を立て、研究家の注意を知らず知らずの中に文學的貴族主義から、凡ての藝術の唯一の源泉なる民衆生活と社會的鬪爭の深みへ向はしめた。

「毎度のやうであつたが――とゴーリキイは書いてゐる――郵便夫が、ペンを持ち馴れない手で一杯に書き込んである二カペーク紙の灰色のノートを運んで來る度毎に、手紙が添へてある。それには、よく知らない人や、知つてゐる人や、見たことのない人や、近しい人が――作品を『讀んでみて呉れ』と頼んである。そして『私に才能があるか何うか、私は人々の注意を惹くだけの權利があるか何うか』を答へてくれと願つてゐる――喜びと悲しみとで心は壓搾せられ、同時に大きな希望が彼の中に燃え上り、更にまた、今日非常に苦しい時代を經驗しつゝある祖國に對する恐怖によつて心は痛く惱んでゐる……。喜びに壓搾されると云ふのは、それは下手な散文や拙い詩が益々多くなつて來、筆者の聲が益々勇敢に高鳴つて來るからである。即ち、下層生活に於いて世界と結びついた人間の意識が如何に燃え上つてゐるか、小さな人間の中に大きな闘い生活への希求と自由に對する渇望とが如何に成長しつゝあるか、自分の若々しい思想を發表して疲れたる親近者を勇氣づけ、悲しめる自分の大地を愛撫したいと如何に熱望してゐるか、それを君は感じるであらう。かくのごとく今にも起ち上つて、壓しつけられた民衆を眞直にし、勇敢にしてやり、新鮮な力をもつて、新しい文化と新しい歴史とを創造する全人類的の仕事に取りかゝらうといふ希望が烈しく勢ひづけられてゐる。」また別な個所にゴーリキイは言つてゐる、「私は堅く信じてゐるのだが、プロレタリアートは自分



（漫畫）ゴーリキイ歡迎の場面

ククルイニクサ畫

說明（左から右へ）——ゴーリキイ、歡迎文を朗讀しつゝあるルナチャールスキイ、「ハンと鹽」を持つたセラフイモーウイチ、花束を持つたウエレサーエフ、デミヤンベードヌイ、彼等の上方がツレニヨフ、プリシユウイン、マヤコーフスキイ、寫眞機を持つたツレチヤコフ、その後ろがアセーエフ、ゾーズリヤ、花を持つたパーベリ、レオーノフ、彼等の上方がピリニ



ヤーク、イヷアーノフ、下方雑誌を持てるがアウエルバフ、それに續くはコリツオフ、アレクセイ・トルストイ、リベヂンスキイ、セイフーリナ、フアデーエフ、ポドヤーチエフ、デーエフ・ホミヤコーフスキイ、グラドコフ、リヤーシコニキホロフ、櫻を持てるがロマーノフ、彼等の上方がカサトキン、セリウインスキイ、その手に支へられたウエーラ・インベル、稍々離れてエウドキモフ、最上方樂譜を持てるがコーガン、エフロス、フリーチエ、ラスコーリニコフ。

の藝術を創造することが出來よう――偉大なる苦心と大なる犠牲を拂つて――曾つて自分達の日刊新聞を創つたやうに、この私の信念は、自分の人生觀や自分の觀察や感情を紙上に述べようとする試みの中に頑強に注がれた幾百人の勞働者や職人や農民の努力に對する私の長い間の觀察の上に成長したのである。」……「歴史が――とゴーリキイはプロレタリア作家第一集の作者達に向つて言つてゐる――八年間の反動の間に君達が何んなことを經驗し、何を成し遂げたかを世界中のプロレタリアートに物語るならば――勞働者階級は君達の精神の眼ざましい働きと勇氣と、君達のヒロイズムとに驚くことであらう。君達は自分のやつたことを意識しないし考へもしないであらうが、未來のロシヤ・プロレタリア階級と我が地球の全プロレタリア社會とは、新しい世界的文化の建設に對する戰ひのために、偉大なる力を疑ひもなく君達の例の中から汲み上げるであらう。」

八

現代ロシヤの多くの知名な作家達はその文藝的生活に於て、ゴーリキイに負ふ所が多いと云ふことを誰でも公然と證明してゐる。又現代の讀者にとつても、ゴーリキイは絶大な感化力と意義とを持つてゐる。この事實を何よりも雄辯に語つてゐるのは、ゴーリキイの作品に關する圖書館の閲覽統計である。レニングラード市立中央圖書館の統計に依れば、その所藏する書籍の著者二千七百人の內、多少とも讀者を有する者は僅かに七百人で、殘りの二千人は全然讀者の注意の範圍外にある。七百人の中でも毎日讀まれてゐる著者は、僅かに三十八人に過ぎない。此の三十八人の中で、最大多數の需要を見てゐるのはゴーリキイの作だけである。この圖書館で昨年その閲覽者に交附した書籍の統計は、ゴーリキイの作品が一千五百卷、トルストイが七百七十二卷、ドストイエフスキイが五百五十六卷であつた。この數字はゴーリキイの作品が總ての讀書階級に最も多く愛讀されてゐることを語るものである。このゴーリキイの千五百卷の閲覽者を更に種別すると、學生九百九十六人、從業員二百三十二人、勞働者百四人である。しかしこれは中央圖書館の統計であつて、市外もしくは場末の勞働區域になると勞働者の數が遙かに増して來る。更に又、レニングラードの金屬工組合の文化部で、特に六人の大文豪に就いて調べた結果に依ると、金屬工の間で最も多く愛讀されてゐるのは、矢張りゴーリキイが第一位で、その次がトルストイであつた。更に一千九十四人の金屬工について、ゴーリキイの作品中特にその愛讀書の回答を募つたところ、『母』の愛讀者が五百三十四人、『幼年時代』が四百三十七人、短篇集が三百八十七人、『アルタモノフ家の事件』が三百四十三人、『人間の中』が三百十一人、『ホマ・ゴロデーエフ』が三百一人、『オクロフ町』が二百二十二人といふ結果を見た。想ふに、英雄的な勞働詩に對するゴーリキイの偉大なる熱情と、又自然を征服し、世界を改造すべき根原としての勞働に對するゴーリキイの信念とが、彼の作品と讀者大衆とを密接に

繋いでゐるのである。人間に對する愛情と、勞働及び勞動の勝利に對する確信とは、ゴーリキイの藝術を偉大なる勇氣と生の歡喜とで滿たしてゐる。暗い、重苦しい場面の描寫や、容赦なき批評の場合や、人間の弱點に就いて悲しんでゐる時でさへも、ゴーリキイの作品の各ページからは常に勇ましく生に對し、戰ひに對する呼聲が響いてゐる。

九

藝術家としてのゴーリキイに就いては、最近人々が余り論じないやうである。併しながら、彼の藝術的エヴォリューションは決して完成を遂げた譯ではない。今猶、十年乃至十五年以前にも増して力強く行はれてゐる。藝術家としてのゴーリキイは未だ決して最後の言葉を言ひ終つたのではない。又自己の創才をどん底まで汲み盡したのでもない。

ゴーリキイの最近の作品は、殆んど全部が回想錄の部類に屬する。數年前、雜誌『赤い處女地』に連載された自叙傳的作品の一部は、その後『私の大學』といふ標題の下に一卷に纏められて、ベルリンのロシヤ書肆『クニーガ社』から出版されてゐる。かうしてこれ等の短篇が一冊に纏められたのを見ると、我々はこれが如何に大きな文學的事件であるかを知ることが出來、又これがゴーリキイの創作的道程に於て、如何に重大なる段階であるかを見ることが出來る。同じ部類に屬するその後の作品には、『巫女』、『火事』、『エヌ・ア・ブグロフ』、『牧者』『監視人』、『法律違』等があるが、その大部分は『私の大學』と同じく高い藝術的水準に立つことが出來る。

ゴーリキイの回想はルソーの『懺悔錄』やゲーテの『空想と事實』の如き、クラッシック型の回想とは違ふ。この二人のクラッシクの作品はそれぞれ異つて居るにも拘らず、一つの共通點を持つてゐる。それは作者自身の内面的發達の全道程を汲み盡さうといふ欲求である。ルソーにしても、ゲーテにしてもその態度は異つてゐるが、作の中心となつてゐるのは作者自身であり、作者の個性であり、作者の生涯である。ところが、ゴーリキイの作品はさうではない。其處では作者の個性は第二位に下り、その主なる地位を占めてゐるのは曾て作者がぶつかつたところの色々な多數の獨特な人々の特色的相貌である。ゲーテの自叙傳に就いては、誰かが云つたやうに、その標題を改めて『天才は適當な事情に於て如何に發達するか』と題することが出來る。

ゴーリキイも同じく、その内面的、精神的發達の行程を尠からず描いては居るが、さうかと云つて、彼の回想錄に對して『天才的作者は不利な情況に於て如何に發達するか』といふ標題を適用することは出來ない。ゴーリキイの回想錄は、人間に就いての讀物である。『ごらんなさい、周圍にはどの位興味ある人間が居ることか。』と、作者はかう云はんとするかのやうである。『私は數十人、數百人の人間と近く接觸した。彼等は何んといふ色彩のある、獨特な。そしてお互ひに似てゐない人達であらう。さうだ、彼等は飲んだくれもすれば、放蕩もすれば、盗みもする。又、賄賂を取つたり、女や子供を虐めたり、住居の爭ひで人を殺したり、闇の中で火つけをしたりする。けれども彼等はなんといふ天才的な、力と未だ汲み盡されない潜勢力とに充ちた人達であらう！』

十

チエーホフの作では、ロシヤ全體が「憂鬱な人々」から成立ち、ゴーリキイの作では、獨創的な人々から成立つてゐる。チエーホフは正當でなかつた。恐らくゴーリキイも正當でないかも知れないが、兎に角、彼は眞實に近い。ゴーリキイは一種獨特な現象として、各個人に接觸しつゝ、その内面的本質を奥深く覗いて、其處にある獨特なものを發見することが出來た。チエーホフの世界は、特に千八百八十年代乃至九十年代の幾分かぼんやりした、色彩のないインテリゲンチヤの世界であつたが、ゴーリキイの世界は、その當時の暗い、文化の光に照らされない世界で、しかも遙かに色彩のある血の氣の多い平民の世界である。樂天主義に對するゴーリキイの強烈な傾向はそれから來る。チエーホフは平板單調であるが、ゴーリキイは極端から極端へと飛んでゐる。音樂、歌、力、高揚に對する歡喜から、無意義な人生に對する絶望の發作へと急轉してゐる。勞働の緊張と興奮とに對する陶醉的陶醉から一轉して、忽ち自殺の衝動に沈むことがある。それにしても兎に角、チエーホフの作は憂愁に閉され、ゴーリキイの作は樂天主義に漲つてゐる。

チエーホフを讀む時、我々は一種の疑惑に捕はれる。彼の憂鬱な人々や叔父ワーニヤや箱の中の男が出た後で、何うして革命が起り得たか。チエーホフのロシヤから一九〇五年（第一次革命）のロシヤへの推移は不可解であり、不可能である。ゴーリキイは此の事に就いてチエーホフよりも遙によく答へてゐる。我々は彼の回想的作品に於いて、勞働者や農民の間に於ける區々た思想の底流を觀、また革命前期の特色的な氣分を見ることが出來る。（老織匠ニキータ・ルブツオフの資本家に對する憎惡、錠前屋ヤコフ・シヤポーシユニコフと神の否定、民情派社會主義者ロマーシを中心とする農民所、大學生の革命的團體等。）ゴーリキイの回想錄はその藝術的價値を別にしても、近代ロシヤの文化史料として、特に一八九〇年代を特色づける記錄として大きな意義を持つてゐる。

ゴーリキイの最近の作品は、その作風に於いて同じ作家の『幼年時代』を思ひ出させる。或る短篇の如きは『幼年時代』と殆んど同列に立つてゐる。例へば『番人』、『初戀』、『巫女』、『私の大學』等はそれである。『番人』は特殊な力を持つた作品で、この作に於いて彼はこれまでの根本的缺點の一つであつた推理癖を全く脱してゐる。そして作中人物をして自ら語らしめてゐる。その結果、非常に鮮かなタイプと場面とを創造することが出來た。『初戀』も優秀た作品で、極めて率直に、眞摯に、而も濃やかに描かれてゐる。『火事』も明るい詩である。『私の大學』と『エヌ・ア・ブグロフ』とは大きな社會的な繪卷物で、其處では一八九〇年代のロシヤの地方の姿が我々の眼前に展開されてゐる。

前にも述べた如く、ゴーリキイは近くロシヤに歸國すると豫想されてゐるが、ソヴエートロシヤがその力と注意とを社會文化的建設の偉大なる問題の解決に集中した今日、ゴーリキイと彼を敬慕しつゝある勞農大衆との邂逅は、疑ひもなく大なる文化史的意義を有する事件となるであらう。（完）

巴里のミユジツク・ホール

岩田豊雄

「ヴアレンシア……ヴアレンシイア……」

中學の上級生らしいのが二三人、ひどく職業的に聲帶を顫はせながら、春草の土堤を歩いてゐる。その合の手に豆腐屋さんの喇叭が聞えるのは是非に及ばぬ。とにかく、「ヴアレンシア」だ。「ヴアレンシア」が東京の流行歌なのだ。今日に限らず、街頭の口笛、映畫館やキヤフヱの奏樂に、この頃何遍あのフオツクス・トロツトを聞かされることか。

巴里——紐育——東京。

そもそも、あの歌は一九二六年の春に巴里のミユジツク・ホール赤風車の舞臺で生れたのだ。「ジアンネマアル」以來の流行歌として、この世に送出されたのだ。それが忽ち巴里ぢうの踊場の音樂となるのだ。それが佛蘭西ぢうの踊場の音樂となるのだ。それが歐羅巴ぢうの踊場の音樂となるのだ。それがまづ紐育の踊場の音樂となるのだ。それが亞米利加でさんざ流行つて、ヴイクタアに吹込まれて、それが——

とにかく、ミスタンゲツトの可愛い反齒の脣から歌ひ出されてからまる二年經てば、東京の學生の流行歌になるのだ。二年が一年になり、一年が半年になるのも遠い將來ではあるまい。實際、東京は最近かなり國際的になつた。あたしはコテイの白粉を使ひます、僕はウビガンのオオ・ド・コロンを愛用します。その字のつく人々の化粧品が、あの數多い巴里の香料製造元のうちで、正確に流行店舖を選んでるのに驚く。ほんの數年前までは、帽子の被りかたも知らない彼等彼女であつたのに——。

巴里——東京の航空路が開けたのだ。

これからはいろんなものが飛んでくる。中繼地紐育でいかに異樣な色と香を附加されるにせよ、品物だけは無事御到着に相違ない。ほんとに洋化らしい洋化——ヘチマ・コロンと云ふやうなお愛嬌のない洋化は、今日此頃から始るのではあるまいか。「ヴアレンシア」ばかりではない。この前のオリンピツク大會の頃ひどく歐羅巴で流行つた菓子「エスキモオ」、チヨコレエトで包んだアイスクリイム、あれを僕はちやんと東京で喰つてゐる。

そこでミュジック・ホールだ。

このモダンな娯樂劇場は、恐らく十年を俟たずして東京大阪の興行會にセンセエションを起すであらう。いな、小規模ながらに日本に於ける最初の試み、淺草の「モン・パリ」は、既に長期興行の記錄を破る成績を擧げてゐるではないか。尤も現在巴里で全盛を極めてゐるミュジック・ホールの內容を得るのは一朝一夕の業ではないが、「ヴレンシア」が流行歌となる如く、一般の好尙はさういふ方面に向つてゐることは明らかなのだから、最早興行師は算盤を膝の上に置き、道樂者は老眼鏡の曇りを拭き始めても遲くはないのである。

×

歐羅巴と米國の各都市のミュジック・ホールは、悉くその範を巴里に仰いでゐるものであるが、その巴里でもミュジック・ホールの黃金時代が來たのは一九二〇年以後のことである。なぜさういふことになつたか、それには種々の理由もあらうが、大戰爭がかの國の人心に致したわれわれの想像の及ばない激動は、明らかにこれにも關係してゐる。戰後、非常な勢ひで低級なオペレットが流行つた。「フイフイ」とか、「デデ」とか碌でもないものが、非常な大入りを占めた。財布は輕く氣は重い戰後の公衆にとつて、佛蘭西座のラシイヌやオペラ座のワグナアは、たしかにお荷物だつたのである。第一、黑い服と固いカラに着換へるだけでも面倒である。それよりも、呑氣で、陽氣で、安直なオペレットの小屋で、いろんな苦勞を忘れるにしかずである。

オペレットの隆盛は、今日のミュジック・ホール時代の先驅と見て差支へない。しかしそのうちに、公衆はオペレットでは物足りなくなつてきた。オペレットにはとにかく筋がある。オペラの妹であるだけの品がある。一個の狂言を演ずるのであるから、演劇の種類は單性である。視覺的快樂も乏しい。變化が足りない。諧謔も多くない。

そこへゆくと、ミュジック・ホールには何でもある。第一に、オペレットそのものがある。喜劇がある。舞踊がある。曲藝がある。奇術がある。大仕掛大道具のパントミイムがある。一瞬の休みなしに次ぎから次ぎへ、あらゆるスペクタクルを陳列してくれる。さうして入場料に於て、オペレットと變りがない。

實際、ミュジック・ホールは演藝の百貨店であるのだ。單に雜多な演目があるといふだけなら、從來の寄席、また日本の色物席などもそれに類するわけだが、組織に於て、規模に於て、兩者の相違は萬屋と三越以上の開きがある。百貨店がさうである如く、ミュジック・ホールは大資本を擁する近代的企業である。從來最も仕込みのかゝる興業物はオペラと相場が極つてゐたが、現在に於ては到底ミュジック・ホールに及ばない。百貨店が經營難に惱みつゝも結局大なる利益を擧げてゐるやうに、ミュジック・ホールも莫大な仕込みに拘らず素晴らしい興行成績である。つまり、尨大な百貨店の建物が夥しい賣上個數を生むやうに、六ケ月を興行單位とするミュジック、ホールの特權が恐ろしい入場延人員數をつくるのである。その上他の劇場は夏期七八九の三月を

休むのが例だのに、ミュジツク・ホールはその間も稼ぐ。巴里の如き都會では例へ巴里人全部が避暑に出かけたとしても、この期間特に多い外國觀光客や地方人に依つて、立派に客脚を繋ぐことができるのである。

さうしてミュジツク・ホールには、オペレツトやヴリエテにない、異樣な魅力がある。その正體はドクトル・フロイドの研究にまかすが、要するに人はミュジツク・ホールの空氣を愛するのである。卑俗だの下手だのと罵りながら、結局月に一度位は見にでかけるのである。この點、混雜を知りながら、同じ品物を近所の小賣店へ行かないで百貨店まで買ひにゆく近代人の心理を考へさせる。百貨店へ這入ると、なんとなく氣が浮立つのである。ミュジツク・ホールの木戸を潜ると、なんとなく嬉しくなるのである。なんとないと云ふ處が油斷がならない。

×

ミュジツク・ホールはかくの如く現代的娯樂機關となつたが、決して昨日今日生れたものではない。MUSIC-HALL は固より英語である。それがどうして本家本元の巴里に於ても英語で呼ばれるか。今日では最早佛蘭西新語として辭書に存在するが、さうなるまでには、自らミュジツク・ホールに發達の過程が刻れてゐる。

ミュジツク・ホールは、もともとキヤフエのなかから生れたものだ。飲物を啜りながら、大道藝人の歌や音樂を聞く——古い繪畫によく殘つてゐるさうした情景が、そもそもミュジツク・ホールの胚胎であつたのだ。そのうちキヤフエの店内に、小さな舞臺を造つてお抱ひの藝人を置くものができてきた。第二帝國時代には、他のキヤフエと區別して、これをキヤフエ・シヤンタンと呼んでゐる。キヤフエ・シヤンタンも歌や音樂ばかりでは客が承知しなくなつて、仁輪加や舞踊を番組に入れるやうになつてから、キヤフエ・コンセエルと名前が變つた。臺本もなにもなしに、即興的に寸劇を演じつつ、舞臺から客と掛合話を始めると云つたやうな、極めて呑氣なものであつた。一八六七年の博覽會の頃は、これらの俳優はまだ衣裳をつけず、平常服のまま舞臺へ現れてゐたといふ話である。

キヤフエ・コンセエルの形式は今でも巴里に殘つてゐないことはないが、それは全く近代化してしまつて何の風情もない。僕は圖らずもミユンヘンに於て、昔ながらのキヤツフエ・コンセエルを見た。但しミユンヘンのことであるから飲物はビールに限られてゐるが、客の全部が一リツトルのコツプを抱へて、蒼古たる高座の上のバイエルの民謠や輕喜劇に興ずる態は、實に古風な歐羅巴を讃へしむるに足りた。

ミュジツク・ホールの名が巴里に生れたのは、今から約三十年前のことである。その頃の變なハイカラ主義が、そんな外國語を喜んだのだ。尤も今だにその趣味は、ミュジツク・ホールに殘つてゐる。呼物の踊子の一隊は、事實英國人ばかりでないに拘らず、テイラア・ガールスとか、ホフマン・ガールスとかいふ名で呼ばれてゐる。サアカスの曲藝師なども、英國名前が珍重される。

その頃のミュジック・ホールは、キヤフエ・コンセエルから脱して純然たる興行物となり、一種のヴオドヰルやレヸウを演ずるやうになつた。しかし今日のやうに複雑で尨大な番組となり、ミュジック・ホールの名が直ちにモダンな享楽を考へさせるやうになつたのは、極く近年のことである。出演俳優の数、衣裳や大道具の数、その他すべての舞台構造が遥かに大歌劇場を凌駕するに至つた今日を、キヤフエ・シヤンタンの昔と比べてみれば、隔世の感どころではないのである。

いまや巴里のミュジック・ホールは、十一座を算してゐる。舞臺や觀客席の廣さや設備は、大體匹敵くらゐのところである。ミュジック・ホールは必ず廣い酒場を具ふから、餘りに大きな舞臺は溢れない。また、ガランとした空氣はミュジック・ホールにとつて最も禁物である。

十一座あるなかで一番人氣のあるのが赤風車——これは一九二四年に新築しただけあつて、近代的ミュジック・ホール設備の粋を集めてゐる。それまでは、「フオリ・ベルジエエル」と「カジノ・ド・パリ」が兩大關で、盛んな競争を演じたものだが、今は後進赤風車に一籌を輸してる。以上の三つは悉くモンマルトルにあつて、最も代表的なものである。其他「コンセエル・マイヨオル」の如く特色のある粋な小屋もあるが、他は大同小異、ただ存在する區に従つて多少番組の手加減がある。

ただ驚くべきは、どの小屋もいつも大入りであることだ。ミュジック・ホールの客は泉の如く無限に湧出してくるとみえる。

×

「陽氣さ」と「猥褻さ」、「盛り澤山」と「スピード」。これは現在のミュジック・ホールの持つ、極めて強烈な性格である。

陽氣さといふことは、この種のスペクタクルの附物に相違ないが、あれほど眩惑的な明るさは到底ミュジック・ホール以外に求められない。それはあの熱狂的な音樂、あの絢爛な舞臺のせゐばかりではなく、ミュジック・ホールの要素全體が醸す雰圍氣なのだから、今はこれを措く。

「猥褻さ」といふ點に於て、現在のミュジック・ホールは敢然として特色を出した。キヤフエ・シヤンタン時代にも、佛蘭西獨特の呑氣な、明放したエロチシスムがないことはなかつた。しかしそれは概ね歌詞のなかに含まれてゐる意味たり言葉たりであるから、感覺的な猥褻ではありえない。現在のミュジック・ホールのそれは、「眼に訴へる」猥褻である。

さういふ要求に最も適切なものは、裸體のほかにないわけである。一九二二—三年はこの傾向の最も激烈な時代であつた。ミュジック・ホールと云へば、裸體を聯想するより他なかつた。レヸウの題名にも、「素裸」とか「なんといふ裸體」とかいふのが流行つた。智慧もなく、無暗矢鱈と裸體を陳列したものだ。女神だと云つては、天使だと云つては、花の精だと云つては、彫刻だと云つては、多くの裸體を

見せる工夫ばかりしたものだ。裸體も始めは乳房を露すことさへ禁じられてゐたのだが、それが腰のまはりの花や葉まで御免蒙るやうになつてしまつた。尤も文字通りの全裸體といふことが、許される筈はない。、、、、、、、細ゴムの肉衣を穿いてるのだが、それが極めて、、、、、、る上に、全身にお白粉を塗つてゐるから、オペラ・グラスの力ぐらゐでは、なかなか見分けがつかない。この全裸體の場合に限つて、二分間以上舞台に止ることができない規則になつてゐる。但し一寸引込んでまた出てくるぶんには差支へがない。

全裸體の全盛はさう長く續かなかつた。氣の早い巴里の見物は、すぐそれに飽きてしまつたのである。そこで「フォリイ・ベルジェエル」座が西班牙の黒レエスを裸體の上へ着せてみせた。雪白な膚の上に荒い黒の花模様が浮出すのは、裸體以上に裸體の効果があつて、頗る喝采を博した。それ以後、全裸體は特別必要のない限り現れなくなつて、現在では裸體の一部分を奇抜に装飾化する方に傾いてゐる。しかしその部分は必ずしも普通人間が、、、、、、、に關係しない。

ダンスやバレエは歌や音樂と等しく、ミュジック・ホールの主體であるが、これも普通の舞踊術では見物が承知しない。技巧としても、形としても極度に刺激的でなければならない。例を擧げれば、或時或る座では二十人ばかりの踊子の一隊を、フート・ライトの線に沿うて、見物に、、、、、、、、させた。さうして音樂に連れて、、、、、、空に飛ばして、甚だ行儀のよくない踊をみせた。たしかに猥褻でないことはないが、直ちに醜悪と云つてしまふには、四十本の脚と二十個の――、、ながら――、、、あまりに綺麗に揃つて運動するのである。あまりに技術的訓練が行屆いてるのである。總じてミュジック・ホールの猥褻さには何處かに精練があつて、植民地的見世物とは大に趣を異にするのである。喜劇の筋なぞには隨分思切つて際どいものがあるが、必ずナンセンスを伴ふから、不愉快が殘らない。

ただ野劇、或は絵畫劇風のものに、不思議と變態性慾的な取材が多い。支那人に虐待される白人の女が、、、、、、、、、逆さに吊されたり、動く水車に縛られたり、宛然地獄變相圖を描くのもあつた。また王朝の遊行船に海賊船が襲來して來て、家臣等を殺し王妃や侍女を占領すると云つたのもあつた。しかしこれ等は大仕掛な舞臺面を競ふうちに偶々邪路に踏入つたのであつて、ミュジック・ホール本來の氣分に副ふものでないから、一時的な現象として終る筈である。

ミュジック・ホールの番組は凡そ四十から五十の場面を持つてゐる。それを前に述べたやうな雑多な演藝が分割するのであるが、なかには一種類で二つ三つの場面を占めるものがあるにせよ、非常な盛り澤山だと云はねばならない。さうして些かたりとも見物に退屈を與へぬやう、曲目の配置と編成に頗る苦心が拂はれてる。のみならず、この數多い場面に對して二三回の休憩しか許されず、後はのべつ幕なしである。次ぎから次ぎへと變つたものを出して行かないと、もともと腹に溜らぬものばかりだからすぐ飽きがくる。前の幕が下りてまたす

く上つた時には、變た舞臺に變た俳優が並んでるといふ風でなければならない。そこでミユジツク・ホールの大道具設備は、機械的には他のいかなる劇場よりも進歩してゐる。殊にトリツクの研究は一興行毎に何か新機軸を生出さないことはない。

しかし大仕掛もので、どうしても數分間幕を下さねばならぬ場合が起きる。その時には寧ろキヤフエ・コンセエルの昔に返つて、幕外演技が始まる。ミユジツク・ホールには、傳統として必ずコンペエル、コンメエルなる男女の狂言廻しがゐて、演伎中俳優に混つて歌ひもするが、幕外演伎には特に腕を振ふ。美聲といふよりも澁い喉を聞かせる中年の男女が多く、客に話しかけたり、注文の唄を唄つたりして愛嬌を賣つてる間に、オーケストラは騒然と次の幕の曲を奏し始める。同時に幕が上ると、必ず目の覺めるやうな舞臺が出來上つてると云ふ段取である。

夜八時頃から始つて十一時ちよいと過ぎまでの短時間に、それだけ盛り澤山の番組を矢次早やに見せられる。ハネは大仕掛ものときまつてゐるが、それを見て往來に出ると、やれやれと思ふ、誰も木戸錢が高過ぎたと愚痴する者はない。

×

ミユジツク・ホールの觀客席では、煙草が喫へる。普通の劇場はもとより、映畫館でもよくよく場末でない限り、喫煙禁止となつてゐるのに、ミユジツク・ホールだけは椅子の背中に灰皿がついてゐる。

これは一見些細なことのやうで、實はミユジルク・ホール場内の自由な空氣に、或る關係を持つものである。その恩惠に浴する者、決して愛煙家のみに止らない。そういふ空氣のなかでは、婦人連だつて人目を忍んでボンボンを頰張る必要はないのである。日本でも今から十年前は、桟敷で喫煙はおろか、酒も飲め物も喰へた。あの頃の歌舞伎見物が最も愉快であつた。飲食と調和しないのはイプセンの芝居だけである。明日の演劇が酒と煙草に結付かないと、誰が豫言できるものぞ。

ミユジツク・ホールのさうした特權は、その前身であるキヤフエ・シヤンタンから讓られたものである。舞臺と觀客席に區別を置かない——陽氣で放縱な雰圍氣を自由に交通させる。觀客をしてまるでキヤフエの椅子に腰かけてるやうな、氣輕るな心理狀態に置く。さういふ約束は今だにミユジツク・ホールで遵奉されてる。

まづミユジツク・ホールの開演匆々、きまつて三階のうしろあたりで、口笛を吹いたり拍手したり大騒ぎをする奴がゐる。これは「クラツク」と稱する人種で、日本の芝居道の人は「さくら」と呼んでる。「さくら」は俳優個人に雇はれて聲援するのだが、この「クラツク」は劇場から金を貰つて場内の景氣をつけるのが役目である。

それから演伎が進んで、舞臺ではコンメエルが、「頭禿げても浮氣は止さぬ」と云ふやうな唄を歌ふ。するとわざわざ暗くした觀客席のな

かを、天井の數個のスポット・ライトが何物をか模索する如く彷徨ふ。やがて平土間の一點に集中したところを見ると、模範的に輝いた老紳士の頭が羞しげに下俯いてゐる。滿場哄然たらざるをえない。しかし曝しものにされてよく怒りもせず、またよく都合よく平土間の眞中にゐたものと思ふが、事實はその老紳士も「クラック」の一人ださうである。

ミュジック・ホールの舞台では、必ず觀客席へ降りる階段がついてゐる。それを傳つて觀客席へ出入するのは、大概例のコンメール、コンペエルだが、時としては可憐な踊子の一隊も降りてくる。「フォリイ・ベルジエエル」座の如きは、二階棧敷の縁に沿うてその通路がとりつけてある。それが、、、で出來てるから、踊子達が通過する場合、階下の見物は天女の舞を仰ぎ見ざるをえない。

ミュジック・ホールには幕合ひが二三度しかないことを前に述べたが、そのなかでたゞ一度だけ、十五分の長い休憩がある。その間でも觀客に茫然と開幕を待せるやうなことはない。劇場面積の少くとも三分の一は、休憩時間用の設備に割かれてある。別室にフラフラ・ダンスの見世物がある。廊下に、射的がある、球轉しがある。さらに大きなキャフエがある。

ミュジック・ホールのキャフエは、その歴史から云つても重要なものであつて、位置も觀客席から遠く離れることを許されない。大概平土間の後方に、大きな面積を占めてゐる。オペラ座でも佛蘭西座でも、場内キャフエは極く小規模である。多くの人は幕合ひを利用して、往來のキャフエへ出てゆく。ミュジック・ホールのそれは純然たる大キャフエで、卓の數も飲物の種類も頗る多く、ジヤズ・バンドが騷ぎ、室内噴水が迸しり、觀樂場らしい空氣が渦卷いてゐる。

プロムノアル（立見場）の形式も、ミュジック・ホールならきつと殘つてゐる。普通の劇場では殆んど無くなつた制度である。最も安い切符で這入れるかわりに、土間のボックスの背板につかまつて、目白押しに重つて舞臺をみるのである。それもよくよく早く行かないと、そんな場所はとれない。しかし舞臺なぞは如何でもいゝと云ふ連中が、プロムノアルには澤山ゐる。その大部分は、素性のよろしくない女とそれを漁りにくる男である。それらの女は定期入場券を持つてゐて毎夜入場するのである。さうして十五分の幕合ひに、一度に廊下へ流出て、ここを先途と活躍する。彼女等の誘惑法は、甚だ露骨でキビキビしてゐる。立派に黄色い鑑札を所持してる連中だから巡査も文句は云はないし、見物人もミュジック・ホールの附物だと思つて誰も氣に止めない。彼女等の狙ふ對手は、金のありさうな外國人か地方人かで、巴里人を客と考へてゐない。

しかし貴重な十五分を無駄にした彼女等が、悄然として隅つこに二三人固つてる態は、どうしてもロオトレクを思ひ浮べざるをえぬ古いモンマルトルの情趣である。

×

サラ・ベルナアルの名は誰でも知つてゐる。マリイ・ロオランサンの名も繪畫愛好者以外に揃つてる。しからば、序にミスタンゲツトの名をも記憶して貰ひたい――少くとも「ヴレンシア」を口誦む人々なら。

ミンタンゲツトは、ミユジツク・ホールの女王である。巴里の名物である。佛蘭西のマスコツトである。彼女の名は遠く國境を越えて知られてゐる。亞米利加に於てすら、二回の招聘興業以來、多くのファンが生れたと聞く。

彼女は反齒で下り眼で、どう贔負目にみても、美人と云へない。さうして、もう五十を越したと噂される婆さんである。そのうへ生來の惡聲ときてゐる。しかも彼女の華かな人氣は何時凋むお氣色もない。幾多の模倣者が出るが、いつも、月夜の星の運命を辿る。彼女の藝は一個の不思議である。

ミスタンゲツトは、恐らく佛蘭西に於ける最も怜悧な女の一人であらう。彼女は、美人でない女がいかにして美人以上の魅力を齎らしうるかを、熟知してゐる。色氣を捨てて、さらに色氣を拾ふ術を心得てゐる。彼女は所謂「小股の切上つた」趣味を以て、擧止動作表情――容貌そのものまでに、獨特な魅力を與へる。巴里の下町趣味――モンマルトル趣味が、滾々として彼女の胎に溢れてる。また、彼女は自分の惡聲を巧みに處理することを知つてゐる。彼女はわざわざ調子を外し、わざわざ調外聲を出して歌ふ。オペラの花形の逆を踏み裏を掻く藝を發明して、オペラの花形以上の人氣を築上げた。破調ながらその歌が無限の興味を感じさせるところのものは、實に彼女が「間」を掴む名人だからである。歌に限らず、舞踊でも演技でも、彼女の藝は悉く「間」の活用である。常人の及ぶべからざるよい「イキ」があつて、觀客はそれに觸れて溜飲の下るやうな快感を得るのである。

彼女の本名は、ジヤンヌ・ブウルジヨア。巴里近在の生れである。家貧にして幼時より「巴里の浮浪兒」の群に入り、貧困の底を嘗めた。ただ生來歌と犬とを好み、常に一匹のムク犬を曳いて人の門前に立ち、歌を以て錢に代へた。一日或るキヤフエの前で歌つてゐると、トリアノン・コンセエル座の支配人がこれを聞いて天禀を認め、彼女をコーラス・ガールに採用したのが出世の緒だと云ふ。後年彼女が創成した「スケッチ」（一種の寸劇へ僅少の歌と舞踊を綯混ぜたもの）は、彼女の浮浪生活の記錄であり、その時必ず彼女と共に登場するムク犬は、そのかみのムク犬であるといふ。これが普通巴里人の話してくれるミスタンゲツト出世譚であるが、俳優錄に據つてる彼女の經歷は、決してそんなロマンチツクなものではない。第一彼女が噂のやうな婆さんだとすると、ムク犬の壽命が少し永過ぎるわけである。しかし尋常普通な俳優錄の經歷を、ここに列べることも愚に相違ない。

ミスタンゲツトがめきめきと擡出したのは、「カジノ・ド・パリ」座時代のことである。その時分同座が巴里のミユジツク・ホールを代表してゐた。男優の人氣者サン・グラニエと共に、彼女は「カジノ・ド・パ

ー」を背負つて立つてゐた。「いゝひと」だとか、「もう結構」だとか、彼女の歌ふ小唄は皆その頃の流行唄となつた。パテェのレコオドには彼女の唄はみな殘つてゐるが、歐羅巴版のヴイクタアにも多少吹込まれてゐる筈である。

現在に於て彼女は「赤風車」座の主席俳優であるばかりでなく、支配人の一人として經營にも加つてゐる。「赤風車」が今日の盛況を呈してるのは、隱然として彼女の力である。一昨年「ヷレンシア」が赤風車で發表された時に、近來の好調として新聞紙に謳はれた。果せるかな、モンマルトルの聲が東京の巷に響きわたる始末となつたのである。

この四月の十五日から赤風車の新狂言が始まつた。「廻はる巴里」といふ戯題である。

×

巴里は今ミュジック・ホールの時代である。すべての巴里の藝術がミュジック・ホール時代である。

岬の若葉と雨

若山・牧水

庭さきから松林を横切つて濱へ出る。其處の駿河灣を距てゝ眞向うに見えるのが伊豆の大瀬崎である。空が晴れて風のある日など、崎のはなに立つ浪の見えることがある。濱から三里ほどの沖に當るさうだ。沼津の狩野川の河口に在る丘陵、牛のねてゐるのに似てゐるといふので牛臥と呼ばれてゐるが、その牛臥とこの大瀬崎とが相對して、奥に靜浦、江の浦の奥深い見ごとな入江を湛んでゐるのである。この入江沿ひの海岸をぶらぶら歩いてみたいものだと思ひながら、なかなかよう果さなかつたが、ツイ先日、一巡りめぐつて來た。例により草鞋ばき、急に晝から出かけた。ひとつは病後の脚を試してみる氣もあつた。

門を出ると直ぐ千本松原のなかの路にかゝる。この路は狩野川の河口から起つて、富士川の河口に終り、そのあひだ長さ四里、幅二三町を沿つてゐる見ごとな松原を縦に貫いてゐる路である。昔はこれを甲州街道と呼び、東海道より以前に出來てゐたものださうである。『伊賀越道中双六』で、沼津の平作が伜の重兵衛に河合又五郎の行衛を訊いて自殺したのがこの甲州街道であつた。

松原のなかの若葉が美しかつた。楢、櫨、櫻、百日紅等の若葉が、むきむきの色を湛へて萌えたつてゐた。大きな老松の、しかも黒松ばかりの茂つてゐる間だけに、一層眼立つ。

松原のなかの徑が盡きると狩野川の河口である。砂の上に坐つて渡し舟の來るのを待つてゐると、三人づれの少年が來て、同じく其處に寢ころんだ。三人とも、菖蒲と青蓬の束を持つてゐる。なるほど、丁度端午の節句であつた。そして蓬は菖蒲の代りと見ねばならぬ。軒にさすのだらうと訊けば、さうだといふ。

御用邸の前の松林を通りすぎると、靜浦の往還に出た。通りがお祭でもある様に賑つてゐる。袢纏の着物を着た若者たちに、娘連もまじつて遊んでゐる。お節句もあるであらうが、ひとつはこの風のせいだと思つた。沖に出なければ斯うして遊ぶよりほかない漁村であるのだ。小料理屋がみなそれぞれに賑つてゐた。靜浦を抜けて江の浦、此處の狭い灣にはいつぱいに漁船が引きあげてあつた。押し並んだ舟の

空はいかにも靜かで、また清らかに見えた。

いつもは小波ひとつ立たぬ入江であるのに、今日は沖から岸にかけて白々と波立つてゐた。ところによると二三間の高さを打ちあげて道路まで浪の散つてゐる場所もあつた。そして終に雨が落ちて來た。洋傘をば手に持つたまゝ急ぎ足に歩いてゐると、横降りの雨を打ち上ぐる浪のしぶきとが顔に當つて、寧ろ心地よかつた。

折よく三津で、乘合自動車に乘ることが出來た。木負、久連、平澤と海岸沿ひに走つて、終點の古宇に着いた。今日は此處泊りときめて、村に唯だ一軒の宿屋、大谷屋に寄つた。何年振かでその廣い土間に入つて行くと、いかにもひつそりしてゐる。そして老母が一人、圍爐裡端に坐つてゐた。

この老人はわたしを見忘れてゐた。沼津の若山だと云つても思ひ出さなかつた。一晩泊めて貰ひたいが、といふと、おあがんなさいとばかりで、案内に立たうともしない。途方に暮れ、あがり框に腰かけて煙草を吸つてゐる所へ、主人が歸つて來た。内儀も來た。山の畑にでも行つてゐたと見え、鍬を澤山抱へて入つて來た。

彼等はよく覺えてゐた。そして、

『浪花節に階下に降りて貰へ』

と、主人が云つた。

『ウム、さう云つて來べえ』

と内儀は直ぐ上つて行つた。

此處の二階には部屋が二つしかなく、一方には小學校の先生がもう四年間とか下宿して居り、あとの一室には二三日前から浪花節かたりの夫婦が泊つてゐるのださうである。

『階下で結構ですよ、ほんの一晩だけだから』

といふと、親爺は例の口調で、

『いけねえ』

と云つた。この人も何だか急に年をとつた樣に見えた。髪も白く、頬もこけた。

暫く圍爐裡ばたに休んで、やがて二階に上つて見ると、矢張り此處の部屋に來てよかつたと思つた。欄干の直下から海で、居ながらに大きな入江全體が廣々と見渡された。その大きななかで、この古宇だけの小さな入江を爲す直向うの岬には頻りに海から風がふきあげてゐた。大方楢らしく見ゆる一山の若葉木が、ゆさ〳〵と搖れ立つて、蒼白く輝き、其處へ大粒の雨が降り注いでゐた。宿の直下あたりは、それでも一向に風は無く、唯だ雨の作る波紋が音をたてゝいちめんにひろがつてゐた。風は吹きながら、雨は降りながら、入江の隅々まで何とも云へぬ明るさが滿ち渡つてゐた。眞白な雲はむく〳〵として入江向うの空に湧きあがつてゐるのだが、その雨雲のあひだには照日ともいふべきみづ〳〵しい色を含んで、入江を圍む山から山の低い峰をも、あちこちと入りこんだ襞々をも明るく見せてゐた。

『やれ、やれ』

と云つた氣持でわたしは部屋から座布團を持ち出し、緣側の欄干に肱を持たせながらこの久し振りの、六年振りの、入江の景色に見入つた。

大正十二年九月一日の、あの大地震にわたしはこの部屋で出會つたのであつた。その夏、わたしは妻子を連れてこの二階を借り受け、みんなして泳いで暮してゐた。そして八月の廿七八日に子供の學校の事があるので彼等を連れて、妻だけが先に沼津に歸り、わたしはその數日前から始めてゐた磯魚釣りに未練を殘し、獨り其處に殘つてゐた。

その九月一日、やゝ早目にたべた晝飯の後でわたしは一人二階に晝寢をしてゐた。主人も老母も子供たちも宿の者はみな蜜柑山の草とりたかに出かけて、宿に殘つてゐたのは病氣でねてゐた內儀とわたしの二人だけであつた。其處へグラグラッと來たのであつた。

『お二階の旦那ア！』

と叫ぶ內儀の聲を聞いたか聞かずか、わたしは階子段を二足か三足で飛び降りて、庭に立つてゐた。そして擔つて內儀を庭に引き出した。

其時には既に庭先の石垣は壞れてゐた。そして音を立てゝ海沿ひの道路の石垣が壞れつゝあつた。軒端からは瓦が落ちて來た。元來が磯山の根つこの波打際の僅かの平地を利用して建てられた家なので、庭が極めて狹い。其處で屋根からの瓦に注意し、次第に浪にくづされて來つゝある石垣に注意しながら壞れ落ちた石垣の上に立つて刻々と襲つて來る震動に耐へてゐねばならなかつたので、隙をいふと早や茫然自失の形であつた。

其處で更らに恐るべきものをわたしは見た。滿潮の時でも四五尺高さに波の上に出てゐる眞黑な岩が二つ三つ宿のまん前に在つた。いつと其處を見ると、それらの岩がいつの間にやら隱れてしまつてゐた。そして、何事ぞ、その眼の前の海いちめんがぶつぶつと泡をふいて漲りかけて來てゐたのである。のみならずもう少しで浪に宿の前の狹い道は既に壞れかけてゐる。浸さるゝばかりである。

『こりア、いかん！』

幸に宿の背戸口へか山の方に登つてゆく作場路のあることに思ひ當つた。

が、この病身な內儀は、早やもう腰が立たなかつた。二三度、叱る樣な聲を出してみたが、駄目であつた。しかたがない、引つ擔いで行かうとしてゐる所へ、どやどやと同じその裏口の道から宿の家族が馳け降りて來た。

老母が一番しつかりしてゐた。そして直ぐ山に逃げ登らうとする一同を制して、この家の下は大きな岩になつてゐるので地震には大丈夫である、安政の地震にもこの家一軒は大丈夫であつた、津波もまだまだこの分ではたいしたことはない、唯だ、用心だけはしておけと男たちに云ひつけて疊を二三枚持ち出させて庭に敷き、自分は鍋を持ち出して飯をたきにかゝつた。

わたしは今度は沼津の家族の者が氣になりだした。其處に居合せた一人の青年が氣の毒がつて一緒に行つて見れることになり、駄目と知りつゝ郵便局の在る隣村まで出かけて、電報を打つことにした。此處等海岸の村から村をつなく唯だ一條の道路はずつと海岸に沿うて造られてゐた。その道路が村はつれのとつぱなの所で土煙をあげて海の中に壞れ落つる樣をば現に庭から眺めてゐた。

『山越して、舊道を行くといゝ』

誰かゞ云つた。

舊道は堀割りになつてゐた。そして其處も諸所くづれてゐた。ことに高い兩側から石が、いまだは頻りに落ちて來るのであつた。

其處を走り拔けて郵便局に行つて見ると、土地の舊家か何かで庭の馬鹿廣いまんなかに、長い丸太を組み合せ、その上に疊を敷いて、家族の老人たちが坐つてゐた。無論、電報どころの話でなく、唯だ一種の嘲笑を買ひに行つた樣なものであつた。

夜になつた。箱根の山の上の空が、どす赤い色に染つて見えた。小田原か、横濱か、其處らの燒くる焔の色であつたことをあとで知つた。

可笑しかつたのは、心を鎭むるために、宿の親爺と兩人して村の酒屋に酒を買ひに行つた。戸もあけつ放しのまゝで、誰一人居たかつた。みな、山に逃げてゐるのだ。棚に並べた酒の壜が殆んど悉くころげ落ちて、土間は壜のわれた酒の匂ひとでいつぱいになつてゐた。僅かに一つ落ち殘つてゐた一升壜四本を兩手に一本づつ提げて歸つて來た。あの晩、酒を飲んだのはお前たちだけだつたづらよ、とあとで村の者が口惜しがつたさうである。

夜が明けた。津波も來ず、搖り返しも次第に遠くなつた。

丁度、村の有力者の一二軒の家族が沼津の病院に入院してゐた。それを見舞に行かうとする人たちと協力して嫌がる發動機船を口說き落し、最大速力で、沼津に走らせた。

自宅に馳せ歸つて見ると、庭に二張の蚊帳を吊つて、みなそのなかに小さくなつてゐた。そして其處では早や所謂鮮人騷ぎといふものが起つてゐた。

さうした大地震の時にあれほどしつかりしてゐた宿の老爺が、いつの間にか老耄して、わたしたちとは無論のこと、極く近しい人の顏をも見忘るゝ樣になつて居るのだと聞いて、不思議の樣な、また可笑しな樣な氣もするのであつた。

其處へ内儀が自慢のネーブルを山盛りに盆に盛つて上つて來た。宿の主人はその後一二度、沼津のわたしの家に寄つて呉れたことがあるが、内儀とはそれ以來初めてゞあつた。話はまた自づと六年前の地震のことになつたりした。

雨はいつか大粒がやんで、次第にこまかく、はては煙る樣な降りかたになつて、夕闇となつた。其處へ近い沖合から大勢して網をあげるかけ聲が聞えて來た。

この邊の海岸の網はすべて海中に掛けつ放しになつてゐるのである。頭あひを計つては舟で漕ぎ寄せて締め、またもとの儘に掛けておく。宿屋の二階から見ゆる所だけにも、ノリアガリ（これは鯨專門ださうだ）、ネコサイ、及びダイボウの三種の網が張つてあるのである。今聞えて來た掛聲はダイボウ網を締めるのであつた。宿の主人は早速手網を提げて、魚貰に出かけた。

それを肴に一人でぼつ〱飲み始めたところへ、高島友次郎君がやつて來た。この人はもう永い間の我等の歌の仲間で、初めこの古宇に來たのもこの人の紹介であつた。家に病人があると聞いたのでこちらから行くのを見合せ、使を出して呼んだのであつた。

雨はやんだ樣だが、夕闇をふくんだ大空の雲の色は暗かつた。却つて海が明るく、それにもまして入江向うの山の若葉の方は、更らに明るかつた。暮れかけた海へ、二艘三艘と漕ぎ出してゆく小さな舟がある。麥烏賊釣りに行くのださうだ。麥烏賊とは麥の穗の出始めるころに釣れるからいふのださうだが、麥烏賊の名もやさしく、形も小さい。現に我等の膳の皿のうへにもその煮附が何疋となく載つてゐた。

•

翌朝、今朝もうこれで八十八夜の祝酒を濟まして來ましたよと云つてやつて來た高島君も大瀬崎の方に行つて一緒に一日遊ばうといふことになつた。道は昨日と同じく右の崖下に海を見下しながら山の中腹を行くのである。途中、足保、久料など十軒か二十軒ほどづゝ家のある小さな部落を過ぎた。昨日通つた多比、木負、久連などもさうだが、この邊の村の名はみな可笑しなものばかりだ。二時間足らずも步いたかと思ふと目的の江梨村に着いた。其處の宿屋富士見屋といふに寄つて、直ぐに釣船を仕立てゝ貰はうとしてゐる所へ、またざあつと降つて來た。諦めて二階に籠り、歌の話などをして暮した。

此處の二階から見える海沿ひの山の若葉も實に鮮かなものであつた。此處の山には山櫻が多く、それらしい若葉が楢か櫟の林の傾斜の中に幾つとなく茂つてゐた。また、この附近、樟が多く、現に今日も路ばたに煙をあげてゐる樟腦小屋を見て來たのであつたが、この樟の若葉は他のゝ樣に綠でなくて強い茜色である。それがむく〱と茂つて萌え立つてゐるので、まことに眼覺しい感じがするのである。

午後は幸に晴れて呉れた。他に漁師を頼まず、宿の主人親子が案内してくれるといふので、感謝しながら用意の小舟に乗つて漕ぎ出した。昨日から頼んであつたので、餌の用意もちやんと出來てゐた。餌は鰺、烏賊など、つまり共餌といふのである。ことに鰺鯖の脊みを帶びた魚肉をよしとする。

樂しみにして來た大瀬崎のはなに漕ぎつけ、大急ぎで針をおろした。例の地震の年以來、初めて釣糸を手にするので、心配と樂しみで、心は子供の樣になつてゐた。

因果と波が悪かつた。所謂ばしや〳〵波といふ奴で、妙に眼に反射し、延いて指先の感覺を鈍らせるといふのだ。深いところになると二十尋三十尋と糸をおろす。そしてほんの指先ひとつの感覺でその深さの底の魚のあたりを知らうとするのだから、このばしやばしや波を嫌ふ言葉を單なるまけおしみとするわけにも行かぬのである。

兎に角、あたりは極めてわるかつた。四人ともやゝあせり氣味で、場所を代へ〳〵、手んでに糸を操つてゐるのだが、誰のにも一向にあたらなかつた。たま〳〵あたつたと思つて勢ひこんで引きあげようとすると、針は魚ならぬ岩にかゝつてぷつりと糸が切れるのである。元來我等の釣らうとしてゐるのはその附近で呼んでゐる根魚の種類である。根とは磯の岩の意味で、即ち磯魚類を釣らうとしてゐるのだ。磯魚であるが故にすべて寄り合つた岩の蔭に棲んでゐる。その岩の蔭に針をおろして釣らうとするのだから、魚の代りに岩を釣る結果になるのも止むを得ぬのである。

『飛んだことになつた、おひるのおさかなにさしあげるものも無いといふわけで……』

主人は悉く恐縮して云つた。舟には一升罎はもとより鍋、七輪、刺身皿等の用意がしてあつて、釣つたものを早速料理しようといふわけであつた。

それでも十一時近くまでには、カサゴ、メバル、ハズ、ウミウナギ、クシロダイ、などゝいふのが一疋二疋と釣れて來た。其處で點かた晝飯の席となつた。クシロは刺身だ、カサゴは煮ろよ、お客さん濟みませんがお燗番をお願ひ申しますよ、といふ風に。

他の三人とも酒は先づ駄目であつた。いゝ氣になつて自分一人で飲んだのでひどく醉つてしまつた。飯が濟んで、めい〳〵また釣り始めたが、わたしは要慎せねばならなかつた。前にもまして岩ばかりを釣り始めたからだ。

が、舷に寄りかゝつて、波を眺め、眞近の岸山を仰ぐ氣持はまた難有いものであつた。海に幾つとなく浮いてゐる小鳥があつた。何だと訊くと、千鳥だといふ。なるほど、波にすれ〳〵にまつてゆくのを見れば千鳥であつた。また、山燕をもう一倍大きくした大きさで、更らにそれよりも輕快な、鋭い翼を持つた、うす白い海鳥がゐた。これは群をなさず、一羽づゝ二三ケ所でまつてゐた。隨分と高い中空を輪圓とまひながら、やがてまつさかさまに海に向つて落ちて來る。そしてまた直ちに中空さしてまひあがる。これは本當の名をわたしの方が知つてゐた。マミシロアジサシと云ふのだ。ひらり〳〵と身をかはしてまつてゐる身輕な姿にはまつたく光でも宿つてゐさうに見えた。

舟は時とすると水面から殆んど直角に聳え立つた斷崖の眞下に寄つてゐる事があつた。さういふ所に限つて海が深く、魚も大きいといふのである。斷崖には藤が眞盛りと咲いてゐた。また、何やらの若葉のなかにくれない深く山躑躅が咲いてゐた。それかと思ふとおもひもかけず眞柏の小さな老樹が岩の裂目に黒い枝葉を張つてゐた。そして其

此處らの岩はいちめんにしつとりと濕つてゐた。絲の樣な瀧となつて流れ落ちてゐるところもあつた。

アカギといふ大きな魚を釣つた位ゐで、午後の漁もあまり思はしくなかつた。それに潮時の關係もあつたであらう、笛吹の親子は釣をやめて、突きを始めた。何時かの間に、章魚か四疋、その他何やらを突けた。

ほど〳〵で、夕方早く引きあげた。親子をも呼んだが、遠慮して來ないので、昨夜と同じく高島君と二人、相向ひで膳についた。膳と同じく、アカギは刺身、クシロダイは酢のもの、カサゴ、メバルは、煮肴、斯うして並べて見るとなか〳〵賑かであつた。とても兩人で食べきれるものではなかつた。風呂を出てその膳に向ふころ、また夕立めいた雨が來た。裏窓を開いて向ふ其處の山の楠櫟の鮮やかな青やかな林のなかに混つて浮き出た樣になつてゐる漆の木、山桃の木の風雨にそよぐ姿はまつたく心を躍らせた。

「ありがたい雨だ、都合のいゝ時ばかり降つて呉れる。」

と云ひながら荒い音を立てゝ降つてゐる雨の明るさを眺めてわたしは喜んだ。そしてこの明るさは矢つ張り五月の、而して海の中に突き出てゐる岬の明るさだと思つた。

海の方を見ると、雨が強いので對岸の千本松原あたりは煙つて見えず、却つて愛鷹山のいたゞきが途方もなく高く見えてくつきりと翠色に仰がれた。その裏の富士は見えなかつた。愛鷹の中腹には深い白雲が凝つてをり、雲のなかから出たその山のスロープが明らかな線を引いてずつと東の方に延びてゐる、其處にはまた足柄山の頂がそれを受けて徐ろに東に高まつて行く、さうした間に醸し出された大きさ明るさもまた難有いものであつた。

いゝ氣持に兩人とも醉つた。そして低聲に唄などうたひ出した。笛吹の娘が不思議さうにそれを覗きに來たりした。

實に具合がいゝ。日本晴である。今朝は富士も少し青みを含んだ樣な眞白さで、海の向うの高空に聳えてゐた。

早朝の發動船でわたしは沼津に向つた。高島君はまた海岸の、崖の中腹の道を歩いて古宇へ歸つた。(五月七日)

滿蒙調査日記の一つ二つ

鳥居龍藏

私は滿洲と蒙古とには最も深い關係があつて、度々此處を探査して居る。その第一回には私は二十歳の若輩の頃、而かも未だ滿洲に汽車の出來ない明治二十八年から人類學・考古學の仕事に着手して居るのである。それから第二回には明治三十八年に奉天・吉林兩省に、第三回には明治四十三年に旅順—開原までの發掘、第四回には明治四十四年、吉林省に、第五回には大正元年奉天・吉林兩省に、調査を試みたが、その他朝鮮から這入つたことは度々あつた。

次に蒙古は明治三十八年に極東蒙古賓圖王・湛王等に入り、それから同三十九年から四十一年まで足かけ三ケ年間、東部蒙古に私は妻と共に幼兒幸子を伴なひさすらひの調査旅行をした。

以上の如く私は滿・蒙に對しては人類學上最も深い關係を有するもので、今も尙ほ研究を續けて居る。今回南滿洲鐵道會社の依囑によつて滿洲に行つたが、その際これまでの調べ殘りの所を探ぐらうと思つて仕事をしたのが、この探査であつた。今私は紙面の都合上、その中から或特種の記事を玆に掲げて見やう。

(一) ハルビンの露西亞學者

ハルビンで、九月四日から數日滯在中、私の最も面白くよい印象を殘したものは露西亞學者達の一團である。同集團は自然科學・人文科學等の學者が一所となつて滿洲を中心として研究をして居るもので、會名を 東省文物研究會 と稱するのである。この集團は會と云ふけれども、立派な研究室・大學組織であつて、これが各セクションに分れて居つて、立派な博物館さへも設けて居る。そして各セクションともに有益なる報告・論文が多數に出版せられて居る。

私がハルビンに到着するや、同會のセクレタリーのアウドースチエンコフ氏から博物館を見てもらいたい、そして當會學者各位が貴下を招待したいとの通知挨拶があつたから九月五日その博物館を訪問した。

博物館は二階建の家で、此處には滿洲の地質・鑛物・動植物・人類・土俗・古物から農・商等のものが陳列せられてあつて、これに一々地圖や圖畫で掲げられ觀覽者の便に供せられて居る。されば一度この館に這入つて、その陳列を觀るならば直ちに滿洲の智識を得らるゝ樣になるから頗る都合がよくなつて居る。

私の専門のものも陳列せられてあるが、その主なるものは先づ滿・漢の人の風俗模型や宗教上の器具がある。就中滿人の甲冑とか、弓箭をもつて居る模型の如きは最も有益である。喇嘛の佛像も數多く陳列して居る。更に滿洲に於ける各時代の民族分布地圖が支那の本から考案し掲げてあるのは、素人が滿洲の沿革や民族史を知るに最も便利である。これと共にハイラル・ジャライノール發見の石器・土器破片が少しばかりあり、更に金上京の古瓦・古錢から入面城の梵文經幢陀羅尼等がある。ウラル地方の發見金屬類も注意を要する。

茲に珍らしいのはジャライノールの砂の下二十尺の所から出た三個の鹿の角・骨である。この一個の鹿の骨は馴鹿よりも更に大きく、長さは六十二ミリメートルあつて、中央の所に深さ四ミリメートル・幅十三ミリメートルの溝狀の切り目が附いて居るが、これは人間が斯く爲したものに相違がない。この鹿の角はトルマチョフ氏から聞くと學名は Cervus elaphus であらうと云ふ。尚ほ一つは鹿の骨に孔をあけて石斧の如きものを差し込む様にして居る。長さは九〇ミリメートル・幅百ミリメートル、孔は長方形で、長さ二十五ミリメートル・幅十八ミリメートル。これも人間の使用したものである。その鹿も馴鹿よりも大きくトルマチョフ氏によると學名は Cervus megaceros であらうと云ふ。これ等の事實は歐羅巴の舊石器時代の器物に類似し、而かもそのマグダレニアン時代のものによく類似して居る。これ等は滿洲に舊石器時代の存在を認むる好材料の様に思はるゝが、尚ほ一段の考査が必要であらう。それ等の材料は東支鐵道マンチリア驛附近のジャライノール方面から偶然工夫の發掘したものであるから、同館のトルマチョフ氏の如きはその結論を容易に云はれない。這は學者として最も責任を重んずる人であると云はねばならぬ。

私は博物館の陳列品に一々注意して見ましたが、同會の學者諸君は其疑はしいもの、參考になるものに就て、熱心にその遠慮のない批評を求められたから私は知つて居る範圍に於てこれに答へました。そして同陳列の標本に就てスケッチなり、撮影なりは自由勝手にしてよろしいと云はれましたのは私の最もうれしく思つた所である。

私は一通の陳列室を見物してから、同館主任は私を別室に案内せられましたが、此處には會長はじめハルビンの主なる自然・人文の科學者が集まつて居られて私を主賓として茶菓の饗應があり種々學術上の談話を交換し、同會から出版せられた論文・報告類を悉く私に贈られました。この談話や出版によつて私は露西亞學者の人達がハルビンを中心としていかに滿洲の研究をして居るかと云ふことがわかつた。

この會で歷史――人類學部に於てどんな學者があつて、どんな仕事をしてゐるかを茲に一寸紹介して見たい。先づ考古學者としてはトルマチョフ氏がある。氏はもとウラル地方の大學に居られた人で、同地方の考古學上立派な論文がある。數年以來ハルビンに來られ專ら北滿洲の考古學上の研究をせられ、就中ハルビンの東、阿什河に在る金上京は大に研究せられたもので、この結果として同城に就

て二冊の論文を出して居る。氏はハルビンのみならずバイカル湖以東の極東露西亜の考古學者として頗る有數の人であらうと思ふ。次にチートフ氏がある。氏はもとイルクーツクの大學に居られた土俗學者で、近頃ハルビンに來られ專ら黒龍江土人のことに就て調査せられて居る。私は氏によつてイルクーツク方面の學者が現今どんな研究をして居るかを知ることが出來た。また氏から近頃出版同地方人類學・考古學の論文數冊の寄贈にあづかつた。尚ほ若い考古學者としてポノソフ氏がある。氏は今熱心に八面城の論文を起草中で、そのプランや採集品に就て私に相談せらるゝ所があつた。同會にはもとモスコウ大學で地理學・人類學を教へて居られたチエロウルコフスキー氏も居られる。アウドースチエンコフ氏は日本語に精しく日本の書籍も澤山に讀む、氏は尚若い學者であるが、前途多望の人である。

尚ほ玆にシユタルキン氏を紹介せねばならぬ。氏は歳とつた學者である、その元氣の盛んなることは到底及びもつかない。氏は支那語を自由に讀み支那の文獻學者として大切なる人である。而かも氏は支那の歷史・地理に對して一々卓說がある。氏の卓見家で且つ鋭い批評眼のあることは、日本の學者連が神の如く尊敬して居る彼の北京におるアンダーソン氏の赤ぬり土器の說の如きを一笑に附し、アンダーソン氏は少しも支那の書物が讀めない、また支那の歷史を知らない。この人の說を重々しく信ずるは歎かはしいなど云つて居る位である。氏の著述は中々多く、彼の『蒙古遊牧記』の中にウリヤンハイの記述なきことに就て論されたるが如きは、私の最も敬聽する所であつた。

現今のハルビンに於ける歷史——人類——考古等の露人學者は、先づ以上の人々が中心となつて居るのであつて、而かもいづれも親切・熱心である。これ等は我々日本學者の大に學ぶべき所であつて、以上の各位と面談し、互に知識を交換したことは私の今回の旅行中最も有益なる結果を得た大きなものであつた。

同十六日には同會の人々から依賴せられ、私は『日本の有史以前』の題で朝鮮・滿洲・西比利亞・蒙古・支那・南方諸島のそれ等を比較し講演をいたしました。當日はハルビンの斯學者や知識階級の人々のみ集まり來り、中に多くの女學生の靜かに聞いて居られたのは最も面白かつた。私の講演後、司會者のトルマチヨフ氏が私に對して感謝の意と日本學界とこの露西亜學者との間に學術的接觸の出來たのは極東に於ける斯學上大に喜ぶべきことであると云はれたのは、私は斯學の發展上大に祝賀するものである。私から見ればこの會合は最も紀念すべきものであると考へるのである。

(二) 金の上京

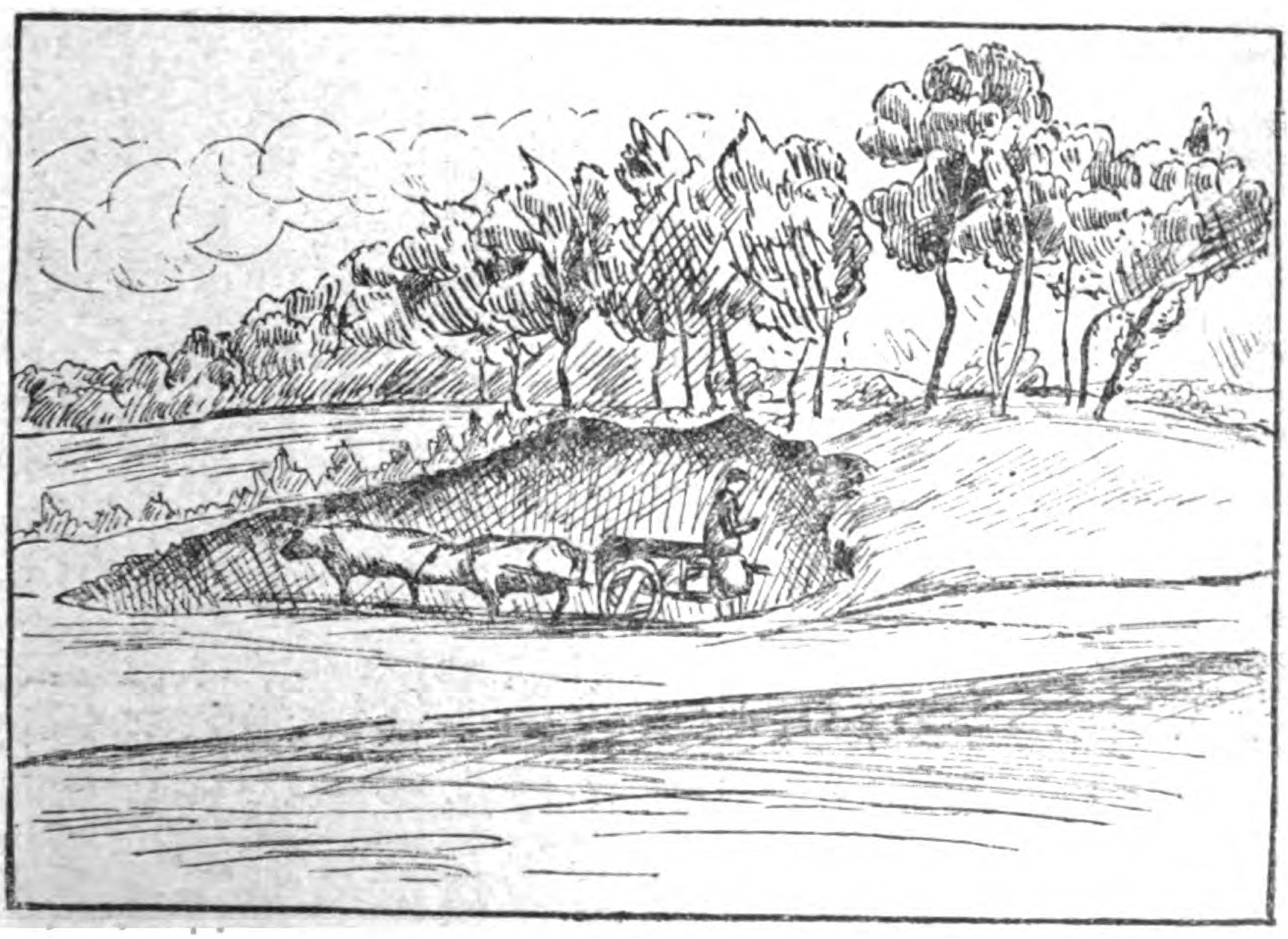
ツングース民族たる女眞(女直)は遼を滅亡さして金の王朝を滿洲に建てた、それが段々南に延びて遂に宋とも接觸し、而かも後には宋の皇帝等も捕虜となつて北滿洲に伴たはれ來たことすらあつた。以て彼等の勢力のいかに優盛であつたかは推知することが出來るであらう。

最初、金の興るや、その中心地たる上京は何處であつたかと云ふに、それは今日のハルピンの東、東支鐵道の阿什河驛の南である。此處に土城も存在し、その中に當時の遺物も殘つて居る。此處はかつて白鳥博士も探査せられ、またその際川上氏・三井物產の中山氏等も同城内の古鏡などを採集せられたのであつた。私は西比利亞・北滿を旅行したが、未だこの金上京を實踐しなかつたから今度こそは同地に行つて調べて見やうと考へたのである。

然るに私はハルビンに到着し露西亞學者に會した際、談たまたま不日金上京を探査することに及んだが、同研究家たるトルマチヨフ氏は私の爲めに案内しやうと申出されたから、私も大變都合がよいから、氏と同伴することゝなつた。そこで十五日の午後三時半の汽車で阿什河に向ふことゝし出發した。

同行はトルマチヨフ氏・セクレタリーのアウドースチエンコフ氏同行眞山孝治氏と島崎役治氏・ハルピン滿鐵公所關根正德氏・日露協會學校森重豐氏等である。

汽車は四時三十五分、阿什城驛に到着、一同下車しその夜は露人經營の製糖會社の厚意によつて一行は同社宿舍に宿泊することゝなつた。今夜會社々長・重役から一同馳走になり、あとで東京や名古屋等のラヂオの放送を聞いて東京の空を思ひ出させしめた。寢につく前、トルマチヨフ氏と種々斯學上の談話を交へ、殊に氏から、ウラル地方の骨器や手向塚の話を聞き愉快に寢についた。



阿什河に於ける金の上京

翌十八日は一行朝はやくから起き出て金の上京の土地に赴くことゝし一行三台の馬車で出發した。道路は昨夜の雨で惡くなり、馬車をやるに最もきたない。先づ阿城縣の東門から這入る。この縣はもと清の宣統元年に始めて置かれ、位置は阿什河畔に存在し城外より稍や高い所にある縣は塼城で取圍まれ中々繁昌の市街である。けれども市街は車馬の往來のために泥濘となり馬車の進むごとに泥水のシブキの飛ぶには閉口である。市街は各戸軒をならべ、諸品の賣買頗る盛大に見受られた。市街の軒先に金上京内から柱の礎やその他の石を運んで來て敷石にして居るのは實に奇觀である。その中に蓮花様のものを彫刻したのもあるのは極めて珍らしい。

いつしか市街から南門をぬけ出ると平原となり、しばらく行くと南方に金の古城壁が見える。かくして北門に到着し、それからその城内に這入ると、今は此處は一面に畑地となつて耕され諸所に點々農家が散存する。渤海の古城内は各所に宮殿や寺院や石礎などの跡が認めらるゝが、此處はそれと相違し殆んど全く土地は耕され以上の様なものを今や認めることが出來ない。僅かに遠くから望んで少し高くなつて居る所から其處に何か建物でもあつたかと云ふことを推知するに過ぎない。そして瓦なども渤海古城よりも散亂して居ない。

城内には今や丘狀的建物もなく、既によく耕されて地ならしされて居るのみならず、石と云ふ石は大概阿城市街に持ち運ばれ（聞く所によると明治四十年頃日本内地に、これ等の石が庭石として送られたものも多數あると云ふ）今や惜しいことだが殆んど一石礎すらも存在して居らない。唯だ僅かに石臼の破片などを認むるのみである。されは城内は實に極めて殺風景である。白鳥博士が當時發見せられた碑文も既に他に持ち去られて此處に存在して居らない。その當時夥多しく發掘せられた古錢も今は殆んど全く取りつくされ、今日は[illegible]一品だも手に入ることは不可能である。

けれども塼や瓦の破片は尙ほ土中から出る。古錢も出る。シヤマン教の銅製人形や裝飾品・鐵製食器・農具・刀劍類も出る。陶器の破片も出る。中に耶蘇教十字架のあるのは注意を要する。これ等は金代のその當時を物語る資料である。私は僅かではあるがこれ等の遺物を買ひ求めた。

金の上京は阿什河畔の高地に存在し、南北の二城からなつて居る。けれども北城の方が古く南城の方が新しい。私はトルマチョフ氏の注意によつて北城の方のみ調査したが、城壁は太陽に乾し固めた土塊で積み重ねてあるが、城門の所だけは燒いた塼で積んである。外部の城壁には諸所に凸所を設け、城外には大きな濠を堀つてある。城内には塔の跡もなく確然と宮殿や寺院の跡すら認めることは出來ない。唯だ稍や小高いと思はるゝ所に黄・綠の瓦の破片などの散在して居る土から此處が或高貴の人の居跡であつたかと考へらるゝのみである。

けれどもこの城内は明治四十年頃あたりから盛んに遺物を採集し、礎石を持ち運んだのから推定してもいかに金上京の當時は中々盛大であ

つたことが思はれ、金朝時の文獻や後の此處を訪れた人の記事などと比較してそれを一層裏書きするものである。

城內でよく注意すると陶製品で倚は殘つて居るのは稀であるが、それと一對の瓦製作の際使用した瓦範型がある。これ等から見ると當時盛んに瓦を製作して居つたことが知られる。

此處の城內から出る瓦は渤海土城から出る瓦と全く相違して居る。これ等は大に注意すべきことゝ思はれる。

トルマチヨフ氏は氏の論文のプランと一々對照せられた。私は氏に案內せられ包含層の跡や塼瓦の多くある所や、その他各所に案內せられ私は實に有益なる研究をした。氏が數年で研究せられた事項を僅かに一日に知ることが出來た。這は氏に向て深く謝する所である。

一行が此處彼處を踏査して居る際に俄かに雨が降つて來た。一行は車をはやめて、或小廟の傍の農家に入つて一寸雨をしのいだ。この小廟の壁の塼は皆金時代のもので積み重ねて居るが、その中に一枚トルマチヨフ氏の注意によつて文字一字を刻して居るものを見た。

私はあくまで調べ廻り、終に馬車で西門を出で、トルマチヨフ氏が此處から數町離れた所に土壘らしいものゝあるを指して、あれは古墳ではあるまいかと尋ねられたから一行とともに其處に行つて見た。いかにも平地の上に出來て居る人造の圓形の塚山であつて古墳であることは明かである。これに登つて見ると或時は此處を砦としたらしく溝もある。けれどもこれは後に使用したものであつて、古くは古墳である。また此處に緑色の瓦や紋様のある塼などが存在して居るから、もとは寺院でもあつた所であらうと思はれる。尤もこの寺院も古墳の上に設けたもので、これは第二期のものであり、塚を築つた際の使用は、これはまた第三期であらう。そして第二期の時が金代の様で、古墳は金以前のもの、靺鞨・渤海時代の物であるらしい。斯くの如き古墳は北の方にも一つある。

一行は西門に沿うて進み、途中で「蒙古墓」と稱するほりぬき古墳を調べ、再び阿城の市街を通過し、夕方ウラヂオストツクから來る汽車に乘じ此處を出發しハルビン驛で鳥山・鳥崎兩氏の外の諸君と別れ、私は兩氏とともに東支鐵道で更に齊々哈爾に向つて出發した。見送として滿鐵公所古澤幸吉氏・坂本直道氏が來られた。一行中の石田吟松氏は仕事の都合上ハルビンに歸ることになつた。

（三）齊々哈爾から洮南まで

汽車はハルビンを出たが、忽ち燈火を消して暗くして進んだ。翌十九日、午前二時半、昂々溪驛に到着したから一行下車し、それから時間が倚ほ早いから日本旅館に投じたが、宿の主人井杉氏は中々話づきで二時間ばかりも愉快に談話した。氏は蒙古にも行かれ當地では物識りの方である。午後八時四洮鐵道を起き出で、私は鳥山・鳥崎兩氏と自動車で黑龍江省の省城齊々哈爾に向て進んだ。途中數里は砂地であつて、ネヂアヤメなどが生えて居るばかりで實に淋しい土地で、蒙古の

遊牧地であると云ふ、ことが解せらるゝ。途中滿洲人(ダウル人も)の二三村落の土俗などを觀察した。時に彼等の葬式に際會しその風俗などを撮影した。これ等は黑龍江省に於ける八旗駐防の旗人の人々である。

午前十一時頃齊々哈爾に到着し、先づ滿鐵公所や日本領事館を訪ひ、早川正雄氏の案内で自動車で市街を見物し、それより滿洲人の生活狀態を見やうと思つて北門を出で八淸里の三家子にいたり彼等を調査した。此處は滿洲人の古風が殘存しその家屋や殿堂の如き昔をしのぶ材料であつて、屋根は草で葺き、これに千木を置き、門には鳥居形の門を設けて居る。この村落で石斧一個を採集した。此處の位置は嫩江の河畔の小高い所にあるから昔から人の住んで居つた所である。

私は此處の調査も終つたから夕方自動車を走らして昂々溪驛前の日本人旅舍に歸りその夜は此處で一泊したが、寢る前に平野氏の採集品を見た。

二十日、私は朝はやく井杉氏の案内で自動車に乘り近頃出來た昂々溪驛に走つた、此處は宿から二里餘もある所で蒙古の廣い土地に唯一つ驛があるのみである、齊々哈爾附近の蒙古は札賚特旗に屬する。

此處から洮南にまで敷設する鐵道は極く近く開通を見るに至つたもので、これ等鐵道線の敷かれた土地は主として札賚特旗(鎭東以東)・扎薩克圖(鎭東より洮南)等の蒙古に屬する。これ等の土地は蒙古であるが、近年支那人が續々と入り來り、支那政府また政略上より各所に縣を設け、今や支―蒙雜合の土地となつた。そしてこの兩民族は、齊齊哈爾の方からすると、その鐵道線の左方が支那人の住地で、その右方が蒙古人の住地である樣である。

土地は沙土また沙土交りで、雜草が生えもと蒙古人の遊牧する牧草地である。白い曹達さへも存在して居る。此處を馬に乘つた蒙古人や羊・馬・牛の群を追ふて居る彼等を見るのは頗る奇觀である。けれども近頃この地が開耕せられ粟・高粱等の種がつけられて居るのを見る。この狀態で經過すればこの地方は今しばらくにして殆ど全くの農耕地と變化して仕舞ふであらう。

新に移住して來た支那人は專ら山東省のもので、その家屋から一切山東省風である。蒙古人は奧地蒙古に見るが如き土俗と相違し支那式の家屋に住し土の土壁をめぐらして居る、その衣服頭髮の如き滿洲人風であるけれどもその或者は支那風をして居る。その言語の如きも蒙古語を話して居るのは固よりであるが、その多くはまた支那語が上手であるから、その風俗・言語の上から其人が一寸見ると、それが蒙古人であるか支那人であるかを確かむることは一寸六ケ敷い。蒙古人は蒙古王府の管下に屬するけれども、この邊各所に支那の縣が出來たから中華民國の法令上またそれに從はねばならぬのである。

支那人は各所に集合し、其處に縣が出來て居る關係上將來そこを中心として大に發達する譯である。現にその泰來縣の如きは二萬九千三百餘の支那人を有し、今後更に益々發展する樣である。

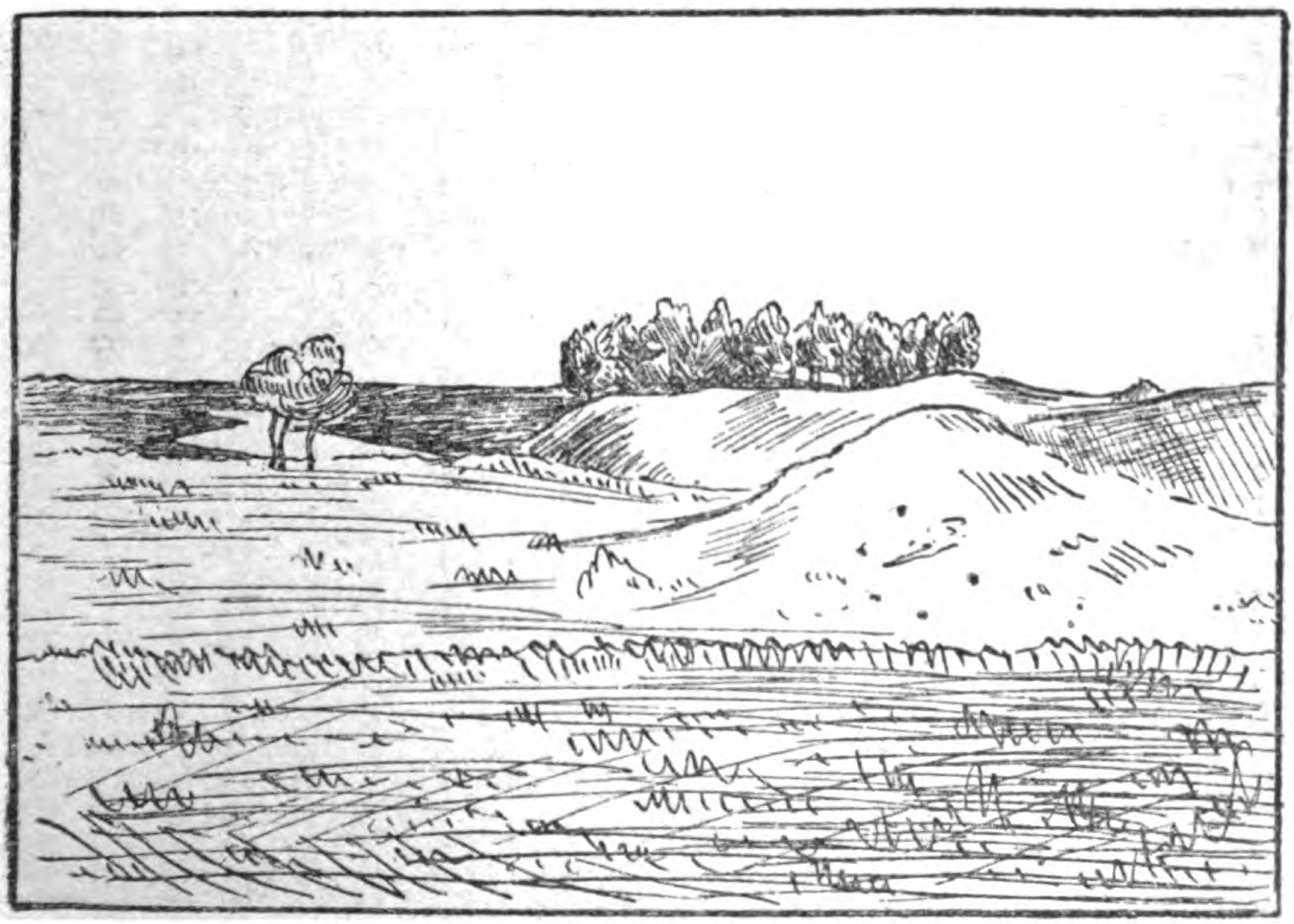
これ等の鐵道沿道附近の光景は、さながら蒙古のパノラマの如く周圍の狀況は實に廣漠たる平野で、人家極めて稀れで、土地は沙土交りか全沙地で丈の短かい草が生え、樹木がない。柳樹の如きは洮南に接する所に從つて丘陵や村落にこれを見るのみである。此處に粟・高粱などの畑があるのは寧ろ珍らしい位である。地上に白い曹達を露出して居るのが見える。時として水溜り水澤の所があると此處に、鴈鳥の來て居るのは頗る面白い。この草地に羊の群・牛馬の群の遊んで居るのは未だ何處かに蒙古らしい所があつてうれしい。

汽車は大興站を出て途中に嫩江の本流を渡つて江橋站につく、この嫩江は此處から伯都訥に流れ他の水を合し松花江に合するのであつて。この河は最も注目すべきものである。小船も水上に浮べて往來して居る。

嫩江を渡てしばらく行くと、泰來に到着する。驛より數町で縣に達することが出來るが、縣はひくい土地にあつて水澤を傍にひかへて居る。市街は中々に盛んであつて、汽車の到着ごとに二十餘の馬車が客を待つて居る位で、蒙古の遊牧地が斯くの如くなつたかと實に驚く程である。

汽車は洮南に近づくに從ひ、土地は肥えて來、人家も多くなり、家の附近には樹木もあり、畑に野菜を多く植ゑて居るのを見る。この光景は自然と人文との變化の著しいのを殊に感ずるのである。

洮南に接近する所で洮兒河を渡る。この河は洮南の前を流れて嫩江



洮南附近に於ける古城

に合するもので歴史的に名高い河であつてこれも人文史上頗る注意に價するものである。

汽車は午後五時洮南驛に到着、滿鐵公所の森脇國男氏は馬車をもつて一行を迎へに來られたから同馬車に乘つて滿鐵公所に投じた。今夜公所長森田熊三・森脇國男諸氏と夜おそくまで談話し、私は靜かな雨聲を聞いて寢についた。

抑も洮南の市街は洮兒河畔に位置し、土質は砂土まじりで、常に車馬が往來するから黃塵萬丈できたない。市街は土壁をもつて取り圍んで居る。今日は人口四萬三千百余人・戸數七千三十を有する極盛な商業地であるが、今から二十四五年以前は蒙古人の小さな村落があつた所で、當時このあたりをシヤチガイモトと云つて居つた。這は蒙古名でシヤチガイとは喜鵲のことで、モトとは木のことである。即ち一本の樹木に喜鵲が集まつて來る所からこの名が附いたのであつて、これは恰かも日本の烏の森とか鵜の森とか云ふものと同一である。かゝる所が忽ちにして今日の如くなつたのは人爲と自然とから出來た賜であると云はねばならぬ。

今日は此處の人口（支那人）は益々增加するのみで、我が滿鐵公所も森田氏等の熱心によつて設けられて居る。鐵道事務所にも幾多の日本人が職務に從事し勉強して居らるゝ。蒙古人は今やこの地を退いて他に住居する樣になつた。鐵道線路は此處を中心として各所からひかるゝから洮南は最も大切なる土地となつて將來は益々蒙・滿の特産は此處から多く集散せらるゝであらう。

（四）古城の探査

洮南の東に遼・金時代の古城がある。私はこれを探査しやうと九月二十一日午前九時同古城に向て馬車で出發した。同行は鎮山・島崎兩氏と滿鐵公所森脇・加藤・蒙古人渓恩慶三氏である。先づ東門を出で東に向てきたない黃塵の間を行く、八滿里許でウンジルガンジヨーと云ふ村に來た。此處は土で出來た家で一筋町である。この村はもとその名の如く蒙古人の住地であつたが、近頃は支那人が多く入り來り、今では蒙古人の家屋は僅かに一軒しかない。此處から凡そ十滿里許進んで洮兒河に達した。

此處の洮兒河は河幅はせまく、河底も淺く、水も少なくなつて居る。これは近頃その上の方で稻田が出來てこの河から水を取るためださうである。蒙古人は網をもつて魚をとつて居る。小船も二三艘つながれてある。此處には大きい鯉や鮒などの魚類も多くある。洮兒河は蒙古人はトリンゴルと稱する。

一行は馬車でこの河を渡つたが、前岸にはフライネル村が在る。此處は蒙古人の村落で、フライネルと云ふのは「瓢箪村」と云ふ意味。現今は蒙古人の家屋は十五六軒で、支那人の家屋は五軒許ある。いづれも同一形狀の家で、各戸とも猛烈な蒙古犬を飼つて居る。私は此處で彼等の土俗などを調べた。

この時、洮南鉄道事務所長花岡吉氏に私を待つて居られ、それからともに調査に従事した、氏はよく私の調査について補助せられたのを感謝する。

この瓢簞村に接近して古城が存在して居る。この古城は蒙古人はこれをタイルホトと云ふが、即ち「タイル人の城」の意味を有する。興安嶺以東の蒙古人は古城・古址を見れば一様にタイル人のものとして居る。タイル人とは高麗人を意味して居る。けれどもこれは固より採るに足らないことで、畢竟彼等の無智を語るもので、彼等と関係ある遼人の手になつたものとは既に知られなくなつて居る。

此處の古城は太陽に乾かした土塊を積んで出來た土城で高さは二十五メートル許。同城の南壁の中部と西壁の全部は正しく洮兒河に接して築かれて居るが、その西側の北によつた部分は河水の爲めに崩壊せられて居る。北壁東壁と南壁の中部と東部分の外には濠が堀られて居つて、昔は其處へ洮兒河の河水をひき入れた様に思はるゝ跡がある。城壁は外面に諸所に出張つて居る所があり、城門は各所に設けられ、しかもこれが二重になつて居る所も見受けられる。

城内はすでに畑となつて耕されて居るが、尚ほ西壁の北によつた所は、小高い丘があつて、其處には建物の跡らしいものもあり、瓦や陶器の破片も散亂し、火事に會つて焼かれた様なものもある。私は熱心に一行の諸君とともに此處を調査して多少の採集品もあつた。そして私は此處からの皿の破片などを發見した。

城内を出來るだけ調査し瓦・塼・陶器・古銭その他のものを採集し、またこの村の蒙古人から古城内から出た色々のものを買ひ求めた。此處から出るもので最も面白いものは瓦である。殊に鬼瓦は最も面白い。鬼瓦は凡そ新・古の二種があつて、これ等は各々よく時代相を明にして居る。その新しい方は金のもので、古い方は遼のものである。そして古い方が尤もよく出來て居つて唐代の面影を存して居る。次に面白いものは、此處に金の上京で得たものと同一のシヤマン教の銅製人形がある。蒙古人はこれをオンイトと稱して居る。これとまた金屬製の十字架も出る。これは元時代のものとすれば、すでにその事蹟があるが、これを遼・金時代のものとすればネストリアン教との關係が認めらるゝ様になつて來る。これと同一のものは金上京からも出て居る。これに就ては私は多少意見を有するものである。

要するにこの古城はもと遼時代のものであつて、後に金時代に至つて、此處を更に用ひたものである。

一體遼の中心地は何處であつたかと云ふに、古い時は東蒙古の興安嶺を背景とし、遼河の源たるシラムレン河畔の巴林であつて、その上京の城は今も尚ほ殘つて居る。更にその附近チヤガンムレン河上流には行宮の址もあり、その他東蒙古の各地には同時代の古城が存在して居る。今私の記して居る洮南の古城もまたその一つである。このあたりから遼河一帯満洲に存在するそれもまた遼時代のものである。加之、彼の[illegible]・經幢等の古塔もまた遼時代寺院の跡である。

遼の上京は乾塼で出來た土城でその中に宮殿・寺院の趾があり、就中城内に大きな觀音菩薩の石像が立つて居る。尙ほ臣下の居所も殘つて居る。城外には塔も立つて居る。宮殿や寺院の趾・塔も殘つて居る。遼は自ら皇帝と稱しただけあつて城や城内建物の規模極めて大きく、瓦・塼の如き綠色・黃色のものが多く存在して居るのである。

行宮は等しく巴林のチヤガンムレン河（シラムレン河に注ぐ）の上流にあつて、此處も土塼で周圍を築き、城内には皇帝の居られた所や、寺院の趾も殘つて居る。碑文の斷片もある。碑文蓋石の彫刻で尙ほ見るべきものもある。この位置は興安嶺にかゝつた山中にあるを以て、山莊としても極めて適當な所で、當時は蓋し淸朝の熱河の行宮に於けると同一であつたであらう。

中京は老哈河の支流、朝陽の東・喀喇沁蒙古にあつて、土城もあれば、その城外に塼塔も立つて居る。城内はすでに耕作せられて居るけれども、尙ほ古瓦・古陶器・古錢等を採集することが出來る。そしてその附近に同時代の墳墓や石人・石虎等が殘つて居る。

以上の三遺趾は位置が蒙古人居住の土地に存在するから遺物は尙ほ存在し、今日からよく當時の歷史やその文化を窺ふことが出來て、いかに遼時代の盛大であつたかを推知することが出來る。

（五）洮南から鄭家屯まで

九月二十二日、洮南方面の調査が一通り終つたから、今日は此處を出で鄭家屯に行かうと思つて、午前九時洮南驛を汽車で發した。森脇・住吉兩氏は停車場に來られて見送られた。

今日の汽車の線路も等しく蒙古の土地である。沿道の光景は昨日と變化なく、草地は蒙古人や新來の支那人によつて高粱・粟等を植ゑられて居るのを見る。此の間に牛・馬・羊の群が遊牧して居るのも面白い。土地は等しく沙土交りであつて、諸所曹達が白く露出して居るのを見る。けれども支那人は各所に縣を設け、今やその縣を中心として大に發展せんとして居る。

先づ洮南驛を發してから黑水驛に來たが、この間に高粱に烏が多く集まつてその實を喰つて居るのは蒙古地の變化して行く一新現象として珍らしい。牧者が乘馬で馬を追つて行く有樣を見るのもまた蒙古らしい所がある。

雙廟・鴻興・開通等に來たが、これ等の土地は曹達交で牧畜の草があり、畑地があり、その間に山東式のカマボコ型の家を點々見受くるばかりである。時に珍らしくも小森らしい所もある。小森の傍には小村がある。

以上の土地は扎薩克圖蒙古であるが、邊昭に來ると、此處は達爾罕蒙古と兩郭爾羅斯蒙古の三旗の境であつて、汽車はこれから專ら達爾罕蒙古の土地に這入つて行くことゝなる。邊昭あたりから始めて地上に楡の樣な小樹の生えて居るのを見、またひくい丘陵が發達して來た。太平川あたりに達した時に小雨が降り出し、低い低い所に淡く霞

の間か飛んで行くのを見るのは何だかさみしい北方らしい氣持がする。關帝・金山を通過し、三林に來たが、驛の附近に四五十軒の家か散在し、中に二三の大きな商店も見える。途中には草地があり畑地には栗、高粱、トウモロコシ、豆などがある。茂林には戸數か多く市街を作り紅色の商家の看板も見える。沿道に點々村落があつて村落には樹木がある。ひくい丘陵があつて森の様なものも見える。このあたり著しく草の色が黄色を呈し綠と相和して野邊は一種美しい色を帶びて來た。その中に稀にアザミの花の咲いて居るのを見るのもまた一段の興味である。

前面には驛の附近に戸數五六十を見受けたが、此處を出てから右方に遠く富士形の丘陵を望む。これは玻璃山であつて平野の中に獨り突出して居るものである。斯くの如き小山は本日久しぶりに始めて見たのである。途中草間に鬼アザミ、野菊の咲いて居るのは殊にうれしい。臥虎屯に來ると玻璃山は一層よく望まるゝが、この山の形狀は饅頭形の小山の一方にひくい土手の様な丘陵が延長し、爲めに銚子形・柄鏡形を呈して居る。

臥虎屯からは土地が非常に肥えて居つて、農村や樹木が多く見え出し野菜畑もあつて、何だか故の農村らしい氣持になつて來、土地の形勢も活氣づいて來るが、これは即ち鄭家屯の近づいたもので、斯くして午後二時汽車は鄭家屯驛に到着した。早速滿鐵公所長小川清氏の出迎を受け鄭家屯ホテルに投宿したが、今夜は領事中野高一・小川氏などと會食を共にしこの地方のことを語り合つた。

鄭家屯は遼源と稱しその縣の所在地である。位置は遼河の右岸に位在し、達爾罕蒙古である、土質は沙土交りの沖積土で、昔は水澤の地であつたであらう。もと此處は蒙古人のみの一小居住地であつたが清の同治年間の始めに支那人の移住を見、それから今日の狀態となつたのである。位置が滿・蒙に關係して居る土地であるから附近の農産物・毛皮や商品等は自然に此處に集散し、商業上頗る盛大な所である。近時はその勢力の幾分は洮南に取られた様な傾はないでもないが、それでも尚ほ此處は盛んで、將來も東蒙古開發とゝもに注目すべき所である。滿鐵公所の調査によると、人口は約六萬人位で、それは悉く支那人で、日本人は此處に百七十六人居住する由である。

(六) 鄭家屯からパインタラ(通遼)まで

二十六日、今日は鄭家屯からパインタラまで行くことゝし、先づ汽車が出るまで、蒙古研究家たる菊竹實藏氏を小川氏の案内で訪問した。氏は不在であつたが留守居の人々によつて、その採集品などを一覧することが出來た。氏はこの邊に於ける稀れに見る研究家で、氏の不在で會談することの出來なかつたは殘念であつた。汽車は午前九時餘、此處を出た。見送として小川氏は來られ、また幸にもパインタラ滿鐵出張所長の勢多章康氏が殊に同行せられたのは最も幸である。この鐵道線は線路の北方を流るゝ遼河と殆んど平

行して居つて、地質は沙土からなり諸所に沙丘すらも認めらるゝ、これ蒙古人の所謂マンハテである。

鄭家屯の次の驛は白市で、此處までは畑もあるが、これから西に行くに從ひ耕作物はなく單に沙土の地となり、これが大林まで延長するのである。これは開放地と未開放地との關係を示すものである。開放地と云ふのは蒙古王から支那人の開放を許可された所で、未開放地と云ふのは、蒙古人のみの遊牧地で開放地の未だ許されない所である。これ等二つの區別は土俗學的に頗る興味あるもので、卽ち開放地は支那人によつて農耕をして居る狀態が示され、また未開放地は蒙古人によつて牛・馬を遊牧して居る有樣が示されて居るのである。

以上の如くであるから白市から大林までの間は、明かに蒙古人の地たることを明かに示して居るが、大林に來り、それより進むと、再び農耕地となり、次の錢家店に來ると支那人の農業地としての面目を示して居る。かくして汽車は午後一時十八分にパインタラ驛に到着したが、私は勢多氏に馬車で一行とともに案内せられ市内を見物し、更に喇嘛のオボのある丘陵にのぼり、これを撮影したり、また此處から市街や、この邊一帶の地形を展望した。此處からその四方を眺めると平坦な廣々漠々たるはて限りのない土地で、いかに蒙古地帶の廣大なるに驚かされるのである。そしてこの小丘はこのあたりで最も高い所であつて、古くから此處にオボを設けたものである。今や當市街は一人の蒙古人の居住するものはないが、唯だこのオボのみは最後の殘り物であつて、よく彼等の記念とすべきものである。

オボの丘陵を下り更に勢多氏の案内によつて市街を見物した。一體パインタラの市街は民國元年と同六年の二回に蒙古王から支那人に開放せられたもので、翌七年には此處に通遼縣が出來た。十年には鐵道が開通せられたから一層活氣を呈して來たのである。今やさきに蒙古に鐵道が延長せられんとして居るから、此處は將來商業上、其他に於て大切なる所となるであらう。現今の人口は支那人は先づ三萬人位で、日本人は三十四人居住する。パインタラは農作物や家畜・駱毛・皮骨・甘草等が取引せられ、他から這入つて來る日用品も中々多い。殊に商品として蒙古人向きのそれは最も盛であつて、その專門の店さへある。蒙古人も市街を散步往來して居る狀態は極めて面白い。

私は勢多氏の案内で達爾罕蒙古の莫林廟の別居で蒙古人たる所謂活佛に會見した。この別居は表面蒙古らしい建築をなし、それに西藏蒙古の文字を書いて居る。私は活佛と不完全な蒙古語で會談し、明日莫林廟に行くことをはなし、その紹介書をもらふことゝした。

今夜は勢多氏から一行の饗應を受け、當地の富田勇治氏をはじめ、濱口・松岡兩氏も來られともに滿・蒙に就て盛んに話し合つたのは頗る愉快であつた。

（七）莫林廟

二十四日。一行は午前七時莫林廟に向て馬車で出發した。富田勇治

氏は殊に私を案內せらるゝこととなつた。道に氏に向て殺到する所である。活佛からは蒙古人の馬夯を一名護衛としてつけてくれた。

先づ二十町許行くと遼河に達する。此處を渡船で渡つて行くと、支那人の一小農村や高粱畑や粟畑・トウモロコシ畑がある。馬車はその作物の間の道を行く。同行の貫山氏の話によると、このあたりは七八年以前までは無人の土地であつたが、今日は支那人が移り來り斯く作物や農家を見る樣になつたのは今昔の感にたへないと歎息せられた。兎に角かくして蒙古の土地は支那人によつて段々開耕せられて行くのである。

支那人の家には柵があり垣根に朝顏が咲いて居り、また人家の傍にはエゴマ・ネギ・ジヤガイモ・トウガラシ・白菜などを植ゑて居る。道は頗る平坦で等しく高粱・粟・トウモロコシなどの畑の道を左右に點々農村を見て進んで行くが、畑作の中に諸所蒙古人の好んで食するモンゴル・アムを作つて居るのは最もなつかしい。

斯くして三家子・胡家窩子・車力發等を通過したが、このあたりから土地がゆるやかな丘陵となり、これが忽ち廟に達せんとする所からは忽ち畑地がなくなり、蒙古的草地となり、その中にネヂアヤメが諸所に繁茂して居るのは面白い。これは五六月になると紫色の花が咲き競ひ蒙古野を美しくするのである。また此處でナデシコ・ヒエン草などの草花を採集した。小さな水溜もあつて、雁の集まり來り、一行を見て飛び散ずるのも奇觀である。また此處に牛・馬の群のノソノソ遊んで居るのも蒙古ならしい。西方には多分このあたりは大きな水澤となるであらう。

以上の草地を通過すると、大きな土壁のある所に來る。此處は土で長方形の城壁の樣な土壁を作り、(長さ十六町・幅六町位)その中に人家を設けたもので、その人家は十五六軒あつて、蒙古人も支那人も住まつて居る。此處は莫林廟の所有地でこの土壁內に家屋を充滿せしめ繁榮せしめんとして居るのである。一體北方はいづれも人烟稀れでさみしいから古來北人は斯くの如き手段をとつて人を招集せしめたものである。以上の土壁を通りぬけると、直ちに莫林廟の喇嘛廟に到着した。時に午後十二時過であつた。パインタラから此處まで六十滿里(日本の六里位)である。

廟に着して、活佛から紹介せられた書面を差出すと、係の僧侶は一行を別室に案內してくれて、それから支那風の食事を饗應せられた。終て私は廟の此處や彼處を見物し、或は高い廟の屋根の上に登つて此處から眺望したが、廟は蒙古の平野の中に建てられてあるだけに、周圍は中々廣く而かも西南方面は沙漠が延長し何物をも認めないのである。

抑もこの喇嘛廟は東蒙平蒙古としても、その附近の蒙古各旗としても最も大きな寺院であつて活佛の存在し、僧侶は一千人許（今日は六七百人位）ある。この廟は西藏式の多く加味せられた建築であるが、活佛の居所や、各僧侶の居所は支那風からなつて居る。佛殿は主とし

て前廟と後廟となつて居つて、前廟と云ふのは勅を寺に賜うて集寧寺と號し乾隆年間に建てられ、（現今の鐵銘に同治元年とある）廟は等しく勅を寺に賜うて廣衍寺と號し嘉慶年間に建てられたものである。各佛菩薩等の像を安置する。その外小さな廟宇は附近に散在し、寺院内は頗る廣大で、それに周圍に低く土屛を圍らして居る。寺院の周圍には半肉彫の諸佛菩薩が各所に安置せられ、更に寺院の土屛外に各方面にオボが設けられて居る。この莫林廟は古くは順治年間に建立せられたもので、極東蒙古として最も有名であつた。

私は寺院内の喇嘛僧に接し蒙古語で話しかけしばらく會談をした。小坊主の支那語を知らず、專ぱら蒙古語のみで話すのは最も愉快である。彼等によつて大に知る所があつた。

寺院内に鐵製で六個の把手の附いてる釜を見たが、蒙古人はこれを鐵釜または古釜と稱して居る、これは西方六蒲果沙丘の中から掘り出したもので餘程古いものであると云つて居るが、これは遼金時代のものである。

私は寺院内を見物し、西の門を出で沙漠の沙丘上に設けられたオボの所に行つたが、此處は蒙古人がマンハチと云ふだけあつて、全くの沙漠となり、地形は明かに東ゴビの沙漠の連續地たることを示して居る。このマンハチを出で寺院内に歸つて來たが、日ははや地平線下に沒せんとして、夕日は銅色を呈し蒙古の廣い土地を照らして居るのを見るのは、實に何とも云へない壯嚴なる光景だつた。

夕食には殊に蒙古式食事を請求したから、純蒙古風のホロクスンパの御馳走を出してくれた。私は宮田氏と十二時頃まで話し續け、尚ほおそく寢につくことが出來た。

二十五日。多くの朝鳥の聲に早く眼さめたが、太陽はあかね色をしてすでに東天に輝き、無數の鳥はこの光をさゝ喜べる様に楡の樹に群れ集つて鳴いて居るのは恰かも旭鳥の繪圖を見る様である。

一行は蒙古式にて朝食し更に寺院の內外を見廻り、午前七時半喇嘛僧にいとまを告げ馬車にて此處を出た。道は昨日來た所を通過して行く。途中十數台の牛車に蒙古人男女が乘り來るに出會したのは、實に一幅の繪畵であつた。かくして遼河の岸に達したが昨夜の雨で水勢は急となり河幅は僅かに二十間位であるが、漸くにして渡船で前岸に達した。此處に多くの人・馬・車の河を渡らんとて集合して居るのは、このあたりならでは見えないものであらう。

それから馬車を急がせて午後二時頃パインタラに歸着し、少しの用務をすまして、午後三時四分に汽車で此處を出發した。勢多氏その他の各位は見送つてくれた。斯くして午後二時半頃、再び鄭家屯に到着し、鄭家屯ホテルに投宿した。

（八）オボ山麓の遺跡

二十六日。昨夜はよく寢たから今日は元氣ももとの如く回復した。午前七時起き出で洗面などしたため、九時頃先日訪問した劉[illegible]氏を訪

ひ二三の採集品を撮影させてもらひ、それから滿鐵公所の高野宗太郎氏と同伴し、一行とともに西方六滿里許のオボ山に向つて進んだ。

オボ山は起伏せる沙漠地帶の中に獨り存在する圓錐形の小山である。此處の地形はオボ山（岩石はバザルト）を後に控えその下に台地の出來て居るもので、この台地に凸凹があつて、凹んだ所に石器時代の遺物が存在して居る。想ふに當時の民衆は沙丘の凹んだ所に住んで居つたものでかゝる住居は昔は此處に尙ほ多數に存在して居つたらしい。そして後の富士形オボ山はこれ等を防禦するチヤシ（保塁）であつたであらう。

これ等の遺跡には石器・土器等も存在し、その石斧の如きは此處にある岩石バザルトを材料として使用して居る。その他の石器も等しく原料はバザルトである。然るに石鏃は瑪瑙で作つて居る。土器は素燒でその形狀・紋樣等遼河の上源地のシラムレン河畔のものとよく似て居る。これ等の事實から見ると石器時代たる有史以前の當時、彼此互に交通往來して居つたことがよくわかる。

この場所は更にその後遼、金あたりまでも用ひたものらしく、塼や陶器の破片も殘つて居り、更に鍛冶をしたものと見え、その鐵クソまでも存在する。遼時代にはこれ等の事實で彼等の此處を居住としたことが推知せられる。殊にこの沙丘の臺地をよく注意すると、臺地の周圍は著しく自然の城壁の如き形狀を呈して居るが、これに諸所少しく人爲を施すと立派な城壁となる。さうすると或意味からすると遼時代前後の城と云ふことが出來る。由來鄭家屯には城壁のないのは不可思議に思つて居つたが、此處で充分その補ひが出來る様である。

オボ山はバルザルト岩石の噴出せるもので、臺地はまたそれの聯か突起した上に土沙がかぶり（その下に固より幾多の小斛はあるが）一種面白い地形を呈して居るのである。そしてこのオボ山は達爾罕蒙古と、巴林蒙古との境界となつて居るので即ちオボ山を中心として、兩旗が分れて居るのである。

更にオボ山及びその山麓の城壁的地形は、稍や高い位置にあるが、一度此處を出ると忽ち土地はひくゝなつて來る。そしてこれが鄭家屯まで續いて居るから、昔はこれ等低地は水澤か湖沼の跡であつたと思はれる。當時人間の住居地としてはオボ山一帶の高地が最も適當して居るのであつて、近は此處に各時代の遺跡・遺物が立派に存在して居るので推知することが出來る。斯く記して來ると此處の遺跡は人類學、考古學上最も貴重なる場所であると云はねばならぬ。そしてオボ山麓の有史以前の遺物は滿洲のそれよりも蒙古の阿魯科爾沁方面・シラムレン河畔のものと頗るよく類似して居る。

此處の調査を終つて再び鄭家屯に歸つて來た。

漱石の思ひ出（九）

夏目鏡子述
松岡譲筆録

四十　病床日記

この二十四日から、私が側にあつた夏目の日記の尻につけた其日其日の心おぼえがございますから、こゝにのせませう。当時の大体の輪廓がわかつて好都合ですから。

二十三日迄は夏目が書いて居ります。この年の六月六日からずつと毎日書き続けておいたものです。二十三日の夏目の日記から始めます。

八月二十三日

快晴。女郎花、野菊、男郎花、薄、萩、桔梗、紫の玉（藤の如きもの）

○おくび生臭し、猶出血するものと見ゆ。便は無類血色あり

○高田早苗氏の名刺を森田持参。坂元に此方の名刺を依頼。高田氏謡をうたひ初む。

八月二十四日

朝ヨリ顔色悪シ　杉本副院長午後四時大仁着ニテ来ル　診察ノ後夜八時急ニ吐血　五百カラムト云フ、ノウヒンケツヲオコシ一時人事不生　カンフル注射十五、食エン注射ニテヤヽ生気ツク　皆朝迄モタム者ト思フ（筆者註。こゝまで萬年筆、以下終り迄鉛筆にて書きつけあり。片假名の混用其他原文のまゝ）　社ニ電報ヲカケル　夜中ネムラズ

八月二十五日

朝容態聞ケバキケンナレドゴク安静ニシテ居レバモチナホスカモ知レヌト云フ　杉本氏帰ル　東京ノ家ノ東カラ電話ガカヽリ今朝一番テ夏目兄上高田姉上御夫婦小供三人高浜さん野上さん森田さん中根倫さ

んお立ちになりましたと云ふ　大塚さん大磯から來ラル　阿部さんも來テクレル　一氣壺ヲクレテ野村さんも來ル　池邊氏も來ラル

八月二十六日（木）
容態やゝ良好
見舞客奧村鹿太郎　滿鐵ノ山崎氏　鈴木三重吉　春陽堂、湯淺廉琛、高田知一郎　菅虎雄、森卷吉、看ゴ婦二人　春陽堂ハ菓子折ヲクレル

八月廿七日（金）
容態別ニ變ナシ
見舞客
小宮豐隆、渡邊和太郎香水とビスケツトヲモラフ　高尾忠堅早稻田大學の學生、早矢仕四郎同ジ學校ニ居タ人ノヨシ、奧村又モウ少シヨクナツタラ來マストアワスニカヘル　其時小供兄姉上倫野村さん一處ニカヘル

八月廿八日（土）
容態別狀ナシ
森成さん東京ニ用事ガ出來テ歸ル　病院カラタカダト云フ先生代理ニヨコシテクレル

見舞客
小林郁　高須賀淳平　石井柏亭　行德二郎　野間眞綱

八月廿九日（日）晴
容態良好ニテ此分ナラバ心配ナシトノ事故皆安心シテ東京ヘカヘラル
大塚さん、菅さん　森さん　野上さん　湯淺さん。大倉書店ヨリ見舞狀ニソヘテ小包デ菓子折ヲクレル　名古屋の鈴木カラ心配シテ每日容態ヲ報ヂシラシテ吳レロト云テクル見舞トシテ金二十五圓クレル
其位デ平ブトンヲ買テ病人ニカケヨウト思ヒ野上さんニタノム

八月三十日（月）
晴　容態別狀ナシ
ヌカダ醫師午後二時ノ汽車ニテ歸ル　森成サン入リカワリ東京カラ歸テクル　其時行德サン高須賀サン一處ニ歸ル　夜滿鐵ノ中村サンカラ山崎氏ヲヨコシテ　御見舞トシテ金三百圓ヲ下サル

八月三十一日（火）
晴　容態別狀ナシ
今日カラソツプヲノマセルト云フ故朝トリヲ買テ切テモラヒ　酒ドツクリヲカリテ其中ヘトリヲ入レ　ユセンニカケテ火鉢デソツプヲコシラエル　夕方名古屋カラ鈴木カクル　一二三日前ニアツラエタハラブト

ソガクル

九月一日

晴　容態ヤヽ良ナリ

早稲田大學生小林脩二郎ト云フ人カクル　中村さんノ使山崎さん歸ル　鈴木モ午後カラ歸ル　イロイロ東京ヘ買物ヲ頼ム　夕方野間さんガ東京カラクル

九月二日

晴容態變りなし

今日からソツプガ三度ニナル食ヘル事バカリ考ヘテイルヨシ坂本サンカ七時頃カラゲリヲシテ腹カイタイト云ヒ出スカイロヲコシラエテ上ル夜九時頃ニナリ内丸サンガ來ル

九月三日

雨　容態異狀ナシ

朝十時ノ汽車デ内丸サンガ歸ル　野間サンモ午後二時ノ汽車ニテ鹿島ヘ歸ル

九月四日

晴　容態同ジ

朝九時頃湯淺サンカ東京カラ歸リ道ニヨル阿部次郎サンカ午後ニクル　山形カラ歸リ道東京ヲス通リシテ當地ニクル　病人ニ話シタラ酒テモノマシテ上ケロト云フ故ビールヲ二本小宮サント二人デノム　湯淺サン六時ノ汽車デ歸ル

九月五日

雨　容態だん〳〵よろし

阿部サント小宮サンカサン歩ニ行キ　歸リヘ草花ヲ取テクル　花イケニサス

九月六日

晴　異狀ナシ

今日は十時ト食後ノカン腸ヲスル　四人ガヽリデオコシテ　大便ヲサセル　少シ出タヨシ

ハダカニシテセナカヲアルコールテフキ着物ヲネルト取カヘル　ワラブトンノ上ヘナミノフトンヲ二枚カサネテ其上ヘ寢カス　皆大安心致シタレド別ニ變リナシ　大キニ安心　阿部サン午後二時ノ汽車デ東京ヘ歸ル

九月七日

雨　容態よろし

今日一番デ坂本サン歸ル　カハンヲ持テ行テモラフ　野上サン夕方クル　御土産ヨクレル

私の日記はほんの心覺えでしたが、こゝで終つて居ります。するともうその翌日の九月八日から、ねながら書くのですから少々亂雜ではありますが、この同じ日記帳に何を書いたり、英語まじりの感想らしいものを書いたりし始めました。それが日増しに日記の體をそなへて來て、句をしきりに作つてかきつけ、それから漢詩なども次々に出來る樣子でありました。

私の日記は周章てゝ居る時ではあり、そんなことには餘り氣のない私のことですから、まるで小學生のそれのやうに、平假名と片假名とがまじつて居たり、ノウヒンケツと假名で書いたなどゝ、後でこれを見て夏目に笑はれたものか、ともかくこんなものでも書きつけておいたお蔭に、これを見ると何かと當時のことが思ひ出されます。しかし何と申しましてもさうした文筆の方面には疎い私のことでもあり、旁々當時の詳しい樣は忘れても居たり、又自分では落ちついて居た積りでもすつかり周章てゝ居たことでせうから、かなりとんちんかんなことをして居たことに違ひないので、そこへ行くと外の方がかへつてよく覺えてもいらつしやるし、又はつきり當時の狀態なども描き出して居られます。丁度今夏目の机わきの手文庫の中に、當時安倍能成さんが書いて置かれたものが殘つて保存されて居りますので、それをこゝにのせることに致しませう。

安倍さんは二十四日の夜發した危篤電報を受け取るや否や、すぐに其夜のうちにたつて沼津迄來てとまり、翌日の一番で修善寺へのりつけられたので、東京からいらした方の中で一番早くおいでになつたのです。それ迄は私と主治醫の森成さん、それから社の坂元雪鳥さん、それに東京から前夜診察に來てくれられた副院長の杉本さんだけだつたのですから、何だか援兵が來たやうに力強く思つたものでした。これは後の話ですが、さうなつてくると私のやうな氣のものはなほ更緣起をかつぎ出しますが、いの一番にかけつけて下すつたのが、安倍能成、つまりアンバイヨクナルだから、この病氣はきつとなほると御幣を擔いだものです。それを聞いて安倍さんが、そんなら僕の功勞は金鵄勳章に價しますねといつて自慢してゐられたことがあります。

さて早々と釣かれたものゝ、病人の意識が危篤と思はれない程はつきりして居ます。安倍さんを會はせるのに、下手なことをするといけないといふので、危篤電報で皆さんを呼びよせたのだなどゝはおくびにも出さず新聞で中々お惡いといふのを見たのでお見舞に來たといふことにして病室へ案內しました。さうとは知らう筈もなく、安倍さんがわざ〳〵來てくれたといふので私を呼んでいろ〳〵と世話をやきます。以下が安倍能成さんの手記です。

二十五日

能成

夜半危篤の報に接して、朝五時の汽車で沼津を立ち八時こゝへ着いた。夏目さんと尋ねたら番頭が「あゝさうですか」といつた口調で、先生はまだ無事で居られると一先づ胸を撫でおろした。坂本君にあつて昨夜の危篤の模様をきいた。續け樣に血を吐かれて、幾ら注射しても一向きゝめがなくて、都合十五度まで注射した相である。坂元君は終夜森成氏と共に看護せられたから、今日は自分が病床に侍することゝなりて、午後に先生の少しく落着かれた時分に、先生の病室の一番へ出ていつた。何心なく沼津から先生の見舞に來たときめておいた。部屋へはひると先生は少しく頭を上へ向けて、ジロ〳〵と自分の方を見られる。自分が御時儀をすると一寸うなづかれた。それから側の下女に

「奧さんを呼べ。」

といつて、奧さんに、

「安倍君が來た。」

といはれたので、奧さんと自分とは改めて御時儀をした。下女にお茶を持てこいなどゝ注意されて、

「やつぱり沼津に居るのか。」

「何時の汽車で來た。」

「大仁から歩いて來たのか。」

「飯は食つたのか」

「こんなにわるいとは思つてなかつたらう。」

などゝいはれたので、好い加減に返事をしておいた。

「湯にはひつて休み給へ。」

などゝもいはれた。先生の御顔には大分やつれが見えて、髭が一ぱいにはえて、時々あらぬ方を凄い目付をして眺められる。顔色は赤味がなくて土色に青味を帶びて居る。開かれた胸の上にはガーゼがかぶせてある。胃部に氷嚢をのせてあるのが、大に自分を驚かした。それでも首のあたりから胸へかけての日頃から頑丈なからだつきが何となく心丈夫に思はれた。足の上には浴衣がかけてあつた。昨夜の危篤報で先生の兄上、姉上御夫婦、上三人の御嬢さん、中根の弟君、それから大塚先生、高濱氏、森田、野上の諸君が午後二時頃に來られたけれども、病人の神經を刺戟する恐があるから皆あはず、野村傳四君だけがあつて、自分と交代に病床に侍することゝなつた。夜朝日の池邊氏が來られて病床に通られた。先生は

「色々と御世話をかけました。」

と禮をいつて居られた。今朝以來一つも食を取られず、時々氷で口を嗽がれるばかりである上に、眼を閉ぢられても唯暫らくの間に直ぐさめて仕舞はれる。醫者に、

「身體も動されず、物も食へないから、少しく眠りたいんですがね。」

といはれた。出血を止める爲めに注射をする、先生は其れが痛いので隨分いやがられたけれども、醫者が徐々にその必要を說いたので漸く首肯かれた。夜は八九時頃であつたか、牛乳の滋養浣腸をやつた。

医者は変があれば十二時後だといつたので、十二時過から起す。これで野村君と医者と自分と三人で夜交代に起きて居たが、幸に何事もなく、時々眼をさまされたけれども比較的よく安眠せられた。

廿六日

昨日にくらべて少し顔色がいゝといふ位であるけれども、自分にはよくわからなかつた。午前中に高濱氏が一寸あつた時には、先生は一寸笑顔をして挨拶せられた。

「新井に御泊りですか。」

などゝ言つて居られた。やつぱり午前中に池邊氏が暇乞に来られた時は、随分暫く一つも物を言はれなかつた。側からは氣分がそれ程引立たなかつたのであらうと思はれた。それでも池邊氏の方から挨拶をせられた時には、色々返事をして居られた。午後になつてから伊勢の湯淺氏、東京から高田氏、春陽堂の小林氏なども来られたが、高田、小林両氏は晩に帰られた。夕方の事であつた。

「昨晩は死にかゝつたよ。」

などゝ言はれた。それから

「氣分のぼーつとして居る時など子供なんかにあひたくない。唯こゝで死ぬるのはいやだ。」

と話された。其後やつぱり話が一昨晩のことになつて、医者が、

「あの時はしくぢりましたよ、普通の患者なら分るものぢやないんですけれども、精神力が御強いものですから。」

といつたら、

「別に精神力が強いといふわけでもないでせう、やつぱりこれだけの體力があるのでせう。」

といはれた。自分は

「獨逸語が分つた相ですね。」

といつたら、

「ウントートが何とかドシュワッハだとかいつて居た。」

と云はれた口調に先生の平日があつた。昨日より氣分がよささうだとはいふものゝ、何だか鬼氣人に迫る様な氣味は一向失せない。この様な風で段々と弱つて行かれるのではあるまいかなどゝ思ふと、今かうして居られる先生と已に息絶えた先生とが思ひくらべられて、どふしても解けない謎を眼の前につきつけられた様な氣がした。それでも先生は中々やかましい。医者の色々やる処置について、一々説明を求められる。こんな風では又少しよくなつても自分勝手の療養に任す様な事をせられはすまいか、こんな大病人でありながら、「俺のからだは俺が知つて居る」といふ様な顔をして居られるのが氣になつた。今日はたしか葛湯を少し飲まれた時である。

「氷を飲んではいけませんか。」

と医者にきかれる。

「口を御開きになる時に多少ははひるでせう。」

と答へると、

「それは止むを得ずはひるのです。若し直らないときまつて居れば、ドシ／＼飲むんだけれども。死ぬるのはよいけれども、又此間の様に苦しいと困るから、それでなければあなたが何といつてもどし／＼たべるのですけれども。」

といはれた。今日午後二時頃に東京から看護婦が二人來て、午後六時から看護に從事する様になつた。それで野村君と自分とは時々顔を出すばかりにした。夜分に異状なく、十一時頃に床についた。時々起きる積であつたのに、朝までダッスリとねむりこんでしまつた。

今日正午頃であつたか鈴木三重吉君がやつて來た。大塚さんや門下生諸君の間に、中村滿鐵總裁から醫者をよこしてくれるといふことだから、入澤達吉博士を願はうといふ議が成立して、その晩龍居秘書にあてゝ電報を以て願つた。

廿七日

昨夜來異狀なし。脈搏は九十度以下、呼吸は二十四内外、熱は三十七度を上ること少し位の狀態で今日中を過ごした。今朝先生の兄君姉君と御嫁さん三人と中根氏とは先生にあつて歸られた。今日午前小宮君が來た。野村君は正午に歸つた。先生の病氣にも目下の所變狀がないので、皆の控室が大分陽氣になつて來た。今日は葛湯の外に平野水の少量を飲まれた。時々煙草を喫はれた。昨日はアイスクリーム一匙、午前は二匙であつたが、午後三匙目の時にもう一つですかと非常に欲しさうにいはれた。夕方に看護婦に鏡を取らして、舌を出したり眉や瞼を返へしたりして頻りに見て居られた。

夜皆さんと森卷吉氏とがやつて來られた。しかも皆あはれはしなかつた。夜先生は酒のことを醫者にきいて居られた

「酒は飲める様に稽古が出來るものですか。」

などゝ言つて居られたが、どんな心持で此の問を發せられたかと思つた。

廿八日

今朝野上森田と湯淺氏とは病室に通つて面會した。

「よく來たね。」

と言はれた相である。

午後病室へ行つた時には色々と話をせられた。沼津で何を食つて居たかといふ御話から、先生は肴は食ひたくないが、野菜が食ひたい、豆腐や雁もどきが食ひたいといはれた。昨日にくらべると眼付が大分やさしくなつて、時々あらぬ方を凝く見つめられることが少くなつた。今日四時の汽車で醫者の森成氏は長與院長の見舞に歸つた。其の代りに一兩日獨逸から歸朝の醫學士安田君が見えられることになつて、今夕から時々病床を見舞はれた。安田君の話では樣子が非常によい、大抵大丈夫であらうといふことで、皆が大に喜んだ。

今日は注射をした傷痕の痛みが大分とれて、腕を動せる樣になつたので嬉しがつて居られた。皆が一寸顏を出しては直ぐ引込むので、

「皆俺の顏を見て直ぐ引つこむかどふしたのだ。」

と聞かれた。奥さんが、

「病氣にさはるといけないと思つてゞす。」

といはれたので首肯かれた相である。坂本氏が朝日から來て居るのを先生は前から氣の毒がられて居たので、一昨夜一寸用足しに歸つて又今晩又來たといふ風にいつた。其時先生は、

「早く片形が付くのならばよいけれども、快くなるとしたらいつまでかゝるかわからないのに、さう居ても切りがあるまい。」

といはれた。先生自身は大いに生きるウイレを抱いて居られるらしくて、頼もしかつた。皆さん大塚さんから、滿鐵から名醫をよこしてもらふとにしやうといふ議が又起つた。此前の電報を出した時には、入澤さんは長與さんの病氣で差支へてるから、尙ほ池邊さんと相談の上でどうにかするといふことになつたのであつた。そこで森田が朝日や滿鐵に話をする爲め今晩の七時頃の汽車で歸ることになつた。今日鹿兒島から野間氏、佐賀から行德氏、東京から小林郁氏が見えた。

廿九日

午前中大塚、菅、小松、森、野間諸氏は先生に面會せられた。大塚さん菅さんは思つたよりもやつれも無く、元氣があるといつて喜んで居られた。湯淺氏は上京してから又歸りによるといつた私が、

「中々死にやしないからもう來なくともいゝよ。」

といはれた。正午野上を加へて上の諸氏は二臺の高等馬車に搭じて一先歸られた。

午後も別状なく夜に入る。高須賀淳平君が昨日やつて來て、先生にあつた。

三十日

今朝病室へ行くと、先生は朝鮮の合邦、松根さんのことをきかされた。野上は歸つたかときかれた序に小宮の來た由をいつたら、どふして來たのだらう、あの人は新聞は見ない筈だがなどゝいはれた。それから、

「こゝへ來る連中を見ると、僕の樣になつてはすまないかと思つてこはくて仕方がない。杉本の樣にふとつて居る人は別だけれども、森成君なんかひどいのだからね。」

といはれた。話をするとお草臥れですかといつたら、

「長いとくたびれる。」

との答であつた。又今朝胡瓜もみが食ひたいといはれた相である。瀧へ行つたかともきかれた。

午前中に行德氏は先生にあつて、二時の汽車で額田院長及び高須賀君と一所に立つた。額田氏は二週間もすれば東京へつれて歸つてい

ゝだらうといはれたが、自分は本統にさうなつてくれゝばよいがとやつぱり氣づかはれる。額田氏と入り代りに森成氏も歸つてこられた。

午後小宮と一所に病室へ行く。先生は少し疲れられたのか、一向物を言はれなかつたが、自分が出た後では、小宮に、

「新聞は何新聞に出て居たか。」

とか、

「田舍は面白かつたか。」

とか色々のことをきかれた相だ。

夜滿鐵から中村氏の命を傳へて山崎氏が見舞はれて、入澤氏が來られぬので、宮本博士は來てもらふことゝなつたが、今十日もせねば來た所で診察も出來ないから、來るのは少し後にするとのことであつた。

四十一　經過

安倍さんの手記はこゝで終つて居ますが、當時の模樣をよく傳へて居ますので、こゝで拜借致しました。

私の日記にも亦安倍さんの手記にもありますやうに、もういよ〳〵だめらしいから、今のうちに子供たちに會はせておいたらといふので茅ケ崎に居た上の三人の女の子を呼びまして、會はせました。丁度夏目の兄さんや姉さんたちと汽車で落ちあつたといふので一緒に參りました。病室にとほすと、病人はたゞ目を開いてじつと見て居ただけで何とも申しませんでした。何しろこゝ二三日が一番危險で、又どう急變するかも知れないといふので、東京へ賴んだ看護婦は中々來ず、皆で注意に注意をして看護したものでしたが、少し手を動かしたり足を動かしたりすると、すぐ傷口から出血するものと見えて、顏の色が變はつて目を白くする始末です。とても怖くて氣が氣でなくて見て居れたものではありません。そこで別の部屋に入つてなるべくこの物凄い場面から遠ざからうとして居りますと、見舞に來られた鈴木三重吉さんが、

「奧さん、何故側へ行かれんのか。」

と、私が不實でもあるかのやうになじられます。しかし私はとてもとても氣が氣でなくて、どうなることかとこんな慘ましい樣を見るに堪えないのですから、

「氣持が惡いから……………」

とか何とか返事をするのですが、それはいけないてなわけで、先方で親切で言はれるのはわかつてるものゝ、私の氣持がくんで頂けないので、場合が場合なので大變言ひ相をして、とう〳〵終ひには間へ安倍さんが入つて、つまらないこと言つたつて始まらないぢやないかつてわけで、鈴木さんをなだめられたりなどしたことがあります。何しろいつどんなことがあるかも知れないといふので、ひやひやしながら皆が別室につめ切つて、夜も交代で不寢番をして警戒致しました。

さうかうして居るうちに醫者の森成さんが、胃腸病院の院長の長與さんが危篤の重態だといふから、日頃御世話になつた方でもあらうし、

是非一度歸へらせて貰らつて告別がてらの御見舞がしたいと仰言います。尤もな話なのですが、此方も此方でいつ何時どういふことがないとも保し難い重病人なことなので、斯く此方がこゝへついてゝ下さるのは、胃腸病院を代表してついてゝ下さるも同然なのだから、よくそこをお考へになつて無責任なことをなすつちや困ります。お歸へりになるならなるで、此方の代りになるちやんとした方をよこしてそれからおいでになつて頂きたいと申しまして、丁度洋行からお歸へりになつたばかりの額田さんが入れ代りにおいでになりました。額田さんがお見えになつて大分調子がいゝとのことで、皆安心したことは安倍さんの手記にも書いてあります。

最初の一日は絶食、それからアイスクリーム二匙、それから段々少しづゝ食量も増して、葛湯などもやるやうになり、自分でもしきりに何かゞ欲しくなつて、ドロツプをもう一つよこせの、アイスクリームをもう一匙よこせだのと駄々をこねます。ところが困つたことにはそれからずつと二週間もたつ間、ねたまゝではどうしても便通がないといふので、とう/\二週間目かに、血止めの注射をした上に、カンフルの注射をして、四五人がゝりで便器にかけさせまして便をとりました。其時皆が心配して又悪くしやしないかとひや/\して居たのですが、自分では少し腹が悪かつたと丈で、何事もなくてすみました。そこで東京へ注文しておいたのが屆いた高い寢臺の上にねかせかへたり致しまして、私達も漸く愁眉をひらいたといふわけです。

満鐵の中村是公さんからの意を傳へて、前々からえらい名醫を寄こすから診て貰へといふ話があつたのですが、皆さん大塚さんなどもしきりと胃腸病院は不都合だ、入澤さんに見せろといふやうなことを仰言います。しかし私は新規の醫者に此際いぢらせるのはいやだし、さうして様子のよくわかつてる前々からついて居てくれる醫者の[illegible]な[illegible]すのもつまらないことだし、第一胃潰瘍だといふれつきとした診斷がついて居て、徐々になほりかけてるのだからいゝではありませんかと、中々素直におうけをしやうとは申さないのですけれど、その話が一度ならず出て、皆さんの御好意からといふこともわかりますので、そんならともかく一度診て頂からといふことに致しました。ところが入澤さんがどうしてもおいでになることが出來ず、代りに宮本博士がおいでになるといふことになりましたが、しかし今行つても仕方がないから、いま少しなほつてから出かけやうといふことでした。

其うち一時つめかけておいで下すつた方々も次第次第に歸京されますし、後は私と森成さん、それに東さんの三人が殘りました。程經て御約束により宮本さんがおいでになることになりましたので、又おいでになつてから、俺は新規の醫者に診て貰ふのはいやだなど、駄々を捏ねないものでもありませんので、一應相談致しますと、案の定、森成さんも居るとだし、段々なほつて來てゐるのだから、そんな無駄な手數をかけないでもいゝぢやないかといふ調子です。そこで、實は私も皆さんにさう申上げて一度は辭退したのですけれど、重ね重ねの御好

意を無にするともどうかと思ひ、東さんや大塚さんの顏も立てておうけすることにしたのだと理由を話しますと、機嫌よくさうか、そんなら診て貰はうと、さらりと申してくれました。それが九月の中頃でしたでせうか。來て診て御覽になつて、大分いゝがまだ動かすには早い、もう二週間もしたら歸京しても差支あるまいといふお話で、私たちも大に力づきました。

其中にお腹が益々すく樣子で、食べ物の方も葛湯がオート・ミールに代り、それから重湯刺身などといふ風になつて參りましたが、重湯は如何にもまづいと申して殆んど頂きませんでした。ところがいよいよお粥といふことになつて、初めてお粥を頂きました時には、こんなに美味しいものを口にしたことがないと大變な喜び方で、お醫者さんをわざ／＼枕元に呼び迎へまして、お粥をたべさせてくれてどうも有難うと御禮を言つて居りました。

何しろお腹が空いて空いて仕方がないと見えて、無闇とたべたい樣子で、いつも御醫者さんと喧嘩です。私が居ると五月蠅い、又何か言はれさうだ、居なけりや喧嘩相手がないからそれ切りにならう、文句を言はれるのがつらいとあつて、食事の時になると森成さんが外へ散歩かなんかに逃げ出して了はれるなどといふことがよくありました。自分ではねながらいろ／＼獻立を頭の中でこさへて、やれ西洋料理だ、今度は鰻だといふ風に想像の中で御馳走をならべて見るのだと申して居りました。

それからやがて本が讀みたいと申しますのですが、自分では力もなし、第一本を手にもつてるのは病氣の爲めよろしくないといふので、ついてる者さんが本をひろげて見せるのを仰向けになつて居りながら見るのですが、もつと遠くへ離せとよく小言を言つて居りました。先生どうも老眼になられたらしい、無闇と離して本を見られるなどと皆さんが言つて居られましたが、やがてそのうち自分で本をもつて見るやうになりました。

それから喧嘩の種に今一つ新聞があります。時々新聞を見せろとやかましくせがむのですが、これもとう／＼見せずに置きますと、或時しきりに要求しまして、これ又喧嘩です。といふのは丁度其頃胃腸病院の長與さんが亡くなられて、それを知らせずにおいたのが、新聞を見るとわかるので見せずにおいたのです。だから修善寺を去つて、又再び胃腸病院に舞ひ戻つて來る迄、院長の死を知らずに居たのです。といふのは非常に長與さんを信頼して居りましたので、こん度の病氣についても長與さんから特別御厄介にもなり、長與さんの方でもよく氣をつけて下すつた上に、何事につけても夏目さん夏目さんと言つてくれられるし、夏目の方でも長與さん長與さんとしたつて頼つて居たものなのです。その信頼して力にしてゐた先生が自分の病中亡くなられたと言つては力を落すだらうといふので、長與さんが危篤だといふとも、それから亡くなられたといふとも隱くして居たのです。一度隱くして了つた以上、とう／＼終ひ迄隱くすことになつて、病氣が大丈夫と

いふことになつても話がそれへ落ちることを避けて居ない、加減に避けて居たわけでした。

何しろ更周章てふためいて飛び出して來たまゝで家へ歸りません。段々涼しくなる、寒くはなる。家の事か、氣にかゝつて仕方がありません。ともかく一度歸へつて冬仕度の心配もして、それから又出なほして來たいと思ひましてさう申しますと、お前に歸へられちや困ると申しまして手離してくれません。私も病氣が大體よくなつて來るにつれて、一度二度の食事のお粥だのスープだのを看護婦と二人で廊下の火鉢で溫ろ外一寸用のない體になつた上に、やはりいろ〳〵氣を使つたり何かしたのがもとでせう、不眠症にかゝつて了つて困りましたので、ともかく晝は精々どつか歩るくことにして氣を紛らせて居たりなどとして居りました。

四十二　歸京入院

宮本博士の二週間もしたらといふ日も來て、大丈夫といふ見極めがついたので、いよ〳〵東京へかへることになりましたが、大丈夫だと申しましても、いつ何時變事がないものでもないので、これ迄でも始終枕元には注射器だのそれに使ふ藥品だのをならべ調へておいて、いざといへばすぐに應急手當をする手筈をしておく位なのですから、ともかくこの病人を運び出すのが大變です。ともかく二階の借り切つて居た四つの部屋も片付けて、(一時危篤の時には殆んどこのならびの二階全部を借りておいたのでしたが)十月十一日といふにこの宿にわかれを告げることになりました。其時修善寺の御隱居がうまい乘り物を工夫して下さいました。といふのは一寸中世は舟形の轎籠で、うしろへ半ばねたやうになつてよりかゝれるといふ趣向に出來たものです。それに蒲團を敷いて、そのまゝ馬車へでも汽車へでも移してのせやうといふ考案です。至極うまい考案で助かつたのですが、この家は二階から裏口へ運び出すのには、殆んど危險な段々もなくて至極簡單に通りへ出られるのですが、お醫者さん迄かついで了つて、ともかく裏口なんか縁起でもない、堂々と表の大玄關から送り出さうといふので大騷動です。でもいゝ按配に一等馬車の中に運び込んでまづ〳〵ほつと致しました。馬車の中ではその用意の轎を横に座席に渡して、うまく納まりました。それへ看護婦と若成さんが同乘されました。

大仁で汽車にのりかへて、又三島で東海線に乘り換へなければならない。それを苦にやんで居りますと、宿屋から番頭さんが屈強な人足を四人連れて來てくれたので、兩方とも難なく運びましたが、さて三島の乘りかへの時には、此方の汽車がついて見ると、いつもはかなりの時間を待たなければならないのが、どうしたものかもう本線の方が先着してプラットフォームに待つてる始末に、橋を渡つてる隙もなく、人足がひどい雨の中の線路を横切つて、漸く間にあつて運び込んでほつとしたことでした。

大仁からの汽車にのる前に、さういふ病人だと一等車の貸切りでな

ければならないといふ話で、そんならといふので阪元雪鳥さんから來て頂いて、會社と掛け合つて頂いたのです。夏目も贅澤な、貸切りなんて勿體ない、そんな大仰な眞似をすることはないと申します、此方も言はれて内心やゝびくびくもので居りますと、何のこと、十二人乘りかの一等車室が貸切りとなると十人乘りかに割引きされて、それより人數の増えた時は一人分づゝ拂つたらいゝのだとか云ふことで、總勢合はせれば優にそれ位になつて、何だバカバカしい、貸切りにおどかされたと笑つたことでした。

スープやオートミールを用意して、藥品や注射器を携帶しての旅です。氣がゆるせませんのでしたが、いゝ按配に心配した程のこともなく、まづまづ障りもなくて東京につきました。出迎への方も澤山停車場にお見えになつて居られましたが、どんな方々でしたかおぼえて居りません。それからすぐ又内幸町の胃腸病院に入院する約束なのです。舟形の寢臺をそのまゝ吊臺にのせて、後からたしか松根東洋城さんがついて行かれました。自分では寢ながら、暗い覆をかけてかつがれて行くので、どこをどう通ほつて行くのかさつぱり樣子もわからず見當もつかず、方角のわからないのが不安で仕方がなかつたと申して居りました。

病室へ送り込んで、私も漸くほつと安心致しました。自分でも安心した樣子でしたが、私が何かと整理をして、ともかくこれでよしと見極めをつけましたので、何より先に家へ歸へらうと思ひまして、

「私これから家へかへりますよ。」

と申しますと、

「さうか、どうもいろいろ有難う。」

と、心から厚く禮を言つて居りました。

ところが私が歸へつた後で困つたことがおこつた。といふのは入院したものですから、後で病院の醫員が診察に來られた時に、夏目が今度の九死に一生を得たことについて、いろいろお禮を言つて、本當に長いこと御厄介になりました、どうか長與院長によろしく仰言つて下さい、如何です、近頃お變りもございませんかと尋ねたので、どうも樣子が變だ、いづれこれには何か仔細があるのだらうといふんで、醫員の方はいゝ加減に挨拶をして出て來たが、もうこゝへ來てはいつまで隱くし立てをしてゐるうちに、結局辻褄の合はないぼろを出すに違ゐないから、私から打ち明けてくれろといふ森成さんのお賴みなのです。仕方がありません、蒔いた種子ですから刈らずばならないのですか、きつと先生が怒られるでせう、怒られたら僕が隣室で聞いて居て、これは私が醫者としてやつたことだからと罪を買つて助け舟に出ますからといふ森成さんのお話です。承知しましたといつて翌る日私が打ち明けました。

「實は貴方の病氣がお惡るかつたものですから、丁度其頃長與さんもお惡くてとうとうお亡くなりになつたのですが、貴方もあれ程したつ

て力にして居られたものだから、若しやおきかせして病氣に障はってはと黙つて、つひ今日迄隠くして居たのです。別に貴方をだます積りではなかつたのですから、どうか悪く思はないで下さい。」

さういつてわけを話してあやまりますと、

「さうかい。」

と、涙ぐんだやうな顔をしてしばし言葉が出ない様子でしたが、やがて、

「それは大變御氣の毒のことだつた。道理で昨夕診察に來てくれた人に聞くと、何だか返事を濁して居たので、其時變だなあとは思つたが、さうかい、それはお氣の毒だつたな。」

と、本當に感慨深い面持でありました。隣室で仔細の様子を聞いて安心した森成さん、いきなりそこへ飛び出して來て、

「どうも先生すみませんでした。皆で先生一人を瞞ましてるやうで氣になつて仕方がなかつたのです。どうかまあ……」

といふ話に、夏目も怒りもせず、

「そんなことはないが、本當にそれはお氣の毒でしたね。」

と、つくづく身につまされて同情して居る様子でありました。

四十三　病院生活

修善寺に居るうちに、東京の中村さんが、御見舞だといつて三百圓下さいました。それは有難く頂いておきました。するとこん度は朝日新聞の方で池邊さんが、宿屋の費用をいくらか出すからといふお話でしたが、何しろ見舞客が多くて、一時は夏目が寝て居たあたり近所の二階全部を借り切つてる始末に、それには縁もゆかりもない朝日の方から金を出して頂くのは異なものなので、其事をお斷りしますと、では折角だから夏目一人の分をといふ御申出でした。どうしたものかと思ひ迷つて居りますところへ、親類の鈴木が見舞に來てくれて、金はどうなつてるかと、それも同じくお金の心配をしてくれるので、これこれだと言ひますと、そんなら折角さう言つて下さるものを無下にここでお斷りするのも角が立つ、かといつて夏目が新聞社の公用で出張してゐて病氣になつたとか、社の爲めでその仕事に殉じたといふならだが、修善寺に保養に來て居てなつたのだから謂はゞ個人的のことで、そこを社からいはれなくして金を貰ふといふのも夏目の氣性としてはいやだらう。が今はそんな面倒な理屈をならべて居る時でもないから、ともかく夏目が本復する迄默まつて預つた積りで貰らつておいたらいゝと、こんな風に申してくれますので、其積りに致して居りました

其うちに又中村さんが、もう金のない頃だらうが、しかし夏目に直接やるなどゝ言ふのでは頑固だからいらないといふにきまつてゐる、奥さんに行つて内諾を得て來いといふわけで、秘書の瀧居さんといふ方がお見えになつてそのお話をなさいます。そこで私も、下さるお金がいらないといふ程の金持ではございませんか、どうなりかうなり治

療治養生費位の貯はございますから、さう〳〵理由なしに無闇とお金は頂き兼ねますとお斷りしたものです。すると龍居さんは現金なんぞをやるといつて、さぞ失禮なとお思ひになる事かも知れませんが、それで實は私が内意を伺ひに出たので、總裁がそれを心配してられますといふお話に、私は別に怒つたりなんかするどころか、御好意は本當に有難く思つてるのですがどうか悪からずと申しますと、さう思つてて頂ける位なら、折角私が使にも立つて來てるので、總裁の好意もとほり、又私の役目も果たさせて頂きたいといふわけで、とう〳〵口說き落されて、又三百圓頂いて了ゐました。

ところが胃腸病院に參りましてから、何かの折にもうよからうと思ひまして、この話を致しますと、朝日の分は貰ふ理由がないから私にかへして來いと申します。そこで池邊さんにお會ひして其事を申上げますと、貴方のとこだつてお金持ちやない、一旦社の會計から出したものだからいゝぢやありませんかとのお話。それでも困りますから是非にといつて御斷ひして參りました。其中に池邊さんにお會ひしますと、あゝ迄仰言るものだから社長に話して見ましたが、君にやつたんだからいゝやうにしたがいゝ、返へす必要はないといふことでした。もう誰に氣兼もいらない金だからといふやうな有耶無耶なことでそれなりになつて了ゐました。

其うちに足腰も立ち、段々恢復して參りますにつれて、ぼつ〳〵散步などにも出るやうになります。さあさうなると中々醫者のいふことなどをハイ〳〵と素直にきかなくなります。それどころか散步に出た序に、どこで買つて來たものか、胃腸病に關する本なんか買ひ込んで來て、それを勉強してあべこべに醫者をやりこめるといふ始末です。

或る時こんなことがありました。散步に出てかへつて來ての話に、どことかの阪を上がつたら、どうも息切れがして仕方がなかつたといふ話に、お醫者さんの森成さんが、それは病氣上りのせいでせうといふと、いつかな承知しません。しかし俺は病氣前はどこ〳〵の阪を上がつても何ともなかつたものだとかういふ風です。そこで森成さんが言はれるには、先生、鶯の啼き聲を御存知ですか、あれは毎年毎年同じやうに啼くけれども、鶯は春先のまだ寒い頃には、すつかり去年の啼き聲を忘れて了つて、笹啼きなどゝいつて殆んど啼けないのです。それが段々稽古をして又元とほり啼けるやうになるのですが、先生もそれと同じことで、大病なすつたので足の力などは子供のやうに弱つて居る、それですから段々に少しづゝ元へ稽古をして戻すのですといふ說法です。

「さうですか。」

夏目も一言もなく默まつてそれ切り文句も申しませんでした。其話を鈴木三重吉さんにお話しすると、

「そりや相手が醫者だからだまつて聞いて居たんだが、僕達がそんな講義をしやうもんなら、三重吉、貴樣は鶯の啼き聲を知つてるかつ

てあべこべにやり込められるところだ。」

に、なる程、そんなヿかも知れないと笑つたことがありました。

其頃、病院へ行つてると小宮さん東さんなどがおいでになつて、奥さん、歸へりに鰻をおごつて下さいとか何とか言つてられると、夏目が、

「俺が病院に入つて居るのに、料理屋へ行からなんて細君を誘ふ奴があるか。」

とえらい見幕で苦い言葉をいつたので、放々の態で外へ出て、やがて東さんが、

「先生もあんなにいはなくたつていゝのに、大人氣ないな。これから何を食べたつて不味くなる。」

と不平をならべて、二人とも悄氣て、その儘どこへも行かず、おわかれして了ゐました。すると翌日病院に參ゐりますと、機嫌よく昨日はあれからどうしたいと尋ねますから、どこへも行かずにすぐかへりましたと申しますと、さうか、そりや氣の毒だつた、小宮の奴、いつもあんまり呑氣で贅澤なもんだから、つひあんなに強く言つて見たのだと申して居りました。

たしか十月も終り頃になつて、原稿を書き始めました。こん度の大患のことを、「思ひ出す事など」と題して書いたものがそれです。この原稿たつたと覺えて居りますが、一度池邊さんが原稿を書いてるところへお見えになつて、今から原稿なんぞ書かなくたつていゝ、又そんなに頭を使ふと、胃の酸が出ていけないではないかといふので、原稿紙を取り上げられたことなどがありました。

しかし書からと思ひ出せば、人が何といつたつて書くのでしたが、此頃は病氣のせいもあつたでせう、以前のやうに日に何枚何十枚と書くといふやうなヿもなく、氣に向けば一日新聞一回分を書いてぐつたりするといふやうな樣子でありました。がそんなに書き始めたり、ゆつくり落ちついて本でも讀もうといふ時に、又よく訪問客がある、どうも少々煩はしいなどと申しまして、病室の入口に、面會謝絶などといふ札をはり出したこともありました。

しかしともかくこん度の病氣で、前のやうな妙にいら〳〵してゐるけはしいところがとれて、大變暖くおだやかになりました。私にも本當にこの大患で心機一轉したやうに見受けられました。何と申しますか、人情的とでもいふのでせうか、見違へるばかり人なつこくなつたものでした。誠に病中人樣にいろ〳〵御世話になつた、それが大變有難いと申して居りました。修善寺で危篤だといはれて居た頃、次々に知つた顏が訊ねて來てくれて、誠に有難いヿだと思つて感謝して居ると、後で電報で呼びよせたのだと聞いて、その有難さが半分位になつたなど〻笑つて居りましたが、しかし私などに對しても、この病氣以來ずつと心持が違つて來たやうに思はれます。

まだ修善寺に居る頃、親類の名古屋の鈴木が、毎日毎日容態を電報で知らせてくれといふので、そのとほり日課のやうに實行して居りましたが、よくなつてからといふものは、毎日毎日同じことになつて、書くことがありません。毎日毎日同じ電文でもつまらないといふので、後では面白半分今日はお粥になりましたとか、今日は御飯を何ばいたべましたとか書いて打つたものです。いつだつたかやはり書くことのない電報用紙に、今日はひげそりあたまを刈り、大きに男振りを上げたとか何とか書いたことがありましたが、これは實に名電文だなどと歡迎されたことがあります。かうして自分は段々なほつて、いろ〳〵心配して頂いた病院の院長がかへつてなくなられ、續いて自分よりもお若い大塚楠緒子さんが、大磯に轉地してられて、此方からも御見舞に行かう行かうと思ひながら自分の方のことに取紛れてつい時を失つてゐるうちに、秋も末頃になつて、ぽつくり亡くなられる。病んで、死の瀬戸際迄辿りついて、又かへつて來た身には人一倍感慨深いものがあつたでありませう。「思ひ出すことなど」の中はこれらのことがよく書いてありますが、亡くなられたと聞いて、よくくやみを言つて、おいてくれとくれ〴〵も私に申して居りました。私が御宅へお悔みに上つた時には、奥さんはもうお骨になつてかへつてゐらつしやいましたが、お葬式の日には、私が風邪を引いて居て、つひ御會葬が出來ませんでした。

ある程の菊投げ入れよ棺の中

といふのは夏目の手向けの句でございます。

修善寺で非常に御厄介になつた醫師の森成さんに何か御禮をしなければならない、何か記念の品をお贈りしたいがといろ〳〵考へた揚句、銀座の天賞堂でしたかで、銀のシガレット・ケースを買つて參りまして、それに自分の筆で、

修善寺にて篤き看護をうけたる森成國手に謝す　漱石
朝寒も夜寒も人の情哉

と書いて、それをほらせましてお贈り致しました。いつぞや遺墨遺品の展觀をした時にこの銀の卷煙草入れも出陳されてゐて、そゞろ其頃のことも偲ばれて懷しい思ひが致しました。

「思ひ出す事など」の話が出ましたので、こゝで話はずつと後のことになるのですが、この原稿のことをお話致しませう。

夏目が亡くなりましてから、段々評判になつたものですが、よく原稿があちこちの古本屋などで賣りに出てるといふことを聞きましたが、たゞで新聞社の屑籠あたりから拾ひ出して來たのか、それとも新聞社の方が保存されたものが何百圓だとかいふ滅法な相場で賣り込みにかゝつてるので、つい一つ二つ買へば手に入つたものを、そのまゝ人手に渡して了つたことなどもありました。原稿そのものの性質として、家に殘つてるものは書きくづしばかりで、題などは自分で表裝をして額に

書き遺してのこしたものがあり、書も少しはあるのですが、原稿ばかりは、俳句詩稿をのぞいては大學での講義のノオトがある位のもので、別に何もありません。欲しいとは思ひますものゝ、そんなわけで一寸手が出なかつたのですが、其うちに松岡が本郷あたりの古本屋に「思ひ出すことなど」の原稿が賣りに出てるといふことを聞きつけて見に行きました。するとこの原稿の外に、亡くなる年の正月に書いた「點頭錄」といふ感想の原稿が少しと二つありました。しかし「思ひ出すことなど」の方は、みんなそろつて居たのを、纏つての買ひ手がなく、あれには詩があり、句がありなどして一回分づつでもそれ〳〵面白いので、新聞一回分づつつまり片面の原稿紙八九枚程をわけてなにがしかに賣つたといふので、五六回分缺けて居りました。賣つた先がわかつたら、折角揃つて居たものをちり〳〵ばらにして廢物になるのは惜しいと思つて、いろ〳〵尋ねて見たさうですが、結局店賣りをしたので買ひ手がわからず終ひ、とにかく殘りを全部買ふ約束をして、届け先を言ひますと、先方では松岡と知らず値をきめたので、そんならもつと高く吹くんだつた、儲けそこねたと口惜しがつたさうです。そんなわけで「思ひ出すことなど」の原稿は今宅にございます。後は點頭錄とそれから後で知人からわけて頂いた「彼岸過迄」の原稿と、原稿はそれだけしかございません。震災の頃しきりに出た時分に買つておけばよかつたと、近頃そんなことを思ひますが、此頃では大變な値を言はれるので欲しいにも手が出ません始末です。

この病院で正月を迎へました。正月二日に行つて見ますと、附添の看護婦も居ず、一人ぽつねんとして原稿を書いて居りまして、いやに正月らしくなくあたりがひつそりして居ります。どうしたのかと尋ねますと、三ヶ日は休みだとあつて、看護婦が羽根をつきに出たのだと申して居りました。

かうした病院生活を書いて居たんでは全く果てしがありませんから、いゝ加減なところで見切りをつけませう。

此頃同じ病院に澁川玄耳さんが、やはり胃腸を惡くして入つておいでになりまして、よく行き來をして居たやうですが、澁川さんはおそく入院されて、夏目よりも早く退院されました。もうそろ〳〵歸へり話の持ち上がる頃になつて、私が二月の二十五日が日がいい、退院はその日にして下さいなどゝ、無闇と日のよし惡しなどを申しますので、澁川さんに、何でも家では日のいゝ日に出なけりやならんのださうだが、幾日にこゝを出たものだらうなどゝとぼけてきいて居りますと、澁川さんは澁川さんで、それは幾日の午前何時がいゝだらう、その時刻は囚人が牢獄を出る時刻だからなどゝ笑つて、私をからかつたりして居られたことがあります。

この頃になつて運動に謠をやると申します。此前にも一寸謠の話を致しましたが、謠などを謠つては、お腹に力が入つていけないでせう

といふので私が賛成致しません。しかし退屈の上ではあるし、自分では寒くて散歩といふわけにも行かず、とにかく運動がてらにといふ位の氣なのでしたでせう。そこで、意見の一致を見ないので、それぢや醫者に尋ねて見やう、醫者がいゝといつたら謠本をもつて來るんだよといふわけです。すると日ならずしてこんな手紙が病院から私宛に舞ひ込みました。

拝啓　本日回診の時病院長平山金三先生と左の通り談話仕り候間御參考のため御報知申上候。

旦那樣「もう腹で呼吸をしても差支ないでせうか。」
病院長「もう差支ありません」
旦「では少し位聲を出して、——たとへば謠など謠つても危險はありますまいか。」
病院長「もう可いでせう。少し習らして御覧なさい。」
旦「毎日三十分とか一時間位づゝやつても危險はないですかね」
院長「ないと思ひます。もし危險があるとすれば、謠位已めて居たつて矢張り危險は來るのですから、從る以上は其位の事は遣つても構はないと云はなければなりません」
旦「さうですか、有難う」

右談話の正確なる事は看護婦町井いし子嬢の堅く保證するところに候。して見ると、無暗に天狗と霧島大家ばかりを信用されては、亭主程可愛想なものは又とあるまじき悲運に陥る次第、何卒此手紙屆き次第御改心の上、萬事夫に都合よき樣御取計被下度候　敬具

二月十日町井いし子立合の上にて認む

夏目金之助

奥樣へ

とうとう私がまけて謠本を運びました。こんな冗談まじりの催促となく心から微笑ましくなるやうな手紙をよこすなどゝいふとは、以前にはまづくないと言つていゝとでした。

金解禁問題

高橋亀吉

一國と一國との輸出入の差額は、金を以て勘定する。それで、輸入超過になると、その國は金を輸出して支拂を濟ます。これが、普通の場合に於ける國際貿易の仕方である。所が、歐洲戰爭中、交戰國は莫大の軍需品を輸入したが、その仕拂を金の輸出でやらうものなら、その國の金が皆んな出て了ひ、その國の貨幣制度は根本から破壞せられる惧が多くなつた。そこで一つにはその國の貨幣制度の基礎の破壞せられることを防ぐため、一つには一般國民の輸入を間接に統制するため、交戰國は、金の輸出を禁止し、一定の制限の下に之を特許することにした。

さうなると、金の支拂ひに困つた者は、金の輸出の自由な國に、債權などを持つてゐると、續々それを引出すので、日本も遂に、さうした金の引出しを防止する目的で、金の輸出を禁止し、一定の條件の下に之を特許することにした。即ち、日本が金の輸出を禁止した初めの意味は歐米交戰國のそれとは多少異つてゐた。所で、歐洲戰爭が終ると、米國が第一にその金の輸出禁止を解いて之を自由にし、次いで瑞典や英國やと云ふ風に、漸次、金の輸出を各國ともに「解禁」し、今日に於ては、金の輸出を禁止してゐる主なる國は、佛國と日本とのみである。「金解禁」とは、即ち、この金の輸出禁止を解くの意である。

所で、元來ならば、「金解禁」は、その國に十分の正貨(金)があれば何時でも出來る筈のものだ。然るに、日本は十數億圓と云ふ十分の正貨を擁しながら、これ迄その「解禁」をやらなんだ。この譯は、軍事上の立場から、萬一の場合に備へるため、正貨の流出されることを日本政府が嫌つたからであつたことと、井上日本銀行總裁のかつて語つた所である。

然るに、大正十二年の大震火災後に於ては、金の輸出禁止の意味は一變した。即ち、滔々たる輸入を制限するために、それが用ひられるに至つたのである。斯くて、爲替の下落となり、輸入は極力抑えられた。だが、その結果、爲替は騰落頻繁となり、物價はそれにつれて上下甚しくなり、ために、實業家は尠からぬ損失の危險に曝露せられた。その上に、將來、金の「解禁」が行はれて見ないと、物價はドノ邊に落付き、金融はドウなるか見當がつかない。金輸出禁止の下に於ては、それ等がすべて「變態的」になつてゐるからだ。そんなわけで、此際犧牲を忍んでも、「金解禁」をやらなくては、經濟の再整理は出來ないと主張する。これが金解禁論である。然るに、「金解禁」をいま斷行すると、爲替は騰貴し、物價は下り、金融は逼迫して、日本の經濟は再び一大不景氣に見舞はれる。それでは此の衰弱し切つた日本の財界は倒れて了ふ。だから、財界の衰弱が回復してから、おもむろに「金解禁」をやるべしだと反對論者は主張する。

今秋の米國大統領選擧と
ＫＫＫ秘密結社團

兼田一雄

ＫＫＫ秘密結社團と言へば、其名を聽いてさへも普通の人は恐れをなすが、事實同結社の潜勢力は驚く可きもので、政治上に、宗教上に、人種問題上に、其猛威をたくましうしてゐる。同社の三大政綱とも言ふ可きものはキリスト教新教の確保と、國家主義の樹立と白人種第一主義の高唱である。

歐洲戰後の反動思想の影響で、米國に於ても國家主義が色々の形に依つて旺盛になつて來た。或は白人種優秀主義の唱道となり、或は米國第一主義の謳歌となり、或は移民排斥となつて現はれた。

×

ＫＫＫ團は純アングロ・サクソン系人種の秘密結社であつて、他人種の入會は絶對に拒んでゐる。米化運動の障碍となると言はれてゐる黒人種や、ユダヤ人種や、アイルランド人や、黄色人種に對しては、慘酷極まる仕打をする事も稀でない。千九百廿年以後逐年會員數が增加して、千九百廿四年には四百萬人の會員を擁する有力な秘密結社團となつた。同結社員は會規は絶對に外部に漏らさぬ事を誓ひ、首領の命令には絶對に服從する事を要求されて居る。會員にして會則を犯す時は、直ちに死刑に處せられる事も屢々ある。斯かる狀態にあるゆゑ、會員の結束力の鞏固なる事は想像以上で、一度會議で決めた事は死を賭しても實現すると云ふ風である。我が日本の憤慨を買つた千九百廿四年の移民法も、其裏面にあつてはＫＫＫ團が必死の努力をして制定さしたものである。千九百廿四年頃の同結社の勢力はすばらしいもので、何者の力を以てしても制禦する事が出來なかつた。鐵石の如く團結力の强い四百萬人の男子が、全米中を荒し廻つたのだから、政府も政黨も手のつけようなく、唯だ彼等の御機嫌を損じない樣にとあせる許であつた。然し千九百廿五年になると、戰後のほとぼりも漸くさめて來て會員の數も段々減少して來た。丁度其當時ＫＫＫ團が、インヂアナ州の政治を完全に手中におさめ、猛威を振つてゐたが、突然大疑獄事件を突發さして、知事は監獄にぶち込まれＫＫＫ團の首領も殺人罪にて收監され、其他主だつた者の投獄を見、あらゆる新聞雜誌が筆を揃へて同結社の秘密を發き始めて、初めて世間の人はＫＫＫ團の秘密を知り恐れを抱いた。現在では約百萬人内外の會員を有するに過ぎない。

×

千九百廿四年の民主黨大統領豫選國民大會に出席した人々の半數は、ＫＫＫ團員であつたと言はれてゐる。アイルランド人を親に持ち羅馬キヤソリツク教の信者たる、現ニューヨーク州知事アルフレッド・スミス氏が同年の豫選に敗退を餘儀なくされたのもなる程とうなづかれる。

然し今夏擧行さるる民主黨全國大會に於け

る大統領候補者の當選に於ては、スミス知事が當選するだらう事は、衆目の一致してゐる所である。今年は南方諸州の投票を完全にスミス派に致す爲に、民主黨幹部はわざ〱會議場を南部のチャールストン市に選んだ程だから、民主黨本部は極力スミス知事の選擧運動を援護するものと思はれる。多年スミス氏の政敵たる前大藏卿マカヅー氏さへ、昨今は鳴を鎭めてスミス氏に對する不利な言は愼しんでゐる位である。スミス氏は知事としては無類の人氣者で、共和黨下のニューヨーク州で四度も續け樣に知事に選ばれた事實を見ても如何に同氏が一般に信頼されてゐるかがうかがひ知れよう。然しスミス氏は大統領に選ばれるとしては、無類の惡るい條件の下に置かれてゐる。人種的にはアイルランド系であり宗教的には羅馬舊教であり、憲法第拾八條に對しては飲酒派であり、其上ニユーヨーク市の惡政黨屋の巣窟と一般に信じられてゐるタマニー・ホールの幹部である。斯う云ふ事實は總て政敵をして、スミス氏を攻撃せしむる絶好の材料であつて、スミス氏自身も辯解する餘地がなからう。KKK團乃首領ハイラム・ウエズレー・イヴアンス氏は宣言書を發して、KKK結社は徹頭徹尾スミス氏の大統領候補に反對すると聲明した。同結社は主義として純アングロ・サクソン系米國主義を奉じ、新教を信じ禁酒法勵行を唱導し、總てスミス候補攻撃にはおあつらへ向きの政綱ばかりである。

百萬内外の會員しか有しない現在のKKK秘密結社團の力では、米國一の人氣政治家たるスミス知事を倒す事は不可能に近いと一般からは信じられてゐるが、團結力の強い宣傳術に長じてゐる同團の必死的努力は、案外スミス氏に致命傷を與へるかも知れぬと一方には氣づかはれてゐる。

×

KKK團の政治的勢力が、四年以前に比較して非常に衰へたと言ふ事は萬人の認むる事實であつて、フロリダ州以外に於ては、同結社團に依つて政治界が支配される樣な事はなからうと一般には信じられてゐる。カンサス州に於てはスミス知事がキヤソリツク教徒たるの故を以てKKK、團が再び起つてスミス氏に反對するかも知れない。スミス氏のお膝元たる紐育州に於ては、KKK團の政治的勢力は微々たるもので選擧には何等の影響もないだらう。唯だ羅馬舊教排斥黨のサンス・アンド・ドータース・オブ・ワシントン一派がスミス候補反對運動を續けてゐるのみである。是とても大局には何等の反響ももたらすまい。四年前にはKKK團勢力の根據地たるの觀を呈してゐたインヂアナ州も、今日は死火山の如く靜寂である。オハイオ、イリノイ、メーン、ミシガン、オレゴン諸州に於ては同團の意氣は頓に沮喪してゐる。

唯だ北部諸州のKKK團がスミス候補に反對するだらうが、彼等の大部分は共和黨員であるから、スミス派としては何の痛痒も感じてゐない。南部諸州の同團員はスミス氏には反對しないだらう。

スミス氏が民主黨公認候補となれば、オクラホマ州の大多數の投票は共和黨に行くかも知れない。同州には現在約廿八萬人の民主黨員がゐる。而して其の大部分はKKK團に操縱されてゐる。其上同州の新教の十六箇の大教會の牧師五十人は、あらゆる機會に於てKKK結社を庇護してゐる。故に羅馬舊教候補

たるスミス知事も、同州に於ては所詮望無きものと一般には解せられてゐる。ヴアージニヤ州に於けるKKK團の勢力は增しこそすれ、決して衰へてはゐない。同州は明瞭に反スミス州である。フロリダ州のKKK團員は昨年から今年に掛けて四年以前よりは五割の增加を示してゐる。同州十八萬人の投票者八萬人はKKK團の勢力圈内にある。此處でもスミスの當選はおぼつかない。ヂョーヂヤ州の同團の勢力は近頃めつきり衰へて政界にはあまり重きをなさないと見られてゐる。で同州は完全にスミスのものとなるだらう。アラバマ州の同結社の衰亡は殊に目立つ。千九百廿五年以後會員數は頓に激減して、現在では同州三十萬の投票者中わづか二萬人を操縱し得るに過ぎない。

　ミシシツピイ州の同團は、憐れにも殘骸を止むるに過ぎずして、同州のKKK團長でさへも會員の數の六割減せし事を承認した位である。其上フレッド・ワンカン氏一派が州議會開會每にKKK團排斥法律案を制定するので、同州の結社は今や四苦八苦の體である。アルカンソー州にはミスチック・ナイト・オブ・アメリカと云ふ反KKK團の秘密結社が出來てKKK團を完全に壓倒してしまつた。山中のケンタツキー州ではKKK團員は結社員として結束しては投票しない。民主共和の二黨員として投票權を行使する故、共和黨州たる同州はスミス氏の候補に反對するに違ひない。コロラド州の結社團は千九百廿五年以來四散五裂してしまつた。今日では州政界には何等の勢力を持つてゐない。

×

　斯く概略的に述べて來ると、現在の秘密結社團の實勢力は、千九百廿四年當時のそれと比較して四分の一減位した樣に思はれる。同團の勢力激減は卽ち現紐育州知事アルフレツド・スミス氏の大統領當選可能を有力ならしめるものである。若しスミス氏が民主黨公認大統領候補となれば、彼によく對抗して大統領の榮冠を握り得る者は、現大統領クーリツヂ氏以外に共和黨中には見出されない。クーリツヂ氏は再三聲明した樣に「大統領候補となる事を選ばないだらう」。

　又今や盛に立候補運動をしてゐるフーバー氏にしても、人氣の點に於てはスミス氏の敵ではない。殊にフーバー氏にはウオール街の財閥が反對してゐるから、例へフーバー氏が共和黨の公認候補になつた所で當選はおぼつかないだらう。然し商務卿フーバー氏が、共和黨公認候補になり得るかどうかと云ふ事が第一の大疑問である。今夏クリーヴランド市に於て開かれる共和黨全米大會に於ては、私の見る所では、現副大統領ドース氏とローデン氏一派が聯合してフーバー派に反對し、其結果ダーク・ホースが出現するのではないかと思ふ。さうなるとスミス氏がなほ一層の好チヤンスに直面する事になる。

　結局今秋の大統領選擧は、民主黨の公認候補たる可き現ニューヨーク州知事アルフレツド・スミス氏が、久し振に共和黨を打ち破つて白堊館の主人公となるのではないかと私は思ふ。（をはり）

新人會の歴史的足跡

——創立十年にして倒れた彼の社會運動史的業績——

赤松克麿

一

新人會が解散された。新人會を創立した我々に取つて、一種の感慨が起きないでもない。新人會が創立されたのは、大正七年の十二月上旬である。新人會の創立記念日は十二月一日となつて居るが、確然と何日に組織されたかは能く判明しない。創立日がハッキリしないほどに、新人會の生誕といふものは、發會式とか創立大會といつたやうな花々しい形式を取らないところの、極めて質實な雰圍氣の裡に醸成されたのであつた。しかし新人會の創立を策した私と宮崎龍介君と石渡春雄君とが、三人の署名で新人會思想研究會の第一回の掲示を大學の掲示板に現はしたのが、十二月上旬であることだけは、たしかな記憶がある。そうすると、新人會が生れてから死ぬるまで恰度十年の歷史を作つたことになる。此の十年は、世界大戰後の我國社會運動の歩んだ最も生彩のある最も波瀾に富んだ過程であつた。しからば新人會は、此の十年の過程に於て、如何なる歷史的貢獻をしたかといふに、決して自惚れる譯ではないが、新人會の殘した歷史的足跡は斷じて淺小なものではないやうに思ふ。

尤も新人會の行動は、最初から一定の方針の下に組織的發達を遂げて行つたものではない。新人會出身の多くの社會運動者等が、無產階級解放運動の分野に存在することは明かであるが、決して一定の陣營に集團して居る譯ではない。例へば社會民衆黨に居る私や宮崎君、日勞黨に居る麻生君、三輪君、舊勞農黨に居た佐野學君、細迫君のやうに、各々指導的立場を異にし、對立抗爭の關係にさへある狀態である。また新人會出身の者にして、實際の社會運動に投じた者以外に、學界、文壇、新聞界に乘り出したものも多數あつて、各々自己の信ずる立場を取つて居る。だから新人會の歷史的足跡は、社會運動の分野に於ける新人會としての、一定の組織的運動に在るよりは、此の會が、多數のそして各種の有能な社會運動者及び社會思想家を輩出した

事に在る方が大である。即ち新人會は、最近社會運動者の一大搖籃である。今日、新人會が田中反動内閣の毒刃に斃れたとしても、社會運動者の一大搖籃であり故郷であつた新人會の歴史的業績は、我國社會運動史の上に不朽の輝きを放つであらう。

二

新人會は最初、永く東京帝大の法科を傳統的に支配してきた官僚思想に對する反逆者として生れた。その發企者は石渡春雄、宮崎龍介、私の三人であるが、當時三人とも雄辯會辯論部の委員であつた。辯論部の委員は、各出身高等學校から一名宛出て、都合八名の委員が居たのであるが、以上の三人はその中の左翼分子であつて、それが辯論部の空氣に慊らないで、別派を形づくり、遂に新思想運動を起すことになつて、新人會なるものを組織したのであつた。新人會は間もなく麻生久君等の木曜會と合同して、やはり新人會と稱した。木曜會といふのは、我々より一二年上級であつた麻生久、棚橋小虎、山名義鶴、岡上守道、佐野學、河井榮藏、岩井壽郎、野坂鐵(彼だけは慶大出身)等の諸君が、新人會のやうに公然たるものでなく、少數の仲間内で社會問題を討究して居た一グループであつた。木曜會の諸君も同じく帝大の傳統主義に對する熱烈な反逆者の群であつて、唯だ我々のやうに公然たる旗上げをしないで、地熱のやうに沈潜して、反逆の思想を養ひ、機の至るを待つて居たのであつた。新人會と木曜會との合同は、傳統主義に反抗する意氣旺んな若き學徒の戰鬪意識に力強い拍車をかけたのであつた。

新人會がスタートを切つた大正七、八年の社會狀態はどうであるかといふに、世界大戰によつて惹き起された經濟的及び思想的變動により、不安動搖の氣流と革新的氣運とが、全社會に渦巻きつゝあつた。大正六年に起つた露國革命の事實、次いで起つた獨墺倒の革命の事實、大正七年の米騷動、勞働爭議の激增等々の現象は、時代思潮に敏感な青年知識階級に異常な衝動を與へ、歴史的なる時代轉換期の到來を想はせたのであつた。かくの如き社會狀勢が、反逆的な勇敢な一群の青年知識階級の獻身的熱情を動かして、社會運動に乘り出さしめたのであつた。

三

新人會は最初社會思想の研究團體として起つた。東大の第二學生控所では、研究會が頻繁に催された。しかし研究會といつても、冷靜に落ちついて理論の研究に耽るといふよりも、實行意識に燃えた熱情的な空氣に溢れた會合であつて、革命志士の集りといつたやうな感があつた。私の記憶によると、大正八年の一月卅日に法科の卅二番教室で新人會主催の講演會を開き、大山郁夫氏が「新人の意識」と題して啓蒙的な講演を試みたが、その夜、第二學生控所で會合を催した。此の集會は涙ぐましいまでに感激的氣分の漲つたものであつて、席上麻生

君は階級鬪爭に對する青年知識階級の任務を語つたが、彼の熱情的な魅力的な雄辯は、參會者に非常な感動を與へたやうであつた。大山氏の如きは當夜他に約束があつたのにも拘らず、それを外づして最後まで此の感激的な集會に踏み止まつた。その集會が終つた後、昂奮した面持ちで新人會へ入會することを申出た學生の中に、波多野鼎、平貞藏、君等があつた。次いで新明正道、早坂二郎、松澤兼人、山崎一雄、門田武雄君等が入つて來た。こうした集會の催される毎に、何名かの入會者が現はれた。宗教的傳道の後に信者が出て來るやうな趣があつた。

新人會の綱領は、私が起草したことだけは覺えて居るが、何月何日に發表したものか判らない。多分大正七年の年末頃に決定したものと思はれる。それは次に示す如きものである。

一、吾徒は世界の文化的大勢たる人類解放の新氣運に協調し之れが促進に努む。

一、**吾徒は現代日本の合理的改造運動に從ふ。**

右の綱領を見ても解るやうに、當初の新人會の指導精神は、純然たるマルクス主義ではなくして、資本制度に對する漠然たる革命主義であつた。そしてインテリゲンチヤ特有の人道主義が強い基調をなしたことは爭はれない。しかし當時の社會鬪爭は、先づ官僚主義と民主主義との對立抗爭に於て火蓋を切られ、大正七八年頃はその抗爭が高調に達したので、新人會同人が民主主義の味方であつたことは確かである。新人會の機關雜誌は大正八年三月六日に第一號を出したが、「デモクラシー」と命名した。その頃の「デモクラシー」は本來の限定された思想内容を意味するよりは、當時の澎湃たる社會改造氣運を總括的に表現する合言葉であつた。「デモクラシー」第一號を見るに、麻生君は「青年知識階級の一使命」といふ評論に於て「思ふに我國の現狀に於て、青年知識階級の使命は、政治的資本的能力階級と勞働階級との間に介在して、その懷抱する社會的眞理の理想を實現することに在る。而して斯かる理想を實現するためには、現在政治的物質的權力を獨斷する權力者と資本家とに對して、戰ひを開かねばならぬと同時に、勞働者階級に宣傳して、極力之れが合理的自覺を促さねばならない」と說き、佐野學君は「無産階級解放の道」といふ論文に於て各種の社會思想を紹介し、石渡春雄君はリープクネヒトの「軍國主義論」を紹介し、野坂鐵君はゾンバルトの「社會主義及び社會運動」を紹介し、私は「參政權の原理」を書いて、普通選擧要求の理論的根據を說いた。また小說としてツルゲネーフの「處女地」の一節が「ネツダーノフ」と題して揭げられた。

その頃、ツルゲネーフ等の小說に現はれてくるところの十九世紀末葉時代に於けるロシヤ青年によつて行はれた「人民の中へ」の革命運動が、我々を感傷的に刺戟したことは甚大なものがあつた。正義と眞理のために一切の犧牲を顧みず、民衆の中に投じて社會的變革を行はねばならぬといふのが、當時の我々の熱意であつた。つまり新人會當

初の思想傾向は、傳統的專制主義に對する反抗意識が强く、その意味に於て民主主義的であり、そしてまた人道主義的色彩が濃厚であつたが、社會主義に對する理解は尚ほ粗雜であつて、一言にしていへば、極て素朴な革命主義を抱いたのであつた。そして會員の風潮として、理論的討究に耽るよりは、實行的進出に重きを置いたのであつた。それもその當時の激動的な社會的雰圍氣が然らしめたのである。

四

「人民の中へ」！ 新人會の實行的熱意は抑へ難きものがあつて、勇敢に進出を始めた。佐野、山名、棚橋君等は勞働者街の月島に居を構へて、勞働者の組織と宣傳に努めた。山本懸藏君はその頃月島に現はれた最も有能な鬪士であつた。私や宮崎君等は、龜戸、日暮里、四ツ木方面に於て同じく宣傳と組織に從つた。後に至り、私は日暮里に、山崎君は大崎に居を構へた。その頃我々の宣傳に依つて集つた勞働者群の中で、龜戸の中心人物は渡邊政之輔君であり、日暮里の中心人物は岩内善作君であつた。山本、渡邊、岩内の三君は、新人會の初期時代の薫陶を受けた最も有名な勞働戰士である。月島で薫陶を受けた勞働者等は友愛會へ入つて其の左翼分子となつた。それはかねて友愛會の改革を志した麻生、棚橋、山名君等の意志に依るものであつた。

友愛會長鈴木文治氏が大正八年の春、巴里の國際勞働會議へ行くとき、「月島に革命が起る」と歎じて旅程に就いた。事程左樣に當時の月島は、友愛會右翼派に取つて恐るべき低氣壓であつた。

龜戸、日暮里、四ツ木方面には續々勞働組合が生れた。組合員はセルロイド工が大多數だつたので、新人セルロイド工組合といふ名稱をつけた。ストライキも起きた。我々は學生であつて何等經驗も有しないのに拘らず、ストライキを指導した。大正八年の十月、第一回國際勞働會議の勞働代表問題で勞働界に反抗氣運が沸騰し、友愛會、信友會等の主催の下に官選勞働代表桝本卯平氏に反對する大示威運動が行はれたが、新人會同人は新人セルロイド工組合を率いて之れに參加した。そのときの指揮官は門田武雄君であつた。このとき新人會員たる三輪壽壯、嘉治隆一、河西太一郎、林要の諸君が十名ばかり帝大の制服制帽の一群を成して示威行列に加はつたことは、社會の非常な注視をひいたのであつた。

その當時、友愛會は我國勞働の主勢力であつて、我々の關心の第一對象であつた。ところで友愛會は協調主義又は改良主義に據つて進んで來たものであつて——大正元年から七年頃まではそうした過程を進行することが最も妥當であつたが——當時の社會狀勢からするならば、何んとか一進化を遂げなければならぬ運命に置かれて居た。麻生君等は既に木曜會時代から友愛會の改革を目論んで、棚橋君は其の使命を帶びて、早くも司法官生活から轉じて友愛會に入つたのであつた。しかし棚橋君は會内の右翼派に押されて、可成り不愉快な日を送つて居た。我々は友愛會に對して如何なる方策を取るべきか、此の問題

が新人會本部で日夜議せられた。
或る論者は、友愛會のやうな協調主義的なだらしのない組合に見切りをつけて、別個に我々の力で勞働組合運動を起さうではないかと主張した。他の論者はあくまで友愛會を我々の手で改造し、これを更生せしめて日本勞働運動の指導的中心にしなければならぬと主張した。私は後の論者であつて、さうするがためには麻生君は此の際決意して友愛會に投ずべきだと主張した。かくして麻生君が東京日日新聞記者から轉じて友愛會の出版部長になつたのが大正八年の六月下旬であつた。新人會の手で作られた勞働組合は、友愛會へ合流せしめた。友愛會内部に於ては麻生君棚橋君を支持する左翼派が漸次勢力を得て、同年十月の大會では麻生君が主事に推された。かくして友愛會の更生は實現して、一般社會に對しても、友愛會は戰鬪的勞働組合としての歩みを鮮明に印象せしめた。友愛會の更生は、最近勞働運動史上に於て一個の劃期的意義を有する事件であるが、これに働きかけた新人會は、此の點に於てだけでも、我國の勞働運動史上に一個の重要な投影をなした譯である。

五

勞働運動勃興期に於ける勞働大衆の思想的自覺を高めたことに就いて、新人會は著しい役割を演じたといへるが、それは友愛會に對してのみならず信友會、日本交通勞働組合等に對しても行はれた。日本交通勞働組合は現在の東京市電自治會の前身であるが、新人會はその發會式當初から熱心に之れを援助し、多くの演説會や講演會には缺かさず出演した。當時の組合長たる中西伊之助君は、我々を演壇で紹介するとき「新人會の大學生諸君はロシヤの大學生と同じ理想を持つて活動せらるゝ人々である」と述べ、我々の援助に對していつも感謝して居た。

我々は勞働大衆に對してのみならず、一般民衆に對しても活潑な宣傳運動を續けた。金澤、福井、廣島、小樽、秋田等には新人會の支部が設立された。京都、名古屋、鹿兒島、熊本、仙臺等の各地へ演説旅行も試みた。我々の最も思ひ出の深い民衆宣傳は、大正九年の四月中旬に行ふた一週間ばかりの信州旅行であつた。同勢は私が監督といつたやうな形で、三輪壽壯、新明正道、門田武雄、山崎一雄、小岩井淨、千葉雄次郎君等の面々であつた。私を除いては皆大學生であつた。

新人會は學生社會運動の先驅を成したものであつて、しかも官僚主義の本山たる東大から、此の新氣運が萌え出たといふので、一般社會人の注目を引いたが、更に各大學の學生に對して一大センセーションを起したのは當然であつた。新人會の運動に刺激せられて、各大學に續々と新團體が生れたが、その重なるものは、早稻田大學の民人同盟會（高津正道君等が中心）建設者同盟（民人同盟會より分裂したものであつて、故和田巖、淺沼稻次郎君等が中心）、一新會（竹内正男君等が中心）、法政大學の扶信會（三木幸造君等が中心）等であつた。これらの

團體の同人達は始終新人會本部を訪れて友誼的連絡を取つて居たが、遂には新人會が首唱して、これらの學生團體が共同戰線を張ることになり、大正八年の十月十日、青年文化同盟創立大會を牛込矢來倶樂部に擧行し、越えて十月二十五日には本郷帝大基督教會館に於て創立記念演說會を開催した。青年文化同盟は其後あまり發展を見ないで消滅したが、その精神は亡びないで最近の社會科學聯合會を生んだ譯である。そして青年文化同盟に於ても、社會科學聯合會に於ても、新人會は常に指導的中心勢力を成したのであつた。

六

新人會の同人は全國的に遊說したばかりでなく、海を越えて支那朝鮮方面へも進出した。大正八年の七月、岡上守道（別名黑田禮二）君は北京からシベリヤへ、佐野君は滿洲へ、宮崎君は支那各地へ旅行した。彼等には他の用務もあつたが、一方新人會の代表としての任務も怠らなかつた。岡上君が歸つてきて、新人會の集會で述べた報告は、頗る興味の深いものであつた。彼の報告によると、彼は新人會代表として北京大學に於て熱誠な歡迎を受けた。そして北京大學生等が新人會の存在を熟知し、その活動に刮目し、「デモクラシー」を讀んで居るのには少からず驚いたさうである。當時の支那知識階級は、日本の新思潮の影響を蒙ることが大であつて、北京大學生の如きも、新人會の活動に可成り刺戟されたらしい。新支那の建設運動の先驅をなした北京大學に對して、新人會が一個の強い衝動を與へたことは、實に意義の深い事實でなければならぬ。大正九年の五月には、北京大學から彼の國の學生運動を代表する五名の遊日學生團がやつて來た。新人會同人は彼等を旅館に訪ふて意見の交換をし、また彼等を大學の山上御殿に招待して、一夕の晩餐會を催し、若き支那の戰士と若き日本の戰士とが堅い握手を交はしたのであつた。

七

新人會は最初、一體となつて日本の改造運動に從ふことを宣言したのであるが、學窓を出る者は、或は勞動運動に入り、或は大學教授となり、或は新聞界に入り、或は法曹界に入つて、各々獨自の地位に就くことになつた結果、會として一定の組織的行動を取ることは次第に困難を生ずることになつた。先輩の中の實行派は、學生會員に對して、實行的態度に出ることを勸め、その學究派は學生會員に對して硏究的態度に出ることを勸めるので、本部に陣取る學生等は其の去就に迷ふことが多かつた。玆に於て新人會の組織改造論が持ち上つた。それは千葉、東間、細迫、莊原君などの意見であつて、私なども之れを主張した方であつたが、いろ／＼議論の末、またその間には實行派と學究派との間に感情のもつれもあつたけれども、遂に大正十年十一月卅日の集會に於て、新人會は組織を變更して、新人會を以て大學生のみの會とし、出身者は會友たるべきことを宣言するに至つた。そして純學

派の人々――蠟山政道、石濱知行、河村又介、波多野鼎、嘉治隆一、佐佐弘雄、三輪壽壯、新明正道、平貞藏等の諸君は、別に社會思想社を起し、機關誌「社會思想」を發行して、社會科學討究の論陣を張ることになつた。

其後の新人會は、學生運動としてのみ、そして其の限りに於て大きな役割を演じた。學生運動は、黒田壽夫、友岡久雄君等の時代を經て、志賀義雄、是枝恭二、大宅壯一君等の時代になると活潑な歩調を取り出した。その頃、會内に二個の潮流を生じ、幹部派たる志賀義雄、是枝恭二、後藤壽夫、村尾薩男君等は少數尖鋭的な地下運動主義を主張し、非幹部派たる大宅壯一、菊川忠雄、服部之總、淺野晃の諸君は大衆主義を主張し、互に對抗したが、大正十二年十一月の集會に於て、幹部派は壓倒された形となり、大正十三年五月になつて、大衆主義を取る新しい中心勢力が確立し、その面々は、是枝、村尾、後藤、淺野、服部の諸君であつた。新人會は大學内に於て着々勢力を占め、綠會の各部に進出することになり、辯論部、新聞部等に於ては殆んど完全に管理權を其手に收めた。

新人會が學生運動に主力を注ぐやうになつてから、他の學生大衆に對する宣傳運動が積極的となり、その効果も著しく現はれた。大正十一年に入つてから、學生運動は全國的に活潑となつたが、その指導勢力は常に新人會であつた。大正十一年九月には、一高、三高、五高、七高、佐賀高、浦和高、新潟高の七高等學校に於ける社會科學生の聯合たる高等學校聯盟が成立した。また同年十一月七日には、全國學生聯合會が創立した。之れに加盟したものは新人會（東大）、文化同盟（早大）、七日會（明大）、社會批判會（日大）、社會思想研究會（早高）、七日會（女子醫專）、社會思想研究會（一高）、社會問題研究會（三高）、ＲＦ會（五高）、鷄鳴會（七高）、文化會（新潟高）等であつた。學生聯合會は大正十三年の九月、大阪高工の學生が市電從業員の罷業破りをしたことに反對運動を行ふたのを機會に、東京に第一回全國大會を開いた。學生聯合會は鮮明なるレーニン主義を奉じ、その行動に於ても學生特有の觀念的色彩が强烈であつたが、學校當局の忌む所となり、文部大臣は各高等學校の社會科學研究會に對して解散を命じた。また大正十四年十二月には有名な京大學生事件を起し、全國的に三十八名の學生が檢擧され、治安維持法最初の犠牲となつた。その中心人物の中に、是枝、村尾、後藤等の諸君が居た。過般の日本共産黨事件に於ても、檢擧された幹部の中に、、、、、、、、、、、、、、、、其他の諸君、そして新人會の薫陶を受けた、、、、、、、、、、、、君等が居た。新人會の生んだ多數の社會運動者、社會思想家は、今日、右翼派、中間派、左翼派のそれ〲の陣營に投じて重要な地位を占めて居るが、我國の共産主義運動の指導勢力は、明かに新人會系統の左翼派であるといつて差支ない。

日本漫畫家總まくり

村山知義

一

ブルジョアジーは大きな煽動力を持つ繪畫といふ藝術からその力を奪ひ去つて、自分達のための安全無害な玩弄物として置くために繪は實際的關心を寸毫も持つて居てはならないといふブルジョア美學をでつち上げ、「永久不變絕對の美」といふ不渡手形を發行した。この陰謀は一方、深淺の差はあれ、社會の姿に關心を持ち、之に積極的な批判を加へる畫家にポンチ畫家とか似顏繪描きとか漫畫家とかいふ特別な賤稱を與へて所謂畫壇から放逐することによつて完成された。

放逐された畫家達は自身ブルジョア美學を奉じてゐるので、此の屈從的な位置に甘んじますます自分達の繪を下劣に、低級にすることに依つて此の陰謀に協力した。

しかしプロレタリアートは此の陰謀を他のすべての陰謀と共に暴露した。

對立する二つの階級は對立する二つのイデオロギーを持つてゐる。

繪畫はどんな繪畫であらうとその畫家の屬する階級のイデオロギーを必然的に宣傳する。

「永久不變絕對の美」といふやうなものはない。プロレタリアートはそれ自身の美を、そしてその階級の發展に伴つて發展する美を持つてゐる。

現段階に於けるプロレタリアートの美は闘爭のさなかに、そして闘爭を通してのみ發展する。

二

繪畫は今や階級鬪爭の武器の一つである。

從つて我々の目の前には、ますます低級にそしてますます眞實から遠ざかりつつあるブルジョア漫畫と、生れながらにして勇敢に鬪爭しつつあるプロレタリア漫畫とがある。（漫畫といふ言葉は賤稱である。しかしそれに代るべき名稱とか、所謂「本畫」とか「漫畫」とかいふものの、新しい見地からの區別の立て直しは別の機會に讓つて、今は因習に從つて置く。）

まづブルジョア漫畫家を、それからプロレタリア漫畫家を見やう。

三

現在のブルジョア漫畫家はその殆んどすべてが大ブルジョア新聞のお雇ひか、それでなければブルジョア娛樂雜誌のお雇ひである。獨立の畫家とか彼等自身の漫畫雜誌の發行とかは新聞娛樂雜誌の大企業化と共にますます不可能となり、かうして彼等はただ益々彼等の主人の頤使に甘んぜざるを得なくなつてゐる。

彼等の漫畫をその題材によつて大約二つに分けることが出來る。政治漫畫と娛樂漫畫である。政治漫畫はブルジョア新聞の政治意見を漫畫に依つて强調して民衆を欺く役目を、

娯樂漫畫は娯樂雜誌の編輯意向を體して民衆を無智の境に引き止める阿片の役目をつとめてゐる。

岡本一平は題材の多方面さと、小ブル階級の人情に對する洞察と、優緻の白描に似た略畫法を發展せしめた獨自の形式と、驚くべきエネルギーとに依つてブルジョア漫畫家の代表者とも云ふべき位置をかち得てゐる。日本漫畫界の先達北澤樂天――彼は二十餘年前に既に新聞の時事漫畫を描き、漫畫雜誌「東京パック」を發行した――と共に日本のブルジョア漫畫を發展せしめた功勞者であるが、その事は同時にブルジョア美學の生命を長め、大震前後に於けるやうな、ブルジョア美術の破壊を單にフォルムの問題として解決しようとする運動を呼び起した當の責任者であるといふ事を意味する。

樂天の繪は一平の繪よりも内容的により淺薄であり、形式的にはより卑俗で混亂してゐる。殊にその色彩は下劣である。一平は進步的小ブルジョアジーの趣味に應じ、比較的上品であり、殊に性慾的傾向の少いのをその特徴とする。似顔や表情の描寫の天才である。

池田永治も隨分古い漫畫家である。日本式の略畫法を取り、主として人情風俗に題材を求めてゐるが、これといふきわ立つた特徴を持たない。

水島爾保布は一種稚拙な、しかも相當こまかいペン畫を用ゐる。主として會社員の生活などを婦人雜誌に描く。

河盛久夫は文化夫婦やモダンガールなどを題材とした漫畫を婦人雜誌に提供する。かういふ階級の人々の生活や感情を、自身さういふ階級に屬する者として巧みに描寫する。この範圍に於いての第一人者と云つてよいであらう。形式はつい最近、かういふ内容に適した獨自のものを獲得したらしい。種々新しい傾向の形式を取り入れ、それがまだ充分に消化されてゐないが、くねくねと曲つたペンの線と筆でのボカシを並用したハイカラな形式は或る程度の完成に達したと云つていいであらう。

下川凹天は毎夕新聞で活動してゐる。最近思想的に段々と覺醒めつつある途中である。彼の形式は他のすべての漫畫家のそれと斷然異なり、確實なデッサンを基礎とした、寫實風なものである。從つて彼の漫畫は不思議な現實的な力を持つてゐる。しかも彼の得意とする所はエロティックな題材である。グロッスの性慾的な畫は不氣味で陰慘であるが、凹天のそれはより朗かで現實的である。もし彼がこの技巧を持つてプロレタリア漫畫家となり得たならば、恐らく素晴しい力のある漫畫を發展させるであらう。

宍戸左行も轉向しつつある。しかしブルジョア新聞雜誌に描く以外に生活費を得る道のない現在の漫畫家の境遇は彼等の轉回を非常に困難なものとしてゐる。左行の形式は嘗ての太田三郎のペン畫を思はしめる曲線の多いことが特徴である。ただそれがあまりゴタゴタして不快感をそそることが往々ある。

細木原青起は矢張り日本式の略畫法を用ゐる。凡そ最近の漫畫のかういふ形式は石井鶴三の挿繪や一平の漫畫から起つた流行で、かう多くなつては鼻につかざるを得ない。青起の特徴は對象の醜惡化である。それがオットー・ディックスのやうに理論と熱意を持つた醜惡化であればよいが、彼のは殆んど單に下劣化である。私は個人的に彼を知らないが、

かういふ繪はデカダンだけが描く事が出來る筈である。

田中比左良は婦人雜誌專門の婦人用漫畫家である。眼の異常に發達した令孃を描くことを得意とする。近頃漫畫家から挿繪畫家に轉向して來た。

堤寒三は達者な筆意の文壇漫畫を描く。似顏に才能を持つてゐる。雜誌文藝戰線の最近號にブルジョア文壇罵倒の漫畫を執筆してゐるが、恐らく今や「無產派文壇漫畫家」になりつつある過程にあるので、プロレタリア漫畫家には程遠いものであらう。

其他擧げればまだ澤山あるがこの位ゐで打ち切らう。

要するに現在のブルジョア漫畫家はブルジョア新聞雜誌に密接に下屬してゐるので、殆んど獨自の個性を發展せしめ得ず、幇間的性質に成り下つてゐることに特徵があり、二三の優秀分子は眼覺めようとしながらも生活に脅かされて躊躇してゐるといふ狀態である。

四

日本のプロレタリア漫畫は生れながらにして鬪爭の武器である。我々はまだ（因習的な分け方に從へば）漫畫だけでないプロレタリア美術を發展せしめる端緒についたのみである。プロレタリア漫畫は更に廣いプロレタリア美術への母胎の役目をつとめてゐる。漫畫ビラ、ポスター等だけがプロレタリア美術だと思ふのは大きな誤りであるが、しかしプロレタリア美術は現實の鬪爭を通じてのみ發展し得るものであり、しかも運動の急激な展開が、更に複雜な手法の美術を獲得するための時間や技術を磨く餘裕やを與へないといふ一時的の狀態が、現在のやうな結果を招いてゐるが、我々は必ずそれを獲得するであらう。

全日本無產者藝術聯盟を初めプロレタリア藝術團體の美術部は若い有望な漫畫家を多勢持つてゐる。その作品は無產者新聞、勞農新聞、戰旗等々のプロレタリア新聞雜誌や時々催される展覽會等に發表されてゐる。

柳瀨正夢は最も古くからの、そして最も優秀なプロレタリア漫畫家である。初めグロッスの手法に非常に影響されて、一時はその模倣の觀を呈したが、最近すつかりグロッスを消化し卒業して、力强い獨自の形式を發展させた。無產者新聞に描く彼の漫畫は常にプロレタリアに勇氣と歡びを與へてゐる。

鍋丸昭彦は非常な年若さにも拘らず、既に渾然たる表現を獲得してゐる。同君の作品の如きは、プロレタリア漫畫は單にちびたペンや筆で勢よくガリガリ引つ搔き廻せばよいと思つてゐるやうな觀念論者への立派な手本である。

廣瀨宏、竹本賢三、海老原一郎、村田薰、永田一修、大月源二、鈴木賢二、松山文雄等々、我々の陣營は多くの優秀な漫畫家を擁してゐる。彼等は益々高まり、新しいプロレタリア漫畫家は續々として出てくる。

運動は彼等の作品に依つて勇氣を與へられ、朗かな哄笑を與へられ、そして我々は一丸となつて敵をこなごなに粉碎するであらう。

京雜詠

高濱虛子

京阪の間日を重ねて往復

菜の花に京大阪のゆきゝかな
菜の花に生徒の列のつゞくかな

堺郊外履中天皇の御陵

御陵守る船繋ぎあり春の水

同仁德天皇の御陵

町びとの寄附の櫻や御陵道

京滯在

暮春や到る所に遲櫻
行春や木立の間の東山
行春や京の宿りも早七日

眞葛原京餞寮即景

楠大樹春雨傘の隱れ去る
宿の名の春雨傘をさし連ね
春雨や傾け合ひし傘二つ

圓山長樂寺

裏門の斷り合ひけり木の芽阪
裏坂や人の踏まざる落椿

若葉の家にて

荻原井泉水

飛ぶや蝶の若葉に雨霽れたるや
緑に椎の花にほふ緑をかさね
雀戻つてゐる聲の若葉の門も背戸も
藤の殘りしを掃き今日の暮れずも
讀むに暗くて軒に蛙の鳴けば
杉の新芽も淋しけば柴笛をふく
戻りて若葉の雨の門さすばかり
わが松一木ことしの蟬の鳴出でしなり
みどりに夕風立てば家ある棕櫚の葉

鵓鴿屋根に鳴き日に日に茂りて來
蛙鳴く道へ送り出る主として醉うて
若葉雨さむき日の客に火を焚く
若葉さつさつと雨打そゝぐばかり杉の木
河鹿鳴きいでゝ來ぬ人を夜となりて
柳をふく夜風の暗く出でゝありく
買物取りひろげ苺のあさき箱も
楓の實が飛ぶ五月を旅せうもの

正岡子規

齋藤茂吉

○

正岡子規は、俳句の革新を企て、なほ和歌、新體詩、寫生文といふ工合に順々に爲事を休めなかつたのであるが、俳句の革新を爲すに際して、はじめ美の標準といふことを客觀的に求めようとした傾向がある。それであるから、ハルトマンの美學などを取寄せて讀んで見ようとしたのであつた。後になつて森鷗外の審美綱領を讀んだのなどもここに本づいてゐるのである。

しかし結局子規は、俳句を論じ、和歌を論じ、文章を論ずるに際して、自分の標準でどしどし結論をつけて行つた。それがいかにも鮮明であつて、快刀を以て亂麻を斷つが如き趣があつた。その氣持は既に、俳諧大要にも出てゐるが、晩年に書いた隨筆の中に最も鮮明に出てゐる。

『先頃の莉房漫草に美の事を論じて、獨りぎめになつては困るといふやうな事を書いてあつたと思ふ。余の考では、美の判斷は二人ぎめでも三人ぎめでも無い。矢張獨りぎめより外は無い。只々獨りぎめに善いのと惡いのといろいろある』(墨汁一滴)

莉房さんのつもりでは、獨りぎめといふのは無論惡い意味のドグマといふつもりであつたのであらうが、それを斟酌すれば子規の氣持も充分わかるとおもふ。

子規はその通りに實行した人である。又この文章はいかにも平淡で分かり易いものであるが、西洋人の唱へるむづかしい美の標準といふものも結局そこに歸着してしまふのであつて、實をいへば西洋人の方が勝手なことをいふ。それを取り卷く若干のエピゴオネンがゐて一つの流儀を形成するのであるけれども、日本人のやうに直ぐエピゴオネンになつてしまふといふやうなことはない。そこに行くと子規は年齡からいへば若かつたけれども、そして尖銳な神經を持つてゐたけれども、決してさういふ安易な漂動性は持つてゐなかつた。

子規は、美の標準の獨りぎめを認容してゐても、『只々獨りぎめに善いのと惡いのといろいろある』とことわつてゐる。それであるから、

子規はひどく勉強をした。俳諧大要で俳諧習學の第三期について論じたとき、『第二期は淺學なる者、懶惰なる者猶能く之を修むべし。第三期は勵精なる者、篤學なる者に非れば入る能はず』といつてゐるのがその氣持を證據立ててゐるのである。

獺祭書屋俳句帳抄の上卷の長い序文を讀むといかに子規が俳句の標準について苦しんでゐるかが分かる。あの序文を讀むと、誰でも、文學をやるものでも、科學をやるものでも、おもひあたることが必ずあるに相違ない。特に、『俳句をやり始めてから十餘年の間毎年毎年斯ういふ感じがする。して見ると十七字だと思うて馬鹿にしてをつた俳句もなかなか我等の力には及ばんといふ事がわかつて來た』云々のところあたりを讀むと、あの自負心の強いずばりずばりとやつて除けた子規の一面のほかに、つゝましく苦しむ一面がにじみ出てゐて爲めになるのである。

○

「文士保護未來夢」といふ四枚續きの畫をかいて見ようかといつて說明してある漫筆が墨汁一滴に載つてゐる。その第四枚目のところを次に書いておかう。

第四枚は、大宴會の場で、正面の高い處に立つて居るのが川上音次郎五代の後胤である。彼は次の如く演說する。此度、「明治文士」といふ演劇大入に付當世の文士諸君を招いて聊か粗酒を呈するのである。明治文士の困難は即ち諸君の幸福と化したのである。明治文士の灑いだる血は今諸君杯中の葡萄酒と變じたのである。明治文士は飯の食へぬ者ときまつて居たが、今は飯の食へぬ者は文士になれといふ程になつた。明治文士は原稿を抱いて餓死した者だが、今は文士保護會へ持つて行けばどんな原稿も價よく買ふてくれる。それが爲に原稿の價が騰貴して原稿取引所で相場をやる迄になつた。云々。拍手喝采堂に滿ちて俳優萬歲。文士萬歲を連呼する。

これは、明治三十四年四月十二日の筆に成つたものである。それだから、もう廿六七年にもなるわけである。「文士保護未來夢」といふ空談に類した一種のイロニーと、現在の文士の狀態とを較べると、やはり愉快な氣持になるので抄記して見た。

子規は新聞記者をした關係ばかりでなく、從來の俳人、歌人といふ側の人々とはその氣質にちがふところがある。子規は實に社會のいろいろの事に興味を持つた。その斷片は晩年の隨筆、墨汁一滴。病牀六尺。仰臥漫錄などに至るところに出てゐる。

『刺客は無くなるものであらうか無くならぬものであらうか』(二十三日)

『板垣伯岐阜遭難の際は名言を吐いて生き殘られたので少し間の惡い所があつた。星氏の最後は一言もないので甚だ淋しい。願はくは「ブルタス、汝も亦」と云ふやうな一句があると大に振ふ所があつたらう』(二十四日)

これなどはその一例に過ぎないが、子規は俳句を作るにも和歌を作るにも、常に象牙の塔にとぢこもつてゐるやうな離付ばかりはしてゐなかつたのはそのためである。子規は日露戰爭も知らず、露國革命も知らずに歿したのであるが、丈夫でゐるとしたらいろいろの事に口を出し手を出したこととおもふ。社會問題。思想問題。無論さういふものに口を出したに相違ない。寫生論者で、物質論者のやうなところがあつたから、ひよつとしたらマルクスあたりの說の一部に共鳴したかも知れない。ただ吹けば飛ぶやうな漂動性が子規にはなかつた。安價な"Beeinflussbarkeit"が子規にはないのであるから、直ぐエピゴヌスになつてしまふといふやうなことは無論なかつたのであらう。

『耶蘇信者某一日余の枕邊に來り說いて曰く、此世は短いです、次の世は永いです、あなたはキリストのおよみ返りを信ずる事によつて幸福でありますと。余は其の好意に對して深く感謝の意を表する者なれども、奈何せん余が現在の苦痛餘り劇しくして未だ永遠の幸福を顧るに暇あらず。願はくば神先づ余に一日の間を與へて二十四時の間自由に身を動かし、たらふく食を貪らしめよ。而して後に徐ろに永遠の幸福を考へ見んか』(明治三十四年三月十五日。墨汁一滴)

當時の夢みるやうな、耶蘇信者まがひの多かつた時代を顧慮すると、子規のこの短文でも相當に僕にはおもしろいのであり、引いて、現代に子規を生かしておいたらといふやう想像結論もここから誘導することが出來るのである。

子規はフランクリンの自叙傳を愛讀したといつてゐる。その行動の著實で漸次的なところを愛したのである。また、謙信と信玄とどちらが好きかといふと信玄が好きだと云つた。常陸山と梅ケ谷とどちらが好きかといふと、梅ケ谷が好きだといつた。子規にはさういふ一面があつたことはやはり面白いことなのである。

○

子規は年も若く、革進的の氣持を餘計に持つてゐたのであり、高濱虚子さんにやつた書簡を讀むと、大望を抱いて空しく死んで行かねばならぬ殘念さを細々と書いてゐる。そして子規くらゐ大望を抱いてゐる者も恐らく世間には尠いであらうといふことを子規自身が云つてゐる。さういふ風であつたから、世の文學にたづさはるやうな者からは、單に「野心家」のやうに見られたこともあつた。

『世間野心多き者多し。然れども余れ程野心多きはあらじ。世間大望を抱きたるまゝにて地下に葬らるゝ者多し、されども余れ程の大望を抱き地下に逝く者はあらじ。余は俳句の上に於てのみ多少野心を漏らしたり。されどもそれさへも未だ十分ならず、縱し俳句に於て思ふままに望を遂げたりともそは余の大望の殆ど無窮大なるに比して僅かに一事を値するのみ』(明治二十九年三月十七日、高濱虚子氏宛書簡)

かういふ調子であるから、アムビションなどといふことをひどく下等のやうに思つた時代にあつては子規の言行は稍異様に見えたに相違

ない。

子規はいつも革新は若い者でなければ出來ないといふことを口にしてゐた。『明治維新の改革を成就したものは二十歳前後の田舍の青年であつて幕府の老人ではなかつた。日本の畫界を刷新したものも後進の少年であつて漢法醫は之れに與らない。日本の漢詩界を振はしたのも矢張り後進の青年であつて天保臭氣の老詩人ではない。俳句界の改良せられたのも同じく後進の青年の力であつて昔風の宗匠は寧ろ其の進歩を妨げようとした事はあつたけれど少しも之れに力を與へた事は無い』といつた調子である。

さうであつたが、前にフランクリン傳のやうなものを愛讀したさういふ一面があるのであり、それが、李鴻章の馬關で狙撃せられた時のことを鳴雪翁に報じた手紙の中にも出てゐるのである。手紙の中には次のやうなことが書いてある。『貴如諭、馬關の變事は實に我々日本人義俠心の上に泥を塗りたる者にて殘念至極に存候。箇樣な馬鹿者は言語同斷の奴に御座候。津田三藏に比しても遙かに劣り候者と被思候。乍併、國家の觀念を除きて哲學的に大觀すれば、李鴻章は平生餘り我國を輕蔑致し候ひし天罰にて此災難に逢ひしものか。兎に角彼の擧動を聞くに、東洋の一豪傑と相見え度量の上に於てゆかしく存候。彼が佐藤總監の治療を受けながら、佐藤の胸上の勳章をいぢりて餘念なきが如き、子供らしき所作は尤も小生の感情を刺激致候』といふあたりは、なかなか面白いのであつて、三十歳になるかならぬかの子規が、六十歳を超えた李鴻章の擧動を批評するあたりがおもしろいのである。

さういふ子規は、明治三十五年九月十九日に歿した。高濱虚子氏の子規終焉記の一節には次の如く書いてある。

○子規子熟睡の狀常の如く。碧梧桐氏令閨と母君と枕頭に環り、余と妹君と臥す。○時々常に聞き慣れたる子規君のウーンウーンといふ聲を聞きつゝうと〳〵と眠る。○暫くして枕元騷がしく、妹君に呼起こさるゝに驚き覺め見れば、母君は子規君の額に手を當て、のぼさんのぼさんと連呼しつゝあり。碧梧令閨も同じくのぼさんのぼさんと呼びつゝあり。余も如何の狀に在るやを辨へず、同じくのぼさんのぼさんと連呼す。子規君は稍顏面を左に向けたるまゝ兩手を腹部に載せ極めて安靜の狀にて熟睡すると異ならず。しかも手は既に冷えて冷たく、額亦僅かに微温を存するのみ。時に十九日午前一時』

つまり、皆が氣づかずにゐたまに子規は死んだのであつて、極めて自然に樂に死んだことが分かる。高濱氏の文章にはなほ『母君の話に、蚊帳の外に在りて時々中を覗き見たるに別に異狀なし。唯餘り靜かなるまゝ、ふと手を握り見たるに冷たきに驚き、額をおさへ見たれば同じく稍微温を感ずる許りなりしに始てうち驚きたるなりと』といふこともあるから、ほんの僅かの間に息が絶えたことが分かるのである。

○

子規の文學は、俳句でも和歌でも寫生文でも評論でも、以上のやうな子規のした爲事と看做していゝと大體僕はおもふ。

僕は一人でひそかに子規を尊敬してゐる。子規のものは、俳句でも、和歌でも、論文でも、明快で、平淡で、いかにも分かりがよい。子規は、俳諧大要で敎へていふ。『俳句をものせんと思はば思ふまゝをものすべし。巧を求むなかれ。拙を蔽ふ莫れ。他人に恥かしがる莫れ』かういふ。子規のものはいかにもその如くに實行してゐるやうに思はれる。そこで、初學のものも、大家も子規のものはその價が分かるやうな氣がする。併し句作に長く苦勞した人でも子規のものに一種の物足らなさを感ずるごとくに見える。

不忍の鴨凝靜まる霜夜かな
力入れて蚕の卵をつぶしけり
首あげて折々見るや庭の萩
芍藥の衰へてあり枕もと
藥のむあとの蜜柑や寒の內
朝霜に青き物なき小庭かな
さまざまの蟲鳴く夜となりにけり
いもうとの歸り遲さよ五日月
鷄頭の十四五本もありぬべし
母と二人いもうとを待つ夜寒かな

比較的晩年のものから十句だけ拾つてみたが、俳句は極めて初學の僕、つまり全く作句の出來ない僕にも是等の句はどうもおもしろいものである。詞書を略したけれども、詞書をつけて、子規の日常生活を日中において味ふとなほ味ひが出てくるやうである。これは專門の士からは笑はれるかも知れんが、是等の句はやはり不易のものではあるまいか。淡々と云ひ放つてゐて、ちつともむづかしくなく、そこに無量の味があるのではあるまいか。しかし、句作に苦勞してゐる現今の俳人の多くは、かういふものでは物足らぬらしい。たゞ觀賞する場合には是等の句は決して素通りにして行つてはならぬものではあるまいか。それは現今のみではない。未來になつて、いつの世でも顧慮しなければならぬ性質のものではあるまいか。どうもさういふ氣がしてゐる。

『世上蕉風を信ずる者多し、我れ故らに奇を好んで檀林を學ばんと、是れ所謂負惜みの瘦我慢なり。而して瘦我慢より割り出したる俳句は毫も文學に非るなり。我れ其角派の系統を繼げり、故に其角派の俳句をものせんと、此の如く系統より割り出したる俳句は文學に非るなり』かういふ工合に子規は俳諧大要で敎へてゐる。それであるから子規は實にいろいろな先進から影響をうけ且つ學んでゐる。それにも拘はらずいつのまにか自分のものが出てゐるのだから、極めて僕らには爲めになるやうにおもふ。

ここに抜いた十句の如きは、寧ろ和歌的俳句で、俳句としては左程上乘のものでないといふ説を聽いたこともある。けれども、子規の晩年は、俳句も和歌も自在に作つたのであるから、もう、この二つは一如になつてゐたのではあるまいか。

子規晩年の隨筆集、仰臥漫錄のあるところで、芭蕉の『五月雨をあつめて早し最上川』といふ句を評して、

此句俳句ヲ知ラヌ內ヨリ大キナ盛ンナ句ノヤウニ思フタノデ、今日迄古今有數ノ句トバカリ信ジテ居タ。今日フト此句を思ヒ出シテツクヅク ト考ヘテ見ルト「アツメテ」トイフ語ハタクミガアツテ甚ダ面白クナイ。ソレカラ見ルト、「五月雨ヤ大河ヲ前ニ家二軒　蕪村」トイフ句ハ遙カニ進歩シテ居ル。

これなども子規の晩年の句評としてたいへんおもしろい。僕は子規のこの評には以前から反對であつたのであるが、子規のものを理解するうへに、なくてならぬ一つの標準といつていゝ程な材料だとおもふ。それから、仰臥漫錄に芭蕉の句を論じて、

芭蕉ノ、「アラ海ヤ佐渡ニ横タフ天ノ川　はせを」トイフ句ハ、タクミモナク疵モナケレド、明治ノヤウニ複雜ナ世ノ中ニナツテハコンナ簡單ナ句ニテハ承知スマジ、サリナガラ、「藪ナガラ大キナ町ニ出ニケリ　移竹」ノ如キ趣ニ至ツテハ却テ解セザル者多シ。

かういつてゐる。これなども兎に角晩年の子規の句觀であるから相當に注意していゝとおもふ。晩年といつても漸く三十五六歲であるから、五十歲になり六十歲になつた子規を想像すると又いくらか考の變るかとも思ふけれども、あの若さで、涙つぽい、甘いところをどしどし排斥して行つた子規の文學觀を僕はめづらしく思ひ、且つひそかに尊敬して止まないものである。

○

僕が和歌を弄ぶやうになつたのは全く子規の歌が機緣となつたのである。當時、「竹の里歌」といふ和歌の選集があり、それを計らず讀むと、『吉原の太皷聞えて更くる夜にひとり俳句を分類すわれは』とか、『人皆の箱根伊香保と遊ぶ日を庵にこもりて蠅殺すわれは』などゝいふ歌が載つてゐるので、ひどく驚き且つ喜んだ。かういふ種類の歌ならば、僕にも出來ないことはないと思はせたので、僕は直ぐさういふものを模倣することを努めた。

子規が和歌革新に手を著けたのは、先づ大體明治三十一年とされて居り、『歌よみに與ふる書』といふ鋭い歌論が日本新聞に載つたのも明治三十一年であり、『百中十首』といふ自作を公表したのも明治三十一年であるから、それ以前の作は僕等も餘り注意しなかつた。しかし「子規全集」の發行が完成され、書簡集などを通讀するに及んで、子規の和歌革新の志はずつと以前に遡つて考へねばならぬことになるのである。

例へば落合直文氏宛の書簡中、『近日歌論沸騰の餘、小生も彼是さし

出口叩くやうに相成り嘸かし御笑ひ種に相成候事と存じ居り候。尤も歌については前年來しばしば打て出でむとして出づる能はざる事情有之(先醒と衝突するが大原因に相成申候)それが爲め、歌といふものは人のも自分のも一切出さゞる方針を相取申候。然るに過日來歌論和歌續々あらはれ候につきては、愚論拙歌をも述べたく翔南氏に相願ひ候上にて拙歌等掲載の儀を許され、漸く數年來の宿志を遂げ申候。されば或は言の急激に渉り候もの之有候も、畢竟多年腹の中にためおける不平の一時に爆發したるによるものに御座候。拙歌に就きては攻撃四方より至り候へども、自ら多少信ずる所之有候上は、死を決してやる所存に候。猶此事に關しては御高見も承り度卑見も申述度候へども、病中不任意大略まで申上候。」(以下略)

また、愚庵和尚にやつた手簡にも、「今度の事にても、一朝一夕の出來心には無之、數年來の計畫、機を得て一時に發したる者に候。今迄歌の事といふと、いつも先醒と意見を異にした爲め、愚見を十分吐露するを得ずして終り候。それ故此度ははじめより羯南翁に請ひて歌論及び拙作掲載につき承諾を得申候次第に候。併し掲載後も翁よりは常に注意を受け居候」といふやうなことがある。

子規は愚庵和尚や落合氏に對しては、歌壇後進の態度を取り、遠慮して物云つてゐるが、心の奥の方にはどうしても曲げられない信念があつたのである。それであるから、明治三十四年の墨汁一滴では、落合氏の歌を評して一歩も假借するところがなかつた。歌から見たならば小にくいに相違ないものであつただらうが、子規自身は大眞面目であつたのである。

子規が落合氏の歌を評した序に、「こんな些細な事を論ずる歌よみの氣か知れず、などいふ大文學者もあるべし。されどかかる繊細なる處に妙味の存在無くば、短歌や俳句やは長き詩の一句に過ぎざるべし」と云つて居るが、これなどもなかなか名言であるとおもふ。つまり何時の代になつても敬服せられてゐる言葉なのである。

○

子規の歌風は和歌革新に着手した明治三十一年以後、毎年のやうに變化して行つた。その變化の跡は、大體、俳諧の歌風から萬葉調の歌風に變化したと看做していゝ。併しその萬葉調といふものも、江戸古學派の歌人のものや、そのほかぽつぽつと出現した萬葉調歌人のものとはどうも違ふものがある。一首なり、連作數首なりを通じて、もつと實際感が伴ひ、もつと活々としてゐる。これは晩年まで一貫した特色であるが、晩年になるに從つて歌風が追々平淡になつて行つた。

六月七日夜

ガラス戸の外に据ゑたる鳥籠のブリキ
の屋根に月映る見ゆ
ガラス戸の外は月あかし森の上に白雲長
くたなびける見ゆ

紙をもてラムプおほへばガラス戸の外の
月夜のあきらけく見ゆ

夜の床に寢ながら見ゆるガラス戸の外あ
きらかに月ふけわたる

小庇にかくれて月の見えざるを一目を見
んとゐざれど見えず

ガラス戸の外の月夜をながむれどラムプ
の影のうつりて見えず

照る月の位置かはりけむ鳥籠の屋根に映
りし影なくなりぬ

淺き夜の月影淸み森をなす杉の木間の高き
低き見ゆ

ほととぎす鳴くに首あげガラス戸の外面
を見ればよき月夜なり

月照らす上野の森を見つつあれば家ゆる
がして汽車往きかへる

これは明治三十三年の作であつて、俳調の百中十首時代のものと、明治三十五年あたりのものとの中間に位するものと看ていい。そして、連作體であり、曙覽や愚庵のものなどと相交流するところがあつても、やはり子規でなければ出來ないものが出てゐる。その看方も歌調も、すでに曙覽でも愚庵でもなくなつてゐる。

土筆

赤羽根のつつみに生ふるつくづくしのび
にけらしも摘む人なしに

赤羽根に摘み殘したるつくづくし再び往
かむ老い朽ちぬまに

赤羽根のつつみにみつるつくづくし我妹
と二人摘めど盡きなくに

つくづくししじに生ひける赤羽根にいざ
往きて摘め道しるべせな

赤羽根の汽車往く路のつくづくし又來む
年も往きて摘まなむ

つくづくし摘みて歸りぬ煮てや食はんひ
しほと酢とにひでてや食はん

つくづくし長き短きそれもかも老いし老
いざる何もかもうまき

つくづくし故鄕の野の摘みし事を思ひ出
でけり異國にして

これは明治三十五年の作であり、ずつと平淡に、一首一首の線が太くなつて行つてゐる。僕が最初子規の歌を讀みはじめたころには、かういふ歌の面白味は分らなかつたので、帳面に筆記した時にはかういふ歌は皆捨ててしまつてゐた。しかし子規に親しみ、子規を尊敬する

念が增長するに從つてその妙味が段々と分かりかけて來たやうである。特に晚年の俳句。

律、土筆とりに誘れけるに

看病や（家をいでて）土筆摘むのも何年目

病牀を三里はなれて土筆取り

といふのと比較したりすると特に哀が深いやうに思はれる。僕は終世子規の歌から感動を蒙ることであらう。さうして今となつてはそれを不滿だとは別に思はない。

——（正岡子規）——

○

子規は長い間の病床生活をして、さうして死んだ。子規は、人間の希望といふものはじめは茫然として大きく、それがだんだん小さくなるものだといつてゐる。そして自由が利かぬので、散步の樂、寄席に行く樂、細君を携へて湯治に行く樂などと算へてゐたが、それが、旅に行く自由、書籍を搜索する自由といふやうな希望に變化してゐる。しまひには、『ア、何を樂に殘る月日を送るべきか』といつてゐる。

けれどもそのあひまに俳句を作り和歌を作り隨筆を書き、寫生文を書いた。「死後」と題する死を客觀的に觀たと稱する一種の寫生文の如きはいかにも捨てがたい佳品であるとおもふ。この方面の爲事は、虛子、漱石の小說の源流をなしたと謂つてもさう妄言ではあるまいと思ふか、これは異說があるだらう。

『人間はエジエタチイフにのみ生くること能はざるものである』と森鷗外は云つた。これはいかにもその通りである。

正岡子規の如きは正しくエジエタチイフにのみ生きなかつた人と謂つていゝ。子規は境涯上、現世の物質的快樂から遠離せねばならぬ狀態におかれ、ひとり身でありながら、細君をつれて湯治に行く樂を空想したりしながら、あゝいふ爲事をして行つた。その藝術の魄力が、縱しんば規模の小さい俳句や和歌や寫生文に限局してゐると謂つても、おなじ人間の心に働きかけずにはおかないと僕はおもふ。

（昭和三年五月六日）

子規居士雜談

寒川鼠骨

文學全集の一つとして子規集が出たので、子規居士に關して何か書けとの御註文であつたが、私は子規居士に御厄介になつて居り、又子規全集編輯の責任者でもあり、子規庵保存會の肝煎でもあり、子規庵歌會の世話役でもある故に、私が子規居士の事を書いては、公平に考へるつもりでも、吾佛尊しの先入主に支配される嫌があり、どんなに公平に書いても世間からは例の手前味噌だと誤解を招く惧があるから、一層全然局外の方々に忌憚なき御批評を願つた方が面白からう、加之、私は煩事書くといふことも好まないのだからと言つて、一應お斷りしたのであつた。然るに局外の方々にも御差支が多いとかで貧乏籤は私に逆戻つて來た、それが子規居士の爲めであり殊に正岡家の爲めとあるから、私だけの適意に泥まれないので已むを得ず何かを書かねばならない運命に陷つたことを自分乍ら氣の毒だと思ふ。だから居士が和歌覺醒の祖であることや、俳句を復興した所の俳聖と云ひ得べきものであることや、又寫生趣味に立脚する新たな文章の創始者であることを書き立てゝ其功績を讃稱したり、又居士の作物に就て批評を試みたりするやうなことは可及的これを避けて、單なる雜談數則を書いてお茶を濁すことを許して貰ひたい。

××× ××× ×××

居士の父祖

居士の家は伊豫松山藩の士であつた。士としての職務は代々一樣ではなかつたらしい。居士は其父祖に就て左の如く記して居られる。

余が玄祖父は正岡一甫といふてお茶坊主の役をしたまひき。其道には心を委ねられし人と聞えしかば、定めて風雅なる話や、しやれたる道具もありしなるべきが、時代の古きと明治二年に我家の祝融にかゝりしとにて、また一物をとゞめず。只殘り居るものは千宗室よりの手紙十數通のみ。其外二枚屏風の張りまぜに

> 正岡宗匠の古稀を賀して
>
> 幾千代の日のかれて松のみどり哉

とあるのみ今に殘れり翁が正月禮にまはる時には必ず一枚の懷

盃を枕にして「のどかな事で御座います」と云ひたまひしとか。又嘗て五右衛門風呂を木炭にてわかし「其湯に入りて薪にてわかせしとは心地が違ふ」と云ひたまひしと。洒落の風、想ひ見るべし。曾祖父は玄祖父と遊び槍をつかひ、くさり鎌を使ふことを教へたまひしと。(下略)

我父にておはせし人は佐伯氏より来て正岡氏嗣子となりて曾祖父のあとを継ぎ給ひしが、明治六年即ち余が六歳の時、四十歳を一期として空しくなり給ひしかば余は少しもその性質挙動を知らず、只其大酒家なりしことは誰もいふ所にて、毎日々々一升位の酒を傾け給ひ、それが為めに身體の衰弱を来し、終に世を早うしたまへり。(下略)

子規居士は玄祖父の血の居士に至りて甦つたものらしく思はれる。尤も其の母君は藩儒大原觀山先生の長女であつたから、此の大原先生の血が混つて、愈々相俟つて、居士の偉大なものを練り上げたのであらう。

幼時

幼時は泣き虫であつて、色が青く、青瓢簞と綽名されてゐたことは、居士自ら記して居られる所である。身體が蒲柳虛弱であつたのを知るべきである。從つて一般の士族子弟のやうに、戸外で軍さ遊びをするやうなことはなく、主として室内遊戯や、讀書や、繪畫や、習字のごとき、寧ろ女らしい將た大人らしい遊戯を事として居られたのである。詩作の如きも、義務的日課といふよりも、娯樂的にやられたものが多いやうに、其記述されたものによつて想像する事が出來る。神童として郷黨に評判されたほどではないが、併し何處か違つた、秀でた、拔け出た子供として認められてゐたことは十二三歳頃の居士の手紙が大切に他人の手で保存せられてゐることや、又た十一歳の時の繪畫が、數十枚、全く關係の薄い他人の家に珍藏されてゐることなどによつて證據立て得るのである。其手紙や其繪畫を見ると、同年輩の普通の小供では、なし得ない程な老成さであるからして、當時から親類や、親類の知人や、さうした人々には可なり異常として注目されてゐたのである。

立志

志を立てゝ東京へ遊學したのはその十六歳の時であつた。併し其時には單に偉い人にならうといふ考へのみで未だ確かな目的は定まつて居なかつた。或は政治家にもなりたかつた。或は哲學者にもなりたかつた。唯だ軍人になりたくはなかつたのみで、其他に於て何にでも偉い人にならうといふ漠然たる考へであつたことは、當時の普通の少年の考へと少しも異つた所を見ないのである。文學に志して日本一の大文學者にならうなどゝは勿論考へ及ばない所なのであつた。寧ろ何れかと言へば、時代の影響を受けて「役人でなければ國會議員」といふ考へが頭の中にこだわつて居つて政治家にならうといふ希望を抱

いて居つたのである。此事に就て居士は自ら記して居られる。

余在郷の頃、某氏余に目的を定めよといふ。余いたく當惑したり、何となれば余の嗜好は詩を作り文を草することにありたれども、余は此時には漢學者の臭氣を帶びしゆへ、詩人書師などは一生の目的とすべきものにあらずと思考せり、さればとて他にはこれぞと思ふものもなし、醫者は大嫌ひなり、理科學は勿論蛇蝎視したり、それよりか寧ろ法律か政治かにきめんと思ひて無理にも目的を定めて某氏に言ひわけしたり（下略）

寧ろ政治家を擇ばうとしたのである。併し年少（十一歳）より詩を作り文を草し、又た寄席に行くことが好きで、軍談即ち講釋を聽いたり、家に在つては、源平盛衰記や、保元、平治物語や、馬琴の小説などを耽讀したりした文學的傾向は、容易に之れを素讀の治國平天下を第一義とする所の漢學的思想に基く政治科に引寄せ了せることは出來なかつた。其後に至り遂に哲學者たらんとし、大學豫備門より大學に進むに至つた時は、國文學を擇ぶに至つたのであつた。此の大學豫備門から大學進出時代に於ては、業に既に身に病を獲てゐたので、潑溂たる覇氣の幾分銷磨されてゐたけれども、それでも日本有數の文藝家にならうくらいな野心は勃々として内に燃えつゝあつたのである。其野心の燃え盛る一方に於て、時に其蒲柳虛弱な其身を顧みて萬感の胸に迫るものがあつて、遂に大業を成就し得なければ、同志の後繼者に頼まうとの念を抱いたのは、他に與へた多くの書文によつて十分認めることが出來るのである。

獲病

明治廿二年五月九日夜に喀血をした。即ち居士が二十三歳、第一高等中學在學二年生の時であつた。幼少から羸弱で青瓢箪と綽名されてゐたほどだから、無論腺病質の結核素質を持つて生れたのであつたらう それも其積りで攝生に注意をすればよかつたらうが、居士は其頃若氣にまかせて、可なり不注意な旅行を強行したりしたので、遂に茲に至つて、爆發したのである。健康が異常であつたことは大學豫備門（即ち第一高等中學の前呼）入學以前即ち廿歳頃からであつた。頭腦の重感があり又食慾不振のこともあつた。で其頃から幾分は注意してゐたので、廿一年即ち廿二歳のときには、向島長命寺境内の月香樓内に轉地療養をしてゐたほどなのである。然るに其初秋、暴風雨中を鎌倉から江嶋へ徒歩で遊行する如き無理をして喉中に紅點を認めたりして、可なり健康を損じてゐたのに、搗てゝ加へて翌二十二年には、春水戸に遊び那珂川舟中で雨にあひ戰慄を覺えたりしたので一層悪くしてしまつた。居士自身此の水戸の旅行を以て、喀血の近因と認めたのである。爾來健康は一弛一張、遂に又健全なもとの身體となることは出來なかつた。それでも相當勞務に堪え得るので、能く讀み、よく書き、よく食し、よく談じ、よく遊行したのであるに、惜しいことには明治二十八年（居士廿九歳）從軍記者として日清役に從ひ、高家の歸

上に臥し、食事十分に給與されぬやうな極端に不攝生の生活をした爲めに、爆發は再び來り、五月大連から歸る船中で大喀血をやつて、神戸病院に收容された時は殆んど重篤で、私も京都から見舞に行つたが、其時は兎ても此世のものとは思へない症狀であつた。さうして翌年には歩行の自由を缺き、三十年即ち三十一歳の時からは全く病褥に縛りつけられたやうに、稀に車上で送られる以外、殆んど一歩も移すことが出來なくなつてしまつたのである。

斯うして子規居士の生涯は、病氣と始終したやうなものであつた。病氣を抱いて居る人は神經質に陷り易いものである。所謂多感多情で感情の赴く所に走せ理性の定規を脫するのである。多數のさうした抱病藝術家の藝術は、感受性に富むと同時に、其感受の働き方が變態に陷るのである。支那の昔話に床下を蟻が行くのを牛が鬪つてゐると感じたといふのがある。それも敏感性を現すもので、其敏感が正常に働けば面白いが、時として變態に働く爲めに、斯樣な人の手に成る藝術は、其變態である點が目新らしく面白いだけで、どうしても千古を貫く不易性の大藝術とはなり得ないのである。子規居士は病を獲、病に終始してゐられたけれども、何時でも正常を失はなかつた。時に感情が迫つて泣くこともあつたがそれは一時性に過ぎなかつた。決して永久に續くものではなかつた。精神が病毒に冒されて變態性を帶びるやうなことは曾て無かつた。何時も毅然として正常な精神狀態を保つてゐた。子規居士の文藝的標準は、感情に置かれて理性を排し眞實を尊んで虛構を斥けるにあつたから、情感の鋭敏なことを非常に重んぜられたのであるが、併し變態性の情感を重んぜられることは無かつた。平賀元義の歌を評された言葉に見ても、それが最も明かである。子規居士の歌でも俳句でも詩でも隨筆でも小說でも、何處にも變態性の片鱗だも認めることが出來ない。何時も立派な健全な感情から生み出されてゐる文學なのである。これは斯樣な病氣を抱いてゐる藝術家としては實に稀な例と言つて差支あるまいと思ふ。若し子規居士が變態性感受にのみ敏であつたならば、恐らく子規居士の成し遂げた大事業は其の百分一も成就してゐなかつたであらう。殘る所のものは僅かに變態性により強き感受に出發する所の平凡な感傷的文學の何篇かに過ぎなかつたであらう。俳句の革命、和歌壇の大覺醒、そんな事業が、どうして正常を失つた精神に出來得るであらう。

超脫

病を獲て居ながら、帶患健康とでもいふ可き少康に安んじ得て、それを氣に病むことが少しも無いこと、子規居士の如き人には、私は出逢つたことが無い。唯だ強く自然を信じ總てを大自然に任せて少しも疑ふことなく恨むことなく怨ずることもなく斯樣な人の陷り易い厭世的若くは逃避的若くは盲目的信仰等に赴くことをしなかつた。居士は痛いものは痛いと叫び、苦しい時は苦しいと泣いた。其泣くも叫ぶも唯々之れを自然にお委せして安心して泣き叫んだのであつた。斯樣に

大自然の意志に絶對に委せてゐたからして、病氣になられた時も平氣であつた。

結核などは病氣の數に入らぬものに候。と言つたやうなことを人に答へてゐるのである。其著『啼血始末』を見ても、どれだけ病氣を馬鹿にして、本人が病氣に捉はれてゐないかを知り得るのである。『啼血始末』は居士自身が其喀血の始末を地獄の庭で陳述するものと假想して記されたものであるが、其序文だけを見ても、居士が病氣に對する心持が推想し得られるのである。

一日余書を開いて見る、忽ちドヤ〳〵の聲あり。首を回らせば則ち一群の鬼なり。余に一封の書簡を渡す。之を開けば閻魔大王よりの召喚狀なり。余惘然爲す所を知らず。鬼來て余が手を引き余が足を曳く、余曳かるゝまゝに随ひ行く。一鬼余に戲れて、曰く、汝名くるに丈鬼の字を以てす、我黨に入る亦近きにあるべしと。余一驚して腰を拔かす。終に鬼に引き立てられて閻魔の法廷に入る。大鬼小鬼廷中に滿ち〳〵たり。是に於て閻魔各々に机に就く。訊問を受くること數時、一鬼余を提げて一小門の外に出だす。門外黑暗にして咫尺を辨せず。忽ち一道の微光を見る、從うて其處に至れは地藏尊なり。地獄で佛とは此事ならんとて懇ろに道を問ふ。地藏錫杖を以て一直線に此方向に行けと敎ふ歩むこと數町、忽ち杜鵑の聲あり。佇立して聞く。泣くこと八千七聲、今一聲を聞かんとして覺えず足を側方に進む。乍ちゴロ〳〵然として千仭の谿底に落つ、喀血すること暫しと見て夢覺む。寝汗衣を濡す。乃ち訊問の次第を記して啼血始末と言ふ。伏して宣告の日を竢つ。

喀血をして、洒落文を認めて、迎ひに來た地獄の鬼共を揶揄してゐるのであるから、どんなに病氣を念頭に置かず、寧ろ興味を以て迎へ、すべてを大自然に一任して又干渉する所がないかを知り得るのである。此の病氣に捉はれず、正常を失せない態度は、居士の文章中に何處にも認めることが出來るのである。

斯んなことを書いてゐると埒が明かない。子規居士が小說家たるを斷念し詩人として立つに至つた動機をなした天王寺畔蝸牛庵に於ける露伴との會見、漱石氏との文學所見の應答漱石は之れを書に求め、子規は是れを自然に求めた相違など、書かうと思つて其緒に入りもせぬ內に既に註文の頁數を超えてしまつた。即ち一先づ擱筆する、不徹底の點は諒恕を乞ふ次第である。

父よ悲む勿れ（三）

麻生久



三

忠雄からさう訊かれると、佐多はいつもの率直な調子で始めた。

「一と口に云へば非常に不安な狀態だが、色んな噂が立つて、皆は迷つてる」

「どんな噂が」

「どんなと云つて、要するに、M炭坑會社に合併されるつて奴と、休山になるつて奴と、それから妹さんに大金持のお婿さんが來て、もつと盛大にやるつて奴と」

「ところが最後の奴はもう望みなしだ。君の聞く通りの始末だからハハ、、、、」

「で、何れにしても不安だから、此際、組合を作つて、萬一の時の備へにしゆうつて譯だ」

「うむ成る程ねえ。それで組合は出來るんだねえ」

「そ奴は大丈夫だ。もう準備もちやんと出來たし、何時でも發會式を擧げられる事になつてる。だが、癪にさはるのは、木つ葉役人の奴等なんだ。あ奴等の現金と來たら全くお話にならんからねえ。いつもたら、組合でも作ると云つたら、棍棒を持つて追つかけ廻る癖に、山が潰れる話になると、卑劣にも裏に廻つて坑夫達を暗に煽動してゐやがるんだ」

佐多は、憎惡に燃えるやうな眼をして、さう云ふと苦笑した。

「それで」

「それで坑夫連中は怖い者なしなんだから、大手を振つてやつてる。だから組合の出來る事なんかは譯はないんだが、奴等は今に、M炭坑會社に合併されるつて事が定まれば、直ぐに又、ひつくり返つてそつちの犬になるんだ。全く人間の風上にも置けん奴等だからなあ」

佐多は堪へ切らず輕蔑と憎惡に燃えながら、吐き出す樣に云つた。それを聞くと忠雄は輕く笑ひながら、

『ハ、、、そ奴は致し仕方がないよ。奴等も今度は鼻の下がひあがるかどうかの境目だからねえ。だがそんな事は更に關はず、M炭坑會社の方はどんな具合だね』

『詳しくは分らないが、色んな間諜を入れて、一切の調査をしてるらしい。夫れにお父さんは隨分馬鹿氣た契約をあの會社としてるやうだ。そ奴のためには首を締められてるらしい』

『例へば』

『例へば、何時までに借金を返さなければ、あの會社の代理人をお父さんの方に入れて、經營に參與させるつてな。そ奴を今やられてるんで、山の事情は向ふに一切筒拔けで、動きが取れないらしい。だから、たとへ妹さんが結婚しても、山が其儘こつちの手に殘るかは疑問のやうだ』

『成る程ねえ。そ奴は大分念が入つてるなあ。あの會社は何處でも其手をやるんだ。僕の親父なんか商賣人でも何でもないんだから、直ぐやられるさ。今やあ、大きい會社には、學校出の頭のいゝ奴が、そんな事をするために飼はれてるんだからねえ。總てが組織的になつて來たんだ。小ぽけな連中は、せつせと炭坑や何か見つけて、持つたけの金を注ぎ込んで、やつと自分の巣を作つたと思つてゐると、大きな鰐の口の中にパクリとやられるんだ。だが要するにそんな事はセンチメンタルな事さ。それが資本主義つて奴の正體だからねえ。それより、炭坑の狀態はどうかね。あの會社が合併するとなれば馘首や賃銀の問題なしぢやあ濟むまい』

『そ奴は問題だ。何しろ、お父さんのやり方は昔流儀で、經營は隨分杜撰なやうだし、それに今まではどちらかと云へば、溫情的にやつて來てるんで、あの會社が合併するとなれば大整理をやるだらう』

『さうすれば、結局、一と戰爭始まる事になる譯だねえ』

『まあ、そんな譯だ。併し近いうちに何れあの會社とは一と戰爭しなくちやならない時機になつてるんだから、丁度いゝだらう。組合が出來たもんだから、下げたい賃銀も下げられずに、もじ〳〵してゐやがるんだ。近頃は奴等も組織的に壓迫して來てるんだ』

『大いにやるさ。北海道の炭坑の眞中に坑夫組合の旗を立てるには少々の犧牲ぢや追つかないよ。皆犧牲にされたつて大きな未來の埋草だ。此際積極的に戰ふべしだ』

『それがいゝ』

佐多は簡單に、併し力をこめて夫れに應へた。二人の凝と物を見つめたやうな眼の中には、男性的な、鬪爭の意思に燃え立つやうな力強い光があつた。

三

その日の夕方には、多榮子を停車場に送り返すために橇が用意され

た。そして、佐多はも一度、多榮子を停車場まで送つて行く事に定められた。
多榮子が、大きな長い將校まんとに身を包み、同じやうに大きく不恰好な黑い頭巾を頭に被つた時に、忠雄は、慈愛に滿ちた眼ざしで妹を眺めながら云つた。
『そんな風をすると、まるで熊の娘さんのやうだねえ』
『ホヽヽ、お父さんのマントですもの』
多榮子は、兄からさう云はれて、自分の恰好を顧みながら笑つた。
『今夜はお父さんの癇癪玉が破裂するだらうね。兄さんは最早四年も聞かないが、お母さんも隨分年をとつたらうねえ。親不孝な子供ばかり持つてハヽヽヽ』
さう云つた忠雄の調子の中には、微かな哀惜に似た淋しさが籠つてゐた。多榮子はそれを聞くと、物悲しげに兄の方を眺めて云つた。
『二人共隨分年をとつたわ。それに面白くないからでしやう、お酒を飲んでは皆を罵倒するんです。兄さんなんかは始終槍玉に上るわ。それでも忘れられないんでしやう。何時かお父さんの机の抽斗を開けたら、兄さんの寫眞が這入つてたんですもの。お母さんは、お父さんが兄さんの事を餘り惡く云ふと、貴方だつて若い時には忠雄によく似てゐた』とお父さんの痛い處を刺すのよ。何時だつたか、そら兄さんが監獄に這入つた時、小包が屆いたでしよう。あの時も出すばかりにして玄關に置いてあるのを見つけられて、お母さんは大叱られ』
妹の話を聞いて居ると、忠雄の眼の前には、正直で恐ろしく頑固な痩せた父の顏や、何時も默々として夫に從つてゐる、忍從そのもののやうな優しい母の姿が浮んで來た。彼は其瞬間、父母に反いて、遠く家を離れてゐる者の、云ひ難い哀愁を、その強い胸に感ぜずにはゐられなかつた。
『さあ、もう用意が出來た』
軈て、佐多の素朴な聲が下から呼んだ。
そこで兄妹は階段を下りて行つた。
今朝、佐多と多榮子とを乘せて來たその同じ橇と馭者とが、もう出發するばかりに用意をとゝのへて待つて居た。佐多は多榮子が腰掛けるのを待つて、直ぐに其傍に腰を下した。そして大きな聲で叫んだ。
『さあやつて呉れ』
雷が耳の傍で落ちても平氣な耳を持つてる老馭者は、それでも直ぐに手綱を曳いた。
鞭が高く揚がつて、氣持のいゝ音がピシリと鳴ると、馬は一足二足後すざりしてから足を取り直した。
『さよなら』
『行つてお出で』
橇が辷り始めた時、忠雄は二人の後から快活な高い聲を投げ掛けた。
『そんなにして二人で乘つてると、シベリアの馬賊のやうだね』

最後の愉快な洪笑が、橇の上と下とで同時に起つた。

橇は、直に汚い炭坑町を通り抜けて、雪の野道に出た。

眞赤な、燃え立つ樣な夕陽は、今遠い西の空に落ちやうとして、荒涼たる雪の野原の一面は、美しい血潮の海と化して見えた。そして其血潮の海を走つて行く橇は、馬も人も血潮に染められて、眞紅に輝いた。

二人は思はず頭巾を刎ねのけて、思ふ樣降り注ぐ夕陽の光を浴びた。

『何て綺麗な夕方だらう』

『まるで繪の中を走つてゐるやうだわ』

二人の顏は滿面に光を浴びて、燃え立つ樣に輝いた。多榮子は其燃える樣な顏を振り向けて佐多の顏をまぶしげに眺めながら叫んだ。

『まあ、貴方の顏は、まるで血を浴びたやうですわ』

『あなたの顏も燃える樣だ』

佐多も多榮子の方を向きながら滿面に微笑を湛えて云つた。

『こんな綺麗な部落なら何處まで行つてもいゝですねえハ、、、、』

『ほんとにねえホ、、、、』

二人は又互に顏を見合はせて愉快に笑ひ合つた。何かしら、親しい清らかな氣持が胸に湧いて、何時とはなしに二人の心を結びつけて行くやうに思はれた。

三三

多榮子の父は、其日の夕方、未だ多榮子の歸らない前に、彼の婿……彼はもうさう定めてゐた……と一緒に歸つて來た。彼は非常に上機嫌であつた。何故なら、話が着々とうまく進んで行つたからである。

母は、玄關で、

『おい、おい』

と呼ぶ夫の聲がしたので、急いで玄關に出迎へた。と、彼女は思はずあつと聲をあげやうとしたのであつた。玄關の上り口に腰掛けて靴を脫いでゐる夫の前に、娘の花婿となるべき筈だつた青年が立つてゐるではないか。餘り物事に驚かない彼女の顏にも、流石に狼狽の色が現れた。

娘の氣象から考へて、或はと、何處か心の底に心配になつてゐたその心配が、昨夜の娘の口から、いきなり眞實になつて現れて、而もそれが意外に固い決心であるのを知つてからは、流石に冷靜な彼女も、あれやこれや考へられて、昨夜は一睡もする事が出來なかつた。此炭坑を棄てゝ旭川に引込むと云ふ事は、彼女にとつてそんなに苦痛な事でないばかりでなく、寧ろ望ましい事であつた。けれ共、あんなに此炭坑に執着を持つてゐる夫の事を考へ、又偶然にも、立派な金持の青年が現れて、向ふから結婚を申し込み、そのために、娘の身も片附き、炭坑も救はれると云ふ事になつて見れば、こんな望ましい事はないのである。彼女は衷心から此緣談のうまく進む事を祈らざるを得なかつた。

それがまあ、話もこんなに順調に進んで來た今になつて、昨夜の娘の意外な告白から、總ての事が逆轉して仕舞つたのである。夫が此話を聞いた時の、驚愕、狼狽、忿怒、罵倒それからおしまひに、ひどい絶望に陷る有様は、彼女の眼の前に、もう今からちらついてゐるのである。

「夫に知せたくない。併しどんなにしても知らせずには濟まされない」

二つの相反した考へは、永遠に出口のない渦卷の中に卷き込まれた時の樣に、彼女の頭の中で、ぐる〳〵と廻つてゐるのである。昨夜も一睡もせずに考へた。今日一日もとつをいつ考へ拔いた。けれ共、何の解決も見出す事が出來ずに、彼女はハラ〳〵しながら、夫の歸りを待つて居たのである。

それだのに、間の惡い事には、斷らるべき其青年が、何も知らずに、夫と一緒にやつて來たのではないか。

如何な彼女も全く狼狽せざるを得なかつた。けれ共、何も知らない上機嫌の夫は、妻の心などには無頓着に、朗らかな聲で云つた。

「定雄君が一緒に見えなすつたよ」

すると、立つてゐる青年は、莞然した、併しいくらかバツの惡さうな聲で挨拶した。

「又御邪魔に上りました」

「まあ、ようこそ」

と、彼女は、狼狽しながらも、いつものやうに優しく頰笑んでそれに應へた。

夫は、靴を脱いで上にあがると、青年の靴を脱ぐ間を待ちながら滿面に喜色を湛へて妻を顧みながら云つた。

「山の事で色々打ち合せがあるものだから、定雄さんに、今夜御苦勞を願つたのだ。忠助さんも次の汽車でお出な筈だよ」

「それは〳〵お寒いのに」

彼女は中腰の儘、それに應へた。

青年が靴を脱いで上にあがると、彼は自分で書齋に案内してから、居間の方にやつて來た。

彼はそこで洋服を脫ぎながら、晴れ〳〵した聲で妻に云つた。

「お母さん、俺にも亦運が向いて來たよ。全く立派な婿ちやないか。若いけれ共、どうしてなか〳〵やりてだよ。多榮には過ぎもんだ。うむ」

彼女は、夫のその言葉に何と答へていゝやら答へやうもなかつたので。たゞ、

「ほんとうに」

と、バツを合せて、夫の脫いだ洋服を片附けた。彼は着物に着換へて仕舞ふと、急に思ひついた樣に、

「多榮はどうしてる」

と、何の懸念もなく妻に訊いた。

三四

『一寸お友達の處まで行つて來ると云つて出掛けたのですよ』

と、彼女は出來る丈け事もなげに答へた。

『さうかい、何處の』

『追分の』

『追分の……それは又馬鹿に遠いぢやないか。今頃まで何を愚圖〳〵してるのだらう』

彼は眉を寄せて、幾分不機嫌な聲でさう云つた。それで彼女は本能的に娘を取りなすやうに云つた。

『いゝえ、もう直ぐに歸りますよ』

『何の用があつて行つたのだ』

『幾度も遊びに來るやうに手紙を貰つたとかで……』

『馬鹿ッ、此大切な時に、友達のところなぞ迂路ついてゐる奴があるか。お前がついてゐながら何故止めんのだ』

夫の機嫌が段々惡くなつて行くと、彼女は却つて、段々冷靜になつて行つた。彼女の性格には、そんな點で娘とよく似て居た。追ひ詰められると、或る點までは狼狽するけれ共それが或る點まで來ると、もう覺悟が定つたやうになつて、不意に驚く程冷靜になるのであつた。

で、彼女は今も丁度そんな氣持になりながら、冷靜に云つた。

『でもお父さん。滅多に出る事もないのですもの……』

それを聞くと、彼の癇癪玉は段々破裂に近づきかゝつた。

『馬鹿ッ、お前が第一そんな風だから、子供が皆勝手な事をするやうになるのだ。忠雄だつて同じ事だ……』

けれ共、彼女はもう夫れには何も逆らはずに默つてゐた。彼も今夜は根が上機嫌だつたので、それ以上妻を呶鳴り付ける事もなく、ストーブを燃し付ける樣に命じてから、

『歸つて來たら、お前からよく云つて聞かせなさい』

と云つて、書齋の方に出て行つた。

夫れから間もなく、又玄關に聲がして、彼女の弟がやつて來た。

彼も黒田家と同藩で、格は一段落ちたが相當の武士の家に生れた。兄弟と云つては、姉一人の二人切りで、姉の一家が北海道に移住して來てから十年ばかりして、自分もこつちに移住し、今では札幌で相當な雜貨店を開いて、何不自由なく暮してゐるのであつた。彼も保守的な點では義兄に負けなかつたけれ共、どちらかと云へば磊落な樂天的な性質の持主であつた。そして商賣の方にかけては、なか〳〵の腕利きであつた。

彼は、玄關で姉の顏を見ると、直ぐに滿面に悦びの色を湛えながら、磊落な聲で、

『やあ、姉さん、今度は愈々御目出度うですなあ』

と、浴びせかけた。そして、玄關から上ると、元氣よく外套をぬぎながら續けた。

—(父よ悲む勿れ)—

『今日は定部君も來たでしやう。どちらです定部君の方ですか』

けれ共、姉は、肥つた弟の窮屈相な外套を後から脱いでやりながら、その弟の快活な調子にそぐはない、沈んだ調子で囁くやうに云つた。

『それがねえお前、ほんとに困つた事になつたのだよ』

『え丶、困つた事になつたつて、何がですか』

弟は、あり得べからざる事のやうに、不審げにさう反問して姉の顏を眺めた。さう云へば、彼は今まで氣が付かなかつたけれ共、姉の顏は沈んで、何となく憂欝に見えた。彼は急に氣がかりになつて來た様子で、いくらか急き込みながら訊いた。

『さう云へば姉さんの顏色は土の様だ。一體どうしたんですかね』

『まあお前、一寸こつちに來てお異れ』

姉はさう云ひながら、自分が先に立つて弟を自分の室の方に連れて行つた。弟は姉の後について室に這入ると、火鉢の前に胡坐を組むと、

『一體何か起つたのですか。何も起りさうな筈がないんですかねえ』

と、如何にも腑に落ちぬ様に云つて凝つと姉の顏を見やつた。彼女も、弟の顏を見やりながら、秘密な事でも打ち明ける時の様に、

『多榮がねえお前』

と、云ひ出した。

『多榮がどうしたんです』

姉の言葉を聞くと、弟は又しても急き込むやうに訊ねた。

『それがお前、昨夜になつてから、突然厭だと云ひ出したのです』

それを聞くと、彼は不意に電氣にでもうたれたかのやうに叫んだ。

『何ですつて、姉さん、多榮が厭ですつて』

『あ丶、多榮がお前……』

『馬鹿な、そんな事があるものですか』

と、彼は夫れが信ずべからざる事であるかの様に自分で強く否定した。

『それは一體どう云ふ譯なんですか』

『どう云ふ譯と云つてお前、結婚なぞして炭坑主の奧さんだなぞと云はれるのは厭だと云ふのだよ』

『え丶、炭坑主の奧さんなどになるのは厭だ』

彼は事の愈々意外なのに第二の驚愕の叫び聲をあげた。そして罵るやうに續けた。

『夫れぢやあ、何と結婚するんですか。乞食とでも結婚すると云ふんですか、馬鹿なッ』

弟の激しい言葉を聞くと姉はそれを宥めるやうに云つた。

『そんな事をお前、私に云つた處でしやうがないぢやないかね』

姉の淋しげな言葉を聞くと、彼は急にがつかりして、云つた。

『それはさうですけれど、餘り馬鹿々々しい話だからですよ。そ奴あ兎に角困りましたねえ。多榮は今家にゐるのですか』

『いゝえ、今日は一寸お友達の處に行くと云つて出掛けたのだがね、もう歸つて來るよ』

『まさか家を逃げ出したのではないでしやうねえ』

『そんな事はないよ』

『ふむ』

と、弟は呻くやうに云つて凝つと無言の儘考へてから、今度は落着いた聲で訊いた。

『此話は未だ義兄さんは知らないのでしやうねえ』

『あゝ未だ何もお話してないのだよ。そんな暇もないし、それにお客さんも一緒だものだからねえ』

『何しろ、そ奴は困つた。多榮はどうしても嫌だと云ふのですか』

『それがお前、私も昨夜になつてから突然あれから聞いて、たゞ吃驚したゞけなんだからねえ』

『だけど、今までにそんな話はちつとも無かつたぢやないですか。義兄さんだつてあんなに話を進めてゐる位ゐだから』

『それがお前、お父さんは、何でも一人定めなんだからねえ困るのだよ。今度も未だあの子から判然した考へも聞かないうちに、自分一人で定めて話を進めなさるんだから、私はどうも何となく安心が出來なかつたのさ』

『だつて姉さん。こんな良い話が何處にあるものですか。本人の人物もよし、金もあつて義兄さんの炭坑は引受けると云ふのだし、夫れに多榮も良く知つてゐるのですもの。これが厭だと云ふのなら、全く乞食とでも結婚するより仕方がない』

『ところがお前、近頃の若い者は、私達とは考へが違ふんだからねえ』

『どんなに違ふんです。いくら違つたつて、誰が考へても良い物は良いに違ひないし、甘い物は誰が食べたつて甘いぢやありませんか』

『だけどお前、忠雄を御覧、大學まで卒業してあんな事をしてゐるぢやありませんか。あれのする事も私には分らないよ。監獄などに這入つて何が面白いのかね』

『だが姉さん、あ奴は別ですよ。あ奴は氣狂じみてる。あんな奴は標準にならないハヽヽ』

弟は吐き出すやうに云つて笑つた。

『でも、さうとばかりは考へられないよ。私にはどうも又時勢が變つて行くやうに思はれるからねえ。坑夫達でも昔と今とでは、まるつ切り心が變つて來たからねえ』

姉は弟の言葉を押へるやうにさう云つた。それを聞くと又弟は姉の顏を眺めながら反問するやうに云つた。

『ぢやあ姉さんは、多榮も忠雄と同じだと云ふのですか』

『さあ、それはよくは分らないけれど、どうもあれのする事も私には分らない。長屋に出入りしたり、長屋の娘と交際したりして』

三六

夫れを聞くと弟は、急に高い聲で、姉を詰る様に云つた。

『そ奴はいけない。又姉さんがついてゐて、どうしてそんな馬鹿な眞似をさせるんです。坑夫の娘と交際させるなんて馬鹿なつ』

『だつてお前、そんな事を、一々あゝするなこうするなと云つて見たところで、しやうがないぢやないか。それに家の山で使つてゐる者であつて見れば、坑夫達にしたところで可愛がつてやるに越した事はないのだからねえ』

『だから姉さんは駄目なんですよ。子供なんぞは、びし/\やらなくちや爲にならない。第一今日あたり友達の處にやるなんて、それから間違つてる。近頃の若い奴の云ふ事なんぞ一々肯いてゐたら、世の中は顚倒つて仕舞ふ。親の事も考へなければ家の事も考へない。おまけに自分の事だつて何を考へてるか分りやしない。一體誰のお蔭で大きくなつて學校に入れて貰つてるんだ。處が近頃は第一にその學校が駄目になつちやつたんだから始末が悪い。小生意氣にばかりなつて、危險思想の養成所のやうなもんだ』

弟は遂々内心の欝憤を姉に向つて吐き出し始めた。姉は弟の方を悩しげに眺めながら穩やかな聲で諭へるやうに云つた。

『だつてお前、私にそんな事を云つたつてしやうがないぢやないか。うちのお父さんだつて若い時には隨分分らない變な事ばかりしてゐたのだからねえ』

『それはさうですけれど、餘り話が馬鹿々々しいからですよ。そんな事になつたら、義兄さんも私も、面目は丸潰れだ。多榮はもう歸つて來ますかねえ』

『あゝ、もう歸つて來るだらうよ』

『多榮が歸つて來たら私に知らして下さい。私から良く話をして納得させますから、未だ義兄さんには耳に入れない方がいゝです』

『それぢやお前から、あれに良く話して見てお呉れ』

『話しますとも、こんな事が默つて肯いてゐられるものですか。そんな事になりでもしたら夫れこそ大變だ。義兄さんはどんなに絶望するか知れやしない。夫れに多榮にした處で、今はそんな馬鹿な事を考へてゐても、後になつたら屹度後悔しますよ。その位ゐな事が分らないなんて馬鹿なものですなあ。あの息子だつて、どうして立派なものですよ。あんな婿は鐘太鼓で探したつて見つかりやしない。それぢやあ私は書齋の方に行つてゐますから多榮が歸つて來たら知らして下さい。山の方の話も大分進んで來たんです』

彼はさう云ふと立ち上つて書齋の方に出掛けて行つた。

多榮子が家に歸り着いたのは、最早日が暮れてから暫時後の事であつた。

彼女の心は、非常に強くなつてゐる樣な氣もするのであつたが、汽車から降りて、雪の道を自分の家に近づくに從つて、何か知ら重苦しい不安な氣持が胸の中を蔽ふて來るのを感じない譯には行かなかつた。そして町を出外れて、坂の下までやつて來て、其小高い岡の上に建つてゐる西洋館の父の書齋の窓に、明か〳〵と光がついてゐるのを見出した時には、思はず凝つとそこに立ち止つて、不安氣にその方を眺めやつた。そして、彼女の心の中には、

『もう父は歸つてゐるらしいが、母は自分の事を最早父に話したであらうか』

と云ふ疑問が湧き上つた。

彼女は何となく進む事が出來ないやうな氣がして、暫時そこに立ち盡してゐたが、纔て意を決したやうに、早足で一氣に坂道を登つて行つた。

玄關を開けて内に這入つた時、そこには三足の靴が行儀よく並べられてゐるが、ふと彼女の眼についた。そして其一足が判然と彼女の眼に映じた時、頭巾の中に隱されてゐる彼女の顏には、名状しがたい驚愕の表情が突差の間に現れた。そして、青白い頰の皮膚の下には、薄紅色の血潮がさしさへした。彼女は玄關に立つた儘、何と云ふ事もなしに暫時の間其靴を凝つと眺めてゐた。それから又、そつと開けた玄關の硝子戸をそつと閉めて、音のしないやうに上にあがると、辷るやうにして自分の室に行きかけた。彼女は心の底から、誰にも逢ひたくなかつたのである。

三七

けれ共、彼女の其望みは直ぐに不可能に歸して仕舞つた。銚子を持つて、奥の座敷の方に行きかけてゐた小間使は、彼女の異樣な化粧のやうな姿を見つけると、彼女の眼くばせにも拘らず、いきなり、

『まあ、お孃さんのその恰好はネ、、、』

と、大きな聲を立てゝ笑つて仕舞つた。

すると、直ぐ台所の方から母親の聲が聞えて來た。

『誰だえ』

『奥樣、お孃樣がお歸りになつたのですよ。まあ大變な恰好をなさつてネ、、、、、』

多榮子は、もう絶對絶命になつて、廊下に立つた儘急いで頭巾を外しにかかつた。けれ共、ボタンはかたくて、なか〳〵外れなかつた。

母は臺所から出て來て、娘の有樣を見ると、呆氣にとられたやうに叫んだ。

『まあ、お前はどうしたのだえ。そんな恰好をして……』

やつと頭巾を外して首から上を外に出した多榮子は、顏を火のやうに眞赤にして、苦笑しながら、狼狽てゝ云つた。

『遲くなつて濟みませんでした』

母は立つた儘娘の方を見やりながら窘めるやうに云つた。

『もうお父さんも、とつくにお歸りだし、お客さんもあるのに、そんな恰好をして今頃までお歸りでないなんて、ほんとにお母さんは困つて仕舞ふよ』

やつと、マントを脱ぎ終つた彼女は、

『ほんとに濟みませんでした。餘り久し振りだつたものですから、つい話が長くなつて』

と詫びるやうに云つた。母親は一寸考へるやうにしてから又彼女に云つた。

『一寸用があるから、私の室までお出で』

母はさう云ふと、自分の居間の方に行つた。多榮子もマントを手に持つた儘、後に從つた。母は、娘が火鉢のそばに坐ると、待ち兼たやうに話し始めた。

『多榮さん。お前ようべお母さんにお話の事はどうなんだえ。お母さんは餘り不意の事で頭が茫やりして何も分らなかつたけれど』

『え〻』

多榮子は、母の憂鬱な不安げな顏を仰ぎながら當惑し切つた樣子で云つた。

『え〻つて、あの話は眞實の話なのかへ、お母さんには眞實のやうに思へないのだよ』

『でもお母さん、眞實ですもの』

さう云つて、訴へるやうに母の顏を仰いだ多榮子の澄み切つた黑い深い瞳の中には、強い決意と一緒に、母の理解と許を乞ふやうな一種云ひ難い複雜な表情が籠つてゐた。

それを聞くと母親は佗しげな樣子をして凝つと娘の顏を眺めながら、心の底から當惑した樣に、しんみりと云つた。

『ほんとにお前達にも困るねえ。どうして兄妹ともさうなのだらう。兄さんがあんな風だからお前ばかりはと思つてゐたのに……』

『お母さん御免なさい。けれ共、私は結婚する事がどうしても厭なのですもの』

母と娘とは、絕對絕命のやうになつて、默つた儘、暫時の間向ひ合つて坐つてゐた。母は又穩やかな聲で娘に云つた。

『さつき札幌の叔父さんが見えなすつたから、お前の話をしたところが、叔父さんは吃驚しなすつて大變心配してゐるのですよ。私からは、お父さんにお話しする事は出來ないし、まあ叔父さんにお賴みするより外に道はないのだからねえ。叔父さんは、お父さんになんか話していけない。俺が多榮によく話しをして納得させるとお云ひで、お前の歸るのを待つてゐられるのですよ。こ〻まで話しが進んで來て、今になつて駄目になつたら、お父さんも叔父さんも、ほんとに立つ瀨がないのだからねえ。それは、お前の返事をよくも聞かないで、こんなに話しを進めたのには、お父さんの方にも落度はあるのだけれど、誰が考へても今度の話ばかりは不足はないのだからねえ。お父さんのなさる事にも無理はないよ。お前の方に無理がおありなのだよ。今迄

父さんを呼びますから、お前の室で待つてお出で。そして叔父さんのお話しを聞いてから、お前もさき〴〵の事も考へて、も一度考へ直してお見れ』

多榮子は、たゞ、うなだれた儘、默つて母の言葉を聞くより他に道はなかつた。

三八

多榮子は自分の室に歸つてから、敵陣に拉せられた捕虜が、只一人牢獄の中で、今にも齎らされるであらう宣告を待つてゐる時のやうに、机の前に身動きもせずに坐つて叔父の來るのを待つてゐた。けれ共、凝つと物を考へながら見詰めてゐる、彼女の深い黒い瞳の中には、今眼の前に絶對の力を以て迫つて來る者に對して、自分の意思を押し通さうとする者の、寧ろ狂暴に近い情熱と決意とが籠つてゐた。彼女のすきとほつた白い頬には紅がさして燃えるやうに輝いて見えた。けれ共、その全體の表情は、何處やらに、皮肉な反抗的な薄笑ひを帶びて、寧ろ冷酷に近いやうな冷やかさを窺はれた。

彼女は、ほんとに、身動きもせずに、化石したやうにきちんと机の前に坐つて、叔父の來るのを待ち構へてゐた。

軈て、廊下を大股に歩いて來る音が聞えると、直ぐに多榮子の室の障子が開いて、そこに、肥つた血色のいゝ、にこやかな叔父の顏が現れた。彼は多榮子の方を眺めると、平常よりもつと快活な優しい聲で呼びかけた。

『おゝ歸つて來たね。今日は追分まで行つたつて、それは大變だつたねえ。寒かつたらう』

彼はさう云ひながら、彼女の挨拶を待たずに室の中に這入つて障子を閉めると、火鉢の側にどつかりと坐つて、おつかぶせる樣に云つた。

『どうだ。お前の結婚の話しも大變具合よく進んでゐるんだが、それに就てお前は昨夜お母さんに何か駄々をこねたさうぢやないかハ、、ハ、、。餘りお母さんに心配を掛けちや可哀さうだよ。ねえさうぢやないか』

彼は、事もなげに冗談らしくさう云ふと、啣へてゐる煙草の煙を吐き出しながら、姪の顏を眺めた。彼は其瞬間、姪の顏の餘りに眞面目なのに内心吃驚したのであつた。けれ共そんな事には無頓着な樣に、直ぐに又後を續けた。

『昨夜は何かお前の虫の居所が惡かつたのだらう。ねえ、まさか怜悧なお前が本氣でそんな事を云ふ筈がないぢやないか。お前も家の事情はよく知つてゐる事だし、まさか、お前がお父さんや叔父さんを殺すやうな事があり得やう筈がないぢやないか。家の事情を拔きにした處で、あの青年なら誰が見たつて、お前が結婚して恥かしい筈がないし、それにお前も小い時から良く知つてゐるのだからねえ。お前がお母さんに話したやうな事は、叔父さんには、どうして冗談とより思へんよ。ねえさうだらう』

彼は、一寸にさう云つて仕舞ふと泣き伏せ得たやうににこ〳〵しな
から姪の顔を見やつた。けれ共多榮子は深く俯向いた儘、うんともす
んとも云はずに默つてゐた。それを見ると、彼は、少しむつとしたや
うに云つた。

「お前は默つてゐるが冗談ちやないのかい」

すると、姪の唇が急にほころびて、其中から意外に判然した強い
言葉が迸り出た。

「え丶、叔父さん。私冗談にそんな事なんか云ひませんわ。私は結婚
する事が厭なんですもの」

「え丶」

と、彼は飛び上るやうに云つた。

「冗談ちやない。結婚する事が厭だ」

「さうなのです。叔父さん」

彼女は、止めを刺すやうにも一度きつぱりとさう云つてから、叔父
の顔を眞正面から見やつた。其瞬間、彼女は、何故ともなく非常に皮
肉な感情に襲はれて、危なく笑ひ出したいやうな氣にさへなつたので
あつた。

けれ共、變つたのは多榮子の表情ばかりではなかつた。その瞬間、
叔父の顔からも、今までの柔かな表情が消え失せて、非常に氣むづか
しい厳格な、ものを壓するやうな表情が夫れに變つた。彼は唸るやう
に、

「うむ、さうかい」

と云つて、暫時、考へる樣に沈默してから今度は締めつける樣な態
度で云つた。それは丁度、相手が一筋繩では行かない事を悟つた時
に、開き直つて相手にか丶つて行く樣な風であつた。

「それでお前は、これからどうしようと云ふのだい。お前も、それ丈
け大膽な事を考へるのなら、自分にも相當の考へがあるのだらう。そ
れを一つ叔父さんに聞かして呉れ」

三九

「私どうもしませんわ、叔父さん」

叔父の詰め寄せるやうな態度に對して、多榮子は又、それを刎ね返
す樣に、事もなげに答へた。

「どうもしない。どうもしないつて何の事だ」

多榮子は、只默つて、冷かに叔父の顔を見上げてゐた。

「お前も馬鹿ぢやないのだから、お前が今此結婚を斷つたら、此家に、
どんな事が起るか分らん事はないだらう」

「それは分つてますわ」

「分つてるなら云つて見い」

「そんな事は叔父さん云はなくつても分つてるぢやありませんか。お
父さんが此山を諦めて、旭川の方に歸つたらい丶のですわ、簡單な事
ですわ」

彼は、夫れを聞くと、顏を眞紅にして、頭をふる〳〵と打ち振りながら、怒りに堪えないやうに怒鳴つた。

『馬鹿ッ誰がそんな事を訊いた。貴樣は、俺を馬鹿にしてるな』

『そんな事はありませんわ』

多榮子は、自分の心が愈々氷のやうに冷たくなつて頭が冴え切つて行くのを感じた。

『お前は、子として親の事や家の事を爪の垢ほどでも考へた事があるか』

『ありますわ』

『何、誰が考へた』

『私が考へてゐるのです。考へてゐるからこそ、さう決心したのですもの』

多榮子は、も一度、叔父の顏を眞正面から見詰めながら、睫毛一本動かさずに、きつぱりとさう云つた。叔父の身體はわな〳〵と顫えるやうに見えた。

けれ共、暫時してから、彼は又自分を立て直して、今度は、しんみりと、幾分訴へるやうな調子で始めた。

『だが多榮子、お前はも一度考へ直す事は出來ないかね。お前が、うん、と云つて與れさへすれば、此炭坑も人手に渡さずに濟むし、さうなれば、お父さんやお母さんも、どんなに悦ぶか知れやしない。それにお前だつて幸福ぢやないか。人物もよく學問もあるし、お金も持つてるし、そりやお金などはどうでもいゝとお前は考へるか知らんが、世の中と云ふ奴は、自分が自分の力で生活をするやうになれば、どうしても無くてはならんものだよ。一人息子の事だから、あの財產はお前達の物になるのだし、こんな良緣は探したつてありはせん。お前の將來も、それで立派なものになるぢやないか。何が不足なんだか、叔父さんには薩張り分らんのだ。これ程、總てにとつて幸福な事はありやせんと思ふがな。それに話しもこゝまで進んで來てゐるのに、どうして斷るかい。今日もあゝして來てゐるぢやないか。お前の頭は、ちつと間違つてゐやしないかね。それぢやあ叔父さん達を殺すやうなものだ』

『でも叔父さん。それは私の責任ぢやありませんわ。お父さんや叔父さんは、何も私の知らないうちに、ずん〳〵話しを進めて仕舞つたのですもの』

『うむ、それは俺が惡かつた。だが夫れも別にお前のため惡しかれと思つてやつた事ではないのだからねえ』

『それや良く分つてますわ。お父さんや叔父さんが、どうして私のため惡しかれと思つてなさるものですか。私は心から有難いと思つてゐるのですもの』

『それぢやあ、お前は一體何が不足で厭なのかい。あの息子が嫌ひなのかい。あの息子は、お前も小い時から知つてゐてよく可愛がつて貰つたぢやないか』

『いゝえ、叔父さん。私の厭なのは、あの人が厭たとか何とか云ふのぢやないのです。私は最早、炭坑主の奥様になつたり、金持の奥様になつたりする事が厭なのです』

多榮子は、屢々吐き出すやうに、何も彼も叔父の前にさらけ出して云つて仕舞つた。そして最後の攻撃の來るのを待ち構へるやうに、其黒い瞳を決意に輝かせながら、寧ろ挑むやうに、叔父の顔を見守つた。

四〇

けれ共、彼女の期待した相手の最後の攻撃は、最早來なかつた。叔父はたゞ、

『うむ』

と云つた切り、最早、番うべき矢が無くなつて仕舞つたかのやうに、彼女の前に兩腕を組んで、何か考へに沈むやうに、兩眼を深く閉ぢて仕舞つた。そして其顔は困惑そのものゝ、かたまりのやうに見えた。

多榮子は、山の様に動かない叔父の前に坐つて、重苦しい息詰るやうな壓迫を感じない譯には行かなかつた。それでも彼女は、頑強に、その壓迫に抵抗しながら、眼を疊の上に伏せて、身動きもせずに默つてゐた。

地上の何物をも、其激しい力に依つて吹き飛ばさなければやまない大嵐か、そして、自分をも其中に卷き込んで、何處か天外に、いやいや古い慣習の世界の中に、連れ戻さうとする、暗澹たる大嵐か、今自分の身邊に吹き荒びつゝあるのだ。

『もう一瞬だ。最後の五分間だ。私は勇敢に戰はなければいけない。默つて夫れを克伏しなければいけない』

彼女は心の中に判然と強くさう感じてゐたのであつた。

暫時すると、叔父は兩眼を開いて、憎悪するやうな顔付をして、多榮子の方を見やりながら、吐き出すやうに云つた。

『お前達の兄妹は、畜生にも劣つてゐるねえ。親の事も考へなければ、家の事も考へん。そして親に弓を引くやうな事ばかりをしをる』

多榮子は、叔父の憎悪するやうな罵倒を、疊の上に眼を伏せて、無言の儘聞いてゐた。彼女の感情は、氷のやうに冷え切つて、理性は蒼空の様に澄み切つてゐた。

『昔なら、お前達のやうな兄妹は、手打ちになるところだが、今ぢや時勢が變つたから、のめ〳〵と生きてゐられるのだ。日本も、かうなつて來ちやあ、最早おしまひだ。今の若い奴には義理も人情もありやせん。どうせそんな奴は、終りには野垂死をするか、監獄の中で首を括る位が落ちだ。お前も、今に、あの馬鹿な忠孝の眞似をするつもりだらう』

彼はさう云つてから、一寸默つて、今度は命令する様な口調で云つた。

「だが、此話しは、お父さんにする事は出來ん。叔父さんが、よしと云ふまで、お前は外に出る事はならんぞ」

彼は、さう云ひ終ると、不意に立ち上つて荒々しく障子を開けて出て行つた。

多榮子は、叔父が出て行つて一人になつてからも、机に凭れた儘、化石したかの樣に、凝つとして身動きもしなかつた。

その夜、家の中の空氣は、全くちぐはぐな變なものであつた。

父は非常に上機嫌で、一と通り事業に就ての打合せが濟むと、娘の婿であり、自分の事業の救ひ主である若い客人を座敷に伴つて、そこで酒宴を始めたのであつた。

彼は、段々酒がまはつて來ると、いゝ氣持になつて、炭坑經營に就ての經驗談を持ち出して、氣焔をあげたり、M炭坑會社の遣口を罵倒したり、時には、如何にも頼もしげな婿の地質學に關する學説を聞いては大いに感心したりした。そして進歩的な自由思想を抱く婿が、勞働問題に就ての話しを持ち出した時には、昂然として自分の意見を述べ立てゝ、大いに老人の意氣を示し、婿が、動もすれば勞働組合を認めやうとしたり、忠雄の辯護をしたりしやうとする時には、斷乎として夫れに反對の説を述べたてた。

『勿論』

と、彼は醉ひの廻つた顏を愉快氣に輝かしながら喋つた。

『わしも、若い時には自由民權論者だつたのだから、從つて學者、つきり平民と云ふ事に對しては大いに同情を持つてゐる。夫れに、昔の主君は、家臣に對しては、慈愛を與へ温情を以つて之を養つて來たので、わしも、わしの山の坑夫は自分の子供だと思つて大いに可愛がつて來てゐる。その點は決して人後に落ちんつもりぢや。だが、勞働組合など云ふものを作つて、徒黨を組んで主人に刄向ふと云ふ事になれば、こ奴は別問題ぢや。こ奴に對しては徹底的に戰はんけりやならん』

彼はこんな氣焔を擧げる間々には、婿の氣持を酌んでか、妻から娘が少し身體が惡く休んだと聞いたに拘らず、思ひ出したやうに、

『おい、多榮子はどうしてる。お客樣がいらしてるのに』

と、呶鳴り立てた。

濟度の道

プレーム・チャンド作
サバルワル譯



「濟度の道」の譯稿に就て

佐藤春夫

原作者のことは、無論、僕は一向知らない。だから今はただ印度現代の作家とだけ覺えてゐて貰ふより仕方がない。譯者に聞けば多少精しくわかる筈だが、生憎と譯者は關西へ旅行中で、これを書くまでには間に合はない。

譯者サバルヷル君は、近ごろ知り合つた僕の友人である。年少で印度の政治運動に關係し、その結果は故國に居られなくなつたらしい。二十二歳の時に我國へ來て以來十二年間、我國に住み慣れてこゝを彼の第二の故國にしてゐる。無論、彼は日本語と日本の風俗習慣とに精通してゐる。又、藝術の愛好者で、柳、志賀、武者小路、谷崎などの諸君とも交友である。諸君にくらべると僕が最も新らしい友達である。彼が故國の文藝を我國に紹介したい志がある事を知り、僕は僕で古い文明を持つた彼の國の過去及び現在の文藝が、彼の如き人を通してわが國へ紹介されるのは、絶好の機緣だと思つた。彼は日本語には精通してゐるが日本の文字には熟してゐないので、僕は友人の井伏鱒二君を彼に紹介して、その仕事を井伏君に手傳はせた。井伏君は御承知の人もあるだらうが誠實新鮮な小世界を持つた有望な新進作家の一人である。井伏君の有力な助力を得て出來上つたサバルヷル君の譯稿は一ケ月のうちに短篇三種ほどあるが、特殊な味のある原作も明快な譯筆も充分讀む價のあるものだと僕は信じてゐる。ここにお目にかけるのはそのうちの一篇である。

譯者が外國人であることを不思議に思ふ讀者もあらうかと思ひ、またこの一篇を見てサバルヷル君の仕事の爲めに誌面を提供しようといふ編輯者がこの雜誌以外にも出て來るやうにと冀ひ、僕はこの譯稿のはじめに敢てこの駄文を書かせてもらふことにした。サバルヷル君の志す仕事が、多少でも我國の藝苑に異香を芳らせることが出來たら、僕としても甚だられしいからである。

一

巡査には赤いターバン、淑女には衣裝飾り、そしてお醫者には來診患者、といふやうにそれぞれ自分の見せびらかしものがある。その見せびらかしものは、百姓にあつては、畑にそよぐ五穀を眺めることに

こそあるが！　ジヒンガは自分の砂糖黍の畑を眺めてゐると、彼は陶然として來るのであつた。それは三ビガー（一ビガーは七六五坪）ばかりの砂糖黍畑で、いくら棄値にふんでみても六百ルピーの價はある。また萬一神樣のおかげでもつて秤の目が都合よく行くとすれば、それこそこれに越したことはありはしまい。牛は二ひきとも年をとつたから、今度パテーサのお祭の時、新規に一つがひ買つて來よう。そして何處かに二ビガーほどの畑地が見つかつたら、そいつも買つてやるつもりなんだ。金にいとめをつけるもんぢやないぞ！

　商人達もすでにジヒンガには一目おいてゐた。村には誰一人として彼に喧嘩をふきかけられないものはなかつた。そして彼は何んな人をも屁とも思はなかつたのである。

　或る日の夕方、ジヒンガは男の子供を膝の上に抱いて、豌豆の中味を豆鞘からぬきとつてゐた。するといつの間にか羊の群が向ふからやつて來てゐるのが見えた。彼は腹の中で呟いた。

「こゝは羊を通す路ではないのだぞ。何故あの羊は畑の畦路から通らせないのだらう？　あいつらは今に畑を踏みあらしたり食ひあらしたりするに違ひない。一體この償ひは誰がしてくれるんだ？　あいつは羊飼のブッドウらしいぞ。近頃あの小僧は生意氣になつて來た。道理で畑の中もかまはず羊を連れて通らうといふんだね。俺がこゝに居るのを承知でゐながら羊を連れ戻さうとしないとは、あの意地つ張りの態は何うだ！　俺は塵一本もあの野郎に恩を着てはゐないぞ。あの野郎を勘辨してやる理由が何處にあらう？　しかもあの羊を一ぴき買つてくれとでもいつたら、彼奴は五ルピーにもふきかけるだらう。世間の相場では毛布一枚が四ルピーだといふに、あの野郎は五ルピーより安くては相手にならうともしない奴だ」

　間もなく羊の群は畑のそばまでやつて來た。ジヒンガは怒鳴りつけた。

「おゝい！　その羊を何處へ追ひ込んで行くんだい？　畑と路の見さかひがつかないのかい？」

　ブッドウはおとなしい口ぶりで返辭をして、

「旦那、うまく砂糖黍と砂糖黍の間を通りぬけますよ。まはり路すれば一コース（一コースは一哩半位）ほども遠くなるぢやないですか」

　ジヒンガは、

「そんならお前にまはり路させないために、俺は畑を踏みあらしていたゞくのかね？　砂糖黍の間を通りぬけるのなら、何うして俺のところのでなくてよその畑を通らないんだ？　俺のことを溝浚ひか革剝屋かとでも思つてゐるのかい？　それともお前はお金がたまつたので鼻が高くなつたのかい？　その羊を追ひ返せい！」

　ブッドウは、

「旦那、今日だけ特別で通らせておくんなさい。若し今度からこの路を通つたなら、何んな咎めでも受けてかまひませぬから」

　ジヒンガは、

「そいつらを追ひ返せと俺は言つてゐるんだ。若し一ぴきでも畑の中に踏み込ませたら、貴様はひどい目にあはされるんだぞ！」

ブッドウは、

「旦那、若し羊がお前さんの畑の中の麦一つでも踏んだたら、何んなひどいめにでもあはせてもらひますよ」

ブッドウは非常におとなしい話しぶりで答へてはゐたが、しかし羊を追ひ返すなぞとは自分の沽券にかゝはることだと思つてゐた。彼は自分の心の中で考へてゐたのである。こんな些細なことで嚇しつけられて、羊をまはり路さしてゐたら、羊飼の商賣は干あがつたりだ！今日譲つてしまへば明日からは羊を連れて出る路がなくなるわけぢやないか。すべてがこんな風では、俺は誰にも彼にも嚇しつけられどほしでゐなくちやならんわい。

ブッドウは氣丈な男である。彼は方々の家から羊を預かつて自分の羊ともで十二コリ（一コリは二十ぴき）の番をしてゐて、一コリの羊の番をすれば一日に八アンナ（一アンナは半ルピー）づつもらへた。その上に彼は羊の乳をしぼつて賣つてゐた。毛布もつくつて賣つてゐた。彼は考へはじめたのである。

「あいつはあんなにのぼせ上つてゐるが、俺はあいつから一文の借金もしてはゐないんだ。俺に向つて何の手出しができるものか！」

羊達は青々とした麦を見るとたまらなくなつて、畑の中へ滑り込んだ。ブッドウは羊を撫でたゝいて、畔路の方へ追ひやらうとしたが、羊達は彼の隙を見つけて畑の中へ入つてしまつた。ジヒンガは火の出るほど眞赤な顔になつて、

「貴様は俺に向つて失敬な眞似をしてみせようといふんだな？ それならばそれで俺は、貴様のその生意氣な鼻をたゝき折つてやらう」

ブッドウは、

「羊の野郎達は旦那を見たからびつくりしたんですよ。旦那が向ふへ行きさへすれば、羊はおとたしく通りぬけて行きますかた」

ジヒンガは膝から子供をおろして、杖をとりあげた。そして羊の群に向つてとびかゝつて行つた。洗濯屋といへども自分の驢馬をこれほど無慈悲に打擲はしないであらう。或る一ぴきの羊は脚を折られ、或る一ぴきは脊骨を折られ、そして全部の羊はヴアエヴアエと悲鳴をあげた。ブッドウは自分の群羊の壊滅を目の前に見ながら、默つて立つてゐた。彼は羊を追ひ返さうともしなかつた。またジヒンガに向つても何ひとこと言はうともしなかつた。たゞこの亂闘劇を見物してゐただけであつた。

ジヒンガは到底人間業とも思はれない剛勇ぶりでもつて、僅か二分間でそれ等の群羊を追ひまくつてしまつた。そして彼はこれ等家畜の軍勢を退治した凱旋の誇りにみちみちて宣言したのである。

「さあ、とつとゝ歸れ。二度とこの路を通らうなぞとは、夢にも思つてはならないぞ！」

ブッドウは羊の群を眺めやつて、苦笑ひしながら答へた。

「ジヒンガ、そいつはお前さん、見上げたことではたかつたよ。後悔しますぞ！」

二

百姓に對して復讐しようと思へば、それはバナヽの皮を剝ぐよりもわけないのである。何となれば百姓達の收穫物は、畑に置いてあるかそれとも穀物倉にしまつてあるかに定つてゐるからである。のみならず種々様々な自然の災害や浮世の出來事のあつた後に、漸く穀物の收穫はあるのだ。剰へこれ等の事變のあつた上に、人に恨みのしかへしをされたりなどしては、百姓は逃げ場所さへもなくなるわけである。

ジヒンガは家へ歸つて來ると、人々に喧嘩のいきさつを話してきかせた。すると人々は用心深さうに意見をのべてきかせた。

「ジヒンガ、お前さんはとんでもないことをしでかしたね。お前さんは、ものゝわかつてゐるくせにわからずやをやつてゐるんだ！　ブッドウといふ男は、あいつがどんなに喧嘩ずきの奴だかお前さんは知らないのかい？　これからでも未だ遲くはない。出かけて行つて仲直りをするんだね。さもなければお前さん一人のおかげで、村全體に迷惑がかゝつて來るだらうぜ」

ジヒンガは人々の言ふところを聞いて、はじめて氣がゝりになりはじめた。そして後悔しだしたのである。

「俺はあくまでも、あいつにそんなことをしてはいけないと言つてとめたんだけれど。だが羊がちつとばかりの草を食つたつて、俺が身代限りになるわけでもなかつたわけだ。全くのところ俺達百姓といふものは、人に頭を下げてさへゐれば果報がむいて來るものなんだ。神さまも俺達が頭を上げて歩くのをきらつておいでになる」

ジヒンガは心の中ではブッドウのうちへ行きたいとは思はなかつたが、人々に無理强ひにすゝめられて、たうとう出かけて行くことにした。

アグハンの月（十一月中旬から十二月中旬）であつた。霧が降つてゐた。そのために四邊には霧の闇がたちこめてゐた。ジヒンガは部落はづれのところまで來ると、向ふに火の燃えてゐるのを見つけたので、彼は魂消てしまつた。胸が動悸をうつた。畑の中に火事が起つてゐたのである。そして火事の起つてゐるのは自分の畑でないやうに神様に願をかけてゐた。しかし彼が火事の方へ近づいて行けば行くほど、その大願成就の見込みは消えて行くのであつた。

「心配して出かけて來てゐるのに、この仕末だ。ひどい野郎めが、たうとう火をつけやがつて、俺ひとりのことから村全體が全滅だ」

火の燃えてゐる畑は直ぐ目の前にあるやうに思はれた。恰もその畑と彼との間には少しの地面も介在してゐないかのやうに。かくて畑のところまで駈けつけて來た時には、畑全體が一つの巨大な火焰となつてゐた。そこでジヒンガは救助の悲鳴をあげた。

村の人々は馳けつけた。そして手あたり次第にそこらの畑からアルハルの莖（cajanus Indicus といふ豆科植物）を盛んに拔きとつて來て、火をたゝき消さうとした。こゝに焔と人間との怖ろしい爭ひの光景が出現したのである。

この火事騷ぎは約そ三時間ほどもつゞいた。或る時は火焔の方が優勢になり、また或る時は人間の方が優勢になつてゐた。火焔の勢ひは消えかゝつてはまた立ち直つて來て、二倍もの力でもつて火の手をあげたりしたが、消防に努める人々のうちで、一番めざましい働き手はブッドウであつた。ブッドウは尻端折をして、身の危險をもかまはず火の中へとび込み、目ざす敵勢を平らげたり、また頭の毛一本も焦さないで焔をくゞりぬけて出て來たりした。

たうとう人間の方が勝利であつた。しかしその勝利といふのは、敗北したものに嘲笑はれるほどの勝利であつて、村全體の砂糖黍の畑は燃えつくして灰であつた。そして砂糖黍と共にすべての希望も、焦土と化してしまつたのである。

三

誰かつけ火をしたかは、それは公然の秘密であつた。しかし誰もそれを言ひだす勇氣がなかつた。それ故何の證據もあがらなかつたのである。不確かな推量などに何の價値があらう？　ジヒンガは自分の家から外出しにくゝなつてしまつた。彼は何處へ行つても嘲りの言葉をきかされなければならなかつた。人々は明らさまに言ひさへした。

「あの火事はお前さんがおこさしたのも同然だ。お前さんは俺達のものを何も彼も滅茶苦茶にしてしまつた。お前さんこそうぬぼれきつてゐて、土に足もつかなかつたのだ。自分自身もやつゝけられ、それと一しよに村全體も滅茶にされてしまつた。ブッドウに喧嘩をふつかけさへしなければ、俺達はこんな目に合はされる筈はなかつたらう」

ジヒンガは自分の蒙つた損害よりも、自分の悪口を言はれるのが何よりも痛手であつた。一日中家の中にひきこもつてゐた。

ポースの月が（十二月中旬から一月中旬まで）來た。この月が來ると、採糖機がにぎやかに運轉し、糖蜜の香りがあたりに漂つて、煮釜の下には火が燃え、また煮釜の前では人々が水煙管で煙草を喫んでゐたのであつたが、今年はそこに恐ろしい沈默のみがあつたのだ。人々は寒さに參つて、日暮れになると間もなく戸を閉ぢ、ジヒンガを呪詛した。

マーグの月（一月中旬から二月中旬）は、はげしい苦しみを與へた。砂糖黍は百姓達にたゞ富みばかりを與へるものでなく、その糧をも與へるものである。それによつて百姓達は寒さをもしのぐことができる。人々はこれの温い汁を飲み、その葉を燃し、そして搾り滓は家畜に食べさすのである。村中の犬は毎夜煮釜の温かい灰の上に寢てゐたのであるが、今年は寒さのために皆死んでしまつた。多くの家畜は食物の缺乏したおかげで皆餓れてしまつた。寒さがはげしくなつたの

で、村中に咳と熱病の罹災者ができて來た。しかしこの災害をひき起した張本人はジヒンガであつたので、

「いまいましいあのジヒンガの野郎！」

ジヒンガは考へぬいた揚句、ブッドウの立場をも自分の立場と同じやうにしてやらうと思つて、

「俺はあいつのためにこんなにやりこめられたんだ。だが、あいつはすつかり安心の笛を吹いてゐやがる！　俺もあいつをやりこめてやらう！」

この破滅を持來した大災害があつた日から、ブッドウはジヒンガの部落へやつて來ることを止してしまつた。しかしジヒンガはブッドウと往來しはじめて、親しい交りを結ばうとした。彼はブッドウを少しも疑つてはゐないやうな風をして見せてゐた。或る時は毛布を買ふのにかこつけて出かけて行つた。ブッドウは彼を非常によくもてなして、勿論水煙管は敵にものませるものであるが、彼はジヒンガに牛乳をのませたり、シヤパート（水とシロップとでつくつた飲みもの）をのませたりしないでは決して彼を歸さうとしなかつた。この頃ジヒンガは麻繩をつくる工場へ働きに通つてゐた。たいがい數日の賃金は一とまとめにしてもらつてゐた。しかし毎日の費用はブッドウの友情に負ふところがあつた。結局ジヒンガはブッドウと親友になつてしまつたのである。

或る日、ブッドウがジヒンガにたづねた。

「やあ、ジヒンガ、若しお前の砂糖黍に火をつけた奴を見つけたらお前はどうするつもりだ？　全くのところを打明けてくれ」

ジヒンガは落着きはらつた樣子で答へた。

「俺はそいつに斯う言つてやる。兄い、お前はどつちにしてもよいことをやつたよ。お前は俺の剛慢をたゝきこはして、俺を本統の人間にしてくれたと言つてやるよ」

ブッドウは、

「若し俺がお前の立場にあつたら、そいつの家を燒き拂はなくては腹が癒えなかつたゞらうにな」

ジヒンガは、

「さきの知れた命だ。恨みや仇をこの上ふやしたつて何のもうけになるものか？　俺はすつかりやりこめられてしまつたが、そいつをやつゝけたつて俺は何の得になるだらう？」

ブッドウは、

「さうだとも。そいつは人間の本分だ。しかし腹を立てすぎると智慧の目がくらむものだよ」

四

パゴンの月（二月中旬から三月中旬）が來た。百姓達は砂糖黍の芽を植ゑるために畑を耕してゐた。ブッドウの家は好景氣であつた。半は略奪されるほど賣行きがよかつた。ブッドウの家の入口にはいつも

二三人の客がおしかけてゐて、お世辭を言つてゐた。ブッドウは氣取つて誰に對しても氣嫌よくは口をきかなかつた。そして羊の貸し賃を倍にしてしまつた。若し誰かゞ抗議を申込むと、怒つて答へた。

「俺は無理に貸さうといふんぢやない。いやならよせよ。しかし俺が言つた値段より一文もまけることは出來ん」

こんな荒つぽい口をきかれても誰しも必要に迫られて止むを得なかつたので、お寺參りの巡禮を客引きするお坊さんのやうに、ブッドウの家のまはりにたかつてゐたのである。

福の女神の姿は偉大なものである。しかしその姿も場合によつては大きくもなり小さくもなる。或る場合にはその見事な大きさも、紙片の上に書いてみれば僅かの文字に縮まつてかくれてしまうほどにもなる。また或る場合には口先にのぼせて言つてみれば、その姿さへ見失ふものである。しかし何といつてもラキシヤミが住むには廣い場所が必要である。彼女が來ると家が廣くなつて行く。小さい家の中ではなかなか住むことが出來ないやうだ。したがつてブッドウの家も廣くなつて來た。入口の上にはヴエランダが出來た。二つの部屋が六つに增えた。家が新築されたといつてもいゝ位である。或る百姓達からは材木をもらひ、或る百姓達からは煉瓦を燒く薪をもらひ、或る百姓達からは竹をもらひ、或る百姓達からは茅をもらひ、そして或る左官には壁を積み上げてもらつたが、それも現金で拂はずに、羊の仔を代りにくれてやつた。ラキシヤミはかほどまでに權力を持つてゐる人間なのである。

たいていの仕事は、寄進されたやうなものであつた。相當立派な家が殆んど只で出來上つてしまつた。そして新築祝ひの仕度の騷ぎが起つた。

ジヒンガの方では一日中働いて、漸く食べて行かれるくらゐの收入であつた。ブッドウの家では金の雨が降つてゐた。ジヒンガはブッドウをうらやんだわけであつたが、うらやむことは何の悪いことだといへよう？誰かこんな不公平に我慢なるものであらうか？

或る日、ジヒンガはとぼとぼ歩いて、皮鞣人の部落の方へやつて來た。そしてハリハルの家を訪ねた。ハリハルは出て來て、挨拶をしたり水煙管の煙草をすゝめたりした。二人は交代で煙草を喫つた。この皮鞣人の親方は心のねぢけた男で、百姓達は彼には怖れ戰いてゐた。ジヒンガは煙草を喫ひながら言つた。

「近頃はお祭騷ぎをちつともやらないぢやないか？何も騷ぎの音がきこえないな？」

ハルハルは、

「お祭騷ぎなんかできるわけぢやないでせう。食ふことの心配がありすぎて、何の暇もありはしませぬ。ところで旦那は近頃何んな暮しむきです？」

ジヒンガは、

「暮しむきのことかい？鼻をたゝき折られた者は生きてゐても、まあみぢめなものだよ。まる一日働いて、やつと臺所の煙りがたつんだ。近頃一等景氣のいゝ奴はブッドウだよ。金がありあまつて、積ん

どく場所もないさうだ。新規に家は建てるし、あいつは新築祝ひで大騒ぎだよ。七つの村までスパリ（お祝ひにする木の實）をお祝ひに送るだらう」

ハリハルは、

「旦那、ラキシャミが舞ひこむとその人の目色までが慈悲深さうに見えるものですよ。しかしあの男を見てごらんなさい。足が地についてゐませんや。こちらから話しかけても、あいつ威張りくさつてゐますよ」

ジヒンガは、

「あいつが威張りくさるには仔細があるんだ。この村でも誰があいつと張合へるだらう！ しかし兄い、この不公平には俺たちも見るに見かねたな。神さまに幸ひを恵んでもらつたら、その男は頭を下げて歩くのが本統なんだが、それを自分は他の人とはくらゐがちがふなんていふ了見を起す可きものではない。あの野郎の法螺をきくと、胸くそが惡くなる。昨日の乞食が今日はお大盡さ。威張るつたつて俺等の前で威張れるだけだよ。ついこないだまでは褌一つで畑の鳥の見張りをしてゐたもんだ。そいつが今日ではお大名きどりだ」

ハリハルは、

「何うです。ひとつ變つた趣向でもこらしてみませうかね？」

ジヒンガは、

「やらうたつて駄目ぢやないか？ お前さんの腕前におそれて、あの野郎は牛も水牛も飼つてゐないぢやないか？」

ハリハルは、

「しかし羊が居るぢやないですか？」

ジヒンガは、

「やつてみて若ししくじつたら、ちよつと考へものだよ」

ハリハルは、

「それなら旦那の方で何か思ひつきでもありますか？」

ジヒンガは、

「何かあの野郎をぎゆうぎゆうにとつちめる方法を考へなくちやならん」

かくしてひそひそ話しが續いたのである。

世の中には面白い神秘がある。善なるものの世界に恨みが存在するのと同じく、惡なる者の世界には同情が存在する。學者は學者を見て、聖者は聖者を見て、詩人は詩人を見て、彼等は嫉妬を起す。お互に顔を見合すのさへも厭やがるものだ。しかし博奕打ちは博奕打ちを見て、酒飲みは酒飲みを見て、泥棒は泥棒を見て、彼等はお互に同情しあふものである。若し一人の僧侶が暗闇の中でつまづいてころんだなら、他の僧侶達は彼を救け起すかはりに、もう二つばかり蹴とばして起きあがれないやうにするのである。しかし一人の泥棒が葬儀に出會したのを見れば、他の泥棒達は彼を救ひに來るのである。誰しも惡を憎惡する。それ故、惡人の世界には同情が存在する。誰しも善を

ば讃美する。それ故、善人の世界には反目が存在する。泥棒が泥棒を殺して、得が得られるだらう？ それは嫉妬ばかりである。學者が學者を侮辱して、何が得られるだらう？ それは怨嗟ばかりである。

ジヒンガとハリハルとはうち合せしてよくないお芝居をたくらんだ。そしてその筋書きと、その時と、その方法とを定めた。

ジヒンガは出かけて行つたが、それは意氣揚々とした歩きかたであつた——敵をやつつけてやるんだ。あいつも何處にも逃げ場所はないぞ！

五

翌日ジヒンガは仕事に出かける途中、ブッドウのうちへ寄つた。ブッドウはきいた。

「今日は仕事に行かないのかい？」

ジヒンガは、

「これから行くところなんだ。しかしお前さんにたのみたいことがある。お前さんとこの羊と一しよにつれて行つて俺のとこの仔牛に、草をやつてくれないか？ 可哀さうな牛は一日中、杙にしばられて苦しんではかりゐる。草も芻草もないんだから、何を食はしてやれるだらう？」

ブッドウは、

「兄い、俺は牛や水牛は飼はないんだ。よく知つてるだらうが、皮細、人達はとてもむごたらしいことするからな。あのハリハルといふ奴は、俺のとこの牛を二ひきも殺したことがあるんだ。何か瞞ますか企くはすかして殺すのだらうが、俺には何らも見當がつかん。あれからといふものは、もう一さい牛も水牛も飼はないことに定めて、俺は耳をひつぱつて決心したほどだ。しかしお前さんとこのはほんの仔牛一ぴきのことなんだから、誰があんなのにいたづらをするだらう！ 都合のいゝ時に、いつでも連れておいでよ」

その話しが終ると、ブッドウは新築祝ひのために買つて來た品物をジヒンガに見せた。ギヒー（精製バタ）や砂糖やメリケン粉や野菜などが買ひ込んであつた。サッチヤナラエンの神様の一代記のお說教が足りないだけのものであつた。ジヒンガは目を見張つた。こんな盛大な仕度は自分でも未だかつてしたことはなかつたのだ。また誰も他の人のしたのも見たこともなかつた。ジヒンガは一日働いてから家へ歸つて來ると、何よりも先に彼は自分の仔牛をブッドウのところへ連れて行つて預けたのである。

その晩ブッドウのうちではサッチヤナラエン神様の一代記についてのお說教があつた。そして僧侶達は種々御馳走をふるまはれた。夜どほし僧侶達の饗應や歡待で、ブッドウのうちは大いにとりこんでしまつた。それ故、羊の群の見廻りまでは手がとゞかなかつた。夜どほしの忙しさで、漸く朝になつてからブッドウ達が飯を食べ終つた時、一人の男が訪ねて來て、

「ブッドウ、お前さんは何をぼんやりしてゐるんだ！　お前さんとこの羊のなかで仔牛が死んでゐるよ。うつかり者だな！　仔牛の脚や首を綱で縛つたまゝにしておくなんて！」

　ブッドウはこの話しを聞くと、ひどく驚いた樣子であつた。ジヒンガも手傳ひに來てゐたので、ブッドウと一しよに飯を食べてゐたところであつた。そこで彼もこの噂をきくと、驚きの聲をあげて、

「俺のとこの仔牛が！　行つてみよう。俺は綱なんかで縛りはしなかつた筈だ。俺は仔牛を羊のなかへ追ひ込んどいて歸つて來たんだが、お前はいつ縛つたんだ？」

　ブッドウは、

「とんでもない！　俺は牛の脚や首なんか縛りはしなかつた。あれから俺は羊の群の方へは行きもしなかつたんだもの」

　ジヒンガは、

「お前さんが行かなくつて、誰が縛るだらう？　多分行つたくせに忘れてしまつたのだらう」

　僧侶の一人は、

「羊の群のなかで仔牛が死んでゐるつて！　綱は誰が縛りつけたにしても、世のなかの人はブッドウの不注意から死んだといふに違ひない」

　ハリハルも村の皮剝人の總代として手傳ひに來てゐたが、彼は玄關先の用事をしてゐた。彼はその騷ぎを聞きつけると、

「私は昨夜ブッドウが仔牛を縛りつけてゐるところを見ましたよ」

　ブッドウは、

「俺が！」

　ハルハルは、

「あなたは肩に棒をかついで、それから仔牛を縛つてゐたじやありませんか？」

　ブッドウは、

「お前は、まあ、何といふ本統のことばかり言ふ男だらう！　俺が仔牛を縛つてゐるところを見たんだつて？」

　ハルハルは、

「何んで私につゝかゝつて來るんです？　あなたが縛らなかつたといふなら縛らなかつたでいゝでせう！」

　僧侶は、

「これはよく調査しなくちやならん。そして牛殺しの贖罪の苦業をさせなくてはなるまい。冗談話しではありませんぞ」

　ジヒンガは、

「お上人さま、わざわざ牛を縛つたといふわけでもないでせう」

　僧侶は、

「そんなことを言つたつて、何になる？　牛殺しの罪は何うしてもつくものだよ。誰がわざわざ牛を殺しに行くものがあらう」

　ジヒンガは、

「何うも牛をしばつたり解いたりするのは、たかたかけんのゝんな仕事ですな」

僧侶は、

「經文によれば、牛殺しは大きな罪にされとります。牛殺しは坊主を殺したよりも、その罪は輕くはありませんぞ」

ジヒンガは、

「さようでございますとも。牛は何といつても大事なものでございます。それは母親と全く同じに大事なものです。けれどお上人さま、思ひがけない失策でございます。何とかしてわづかなことで濟ますやうにしていたゞきたいものです」

ブッドウはそこに立ち上つたまゝ、牛殺しの罪がそんなにすらすらと自分になすりつけられてゐるのを聞いてゐたのである。ジヒンガの策略もよくわかつてゐた。

「俺は仔牛をしばつたのではないが、それを十萬べん辯解したとて、誰も承知してはくれないだらう。そしてみんなは、俺が贖罪とやらをするのをずらかるものだと思ふだけだらう」

僧侶達にとつては、ブッドウに贖罪さすことがもつとも有益なことであつたので、こんな幸運を失ふものではあるまい。結局、牛殺しの罪はブッドウに塗りつけられてしまつた。僧侶達も矢張りブッドウに對しては、ひそかに恨みを抱いてゐたので、そのときこそ、自分の思ひをはらすに最も都合のいゝ機會であつたのだ。

ブッドウには、三箇月間ほど乞食をして歩くこと、また七つの聖地を巡禮すること、五百人の僧侶を御馳走すること、五ひきの牛を喜捨すること。これだけの罰が與へられた。

ブッドウはこれを聞くと喪心してしまつて涙を滝と流したので、可哀さうなものだとされて、三箇月間の乞食は二箇月間にまけてもらふことができた。しかしそれ以上の割引きは何うしても許されなかつた。哀訴も嘆願もならず！慘めなブッドウはあきらめなければならなかつたのである。

六

ブッドウは羊を神様の思召しにまかした。男の子供はまだ幼なかつたし、女房はひとりきりで何うにも手が廻りきらなかつたからである。彼はよその土地に流れて行つて、家々の門口に立つやうになつた。そして仔牛のことから追放されましたと言ふのが常であつた。施しものだけはもらふことができたが、しかし施しものと共に彼は劍突をくらはされたり叱りつけられたりしなくてはならなかつた。一日かかつてもらつたものを、晩になつてから木の下で食べて、そこに寢ころがつた。しかし彼はそれを難儀な暮しであるとは思つてゐなかつた。今までも一日中羊と一しよにゐたり木の下に寢ころがつたりしてゐたからである。食べものも今より特別立派なものを食べてゐたのではない。たゞ乞食をするといふことが、ほんとにつらかつたのであ

る。そして時としておかみさん達が、すばらしい生活のしかたを思ひついたもんだねと、ブッドウに皮肉の言葉を浴せかける場合には、彼はまつたく苦しかつた。しかし止むを得ないのであつた。

二箇月の後、うちへ歸つて來た。髪はだいぶ伸びてゐた。顔も六十歳ほどの老人のやうに弱つて見えた。

彼は巡禮に出かけるために、路銀の準備にとりかゝつた。しかし羊を飼ふ金を用立てる金貸業者が何處にあるだらう？　羊が何の保證になるだらう？　疫病でも流行れば、全部の群が一晩のうちに片づいてしまふ。その上にジェートゥの月（五月中旬から六月中旬）で羊からは何の收入の見込みもない時節であつたのだ。ところが一人のテーリ（油製造人）が、金を貸してやらうと申し出た。

けれど月一割幾らといふ利息で、八箇月もたてば元金と利息とが同じになるといふやうなものであつた。ブッドウはこんな高利では金を借りる勇氣がなかつた。

ブッドウが二箇月ゐなかつた間に、多くの羊が盗まれてゐた。彼の子供達は毎日、羊を飼ひに連れて出てゐたのであるが、村の人達は無斷で一ぴき二ひきの羊を隱したり殺して食べたりしてゐたのである。惨めな子供達には羊をつかまへることもできなかつたし、また盗まれたことがわかつても喧嘩など何うしてできるものであつたらう？　村の人達は腹を合してゐたからである。

一箇月もたつたなら、羊は半分も殘りはしないだらうと、ブッドウは困惑の有様であつた。したがつて絶望したブッドウは或る商人を呼んで來て、全部の羊を賣り拂つた。五百ルピーほど手に入つた。そして彼は二百ルピーを懐中にして巡禮に出かけた。殘金は將來の維持の用意にとつておいたのである。

ブッドウの留守に二度も強盗が入つた。しかし騒いだので幸ひ金は盗まれなかつた。

七

サワンの月（七月中旬から八月中旬）であつた。四方に緑色が擴がつてゐた。ジヒンガは耕作牛を持つてゐなかつたために、畑を人に用立てた。ブッドウは贖罪の苦業をすつかりすませて、それと同時にすつかり金の縛めから解放された。ジヒンガも一文無しになり、またブッドウも一文無しになつてしまつたのである。最早、誰が妬むものであらう？

紡績工場は休業中であつたので、ジヒンガは漆喰をこねる人夫になつて働いてゐた。近くの町に立派な伽藍が建築中であつて、其處では幾千人もの人夫が働いてゐたのである。ジヒンガもその一人であつたのだ。そして七日目に勞働の賃銀をもらつてうちへ歸つて來ると、一晩寢て、次の朝は再び働きに出かけるのであつた。

ブッドウも働き口をさがしてゐたところで、彼も偶然この工事場へやつて來た。工事監督は、ブッドウがあまり達者さうに見えないの

で、はげしい勞働には適當でないかもしれないと思つて、左官達のところへ漆喰を運ぶ人夫に雇つた。ブッドウはタサラ（漆喰を運ぶ鐵の器）を頭の上に載せて漆喰を運びに行くと、ジヒンガに出會した。そして二人は挨拶をした。ジヒンガはタサラに漆喰を盛つてやつた。するとブッドウはそれを頭の上に載せて運んで行つた。その日終日、二人とも口をきかずに、各自の勞働に耽つてゐたのである。

晩になるとジヒンガの方から訪ねた。

「何もこしらへないのかい？」

ブッドウは、

「こしらへなければ何を食べるんだい？」

ジヒンガは、

「俺は一日に一遍は飯を食つて、もう一度は香臘を食べてゐるんだ。おつくうだからね」

ブッドウは、

「そこらあたりに薪があるから拾つて來よう。俺はうちから持つて來たメリケン粉があるんだ。うちで挽いてもらつたんだよ。こゝの町で買へばとても高いんだよ。俺はこの石の窪みのなかで捏ねるからな。お前は俺のこさへたものは食はないといふかもしれんから、お前は自分でパンをつくらないかい」

ジヒンガは、

「タワ（パンをつくる淺い鍋の鐵）がないぢやないか？」

ブッドウは、

「タワなんか幾らでもあるさ。俺がこの漆喰のタサラをきれいにして來るからな」

焚火が燃えはじめた。メリケン粉が捏ねられた。ジヒンガは小枝焚付けの下手くそなパンをつくつた。ブッドウは水を汲んで來た。二人とも胡椒と鹽とをパンに塗りつけて食べた。そして水煙管に莨をつめて、どちらも傍らの工事の石の上に寝ころんで、代る代る莨をのみはじめた。

ブッドウは言つた。

「お前の砂糖菓子に火をつけたのは、俺は俺なんだよ」

ジヒンガは仕方ないといつたやうな氣持で答へた。

「知つてゐるよ」

しばらくたつてからジヒンガが言つた。

「仔牛を縊つたのは、あれは俺なんだよ。さうしてハリハルが何だか食はすか飲ますかしたんだ」

ブッドウも同じ氣持で答へた。

「知つてゐるよ」

そして二人はそのまゝぐつすり眠入つた。

（完）

維新回天史の一面（其六）

久邇宮朝彦親王を中心としての考察

蘇峰　徳富猪一郎

（第三十八）　一橋紀州両派の運動

將軍の相續者としては、二人の候補者があつた。第一は前にも舉げたる如く、一橋慶喜であつた。その強味は年長であること、賢明である事、而して人望がある事であつた。親藩に於ては越前、外様に於ては薩摩などの有力者を始とし、凡そあらゆる幕吏の有力者は、其の政治上意見の異同を論ぜず、殆ど舉げてその推戴者であつた。それは既記の通りである。

他の候補者は、即ち紀州慶福である。これは將軍家齊の孫であり、將軍家にはその血統が最も近いといふことが唯一の強味であつた。併し未だ十三の少年にて、固より振古未曾有の時局に於て、將軍たるべき資格はなかつた。併しいづれかと云へば、この方の運動は潜航艇式に、最も隱密に而して且つ周到に行はれてゐた。

（第三十九）　水野忠央

今その運命者として第一に擧ぐべきは、紀州德川家の附家老新宮城主水野忠央にして、次には德川家譜代の筆頭井伊直弼を擧げねばならぬ。そもく水野の家は、家康の生母、傳通院の里方にして、將軍家とは切つても切れない縁がある。而して彼の先祖は水野重仲にして、彼は家康よりその子賴宣の附家老に任ぜられ、元和五年賴宣が紀州に封を移すに際し、新宮城三萬五千石の領主となつた。忠央はその九代目である。

彼は國學を嗜み、日本の文獻に少からざる貢獻をなしたる丹鶴叢書を出版し、自らも和歌をよくし、その藏書等も澤山あつた。彼は吉田松陰が

『水野奸にして才あり。余甚だ之を恐る。その丹鶴叢書を輯め、以て國學者を欺く。鎗砲を鑄り、製藥局を開き、測量器を備へ、以て洋學者を收む。又た蝦夷を開墾し、以て雄略を示す。又た一世の豪なり』

と記してをる通り、なかく尋常ならぬ漢であつた。

彼は機會もあらば老中ともなり幕政に參與せんとの野心企みく、その方便として、己が主とする紀州家より將軍をもち出さんと計みたのであらうとは、心ある者の皆な認むる所、中から

すと雖も、遠からずであらう。茲に於て松平慶永等が、年長、賢明、時局に最適の候補者として、堂々表面より一橋慶喜を擁立せんとするに反し、井伊直弼は將軍の側近や、幕府の大奥に廻し、思切つた賄賂をもつて買收政略を行つた。謂はゞ今日の選擧に、一橋派は盛に演説會を開き、有力なる紳士を聘し、賑々しくやつたに、他方では紀州派一點張りにて、開票の結果はかへつてそれが成功したといふのと、殆ど同樣であつた。

× × ×

水野が如何にその附屆けの浪費したかは、その過分なる新宮より、熊野炭を取寄せ、これを諸方に配つた。されば恒々その贈物に與る將軍の御側御用取次平岡丹波守の邸では、水野の事を『炭屋』と綽名するに至つた程である。

水野が中央政府に乘出さんとする志は、決して一朝一夕ではなかつた。彼の妹お廣の方、後にお琴の方といふのは、將軍家慶の御部屋にして、その腹には、鐐姫君、田鶴若君、錦姫、長吉郎等の公子女が出で來りたが、その男子はいづれも早逝し、此處に於て我が妹の子を將軍に擁立するの望を果すを

得なかつた。

又他の妹遐子は、旗本御徒頭薬師寺筑前守の養女となりて大奥に仕へたと云ふ。斯る次第で彼と大奥との間には、種々の因縁が出來、それを辿つて樣々の手段を講ずるを得た。

而して前にあげたる御側御用取次平岡丹波守、同じく夏目左近將監等は、水野と心を合はせ、盛に紀州派の爲に運動し、安政四年五月頃には、既に將軍家定の内輪は、動かし難き勢が成つたといふことであつた。

× × ×

且又た大奥では、一橋慶喜が世子となれば、自然水戸風が吹き、水戸風が吹けば、水戸老公の儉約一點張りにて、大奥の大禁物なる質素生活に改めねばならぬ虞がある。且又た水戸老公の閨門の修まらないといふ評判も、當時に於ては尠くなかつたから、大奥では彼是、憂慮した事もあらう。されば將軍家定の生母本壽院の如きは、若し一橋が西城に入る場合には、自害すると迄も云ひ、又た將軍家定も『一橋殿は氣の詰る御方なれば、余が養子とは思はぬぞ』と申されたと云ふ事だ。

斯る有樣なれば如何に外部にて多數の者が運動するも、將軍の膝下及び大奥が、かく團結してゐるからには容易にその志を達し難かつたに相違あるまい。

（第四十）一橋黨の弱點

且つ一橋慶喜が水戸齊昭をその父とすることは、當人にとつては有力なる背景があると云へば云はれるもの丶、彼の擁立運動にとつては、寧ろ大なる損害であつた。何故なれば、齊昭は大立物ではあつたが、それと同時に頗る敵が多かつた。而して其敵は就中譜代大名旗本等の間に多かつた。彼に排斥せられたる倖侶などは勿論の事だ。されば細眼なる島津齊彬の如きは、この事を憂へ、成可く齊昭をしてその顏を表面に出させまいと苦心をした。而して松平慶永などには、成可く齊昭と疎遠にした方が、この目的を達する爲にも都合がよい事を諭した。

× × ×

更に紀州方の他の一大有力者は、井伊直弼であつた。彼は初めから水戸齊昭とはソリが合はなかつた。ペルリーが始めて江戸灣に乘込んだ時に、齊昭は盛に戰論を主張したが、直弼は譜閣吏の一人として反對し、不戰論を主張した。此時に不幸と

は、必ずしも戰爭を非とするではない。力足らざるが故に穩便にするがよからうとの論である。

又た井伊は武、相沿岸の防禦の任に衝りたるを辭めて、内海──大森、羽田等──防禦に移り度しと運動したが、その事を齊昭の爲に妨げられたとて、頗る恨んだといふことが、藤田東湖の、安井息軒に與へたる書簡の中にも書いてある。後には井伊もその希望通りに内海の羽田、大森邊の守備に任じ、又更にそれを辭めて、井伊家本來の職掌たる京都守備の任に衝りたるが。又たしも水戸がやゝもすれば、彼の繩張りである京都の守護をも奪はんとするといふ事を、不快に感じたといふ說もある。

又た彦根牛は、當時有名なものにて、藥用として其肉を、御三家抔に贈與する例であつたが、直弼になつてから、之を中止した。齊昭が所望したが、直弼は佛教信者で屠宰を好まぬから之を謝絶した。斯くて世間では彼に愛牛の綽名を附したと云ふ話がある。乃ち岩瀨が橋本左内に與へたる書簡などにも概ね愛牛と書いてある。

以上の諸說はいづれにしても、井伊は事毎に水戸と反對に立つたが、繼嗣問題では全く絶對反對であつた。固より、齊昭は嫌疑を避けて、この問題には頓着せず、否な表向きは論じて之を不可なりと云うてゐたが、世間では彼を以て一橋擁立の大本營と認めたに違ひない。

井伊の反對論は、一君主は賢愚不肖によつて定まるものではない。君主は君主そのものゝ特有する身分によつて定まるものである。若し賢愚といふことに、重きをおかば、世襲の意味はなくなる。君臣の元は世襲にある。故に飽迄も血統近き者を選ばねばならぬ。これが彼の紀州に與みし一橋に反對する唯一の論點であつた。

而してこの論を彼に吹き込みたるは、若くは彼と共にその論據をこしらへたのは、彼の懷刀長野主膳である。尚ほこれより少しく井伊及長野の事に就いて語るべき必要がある。

（第四十一）井伊直弼の出身

井伊直弼は兎も角、幕末史に於ける大立物の一人である。けれども彼は或者からは買被られ、或物からは誤解せられ、彼の眞相は殆ど世に現はれてゐない。大立物であるといふ意味は、必ずしも彼が一代の大政治家であると云ふわけではない。彼は

その位置が位置であるだけに、善にあれ悪にあれ、大なる仕事をした。併しそれは位置がさせたのであり、時がさせたのであり、勢がさせたのである。彼自身は政治家としては、氣の毒ながら殆ど取柄がない。彼と並び論ずべきは水野忠邦及阿部正弘であらう。されど井伊には水野越前守ほどの積極的經綸はなかつた。又た阿部伊勢守の如く調和的技倆もなく、機會をみてそれに善處する程の融通もなかつた。



井伊直弼肖像

× × ×

或者は彼を開國の元勳と云ひ、責任を知る雄邁敢爲の大政治家と云つてゐる。或者は違勅の罪人、國家の奸賊と云うてゐる。併し彼には世界の大勢を洞察して開國するなどと云ふ、例へば横井小楠や橋本左内や若くは岩瀨肥後守の如き見識は、殘念ながら藥にしたくもなかつた。併し彼は必ずしも皇室に對して不利を計らんとする者でもなく、又た左程腹黑き惡黨でもなかつた。若し彼が今少し惡黨であつたならば、彼が如き拙劣なる政治はなさなかつたであらう。

要するに彼は個人としては面白き、一種の氣慨ある漢であつたが、政治家としては寧ろ無能に近かつたと云はねばならぬ少くとも、當時の時局を收拾する點に於ては、彼は全く落第政治家である。

× × ×

彼は井伊直中の十四男で、その父五十歳の子である。彼の母はお富と云ひ、江戸麴町平河町、伊勢屋重兵衛の娘で、彦根御

前と紹名されたる美人であつたさうだ。彼は幼き時、父の膝許にあり、藩主の別莊で、槻御殿と云ふ立派な家に住んでゐたが、十七歳の時、その父の死すると同時に、尾末町といふ場末の邸に移された。而して合力米とて、一年三百俵を給與せられた。この生活が前後十五ケ年續いた。漸次年と共に經費が增加して行つたが、兄の殿樣は定りたる收入以外には盆暮の手當てさへも、ろくには與へなかつた。

扨、彼の兄弟はそれ〴〵かたづいたが、彼も二十歳の時に在江戶の兄たる井伊家の當主直亮から、大名の養子にやるから出て來いと指圖があつて、その弟と共に出京した。その時は彼も再び彦根には歸るまいと云ふことにて、盛んなる送別會などもありて、意氣揚々として出掛けた。かくてその弟は間もなく、日向延岡の藩主内藤家の養子となり、彼が江戶滯在中忽ち七萬石の大名となつたが、彼は一ケ年中唯だ江戶見物をしたばかりで、遂に適當なる養子の口もみつからず、そのまゝすごすご彦根に再び歸へり來つた。

× × ×

彼はそれから自分の家を、埋木舍と名付け、最早世に望なしと諦めたのである。彼は又た彦根の北長濱に大通寺といふ東本願寺の別院の養子となり、其の院主たらんと欲し、運動したが、兄直亮はこれを許さず。ゆくりもなく當主兄直亮は直弼をその世嗣直元の養子とするの意を洩したといふことである。然も彼は彌よ悲觀したらしい。そは兎も角、彼は若し彼の兄直元が無事であつたらば、空しく埋木舍の埋木となつて朽ち果てたであらうに、意外なる運命は、彼の長兄直亮の養子たる、彼の兄直元が、多病にして遂に弘化二年正月、未だ直亮の跡を嗣がざる先に病死した。此處に於て、同年二月彼はその長兄直亮の養子となり、その二十日に將軍に謁し斯くて嘉永三年十月、兄の死するや、その十一月にはその跡を相續し、その家歷代の掃部頭を稱ふるに至つた。その時彼は三十六歲血氣正に剛なる盛時であつた。

彼が埋木舍にある間には、禪を學び、國典を學び、或は和歌を詠じ、或は茶ノ湯を弄び、其のやるせなき日を送つたが、殊にこの間に於て彼の運命に關係をもつたのは、長野主膳との出會であつた。

（第四十二）長野主膳の出身

そも／＼長野主膳は何者であつた乎。今もつてその素性が詳かでない。彼は伊勢國飯高郡瀧野村、長野次郎祐の弟といふ事になつてゐるが、これは戸籍面だけの事で、實際彼は何者であるといふことが、今以て不明である。或は公家の落胤ではなかつたかと云ふ者もある。兎も角も、彼は天保十年、二十五歳の時、飄然として前記の伊勢國飯高郡瀧野村にあらはれ、その時の本陣、瀧野次郎左衛門の宅に寓居した。彼は痩形にして、丈高く、面色蒼白、頭髪漆の如く、態度閑雅にして、極めて上品に、眼光人を射て、油斷のならぬ風であつた。

斯くて彼は次郎左衛門の妹にして、志摩國鳥羽町の呉服商に嫁し天保十年、その夫が病死した爲、兄の家に歸つてゐた、瀧女といふ婦人と、天保十二年に結婚した。時に瀧女は三十二歳で、主膳より長ずること五歳であつた。これから彼等夫婦は、京都に出で、伊勢、美濃、尾張、三河等を遊歴し、同年十一月近江國坂田郡市場村に來り、しばらく寓居してゐた。天保十三年には去つて同郡伊吹山の麓なる志賀谷村、阿原忠之進の家に寓居し、そこにて國史を講じ、和歌等を教授してゐた。此處は水野土佐守の知行所であるから、長野主膳は定めて水野土佐守と何かの關係をもつてゐたゞらうといふ者もある。否、志賀谷村は土佐守ではなく、同じく紀州家老水野丹後守の領地であるといふ者もある。阿原は土佐守の代官であるといふ者もある。いづれにしても、土佐守にせよ、丹後守にせよ、紀州の家老であることは間違がない。

× × ×

飯高郡は本來紀州領である。その本陣の瀧野次郎左衛門知雄も亦た國典に興味をもつてゐた者である。彼は後に藏人と稱し、和歌をよくし、國學にも堪能であつた。斯る次第で同じ國典に興味をもつた紀州家老の水野土佐守と、瀧野とが全く沒交渉であるとも思へないし、從つて又た彼の關係からしても又た阿原の關係からみても、長野が水野と沒交渉であるとも思へない。併し、それはいづれにしても、別段の問題ではない。唯だ長野は埋木舍に於て直弼を訪問した。彼が如何なる順序で逢つたか、兎に角、天保十三年十一月二十日、主膳は門人三浦太仲を伴ひ、彦根に來り、同夜直弼を訪ひ、款話曉に徹し、その翌日の夜も又た來り談じ、曉に至り、その翌日の夜も又來り談じ、二十三日の曉方にやうやく袂を分つに至つた。

或人の說によると、これは主膳が、直弼の村山加壽江といふ女子を知れることを偵察し、彼女によつて、直弼を說かしめ、直弼からして主膳を招かしめたものであると云ふ。この加壽江なる婦人が何者であるかは、詮索する迄もなく、他日主膳の手足となつて京都に於ける縉紳家の間に運動したことは、彼女が文久二年十一月浪士の爲に捕へられ、三條河原に生晒しにせられたのをもつても、これを知ることが出來る。

（第四十三）直弼と主膳

當時直弼と主膳義言は、二十八歲の年壯氣銳であり、彼等は三夜を打通して語り明して猶ほ未だ飽足らなかつたのである。當時直弼と主膳とは師弟の契約をなし、主膳は歌學の師とし、直弼は門人として相契つたが、それがやがて彼等が切つても切れない君臣となつたのである。直弼の歌に曰く

さまぐ\にちぎる心をしほりにて
花咲く春はとく訪ね來よ

主膳の返歌に曰く

うき身こそ別れはゆかめ心さへ
君に仕へん時あらめやも

主膳はその秀麗閑雅なる容貌と、その和歌に堪能に、國典の知識豐かなると、而してその辯舌の爽かにして、よく人を魅惑するのと、しかも正々堂々表面からの運動でなく、搦手の運動に最も成功すべき、あらゆる資格を有するが爲に、しかも精力過絕にして、いざとなれば晝夜をわかたず。而してその策略の周到にして深刻に、[illegible]克にして辛辣なる、策士として殆どあらゆる資格を具へてゐた。

而して彼は京都に上り、二條家に仕へ、妻瀧女は今城家に仕へた。今城家からは、孝明天皇の寵姬少將內侍と稱ばれたる今城重子が出てゐる。彼女は、中納言定章の女であり、而して千種有文の姉である。

されば彼等夫婦が京都の縉紳家に緣故をもつてゐたことは、固より云ふまでもない。且つ九條家と井伊家は、恰も近衞家と島津家の關係同樣、井伊家は九條家の庶流として立つてゐた。されば兩者の關係は常に親密であつて、その關係が又た井伊家にとつては、容易ならぬ仕合はせとなつた。

而して九條家の家臣に島田左近といふものがあり、これが又

たしたゝか者にて、その生れは美濃國山伏の倅であるが、九條家の島田氏の入婿となり、その妻の母千賀浦は、九條家の老女で、當主尚忠の寵信を受け、その關係にて彼等母子は九條家の事を、内外にかけて切つて廻してゐた。これが又た何時の間にやら長野主膳と親密なる關係を結ぶことゝなつた。

(第四十四)　舞臺京都に移る

當時の大問題は、第一が外交問題で、第二が世嗣問題であつた。而して兩者の間には、離るべからざる關係があつた。外交問題は、即ち當時米國總領事タオンセント・ハリスが、しきりに幕閣に迫り、安政條約の調印を迫つた。これには幕府も殆ど困り入つた。勿論心からその調印を喜ぶ者とては、殆ど一人もなかつたが、唯だ止むを得ざる事として、これを受入るゝ論と、成可くならばこれを受入れまいとする論と、即ち拒絶と承諾と自ら二箇の潮流があつた。

× × ×

世嗣問題では、既記の通り血族を主とする紀州說と、年長、賢明、人望を主とする一橋說とがあつた。而して等しく一橋說にても、その說の主動者とも云ふべき越前國主、松平慶永の如きは、當時殆ど開國論に傾き、又た一橋の實父水戸齊昭の如きは、依然攘夷の看板を掲げてゐた。而して幕府の海防掛等も概して一橋論に傾いてゐた。彼等の仲間には、外交論では互に兩立し難き程の衝突したる意見を把持してゐたが、しかも先づ内部に賢明にして將軍を代表する有力なる世嗣を西丸に据置き、それから徐ろに外交問題にとつて掛り、この將軍代理の下に、國論を統一せんとの意見であつた。

されば一橋黨の方でも外交問題に就いては、同床各夢であつたが、しかも彼等が當面の問題としては一橋擁立の外ないといふことに、期せずして一致してゐた。

× × ×

凡そ當時朝廷に手入をした者を求むれば、第一、鷹司家との緣故よりしての水戸。第二、近衛家との緣故よりしての島津。第三、九條家との緣故よりしての彦根。この三つを舉げねばならぬ。而して前二者は一橋黨にして、後者は即ち紀州黨である。

世間では井伊直弼が安政五年四月二十三日大老に任ぜられた

る後はじめて彼は内外の問題に手をつけたと思ふ者があるが、なか〳〵左樣でない。彼は九條家を通して夙にそれ〳〵京都に手をつけてゐた。而して彼は京都運動には、あつらへ向きの代表者を得た。それは既記の長野主膳である。初は井伊が主膳を京都に遣し仕事をさせたが、後には恐らくは主膳が京都から井伊に種々の智慧をつけることになつたと思はれない事もない。

（第四十五）堀田京都に赴く

さても安政四年十二月、當時の首相兼外務大臣とも云ふべき堀田正睦は、十二月四日井上信濃守、岩瀨肥後守等をして、ハリスと假條約を締結せしめた。斯くて同月十四日、林大學頭、津田半三郎をして京都に赴き、その顛末を奏上せしめた。これは勅許を得んとする爲であつた乎。若くは單に奏上する爲であつた乎。いづれにしても、安政五年戊午正月、堀田正睦は外國處置を奏上する爲に、川路左衛門尉、岩瀨肥後守等を率て、京都に赴いた。これは固より堀田彼自身の働きこそ、勅許を受けんが爲であつたに相違あろまい。

堀田は外務大臣として恐らくは當時の大名中には、最適任者といふことが出來なければ、少くとも適任者の一人であつたかも知れぬ。併し彼は、外交政略の要は、内交政略にあると云ふことを充分理解してゐなかつた。凡そあらゆる外交上の成功者は、先づ内を固め、而して後、外に及ぼすものである。即ちカヴルでも、ビスマルクでも、ヂスレリーでも、若くは我が明治政府に於ける伊藤公の如きでも、陸奥、小村の人々みなその通りである。近古の歴史に徴するに外交上の大失敗を來すものは、外からの苦情でなくして、内からの破綻である。所謂る目指す鳥には命中しても、かへつて足許から鳥の立つ事がある。即ち堀田の如きも、恐らくはその類であらう。

× × ×

彼は京都の公家などは、賄賂さへ與ふれば、何等の面倒もなきものと考へてゐた。恐らくは過去に於てはさうであつたかも知れぬ。併し今は時が異つてゐる。人が異つてゐる。第一京都には、とても幕府の年寄等が思ふ樣に取扱ふことの出來ない英邁なる孝明天皇が在した。又た公家の中にも、從前の如く俯頭として、武家の頤使に隨從する者でない事を自覺し始めた

しかも又た從來猫の如き大名共は、殆ど今や虎の如くなつて京都の公家とそれぞれの關係を結んでゐる者が少くない。

昔は幕府の一睨に震上つたる大名が、今はかへつて京都に手を入れて、京都から高壓的に江戸を操縱せんとするが如き者さへ生じた時代だ。それに氣付かず唯だ重き金袋さへ携へれば、總ての事がそれで解決せらるゝと思うた堀田は、如何にも內交政略に於ては拙劣なる者と云はねばならぬ。

× × ×

併し彼は左右の翼として、川路及び岩瀨を伴つてゐた。川路は下級よりの成上り者であつて、海千山千の強か者である。殊に長き間奈良奉行を勤めて、上方の情偽には最も通じてゐる、とても喰へない代物である。岩瀨は林述齋の外孫にして、頗る俊敏なる好個の外交官であつた。彼は見識もあり、文學もあり、手腕もあり、なんと云つても、當時の外事諸輔にかけては第一人者であつた。

川路の老練にて撫で付け、岩瀨の舌鋒にて論破すれば、天下に難事なしと堀田が考へたのも、無理はなかつた。併し京都の方では、全く左樣に行かなかつた。

（第四十六）京都の風向

當時主上の第一の御相談相手とも申すべき青蓮院宮は、最も眞面目なる攘夷論者で在した。とても容易に岩瀨等が說伏する如き者ではなかつた。且つ宮は當時に於て既に皇權恢復の雄志もあり、なかなか川路等の脅したり、賺したりしても容易にそれに乘らるゝ樣な御方ではなかつた。而して宮と同腹であつたのは、先づ近衞忠熈、三條實萬等であつて、これ等の人々は、最も主上に接近し、謂はゞ主上御親近の內閣中の內閣とも云ふべきものであつた。

× × ×

今茲に當時如何にして、青蓮院宮と、孝明天皇と御接近遊ばさるゝに至つたかの因由を尋ぬるに、宮の家臣として、宮に御親近したる山田勘解由時章の子、介太郎の語る所は左の通りである。

幕府は常に十分手を盡くして警戒をなし、諸藩のことは何事も所司代の手を經て取上げたる關門よりの外は、決して主上陛下に奏上の叶はぬ樣重ねてより謁見と企も（略）

とを以て嚴重に宮中を拘束し置きければ、諸藩勤王家のことなどは一切叡聞に達すること能はざりき。

然るに勤王家のことが叡聞に達するに至りし原因と云ふは、初め嘉永の頃宮嬪の一人より青蓮院宮尊融法親王（久邇宮朝彦親王）に向けて、畏くも近年皇子方打續き夭折し給ふは如何にも御殘念なり定めて御逝去の方々の御怨靈も御座すらん。願はくは殿下に於かせられて皇胤御繁榮の御祈禱あらんことを請ひ參らすと申出でられたり。時に青蓮院宮の仰せらるゝには、余は皇都鎭護の職に在れば固より御祈禱を否むにはあらされども、宮嬪よりの御依賴のみにては直ちに受け難し。主上陛下の勅命あらば謹で御受け仕るべしとて一先づ御斷りあらせられたり。やがてこのことを宮嬪より陛下に奏上ありて、畏くも　主上陛下より改めて御祈禱の勅命ありしかば、こゝに青蓮院宮は御參內遊ばすことゝなれり。

さていよ〳〵御參內につきては御供の僧は十分の選擇を要す。何人が適當ならんとて御評議ありしが、こゝに青蓮院宮が最初在せし南都一乘院の末寺なる清水寺の成就院月照と云ふ僧あり。年も長じ溫厚無事の者なれば、是れ宜しからんと御評定の上御供に召し連れ遊ばすことゝなれり。」

上記の如き次第にて、青蓮院宮は當時主上の御相談相手として、殆んど唯一無二の御方にて在した。而して近衞忠熙、三條實萬の兩人を合して、先づ三人內閣とも申す可き狀態であつた。

× × ×

離れて他の方面を見れば、井伊家と親近なる九條尚忠を第一に擧げねばならぬ。彼は老練なる鷹司政通に次で、最も有力なる公家の一人であつた。然も當時は現職の關白であつた。而して當時の准后、我等が英照皇太后と申上げ奉る御方の父であつた。されば九條關白は、孝明天皇にとつては、正しく外戚に當らせ給うた。而して關白の上には大閤鷹司政通があつた。これは七十餘歲の老人にて、老たりと雖も、往年の餘威尙ほ赫々たるものがあつた。彼は水戶家と親類であり、卽ち水戶齊昭の妹がその夫人であつた。しかも齊昭は常に彼を通して種々の手入れをなしたるに關らず、彼は外交論に付いては、必ずしも同意見ではなかつた。堀田の京都に至つた頃には、志士の間にも頗る不評判なのは彼であつた。彼を俗論黨の魁首とみなしてゐた。而してかへつて當初に於ては九條關白の

方が正論家らしく思はれてゐた。此れは關白が表裏兩樣の掛引あつた爲めであらう。

× × ×

堀田の上京と共に、舞臺は江戸から京都に移つた。單に外交問題ばかりでなく、繼嗣問題が京都に於て勝負を決せんとした。即ち一橋黨は手を代へ品を代へ、種々運動はしたものゝ、外部の方は殆ど十に八、九まではその思ふところとなつたに關はらず、將軍家定の周邊、大奥などに於て、反對の空氣が最も濃厚であり、その難關を打破るには、最早手段はない。この上はたゞ年長、賢明、人望の者を將軍の世嗣とせよとの勅諚の御降下を申受けて、否應なしにそれを遵奉せしむる外はないといふことに決着し、いよ／＼それに向つて全力をそそいだのである。從つていよ／＼その場合となれば、如何に將軍の內部は紀州黨で固つてゐても、みす／＼違勅の罪を犯すことゝなるからして、是非ともそれを避くべき爲に紀州黨に於ては、その對抗運動の必要を生じたことは論をまたぬ。

此の如くにして、京都は攘夷、和親、鎖國、開國の議論のみならず又た一橋、紀州兩黨の勝敗を決する天王山となつた。斯る場合に於て、紀州黨の爲に最も骨折つたのが長野主膳と、九條家の諸大夫島田左近であつたが、一橋黨に於て最も骨折つたのが、即ち橋本左內と西鄉吉之助であつた。吉之助は即ち南洲先生のことだ。吉之助の手は一方は近衞家に及び、一方は家定將軍御臺所、即ち後の天璋院に及び、反對黨の事情偵察は、彼の手から出來た。

併し最も鮮かなる手腕をこの際に示したのは、橋本左內であつた。この機會に於て我等は少しく橋本左內に就いて語る必要がある。

（第四十七）　橋本左內の運動

凡そ維新の人物は、その類多くあるが、橋本左內の如きは、最もその中に於ける超群絕倫の一人と云はればなるまい。彼が井伊大老の爲に刑死したのは、數へ年の二十六歲であつて、今日ならば漸く大學卒業前後の年齡である。併し彼は當時第一流の名士として誰からも識認せられた。吉田松陰は彼と同時に刑死せられたが、彼は數へ年三十歲であつた。孰れも早熟の標本とも云ふべき人々であつたが、天下經綸の才としては、松陰と雖も

或は橋本に一籌を輸したかも知れない。彼は醫者の出身で、醫者を卑んでゐた。彼は醫者としても有數の腕前を持つてゐた。彼が當時福井藩の儒者、吉田東篁の夫人の乳癌を手術したる手際の如きは、實に人を驚かしたといふ。或時福井藩の參政鈴木主税が江戸に於て藤田東湖に會し、天下に人物が乏しいといふ話をしたが、東湖が、「貴藩には橋本左內といふ人物がゐるではないか。何故に之を登用せざるか」といふたから、主税はその同僚中根靱負とはかり、藩主に勸めたといふことである。

×　×　×

斯くていよ〳〵彼が醫者をやめて松平慶永の手許に働くこと、なつた。これが安政二年、彼二十二歳の時である。當時彼は常盤橋內の藩邸に住し、鈴木主税の家に同居してゐた。而して同年十二月、水戸藩士原田八兵衞の舍にて、初めて西郷に面會し、其後西郷を訪問したが、西郷は左內の容貌が柔弱にして婦人の如きをみて、相手としなかつた。然るに左內がその蘊奥を傾けて天下の大勢を論ずるや、西郷も自然頭の下るを覺え翌日は左內を訪ね、前日の失禮を謝し、斯くて二人は親交を結んだといふことである。西郷は常に、先輩に於ては藤田東湖に服し、同輩に於ては橋本左內を推すといひ、武田耕雲齋は彼を評して、「東湖の後又東湖あり」といふた。横井小楠は彼を以て鋭錐に似たりといひ、兎に角彼は素張らしき漢であつた。されば當時幕府の能吏川路の如きも、初めて彼に面會して、斯く申してゐる。

「扨又た橋本左內へは初めて對面仕り候が、未だ壯年に見え候に、議論の正確、驚入り候事共にて、餘りに[illegible]、迷惑刀もて切られぬ迄の事に候ひて、かばかり押つめられ、に侍りし事は覺え候はず」と。

斯く川路は、橋本の主松平慶永に千代田城に於てその前夕左內と面會したことを語つてゐる。又た中根雪江の手記にも、

「備中殿（堀田）笑ひ給ひて、左衞門（川路）が申せしは左內は二十四五ばかり、六七にはなる間敷き若者なるに、辯論、才智大晴なる事共にて殆ど辟易せる由。越侯にはよき家來を持たれたりと、事の外賞嘆しをれり」

とある。

いづれにしても彼は實に傑物であつた。而して彼は堀田の上京と相前後して、此度大阪へ和蘭の事務取調べといふことにて、

竊かに上京し、初めは桃井亮太郎後に伊織と名を改めて、主として青蓮院宮、鷹司、三條その他の間を周旋し、いよ／＼一橋黨の爲に大活躍をなし、賢明、年長、人望、三者の條件もて勅諚の降下を運動した。

彼の活躍したるは、安政五年二月七日着京、同じく四月十一日歸府とある通り、僅かの間に過ぎないか、しかもその間に於ける彼の活躍振りは、實に目覺ましきものであつた。今彼の報告書によつてみれば、彼は先づ彼の主松平慶永の親友である土佐藩主山内豐信（容堂）の直書を以て三條實萬公に面會し、それより段々話を始めた。彼の報告書は即ち左の通りである。

『九日朝山水圖金千疋持參にて（外に唐紙持參）三條公御染筆相願申候。四ツ時前三條殿へ上る。無程御面會。種々御話御坐候。先我より當今の御時勢如何に御思召し候哉と御尋申上候處、兼て越侯賢明は耳底に響居候故、此方より手も附申度と存居候へども、此より有土の御方へ手指も如何と控居り候。高知（松平容堂公）は隨分有志と見受、先年來熟話致居候。乍去、壯年故英果に過動輒引害の恐有之故、毎々警置候。然るに近來御主君は御懇意の模様、殊更今般は越侯の近臣御遣、大慶の至。今日は無二腹藏一可二相咄一候條、戸外に出候ては雙方共片辭も漏間敷と申事の御臺有レ之候。依て越前守にも賢公の御盛德流傳以來、已に七星霜、今日小臣肺肝、吐露仕候も啻土侯の爲ならず。開機事は貴レ密候事萬々心得候旨申上。次で海外の形勢御洞察候



橋本左内肖像

哉、又は御詳聞候哉と御問詰（此にて聊御試申上げ候なり）申候處、漠然の御様子夫にては御咄六か敷候。先、私より說初候はんと申、近來、魯英の垂涎、墨夷の恐喝等粗申上候處、一通御了解御坐候。次で關東の勢水老公の不首尾御英烈、閣老の優游不斷に相成候も英主折辟なき義抔、粗御物語仕、次で堀田、川、岩等の品藻御尋に付粗申上置、隨分介護致候處堀は姦人也と御笑被レ成候。福山（阿部伊勢守）とは大相違抔と申御話も御坐候。所レ要、御見込は打拂に候哉、和議に候哉と御詰問申上候處、先當今の模樣推測候ての事也と被レ仰、去らば和議に候哉。唯一通り不穩無事を喜候は俗情に御坐候。和ならば益よ臨戰の手當無レ之て不二相叶一。夫には此儀も六か敷義と奉レ存候。戰にても唯廟算先定が主とのみ申、五事七計、各其道を不レ得して漫に戰と云鬭と云は書生の迂論也と申上候處、何分三家々門の內の御人に、英傑有レ之樣被レ存候。其人が恃と被レ仰候。依て逐々橋公（一橋慶喜公）の事に及候處、拍掌御歡にて得二其人一と被レ仰、續て其譯御問申候處、暗に西の丸の御論に移候故、直に越前守樣御心配の條、近來只箇一事に御坐候と申、年來之顚末拜陳仕候處、誠に御讃賞、越公の被レ薦レ賢候事、誠に可レ喜事と被レ仰、其義は內實此表にも沙汰も有レ之候間、倘又周旋可レ致被レ仰候。夫より將軍上洛等の御咄に相成申候」

猶又左の如くある。

『十五日。粟田宮樣（久邇宮朝彥親王）手筋附掛候處、果して越は賴にならぬと被レ仰、大に御機嫌不レ宜よし。依て眞忠不レ可二以レ迹論一と申事申込、逐々及二議論一置候。

十六日。御近臣に內話候處、此人伊丹藏人（粟田宮諸太夫伊丹藏人重賢）と申す、頗才力有レ之者にて能小拙申處に感服、遂に越は關東の間者に無レ之事說破して、宮樣御機嫌も相直り申候。其上種々御懇の御意も有レ之、剩へ仕義により御目見も出來候事に相運申候』

此の如く彼の手蔓は、追々進んで行つた。彼が記する處によれば、當時孝明天皇が、如何に京都に於ける政治上の中心で在したかゞ遂一證據立てられてゐる。即ち左の通りである。

『過日主上（孝明天皇）御意に政通（關白太閤）を父の如く思ひ

しに存の外也と被レ仰候由。其後太閤大に失勢候と申事。主上御義は、御壯年にも被レ爲レ在御英明之御沙汰は伺居候得共、内實は如何と恐多くも疑居候處、實に奉二驚伏一候事共數件御坐候。此節世上取沙汰の事共、一々御耳に入居候よし、(此は青蓮君よりの様子)此節は夜分御忍にて(侍從も不レ知位)内侍所へ御日參被レ遊候よし。過日は東坊城(傳奏)太閤に恐れ賄賂を取り、剰へ乍レ恐も今度關東の申如く不レ被レ成時は、承久の後鳥羽帝の事可レ恐抔申候處、大に御笑叱、其は間違なり。彼は武家に歸したる權を御所へ御取返の御趣向、今度は
皇國の御一大事故、
皇國人心之所レ歸にて處置致候積(當時正論家の眼目此一語に盡居申候。列侯の有二御尋一も此邊の見込に御坐候)依て相考候へは、彼は内地にて公武の爭、此度は
皇夷の爭に候。必ず承久度の事無レ之間安心可レ申。其にても强て其事を行候はゞ、其時は不レ足レ畏と、御垂諭被レ遊候よし。此御一語の御德音、實に鳳鳴龍吟。爲二我神州一增レ光候事萬々、吾儕一命位は實不レ足レ惜と奉レ存候。又九條關白頻に有志家と太閤の間に憎被レ居候を、種々御鞭策御坐候よし。又傳奏は兎角賄賂に流候を御傳聞。毎々御前に御召寄、一々御叱呵被レ遊候よし。又深夜迄此節は舊記等之穿鑿被二仰付一、御膳も餘程御遅きに相成候よし。又御酒も此節は御減被レ遊候よし、一説には御嗜なんど御止に相成候と申居。又一説に應右府より交易通商致候と、時計の類夥敷御來仕御自由に相成候と被レ申候處、此方には侍兒有レ之間、時計の爲には交易不二出來一と被レ仰候よし。應太閤は爲レ人怜悧通曉明熟、殊に三十年來の執權故、威望相共(此に水老公も被レ煩候關係。密書漏洩も應よりと申事。)至尊にも御幼稚よりの御依頼にて、父の如く師の如く被二思召一候よし。依て天下を睥睨被レ致、才智威德、海内其右に出る者なしと被レ思候よし。又平日御血統御自慢にて□□□□□□□□□□□□□□□□に被レ矜候よし(東山の御胤にて藤家にはあらざる由)又此迄關東へは頻に被レ媚。賄賂御取被レ成。近來許多の盗財出來候よし(大阪に預有レ之趣)平日關東上使の節は、傳奏用人土佐屋敷にて應接有レ之候が當前の手始に候處應の用人大津迄忽出居、大津にて

内情逐一聞糺歸候由。依て何時にても關東之事は鷹家へ先入致し候よし。又公卿にては御附武家所司代の外は武家と不レ交定の處、鷹家よりは町奉行手先へ迄往來致し候よし。太閤御丁簡は堀田申處一々尤なり。如レ此相成候へば、此方存じと一々符合と被レ申候由。

關東より此度の事に付（兎角遷延に付不レ能レ已黒策に相成候鹽梅）主上へ一萬兩、鷹へ一萬兩、傳奏へ一萬兩可レ進旨、川路より申出候よし。兩傳は少々受候よし。鷹は事濟迄預置と申候よし。

主上は賣國の賊也と御怒被レ遊候よし。此事大に堀田始の名を汚申候」

× × ×

尚ほ彼が青蓮院宮樣に就いて記したる處は、左の如くである。

「青蓮院宮樣には、南都に被レ爲レ居候時より、狂宮の名有レ之、于レ今俗人は勿論、有志にても信じ不レ申、乍レ去、英爽慷慨、中々不世出の御模樣。謀略は如何とも難レ申候得共、何分御人材に相違無レ之、此御方一番御賴に相成候。此旨主上の御論は、神州を夷狄に爲レ給候ては不二相成一旨、特立して被レ作候よし。此も宮の御綱大分行レ之候樣。乍レ去、世に知る人少し。宮は栗田にては御遠方故か、此頃は始終御里坊に被レ爲レ入候。（此は御所の御火事、梨木町）

何人にても橋本に面會せざればやむ。面會したる時には、忽ち彼の爲に說伏せられずにはをられなかつたであらう。

佐佐木茂索著

短篇集 南京の皿

小穴隆一裝幀
木版極美本

定價 貳圓
送料 廿錢

最新刊

「南京の皿」と題した由來は——今は、此題を記念したい氣のただに強い著者の「南京の皿」の後に」に見られたい。尙此書が芥川龍之介の靈前に獻じられてゐるのは、後人への精神的遺產に對する、芥川龍之介への今に生くるものの中の優偉なる挨拶の一つであらう。その內容や姿は、今日の流行の外に——いや、流行の眞唯中に麗容比なき智的な文章を構成して、新代の生活のために風景のために纖細を極めた古い新芽をふき立てゝゐる。のみならず、ひそかに幹には——この作集には美しい寂莕さへ蓄へ初めてゐる。愛讀を乞うて歇まない所以である。

目次

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二



日蓮

武者小路實篤

登場人物

日蓮
日昭
日朗
熊王
日唱
其他

（序）

甲。君は日蓮と云ふ坊主をどう思ふ。

乙。僕は日蓮の云ふことには賛成出來ない。あいつは法華經を頭から信用してゐる。まるで法華經の漢譯を釋迦自身がやつたやうにでも思つてゐる。そして法華經の

一言一句をそのまゝに信じてゐる。法華經はたしかに經典の王かも知れない。しかし王様許りの云ふことをきかなければならないと云ふこともあるまい。それに法華經には餘分な分子が入つてゐる。信じられないことがかいてある。日蓮はそれをあまり眞正直にとりすぎてゐる。そして相手をやつけるのでも何々のお經にはかうかいてある。その一點張りで相手をやつけてゐる。僕はお經はずつとあとに、それも釋迦の教へをそのまゝにかいたものでなく、後の人によつていろ〳〵のものがつけ加へられてゐるやうに思ふのだ。

甲。それなら君は日蓮を輕蔑してゐるのか、僕は君は日蓮を尊敬してゐるのかと思つてゐた。

乙。勿論尊敬してゐる。僕は日蓮の信者にはなれない、又弟子にはなれない。だがあいつの人物の強さには感心し切つてゐる。僕は今の時代にあいつ程偉い男はないと思つてゐる。あいつの說教を聞いてゐると、力が内からあふれ切つてゐる。何ものも恐れないと云ふのはあいつのことだ。石や瓦をぶつけられること位いは何とも思つてゐない。すべての人を敵とすることを恐れない。一人の弟子が出來ないでも、狂つて自分の信仰を疑つたことはない。そしてますく勇氣がうちからあふれるのだ。そしてあいつの言葉が不思議に愉快だ。あの位い力強い言葉をはくことが出來るものを見たことはない。しかもそれは内にはりさける許の力をもつてゐる。君も一度きいて見るがいゝ。男子があの位いの決心をもつて立ち上ればどんなことでも出來ると云ふ氣がする。しかし僕達にはあの信仰に出會ない。僕達は理窟は知つてゐる。日蓮のまちがつた處も氣がついてゐる。しかしあの力にはかなわない。あいつは風のやうな男、噴火山のやうな男。何も恐れない男だ。僕はあんな男が今時に生れたことを不思議に思ふ。そしてあいつにくらべると僕達はあまりに臆病であり、意久地なしだと思ふ。

甲。圖々しい野心だと云ふものがある。山師だと云ふものがある。

乙。山師からあの力は生れない。あの言葉の調子は生れない。一度聞いて見るがいゝ。君はきつと感心するだらう。なんなら之から一緒に行つて見てもいゝ。ともかく珍らしい男だ。北條なぞを眼中においてゐない。念佛宗の寺の前では念佛を云ふと無間地獄におちると云ひ、禪宗の寺の前では禪天魔とやつける。遠慮えしやくのないのには腹もたつが、あれでなければならないのだとも思ふ。一人で天下を相手にして、俺の云ふことをきかないと日本が亡びると云ふのだから、一通りのことではだめなことはわかつてゐる。

甲。實際さう思つてゐるのだらうか。

乙。それは本當にさう思つてゐる。あいつの話をきいてゐると天變地異ことごとく日蓮の云ふことをきかないから起るのだと云ふことになるが、しかしさう信じ切つてゐるのだから、仕方がない。

甲。あいつ達の仲間は南無妙法蓮華經と云つてゐるさうだがそれはどう云ふ意味なのだらう。

乙。僕はよくは知らないが、さう云ふと全世界に充滿してゐる佛性があらはれて來て、自分の内の佛性と通じあふと思つてゐるらしい。つまり宇宙の佛性と調和してゆくのが法華經の根本精神らしいのだ。

甲。それが出來ればわるくないね。

乙。それが本當に出來れば元よりわるくない。たゞ日蓮は自分の宗派だけがそれが出來るので、他のは皆駄目なのだと思ひ込んでゐる。そして法然なんかも散々にやつつける。しかし僕は法然も中々偉かつた。ある點では日蓮よりは利口だと思つてゐる。又なつかしい處のある人だと思つてゐる。だが日蓮が法然に我慢が出來ないのは無理がない。あいつは誰にだつて頭をさげることがきらいにちがいない。又あいつの頭をさげさせられるものは、今の世のなかにはないだらう。南無妙法蓮華經の聲が聞えだしたら一聞一見にしかずだ。一緒にいつてまのあたり日蓮を見、日蓮の說教をきいたらどうだ。

甲。それなら行つて見やう。

—

（日蓮說教してゐる。十二三人聞いてゐる）

日蓮。皆さんは禪と云ふものはどう云ふものか知つてゐますか。一人で坐つてゐる。一人で考へてゐる。何にもしない。世の中に天變地異が起らうが、人々が餓死しやうが、彼等は依然として坐つてゐる。彼等には他人の不幸は問題にならないのだ。そんなことはどうでもいゝのだ。だから私は禪を天魔だと云ふのだ。皆を一人よがりにする。他人のことは何とも思はないやうにする。それが天魔でなくつて何んだ。

（甲乙、聽衆にまぢる）

日蓮。今の時代はそんな呑氣なことをしてゐられる時ぢやない。あなた方は日本が亡びてもかまわないのか。あなたの兄弟姉妹や妻子、夫が外國人に殺され又、はづかしめられても、それでいゝのか。平氣でゐられますか。又大地震があり、大津波があつても君達は平氣でゐるか。又大飢饉が來て君達は何にも食へなくなる。又世のなかが亂れて上と下で殺しあふ。君達はさう云ふ時代が來るのをのぞんでゐるか。まさかのぞんではゐられまい。だが今のまゝだとさう云ふ

ふ時がくるのは、火を見るよりもあきらかなことだ。汝達は又大地震にあいたいか。敵國にせめられたいか。飢え死にがしたいか。それならば今まで通りに呑氣に生きてゆくがいゝ。まちがいなく汝達は天命を全うせずに死ぬことが出來る。しかし恐ろしいことを知るものは、今迄のやうな心がけではいけない。念佛さへ云つてゐれば極樂へゆけるなぞと思つてゐるのは大まちがいだ。恐ろしいことはそんなことにおどろきはしないで、平氣についで起つてくる。それは今迄も汝達が見聞した處だ。今にもつと恐ろしい時がくる。汝達が今のやうなまちがつた考へ、まちがつた教に導かれて行つたら日本の滅亡は必ずくる。それは大地を槌で打つよりもまちがいのないことだ。經文にもそのことはちやんと出てゐる。汝達は今の内に心がけをなほし、まちがつた教へからはなれ、本當の佛道を求めなければならない。早く信仰の方心を改めて、法華經を信じなければならない。法華經は諸經の王だ。一國に二王があつては國が亂れる。一家に二人の主人があれば家は爭ひがたえない。お經の内にも王となるべき經はたゞ一つ切りない。法華經が即ちそれだ。慈覺大師は法華第一の經文を奪ひとつて、金剛經を第一にした。法華經の頭を切つて眞言經の頭につけた。それは體の頭を切つて他の頭につけたが、眞言の體も死に、法華經の體の御頭も切られてしまつた。此こそ人間の[illegible]まちがつた考へ、まちがつた教に導かれて行つたら日本は滅亡する。それは大地を槌でぶつよりまちがいがない。經文にもそのことはちやんと出てゐる。藥師經の七難のことがといてあるが、今迄に五難は既に起つた、あと二つ、他國の侵入の難と、自國の叛逆の難がのこつてゐるが、之を今のまゝではゆけば必ず起るにちがいない。大集經の三難の内二難は既に起つてゐる。その一難は矢張り他國にせめ亡ぼされる難だ。仁王經にも七難がといてあるが、その内六難はすでに起つて、あとの一つがまさに起らうとしてゐる。それは外國人が日本をせめ亡ぼす難だ。國土が亂れる時は、先づ鬼神が亂れるものだ、鬼神が亂れる故に人々の心が定らず、亂れてくる。たしかに百鬼早く亂れ、萬民多く亡んだ、先難既に來たから後難もやがてくるだらう。もしそのあとの難がくるのを恐れるならば、人々は心がけをなほし、信仰をあらため、邪教を信じるのをやめなければならない。大集經に若し國王あつて、無量世において施をし、戒を守り、知慧を研くとも、我が教の亡びるのを見て、捨てゝ顧みなかつたら、すべての善根はきえて、其王は久しからずして重病にあい、そして無間地獄におちると云はれてゐる。又仁王經に、人佛教をやぶれば、復孝子なく、六親不和にして天神も祐けず、疾疫惡鬼日に來つて侵害し、災怪つゞいておこり、死して地

獄、餓鬼、畜生に入らん。種々の逆は地獄の苦をこの世から味ひたいか。もし味はいたくなければこの日蓮の云ふことをよく聞け、我はいろ〳〵の教を見たが、法華をそしるものゝ罪が最も重い。しかるに今の人は正法の門に入らず、邪教の門に入る、かなしまないわけにゆくか。恐れないわけにゆくか。

（二三人やつてくる）

男一。又、始めてやがるな。まだこりないのか。

日蓮。私は何度でも云ふ眞言亡國、律國賊。禪天魔、念佛無間、

（三人の人石をなげる）

日蓮。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、

群集の一人。日蓮を殺せ、日蓮を殺せ。

（日蓮、その方を見て笑をふくんで云ふ）

日蓮。この日蓮を殺せば世の中は泰平になるか、ます〳〵亂れる許りぢやないか。私を殺せば地震がなくなるとでも思ふのか。自分の生命の惜しくないもの、地獄におちたいものはこの日蓮を殺せ。法華經に背きたいものはこの法華經の行者日蓮を殺せ。だが殺すと云へば怖がるとでも思つてゐれば大まちがい。私は法華經のために殺されるなら、それは石を黄金にかへること位いに切り思つてゐない。さあ私が殺したくば、殺すがいゝ。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、花をぶつける人々の方へ向つて靜かに步きながら云ふ）禪天魔、念佛無間、眞言亡國、律國賊、南無妙法蓮華經、〳〵、〳〵、々々々々…

…（日蓮、次第に惡口を云つた者を睨返しながら退場、あとに甲乙のこる）

乙。どうだ。

甲。本當に恐ろしい男だ、何處まで底力のある男か知れない。

乙。何ものも恐れるものはないのだ。經文を信じ切つてゐるのは物凄いが、あの力には感心しないわけにはゆかない。この男は今にきつと大きいことをするにちがいない。

甲。本當に僕は始めてこんな男を見た。もつとついていつて見やう。僕は今迄つまらぬことをくよ〳〵してゐたのが耻かしくなつた。僕はなんだか急に何ものも恐れる必要がなくたつて來た氣がする。あの男の力には僕は本當に感服する。あの南無妙法蓮華經と云ふ聲が耳についてはなれない。

乙。ともかく珍らしい男だ。

（二人あとをついてゆく）

二

（松葉ケ谷の草庵にて）

日蓮。歸つて來た。

日昭。お歸りなさいまし。またけがしていらつしやいましたね。

日蓮。こんな石がぶつかつたのだ。だがいゝ氣持だつた。少しはほりあいがある。だが意久地のない奴で、いやがらせを云つてたその男たちの方に歩いて行つたら逃げていつた。日蓮を殺せと云つてたよ。

日昭。本當に用心なさらないとあぶのう御ざいます。

日蓮。日昭は死ぬことなんかなんとも思つてゐない。

日昭。だが今あなたになくなられたら、私達はどうしたらいゝのですか。

日蓮。なに私がゐる。日蓮が死んだら、その時は私は今の百倍の力がわくだらう。他にも有望な奴がいくらだつてゐる。

日昭。だめです。まだだめです。あなたは國の柱です。あなたがゐらつしやらなければ日本は暗になります。私達は誰に教へをうけていいかわかりません。

日蓮。法華經がある。

日昭。それでもあなたがゐられなければ、私達は心細くなります。生命だけは大事にして下さい。あなたお一人の生命ではありません。

日蓮。好んでおろそかにはしない。私だつて死にたくはない。だが死を恐れはしない。そして生きてゐる方がいゝ間は生きてゐるだらう。さうたやすくは私は殺されはしない。安心してゐるがいゝ。しかもいざと云ふ時が來ても私は安心してゐる。お前達がゐるから。

日昭。あなたの力が強ければ強い程、敵が出來ます。

日蓮。私もやつと敵が出來だした。彼等はもうだまつてはゐられない。勝つか負けるかの勝負だ。だが私は負けないものだ。段々面白くなつてくる。

日昭。本當で御ざいます。

日蓮。私も迫害を恐れはしまい。

日昭。勿論です。

日蓮。何ものも恐れずに、たゞ無上道を惜しむものになりたい。

日昭。本當でございます。

日蓮。月が出て來た。

日昭。本當にいつも月は美しいものですね。

日蓮。さあ、それなら之から靜かに勉強でもしやう。

日昭。はい。私はその間に御飯の用意をいたしませう。

日蓮。かうやつてゐると額の傷がちく〳〵痛みだす、反つて愉快になるよ。

日昭。あなたにあつては誰も叶ひませんよ。

日蓮。それはさうだ。默つてゐればなほのさばり出てやる。手向へばなほのさばり出る。迫害すればなほのさばり出る。殺せばなほのさばり出てやるのだから、あはゝゝ。この頃では鎌倉でも時々思はぬ所で南無妙法蓮華經の聲をきくことが出來るやうになつた。

日昭。本當でございます。

日蓮。それでは讀經でもしやう。

日昭。あなたの讀經をきゝながら飯の仕度をするのは氣持のいゝものです。

日蓮。御經をよんでゐる内に飯の用意の出來るのは又一段と氣もちのいゝものだ。はゝゝゝ。

日昭。はゝゝゝ。

日蓮。爾時佛告諸菩薩。及一切大衆。諸善男子。汝等當信解。如來誠諦之語………

日昭。汝等當信解……(日蓮の聲にあはせる)

(熊王登場)

熊王。大へんです。大へんです。

日蓮。なんだ。

熊王。み、みん、皆がお師匠様を燒き殺すと云つてやつて來ます。こゝにゐらつしては燒き殺されます。

日蓮。さうか。よく知らせてくれた。それなら日昭逃げることにしやう。

熊王。早く、早く。

日蓮。あはてまい、あはてまい。前から覺悟してゐた。日昭お經をもつてこい。私はお經を持つて逃げるからね、腹がへつては戰は出來ないからな。

日昭。はい。

熊王。お師匠さん、あなたは不氣味ですね。もうすぐ來ます。

日蓮。よし、それぢや、あはてゝ逃げることにしやう。日昭出來るだけ早くついてかけて來い。

(二人かけ出す)

熊王。私もまけてはいませんよ(何か手あたりに持つてあとをついてゆく)

(外から大勢がおしよせる聲が聞える)

三

日蓮。こゝまでくれば安心だ。

熊王。お師匠さまは足が早いのですね。そんなにふとつてゐても。

日蓮。それは早いさ。一日に二十里位いは今でも平氣で歩くよ。それ

にから云ふ時の用意に逃げる時の用意はしてゐたからね。日昭、お前も早いな。殺されるのはお前も大張り好きぢやないな。はゝゝ。

熊王。お師匠さん、お師匠さん、大へんです。火をつけました。

日蓮。默つてゐたつて、そんなことはわかつてゐる。それぢや火を見ながら飯でも食ふとしやう。こゝからよく見えるからね。

日昭。さういたしませう。

熊王。呑氣だな。

日蓮。あはてたつて仕方がない。よく燃えるな。にぎり飯を食ひながら見てゐるのは愉快だな。

日昭。本當に愉快です。よく燃えますね。澤山な人で御ざいますね。

日蓮。あんたに大勢こないと、この日蓮を殺せないと思つてゐるのかね。呑氣な奴だね。

熊王。(獨白)どつちがのんきなのかわかりはしない。

(日朗(十四五)登場)

日朗。お師匠樣。(日蓮にとびつき泣く)

日蓮。どうして歸つて來た。

日朗。胸さわぎがして母にとめられましたが、いそいで歸つて來ましたら、あのさわぎなのでおどろきました。萬一生てゐらつしやればこゝに逃げてゐらつしやると思つて、心配しながら來て見たのです。

日蓮。それはよかつた。

日朗。お叔父樣もお無事で。

日昭。お前も無事でよかつた。

熊王。切りあいが始まつたやうで御ざいます。

日蓮。日蓮を助けに來たものがあるのだらう。誰か見に行くといゝ。

日朗。私が見て來ます。

熊王。私がゆく方が安全です。

日蓮。それなら熊王さんにおたのみします。そして皆に、知れないやうに私が無事にしてゐることを知らせて下さい。

熊王。承知しました。

(熊王、退場)

日蓮。日朗、本當にびつくりしたか。

日朗。はい。本當にびつくりしました。

日蓮。法華經を信じるものが、之しきでおどろいてはだめだぞ。

日朗。それでも今、お師匠樣や、お叔父さまがお殺されになつたら、私はどうしていゝかわかりません。私もその時は死んでおともをしやうと思つてをりました。

日蓮。(怒らずに)馬鹿な奴ぢや。私達が死んだら、お前はたほしつか

り勉強して、私達の教へのあとつぎにならなければならない。

日朗。それでも私、本當にびつくりいたしました。それだけ生てゐらつしやるのを知つたら、あんまりうれしくつて、泣いてしまいました。

日蓮。可愛い〻奴だ。もう安心するがい〻。それにしても下で切りあつてゐる人々のことが氣にか〻る。熊王はどうしたか知らん。火も消えて來た。あたりも靜かになつて來た。

（進士善春、能登坊達、負傷して熊王に案内されて登場）

進士。お〻お師匠さま。よく御無事で。

日蓮。進士殿。負傷はどうだ。

進士。大したことは御ざいません。

日蓮。能登の坊、お前達も負傷をしたか。

能登。はい。大したことは御ざいません。

日蓮。この日蓮のことを思つて戰つてくれたことをありがたく思ふぞ。そして法華經のために傷をうけたことを君達はありがたく思ふがい〻。

進士達。はい。

日蓮。法華經の故に迫害され、傷つけられることは身の冥加だ。だが手あてを大事にして、生命を輕じないがい〻。

進士。よくお逃げになれましたね。

日蓮。熊王が知らせに來てくれたので逃げられた。私はまだ死ぬのは早いと見える。君達も死なずにすんだ。こんなうれしいことはない。

進士。之からお師匠樣はどうなさります。

日蓮。私か、私は暫らく鎌倉から遠ざからうと思ふ。だが近い内に又鎌倉へ歸つて來やうと思ふ。それまで身體を大事にして無理はしないがい〻。その内にあかるくなると事が面倒になる。それでは之でわかれることにするが、法華經とお題目はいつも君達の力になるだらう。南無妙法蓮華經、々々々々……

（皆日蓮の題目にあはせる）

日蓮。さらばぢや。

日昭。どちらへいらつしやいます。

日蓮。下總の方へ行くつもりだ。あつちには知つてゐるものが多いから。

日朗。私をどうぞおつれ下さい。

日蓮。お前は叔父さんと何處かへかくれてゐるがい〻、今度は私一人でゆく。それならば皆、達しやにしておいで。

皆。どうぞお身體御大事に。

日蓮。私のことは安心してゐるがいゝ。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、此經難持、若暫持者、我即歡喜、諸佛亦然…

（皆あとを伏し拜む。日朗あとをつけやうとして日昭にとめられ、泣き出す）

四

（草庵にて）

日朗。叔父さん、こんな花が咲いてゐました。

日昭。奇麗な花だな。

日朗。日蓮さまは今時分どうしてゐらつしやるでせう。御師匠さまはそれは花が好きでゐらつしやいました。

日昭。花がお好きだつたよりも、お前のその心根を愛されたのだ。

日朗。もうお別れして一年程になりますね。

日昭。さうだ。その間に日蓮さまは隨分いゝ弟子を澤山おつくりになつたさうだ。

日朗。私達も負けてはゐられませんね。

日昭。あたりまいさ。

日朗。この花、こゝにさしておきますよ。

日昭。あゝ、さしておゝき。

日朗。私はよそへ行つて歸つてくる時、いつも御師匠樣がおかへりになつてゐらつしやるかも知れないと思つて、たのしんで歸つてくるのです。

日昭。私だつてあの方のことを思はない日はない。そして不意に歸つてゐらつしやりはしないかと、足音がするたびに思はないことはない。

日朗。あの方がゐらつしやると日がさして來たやうなあかるい氣になります。何にも怖しいものはなくなります。

日昭。本當に早くあの方が歸つて來て下さるといゝのだが、なんだかあの方がゐないとはり合がない。

日朗。本當で御ざいます。御師匠樣も早く歸りたがつてゐらつしやいませう。

日昭。あの方は何處にゐらつしたつて、仕事がいくらでも御ありになる。だが鎌倉でないと働き甲斐が少ない。手ごたいが少ないと思つてゐらつしやる。

日朗。今度鎌倉へ歸つていらつしやると、お生命があぶのう御座いませうね。私はそれが心配なのです。

日昭。今度はもつと手やわらかにやつて戴くことにするといゝと思ふ。

日朗。本當に、今あの方になくなられては。

日昭。それではあの方が御元氣でゐらつしやるやうに、そして法華經が天下を支配するやうに、御題目でもおとなへしやう。

日朗。はい。

二人。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、

外で。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

日朗。あゝ、歸つていらつした。

日昭。さうだ、歸つてゐらつした。

日朗。私はうれしい

（日蓮登場）

日朗。よく歸つていらつしやいました。

日昭。お無事で。

日蓮。君達も無事でこんなうれしいことはない。

（日朗、あはてゝ、水をくんでくる）

日朗。随分おつかれになりましたらう。

日蓮。こんなに丈夫になつた。お前は少し大きくなつたね。

日朗。はい。

日蓮。少し利口になつたか。

日朗。前から利口で御ざいましたから。

日蓮。さうだつたかな。私は忘れてしまつたよ。

日昭。いゝお弟子が出來たさうでございますね。

日蓮。いゝ弟子が出來た。いたる所にいゝ人間はゐるもんだ。馬鹿も多いがね。

日昭。もうずつとこちらにゐらつしやいますか。

日蓮。ずつとゐるつもりだ。日蓮は元氣になつて歸つて來たぞ。

日朗。さうおつしやると前はお元氣がおありになりませんでしたね。

日蓮。なに云つてゐるのだ。

日朗。あの時よりもつと御元氣におなりになつては私達は困りますよ。お伴することも出來なくなりますからね。

日蓮。あはゝゝゝ。日朗、お前こそもつと元氣にならないといけないぞ。少し私のゐない内に臆病になつたらしいな。

日朗。そんなことはありません。

日昭。あなたがゐらつしやらないと、日朗奴はそれは氣の毒なやうにしよげております。

日朗。そんなことは嘘です。私はいつも元氣なのですが、叔父さんの方が、しよげてゐらつしやるのです。

日蓮。まあ、なんでもいゝ。之から一あばれあばれるつもりだから、そのつもりでゐてくれ。

日昭。今もお話しておりましたのですが、今度からもう少しお手やは

らかになさつたらどうかと思ひます。

日蓮。お前は生命が惜しくなつたのか。

日昭。私の生命はなんでもありません。

日蓮。俺の生命のことを心配するのか。この日蓮、法華經の行者の生命のことを心配するのか。生意氣な話だぞ。

日朗。それでも、もしものことがありましたら、この日本はどうなるのです。

日蓮。私の生命は法華經に任せた。私の生るるのも死ぬのも、佛陀の豫言通りになるのだ。私達の思ふ通りにはならない。死んではいけない間は生てゐるだらう。そして死ぬ方がいゝ時は死ぬだらう。私のことを心配する必要はない。

日朗。それでも。

日蓮。日朗。お前は俺に勘當されたいのか。この父の俺に。

日朗。そ、そ、そんなことはありません。

日蓮。そんならいゝ。心配することはない。俺達がぐづぐづしたり、意久地なしになつたりしてゐる内に、恐ろしいことはつゞいて起るのだ。私達が腰ぬけになつたら、日本は亡びてしまう。私達もしつかりしなければならないのだ。

日朗。私達もしつかりします。

日蓮。それでこそ、俺の子、俺の弟子だ。腰がへつたから、何でもいいから、飯をたべさしてもらいたい。

日昭。私達の食ひのこしの御飯でよろしかつたら。

日蓮。それで勿論結構だ。

日昭。それではすぐ仕度をいたします。

日朗。私がいたしませう。

日昭。本當にいろ〳〵の目にお逢ひになつたでせう。

日蓮。まあ、無事だつた。下總の中山の富木殿の世話になつてゐたが、大へんよくしていただいて幸福な日を送つてゐた。富木殿は私のために法華堂をつくつて下さつた。私は其處で說教したり、一尊四菩薩の御木像をつくつたりして無事にすごしてゐた。その内にいろ〳〵弟子が出來て來た。なかには滑稽な奴がゐて、私に問答をふつかけて、すぐまけて弟子になつたが、そいつは年中念佛をたゝいて念佛を云つてゐたので、何かたゝくものがないとお題目がいひにくいと云ふので、太鼓でもたゝいたらいゝだらうとさう云つてやつたら、本當に太鼓をたゝきながら題目をとなへ出した。あはゝゝ。

日朗。(飯の仕度をしながら)一年ぶりで御師匠様のお笑ひ聲をきくことが出來ました。

日昭。いつも日朗はあなたの笑ひ聲をきゝたがつておりました。

日蓮。おかしな奴だな、はゝゝゝ。

日朗。飯の用意が出來ました。

日蓮。それはありがたい。久しぶりで君達に逢つてこんな嬉しいことはない。

日朗。私達はなほ嬉しゆう御座います。

日蓮。何しろ之から本氣でやらうね。俺も段々決心が強まつて來た。

日朗。御決心があれより強まつたら、大へんでございますね。

日蓮。勿論大へんだよ。日蓮の折伏の仕事は之から本當に始まるのだ。怖いか。

日朗。いゝえ。

日蓮。お前もこの日蓮と一緒に戰ふか。

日朗。はい。

日蓮。樂ではないぞ。

日朗。はい。

日蓮。手や足を折られてもいゝか。

日朗。はい。

日蓮。首を切られてもいゝか。

日朗。はい。

日蓮。それでこそ、お前は俺の弟子だ。法華經の弟子だ。日照お前は勿論覺悟がいゝだらうな。

日照。はい。勿論でございます。

日蓮。この日蓮はありがたく思ふぞ。

五

（同じ場、日唱、太鼓をたゝきながら御題目をあげてゐる）

日唱。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、々々……。

（日照歸つてくる）

日照。御師匠さんはまだですか。

日唱。まだ御歸りになりません。

日照。何處へいらつしたのか知らん。私よりさきにお歸りになつたわけなのですが。

日唱。それはへんですね。

日照。もしものことがなければいゝが。

日唱。それは大丈夫でせう。暑いので、何處かで休んでいらつしやるのかも知れません。

日照。そんなことはないでせう。今日は早く歸つて手紙をかゝなければならないとおつしやつていらつしやいました。

日唱。日朗さんはどうなさりました。
日昭。あれは一寸買ひものに廻りました。もう歸つてくるでせう。私は氣になりますから一寸見に行つて來ます。
日唱。あなたもねらはれていらつしやるさうですから用心なさらないといけません。
日昭。大丈夫です。私なんか誰も何とも思つてゐません。
日唱。それでも用心なさる方がよろしい。
日昭。ありがたう、それでは用心して見て來ます。（退場）
日唱。（又太鼓をたゝきながら）南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、……
……。
（日朗、登場）
日朗。お師匠さまは。
日唱。まだお歸りになりません。
日朗。まだお歸りにならないのですか。それで叔父さまは。
日唱。歸つて御師匠樣がお見えにならなかつたら、すぐさがしにお出かけになりました。
日朗。それなら私も之からさがしに行つて來ます。
日唱。もうその内にはお歸りになるでせう。
日朗。なんだかへんに氣になります。
日唱。大丈夫でせう。
日朗。大丈夫とは思ひますが、なんだか氣になりますから。（退場）
（日唱又太鼓をたゝき題目をとなへる）
日昭。（歸つて來）まだお歸りになりませんか。
日唱。まだお歸りになりません。
日昭。どうも不思議です。もしかしたらつかまへられたのかも知れませんね。
日唱。そんなことはないでせう。
日昭。隨分ねらはれてゐらつしやるから。
日唱。それでも御師匠樣は運のいゝ方ですから、私は安心してゐます。
日昭。あなたは鎌倉の御樣子をお知りにならないから
日唱。それは危險なことは知つてゐますが。
日昭。もう一度見て來ます。日朗はまだ歸つて來ませんか。
日唱。歸つていらしつて、矢張り心配して見にいらつしやいました。
日昭。私はなんだか泣きたくなつて來ました。大丈夫とは思ひますが。
日唱。きつと今に歸つてゐらつしやつて、又大きな聲でお笑ひになりますよ。

日昭。さうだ、どんなにうれしいでせう。それでは一寸又行つて來ます。

日唱。用心してゐらつしやい。

日昭。えゝ。(退場)

日唱。私は大丈夫だと思ふ。あの方には誰も手向へない。(太鼓をならし又題目をとなへる)

日朗。(あはてゝ登場)まだですか。

日唱。まだです。

日朗。(泣きさうになり)それでは又行つて來ます。

日唱。もうぢきお歸りになるでせう。

日朗。私もさうは思つてゐるのですが。(退場)

日唱。なんだか私も氣になり出した。だが私は御師匠様が誰にもまけない方だと云ふことを信じてゐる。(太鼓をならし)南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經……

日昭(登場)まだですか。(汗をふく)

日唱。まだです。

日昭。もう絶望です。(水をがぶ〳〵のむ)

日唱。そんなことはないでせう。

日昭。きつとおつかまりになつたのです。もしかしたらお殺されになつたかも知れない。

日唱。そんなことはないでせう。今にきつと大きな圖體をしてにこりと笑ひながら歸つてゐらつしやいます。

日昭。私にはそんなことは思はれません。敵が實に多いのです。御生命をねらつてゐるものがどの位あるかわからないのです。

日唱。でもあの方は大丈夫です。あの方は運のいゝ方です。何ものにも負けない方です。

日昭。それは私だつてさうは思ひます。だが矢張りあの方でも人間です。どんな事が起らないとも限りません。それにあの方は殺されることはいつも覺悟してゐらつしやいます。決して殺されないとはきまりません。

日唱。それはさうです。だがあの方だけは大丈夫です。あの方の運勢は特別です。あの方の力は特別です。

日昭。それは私だつてさうは思ひますよ。だがあの方だつて人間ですから。私はなんだか心配になります。日朗はどうしました。

日唱。さつき一寸お歸りになつて、またさがしにいらつしやいました。

日昭。あの子にさがし出せなかつたらもう望みはありません。あの子はどんなことがあつてもきつとさがし出すでせう。あの子はきつと

鎌倉中を走り廻つて、そしてのこらず聞いて歩くでせうから。

日唱。本當に日朗さんは師思ひで、可愛いゝ方ですね。

日昭。日朗は日蓮様を父母上に思つております。きつとあの子はさがし出してくるでせう。だが私はぢつとしてゐられません。もう一度さがして來ます。

日唱。それなら私も一緒にさがしにゆきませう。

日昭。一人はこゝに殘つてゐた方がいゝでせう。お歸りになるかも知れませんから。たゞ私達があはてゝゐるのにすぎないかも知れませんから。

日唱。きつとそんなことだらうと思ひます。

日昭。それでは一寸行つて來ます。

日唱。どうぞ。きつと今度はお師匠様におあひになつてよろこんでお歸りになるやら、おいのりしてゐます。

日昭。どうぞ。（退場）

日唱。私も氣になり出した。だが私はあの方を信じてゐる。あの方の運を信じてゐる。法華經を信じてゐる。（又太鼓をたゝき題目をあげる）

（日昭、右の手を折られ、額をきづつけられ泣いてゐる日朗をかついで歸つてくる）

日唱。どうなさつたのです。隨分ひどいけがですね。

日朗。けがなんかなんでもありません。お師匠様が、御師匠さまが。

日唱。どうなさつたのです。

日朗。舟で舟でつれてゆかれておしまいになつたのです。

日唱。どちらへ。

日昭。伊豆だと云ふ話です。だが途中でお殺されになるのだと云ふ、もつぱらの噂だそうです。

日唱。いや〱。決してお師匠さまはお殺されにはなりません。

日朗。私も、私もさう思ひます。

日唱。どうしてけがなさつたのです。

日朗。お師匠様のあとをおしたいして舟にのせてくれと申しましたら、こんな目に逢つたのです。だが私は反つて元氣になりました。そして御師匠様が、あとのことは君達にたのむぞとおつしやつた時、私は死んでもいゝと思ひました。御師匠様は大層御元氣で、聲高らかに南無妙法蓮華經とおとなへになりながら舟で沖の方へつれてゆかれました。私も身體のいたみも忘れて、御題目をおとなへしておりました。そしてお姿が見えなくなつてから、歸つて來て叔父さまにお逢ひしたら、急に泣きたくなつてしまつたのです。私は日

分の身體の痛さで泣いたのではないのです。
日唱。醫者をよんで來ませう。
日昭。どうだ。
日朗。大したことはないのですから。
日昭。そんなことはない。早く醫者に見てもらう方がいゝ。
日唱。それでは行つて來ます。
日昭。お願ひします。
（日唱退場）
日昭。痛いだらう。
日朗。少しはね。だけどこんなこと位いで私は泣きはしません。御師匠様は殺されるやうなことはないでせうね。
日昭。大丈夫だと思ふ。
日朗。本當に大丈夫ですわね。
日昭。大丈夫だ。
日朗。叔父さんも泣いてゐらつしやるの。
日昭。ないてはゐないよ。今日のやうなことの起るのは覺悟してゐたことだ。私達は泣いてはゐられない。之からこそ本當にしつかりしなければならない。
日朗。今頃、どうしてゐらつしやるでせうね。
日昭。ます／＼御元氣でゐらつしやるだらう。
日朗。きつとさうですわね。
日昭。御無事でゐらつしやるやう。讀經をしやう。
日朗。はい。
日昭。法師品第十を讀まう。
日朗。はい。
（二人讀經する。日唱歸つて來て、讀經の仲間入りする。醫者來て、このさまを見ておどろく。）

六

（沖の俎岩。波荒し。舟近づく。舟には日蓮達がのつてゐる。舟を岩につける）
役人。日蓮、お前はこゝにおりろ。
日蓮。この岩におりろと云ふのは、私を殺すおつもりなのですね。
役人。御命令だ。私は御命令通りするより他はない。
日蓮。この岩は潮が滿つるとかくれるのですね。
役人。さうかも知れない。ともかくこの岩におりろ。
日蓮。それならおりませう。
（日蓮、岩へおりる）

役人。すぐ舟を出せ。

船頭。へい。

役人。日蓮、法華經を信じるものは水にもやられないとかいてあるさうだね。

日蓮。かいてある。

役人。お前が又鎌倉へ出て來たら、私はその經文を信じるだらうよ。

日蓮。きつと信じるか。

役人。君はきつと死なないかね。

日蓮。そんなことは天が知つてゐる。

役人。君は知らないのかね。それぢやたつしやにしてゐるがいゝ。

（船頭達笑ふ）

役人。それぢや舟をこげ。さすがの日蓮もしよげかへつてゐるな。

日蓮。誰がしよげるものか。

（舟、笑ふ聲をのこして去る）

日蓮。南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經。

（日はくれて來、海の水次第に増してくる）

日蓮。幕府や諸の宗派の者達よ。お前等はこの日蓮を今殺さうと思つてゐるのか。しかしこの法華經の行者日蓮はさうたやすくは死なない男だぞ。お前達は私が漁師の子だと云ふことを忘れてゐるのか。私がどの位い泳げる男かと云ふことを知らないのか。しかしこの近くには恐ろしいさめやふかでもゐるのか。しかし何がゐたとしても、この日蓮はさうたやすくは死なない男だ。私を守護してゐるものがこの日蓮をさうやす〳〵とは死なしはしない。お前達はこの岩の上に流せば、必ず死ぬと思つてゐるのだらう。法華經の行者の力を知らないものだ。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。おゝ月が出て來たぞ。おゝ、夜の海の凄い美しさ。水がだん〳〵ましてくる。ものすごい美しさ。私でなかつたらさぞこの凄さに參るだらう。だがこの日蓮は之しきのことでは參りはしない。波よあれたいだけ荒れろ、海よ。お前の威力を示すだけ示せ。だがこの日蓮の信仰の力はお前たちにやつけられるやうなものではない。海神よ。お前はお前の兄弟の地涌の菩薩を必ず守護するであらうな。お前も佛敵になることの恥を知り、法華經の行者の味方することを僻りにするだらう。お前は俺の味方だらう。俺はそれを信じてゐるからお前を恐れはしない。この離れ島、しかもこのやがて海中に沒する岩の上に立つて俺は少しもおどろかない。反つて面白い、いゝ氣持だとさへ思つてゐる。萬一この日蓮が死んだとして損するのは、俺ではなくつて、日本國だ。日本國中の人々だ。俺が死んだら誰がお前達の不幸を未然にふせぐことが出來るか、恐ろしいことが起つてからこの日

歎のことを思ひ出しても、もうあとの祭りになるぞ。さあ恐ろしいことを知れ、そしてこの日蓮を大事にしろ。段々水がまして來たぞ。荒浪がよせて來た。だが日蓮をこゝで殺したいと思ふなら荒浪よもつと力づよくせめてこい。この日蓮は大海のなかで死ぬことなんか恐れてはゐない。月よよく見よ。浪よよく聞け、海神よ心あらばこの日蓮の題目をきいて、成佛するがいゝ。日蓮がこの海原での題目をよく心して聞くがいゝ。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、私の聲はふるへてゐるか。この日蓮を荒浪よ、お前は征伏することもおどかすことも出來ない。私には宇宙に充滿する佛が皆味方をされてゐる。私に味方しないものは佛敵であり、佛罰をうけなければならない。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。々々………。さあいくらでも潮よ滿ちてこい。日蓮は水の中に沒しても題目はやめはしない。日昭、日興、日唱、日朗達はますゝゝ本氣になつて佛敵折伏の仕事をつゞけるだらう。日朗よ。お前の傷はどうだ。私がこゝでお前の傷がなほるやうに祈つてやるぞ。南無妙法蓮華經。日朗の負傷をどうかなほしてやつて下さい。そして私の弟子達すべてをお守り下さい。お導き下さい。生れてゐる弟子も、之から生れる弟子達も、勇猛にあなたの意志通りに生きるやう、お導き下さい。日蓮はよしこゝで死んでも、なんの悔ゆる處がありませう。私のやうなものが法華經の行者として生ることが出來、戰ふことが出來たのはこの上なくありがたいことでした。歡喜踊躍とはまさにこのことです。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。おゝ舟がこつちへやつてくるぞ。私を助けるためか。それとも私を殺すためか。どつちにしても私は驚きはしない。私は日蓮だ、上行菩薩だ。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

（舟近づく。彌三郎一人で舟をこいでゐる）

彌三郎。御上人どうぞこの舟におのり下さい。

日蓮。そなたはどなたゞ。

彌三郎。私は御上人の御存知のないお弟子にたのまれて來たものです。

日蓮。俺をたすけに來たのか。

彌三郎。はい。

日蓮。それは大へんだつた。

彌三郎。どうぞおのり下さい。

日蓮。（舟にのり）かたじけなく思ふぞ。

彌三郎。恐れ入ります。

日蓮。日蓮は又生きたぞ、又死なずにすんだぞ。日本は亡びずにすん

だ。日蓮の働くのは之からだ。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、
（舟さり、題目だけする）

七

（小松原、東條景信始め武士や念佛行者大勢）
景信。用意はいゝな。
武士一。はい十分手くばりをいたしました。
景信。手ぬかりはないだらうな。
武士一。大丈夫で御座います。
（物見の侍、走けてくる）
景信。日蓮は來たか。
物見の侍。はい。十人許りつれてこちらに參ります。
景信。それならば俺達もかくれるとしやう。日蓮も今度こそは袋の鼠同様、逃しつこはない。あいつは助かるたびに自分を法華の行者だ。上行菩薩の生れがへりだと思ひおる。殺されてしまはない限り自分は死なゝいものだと思ひおる。自分は何かに守護されてゐると思つて、ますゝ増長する。今度こそは手ぬかりなく殺してしまはなければならない。
武士。大丈夫で御ざいます。今度こそは助かりやうはございません。
景信。あなた方の方の用意もようございますね。
行者一。大丈夫でございます。
景信。あいつを殺したらさぞ腹の虫がよろこぶことであらう。
行者一。本當に今晩こそ愉快にお祝ひすることが出來ませう。
景信。それでは皆さん、かくれて下さい。
行者一。承知しました。
（行者達一方へかくれる）
景信。（武士一に）之で日蓮を殺し、同時に工藤吉隆をよびよせて、あいつはきつと日蓮を助けにくるから、工藤吉隆を殺してその土地をとれば俺は一擧兩得をするわけだ。
武士一。本當で御ざいます。
景信。必ず手ぬかるまいぞ。
武士一。はい。
景信。それでは俺達もかくれるとしやう。
武士一。はい。
（日蓮たち何も知らずに來かゝる）
日蓮。彌三郎と云ひその妻と云ひ、實にいゝ奴だつた。
鏡忍坊。本當に師匠のいゝことで御ざいました。
日蓮。私は何度殺されかけたか。その度に私は益々堅固な信心を得る

る。大難なくば法華經の行者ではないと云ふか、私は大難に何度あつたか。そして今後又何度あふか。

鏡忍坊。本當に御話うかゞつたゞけでも、今迄生きてゐらつしやるのが不思議に思はれます。

日蓮。私でさへ不思議なのだ。少しつかれたらう。こゝらで少し休まうか。

鏡忍坊。私達はつかれてはおりません。いそいで參りませう。途中でもしものことがありましたら。

日蓮。松と云ふものはいつ見ても姿の面白いものだな。

鏡忍坊。御意の通りで御座います。

（合圖の呼子なる）

日蓮。皆のもの用心しろ。

鏡忍坊。大丈夫で御座います。

（閧の聲、矢がとんで來、かくれてゐた人々がとび出してくる。日蓮逹すきをうかゞい逃げやうとする。鏡忍坊他二三人切りあふ。切りあいながら出たり入つたりする。工藤吉隆、馬をつれて加勢にくる。鏡忍坊も遂に殺され、吉隆もやられる。景信、日蓮を追つて出てくる）

景信。日蓮、生命はもらつたぞ。（切りつける）

日蓮。（切つさきをさけながら、ふりかへり、景信を睨みつけて大喝する）下れつ。無間地獄におちたいのか。この日蓮が切れるなら切つて見ろ）

（景信、催眠術にかけられたやうに、手をあげておろすことが出來ない。ぢり〱とさがつてゆく。ついにやけをおこして切りつける。日蓮額に一寸傷をうける）

日蓮。馬鹿つ。地獄におちたいのか。（もつてゐる經で景信の頭をしたゝか打つ）

（吉隆の家來逹くる、景信逃げてゆく。吉隆の臣下それをおつてゆく）

日蓮。はゝゝ。臆病ものめ。鏡忍坊、鏡忍坊何處にゐる。吉隆殿、吉隆殿、何處にゐられる。

（鏡忍坊の死骸に氣がつく）

日蓮。あつ。鏡忍坊、お前はやられたのか。氣をしつかり。あゝ、もう駄目か。さつきまで元氣にしてゐたが、お前のお蔭で日蓮は助かつたのだ。日蓮がもし思ふに任せる時が來たら、こゝにお前の寺をたててやるぞ、お前は法華經の行者の身がはりになつたのだ。よろこんで極樂へゆけ。（吉隆のたほれてゐるのに氣がつく）吉隆殿、あなたもやられたのか。工藤殿、吉隆殿。御心たしかに、日蓮ですぞ。

日蓮ですぞ。
吉隆。あゝ、日蓮殿か。
日蓮。殘念なことをいたしました。
吉隆。いや／＼之も前生の因緣でせう。御上人の身がはりにたつたことを私はうれしく思つてゐます。
日蓮。かたじけない。傷は大したことはない、氣をしつかりおもちなさい。
吉隆。もうだめです。私は死ぬことは何とも思つてゐません。あとのことをよろしく願ひます。そしてもし男の子が生れましたら、どうかあなたの弟子にして下さい。私はあなたが、法華經の行者、上行菩薩でゐられることを今本當に知りました。あなたはどんな目にあつても死なゝい方です。私達とはちがう方です。私達は死んでもいい人間ですが、あなたは生てゐなければならない方です。あなたの身がはりになれたことを私はうれしく思つてゐます。
（家來達登場）
家來一。殿樣、々々お氣をたしかに、景信達はのこらず逐拂ひました。
吉隆。さうか。それは御苦勞だつた。上人殿上人殿、どうか御題目をお願ひします。
日蓮。工藤殿、夕日が美しくさしております。あれを御らんなさい。
吉隆。本當に美しい夕日です。南無妙
日蓮等。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。
（人々、中には負傷した人も來、皆、同じく題目をあげる）
家來一。殿樣はとう／＼おかくれになりました。
日蓮。殘念なことをいたしました。南無妙法蓮華經、々々々……

八

（松葉ケ谷の草庵の內で日蓮何かかいてゐる）
日蓮。日昭。
日昭。はい。
日蓮。又一つかいた。今度は一番質のよくない極樂寺の良觀あてだ。
日昭。さうでございますか。
日蓮。一つよんで聞かさうか。
日昭。はいどうぞ。
日蓮。（よむ）西戎大蒙古國國牒の事に就て、鎌倉殿其外へ書狀を進ぜしめ候。日蓮去る文應元年の比勘へ申せし立正安國論の如く、毫末許りも之に相違せず候。此事如何。長老忍性速かに嘲弄の心を飜へし、早く日蓮房に歸せしめ給へ、若然らずは、輕賤人間者、與

白衣說法の失脫れがたきか。法によつて人によらずとは如來の金言なり、良觀聖人の住處を、法華經に說て云、或有阿練若、納衣在空閑と、阿練若は無事と飜ず、爭か日蓮を讒奏するの條、住處と相違せり、併しながら、三學に似たる矯賊の聖人なり、僭聖增上慢にして今生は國賊、末世は那落に墮在せんこと必定せり、聊かも先非を悔なば、日蓮に歸すべし、此趣き鎌倉殿を始めたてまつり、建長寺等其外へ披露せしめ候、所詮本意を遂んと欲せば、對決に如かず、即ち三藏淺近の法を以て、諸經中王の法華に向ふは、江河と大海と、華山と妙高の勝劣の如くならん。蒙古國調伏の秘法定めて御存知あるべく候か。日蓮は日本一の法華經の行者、蒙古國退治の大將たり、以一切衆生中、亦爲第一とは是なり、文言多端、理を盡す能はず、併しながら省略せしめ候恐々謹言。どうだ良觀のやつさぞ眞赤になつて怒るだらう。はゝゝ。

日昭。隨分痛快で御ざいますね。だがさぞ怒りだすでせう。

日蓮。之で六つかいたわけだ。あと五つついでにかいてやらう。

日昭。さぞ皆怒り出すでせう。

日蓮。本當に怒れば感心だが、矢張り默殺して裏でこそ〳〵いたづらをするだらう。だが世間は日蓮の云ふことが本當だと云ふことを益々知るにちがひない。法華經が諸經の王だと云ふことは皆も既に知つて來たらしい。蒙古からの書面には皆驚いたらう。

日昭。それはさうで御ざいます。

日蓮。之れから本當の折伏が始まるのだ。向ふでもこの日蓮を益々なきものにしたがるだらう。だがこの日蓮は中々死なない男だ。お前方も益々戰ふ勇氣があるだらうな。

日昭。あります。

日蓮。日朗、お前はどうだ。

日朗。勿論御ざいます。

日蓮。この前のでこりなかつたな。

日朗。益々勇氣が出て參りました。

日蓮。それも法華經のおかげだ。本當に法華經のためにくさき首を切られるのは、石に黃金をかへるやうなものだ。こんなありがたいことはない。それではあとの手紙を書くとしやうか。

(日蓮、手紙をかき出す)

日朗。さぞ皆、怒るでせうね。

日昭。それは怒るだらう。

日朗。本當に皆あつまつて對決をするでせうか。

日昭。するものか。默つてほつたらかしておくにちがひない。しかしその時はこつちの勝ちだ。

日朗。何か卑怯な眞似をするでせうね。

日昭。それはするだらう。

日朗。どんなことをするでせう。

日昭。どんなことをするか。

日朗。しかし何が來ても恐れることはありませんね。

日昭。勿論、恐れることはない。私達は決心してゐるものだ。武士が君主のためによろこんで死ぬ以上、我々は法華經のためなら勇ましく死ぬことが出來る。

日朗。本當で御ざいます。

日蓮。はゝゝ日昭今度はついでに淨光明寺に與ふる書をかいてやつた。よんで聞かさうか。

日昭。どうぞ。

日蓮。大蒙古の皇帝、日本國を奪ふべきの由、牒狀を渡す、此事先年、立正安國論に勘へ申せし如く、少も相違せしめず、内々日本第一の勸賞に行はるべきかと存ぜしめ候の處、剩さへ御評數に預らず候、是併しながら、鎌倉中著體の類、律宗、禪宗等が、向國王大臣、誹謗我惡の故なり、早く二百五十戒を抛つて、日蓮に歸して成佛を期すべし、若然らずんば、現在無間の根源ならん、此趣き方方へ觸れしめ候ひ畢んぬ、早く一處に集りて對決を遂げしめ給へ、日蓮庶幾せしむる處なり、敢て詮示を嫉妬するに非ざるのみ、法華大王戒に對して、行乘蝦蟇戒、蝿目戒、豈相對に及はんや、笑ふべし、笑ふべし。淨光明寺の奴等之をよんでどんな顔をするか。あはゝゝはゝ。

日昭。はゝゝゝ。

日朗。はゝゝゝ。

九

（前と同じ場文永八年九月十二日、日蓮、日昭、日朗、いつものやうに話してゐる）

日昭。靜かな日がつゞきますね。

日蓮。不思議に靜かだ。だがかう云ふ時こそ油斷の出來ない時だ。

日昭。世間ではあなたを無視しやうとしてゐますね。

日蓮。私は空氣と喧嘩してゐるやうなものだ。だが私のまきちらす種はいたる處ではへて來るだらう。題目をとなへるものは日にまして來る。人々は默つて私を見てゐることが出來ない時が來てゐる。私はどつちでも平氣だ。私は自分のしなければならないことだけする。私の方は少しも手をゆるめない。默つてゐれば默つてゐるだけのことをする。

日昭。皆があなたを恐れてゐるのですね。

日蓮。恐れてゐるのをかくしてゐる。

日昭。このまゝに日が過ぎてゆくかも知れませんね。

日蓮。このまゝではすまない。今度こそ今迄よりももつと大きい大難が法華經の行者を見舞ふだらう。油斷は出來ない。いつも決心を新にすることが必要だ。だが静かなのもわるくはない。しかし私は恐ろしいことがやがてくることを知つてゐる。蒙古は必ずせめてくるにちがいない。

日昭。日本は亡びるでせうか。

日蓮。この日蓮の云ふことをきかない限りはね。

日昭。亡びたらどうなるでせう。

日蓮。男女老若は問はずなぶり殺しになるだらう。そして生きのこつたものは奴隷にされるだらう。

日昭。もしそんな目にあいましたら。

日蓮。だからこの日蓮はぢつとしてゐられないのだ。そして人々を安眠させておくことが出來ないのだ。そして佛敵をほつたらかしてはおけないのだ。

日昭。すべての人が法華宗になりましたら。

日蓮。その時はこの世は佛國になるだらう。人々は釋迦如來に愛されて、何ものを恐れることなく、心うれしくくらすだらう。だから私はぢつとしてゐられない。人々は恐ろしいことが起るまでは平氣でゐるが、起つてしまつたらもうどうすることも出來ないと云ふことを知らない。今のまゝでゆくと、一年、三年、七年の内に自界叛逆難と云つて國内の同志討が始まり、又他國侵逼とて四方、殊に西方より敵がせめてくるにちがいない。私には實によくわかるのだが、人々は惰眠をむさぼつて、そのことに氣がつかず、恐ろしいことが起るやうに、起るやうにと働いてゐる。日本をます〳〵佛敵にしたがり、如來の心から遠ざからさうとしてゐる。恐ろしいことではないか。

日昭。本當に恐ろしいことで御ざいます。

日蓮。恐ろしいことの起る源をなほさず、益々この源因を増長させて、そして平和をいつまでもたのしまうと思つてもそれは無理な話だ。だが私が彼等の目をさましてやらうとすればする程、彼等は私を憎み、私をなきものにしやうとする。愚かなものにあつては、どうすることも出來ない。だが私は默つてはゐられない。日本が亡びてもいゝとは云つてゐられない。他國にせめこまれて人々が弄り殺しにされるのを知つて平氣でゐるわけにはゆかない。

日朗。御師匠さま、大へんな足音が近づきます。

日蓮。とう〳〵時が來たと見える。
日昭。何が來たのです。
日蓮。この日蓮をめしとつて首をはねやうと云ふ時が。
日朗。それは本當ですか。
日蓮。本當だ。だがおどろかなくつていゝ。兼ねてから云つてある通り、私は妙法のために首をきられることは沙を黄金にかへるやうなものとしか思つてゐない。
日朗。御師匠さま、御師匠樣、私はあなたがおなくなりになることは考へてもたまりません。
日蓮。臆病ものめ、この日蓮がいつも云つてきかせたことを忘れたのか。もし忘れたなら、今日からお前は私の弟子ではない。
日朗。それでも。
日蓮。お前が私のことをそれまでに思つてくれるのはうれしい。だが法華經よりも私の生命を大事にするものを私は自分の弟子にはしておけない。わかつたか。
日朗。はい。わかりました。
日蓮。それでこそ、日朗だ。私の弟子だ。いよ〳〵來る時が來たのだ。見つともない具似はしてはいけない。
日朗。はい。

日蓮。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、爾時世尊。告摩訶迦葉……
……(法華經第五の卷をおちついて高尚に讀む)
(平左衞門尉郎卒をつれて草庵をかこむ)
本間某。日蓮はゐるか。
日蓮。はい。こゝにおります。
本間某。鎌倉殿の御命により沙門日蓮を召捕へに來た。尋常にまかり出よ。(と云つて日蓮に石をぶつける)
日蓮。さう君達は怒らないでも私は逃げかくれはしない。私は怖いものはないのだから、私を殺して損をするのはあなた方で、私ではないから。この日蓮は如來の御使ひだから、もし私が居なくなつたら、日本は亡びてしまふだらう。自國反逆難や、他國侵入難はたちまち來て、あなた方は外國人のものになるだらう。それは掌を指すやうなものだ。もし君達が國家を安穩にし、平和をたのしもうとするなら、法をそしるもの、寺をこわし、法をそしるものをこの日蓮のかはりにつかまへて罰するがいゝ。君達は生命は惜しくないのか、地獄におちたいのか。
本間某。默れ。云はせておけば勝手な獨言を云ふ。用捨なくつかまへてしまへ。
(少輔房と云へるもの第一番に草庵にかけ上り、日蓮をつかま

（へ、讀みかけてゐた經文で日蓮をうつ）

日蓮　法華經第五の卷が勸持品で私を打つてくれるとはかたぢけない。もつと打つてくれ。あはゝゝゝ。

本間某。猛々しい奴だな。今に思ひ知らしてやるぞ。

日蓮。君達が思ひ知る時はもうおそすぎるぞ。早く改宗して、この日蓮の弟子になれ。

（皆日蓮をなぐつたり、經文をさいて投げすてたりする）

平左衞門。何をしてゐるのだ。早くつれてゆけ。

本間某。はつ。

（日蓮をつれてゆく。日朗、日昭にかぢりつくやうにして泣く。）

日昭。日朗、なく時ではない。私達は之からなほしつかりしなければならない。それに日蓮さまは今度もきつとおたすかりになるだらう。あの方には不思議な守護神がついてゐられるから。

日蓮。本當にさうでした。私は之から本當にしつかりします。泣いてゐる時ではありません。

日昭。さうだ。私達は今度こそ決心を強く持たなければならない。

一〇

（八幡宮の前。群集日蓮のくるのを待つてゐる）

群集。來た。來た。

男一。あいつも今度こそ本當にくたばるだらう。

男二。本當に隨分人さわがせの男だね。

男一。一種の氣ちがひなのだね。

男三。今になつたらいくらあいつでも後悔してゐるだらう。

男一。まだ死なゝいつもりでゐるかも知れない。

男三。あんな男は前代未聞だね。

男二。何しろ自分を日本一の法華經の行者で、日本の柱は自分一人だと思つてゐるのだからね。

男一。一種の氣ちがいさ。

女一。あなたは日蓮さん好き。

女二。私、あんな太つた人は嫌いよ。あなたわ。

女一。私だつてあんな顏は好きぢやないわ。

女二。あの人、あれで本當に偉いのでせうか。

女一。詐僞師ぢやないの。

女二。そんな噂ね。だけど私の兄なんか、日蓮はあれで偉いのかも知れないと云つてゐましたよ。

女一。それは偉いかも知れないわ。

女二。うつかりほめると石をぶつけられてよ。

日)——

——(惡

女一。默つてゐませう。何しろ私、あの人嫌いよ。

女二。私だつて嫌いよ。あんな太つた男はね。

女一。私だつて男は嫌いぢやないのだけど。

女二。ごめんなさいよ。

甲。君はどう思ふ。日蓮は今度は殺されると思ふかね。

乙。どうもあいつは死にさうもない男だがね。しかし今度はいくらなんでも殺されるだらうね。

甲。あいつが死んだらあとはどうなるかね。

乙。あとはなほ盛んになるかも知れない。あいつの弟子にはしつかりしたのが澤山ゐるさうだからね。

甲。だが日蓮程圖太い男は二人とはあるまい。

乙。それはないだらう。あいつのあふれるやうな力は特別だ。何物をも征服しないではやまないあいつの意力はすばらしいものだ。あいつは死んでも、たゞは死なない男と思ふ。やつて來た。

(日蓮駕にのせられ、槍や鉾を持つたものに守られてくる。日蓮社前で駕をとゞめ、駕から降りる。警固の武士何か云はうとするが、日蓮に睨まれてだまる。日蓮つかづかと社の石段の下に進む)

日蓮。よくきけ、八幡大菩薩、よくきけ。君はまことの神か。日本を守護する神の神か。それならば、この日本が大蒙古にやられることを望みはしまい。もし日本の亡びることをのぞまないなら、日本が亡びたら君をあがめるものは誰れ一人なくなる、そんなことは君ものぞまないだらう。そしてもし日本が亡びないことをのぞむならこの日本の唯一の柱の日蓮を殺してはならない。今の日本にこの日蓮はなくてはならない人間だ。大蒙古をやつける力をもつものはこの日蓮より外にないはづだ。この法華經の行者、日蓮より外にないはづだ。それに君は法華經の行者を守護することを大聖釋迦牟尼世尊にたのまれた時、必ず守護すると三度までちかつたではないか。今そのちかひを果さなければならない時ではないか。もし今その誓ひを果されないならば、そして日蓮が今夜首を切られたならば日蓮はその時は靈山淨土へ行つて、日本の八幡こそ約束に違ひ、起請を用ひぬ邪神であると云ふが、それでいゝか。それが恥かしければ、この日蓮を助けよ。

(日蓮駕の處へかへり駕にのる、そしてつれてゆかれる。群集、ぼんやりあとを見てゐたが)

男一。日蓮はとうとう氣がくるつたのだね。

男二。君の云ふ通りあいつは氣ちがいだ。

女一。本當に怖かつたわ。

女二。あんなことを云つたら罰があたるわ。

乙。矢張り日蓮だね。獅子は死ぬ時も矢張り獅子だね。
甲。いくら日蓮でも生命は惜しいと見えるね。
乙。それはさうだ。だが生きるために信仰はすてない。眞理はすてない。其處が矢張り日蓮だ。そして八幡をせめるせめ方もいかにも日蓮らしい。俺は獅子のなき際を本當にきいたやうな氣がする。
群集。日蓮は龍口で首をはねられるのださうだ。龍口へ行かう。
龍口へ行かう。
乙。何か起るかも知れない。
甲。行つて見やう
乙。行かう。何にも起らないかも知れないが。

二

（龍口。柵にとりまかれて刑場が出來、平左衛門、部下兵士適當に陣どる。日蓮つれられてくる。四條頼基金吾兄弟四人、あはてゝ裸足でやつてくる）
四條金吾頼基。日蓮様。
日蓮。おゝ、金吾殿か。
金吾。唯今熊王からお知らせがあり、おどろいてとんで參りました。
日蓮。それはありがたう
金吾。今度はいよ〳〵大へんなことになりました。
（金吾兄弟、土に手をつき泣く）
日蓮。かねて覺悟してゐたことだ。よく又君達に話してゐた通りだ。法華經のために首をはねられるものはこの日蓮一人だ。私はありがたいと思つてゐる。私のなきのちの弟子達のことをよろしくたのむ。私同様に思つていたゞきたい。そして法華經のため、日本のためにます〳〵お働き下さることをおたのみする。之から日本にいろいろのことが起るだらう。人々は私の云つたことが本當だと云ふことがわかるだらう。もう泣かないで下さい。いつも云つてゐる通り、笑つて下さい。喜んで下さい。この日蓮の首が法華經のために切られるのは、砂を黄金にかへるやうなものです。首をきられたものは今迄に何人あるか。だが私のやうに砂を黄金にかへるやうな喜びをもつて首を切られるものは一人もなかつたでせう。よろこんで下さい。それともあなた方はこの日蓮日ごろ云つてゐる言葉を信じてゐないのですか。
金吾。わかりました。わかりました。
日蓮。ありがたう。あなた方が何ものも恐れずにこゝにかけつけて下さつたことは、靈山浄土へ行つても必ず忘れはしません。ありがたう。

金吾。恐れ入りました。

(日蓮つれられて刑場へ入らうとする。日昭とび出して日蓮のそばに近づからとして、雑兵にさへぎられ、なぐられ、つきとばされ、とゞのつまり日昭や金吾等につれられてゆく。日蓮黙つて刑場につく)

平左衛門。日蓮、何か云ひのこすことがあるか。

日蓮。今迄、云つたことをくり返すまでだ。よく私のかいたものをよみなほして、日本が亡國にならないやう、御注意を願ふ。

平左衛門。それならば刑に處したらいゝだらう。

三郎直重。はい。

(見物の内より題目の聲何處となく聞えてくる。日蓮もそれにあはせ、大聲で題目をとなへる)

直重。それでは用意はいゝな。

日蓮。勿論。

平左衛門。まて。

直重。はい。

平左衛門。日蓮、今日より改心すれば生命だけはゆるしてやるぞ。他宗の悪口を云はず、題目をすてたら、生命は許してやる。

日蓮。はゝゝゝ。日蓮を臆病ものだと思つてゐるのか。日蓮を嘘つきだとでも思つてゐるのか。日蓮は首を切られることを恐れてゐるとでも思つてゐるのか。早く首を切れ。

平左衛門。どうしても改心はしないと云ふのか。

日蓮。勿論。

平左衛門。それならやむを得ない。早く首をはねろ。

日蓮。天よ地よ。この日蓮を見すてるのか。八幡大菩薩よ誓言をやぶるのか。法華經の行者を守護することを誓つた神々よ。その誓言を忘れたのか。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

(急に一陣の風吹く)

日蓮。風よ吹いて來たな、もつと吹け、もつと吹け、さうだ、もつと吹け。

(火が消えかゝる大刀とり躊躇する)

平左衛門。早く切れ。

日蓮。平左衛門、お前は地獄におちたいのか。この日本國を亡ぼして、大蒙古の人々のなぶり殺しになりたいのか。地獄におちたいものはこの日蓮の首を切れ、日本國を亡ぼしたいものはこの日蓮の首を切れ。

(大雨が降つて來、雷が鳴る)

平左衛門。何を躊躇してゐるのだ。早く切れ、早く切れ、日蓮の首を

早くおとせ。

日蓮。地獄におちたいものはこの日蓮の首を切れ、日本國の滅亡を望むものはこの日蓮の首を切れ。

平左衛門。何を恐れてゐるのだ、早く日蓮の首を切れ。

日蓮。さあ、地獄におちたいものは日蓮の首を切れ。あらゆる神々菩薩はこの日蓮の味方をしてゐる。あらゆる神々にそむきたいものはこの日蓮の首を切れ。

平左衛門。何を恐れてゐるのだ。早く日蓮の首を切れ。

日蓮。切れ、切れ、地獄におちたいものは日蓮の首を切れ。

平左衛門。早く切れ。お前が切らないなら、この俺が切る。

日蓮。切れるなら切れ。無間地獄におちたいなら切れ。

平左衛門。直重、お前は恐いのか、臆病ものだな。日蓮が切れないのか。

直重。切れます。切れます。

平左衛門。早く切れ。

日蓮。この日蓮の首か切れるものなら早く切れ。

（大雷雨にまぢり、何處からか、石や砂をなげつけるものがある）

平左衛門。早くしろ、早くしろ。

日蓮。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

（直重、思ひ切つて刀をふり上げる、その途端落雷、日蓮の外皆逃げる。）

日蓮。はゝゝ。

日朗。（ころげるやうにとんで來）お師匠樣お師匠樣。御無事でございますか。

日蓮。この通りだ。

（日朗泣き出す、日昭や金吾達もやつてくる）

日蓮。皆無事だつたか。

日昭。はい。

日蓮。不思議なこともあればあるものだな。

皆。はい。

日蓮。皆も歸つてくるだらう。向ふで待つてゐるがいゝ。

皆。はい。

日蓮。私は今こそ生死を越えた世界のあることを本當に知つたぞ。釋迦牟尼のおつしやつたことが本當だと云ふことを知つた。たゞ無上道を惜しめばいゝことがわかつたぞ。ありがたい。ありがたい。私は恐らく殺されずにすむだらう。私はそれをはつきり感じてゐる。だがよし殺されても私はもう思ひおくことはないのだ。人々が來た

らしい。靜かにあすこで待つてゐるがいゝ。

(平左衛門達、氣まりわるげにやつてくる)

平左衛門。日蓮、お前の生命は助けろと云ふ御命令があつた。そしてお前は佐渡に流されることになつた。

日蓮。さうですか。それもいゝでせう。私の弟子達にそのことを知らせてもよろしいか。

平左衛門。どうぞ。

日蓮。皆、こつちに來て下さい。

(日昭達近づく)

日蓮。私は殺はたすかつた。そのかはり、佐渡に流されることになつたさうだ。よろこんでいゝか、悲しんでいゝか私は知らないが、しかし生てゐる以上、又鎌倉へも出て來られるだらう。私を守護してゐるものは、私を一番いゝ處へつれていつて下さるにちがいない。私達はたゞ無上道を惜しんで、その他は何かにまかせればいゝのだ。さらば君達と暫くはわかれることになるだらう。又逢ふまで元氣に法華經のために働いてほしい。

金吾。あなた樣こそ御無事で。

日蓮。ありがたう。

金吾。寒い處で御ざいますから身體をどうぞお大事に。

日蓮。君達も身體を大事にしてほしい。それでは切りがないから之で失禮する。私はなんだか愉快になつて來た。力が内にみなぎつて來た。何んでも出來さうになつて來た。私のことは心配しないがいゝ。

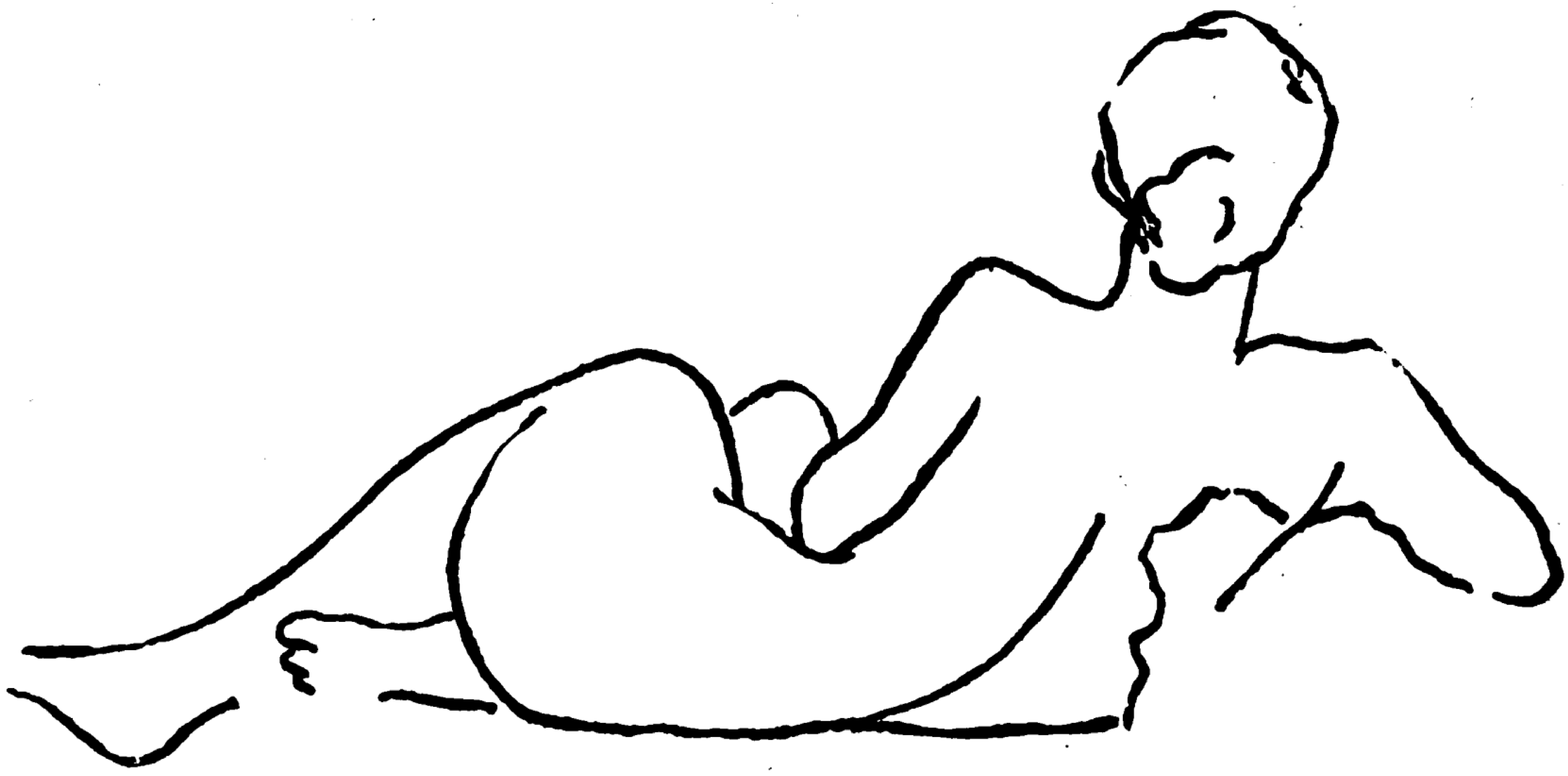
日朗。お師匠樣、御無事で。

日蓮。又逢ふ時があるだらう。おまたせしました。

平左衛門。それではゆきませう。(幕)。

(自分は日蓮宗のことをよく知らないので言葉に不適當な處があるかも知れません。さう云ふ處は御厚意ある御助力的な御相談をきいてなほしたく思ひます)

——(日蓮)——



卍（まんじ）

谷崎潤一郎

その四

「ゆうべなあ、内でその話が出てなあ」と、光子さんは言葉をつがれて、「お母さんがわたしを呼びはつて、お前、學校でこんな噂があるさうだつけど、それほんとでつかと、そない云ひますねん。へえ、そらそんな噂あることはありまつけども、いつたいお母さん、何處で聞きはりましてん？　そらまあ何處でもよろしおまつしやないか。それよかそらほんまの事でつか？　へえ、そらほんまです、そやけど何がけつたいでんねん？　友達と仲好うしてゐるぐらゐで。——さう云うたらお母さんちよつとまごつきはつてなあ、そらお前、仲好うしてるだけやつたら何ともないけど、何やそれがイヤらしいこツちやと云ふやおまへんか。イヤらしい事てどんな事でんねん？　どんな事やかお母さんは知りめんけどな、別に惡い事やなかつたらそんな噂が立つ筈がおへんやないか。ああ、そら何でか知つてまんねん、そのお友達云ふのがなあ、うちの顔が好きや云やはつてモデルにしやはりましてん、そんな事からみんながうち等を排斥し出しはりましてんやろ。そらもう學校云うたらうるさうてなあ、ちよつとでも顔が綺麗かつたら何や

彼やと憎まれるよつて。――そらまあ、そんな事もありまつしやろけど、と、わたしが説明して上げたらお母さんもだんだん分つて來やはつて、そんな事ならかめへんけども、そない云うてもその何とかはん云ふ人とばつかり仲好うせん方がよろしをつしやないか。お前も此れからが大事な體やよつて、しようもない事をあんまり云はれん方がよろしをつせと云うて、まあそれなりで濟んでしもてんけど、きつとあの市會議員なあ、向らへんの連中がそんな噂を聞き捜してMの方へしやべつたのが、それが又お母さんの耳へ這入つてしもてんわ。そやよつて、大抵縁談もあかんやうになるやろと思てんねん。」「そら、あんたはそんでええやろけど、お母さんがきつとわたしを嫌がつてなさるわ。今に見てて御覧、わたしと交際したらいかん云やはれへんかしらん? もし誤解されたらイヤやけどなあ」と、わたしそれが氣がかりで、さう云ひますと、「そんなことあんた、心配せんかてかめへんわ。そらほんま云ふたら、校長さんが慾張りの人で、お金を貸してもらへなんだら惡口を云ふ癖のあることや、市會議員の人に買收されてゐることやを、みんなお母さんに云うてしまをか知らんと思うたけど、そんなけつたいな學校なら止めてしまひなはれと云はれさうやよつて、云はと置いといてんわ。そしたらあんたと會はれへんやうになるよつて。」「あんたもなかなか隅へ置けんなあ。」「ふふん、うちかつてスコイよつてなあ」と、光子さんはくつくつ笑はれて、「向うが惡い人やつたら此方かつて利用してやらんと損やわ。」「けど、あんたの方が破談になつて、市會議員のいとはんもよろこんではるやろなあ。」「そしたらあんたは兩方から感謝されるべきやわ」なんかと、お互ひにあれやこれや云ひ合ひまして、その山の上で一時間以上もしやべつてゐました。わたし今迄でも三笠山へ上つたことは何遍もありますけれど、そんなに日が暮れてしまふまで山の上にゐたことはありませんでしたので、あそこから夕暮の景色を見わたすのは、ほんとにその時が一番はじめてでした。ついさつき迄まだその邊に人がチラホラしてゐましたのに、もうてつぺんから麓までだあれも人の影はありません。その日は割りにえらい人出でしたから、あのなだらかな、若草の生えた山の中腹には辨當のたべ殘しや、蜜柑の皮や、正宗の罎が一杯散らばつてゐました。そして空はまだうす明いのに、足の下には奈良の町の灯がちらちらして、遠くの方の、ちやうどわたしらの眞向うのあたりには、生駒山のケーブル・カアのイルミネーションがずうッと珠數のやうにつながつて、紫色をした靄のあひだから、ところどころ絶えては續いてまたたいてゐました。そのまたたいてゐる光を見ると、わたし、何だか息が詰まるやうに感じたのです。「まあ、知らん間に晩になつてしまうて、淋しいわなあ」と、光子さんが云はれました。「二人や

つたらほんとに恐うてゐられへんわなあ」と云ひますと、「好きな人と二人だけやつたら却つてこんな淋しい所の方がええわ」と、さう云うて光子さんはためいきをついてをられました。「うちあんたと一緒やつたらいつ迄でも此處でかうしてたいわ。」――わたしはその言葉を口には出さずに、夕闇のなかにうづくまつて足を投げ出してをられる光子さんの横顔を眺めてゐましたが、暗いのでどんな表情をしてゐなさるのか分りませなんだ。ただ光子さんの白い足袋の向うに、大佛殿の金の鯱鉾が空のうすあかりに底光りしてゐました。

「おそうなつたよつて歸りませう」と云うて、それから山を降りて、大軌まで歩いて行きましたら彼れ此れ七時になつてしまひました。「うちお腹減つたけど、あんたどうする？」「けふは早う歸らんといかんねんわ。奈良へ行くとも何とも云はんと出て來たよつて」と、光子さんは時間を氣にしてをられましたが、「そない云うたかてうちもうペコペコやわ。どうせおそなりついでやよつてええやないか」云うて、無理に引つ張つて新溫泉の食堂へ這入りました。「あんたとこの旦那さん、おそなつても別に何とも云やはれへんか？」と、御飯をたべながらそんな話が出ました。「うちのあの人、そんなこと何とも干渉しやはれへん。それにうち、あんたと仲好うなつたことをちやあんと話したアるわ。」「そしたらどない云やはつた？」「うちがあんまりあんたのことばつかり云ふよつて、あの人云ふたら、そんな綺麗な人やつたら一ぺん會うてみたいなあ、いつぞ遊びに來えへんもんやろか云うてはつた」「あんたの旦那さん云うたら、優しい人？」「そらもうあの人と來たら、うちがどんな勝手氣儘な事してもなんとも云やはれへんわ。けど、あんまり優しいよつて、時によつたら張り合ひないのんで、――」わたし、まだその時までは自分のことは一つも光子さんに云うてなかつたので、夫と結婚するやうになつた譯や、それから、あのう、いつかの戀愛問題や、それに就いて先生にいろいろ心配していただいたことまで、その時すつかり云うてしまひました。光子さんはわたしが先生を知つてる云ひましたら、「まあ、さうを？　あんた知つてんのん？」とびつくりしなさつて、自分も先生の小說がとても好きやよつて一遍連れて行つてくれなされしませんかと云うてゐましたのですが、いッつも今度こそ今度こそと云ひながら、とうとうそのままになつてしまうたのです。

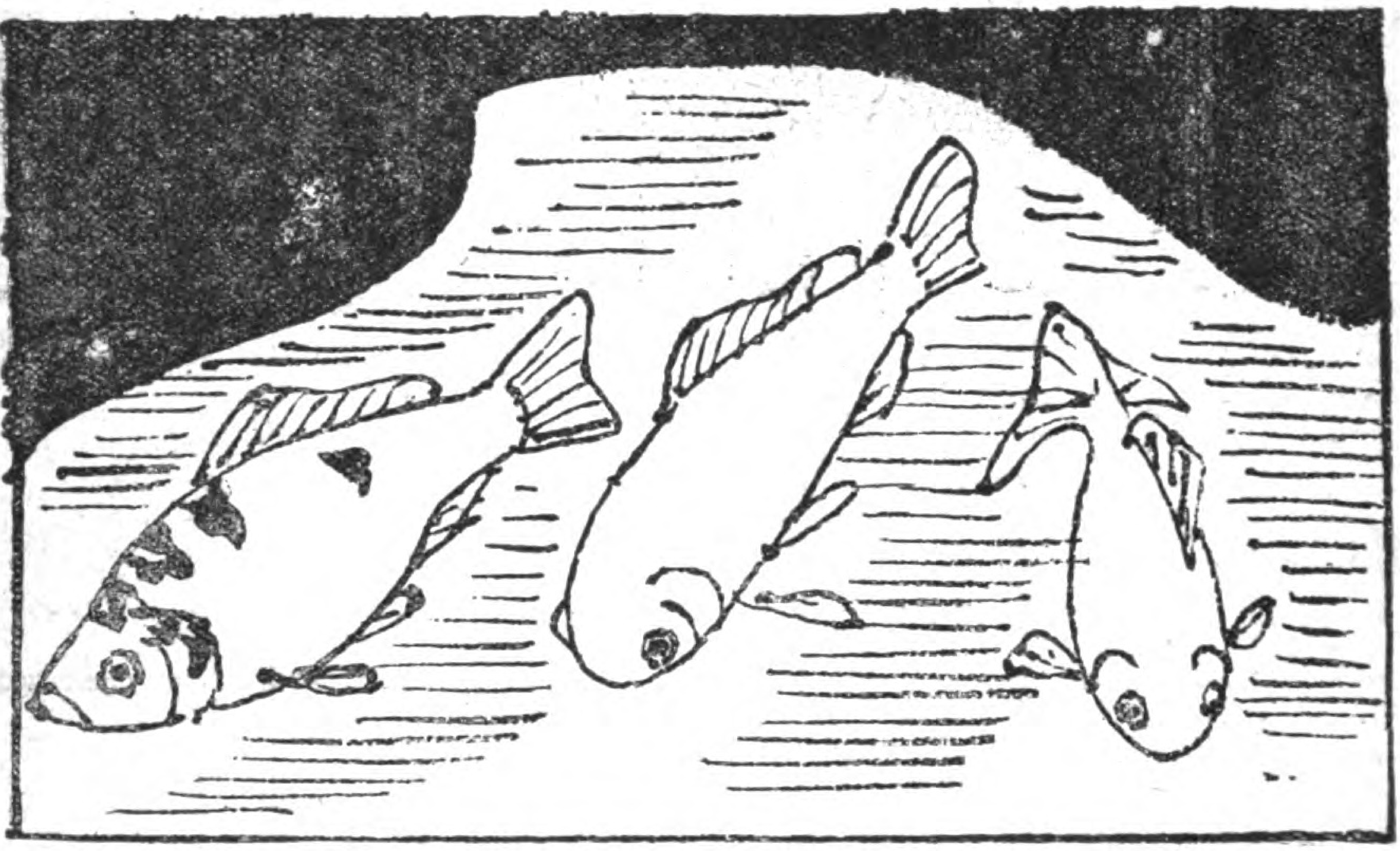
「ふうん、そしてあんた、もうその人と交際してへんのん？」と、光子さんはいつしよ懸命にあの事を聞きたがりなさつて、今はもう交際してませんと云ひますと、「なんでやのん？　そんな、あんたの云ふやうに淸い戀だつたら交際してもええやないか。うちやつたら、戀愛と結婚とは別別のやうに思ふけどなあ」なんかと云うて、「あんたの旦那さん、その事ちよつとも知りはれへんのん？」と、聞かれたりしました。

卍

「ふん、そらうすうす感じてたかも知らんけど、うちなんにもその事に就いて云ふたことないし、とやかく問題になつたやうなことはなかつたわ。」「えらいあんた信用があるねんなあ。」「それよりかうちのことをいつそ子供のやに思うてるねんわ。そやよつてうち氣に入らんねんけど」と、わたしさう云ひました。

その晩家へ歸つてみたら十時近くでしたので、「えらいおそかつたなあ、」と、夫はいつになくけつたいな顏をして、何やから淋しさうにしてゐたのが、ちよつと氣の毒な氣がしました。別に惡いことをした譯でも何でもないのに、夫が長いこと待ちくたびれて、たつた今御飯をすませたらしい樣子を見ると、妙に氣がとがめました。さう云へば前、戀人と會つてゐた時分にはよう十時過ぎに歸つて來たことがありましたけど、此の頃になつてこんなにおそうなつたことはありませなんだ。それで夫もちよつと氣を廻したのかも知れませんが、わたし自身も、何かしらちやうどあの時と同じやうな氣がしました。

（つづく）



片絲

久保田万太郎

□

丈吉。　相場師　（四十五六）

伊平。　丈吉の父　（六十七八）

徳次。　丈吉の弟　（三十一二）

おくみ。　丈吉の妹　（二十一二）

おいよ。　丈吉の妻　（三十四五）

その他

□

大正の末。

□

東京深川。丈吉の住居。

□

……丈吉、知合の法事から今かへつて來たところ。――紋付袴の、羽織を脱いだり袴をとつたりしてゐる。――おいよ、不斷着をもつてそばへ來る。

間。

丈吉。誰も來なかつたか？

おいよ。え丶、誰も……

丈吉。和泉町からも何ともいつて來なかつたか？

おいよ。え丶、何とも……

間。（このうち、丈吉、帶を解いておいよのうしろから着せかける不斷着に着かへる）

丈吉。（うけとつた平絎を無雜作に結びながら）おくみはどうした？

おいよ。いま髮を……

途端に、おくみ、二階から下りて來る。――手づかねのつゝましい銀杏返しに結つてゐる。

おくみ。おかへんなさいまし。

丈吉。うん……（そのまゝ長火鉢のまへにすわる。）――紺縮緬の襟をまさぐつたりする。）わるく今日は冷えやアがる……

おいよ。ほんとでせうか、もう、これが？

丈吉。また菊が咲いてゐるんだ。――本來なら、また、こんなつてことはねえんだが、いつまで今年は熱かつたから、急にまた今度は、早くいつもより寒くなるのかも知れねえ。

おいよ。さうでせうか？……（みると、おくみ、散亂つてゐる丈吉の羽織からまづ疊んでゐる。――いそいでそれを押へるやうに）ああ、おくみさん、いゝんですよ、さうやつて置いて……

おくみ。え丶。

おいよ。やりますから、いま。――いま、やりますから、わたしが……

……

おくみ。え丶。

おいよ。ほんとに。――ほんとに、おくみさん……

おくみ。え丶。

丈吉。(口を出して)いゝぢやアねえか、折角商人のやつてるものを。——だまつてやらして置け……

おいよ。だつて、お前さん……

丈吉。いゝから打捨つてやらして置け。——客に來てゐるんぢやアねえんだ。——一々そんなお前のやうに斟酌をしてゐたらかへつて當人が氣ぶッせいだ。

おいよ。でも……

丈吉。そんなことをいつてる手間で、お前は、皿をもつて來てその折ん中の喰ひものをあけねえ。

おいよ。(火鉢のそばに置かれた精進落の料理の折のはうへ眼をうつして)えゝ……

　おいよ、そのまゝ臺所へ立つ。——おくみ、無言、しづかにたゝみつゞける……

　丈吉、湯呑に茶をついで飲む。

　間。

　おいよ、皿小鉢をもつて臺所からかへつて來る。

おいよ。沸いてゐますか、お湯?

丈吉。うむ。

おいよ。まだだらうと思つてもう少し先刻水を……

丈吉。久しぶりで酒を飲んだらわるく咽が渇く……

おいよ。大勢でしたか、今日は?

丈吉。五十人ばかりだつた。

おいよ。五十人?——隨分それは……?(丈吉の顏をみる)

丈吉。…………(それにはこたへずもう一度湯呑に茶をつぐ)

おいよ。年回でも、けど、そんなに立派にしてもらへたら佛さまにしてもうれしいでせうね。

丈吉。(吐出すやうに)ちッともうれしいこたアねえ。——佛は苦い顏をしてゐる……

おいよ。どうしてゞす?

丈吉。それだけの人間があつまつたつて佛の古い附合は數へるほどッかゐねえ。——みんな、昨今の、いまの附合ばかりだ。——佛とは緣もゆかりもねえ、それこそ佛の顏を一度だつてみたこともねえやうな奴らばかり高慢な面アして床の間のまへに並んでゐる。——氣

色のわるいつたらねえ。

おいよ。だつて、それは、それだけお附合が廣くなれば。——以前の、もう、この町内にゐた時分の住吉さんぢやアないんですもの、いまは。

丈吉。だからそれは構はねえ。——呼びたければ代議士でも市會議員でも好きに呼ぶがいゝ。——だからといつて、そのために、むかしからの、佛の時分の古い附合にけじめをくはせるつてことはねえ。——法事なんてものはそんなものぢやアねえ。

おいよ。その時分の人はもうゐないんぢやアないんですか？

丈吉。ゐねえことがあるものか。木更津の、佛の出たうちの伯父さんといふ人だの、はじめて佛が東京へ出て來たとき草鞋をぬいだうちのあるじさんだの、その時分世話になつた問屋の人たちだの、ちやんとまだ達者でゐる。——可笑しいから、俺は、嘉七に訊いたんだ。……と、嘉七、へえ、みなさんべつにお變りはございませんが今日はおみえございません。——なぜだといふと、へえ、主人のさう申しますものでこのたびは御遠慮いたしました……

おいよ。…………

丈吉。佛のゐた時分には、祝儀不祝儀にかゝはらず、いつだつてその席に缺けたことのなかつた顏だ。——以前は以前、いまはいまですむこつちやアねえ。——そんな薄情な眞似の出來るわけのもんぢやアねえんだ。

このうち、おいよ、料理の折をあけて、皿や鉢にそれぞれとりわける。

おいよ。でも、こんなにまア立派に……

丈吉。だから名聞。——供養ぢやアなくつて名聞だといふんだ。——茶めしにのツぺいだつていゝ、佛の時分のしんみなものだけあつめて、さてみなさん、何にもございませんが。……それでこそ供養になるんだ。——佛のためになるんだ。

おいよ。…………

丈吉。どうして、かう、世間の奴らには料簡にうそがあるんだか……(と、さういひながらつい急に立つ)——おい、手拭だ。——湯に行つて來る……

それを聞いて、おくみ、すぐにまた立たうとする。

おいよ。よござんすよ、おくみさん。(いそいでさきへ立つ)

おくみ。（口の中で）すみません……

おいよ、臺所へ行く。

丈吉。（おくみに）くよ〳〵しちやアいけねえ、くよ〳〵。――えゝ……

……？

おくみ。（微に）えゝ。

丈吉。大丈夫だ。――心配することアねえ。――わるいやうにはしねえから……

おくみ。…………

丈吉。いかに親父でも今度は強情を張らねえだらう。――素直に俺のいふことを聞くだらう。――さうなれば、此奴、何のいさくさもなくつてすむことなんだ。

おくみ。…………

丈吉。つまりは口惜しいんだ。――親父にするといま〳〵しいんだ。――その、口惜しい、いま〳〵しいに引ずられてふんぎりがつかねえんだ。――はツきり、そこで、もう一つ徳のことがおもひ切れねえんだ。――それがいけねえんだ……

おくみ。…………

丈吉。が、親父にすればそれも無理はねえんだ。――これはと自分のめぐしをつけたものに、眞逆にそんな、煮湯をのまされるやうな――それも一度や二度のこつちやアねえんだ。……大てい腸も煮えるだらう。

おくみ。…………

丈吉。どうして、また、しかし。――それにしても、しかし、どうしてあんな徳のやうな、身勝手な、根性のヒン曲つた野郎が出來たらう？――子供の時分にはあんなぢやアなかつたんだが……

おくみ。……………（ソツと涙を拭く）

おいよ、手拭にくるんだ石鹸箱をもつてかへつて來る。――

おくみ、いそいでその泣いた顏をかくす。

おいよ。どこへやりました、あなた、手拭を？

丈吉。知るもんか、そんな……

おいよ。知るもんかつたつて、ないんですよ、あなたのが？

丈吉。なければ何だつていゝ。

おいよ。ですから、おくみさんに下ろしたのを持つて來ました。

丈吉。それだつたらおくみが困るだらう？

おくみ。いゝえ、あたしのは……

おいよ。持つてみえたんですの、うちから、おくみさん……

丈吉。(さびしく憫むやうに)そんなものまでそんなことしなくつたつていゝのに。——だから、氣を樂に、ほんの泊りにでも來るつもりで來ればいゝとはじめにさういつたんだ……

おくみ。…………

丈吉。(おいよに)今夜はすこし飯を早くしねえ。——いまになつて腹が空つて來た。

おいよ。喰らなかつたんですか、お茶屋で？

丈吉。喰ひたくなかつたから喰はなかつた。——その反ツくり返つた鰈で潮煮でもこしらへねえ。

おいよ。えゝ、さうしませう。

丈吉。(捨臺詞のやうに)紋つきを着ると必とあとで肩が凝る。——よツぽど性に合はねえとみえる……

丈吉、そのまゝ出て行く。

おいよ、もとゐたところへ返りかける。——その前後に、おくみ、殘らず襦袢までたゝみ終る。

おくみ。これ、どこへ？

おいよ。あゝ、すみません。——とう／＼みんなおねがひしてしまつて……

おくみ。このまんま、そツくり、こゝの簞笥へ？

おいよ。さうしませう、えゝ。——あとであつちへ仕舞ふまでも……

おいよ、そのまゝ簞笥のそばへ行く。——おくみ、疊んだもののすべてをおいよのそばに運ぶ。——とも／＼手傳つてそれらを仕舞ふ……

間。

二人、簞笥のまへをはなれる。

おいよ。すみませんでした、ほんたうに。(さういひながら元ゐたところに返る。——すぐ、また、箸をとり上げて、とりわけ殘した料理をいそいでまたとり分ける)

おくみ。あの、廣蓋でも……？

おいよ。ええ？

おくみ。いゝえ、そのお皿やおどんぶりを載せるのに……

おいよ。あゝ、いゝえ、歸つて來たらすぐ御飯にしますから、かうやて置きませう、こゝへ……

おくみ。…………（うなづく）

おいよ。潮煮といふ御注文ですからこれだけあつちへ持つて行きます。（鹽燒をとり分けた皿だけ殘したあとのものを假りにそれ〲手近にしまつする）さアつてばさアの氣が短いんですから、あゝいつて行つたのに、歸つて來て仕度が出來てなかつたら必と機嫌をわるくします。――すぐに、ですから、まだ早いけど仕度にかゝりますわ。

おくみ。おやア、そのうち、こゝのお掃除を……？

おいよ。ようございますわ、掃除は。――こんな今日はお天氣なんですから。――それより、すみません、もし何でしたらこゝの火を……

鐵瓶を下ろす）

おくみ。は。

おいよ。お炭をすこし。――すみません、ほんたうに、おつかひ立して……

おくみ。…………（ことさらそれにこたへず火鉢のそばへよる）

おいよ。おねがひします、では……

おいよ、鹽燒の皿をもつて臺所へ行く。――あと、おくみ、炭斗を手もとにとつて炭をつぐ。

間。

おもての格子あく。――客の來たけはひ……

おくみ。はい。（すぐ返事をして立つ。――上り口へ行く。――障子をあけてしづかに）あゝ、お父さん……

外の聲。…………（何かいふが聞えない）

おくみ。えゝ。

外の聲。…………（何かいふが聞えない）

おくみ。いゝえ。

おくみ、そこをはなれる。――伊平、上つて來る。

伊平。どこへ行つた、兄さん？

片——

おくみ。え丶、いま、お湯へ。
伊平。歸つて來る時分か、もう?
おくみ。え丶、でも、行つたのもう少し先刻ですから……
伊平。おいよは?
おくみ。嫂さんは、いま、あつちで。——さういつて來ます、いま……
……(呼びに行かうとする)
伊平。あ、一寸……(とめる)
おくみ。え丶?(ふり返る)
伊平。お待ち。

伊平、さういつてそのま丶火鉢のまへにすわる。——おくみ、とも〴〵さそわれてすわる。

——(緑

伊平。(やさしく)どうだ、こつちのうちは?
おくみ。え丶。
伊平。しづかでい丶だらう、こつちのうちは?
おくみ。…………
伊平。ま、辛抱するんだ、當分。——こ丶にゐる分には間違ひない。
おくみ。…………

伊平。大兄さんはお前が好きなんだ。——誰のことよりもお前のことを心配してゐるんだ。——おくみの體は、では、責任をもつて此方が引うけた。……今度でもはつきりさういつてくれたんだ。
おくみ。…………
伊平。だからそのつもりで。——そのつもりで、よく……
おくみ。…………
伊平。(や丶氣をかへて)心配しちやアいけない。——え丶?——決して心配しちやいけない。——お前の、そんな……何もそんなお前のきな〳〵思ふことはどこにもない。——お前は、たゞ、兄さんの——大兄さんの……
おくみ。(急に)え丶。——え丶、分つてます……
伊平。分……?(間。——や丶不機嫌に)さうか。——い丶え、分つてればい丶。——分つてればそれでい丶が……
おくみ。…………

間。(……ふと落穏のない感じ)

おくみ、さういつて來ます、嫂さんに……(さびしく立つ)
伊平。あ、一寸。——そのまへに德をこつちへ呼んでくれ。

おくみ。え〻？（耳を疑ふやうに）

伊平。外に待つてゐるんだ。——い〻からこつちへ入れといつてくれ。

おくみ。一しよに來たんですか。兄さん？（思ひもよらないやうに伊平の顔をみる）

伊平。うむ。（や〻寂しくうなづく）

おくみ、そのま〻上り口のはうへ行く。——土間へ下りる。格子をあけて外へ出る……

間。

徳次、おくみのあとについて入つて來る。ことさらさうはとりなしてゐないが悄然とした感じ。——や〻手持ない、恰好のつかないかたちにすこし伊平からはなれてすわる。

おくみ、徳次のそばへ座蒲團を出して來る。——そのま〻、すぐ、おいよにそれをつたへに入る。

……このうち、始終、三人とも無言。

間。

おいよ、いそいで出て來る。

おいよ。（ことさら愛想よく）まア、ほんたうに。——ちッとも知りませんで……（さういひながら火鉢のまへに來る）

伊平。……………（それをみてもつてゐた煙管を下に置いてそのはうを向直る）

おいよ。いらつしやいまし、先日は……（改めていふ、手をついて。）

伊平。この間は。——とんだ、また、この間は御馳走にまでなつて…
……

おいよ。い〻え、いつもお構ひ申しませんで……

伊平。いそがしい中を、また、いろ〳〵。——それにはまた今度はおくみといふとんだ厄介ものをおねがひして……

おいよ。い〻え、行屆きませんで……

伊平。體は大きくつても、また、あの通りのほんたうの子供。——當人のためだからずん〳〵小言をいつて追ひつかつて下さい。

おいよ。いゝえ、さういつてもよく、何にでもさう氣がおつきになつて。――おかげで、わたくし、すつかり手傳つていたゞいて大助りでございます。

伊平。矢つ張、これ、片親なくつて育つたものは。――どうしても、矢つ張、どこか我儘になつてゐるもんでね。

おいよ。おくみさんには、けど、けぶりにもそんな……

伊平。いゝえ、いまに分る。――だん〳〵分つて來ます。

おいよ。さうでございますかしら？（ことさらわらふ。――それをしほに德次のはうを向いて）いらつしやい……（わざとさう伊平に對するよりも、くだけた、安易なとりなしをみせていふ）

德次。…………（無言。――いへばてれかくしのかたちに、すげなく、いつそ無愛想に頭を下げる）

……ふと接穗のない感じ。――おいよ、すぐ茶を淹れにかゝる。

伊平。あ、もう、構はないで。――わざ〳〵淹れることアない。――お客ぢやアないんだから……

おいよ。えゝ、いゝえ、これはもう出ませんから……（茶筒の茶を茶罐筒から出した急須にうつしながら）けど、また、何てお寒い……といふのもへんですけど、まるで今日は、冬の……

伊平。（うなづいて）ほんたうに。――わるい陽氣だ。

おいよ。いまツからこんなぢやアこまつてしまひます。――うちなんぞ、また、何にもしてないんで……。

伊平。おたがひだ。それは。――明日が日冬が來たつてどうすることも出來ない。――この一年てもの、しかし、俺のうちには、春もなければ夏もなかつた。――たゞ、もう、夢のやうにくらした……

おいよ。けど、それは……（といひかけたもの、あとがつゞかない）

伊平。この年になつて、いまさら、何だつてこんな苦勞をしなくつちやならないかと思ふよ、實際……

おいよ。…………

（このうち、德次、始終無言。――花のやうに身じろがない。）

おくみ、出て來る。

おくみ。嫂さんあの……

おいよ。…………？（ふり返る）

おくみ。おだしがとれましたけど……

おいよ。あ、さう、すみません。

おくみ。下ろして置いてようございますか、お鍋？

おいよ。えゝ、どうぞ。——行きますから、いま……

　おくみ、すぐまた去る。

伊平。いゝぜ、おい、俺たちは。——構はずやつてくれ、用があつたら。

おいよ。えゝ。——もういま歸つてまゐります。——お待たせいたしてすみません。

伊平。こつちこそ、いつも、邪魔ばかりしてすまない。——俺にしても氣の毒とは思ふけど……

おいよ。そんなこと、あなた……

　（このうち、おいよ、伊平と德次とへ茶をついで出す。——德次の分は、伊平、途中でそれをとりつぐ。）

　と、おもての格子あく。

おいよ。あゝ、歸りました。（すぐに立つ）

　丈吉、上り口をあがつて來る。おいよに手拭と石鹼をわたす。——つぎの瞬間、ゆくりなくそこに德次のすがたをみ出して、面上、急に暗くけはしくなる。——そのまゝ、火鉢のまへ、おいよのいまゝでゐたあとにすわる。

丈吉。（冷かに——が、さりげなく）おいでなさい。

伊平。あゝ、この間は……

丈吉。えゝ。

伊平。おくみが、また、いろ／＼……

丈吉。いゝえ。

　……ふと、また、接穂のない感じ。——誰も無言。

おいよ。（そのけはひを感じて丈吉に）失禮して、わたし、一寸……？

丈吉。…………（うなづく、

おいよ、去る。――あと、接穂のない感じ、慘めになほつゞく。――といふことは、丈吉、ふたゝび自分から口を開からうとしない。と同時に、伊平のはうでは、何とでも丈吉のいひだすのをまつてゐる。何とでも一ト言いひだしたらそれに縋らうと待つてゐる。――とはいへ伊平には、丈吉の、たへず總次のはうへ投げてゐる氣ぶッせいなその心の眼がさういつても辛くはツきり感じられてゐる……

間。

……結句怯目が伊平のはうから口を切らざるをえなくさせる。

伊平。實は、その……

丈吉。…………？（伊平の顏をみる）

伊平。（その眼を避けながら）今日來たのは、その。――いまになつて、また、こんなことをいつて來るわけのもないんだが……お前にしたら必とさう思ふだらうとはおもふが……

丈吉。……………

伊平。當人もさういふものだし、わたしにしてももう一度。――未練たらしいといはれるかも知れないが、もう一度……

丈吉。…………

伊平。いへばいまゝで……とりわけこゝへ來てのお前の心配。――折角してくれたお前の心配を、だからといつて、無にするわけぢやアない。――無に、また、出來るわけのもんでもない。――だから、そこはよく……

丈吉。（急に）分りました。――だからどうしろと被仰るんです？（切口上にわざと）

伊平。肚を聞いてもらひたいんだ、當人の。――もう一度、當人の…

丈吉。で？

伊平。それでいゝんだ。――聞いてくれゝばそれでいゝんだ。――で、もし、聞いた上で……

丈吉。その上で、もし、納得が行つたら、もう一度當人を許してやると被有るんですか？

伊平。それは納得が行けば。――どんなにでも納得が行けば。――勿論、すぐ、右から左へといふことには行かないが……

丈吉。（ずけりと）お斷りします。

伊平。しかし……

丈吉。いゝえ、お斷りします。——それぢやアいまゝでして來たことがみんなうそになります。……

伊平。だからお前の心配を無にする……

丈吉。……わけになります。——いゝえ、なつたつて構ひません。——どうなつたつてそんなことは構ひません。——だが、それぢや、もう……。

伊平。(いそいで)そ、さういつてしまつちやア實も蓋もない。——それぢやア話にならない……

丈吉。話にはなりません。——當人が出て來たんぢやア、わたしには、この儀のもう手當は出來ません。

伊平。そこを。——俺のいふのはそこを……

丈吉。(やゝ、捨鉢に)いけません。——わたしには出來ません。

伊平。といふと?

丈吉。わたしの手ごろには行きませんから、改めてこのことから、今日かぎりわたしは手を引かしてもらひます。

伊平。それだつたら俺はどうなるんだ。——かうしてお前をたよりにしてゐる俺といふものはどうなるんだ?

丈吉。……………

伊平。いゝえ、俺はいゝ。——俺はいゝが寧伏のうちをどうする?

丈吉。……………

伊平。いまさら、お前、見殺しにするつもりなのか?

丈吉。(冷かに)それは、しかし、無理だと思ひます。

伊平。無理?

丈吉。さうだと思ひます。——だからはじめッから任せてくれるか、どんなこつても此方の好きにさせてくれるか、どんな條件でもいやとはいはないか?——かたぐ〵あゝ念を押したぢやアありませんか?

伊平。だから任せたぢやアないか、お前の好きにさせたぢやアないか、どんな條件でもいやとはいはなかつたぢやアないか?

丈吉。だから、え、いまゝでやりました。出來ないながら骨を折りました。——が、結句、矢つ張、あなたは任せてくれない。——好きにさせてくれない……

伊平。ど、どうして?

丈吉。わたしのさういつたのは……つまりはさう念を押したのはこの男を(とことさら德次へこなし)寧伏のうちから突出してもいゝかと念を押したんです。——この男のゐた分には、この男と緣の切れない分には、いつになつたつて寧伏のうちはうだつは上りません。——いつになつたつてあなたの安心出來るときはありません。

片）——

——（終

伊平。だ、だから……

丈吉。えゝ、ですから承知なすつた、あなたはわたしのいふ通りだと被仰つた。——そればかりでなく今度といふ今度は愛想が盡きた。もう、あんな奴、親子とは思はない。どうして家伏のうちにあんなやくざな奴が出來たのか分らない。……さうまであなたは被仰つた。——さうまで被仰つたあなたが、——いゝえ、そればかりぢやアなく、また、俺の眼の黒いうちは俺のうちの跨覗きだつてさせるこつちやアない……さうまで強いことを被仰つたあなたが、いまになつて、また、當人の肚を……

伊平。……………

丈吉。はツきりいひます。——當人のまへで、いゝえ、わたしアはツきりいひます。——人間、馬鹿でもいゝ、いくぢなしでもいゝ、道樂ものでもいゝ、たゞさう身勝手な、不人情な、見得坊の名聞ずきな、手めえさへよければ親同胞にどんな泣きをみせてもいゝといつた不貞腐れた根性の奴を、それでもいゝわと打捨つて置くとたアわたしには出來ません。

伊平。……………

丈吉…それにしても、あなたは。——いつになつたら、あなたは、——いゝえ、幾度煮湯を飲まされたらあなたは眼が覺めるんです？

伊平。……………

長き間。——誰も無言……

伊平。（急に）いや、分つた。——さういはれちやア仕方がない……。

丈吉。……………

伊平。とんだいまゝで厄介をかけた。——すまなかつた。——さア、勘忍してくれ。

丈吉。……………

伊平。德次、歸らう……

德次。……………（眼をふせたまゝ無言）

伊平。すまないが、おくみを呼んでくれ。

丈吉。おくみ。——おくみ……

おくみ、出て來る。——眼を泣腫してゐる……

伊平。おくみ、さア歸るんだ。

おくみ。……………

伊平。一しよに、さア、歸るんだ。（立ちかける）

丈吉。どうするんです、おくみを？

伊平。いまのやうにいはれたんぢやア此方のもうとりつくしまはない。――このうへ迷惑はかけられない。――だから連れて歸る……

丈吉。(何かいはうとして止す。――寂しくうなづく)さうですか……

間。

伊平、上づツたとりなしで、徳次とおくみをつれて歸つて行く……

間。

丈吉、火鉢のまへをうごかない。――おいよ、出て來る。

丈吉。(すぐ)燈火をつけねえ。

おいよ。はい。(電燈を捩る)

丈吉。飯はまだか？

おいよ。いゝえ、出來てゐます。

丈吉。すぐに、ぢやア、喰はしてくれ。

おいよ。はい。

間。

おいよ、膳をまづ運んで來る。――そのあと、また、潮煮の鍋をもつて出て火鉢にかける。

間。

二人食事をはじめる。

丈吉。(潮煮の椀をとりだしながら)折角おくみにくはせようと思つたのに……

おいよ。(寂しく)えゝ。

丈吉。(間)おやぢは徳が可哀いゝんだ。――憎いのは……いま〳〵しいのは俺なんだ。

おいよ。……………

丈吉。子供の時分からおやぢと反りの合はなかつた俺だ。――おやぢをふり捨てゝ早くから外へ飛出した俺だ。はじめから堅氣の稼業の

誤つた俺だ。——その俺をいまさらたよらなくつちやアならなくなつたおやぢだ。

片)——

おいよ。…………

丈吉。(ふと耳を傾けて)聞ちやアねえか?

おいよ。えゝ?

丈吉。ふつて來たんぢやアねえか?

おいよ。さうですか?

おいよ、立つて窓のそばへ行く。——そのあと、丈吉、そツと涙をふく。

おいよ。大丈夫です、——ふツちやア來ません。(さういひながら膳のまへに返つて來る)

丈吉。そんならいゝ。——途中でふられちやアおくみが可哀想だから……

——(線

二人、寂しく食事をつゞける。

(幕)

(昭和三年五月)



二つの挿話

廣津和郎

入院

『向うに電話をかけて置きましたから、あなたに御面倒ですが、附添を願つて……』

云ひながら、五分刈頭の權藤博士は、癇持の子供のやうに、舌をべろりと顎の方へ向つて出して、それから考深い顔付をして、近眼鏡の裏側の眼を伏せた。

『先生は行つて頂けないんですか』

醫者に向つて一般に用ひる敬稱――『先生』といふ言葉――が、この博士に對して、態とらしくて、自分にははつきり發音が出來なかつたので、自分はその言葉だけ曖昧に云つた。權藤氏が有名な歌人であり、そして自分が同じ文學の中の小説を書く事を職業としてゐるので、さうした方面からの親しみが、『先生』といふ他人行儀の言葉を使ふ事に、妙に鼻白むやうな心持をさせた。

『いや、私は行かないでもいゝでせう』

權藤氏は手を振つた。それは醫者らしい決斷を持つたものではあつたが、併しそれと同

時に、彼の氣の弱さを十分示してゐるやうなものだつた。眞田を精神病院に入院させる——すつかり狂亂してしまつてゐるなら兎に角、或意識の非常にはつきりしてゐる眞田、而も文學の方から、普通の人よりも、親みを持てる間柄にある眞田を、鐵窓の病室の中に監禁してしまふ——それに立合ふ事は、友人としての自分が堪へられないものであると同樣に、醫者としての職業を持つた櫂藤氏にも堪へられないものに違ひない。自分はこの博士が平生から殆んど患者よりももつと多量の睡眠藥を、始終持藥として用ひてゐる事を知つてゐた。

『それでも、行つて頂けないでせうか』と自分は押して云ひ切る事が出來なかつた。

自分は自動車の側に彼の細君と一緒に立つてゐる眞田の方へ默々として近づいて行つた。數年前に火事で燒けてから、未だ建つはこびに至らない、この櫂藤氏の病院の庭には、ところどころにその燒けた名殘が殘つてゐて廢墟を思はせるやうな寂しみが漂つてゐた。

『兎に角、C博士の病院に行かう。入院して、少し靜かにしてゐた方が、早く癒るからね』と自分は云つた。

『入院するよ。自分でも入院したいと思つてゐる位なんだから。——併し三日の猶豫が欲しいな。三日の間にいろいろな事を片付けて置きたいんだから』

『後はどうでもするから、今日入院する方がいいな』

『入院はするよ。唯三日待てといふんだよ』眞田は怒つたやうに云つた。

自動車の側まで、洋服に下駄を突つかけて、ズボンのポッケットに兩手を突つ込んだ形で、櫂藤氏は靜かに近づいて來た。

『今日入院なすつた方がいいですな。どうもその方がいいやうですな』

『さうですか』と眞田は不機嫌に答へたが、併し醫者に向ふと、彼は逆らはなかつた。『それぢや、入院します』

『それがいいですな。一つ勇氣を出されて、入院されるんですな』といふやうに、『その方がいいやうですな』どうもそれがいいですな』といふやうに、櫂藤氏は乾度語尾を『ですな』止めにした。『しなければいけません』と云ふやうに斷言しないで、『私はさう思ひますな』といふやうな、相手の感情に訴へるやうな物の云ひ方をした。——自分は博士の文學者らしいデリカシイをその言葉に感ずると共に、チエエホフの『六號室』のドクトルの物の云ひ方を思ひ出した。『ビールを持つて來い』といふ命令法が使へないで、『どうもビールが一杯欲しいものだな』といふ風にしか云へないあのドクトルの物の云ひ方を。

自動車は動き出した。眞田を眞中にして、彼の細君が右側、自分が

右側に腰を下ろした。道のりは隨分長かつた。青山から北の郊外まで、たつぷり三里半はあつたに違ひない。埃つぽい町を幾つも幾つも通り過ぎ、その埃の間に見える初夏の木立の緑が、へんに沈鬱だつた。

けれども、眞田は快活に話した。權藤氏の病院で、少し腹立たしげだつた彼は、すつかり明るくなつて、愉快さうにいろいろの事を話した。話す事は一つも間違つてゐなかつた。文學の話が主だつた。それから友達の事を話した。彼が學校時分同級だつた男で、或有力な雜誌の主筆をしてゐたKが、その少し前辭職した。辭職といふよりも、最近の雜誌界の不況の影響を受けて、その雜誌の成績が上らなかつたので、そのために詰腹を切らされたやうなものだつた。神經質で氣の弱いKは、そのためにすつかり意氣銷沈してゐた。それを眞田は非常に心配してゐた。發病の最初に、彼は明け方Kの家まで自動車を走らせた。その癖、彼は自分ではKの家を叩く事が出來ないで、一緒に附添つて行つた男に、寢てゐたKを起させて、外に呼んで貰つた。そしてKが外に出て來ると、何を思つたか眞田は一丁も向うに逃げ出して、泣き出したと云ふ。……で、Kの事は彼には心配で心配で堪らないらしかつた。今も彼はそのKの事をいろいろに心配して話した。

併し彼の話は少しも陰氣でもなければ、間違つてもゐなかつた。精神に異狀のありさうなところは少しもなかつた。若しこの數日前からの彼を知つてゐなかつたなら、彼が精神病にかゝつてゐるなどゝいふ事は、想像もつかないに違ひない。

『このまま、或は好くなつて行くのではないか』といふ氣がした。恐らく同じやうな事を細君も感じたに違ひない。そこで彼の話が快活で、當り前であるために、彼の細君も自分も快活になつて來た。今話に出たKが、自分と同じ年の同じ月の同じ日に生れたのである事を、自分が云つた時、

『同じ日に生れても隨分性質が違ふものだね。君のやうなところが少しでもKにあつたならば』と眞田は云つて笑つた。

『Kさんはお幾つです？』と眞田の細君が訊いた。

『明治二十四年生れだよ。俺もこのHもKもみんな同い年だよ』と眞田が答へた。

『二十四年の？』

『二十四年の十二月五日です』

『あら、それぢやあたしも丁度同じ年の同じ月の同じ日でございますわ。まあ』

眞田の細君とKと自分と、この三人の生れた日が全然一致だつたといふ事の發見が、我々を一層愉快にした。自動車の中の三人は聲を立

てて笑つた。その中の一人が、これから入院するために乘つてゐる自動車だといふ事などは、誰が見たつて想像出來ないに違ひない。

併し病院に着くと、その氣持ががらりと變つて、二人とも變に眞劍になつて、餘裕がなくなつて來た。

受付に話すと、權藤氏からの電話で、總てが解つてゐるらしかつた。美しい顏をした若い醫員が出て來て、控へ室に案内して與れた。他に二人程の客があつた。小さな控へ室の前の廊下を、醫員、看護婦達が右往左往してゐた。

おちつかない氣持で、椅子に腰かけてゐるところに、二十六七の小柄な女が、白い仕事着を着て、帖面を持つて這入つて來た。

「原田さんと仰つしやるのは？」彼女は一つの椅子に腰を下ろして、事務的な物の云ひ方で、帖面をテーブルに擴げながら云つて、我々三人の方をじろりと見た。——冷たい表情の女で、愛嬌が微塵もなかつた。

「僕です」と原田は腹立たしげに云つた。

「いつ頃から御病氣なのですか？」

自分は彼女の態度が原田の神經にどんな風に響くかと思つて、はらはらした。

「それは後で、僕があちらで話しますから」と自分は眼顏で彼女に知らせるやうに云つた。

彼女は冷たい眼で、自分の方をじろりと見たが、自分には答へないで、

「では最初から伺ひます。お住居は？」

「ヘヘ區ヘヘ町……」

「お年は？」

「三十七」

「御兩親は？」

「父は死んだが、母は生きてゐる」

「お父さんは何病でお亡くなりになりましたか？」

「そんな事は、僕が後で話しますから……」と自分は再び横から口を入れた。

「でも、これは診察を受けにいらつしやつた方に最初に伺ふ規則でございますから」と彼女はペンで帳面に何か書きつけながら、自分の方は見もしないで答へた。「お父さんの御病氣は？」

自分は自分の直ぐ右手にゐる原田の呼吸がはづんで來るのを聞いた。彼が怒鳴り出しはすまいかといふ氣がした。すると、不思議な事に、彼が怒鳴る前に、自分がかう叫んでしまつた。

「君は解らない人だな。——一寸廊下に出てくれ給へ。廊下で話すか

ら』

　自分は彼女を引き立てるやうにして廊下に出た。

『さつきから、僕があんなに頼んでゐるぢやありませんか。僕が後で話すから、患者の前で、ああ云ふやうに云つて貰ひたくない、と』

『何の事でございますか？』彼女は自分を見上げるやうにして、切口上で云つた。

『權藤さんから此處の院長さんに電話がかけてあるんです。——患者は精神病の疑ひで、今日入院する事になつてゐるんです。さういふ患者に向つて、病氣の經過なんかを、あんな風に訊かれたら、益々神經が變になつてしまふぢやありませんか。だから、さつきから、僕が後でお話しすると云つてゐるんです』

『さういふ御患者でしたら、前以て看護婦にでもさう仰つしやつといて下さい』

　自分はその言葉に吃驚して、改めて彼女の服裝を見た。自分は白い仕事着を着てゐたので看護婦とばかり思ひ込んでゐたのだが、それではこの女は女醫だつたのか。——成程白い仕事着は、看護婦のそれとは違ふ。ツメ襟の看護服とは違つて、襟が開いてゐて、そこから下の和服の襟の端と半襟とが覗いてゐる。

　彼女は自分の顏をじつと見上げてゐたが、やがて冷然とした表情で、自分を尻目にかけるやうにして、帳面を振り振り、控へ室の筋向うの部屋に這入つて行つた。侮辱された女の口惜しさうな泪が、彼女の眼に浮んでゐたのを自分は見た。

　自分は茫然としながら、その部屋の上に『醫員室』と書いてあるのを見上げた。

　一人の若い男の醫員が、笑顏を作つてその部屋から出て來た。今彼女が持つてゐた帳面を、彼が持つてゐた。

『どうなすつたのですか。女醫さんが興奮してゐますから、私が代つてお聞きしませう。——どうぞこちらへ』

　自分はキマリが惡くなりながら、彼の後について行つた。幾つかの室の前を通つて、玄關側の應接室らしい部屋に來た。

『いや、僕は患者の前で、あんまりズバズバと訊かれたものですから、患者をいらいらさせやしまいかと思つてゐる中に、私がいらいらしてしまつたんです。——それに、女醫さんだとは知らなかつたんです。看護婦の人だと思つてゐたものですから、つい亂暴な口を利きまして』

『ははは』と若い醫者は輕く笑つた。彼は秀麗な顏の青年醫員だつた。『それぢや、私が承りませう。いつ頃から御發病なんですか？』

　自分は頓田の容態を話した。醫員は帳面にそれを一々書きつけた。

『まるで狂人が二人やつて來たやうなものだ』自分はさう思つて、可笑しさと恥しさとを感じながら、控へ室に歸つて行つた。權藤氏からの電話が、あの女醫まで達してゐないのがほんたうで、彼女が唯あの室に、普通の患者に對するつもりで這入つて來たのだつたら、彼女は突然の自分の見幕にどんなに吃驚した事だらう。女醫としての威嚴を頭から無視して、怒鳴り出した自分を、彼女は本物の狂人と思つたかも知れない。――自分は女醫の誇を傷けた事が濟まない氣がした。が、それにしても、あの女醫もあれでは餘りに冷然とし過ぎてゐる……

『あつははは』と北田は自分の顏を見ると笑ひ出した。『僕が怒鳴らうと思つてゐたら、君が怒鳴つてしまつたんだよ。僕も短氣だが、君は尚更短氣な癇癪持だからな』

自分は苦笑した。これではどつちが精神に異狀があるのか、どつちが正氣なのか解らなかつた。――自分は此處でも亦『六號室』のドクトルを思ひ出した。正氣と狂氣の差の紙一重にある危つかしさ――さう云つた事が考へられた。

『でも、今のは女醫だつたんだぜ。僕は廊下に出て行つてから氣がついたんだが、女醫だつたと解つてゐたら、あんな態度は取らなかつたんだのに。――僕は解らずやの看護婦だと思つて、つい怒鳴つちまつたんだが』

『女醫さ。僕は前から解つてゐたよ。君は氣がつかなかつたのかい。あつはは。――白服の下に、和服の襟が出てゐたぢやないか』

それまでも見てゐたのか――自分は北田の顏を呆然として見た。益々どつちが正氣か狂氣か解らなかつた。

やがて北田は院長室に呼ばれた。自分は附添ひとして彼の後からついて行つた。小柄だが、引締つた、聰明な顏をしたC博士は、北田の胸を診察したから云つた。

『最近の御氣分はどうですか？』

『比較的好い方です』

『頭がお痛みではありませんか？』

『いや、頭は頗る好い方です』北田はさう云つた時、上機嫌に、得意な顏をした。『僕は近頃二時間も眠ればそれで足ります。何でもはつきり考へられます』

『ふん、成程、それは結構ですな』

『盛んに仕事も出來さうです。僕は今までの二倍も三倍もの速度で物が考へられます』

『なるほど』

自分は聞いてゐて、やつぱりいけないのかと思つた。『二時間も眠れ

ば足りる『二倍も三倍もの速度で物が考へられる』そんな風な事を、異常だと氣がついてゐないところが、やつぱり異狀のある證據ではないのか、と。

『ではよろしうございます。』博士は診察道具を仕舞ひながら云つた。『兎に角、大分神經が衰弱してゐられるやうですから、此病院に三四日這入つて御覽なさい』

『ええ、僕もさうして頂からかと丁度思つてゐたところなんです』

眞田を待たせて置いて、眞田の細君と自分とは、博士につれられて、二階の病室の下檢分に行つた。普通病室の廊下に向つて、一つのドアがある。そのドアを開くと、思ひかけなくそこに又廊下があつて、その廊下の兩側に、病室が並び、廊下の突き當りには、サン、ルウム——といふ程でもないが、日當りの好い、患者の散歩場のやうな部屋がある。ドアの側には一人の男が番をしてゐた。

『此處に今一室空いてゐるんですが、此處がどうかと思ひます。未だ他に鐵格子のはまつた室もありますが、併しそれ程の患者ではありませんから』と院長が云つた。

サン、ルウムの中には五六人の患者が椅子に腰をかけたり、歩きまはつたりしてゐたが、我々の方に一齊に好奇の眼を睜つた。そしてその中から、小商人らしい、小柄な、にこにこした三十位の男が、ちよこちよこと此方に近づいて來た。そして眞田の細君に向つて、突然腰をこゞめて云つた。

『これは奧樣でございましたか。始めまして。始終いろいろ御厄介になりまして』

恐らくそれは、院長の細君とでも思ひ込んで、挨拶に來たものらしかつた。

院長と眞田の細君とがそこから出て行つた後、自分は後に殘つて、美貌の若い醫員と話をした。十分程して、自分は階下に下りて行つたが、眞田夫妻の姿が見えなかつた。自分は控へ室、應接室と見てまはつて、今下りて來た階段とは別な階段を上ると、丁度そこにある二階の應接室に、彼等夫妻は腰かけてゐた。

『みんな寄つてたかつて、何も今日俺をこんな處に押し込めなくつたつて』と眞田は細君に向つて、怒氣を含んで云つてゐた。『自働車を歸してしまふ奴があるものか』

『あなたは御病氣なんですから、ほんの一週間ばかり入院なさりませんと……』細君はおろおろ聲で、子供に云ひ聞かせるやうに慰めてゐた。

『病氣は解つてゐるよ。だから入院すると云つてゐるぢやないか。併し三日待てといふんだ。三日の間は、用があると云つてるんだ』

「折角此處まで來たんだから、勇氣を出して入院してしまつた方が好くはないかな」と自分は横から口を入れた。

「君までがそんな事を云ふ。――僕はもう君だつて信用しない」

彼は突然顔に袖を當てて泣き出した。

眞田の細君と自分とは途方に暮れて顔を見合せた。――もう少し前、院長の診察を受けた時には、自分から進んで入院すると云つてゐたのに。

「まあ、泣くのは止し給へ」

「泣いたつていいぢやないか。止めるなよ」

彼は泣きつゞけた。自分はぼんやりそこに立つてゐた。部屋には何んだか忘れたが南洋の植物らしい大きな鉢植が置いてあつた。自分は無意味にその鉢植の上に眼をやりながら、どうしたものかと考へてゐた。これだけはつきり三日經つたら入院すると云つてゐるものを、無理やりに今日入院させてしまふ事が出來るものか。――こんなに何も彼も解つてゐては、僕の誤魔化しも利かない。と云つて、腕力で入院させる事など出來るものではない。自分はこのまま連れ歸つたら、權藤博士に面目ない氣がすると共に、權藤博士が來てゐてくれたら、どんなに氣強かつたらうといふ氣がした。

『何故自動車を歸した？』眞田は細君に向つて、涙聲で叫んだ。

細君は唯はらはらしてゐた。

「ぢや、待ち給へ。今院長に交渉して來るからね。三日經つたら、君が自身で入院しに來ると云つてゐるといふ事を云つて來るからね」

「そんな事が解らない院長なんて駄目だ」

自分は廊下に出た。さつきの美貌の醫員がやつて來た。

「如何です？」

「今日は入院するのがどうしても厭だと云ひ出しまして。どうも私達の手ではどうする事も出來ません。何か暴力のやうなものでどうかしない限りは」

「病院としては、御入院になるなら、どんな手段でもありますがね」と醫員はにこにこしながら答へた。「唯お附添ひの方のお氣持さへ許せば」

專門家らしい冷静さが、惨らしい程だつた。

「併し兎に角、院長さんに相談して來ます」

「さうですか。どちらでも宜しいやうに」

自分は院長室に行つて、C博士に今のいきさつを話した。

「さうですか。それでは御本人のお氣の濟むやうになすつた方がよろしいでせう。三日經つたら入院すると云はれてゐるなら、乾度三日經つたら、御自身で入院なさるでせう」

『さうでせうか。今日連れ歸りまして、後で入院が厭だと云ひ出しましたら、此處まで折角まゐりました事が、無駄になつてしまひますから』

『いえ、大丈夫でせう。あの病氣は非常に意識のはつきりしてゐる病氣です。頭は却つて冴えて、記憶などは一層明瞭になるものです。唯連絡がなくなるだけですが、三日經つて入院すると御自身でお云ひになれば、それはちやんと覺えてゐられます。――お連れ歸りになつてもよろしいでせう』

『さうでせうか。どうもありがたうございました』自分はC博士に禮をして、院長室を出かけたが、ふと思ひついて、引返り、『癒る見込がありませうか?』と訊いた。

『十分あります。私の考では、早くお癒りになるだらうと思ひます』

自分は勇んで院長室を出た。自分は今日は歸つてもいいと云ふ院長の許しの出た事を眞田に告げた。

『當り前だよ』と彼は答へた。

自動車は彼には歸したと云つたが、實際は自分達の歸りのために待たしてあつた。來た時と同じやうに我々は腰をかけた。走り出すと、直ぐ眞田は快活になつて來た。

『さつきの女醫は吃驚したらうね』と彼は云つた。

控へ室のあの一場面が我々の眼の前に浮んで來た。女醫のツンとした態度が繰返された。自分の奸策を起した光景がおさらひされた。

『恐らくあの女は今晩一晩ぢゆう不愉快な思ひをしてゐるぜ』

眞田は機智に富んだ云ひ方で、かう云つて笑ひ出した。

『恐らく晩飯も不味からうよ』

そこで自動車の中には、どつと笑ひ聲が起つた。眞田も、細君も、自分も、暫くの間笑ひつづけてゐた。

その晩、眞田と自分とは、眞田の家の茶の間で、微醉ひになりながら、いろいろの話をした。彼の話す事は大概文學の話だつた。二三日前に續いて起つた彼の發作の間にも、彼が口走る文學の話だけは、少しも正鵠を失つてゐなかつた。彼は『俺に狐がついてゐる』と云つて、その狐を追ひ拂ふために、『おう、おう』と聲を出した。彼は次に母親に狐がついてゐると云つて、母の背中を叩いた。彼は醫學上の大發見をしたとも云つた。彼の口よりも三倍の早さで、思考力が動くとも云つた。そんな風にして、彼の云ふ事に連絡のなくなつた時、ふと本箱のどの本かを指さして、『これ面白いかい』とでも訊いて見ると、彼は忽ち、はつと夢がさめたやうに眞顔になつて、その本の内容の話

をする。――さうなると、その云ふ事が整然として、醫者らしいところは少しもなくなつた。

彼はいろいろな作家の事を鋭く批評した。それから自分の顔を見、

「君は親父に遠慮してゐて駄目だよ。親父が讀むと思つて、思ひ切つて書かないから。――それを卒業したら、好いものが書けるだらう。」と上から見下したやうな事をズバズバと云つた。

同じ小説家を父に持つた自分は、父が讀むだらうといふ遠慮から、筆を鈍らすといふやうな事がないではなかつた。――平生彼はそれを云つた事はなかつたが、かうはつきりした云ひ方でそれを云つたのは、彼の頭が普段よりも寧ろ自由に放たれてゐるためだとも云へる。

「併し病院に這入つた方がやつぱり好いらしいな。」と自分は機會を見て、やさしく云つた。「僕はね、今まで云はなかつたけれど、そのまま行くと、マニイになりはしないかと、榊原氏もC博士も、心配してゐるんだから。」

「今だつてマニイだよ。立派なマニイだよ。」彼はそんな事はとつくの昔に知つてゐるといふやうな顏をして、聲を出して笑つた。「無論マニイさ。みんなは遠慮して云はないが、僕にはよく解つてゐるんだ。……併しね、僕は醫者達に頼みたいんだよ。このマニイをすつかり癒してしまつて呉れては困るつて。餘り癒されたら、小説が書けなくなつてしまふからね」

彼と自分とは聲を出して笑つた。

彼は又こんな事も云つた。

「ゴオゴリを讀み過ぎた所もいけないんだよ。――併しゴオゴリは氣の毒なものさ。あの時分の露西亞の醫學では、ゴオゴリのマニイは癒せなかつたんだからね。そこに行くと、今の日本の醫學は大したものだよ。僕の病氣なんか、あの博士連中が直ぐ癒してしまふからね。――僕は入院するよ。三日經つたら入院するよ」

自分は夜遅く明るい心持で彼の家を辭した。

（挿話の第一。終り）



暗夜行路

志賀直哉

十五

其夜謙作は妙な夢を見た。

神社の境内は一杯の人出た。ゆるい石段を人に押されながら登つて行くと、遠く石段の上に大社造の新しい社が見える。今、其所で儀式のやうな事が始まつてゐる。然し彼は群集に隔てられ、容易に其所へは近寄れなかつた。

石段には參詣人の腰程の高さに丸太を組んで板を敷いた別の通路が出來てゐる。儀式が濟むと生神樣が其所を降つて來るといふ事が分つてゐた。

群集がどよめき立つた。儀式が濟んだのだ。白い直垂を着た若い女――生神樣が通路の端に現はれた。そして五六人の人を從へ、急足に板敷の上を降つて來た。身動きならぬ儘に押され〱少しづつ押上げられてゐた彼は此時、もつとぐん〱其方へ近寄つて行きたい衝動を感じた。

生神樣は湧立つ群集を意識しないかのやうに如何にも無雜作な樣子で急いで板敷の路

を降つて來る。それは今鳥取から歸つてゐるお由といふ宿の娘だつた。彼はそれを今見て知つたのか、最初から知つてゐたのか分らないが、兎に角其娘の無表情な餘り賢い感じのしない顏は常の通りだつた。そしてそれは常の通りに淋しくもあつた。仍それよりも生神樣に祭上げられながら少しも思ひあがつた風のないのは大變いゝと彼は思つた。彼はお由が生神樣である事に少しも不自然を感じなかつた。寧ろ此上ない敬虔者である事を認めた。

お由は殆ど駈けるやうにして彼の所を過ぎて行つた。長い白衣の袖が彼の頭の上を掠つて行つた。其時彼は突然不思議なエクスタシーを感じた。彼は恍惚としながら、かうして群集はあの娘を生神樣と思ひ込むのだ。――そんな事を考へてゐた。

夢は覺めた。覺めて妙な夢を見たものだと思つた。群集は前日の團體が夢に入つて來たに違ひない。唯あの不思議なエクスタシーは何であらう。さう考へて、夢ではさうも感じなかつたが、今思ふと、それには性的な快感が多分に含まれてゐたやうに思ひ返へされ、彼は變な氣がした。そんな事とは遠い氣分でゐる筈の自分がそんな夢を見るのは可笑しな事だと思つた。

翌朝、軒に雨だれの音を聽きながら眼を覺ました。彼は起きて、自ら雨戸を繰つた。戸外は灰色をした深い霧で、前の大きな杉の木が薄墨色にぼんやりと僅にその輪廓を示してゐた。流れ込む霧が匂つた。肌には冷々氣持がよかつた。雨と思つたのは濃い霧が茅屋根を滴くとなつて傳ひ落ちる音だつた。山の上の朝は靜かだつた。鷄の聲が遠く聽こえた。庫裡の方ではもう起きてゐるらしかつた。彼は楊子と手拭とを持つて戸外へ出た。そして齒を磨きながら其邊を歩いてゐるとお由が土間にたき火を山と盛つて庫裡から出て來た。

「夜前は向ふへ寢て往生しました。團體の人達が騷ぐので、やゝ兒が眠られんのですわ」

「少しは聽こえたが、此方はそんなにも八釜しく思はなかつた」

「余つ程引越しせう思うて來て見ましたが、ようやすんでられる風ぢやでやめました」

謙作の夢の中のお由とは大分異つてゐた。

「昨晩あなたが生神樣になつてる夢を見た」

「生神樣て何ですの。そんなものありますの」

「天理教の何とか婆さんと云ふのを知つてますか？　天理教を始めた人です。あなたがさう云ふ人になつてるんだ。尤もあなたは婆さんぢやあなかつた。あなたは若くて、そして私もどうやら信者の一人になつてるらしいんだ」

「ふん」お由は一寸肩をすぼめて笑つたが、扨て返事の仕やうもない

と云ふ風で、少時默つた後、
「慶さんのお父さんはその天理教で家をつぶした人ですわ」と云つた。
「さう、――それで慶さんだけが此山の信者なんですか」
「代々さうだつたのをお父さんが天理教で家をつぶしたのですから、その方は餘つ程懲りたでせう」
「尤も人足前に屋根の葺きかへを奉納するなどは幾らか天理教臭い所もあるけど……」
「…………ですけど、本統に感心な人ですわ」
「さうらしい。毎日よく働いてゐる」
「村でもあの人は別ものらしいわ」
「何所か老成したやうな所がある。それだけに若々しい所も少ないが」
「色々苦勞があるからね」
「苦勞……？」
「お父さんに家をつぶされたのは慶さんが子供の時ですからね。それだけでも大變なのに近頃又人にも云へない苦勞があるらしい噂ですわ」
「へえ、そんな人なのかな。――それはさうと、昨日から手傳に來てるんですか？」
「いゝえ。お母さん喧まんかつたらしいです」
彼が朝飯の膳についた時、お由は慶さんの人にも云へない苦勞と云ふのを話した。
慶さんには三つ年上の未だ子供を産まない嫁がある。生來の淫婦で、慶さん以前にも、以後にも、また現在にも一人ならず、情夫と云ふやうな男を持つてゐる女だつた。そして慶さんは亭主と呼ばれるだけの相違で、事實は何人かの一人に過ぎなかつた。それを承知で結婚した慶さんではあるが、矢張りその爲め大分苦しんだ。人からは別れろと云はれ、自分でも幾度かそれを考へた。然し慶さんには何故か此女を念ひ斷る事が出來なかつた。意久地がないからだ、さう思ひ、又實際それに違ひないが、慶さんはどうしても此女を憎めなかつた。
絶えず面倒な事が起つた。それは慶さんを入れた所謂三角關係ではなく、慶さんを除いたさう云ふ關係で、面倒が絶えなかつたのである。慶さんは女の不身持よりも此面倒を見る事に堪へられなくなつた。丁度兵隊にとられたのを幸ひに、二年間身を退く事に決めたが、さりとて、きつぱり別れようとはしなかつた。
「それはお話にならんですわ。男が來て嫁さんと奧の間にゐる間、慶さんは台所で御飯拵へから汚れ物の洗濯まですると云ふのですから。時には嫁さんに呼びつけられ、酒買ひの走り使ひまでするといふので

すから」

「少し變つてるな。それで麗さんが腹を立てなければ、余つ程の聖人か、變態だな。一種の變態としか考へられない」

謙作は麗さんを想ひ浮べ、さう云ふ人らしい影を探して見たが、分らなかつた。然し彼にもさう云ふ變態的な氣持は想像出來ない事はなかつた。

「麗さん自身ではどう云つてるんです」

「自家のお母さんなぞには何か愚痴を云つてるらしいです」

「ふむ」

「もう諦めてるんでせう」

「諦められるかな」

「どうせ、さう云ふ嫁さんらしいですわ。で、それは諦めても狹い土地の事で、人の口がうるさいから、一つはそれで山に來てゐるらしいです」

「苦勞した人と聽けばそんな所も見えるけど、現在さう云ふ事がある人とは誰も考へられませんね。よく松江節を唄ひながら木を割つてゐるが、そんな時の樣子が如何にも屈託なささうで羨しい氣がした」

「時々は沈んで居る事もありますわ」

「さう。それが本統だらうけど、あの人の顏を見て、そんな事があらうとは全く想像出來なかつた」

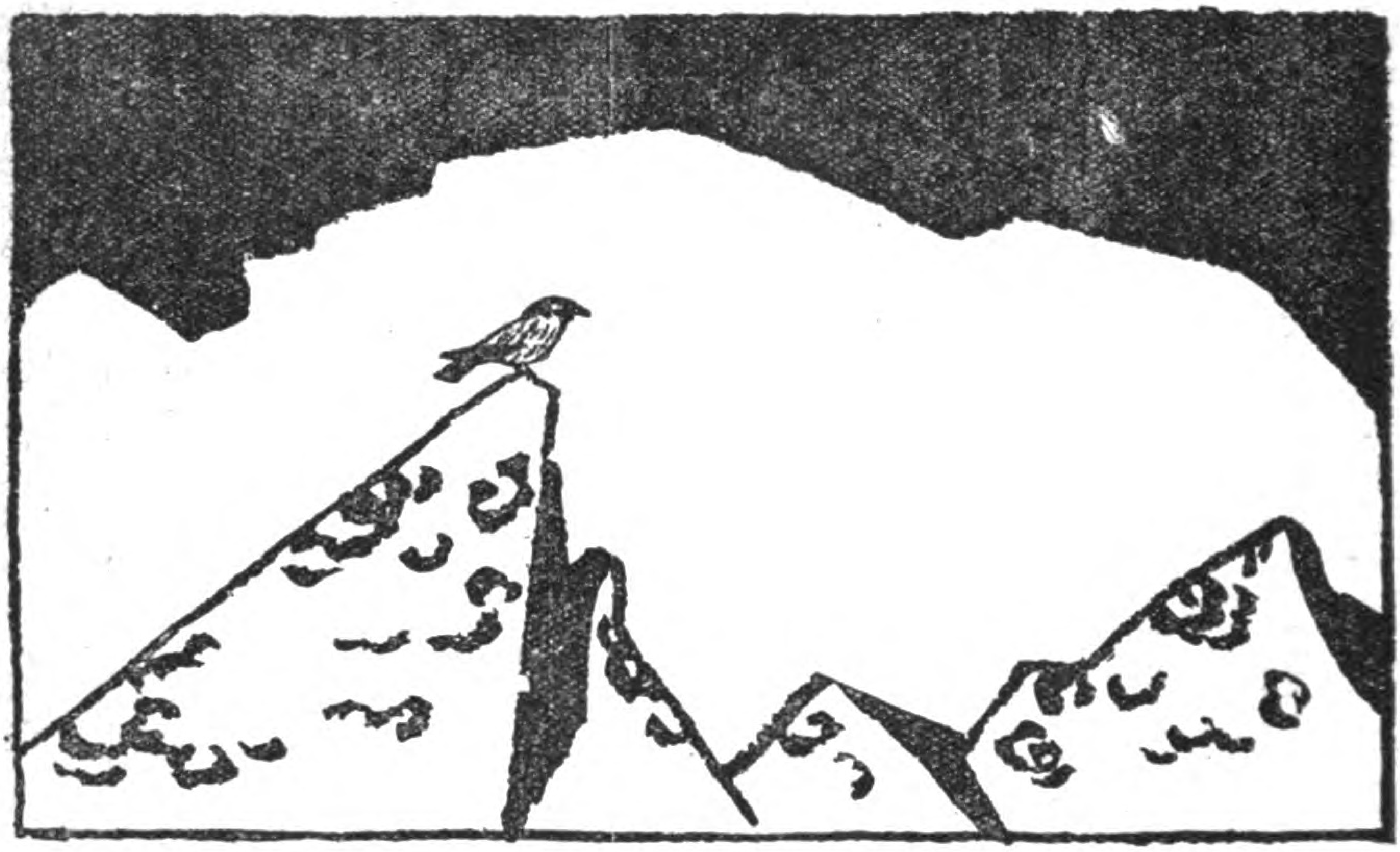
「誰れだつて」お由は急に笑ひ出した。「顏だけ見て、其人が間男をされてるかどうかは分らんでせうが」

「さうだ。それは正にさうだ」謙作も一緒に笑つた。「其所で私の顏を見て、あなたはどう思ふ。さういふ事があると思ふか、どうですか」

「ハヽヽヽヽ」

此時謙作は不圖、留守を知つて要が衣笠村を訪ねて居はしまいかといふ不安を感じ、胸を轟かした。然し直子が再び過失を繰返へすとは思へなかつた。——思ひたくなかつた。そしてさう信じてゐるつもりではあるが、それでも未だ何所かに腹からは信じきれない何か滓のやうなものが殘つた。

あの女は決して盜みをしない、これは素直に信じられても、あの女は決して不貞を働かない、この方は信じても信じても何か滓のやうなものが殘つた。女と云ふものが弱く、さう云ふ事では受身であるから、さう感じられるのか、それとも彼の境遇がさういふ考へ方をさせるのか分らなかつた。が、兎に角、直子にはもうさういふ事はあり得ない、彼は無理にも信じようとした。唯、要の方だけは其時は後悔しても、若い獨身者の事で、自分の留守を知れば心にもなく、又訪ねたい誘惑にかからないとは云へない氣がするのであつた。お榮といふ女がもう少し確りし、且つ賢い女なら兎に角、人がいいだけでそんな事には餘り頼りにならないのを彼は歯がゆく思つた。



ラスプーチンの死（一幕）

前田河廣一郎

時

ロシア革命前、一九一六年、十二月十六日の深更から十七日の黎明へかけて。

處

ペトログラード市（當時の）、モイカ運河に臨めるユースポフ公爵邸内。

人

プリシケウイツチ

國會議員。中年の、稍肥滿じた、髯の濃い男。保守派にして皇室中心主義者である。常にポツケツトにホーレスの一卷を携へて、聖書の如くに引用する癖がある。普通の夜會服。

フエリツクス・ユースポフ公爵

二十九歳の青年貴族。感激性に富み、良く詩的空想に驅られて、半ば己が行ひつゝある行爲の意味を解せずに、大きい悲劇の原動力となる種類のプーシユキン型の人物。背廣。ツアールには義甥にあたる。

ドミトリ太公

二十八歳の思慮の淺い青年貴族、フエリツクスの從弟にあたる。女たらしとの評判がある。洒落者。

スウホーテン中尉

ドミトリの友人、軍醫。

ドクトル・ラザアルト

　プリシケウイッチの創始した赤十字列車附の軍醫。カーキイ服。

若い伯爵夫人（登場しない）

グレゴリー・ラスプーチン

　シベリア、ポクロウスコイ（トボルスク在）の農民、シャムマニスト派の催眠術を會得し、僧院に居つた關係から僧侶として、修道院長テオファネスの紹介にて皇室に入ることとなつた漁色漢。茫々と生やした頭髪長鬚、眼だけが爛々とひかつてゐる。ムジイクらしい刺繍のした絹のルバシユカ、天鵞絨のヅボン長靴。ともすると怪鷲的な巨きい手を對手の上へ振り翳す習慣がある。

衛兵A

衛兵B

警官

舞臺

　宮殿をもつて聞こえるユースポフ公爵邸の一棟のアパートメントである。

　室は三部に分かたれてゐる。第一左端は、玄關のドアから這入る前房。第二食堂は中央に、前房と押扉をもつて隔てられてゐる。第三右端は居心地良きボードア風な別室、食堂とはローマ風な帷幄によつて分けられてある。

　左端玄關のドアの外は數段の石段になつてゐて、雪の降り積んだ中庭へ通ずる心。人の跫音によつて、石段が硬く凍てついたのが知れる。

　ドアの内部は、細長い廊下を持つた前房、鏡台付の外套や帽子を掛ける台が廊下の奥に据ゑられてある。數奇を凝らした床毯の上には古風なトルコ絨毯。その手前に大きい鉢植の棕梠。前房から直ちに二階へ通ずる大理石の階段が、五階ほど見えて、昇ると同じ石の壁に突當つて、階段は急に折れ曲がり、更らに方上へ傳はるのが斜た闌干の連續によつて暗示される。曲がり目に、もう一つの棕梠の鉢、その後ろに大きい蓄音機の喇叭が口を開いてゐる。赤い絨毯。

　中央の室は、小ぢんまりした食堂。親しい二三人が、芝居歸へりに高價な夜更けの晩餐を取るために設けられた種類の小食堂である。室の中央にはマホガニーの大型の食卓、その上に、燻銀のサモワールが据ゑられてある。壁に狩獵の畫や風景などの額二三點。ほどよき場所にチャイナ・キャビネット、ブラーク、椅子など。純白のテーブル掛けの上に、皿やコップや銀具などが散らばつてゐる。三つの盛皿に、大きい桃色クリームのケーキとチョコレート・ケーキ、果物と、別々に盛つてある。床は前房と同じ、トルコ絨毯の敷物。

右端の室は二つの窓を持つてゐる。正面奥に大きい切爐、大木の胴つころが旺んに燃えてゐる。天井には落着いた色合の天幕がしぼり上げられてゐて、赤、青、黄、緑、紫の水晶を鏤ばめたラムプ型の電燈が中央にぶら下がつてゐる。右端の窓には二つとも深々とカーテンが垂れてあり、その下に洒落れた小型のテーブル。テーブルの上には四つの別な形の酒の瓶が乗つてゐる。いづれも甘口の麝香葡萄酒、マデイラ酒、櫻ブランデー、葡萄酒の四種類である。その前に色彩の施してあるコップ、グラス類。喫煙用具など。切爐のマントルピースの上には細々とした骨董品、貴重品が載せてあり、壁には大型の象牙に彫刻を施した十字架磔刑の基督の像が掛けてある。右端前方には、ゆつたりと二人は掛けられる大きいソーファ、その上の壁の花筒に花。中央には巨大な白熊の毛皮が絨緞がはりに敷いてある。

すべてこれらの室には、まだすつきり近代化しきれないロシアの若いヂレッタント貴族の趣味と富の濫費が反映しなければならない。しかも、當夜の場合、若い婦人を招待するといふ約束のもとに整頓されてゐるので、すべてが柔かな色調に包まれてゐることが必要とされる。床壁の色は、登場する人物の微細な行動をも、敏感な反射作用をもつて浮立たせる。

時は十二時近く、庭内の犬がしきりに吠えてゐる。

犬の聲一としきり。

カーテン擧がると、ユースポフ公、ドミトリ太公、プリシケウイッチ、スウホーテン中尉、ドクトルの五人が、中央食堂にめいめいのポーズにて動き居るのが發見される。

ユースポフ公（他の四人から離れて、神經質に室内を歩き廻はつてゐたが）畜生ッ、今夜に限つて、うるさい奴だな！（右室の窓へ行きカーテンを細目にあける）プリシケウイッチ（食堂の方へ向き）何か犬と暗殺のことについてホーレスが云つてないかね？（白い微笑をもつて私かにピストルを眺める）

プリシケウイッチ（あはてゝポッケットの革表紙の本を取出す）うむ――と、犬のことは書いてありませんが、これはどうです？『もし探がし出さんとするものにして犯罪なりせば、汝と、我とに、神々が幾年の歳月を與ふるかを問ふ勿れ！』――つまり、根氣ですな。（ユースポフ食堂へ戻る）

ドミトリ太公　君が猶太人を虐殺した、あの根氣か――？

プリシケウイッチ（ドミトリへ）閣下、それは非道い。赤十字列車を創案した、あの根氣と云つて下さい。

ユースポフ公　それにデウマで怪物を彈劾した、あの根氣もね。……

ともかく、僕等は、すつかり君のために今度はかつがれたやうなものさ。

プリシケウイッチ　これは非道い。閣下こそ私のやうな頑固爺をそゝのかして、死に花を咲かせようとしてゐなさるんでせう。しかし、問題がこゝまで進展して來た以上は、もう私達五人は前へ行くよりほかはないんです。ああ、いやな役目だ！　私は、手づから人間を殺ろすなどといふことは今までに考へたことさへなかつた。二萬人の猶太人が銃殺されたとしても、それは私の手を直接下した事件ではない、しかも、我がスラヴ民族の血を淨めるために行はれた事だ！　今夜といふ今夜は、いよいよ怪物の血で私の手を汚めなければならないのだ……私に勇氣があるか？　この手の顫へはどうだ？（ポッケットから護謨製の棒を取り出す）

スウホーテン中尉　しかし、貴方のあの演説だけは實に素晴らしいものだつた。

ドミトリ太公　さうさう、生れてあんな雄辯は聽いたことがない。あれは、彈劾演説のお手本だよ。

プリシケウイッチ　なに、時と場合といふものですよ。必要にせまられれば、驢馬だつて雄辯になるものです。ホーレスが云つてゐますが……（ポッケットから再びホーレスを取り出す）

ユースポフ公　冗談ぢあない、そのホーレスはもう澤山だ。諸君、もう一度役割を復習つて見ようぢあないか。えーと、何だ、一向に手につかんな。僕は、今夜はよほどどうかしてゐる。ぢあ、先づお茶でも一杯飲まうか、さあ、みんな掛けたまへ。ドクトル、君はいちばん今夜重大な役目を勤めるんだから、落ち着いて、何か一と口食べたらどうだ。（サモワールから湯を汲み取り、コップへ移しながら各自の前へ置く）菓子はどうだね？（各自の前へ皿を配り、菓子を勸める）

ドクトル　私にはこの菓子を食ふだけの惡魔的な勇氣——無神經があればいいと思ひます。まだ仕事に取りかからぬ前から、私の神經は、もうこのクリームの中へ恐ろしい毒藥が這入つてゐるような氣がするんです。その實、藥はちあんとこの通りポッケットに藏ひこんであるんですがね。おや、在つたかしら？——變だぞ、ああ、在つた、在つた！……實際、こんな事をしてゐると、人間は半日で氣違ひになつてしまひますよ！（ポッケットの手巾を出して額の汗を拭ふ）

スウホーテン中尉　その靑酸加里ツてい奴はどんな功目があるもんかね？

ドクトル（ポッケットを叩きながら）一グラムで十人は立ちどころに殺ろせますな！

ドミトリ太公　一グラムで！

間。

プリシケウイッチ　惡い力は強いものだな！　私は極端に惡い人間や、恐ろしい武器や、危険な藥物や、淫蕩な婦人などに出遇はすごとに、いつもその中心へ引き込まれてしまふやうな氣がするんです。ぐるぐると渦を巻いてゐるその中心に、何かしら強い力があつて、安定と平和を望む私といふものの常識を、うむを云はせずずるずると吸ひ込んでしまふやうな——高い建物の天井から下を見るでせう、あの時私達がついふらふらと落ちたくなるその氣持ですよ！

ドクトル　大部分は視覺の關係ですな。でも、毒藥だけはちがひます。

スウホーテン中尉　視覺の關係で、高い所から柔かい、、、へ落ちるのは、ドミトリ、君の得意な藝當ぢやなかつたか！

ユースポフ公　たゞその場合、ドミトリは、それを『惡』だと意識して行はないだけの話さ。（努めて笑ふ）

プリシケウイッチ（時計を取り出し見る）それはさうと、もうそろそろ取りかゝりませう。——

一同愕然として顔を見合はし、非常に疲勞した人間のやうに椅子を離れる。プリシケウイッチ、いちばんしつかりした物腰で室内を歩き廻はる。

プリシケウイッチ　スウホーテン中尉、君の掛けた椅子は少し横向きにして置かうぢあないか。から、若い婦人がするりと腰を滑べらして、急いで二階へ駈け上がつたといふ風にね。それから、公爵、閣下のテーブルの前はもう少し散らかして置きませう。それに、私の食ひかけの菓子を、そこへ置きませうか。ドクトル、君はすつかり茶を飲んでしまつたね？　コップを半分ぐらゐ充たして置かうぢあないか？　ナプキンなどもちよつと皺を寄せて置く必要があるな。さう荒くなく、ほんの柔かい所へ觸れたといふ程度にね。

ユースポフ公　この老爺、仲々芝居が旨いね。まつたく僕は感心してるよ。ドミトリ、君は階段へ行つて、例のレコードを掛けてくれんか？

ドミトリ太公　よし。——何だつけな、あれは？

スウホーテン中尉　それ、例の賑やかなアメリカのバンドがあつたらう？

ドミトリ太公食堂を出て階段の上の棕梠の鉢の際へ行く。その間、階下の四人は、それ〴〵無言で食卓の周囲に、四五人の來客があつ

て、軽い晩餐の後食堂を去つたやうな具合に見せようとして立ち働く。レコード廻轉し始む。悲壯な、弛みを帶びたハートの響。

ユースポフ公　やあ、あれはいけない。(押扉から階段へ呼びかける)ドミトリ、そんな陰氣なのは止せよ。

ドミトリ太公　でも、ラクマニノフの「死の島」といふから、今夜の儀式の前觸れにはもつて來いだと思つてさ！

ユースポフ公　アメリカ物の、スウサの軍樂隊のマーチがあつたらう、あのやかましい、いやにがあがあ云ふ奴さ。あれなら大丈夫いろいろなお客が二階で饒舌つてゐるように聞えるよ。(再び食堂に取つて返へす)

スウサのバンド鳴り出す。

プリシケウイッチ　そこで、私が怪物だと假定しまして、から這入つて來ます。(扉よりラスプーチンの入り來たる姿を模倣する)すると、閣下が、さつそく椅子を勸められる。さあ、やつて見ませう。――別館は何處にゐるかの、フェリックス、早く別館に逐はしてくれ！　これは、怪物の下手な模倣ですよ。

ユースポフ公(笑つて)すつかり、グレゴリーの奴になりきつてゐるぢあないか？――それで、僕は、まあまあ、さう急がずに一杯茶でも飲まうぢあないか、手のつかない菓子もあるんだ、寒かつたね、何ら たら向ふの部屋で温まりながらマデイラでも飲むとしようか、と、から云ふんだつたね？

プリシケウイッチ　飲むとしようかは拙いですな、やはり、この菓子皿を持つてずつと奥へお這入りになるんですな。――奴を先に立たして。何と云つても、菓子は手をつけるかどうか解りませんからね酒ですよ、酒を飲ませないと駄目です！　ね、おい、ドクトル――酒の方が仕事が早いだらう？

ドクトル(手袋を嵌めながら)そりあ、効目は酒の方が確かですね。

(ユースポフ公とプリシケウイッチ別室へ這入る)

ドミトリ太公(急ぎ下り來り)でも、君は、ラスプーチンへやる菓子と酒を自分で食つたり飲んだりしちあ大變だよ！　何かから目印のやうなものは出來ないかな？

プリシケウイッチ(別室へ)大丈夫ですよ、ユースポフ公爵は頭腦が良いし、それに、意志の力が強いんです！

ドクトル・ラザヴアルト懷中より藥壜を取り出し、大きい桃色の菓子の半分を取り除け、その上に件の藥劑を塗る。ドミトリと中尉息を凝らして眺め居る。

ドクトル　駄目ぢあいけませんよ！　さあ、この方はこれで良し！次ぎにはコップだ！(別室へ這入る)

別室の二人、不意にドクトルの出現したのに驚く。

プリシケウイッチ　君だつたか！　這入る時は、ちよつと斷つてくれ。

ユースポフ公　少し今夜はみんな昂奮し過ぎてゐるやうだな。

ドクトル　寄らないで下さい。私も手袋を嵌めないとうつかり安心していられませんからね。(卓上のコップを取り、その中に藥劑を振り込む) いいですか、公爵、この櫻ブランデーの前にあるのがそれですよ。ちよつとほかのコップから離して置きませう。もうこれ以上順番を狂はしちあいけませんよ。お兩人共だいたい話が解つたら出て下さい。

食堂の二人は、ポケットからピストルを取り出してしきりに頷き合つてゐる。

プリケシウイッチ(別室より歩み出でながら)それさうと、大丈夫やつて來るんでせうな？　もし、今夜の事が發覺したら、我々はどうしたつて生命はないんですから。

ユースポフ公(時計を取り出し)一昨日、はつきりと約束して來たんだ。彼奴のことだから、女がゐるとさへ云へばどんな毒の中へでも飛び込むんだよ。それに對手が、今まで何遍口說いても彼奴の手に乘らなかつたあの伯爵夫人だらう？

ドミトリ太公　すべて男の滋味へ這入るのはさういふ冷酷な美人のする業さ。

スウホーテン中尉　ドミトリは經驗によつて賢しさ。

ユースポフ公(別室に向つて)おい、ドクトル、行かう！　もう時間だ。(プリシケウイッチへ向ひ)君は、二階からドクトルの外套と帽子を持つて來てくれたまへ。序に運轉手用の眼鏡もね。(プリシケウイッチ二階へ去る)

ドミトリ太公　ゴーロコボヤまではかなりあるね。

ユースポフ公　なアに自動車ならすぐだよ。ただ、なるだけ番兵の奴らに出會はさんようにせんと困る。

ドクトル(別室の爐へ手套を投り込んだのち入り來る)裏門から出る分にあわかりませんよ。自動車はちやんとあすこへ置いてあるんですから。

プリシケウイッチ、二階から自動車運轉手用の帽子及び毛皮の外套、眼鏡などを持ち來る。ユースポフ公は、前房の帽子掛から外套と帽子を取つてかぶる。その間、切爐の手套焦げながらしきりに燻ぶる。

ユースポフ公　ぢや、行つて來る。君達は、打合はせた通り、あの盜聽機だけやつててくれ給へ。

一同無言で頷きながら、堅く握手する
犬の遠吠。

ユースポフ公　また吼えてゐる。動物の豫感かね？

プリシケウイッチ　閣下、しつかりと、どうぞ！

ユースポフ公　わかつた！（二人去る）

殘された三人、食堂のテーブルから遠退くやうにして椅子へ掛ける。暫らく沈默。遠くに自動車の疾驅する音。

スウホーテン中尉　臭いな。何か――爐で燃つてゐるらしい。

ドミトリ太公　何だらう！

プリシケウイッチ（覗きながら）あッ、烟が――畜生のお蔭げで、手袋が燒けきれないと見える。

スウホーテン中尉（續いて驅け込み）窓を開けよう！

ドミトリ太公　大變だ、窒息するかもしれない。おや、蓄音機が止まつた――僕はこつちへ行くから、君達兩人にストーヴは頼んだよ。

兩人室の窓を開け煙を追ひ出す、ドミトリ太公レコードを仕掛け直す。

スウホーテン中尉　寒い晩だな！

プリシケウイッチ　どうです、この琺瑯質のやうな氷は！　萬物が死に凍えて小さく竦いてゐる物音は！　うう、寒む！

スウホーテン中尉　もういい加減にして窓を閉めようぢあないか。（兩人窓を閉づ）今頃は冬宮の前へ通りかかつてゐるかな？――怪物は確かに來るかしら？　あの男の神通力をもつて、何だかから僕達の計畫をすつかり見拔いてゐるやうな氣がしてならない！（兩人共食堂に入り、ドミトリ太公と落ち合ふ。三人共元の場所へ腰掛ける。暫く無言。各自の瞑想から頭を上げた拍子に、三人の眼と眼とが合ふ）

プリシケウイッチ　どんな狡奸な邪智でも、ここまでは眼が届かんでせう？――

スウホーテン中尉　俺は何だかこの部屋にラスプーチンが先刻から來てゐて、すつかり俺達の話すこと、打ち合はしたことを知つてゐるやうな氣がするよ。

ドミトリ太公　何しろ奴は、フェオドロブナの所へ、あんな遠くのシベリアから、ツアレウイッチの一命は大丈夫だといふ電報を打つて來たほどだからな。

スウホーテン中尉　ああ、俺はたまらん！　吐きたくなつた！

プリシケウイッチ　いやな音樂だな。――あの馬鹿騒ぎは、「ファウスト」の惡魔が俺達の計畫を嘲笑つてゐるやうに聞えるね。ああ、僕といふ呪はしい、傍若無人な、たはけた、音樂にならぬ音樂だ！

ドミトリ太公　アメリカ人といふものは、ああいふ音樂が好きらしいな。弗を澤山罐へ入れて二階から叩き落すやうな音ぢあないか。

スウホーテン中尉（時計を出してみる）まだかかな？——煙草が飲みたい。

プリシケウイッチ　駄目ですよ、今夜は貴婦人だけの集りで、煙草つけのないことになつてるんだからね。

ドミトリ太公（シガレットを取り出し）かういふ時人間に勇氣を附けるのは煙草だけだ。酒は禁物だ。——と云つて、一杯強いところをごくりとやつてもわるくはないがね。

プリシケウイッチ　滅相もない。次ぎの部屋へはもう誰も這入らんことにしませう。私にも、ここに葉卷があるんだが……ええツみんなで一本づゝやりませうか？

ドミトリ太公　婦人が煙草を吸はぬといふ理屈はないからね。

スウホーテン中尉　さうだ、物事はあまり注意深く計畫してもかへつて對手にその注意深さのために悟られるといふこともあるもんだ。

プリシケウイッチ　私が、ラスプーチンなら、ここへ這入る前に、この菓子の眞ん中に青酸加里が這入つてゐるのをちあんと見抜くがな！

間。

三人同時に煙草を吸ひ始める。

ドミトリ太公　いやに陰氣になつたな。——あッ、今の物音は？

スウホーテン中尉　何でもない氷だよ。

プリシケウイッチ　氷ですよ。

ドミトリ太公　氷かね？——氷だ、確かに氷にちがひない。僕は、誰かが隣りの部屋のコップをかち合はしてゐるのかしらと思つたよ。氷だつた！

プリシケウイッチ　ああ、あの極道な蓄音機奴が止んでくれた。

ドミトリ太公　止んだか？——ぢあ、また掛け直さなけりあならない。

スウホーテン中尉　僕がやらう、——

プリシケウイッチ　中尉、ちよつと待つて下さい、後生だから、ほんの一分間だけあの地獄の空ら騒ぎを止めて下さい！　この上續けられたら私はどうなるか解りあしない。ああさうだ、ホーレスを、賢明なホーレスをどうして忘れるやうになつたらう？（再びホーレスをポッケットから取り出す。しかし、取り出したのは本ではなくてピストルであつた。併し當人はそれに氣づかない）

ドミトリ太公　それが最新版のホーレスかね？

プリシケウイッチ（氣づいて）ピストル、どうもこんなに昂奮してゐ

ようとは思はなかつた。

スウホーテン中尉　それも出して置くんだね、いづれ間もなく役に立つから……

ドミトリ太公　さあ、みんな二階へ行かう。こんな桃色の菓子を眺めてゐると、僕はこれから凡ゆる桃色なものに對して恐怖を感ずることになるだらう。

プリシケウイッチ　桃色——さうです、桃色ほど恐ろしい色はないですね。これは、赤が死にかかつてゐる顔の色です。

スウホーテン中尉　止せ、止せ、もう澤山だ！　そんなことを云つてると、お互ひに手を伸ばしてしまひにはこの菓子を食はにあならぬようになるぞ！　二階へ行かう。

ドミトリ太公（立ち上がり）では、プリシケウイッチ、主として仕事は自分の部屋でやるんだね？

プリシケウイッチ（同じく立ち上がり）段取りはさういふことになつてゐます。しかし事情によつては臨機應變の處置を取らなきあならぬことは御承知の通りです。

スウホーテン中尉（何かを指ささんとする刹那慌てて食堂のコップを一つ取り落す。三人ぎよつとして顔を見合はす）しまつた！　（コツプの破片をポッケットへ拾ひ入れる）

ドミトリ太公　二階から聞えるかしら？　プリシケウイッチ、君、濟まんが、蓄音機を掛けるから、君は階下にゐて、何かものを云つてくれたまへ。何でもいい、あの怪物の眞似でもいいや——君は仲々上手だつたぞ。

中尉と太公階段を上る。蓄音機再び鳴り出す。プリシケウイッチ恐は恐は別室を覗きこむ、五色のランプの下に立つ。

プリシケウイッチ（ラスプーチンを眞似る）おめえらは、女で俺を釣つて置いて、よくもよくもこの俺に毒を飲ませやがつたな！　俺こそは、ロマノフ家の杖とも柱とも頼む、ラスプーチンの體を借りた神樣ぢや！　百萬の謀反人が毒を盛らうと——神樣には雨垂れほどにも効きはせんのぢや！　は、は、は、はあ……馬鹿め！

ドミトリ太公　いかん、いかん！　そんなのは駄目だよ。もつと快活にやつてくれ！

プリシケウイッチ　少し度を過ぎますかね？　ではかういふのはどうです？——天に在します神の御名によつてスツマアとプロトポポフの兩名を、我が親しきフエオドロブナよ、國務大臣に任命せしめたまへ！　彼等はロマノフ家の榮光のために、神によつて指命された二人の天使である！

スウホーテン中尉（階段の上から）旨いぞ。

プリシケウイッチ（續けて）……次ぎに、大元帥のニコラス太公が、神の御名によつて戰線を去りますのぢや。

ドミトリ太公　もうよい、澤山だ。二階へ上がつて來たまへ。

プリシケウイッチ　ああ、いやな部屋だな！　俺は、二度とこの部屋へ下りて來たくない！（恐る恐る周圍を見廻はしながら二階へ去る）

舞台暫く空虚。唯獨り蓄音機のみ空虚な騒音を放ち居る。時折、樅栂の葉が動いて、人間の手が機械を廻はし居る様を見せる。

遠くに自動車の響き。

犬の聲。

プリシケウイッチ　來た！　來ました！

スウホーテン中尉　隠れよう！（三人二階へ消える）

左端の扉急に開いて、深々と毛皮の外套を着た公爵の姿現はる。續いて、ラスプーチン、毛皮の外套を着て、稍前踞みになつて入り來る。自動車運轉手に扮装したドクトル・ラザヴアルトが最後に這入る。

暫らく無言で、三人は各自の外套を取り、帽子掛けにかける。

ラスプーチン　ほほう、大變た催しだつたね？――よく部屋もほてつてゐるわい！

ユースポフ公　叱ツ、静かに！　御婦人方は二階だから、あまり大きた聲をすると覺られますよ。（ラスプーチンと公爵のみ食堂に入る。ドクトルは、二人の去つた後忍び足にて二階へ上がらうとし、思ひ直して玄關の扉を開き、再び物音を立てながら閉め切る。それが終ると、外套帽子眼鏡などを携へて、こつそり二階へ消える）

ユースポフ公（必要以上に緊張した聲で）さあ、グレゴリー・ラスプーチン――叔父よ、まあ、お茶でも召し上がつて下さい！

（食堂の椅子の一つを指さす）

ラスプーチン　え？――フエリックス、今夜はお前さん少し顔が昂つてゐるようだの？　ではまた、細君のイレナにでも非道く險突くを食つたね？――あまり發展しない方がいいよ。儂とちがつてな、ほう、ほう、ほ……。

ユースポフ公　向うへ行きませう。どうも食堂は、散らかつてこの通りです。この菓子は――まだ手がついてゐない、これで、火に溫まりながらマデイラでも飲みませう。（菓子皿を持ち二枚の小皿及び銀具などを盆に載せて奥の部屋へ這入らうとする。ラスプーチンしきりに顎髯を扱きながら不審さうに食堂内を見廻はし、二階の蓄音機の音に耳を傾く。やがてにつこりして、片手をさし伸べながら公爵の後に續く）

ラスプーチン　あれだよ、あの音樂はいゝ！　何でも、悪いものはいゝ

ものを神様がお許しになるために拵へられたものだ！　女だつてさうだからのう——（ソーフアに腰を落ちつける）世の中に美しい女が罪を犯さんで、ぬけぬけと處女の白い肌を自分だけで眺めてゐたら、神様の尊い徳も、宏大な愛も人間界には示されぬのぢやよ。罪は浄められるために作り、浄めは罪があるからこそ光を放つのぢや！　女よ、犯せるまでは罪は犯せ！　犯せぬ時は、お前達の萎びた臉から神様が去りたまふたのぢやよ！　うむは、は、はあ……これが僕の教義でな！

ユースポフ公　毎度痛快なお話ですな、マデイラにしますか、それとも、普通の葡萄にしようか？——さあ、菓子は切りました、どうぞ！

ラスプーチン　いや、酒は欲しうない、旨さうな菓子だな。どれ、どれ。——（皿の菓子を取り、フオークを取り落しながら、手摑みにて菓子を取り喰ふ）少し苦がいな、この菓子は大丈夫かい？

プリシケウイツチ二階から中腰になつて階下に聽耳を立てゝゐる。

ユースポフ公　苦がい！　そんな筈はないですよ。僕が先刻食べた時には、少しアルモンズが舌に觸つたぐらゐなもんでしたが。それは、その——舌の加減ですよ。何しろ寒い所から、急にこの温い部屋へ這入ると、ちよつとした神經の具合でそんなことを感じるのかもしれません。酒を拔きませう？　やはり、酒でないと駄目です。

ラスプーチン　いや、酒は飲みたうない。どれ、どれ、もう一つその菓子を食つて見ようか？　僕の舌かな——ここに、誰か貴婦人がゐると、このクリームの附いた僕の指を、可愛いカナリアのやうな舌先でぺろぺろ舐めさしてやるんぢやがな！　フエリツクス、お前ぢあどうも、その方はかりは駄目だて（クリームの附いた指先をしやぶる）どうも、やはり苦がい！　それはさうと、此間中からお前が仲を取持つと云つてゐた女性はどうしたかのう？

ユースポフ公　きつと他の婦人達がゐるもので場を外せないで困つてゐるのでせう。——ちよつと二階へ行つて見て來ませう。

ラスプーチン　早うさうしてくれ。何せ夜の夜中にからうやつて教へを授けに來るんぢやから、僕の仕事も仲々樂ぢやない——とさうこつそり囁いて見ろよ。

ユースポフ公　叔父の命令に従ふことを拒んだ女ですから、仲々ちよつとやそつとの話ぢやないんで、僕もこれまでにこの事件を運んだのはかなりの骨だつたのですよ。

ラスプーチン　御苦勞、御苦勞！　あ、少し胸が苦しくなつて來た！　どうしたんだらう？　むやみに唾が出居るわい！

ユースポフ公（慌てて二階へ上がる。階段の中頃に待つてゐたプリシケウイツチと出逢ひ、手眞似にて毒を嚥み、唾液の流れ出づる樣を

示す。後者は彼にピストルの有無を訊ねる。中尉及びドミトリ太公ひそかに姿を現はして様子を訊く。ユースポフ公所持せるピストルを彼等に示す。此間、階下に於てはラスプーチンしきりに胸を撫でながら、件の菓子を手に取り調べ居る。階上の四人ユースポフ公を押すやうにして再び階下へ戻らせる）

ユースポフ公　今直ぐ見えませう。——どうしたんです？　氣分でも惡いんですか？

ラスプーチン　どうもこの菓子が變だよ。お前何か細工をしたんぢやないかの？

ユースポフ公（顫へを怺へながら）じよ、冗談でせう。おかしいな、ぢあ、氣分を直すためにこのブランデーを一杯飲みなさい！（直ちにコルク抜きにてブランデーを開ける。コップへ注ぐ。無言で自分も一つのコップへ注ぎながら、それと離れたコップへラスプーチンの分を注ぐ。硬い身振りで杯を薦める）

ラスプーチン　ブランか？——ブランはあまり好かんのでな。まあ、氣付けだ、せつかくだから一杯やらう！（飲む）

ユースポフ公　では、マデイラを抜きませう。

ラスプーチン　マデイラか？　その方がよつぽど口に合ふわい。考へて見ると、儂もこれで、ずい分と贅澤になつたもんぢや。（ユースポフ公の注いで出した酒を一と口に飲む）

ユースポフ公　どうです、お口に合ひますか？　年代の點だけは保證しますがね。——ラスプーチンの様子を熟と見定める。對手は一向に薬の反應が無さそうにけろりとしてゐる。激烈な驚きの表情。この時蓄音機のマーチ礑と止む。ユースポフ公急に焦ら立つた面持ちで食堂の方へ駈け出ようとする。

ユースポフ公　遅いな、何をしてゐるんだらう？　もう一度見て來ませう。（帷帳の一襞を押しながら身を包み隠すやうにして、一發のピストルを放つ。）

ラスプーチン、彈丸を食ひながら、よろよろと灰色の氈毯の下まで立ち上がり、何かを摑まうとする風に宙に手を擴げ、怪しげな瞳を張り上げて斃れる。白熊の皮の上にしばらく悶絶してゐる。

ユースポフ公　諸君、撃つた。——仕止めた！　怪物は床の上にゐる！

階上の四人どやどやと下りて來る。ユースポフ公手にしたピストルを靜かにポケットへ納め、熊の皮の上にのたうち廻つてゐるラスプーチンを指さす。

プリシケウイッチ　いけない！　早く毛皮から退かせたけりあ！

ドクトル　出血したら大變だ！

スウホーテン中尉　くたばつたか？――脆い奴だな。これがスラヴ民族の内臓に食ひ入つた毒虫だつたんだな！（足蹴にする）

プリシケウイッチ　さあ、ドクトル、床の上へ置いて。それから、直ぐと着物を剝ぐんだ。恐ろしい奴だな！　こんな、平凡な、目茶だらけなムジイクが、ロシア中を掻き廻はさうとは思はれない！　どうだ、この怪物の醜い顔は！（二人してラスプーチンを床の上へ置く）

スウホーテン中尉　さつそく裸にしよう。（人達ラスプーチンの着衣を剝ぎ取る。下着一枚にしてあとは大きい布へぐるぐる卷にする）

ドクトル　みんな、ちよつと許して下さい。私はとてもこの昂奮狀態を續けることは出來ん。頭が痛い！　眼が廻はる！　體中の筋肉が咽喉のところで逆立ちして、私の内臓全部を吐き出させんと承知せんやうだ……ああ苦るしい！（矢庭に扉を排して戸外に走り去る）

ユースポフ公　僕は、何をしたのか、一向に解らん！　もし、時間といふものがばつたりと無くなつた場合に何かしたとならば、きつとこんな感じだらう。僕は、眞空の世界で、この怪物が最後に僕を睨めた、あの忌はしい動物のやうに蒼い、透き通つた、大きい眼を見たことだけを記憶してゐる。あの眼は、ロシアの國民全部を腐らした恐ろしい眼だつた！

プリシケウイッチ　公爵、まだまだ仕事は殘つてゐますよ。しかし、貴方は、偉大な仕事をして下さつた！　私は感謝します！　私は（感極はまつて泣き聲になる）ロシアの名によつて、スラヴ民族の名によつて、心から貴方に感謝します！（公爵の手に縋つて接吻する。）

スウホーテン中尉（ラスプーチンを丸太のやうに轉がしながら）ドミトリ、今度は私達の仕事だ。フエリックスの自動車を借りて、郊外までこの荷物を運び出すと、あとは氣取られぬやうに君の自動車で、君の邸宅まで走らうぢやないか。

ドミトリ太公　それにしても、何か重錘が無いと、此奴を沈めるわけには行かないよ。

ユースポフ公　それは疾うに運んで來てある。あの玄關の帽子掛けの曳出しに這入つてゐるよ。

プリシケウイッチ　待て、待て。その前に着物の始末だ。から血が附いてゐては――ドクトルの赤十字列車へ持ち込むより外には始末の方法がない。それから、此奴の外套、それは誰かが着て出るんだね。時間も迫つてるから、各自に手分けして、まづ着物の始末からしようぢやないか。

この時ドクトル扉から再び姿を現はす。

ドクトル　ああ、やつと氣分が靜つた。戸外の空氣を吸ふに限る。（一同に加はる）で、何か外へ行く役目なら僕も引き受けますよ。

プリシケウイッチ　では、ドミトリ太公と中尉と君との三人が、着物の始末をしてくれたまへ。死骸は私と公爵と二人で見張つてゐるから大丈夫だ。

三人　よし！（それぞれラスプーチンの着衣を抱へて去る）

ユースポフ公とプリシケウイッチ、最後の一瞥をラスプーチンの上に投げながら食堂へ去る。ユースポフ公しきりに頭痛を訴へて、食堂の椅子へ倒れかかる。プリシケウイッチ看護する。

犬の吠える聲。

ユースポフ公（突然眠りより覚めたる者の如く飛び上がり）犬、あの犬を殺ろさにあならん！　彼奴が、今夜といふ今夜は一と晩中俺の神經に咬みつきあがる！

この時、布にくるまれてゐたラスプーチンむくむくと起き上がり、暫くその邊を見廻はした後、布を曳擦りながら食堂の方へ歩み寄る。

ラスプーチン　フエリツクス、フエリツクス、フエリツクス――！

プリシケウイッチ　おお！……幽靈！

ユースポフ公、ピストルを取り上げながらがつくりと食卓に挫れる。プリシケウイッチ徒らに眼を瞠いて、ラスプーチンのよろめき歩む後姿を見戍つてゐる。ラスプーチン、髪を振り亂しながら、食堂を出て、玄關の鏡臺に己が顔を映し見る。次に、神の權威を呼び戻すやうな身振りで、天の一方を指しながら、ドアを開いて戸外に歩み出る。

プリシケウイッチあはてて別室を覗き込み、愕然としてピストルを取り出し、ラスプーチンのあとを追ふ。

ユースポフ公　犬だ、憎い犬だ！

戸外にピストルの音が三發響く。

つづいて、數人の人間の叫ぶ聲。ユースポフ公、憑かれた者のやうに戸外へ飛び出す。

室内暫時空虚。

プリシケウイッチ（衛兵AとBとにラスプーチンの死骸を運び来たさせ）ロマノフ家の名によつて、私達は、この稀代の悪漢を屠つたのぢや！　いいか、決して他言はせまいぞ！

衛兵A　我々の行ふことを當然貴方がたが行はれただけです！

プリシケウイッチ　それにしても、こんな業の強い奴は世の中に二人とはあるまい。毒を喰らつた上に、彈丸を一、二、三、四發も食つてゐて、まだ、この通りだ。――どうだ、蛇のやうにぴくぴくしてあがるぢやないか！

衛兵A　恐ろしい奴ですな！

ユースポフ公、蒼白な顔をして、ドアより入り来る。

プリシケウイッチ　どうしました？

ユースポフ公　犬を殺ろして來た。二疋とも！

警官、突然ドアを開いて入り來たる。プリシケウイッチ、狼狽してラスプーチンの死骸を掩ひ隱くす。

警官　何ですか？　大變に銃聲がするぢやありませんか？

ユースポフ公　いや、警官、外でもない、犬を殺ろしたまでですよ。近頃、私んとこの獵犬が二疋とも狂ひ出して、毎晩騷がしくて眠られアせんのだ。死骸は中庭に投つてあるから、あらためて見てくれ給へ。

警官　たしかに犬で——ありますな？

プリシケウイッチ　犬だ、犬だよ。

警官　ぢや、よろしい！（去る）

プリシケウイッチ——しかし、凄い犬だ！

衞兵A（Bへ向ひ）おい、イワノウイッチ、これが何を意味するか、お前に解るか？　お互ひにしつかりしなくちあならない。ロシアはこれからだ！

プリシケウイッチ　さうだ、兵卒、ロマノフ家に再び正義の光が射し、西部戰線が破かれるんだ！　ロシアは起き直る、聯合軍は必らず勝つ！　このドイツ人の陰謀は、美事この通り俺達の手で仕止めたんだ！

衞兵B（默々として頭を左右に振りながら）……俺には、貴方がた立派な政治家のおつしやることは解らない、しかし、ロシアの軍隊は、三人の頭に鐵砲が一挺しかないことを知つてゐる。他の二人は、鐵砲が持てないところから、根棒を持つてゐるんだ！　ロシアは、根から腐り切つてゐる！　一人のラスプーチンの次ぎに、もつと恐ろしいラスプーチンが殺ろされねばならないかも知れない！

衞兵B階段の上へ行きながら、兩肩をゆすぶつて腰掛ける。

プリシケウイッチ——お前、何だ？　社會主義者か？（衞兵Aに向ひ）此奴はいつもこんなことを云ふ男か？

衞兵A　さあ、社會主義者かどうか知りませんが、私等の間には、近頃かういふものの云ひ振りがよく流行りますのでな。

衞兵B　社會主義者といふ名で俺を縛りますか？——ロシア人も半分以上は死刑にしないと駄目でせうよ！（嘲笑）

ユースポフ公とプリシケウイッチの二人暗然として互ひに顏を見交はす。

この時、銃彈を四發食つた筈のラスプーチン苦しげな呻き聲を上げて身動きす。

プリシケウイッチ　兵卒達、先づ、此奴から片付けよう！　縛れ！

緊く

編輯だより

◇兄弟の如く提携して東洋文明の爲に努力すべく運命づけられておる我國と支那——南方軍——と干戈の間に相見ゆることになつたのは遺憾千萬である。我々は一日も早く斷交の囘復することを祈るものである。

◇國家の大事には「興奮」が一番の禁物「寛仁大度」が大國第一の資格。政府も民衆も大國らしく大國民らしく動くべし。我慢のできるところには我慢が必要である。經濟的に、精神的に大に伸びやうとするものはそれに並行する隱忍が必要である。神人共に我慢ができぬときは始めて全滅を賭して起ち上るべきである。そのときはその立つに到つた所以を中外に徹底せしめ、一面には死を賭して戰列に加はるものへ喜んで征途につける安心と信念をつけてやるべきである。

◇大佛次郎氏の「幡隨院長兵衞」は筆者の都合で本號に登載することが出來なかつた。どうかあしからず御諒恕を乞ふ。

◇武者小路氏の「日蓮」は久方ぶりの力作である。

◇「日本文學全集」の五月配本は全知識階級から期待された「正岡子規集」で異常の好評があつたのは嬉しい。六月配本は「歷史小說集」「家庭小說集」で森林鬪の大作「由井正雪」をはじめ、浪六の「元祿女」春雨の「無花果」弦齋の「小松島」が選入る。七月配本は「志賀直哉集」である。氏の全集といつて差支なし。志賀氏は「現在までの作品中でこれ以外に後に殘すべき作品は一つもない」と云はれたのに見るもいかに本卷が貴重なる一卷であるかを知るべきである。

◇マルクス・エンゲルス全集に對しては本社は後世に定本となるやうな立派な譯にしたい。別頁にある內容廣告や內容見本にもれた文獻も多いのであるが、それは來月號の本誌若くは新聞廣告にて委細補遺したいと思ふ。何れの時にも本社は出版良心は失はぬつもりである。

◇マーシャル經濟學原理、上田敏全集もどうか一讀ありたし。大塚氏の名譯はたれだつて讃めちぎる。未だに非難の聲一つあるを聞かない。

◇期待された古泉千樫氏の歌集「屋上の土」が出た。歌壇に一大注視をあつめる隨一の歌集だと同時に倫理學界の少壯權威であつた錦田義富氏の「實踐哲學の研究」が出版された。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	五拾錢	參錢
半ヶ年	參圓	郵稅不要
壹ヶ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

昭和三年五月十八日印刷納本
昭和三年六月一日發行

（五拾錢）（郵稅貳錢）

編輯兼發行人　東京市芝區愛宕下町四ノ六　山本三生
印刷人　東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下町四ノ六　改造社
振替東京八四〇二
電話芝(43)一二二一　一二二二　一二二三　一二二四

『マルクス＝エンゲルス全集』總内容

第一卷――一八四一――一八四四年

第二巻——一八四四—一八四七年

第三巻——一八四七—一八五〇年

第四卷――一八五〇―一八五三年

第五卷――一八五三―一八五四年

第一九卷――一八九〇年以後。

遺稿拾遺

其他短篇

「ライン新聞」に掲載されたもので、ロシヤ版全集に新に加へたもの、その他を收める方針である。

附錄

第二〇巻――

書翰集

唯物史觀に關する書翰
經濟學に關する書翰
社會主義及び勞働運動に關する書翰
ゾルゲへの書翰
フライリゲラートへの書翰
ウェラ・ザスリッチへの書翰
クーゲルマンへの書翰
其他

大塚金之助
山村喬
石川準十郎
大塚金之助
福田徳三

――終――

附言。『神聖家族』は著作順よりすれば、『イギリスに於ける勞働階級の狀態』の次ぎに編入すべきであるが、編輯の都合上、如上の如く第一卷に編入した。

●第一回配本は第一卷と決定

第一回配本は第一卷と決定し、申込順に依つて五月下旬頃より配本致します。第一卷はマルクス、エンゲルスの初期の著作に當ります。彼等の初期の著作は、近來頓に學界の興味を牽いてゐますが、今回の配本によつて、彼等の名によつて知られてゐる其の大思想が、如何なる基礎の上に据えられてゐるか、之を推知することは、一般讀者に於ても、寔に興味があると共に、また實に必要事であります。

編者より一言

本全集は、原著者が自ら書いたそれ〴〵の國語に依る原著（例へば『資本論』はドイツ語、『哲學の貧困』はフランス語、『革命及び反革命』は英語）より譯出した。

それから、『東方問題』その他は、リアザノフ版に據り、原文はエレアノール編『イースタンクェツシオン』に據りました。エンゲルス『自由貿易か保護貿易か』は、『自由貿易論』アメリカ版の序文として書いたものであるから、之と同じ所に收めた。それから生前未發表のもので、死後遺稿として發表せられたものは、執筆年代が明かでも、遺稿の部に一括しました。

マルクス＝エンゲルスの全著作は何時、如何にして書かれたか？

學位論文

學生時代に於けるマルクスは、父の指圖に從つて法律の研究に專念したが、その結果は法理學に入り、更に一轉して哲學の熱心なる學徒となるに到つた。而して當時彼の胸裡には、將來大學教授となつて講壇から民衆を指導し、自由の空氣を世に行はしめんとするに在つたが、その爲めには當然學位を得ることが必要であつた。『デモクリツトとエピクーアとの自然哲學の間の相違に就て』と云ふ論文は、即ちその爲めに書かれたものであるが、それに依つて彼は一八四一年、イエナ大學から哲學博士の稱號を得た。彼は此の論文を彼の妻の父、『親愛なる父にして友たるルドウッヒ・フオン、ウエストフアーレン』に獻げてゐるが、流石のマルクスもその頃は、未だブルジヨア的な周圍から全く脫け切つてゐなかつたと見える。

詩二篇

若い頃のマルクスは、詩作や劇作に耽り、一時文學を以て身を立てようとさへしたことがあつた。彼の傳記には、彼の幼年時代に最初の著述として三册の詩集が著されたことが見えてゐる。併し今は悉く散佚して、數少き遺篇のみが好事家の興味を惹いてゐるのみである。

ライン新聞

一八四〇年に即位したプロシヤ王フリードリッヒ・ウィルヘルム四世の反動政治は、マルクスをして大學教授たる希望を抛擲せしめた。當時彼は友人バウエルやステイルナアと共に日刊『ライン新聞』に寄稿してゐたが、後迎へられて其編輯者となり、一八四二年（齡二十四）には、同紙の主筆に擧げられた。『ライン新聞』時代のマルクスの思想は、立派な文章となつて世に現はれ、或時は詩となり、或時は評論となつた。だが何よりも彼の得意とする所は、時事問題を歴史的に觀て公平な批判を下すことであつた。彼は、その爲め經

濟學上の諸問題を研究する必要を痛感して、漸次此方面に熱中するに到つた。

獨佛年誌

一八四三年三月、『ライン新聞』が發行停止になつたが、マルクスは之に先ちて同紙を退き、エンニーと結婚し、次いで、夫妻相携へて、プロシヤ政府の壓迫を後にして、パリに去つた。此處で彼は一友と共に、ドイツから亡命して來てゐた革命家達の機關雜誌として、『獨佛年誌』の發行を企て、一八四四年（マルクス二十七歳）二月辛うじて第一號第二號を合册とした倍大號を出すに到つた。此號の彼の中心思想をなしてゐたものは、政治的急進主義であつたが、同時に宗教に關する問題も未だ可成り彼の頭を支配してゐた。『ヘーゲル法律哲學批判』は、プロレタリア階級の闘爭の哲學的根據を示したものであり、『ユダヤ人問題』は、政治上の解放と人間としての解放との關係を論じたものである。マルクス分身の友人にして、その事業の共作者たりしフリイドリヒ・エンゲルスと相知つたのは、實に『獨佛年誌』の寄稿家たりし因緣によるものである。

神聖家族

マルクスとエンゲルスの最初の共同勞作として、一八四五年『神聖家族』が出版された。舊き同志にして、ヘーゲル主義の自由精神の信奉者バウエル、其他に對する反駁で、「批判的批判の批判」といふ註が附されてゐる。

パリ・フォルウェルツ

パリに於ては『獨佛年誌』の外に日刊新聞『パリ・フォルウェルツ』がボェルンシュタイン等によつて發行されてゐたが、マルクスが寄稿するに及んでいたく左傾し、プロシア專制主義と似而非立憲主義とに對して完膚なき攻擊を加へること甚しきに到り、プロシヤ政府はギゾオ內閣に迫つて、ドイツ共產主義者の追放を要求したゝめ、遂に同紙はその發行を繼續する能はず、マルクス自身は、國外に追放せらるゝことゝなり、一八四五年三月、ベルギイに落ち延びた。

ドイッチエ・イデオロギイ

その年の春、マルクスとエンゲルスとは、ドイツ哲學の「イデオロギイ」に反對する見解を發表せんとして、『ドイッチエ・イデオロギイ』を共同執筆し、フォイエルバッハ、バウエル、スティルナアを批判し、更に從來のドイツの社會主義を批判し、之に對して新に唯物史觀と結び付いた共產主義を打建てんとした。

英國に於ける勞働階級の狀態

その頃から、マルクスとエンゲルスとは、共產主義實現の爲め、

自ら勞働運動の中に身を投ぜんとしたが、先づ其運動の目標たるべき原則を示すに必要な著述を爲した。一八四五年エンゲルスの書いた『英國に於ける勞働階級の狀態』は、右の必要に迫まられたもので、在來の經濟學は、ブルジョアジイの階級意識の表現に外ならぬことを教へると共に、社會の實狀、特に勞働者階級の狀態を知り、その研究を發展して、活氣あり實力あるプロレタリアの意識を廣く普及しなければならぬと說いた。本書はまた、マルクスとは別の經路によつて、唯物史觀の基礎となるべき事實に想到してゐたことを證明する著書としても有名である。

哲學の窮乏

マルクスは、最初のうちこそプルウドンやワイトリング等をプロレタリア出身の理論家として尊敬してゐたが、漸くその不徹底を悟り始め、プルウドンの著書『貧困の窮乏』が出るに及んで、その反駁として、一八四七年、經濟學上の處女作『哲學の窮乏』を佛文で書き、ブラッセルとパリで公表した。これによつて彼は、アダム・スミス以來各國に出でた新舊一切の經濟學者を一列に批判し、經濟學者と社會主義者及び共產主義者とを對照的關係に立たしめて、前者はブルジョアの學問的代表者であり、後者はプロレタリアの理論家であると斷言した。だが此書の公表によつて、プルウドンとの交情は永久に斷たれたのであつた。

共產黨宣言

一八四七年、エンゲルスは『共產主義同盟』の委託を受けて、問答體の『共產主義原則』を書いたが、更にマルクスとエンゲルスの兩人は『共產黨宣言』の起草を囑せられたので、協力の結果、翌一八四八年一月ドイツ文が完成され、翌月ロンドンに於て初めて世に現はれるに到つた。此の宣言こそ、實にプロレタリアートのバイブルとして、一切の社會主義文獻中の最も國際的な產物として喧傳されてゐるものである。實際、マルクスの教義の眞髓を斯程迄完全に要約しながら、ブルジョア社會に對して、これ程迄鋭いメスを下した文書は全く空前絕後といつてよいのである。

新ライン新聞

一八四八年二月、パリに二月革命が勃發してから、マルクスは『共產黨宣言』の中に理論的に說いたブルジョア革命に於て爲すべき共產主義者の義務を實行に移す爲めに粉骨碎身したが、五月には同志を糾合して『新ライン新聞』を起し、自ら其主筆となつた。同紙に執筆したマルクスの論文は大小十數篇に及んでゐるが、何れも唯物史觀に基いて、革命を歷史の過程上必然的に起るべきものと認め、過去の研究によつて現在の現象を說明し、又現在の觀察によつて未來を豫想すると共に、プロレタリアートの永久の利益を眼中に置いて

之を爲したのである。だが同紙は、プロシア政府によつて發行を停止され、翌年五月、フライリグラートの有名な詩を劈頭に掲げた赤刷の終刊號を出して廢刊してしまつた。

賃勞働と資本

『新ライン新聞』を發刊する前年、マルクスはブラッセルの勞働者教育協會で、勞働者相手に講義を試みたことがあつたが、一八四九年四月、右の講義案を『賃勞働と資本』と題し、別刷にして發表した。彼は之によつてブルジ、アジイとプロレタリアートとの間に明瞭な對立と階級的分裂とのあることを主張した。尚、先年リアザノフが、ベルリンの獨逸社會民主黨の記錄所で、偶然『賃勞働と資本』の講義の草案とも見做さるべきマルクスの遺稿を發見した。これはエンゲルスやカウツキーの眼にも觸れなかつたものである。

新ライン評論

『新ライン新聞』の廢刊後、益々經濟的窮乏と官憲の壓迫とに苦められたマルクスは、再び放浪の途に就くの外はなかつた。そして一八四九年八月の末、憐れなる我身一つを擁してロンドンに辿り就いた。だがその年の秋には、エンゲルスを迎へ、翌一八五〇年一月には、『新ライン新聞』の延長として、『新ライン評論』を出すことを得た。併し事志と違ひ、十一月迄に前後六號を出したのみで姿を潜めるの餘義なきに到つた。同紙にマルクスは『一八四八年より五〇年に到るフランスに於ける階級鬪爭』といふ時代史を掲載して、社會進化の法則を說明した。エンゲルスは、『ドイツ帝國憲法戰』『十時間法案』を書いて階級對立と鬪爭との事實を批判した。特に『ドイツ農民戰爭』は資本主義勃興以前の社會狀態を唯物史觀的立場から論じた最初のものとして注目に値するものである。

ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日

嚮に『フランスに於ける階級鬪爭』を書いて、二月革命及びその後のフランスの政情變化の歷史的解釋と反動勢力の勝利の次第を分析したマルクスは、更にその後の經過を書き、一八五一年秋には產業恐慌の來るべきことを豫想し、その時こそは新なるプロレタリアの革命の勃發が避け難いことを考へた結果、『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』を書いて、之をドイツで發行しようとしたが、之が發行を引受けてくれる書肆は一軒も見付からなかつた。そこで止むを得ずアメリカに於て友人ウェイデマイヤーが發行してゐた雜誌『革命』に寄稿し、翌一八五二年春、ニューヨークに於て單行本として發行せられた。

革命及び反革命

その頃のマルクスの窮狀は迚もお話にならなかつた。妻エンニーが結婚の際持ち來つた品物は、既に跡形もなく、專らエンゲルスの援助によつて一家は辛うじて饑を凌いでゐたのであつた。幸、一八五一年、彼は『ニューヨーク・トリビューン』に論文を書くことを得たが、それによつて得る所は一論文僅に五弗に過ぎなかつた。併し翌年にかけて、エンゲルスと共に、ドイツに於ける政治經濟問題とに關する連續論文を書いた。是等の諸論文は一八四八、九年のヨーロッパ大陸の歷史を研究する者にとつて、永久に盡きせぬ價値を有するものであつて、一八九六年に至つて一册の書物に纏められ、『革命及び反革命』又の名『一八四八年に於けるドイツ』と題せられた。

ケルン共產黨事件の闡明

一八五二年十月、ケルンに於て共產黨裁判事件があつたが、マルクスは之れに關して『ケルン共產黨事件の闡明』を書いた。併し之は即時押收せられたので、翌年更にボストンで再版を出した。

經濟學批判

ロンドンに亡命してからのマルクスは、實際運動に暫く遠ざかり、英國博物館の圖書室に通つて、諸般の學問の研究に沈潛した。殊に經濟學の研究は全く蘊奧に達して行つた。一八五九年に公にされた『經濟學批判』は、實に積年の努力の結晶であつた。而して後年の大著『資本論』の素地を爲すもので、マルクス最後の力作の端緒と見るべきものであつた。更に本書には、マルキシズムの大精神たる唯物史觀に關する『公式』乃至『要約』を收容する一節が後に加へられた爲めに特に重要視されてゐる。

政治論文

その頃のマルクスは、片手間の仕事又は生活の爲めの著述として數多き學問的研究を發表してゐる。露土戰爭に關する『東方問題』、クリミヤ戰爭に關する『クリム戰爭』、その他『パーマーストン內閣』、『汎スラブ主義』等は殊に有名である。之等の論文は後にリヤザノフの手によつて纏められ單行本の形で出版せられた。

フオクト氏

一八六〇年マルクスは、特有の巧妙な諷刺體で『フオクト氏』といふ一書を著した。これはパウルスキルへの民主々義者にして、當時ジュネーブに住まつてゐた唯物的自然科學者フオクトを辯駁して、フランスとプロシアとがイタリヤの利益を名とし、オーストリアを敵として行つた解放戰爭の時の僞善的行爲を糾彈したものである。

『ボーとライン』『サボア、ニースとライン』

一八五七年頃、マルクスとエンゲルスとは、アメリカに於て企てられた百科全書の編纂に參加したことがあつたが、その中、軍事に關する章は專らエンゲルスが執筆したものであつた。一八五九年イタリヤ戰爭の後では、エンゲルスは更に『ポーとライン』『サボア、ニースとライン』といふ二冊の軍略に關する册子を書いて、いたく世間を驚かした。

第一インタナショナル創立宣言

一八六四年九月、勞働者最初の國際的聯盟たる『第一インタナショナル』が出現したが、十一月の臨時大會に於て、マルクスの起草した英文の『創立宣言』は滿場一致で可決せられた。『共産黨宣言』の結語『萬國の勞働者團結せよ』といふ語と同じ語を以て結ばれた此宣言も、亦永くヨーロッパの勞働者階級の解放運動の指針となつた。

價値價格及び利潤

マルクスは舊派の社會運動者ウエストン一派の暴論を反駁するため、一八六五年六月、『萬國勞働者協會』總會に於て『勞賃、價値及利潤』を講義した。此の講義案は、遺稿中より發見され、初稱は英文で書かれ、マルクスの娘と其夫によつて『價値價格及び利潤』と題して出版されたものである。曾て『新ライン新聞』に公刊された『賃勞働と資本』と並び稱せられてゐるものである。

フランスに於ける內亂

一八七一年三月に勃發した『パリ・コムミュン』の一揆は、七十日間勞働者によつて維持せられたが、遂に沒落した。之に關してマルクスは、久振りに熱心な調子を以てこの問題を批評し、一八七一年五月、インタナショナル本部の名によつて之を公表した『フランスに於ける內亂』が卽ちそれである。

資本論

マルクス畢生の大事業たる『資本論』が、長い長い生みの苦しみの後、卽ち其起稿を志してから十五年後の一八六七年、その第一卷がハムブルグの一書肆より出版せられるに到つた。然るに第二卷、第三卷は、彼の在生中には現はれず、歿後エンゲルスの手によつて世に公にされ、全三卷二千餘頁を以て、茲に稀有の大著述の完成を見るに到つた。それは一八九四年のことであつたが、マルクスがロンドンに亡命して、經濟學研究に思ひを潜めた一八五二年より通算すれば、實に四十二年の長年月に亘つてゐる。

然らばその『資本論』には何が書かれてあるか。之を一言にして盡すことは素より不可能であるが、云ひ得べくんば、資本家社會の運動方則の暴露であり、勞働階級の立場から書かれた經濟學の批評、及び資本主義の起源と、發達と、その崩壞との過程を說明した大勞

作と云ふべきであらう。

剩餘價値學說史

『資本論』の第四卷とも見るべき『剩餘價値學說史』三卷は、マルクスが『資本論』第二卷、第三卷の腹案醸成の當時、之と並進して考へついたことを書き留めて置いたものであつて、エンゲルスは資本論第二卷發表の當時、其第四卷として將來刊行する目的を以て一先づ保留して置くと云つて置きながら、志を果さずして世を去つたから、兩人の學說を祖述するカウツキーが之を整理して、一九〇四年、五年、一〇年に渉つて發表したものである。書中の力點は、經濟學の中心問題たる剩餘價値に關する詳細なる歷史的研究であり、在來の諸經濟學者の學說に對する攻擊の形式を具へたものであつて、謂はばマルクスの經濟學史として重要視せられてゐる文獻である。

ゴータ綱領批判

一八七三年の秋、マルクスは腦病を患ひ、一時重態に陷つたことがあつたが、翌年は主治醫の勸めに從つてドイツに湯治に出掛けた。そのまた翌年も同じ所に行つた。この年の五月のことである、ドイツ社會民主黨の歷史に有名なるコータ會議が開かれ、マルクス、エンゲルスの思想の流を汲むリイプクネヒト、ベーベルを中心とするアイゼナッハ派たる「ドイツ社會民主勞働黨」とラッサーレ派に屬する「全ドイツ勞働者組合」とが合同して、『ドイツ社會主義勞働黨』を作り、鵺的な所謂『ゴータ綱領』を採用した。之を以てマルクスは、獨逸社會主義勞働黨を墮落せしむるものとなし、假借する所なき態度を以てラッサーレ派の誤謬を指摘して書かれたものが有名なる『ドイツ勞働黨綱領傍註』俗に云ふ『ゴータ綱領批判』である。

住居問題

エンゲルスは、一八七〇年以來、ロンドンに移り住んでゐたが、七二年に初めて『フォルクス・シュタート』に連續物として『住居問題』を書き、後一册ものに纏めた。之れはプルウドン主義者ミュールベルガーを相手取つて、彼のプチ・ブルジョア的の態度を批難した論爭集である。當時の時事問題を論じたものではあるが、今日も尙生きた意味を持つてゐる。當時エンゲルスの書いたものは、全てが時事問題に關するものとか、論爭を目的とするものが多かつた。次の『反デューリング論』はその尤なるものである。

反デューリング論

此書はオイゲン・デューリングの所論に對する駁論として書かれたもので、詳くは『オイゲン・デューリング君の科學の變革』と云ふ標題になつてゐる。當時デューリングは、ベルリン大學の私講師であり、彼の研究は哲學、機械學、經濟學の廣汎なる領域に及び、哲學に於

ては獨自の現實哲學を築き、經濟學に於ては獨自の價値說を立て、社會主義に於ては所謂『共同社會的概念』を展開したおそるべき學究であつた。エンゲルスの批判が哲學、自然科學、經濟學、社會主義のあらゆる領域に跨つてゐるのもデューリングの所論の廣汎なるに基く。實にマルキシズムの方法論を徹底的に理解するに重要なる文獻である。

家族・私有財産及び國家の起源

一八八四年の夏、エンゲルスは有名な著書『家族・私有財産及び國家の起源』を公にした。モルガンの『古代社會』に關する劃時代的研究に基いて、著者自身とマルクスの研究を加へ、蒙昧・野蠻を經て文明に至るまでの人類生活の歷史を唯物史觀の立場から簡潔にまとめたものである。人類の原始生活に關する幾多の興味ある事實と家族、私有財産制及び國家組織の沿革と、それに對する鋭利なるマルクス主義的批判が隨所に見出される。マルクス學派が如何に男女關係について考へ、國家そのものについて考へてゐるかを知る上に、非常に興味あり且つ重要な述作である。

フオイエルバッハ論

マルクスの歿後、エンゲルスは遺された『資本論』第二卷、第三卷の編纂に最も忙しい月日を送つてゐたが、一八八八年には、彼は『フオイエルバッハ論』を公にした。そしてフオイエルバッハによつて最もよく代表せられた後期ヘーゲル哲學の唯物論を彼獨特の明快なる筆を以て論じ盡すと共に、マルクス及び彼自身によつて作り上げられた史的唯物論の立場を簡明に說明し、それと在來の唯物論との相違を明かにした。即ち此書こそ、プロレタリア鬪爭理論の研究に缺く可からざる辯證的唯物論を把握する上に必ず讀むべきものである。

自然辯證法

マルクス、エンゲルスの遺稿として、メーリング編の『一八四一年より一八五〇年に至る間に於けるマルクス、エンゲルスの文獻拾遺集』と、リアザノフ編の『一八五二年より一八六二年に至る間のマルクス、エンゲルス著述集』とは、最も有名である。前者は、四册より成り、一九〇二年の版であり、後者は一九一七年版で、二册出されてゐる。他にベーベルとボェルンシュタインの編した『書簡集』が前後四册ある。此の他にも小册子の遺稿とか、雜誌に發表された儘未だ單行本になつてゐないものが澤山にある。その中には今日容易に手にし難きものもある。最近、矢張りリアザノフが編纂して出版中の『マルクス＝エンゲルス、アルヒーフ』には未發表の貴重な文獻が續々公にされつゝあるが、エンゲルスの『自然辯證法』の如きもは茲に於て實に於て世を驚かしたものの一である。

全世界のマルクス＝エンゲルス文献に於ける本全集の地位

マルキシズム研究熱は世界的の現象

マルクス及びエンゲルスの著書で最初に邦譯せられたものは、恐らく「共産黨宣言」であらう。たしかそれは明治三十八年の事であるから、實に二十數年も昔の話である。然し彼等の著書が一般から本當に深い關心を以て迎へられるに至つたのは大戰以來の事と見るべきであらうが、勿論此の著しいマルキシズム研究熱は獨り日本に於てのみ然るのではなく、實に世界的現象である。

モスコーなる「マルクス、エンゲルス研究所」の調査によれば、大戰以來一九二五年七月までに西歐諸國に於て公刊せられた主なるマルキシズムに關する著書、論文、或はマルクス、エンゲルスの遺稿乃至

著書の翻譯は獨逸語ばかりでも千册以上

に近いといふことである。今日佛蘭西に於ても、兩人の著書が全集の形で續々佛譯せられつゝある事實や、凡て外來物に對して偏狹に近い頑固さを有つ英國に於てさへ、マルクスの初期の論文集、エンゲルスの農民戰爭論の如き從來は殆ど一部特志家の研究に限られつつあつた著述が續々英譯せられつゝある事實は、唯にマルクス等の母國語に於てのみならず、英語佛語を通しても彼等の著書が漸を逐うて益々その販路を廣めつゝある事を物語るものである。若しそれ革命後のロシアに於けるマルキシズム研究の進歩に至つては、同國の政治的變革及び其後の統治制度自體がその理論的根據をマルキシズムに置いて居るだけに確に驚くべきものがある。

「マルクス、エンゲルス研究所」は

マルキシズムの發生、發展、擴張を研究する爲めに出來得る限りの條件を備へんとして作り上げられたものであつて、宏壯な「古典美術館」を前に見る白い二階建の舊ドルゴルキー公邸を占領して居る此の研究所には、今二十四萬を超えた書類が世界の國々から蒐集せられ整頓せられて居るのであつて、カデート黨の組織者であつたと云はれる故公の代りに、「マルクス、エンゲルス論文集」の編纂者として有名なリヤザノフ氏が所長となつて居る。そして玄關番から所長に至るまで互に「タヴーリシチ」呼ばりをし乍ら、人種を超越してこのマルキシズムのメッカに立働いて居る。

リヤザノフ氏に據れば、マルクスの論文を集めて出版したのは一八五一年に

ベッカーの編輯した「論文集」を以て

嚆矢とする。後、一八七六、七年の頃、即ちゴ

ータ會議の直後マルクスとエンゲルスとの論文を蒐めて出版しようと云ふ計畫があつた。マルクスの死んだ時にも亦此の計畫が再燃し、更に一八八五年ヘルマン・シリユーターは彼等二人の小論文類を「社會民主々義文庫」に收めて發行しようとした。現に一八四九年のケルン裁判事件の時になしたマルクスの辯論や、エンゲルスの「住居問題」の別刷、マルクスの援助を得てエカリウスが書いたミル駁論の如きは此の叢書の一部分として現はれたものである。次いで一九〇二年に至りメーリングは兩人の初期の論文を集めて「拾遺集」三卷を出版し、又、一九一三年にはベーベル及ベルンシユタインの手によつて兩人の「書簡集」四卷が、又、一九一七年にはリヤザノフの手により「マルクス、エンゲルス論文集」二卷が公刊せられたことは人の知る所である。

我邦に於けるマルキシズム文獻

顧つて我國を見るに、この十年間に於けるマルクス、エンゲルスの著書の飜譯せられた數は決して少くない。大正八、九年社會運動勃興の頃、一時に三種の「資本論」邦譯の世に行はれんとしたことは今なほ吾人の記憶に新なるところ、かくも一つの洋書に三種以上の譯本の現はれた如き、見方によつては勞力の空費とも思はれる場合も少くなかつた。然しその中にはその後も改譯を重ねて多くの人々に讀まれたものがある。全集刊行の計畫の如きも既に早く大正九年にあつたが、僅に「資本論」「經濟學批判」「神聖家族」等を出したのみで前後十二册を以て中絶した。その後更に五年の歳月を重ね、社會狀態の進化と共にマルキシズムの研究は異常の發達を遂げ、驚く可き多數のマルキシズム文獻が續出した。そしてこの傾向が尋常一樣の讀書界の流行に止まるものでないことはいふまでもない事である。今度の「マルクス、エンゲルス全集」刊行の計畫の如きも、又、この大勢の一大發露に外ならないのみならず、それが、我邦マルキシズム研究の上に貢獻する所大なる可きは疑を容れない。又、此の計畫が種々の意味に於て從來中絶挫折した**何れの企よりも遙に堅固な基礎の上**に打ち建てられてゐることも、世人の等しく承認する所であらう。

「汝の道を步め。而して人々をその語るに任せよ。」といふ鐵の如き確信を懷きつゝもマルクスは又半面に於て「資本論」が急速に獨逸勞働者階級の廣い範圍に亙つて見出した理解こそは自分の勞務に對する何よりの報酬である」と書き、そして「學問は利己的な娛樂であつてはならない」と斷言した。そして又彼こそは是等の言葉を行動を以て立證した一人であることを思ふ時、この意味からしても吾々は、今日世界史上に重大なる役割を演じ、そして將來も亦演じるに相違ない所の、彼等兩人の著述が「全集」の形にて蒐集せられ、僅僅一年餘の日子を以て、而も能ふ限り廉價に頒布せられることは、必ずや彼等二人の所志に副ふものであることを信じて疑はない次第である。

學者としてのマルクスとエンゲルス

◆社會進化の法則と剩餘價値の發見

エンゲルス

ダーウヰンが有機的自然の發展の法則を發見した樣に、マルクスは人間の歴史の發展法則を見出した。それから、今日の資本家的生産方法、及び、それから生じた市民的社會の、特殊の運動法則をも發見した。總べて從來、市民的經濟學者並に社會主義的批評家達のなした研究が、五里霧中に彷徨してゐた時に當つて、剩餘價値を發見したことに依つて、こゝに突然光明が齎された。一生こんな發見を二つもすれば澤山といふべきであらう。

◆彼は益々時代を支配しつゝある

カウツキー

マルクスは今日も尚强く時代に生きて居る。而かも、かのマルクス主義のあらゆる危機に拘らず、資本家の學壇からあらゆる反駁と排斥とに拘らず、彼は益々時代の思想を支配しつゝある。

◆全世界に向つて立つてゐる人

リープクネヒト

學者としてのマルクス、『ライン新聞』の主筆、『獨佛年誌』の創設者の一人、共産黨宣言の起草者の一人、『新ライン新聞』の主筆、『資本論』の著者——かゝるマルクスは公の人である。彼は其處では全世界に向つて立つてゐる。批評の的となり、批評に挑戰し、一本の纖と雖も探索の眼から逃れることはない。

◆人々の思想と行動との決定に貢獻した

リアザノフ

マルクスだけについて云へば、その活動と學識とによつて、彼ほど多くの國々における幾代も幾代もの人々の、思想と行動との決定に貢獻した者は、十九世紀の歴史中において到底見出し得ないのである。

◆全世界の思想の根源

ベーア

マルクスは、教育のある者にも、又教育のない者にも、彼を讀んだ者にも又讀まぬ者にも、今や全世界を通じての思潮となつてゐる多くの社會科學に關する觀念と表現とを遺した。

◆天才的な完成者マルクス

レーニン

ドイツの古典哲學、英國の古典經濟學、及びフランスの革命的學說一般と關連せるフランスの社會主義の繼承者であり、天才的な完成者であつた。近代唯物論と近代の科學的社會主義との渾一體を、世界のあらゆる文明國家の勞働運動の理論及び綱領として提示する所の彼の見解の驚くべき徹底さと完全さとは、マルクスの敵手さへも認める所である。

◆マルクスとエンゲルスとは一の精神

リープクネヒト

マルクスとエンゲルスは一の精神である。——思想と行動の規範を、學說と戰術の根本原理をプロレタリアに與へた功績——此の功績は非常に大であつて、假令二人に分けられるとしても何双方に夥しい量が歸する。

◆マルクスの共勞共作者エンゲルス

カウツキー

マルクスを措いては、エンゲルスほど國際社會民主々義に重大な影響を有つた人はあるまい。若し彼にして彼の自傳を書くならば、それは國際社會主義勞働運動の創立以來の歴史となるであらう。

◆産業を批判の對象とした

メーリング

マルクスが最初のフランス革命を批判的批判の對象に選んだと同じやうに、エンゲルスはイギリス産業を之に選んだものである。

内容見本

かと疑ふ。訓令は官吏の態度に對して無際限の信頼を所期するか、訓令そのものは官吏ならざるもの全體の態度に對する無際限の不信より出發して居る。目に報ゆるに目を以てすることが何か故に吾人に許されないのか？　この態度が何故に吾人にとりて疑はしきものであつてはならないのか？　人の性格についても同じことだ。今後は自由なる思想家は、隱れたる批評家の性格よりもお上の批評家の性格により多くの尊敬を拂はねばならぬこととなる。

本來惡しきものは之を何人が有すと雖も惡しきことに變りはない。それを私の批評家が有するとも將又政府によりて任命せられたる批評家が之を有すとも異なる處はない。但し政府の批評家が之を有する場合には、そのあしきことが政府の許可の下に權限を以て行はれ、且人民の中なる善きものを實現するが爲めにする政府の必要なる施設と誤認せらるゝの差異がある。

『傾向』のかくの如き檢閲と、檢閲のかくの如き傾向とは即ち自由主義的？　なる新訓令の賜物である。吾人が倘進んで訓令中の諸規定を審査するに當り、幾分不信の念を以てするとも何人も吾人の態度を惡しく解釋することは出來ないであらう。

『一個人ニ關スル侮辱的ノ文字又ハ名譽毀損的ノ批評ハ印刷ニ適セズ』『印刷ニ適セズ!!』こんな微温的なる規定の代りに一層のこと、すべての侮辱的、名譽毀損的批評に對し具體的の規定が發せらるればよいのに！

訓令には『一階級又ハ（意味深長の『又ハ』である）全階級ノ志向ニ關シテ疑義ヲ挾ムモノ及ビ黨名及ビ類似ナ個人的ナルモノヲ使用セルモノモ亦印刷ニ適セズ』と規定せられてある。然らば、種々の範疇によりて標語を附することも全階級に對しての攻擊も黨名の使用も皆不可ないといふのか？　――そしてすべての人間に、他人と區別するためにアダムとでもいふ唯一つの名を與へよといふやうな無理な注文をするのか？　――黨名といふものは政治的新聞には必要不可缺の範疇である。何となれば

『すべての病氣は先づ第一に、
ドクトル・ザサフラスの御意見通り、
養生相叶はむと欲すれば、

肺結核、胃腸病の劃時代的新藥

「パンゲスチン」に就いて

肺病は早く手當をすれば必ず癒る。いや、第二期第三期に進んだ者でも決して絶望するには及びません。容易く之を撃退して、旺盛なる社會生活を營む工夫が肝要であります。

肺病の療法には、第一に自然療法があります。次ぎは藥物療法、之には未だ確然たる効果をもつたものが見當りません。最後に榮養療法があります。充分に榮養を攝り、うまく食ひ、體力を盛にして病氣に打ち勝つこと、これが肺病根治の關鍵です。

「パンゲスチン」は、實に此の目的に合致し、劃時代的新藥として、斯界に嶄然として輝いてゐます。人體に最高榮養價値を有する蛋白質消化劑として完全無缺なる「パパイシン」を主劑とし、之に脂肪澱粉等を消化する藥物、現在の醫學上治肺の最良特効藥たる數種の藥物を配合し、學理と實驗とを綜合した理想的のものであります。

主劑「パパイシン」は、熱帶の珍果「パパイヤ」の未熟果實の乳汁より採取した消化酵素で、絶大なる蛋白消化力を有し、牛肉の如き三十分にして形を止めざるまでに消化し終るのであります。之を主劑とせる「パンゲスチン」の消化力大なることは申すまでもありません。

かくの如く「パンゲスチン」は治肺の藥物療法及榮養療法を兼ねたもので、更に結核、肋膜炎、腹膜炎等の消耗性發熱に因する消化不良、特に神經性消化不良、貧血、腸胃加答兒、乳兒消化不良等に用ひて卓効があります。大阪醫科大學教授長崎博士及岡川博士は主劑「パパイシン」の効驗の正確迅速なるを推奬せられ、其他の諸大家も、實驗に、臨床に試驗の結果、顯著なる効驗を證明推奬されました。其の他、本藥を使用してその効顯に驚嘆され、謝狀を賜はつた方が無數であります。安心して各位にお勸め致す次第であります。

定價　壹ケ月分　拾貳圓也
　　　半ケ月分　七圓也

製藥所　マニラ　パパイン、デベロップメントコンパニー

輸入調製元　東京　パパイシン社
東京市芝區愛宕下町

一手販賣店　改造社
振替東京八四〇二

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, ATAGOSHITA-MACHI SHIBA-KU, TOKIO.

株式會社秀英舍印刷